

この素晴らしい世界に呪術を！

不落八十八

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何番煎じか分からないオリ主追加物このすば。

めぐみんの保護者兼幼馴染として、ダクソ3準拠の特典を持ったTS貧乳オリ主を放り込んだお話。

ダークソウル3を普通にプレイしてただけの作者なのでフレーバーくらいの気持ちで読んでね。

一万文字書いたら投稿する、みたいな縛りでやっています。

原作には無かったオリジナルの設定を捻じ込んでたりするのでご了承ください。

便利なサイトを知ってしまったのでおんおんのイメージ作ってみました。

この作品の裏話としてR18版も用意してあります。

この素晴らしい呪術師に裏話を！

<https://syosetu.org/novel/2870>

04／

作者Twitter @flak88

目次

24話	23話	22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
358	341	325	309	293	277	262	247	232	217	200	184	168	153	136	121	106	91	76	62	47	33	18	1

4 4 4 4 4 3 3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2
4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

668 653 638 623 608 592 577 562 546 530 515 499 483 467 451 434 419 404 388 373

1話

嗚呼、何時に成ったら俺はこの悪夢から逃れられるのだろうか。
山風ハジメ。

そう両親に名付けられた俺は二十五歳の社会人で、デスマーチ五日目の完徹野郎である。

クライアントからの変更オブ変更に、新人のやらかしによるメガンテ。

サーバーエラーによるワールドリセットが発動し、復旧作業のために休日を返上して繰り出された挙句の果てが、これだ。

干からびたミイラのような同僚たちを押し退けて、一つ休憩を取るためにドリンクサーバーと言う名ばかりの電気ポットが並ぶ壁側にふらふらと立ち寄る。

紙コップに一つ二つ三つ四つ五つとインスタントコーヒーの粉末を流し入れ、水道水を沸騰させたお湯を淹れる。

口の中にざらざらとした触感を感じる程に糞苦くて安いが故に不味い珈琲を飲み干していく。

泥の奥底に溜まった固形物のような喉越しを感じながら、供給されていくカフェインの塊で心が淀みつつも回復していくのを感じる。

だが、空きつ腹に泥のような珈琲はきつかったらしい、胃がムカムカとして痛みを感じる。

「……そういや、食事したの何時だっけ。というか、今、何時だっけか……」

そう窓を見やろうとして振り返り、落ちていたコピー用紙に足を取られ踏ん張ろうとしたものの膝が崩れ落ち、後頭部に鋭い痛みと共に意識が――。

「はい、それが貴方の最期です……」

と、雲の上の狭間のような場所で何とも呆気ない終わりを思い返していた俺は天使のような女性の前に居た。

前に四徹した時に気絶した事があったが、意識を取り戻した時はその場で復活した訳だが、今回は違ったようだ。

天使のような、と形容したのは理由がある。

オレンジ色の衣服や赤いパンプスはまあ、良い。

だが、背中から生えた一对の純白な翼が彼女が人外である事を示している。

そして、そんな彼女に俺は「貴方は死にました」と断言されてしまったのだった。

非常に同情の籠った視線で見つめられながら、だが。

「……死んだのか、アレで」

「……はい。過労によって寝てしまったのだらうと判断され、気付かれる事無くそのまま脳死されました。因みにあのコピー用紙は力尽きて寝落ちした同僚の方の机から落ちたものですね」

「そうか、……そうかあ。何ともまあ、微妙な最期を迎えたものだな……」

「ええ、現代社会における苦難を拭き取った雑巾の煮汁のような環境だったのも悪かったみたいですね」

「雑巾の煮汁で。……まあ、遅かれ早かれ過労死してただらうし、それが早まっただけか」

「ですが、まだ生きる事を諦めてはいけませんよ」

「マジか、このタイミングで入れる保険があるのか？ ……死んでるのに？」

「保険のお誘いではありませんが……、まあ、似たようなものですね。異世界転生はお好きですか？」

「おk、把握した。転生先はラブコメ系の純愛エロゲーで頼む」

「残念ながら、王道的な勇者が魔王を討伐する系のRPG系ですね」

マジかよ、俺にドクエの勇者になれっか。

椅子の背に凭れるようにしてぐったりと肩を落とした俺に、天使さんは苦笑いで羊皮紙の束を手渡してきた。

手元に視線を落として見やれば、それらは伝説の武器っぽい品々であり、その説明が書かれたリストだった。

へえ、転生のお供に特典もくれるのか、有難い話だ。

リストを吟味していく俺だったがどうも心を擦られない。

余りにも人間として擦れた生活を送っていた弊害か、こういう中二病チックな代物にアレルギー反応が出ているような心地であった。

脂っこいギトギトな角煮を見ているかのような胃もたれ感覚と言うべきか、欲しいとは思えないものばかり。

かと言つて便利そうなスキルみたいなのを貰うべきなのだろうか。

案外使い道がなくて意味無かったり、裏目に出ても困るし汎用的な物を選ぶのがベターかねえ。

そんな事を考えながら横から手渡されていく羊皮紙を流し読みしては膝に置いて事務作業が如く処理していく。

取り立てて面白そうな能力無いなあ。

どれもこれもが異世界無双するためのパワーキットみたいな感じだ。

何とも遊びの無い、つまらない品々だ。

もう少し俺が若ければこういうのを嬉々として選んで振り回していたんだろうなあとしみじみ思ってしまう。

「……待てよ、まさかと思うがこの身体のまま転生するのか？」

「はい、天界規定によりその様に定められていますね。彼方の世界で困らないように身体の免疫や言語などを習得する基本サービスが付いているぐらいで、後はその特典だけですな」

「ほおん、つて事は何だ、この過労死した身体で武器持つて戦えつて事か、嫌、無理ゲーではこれ。そりや魔王討伐も進まねえ訳だよ、何せ身体鍛える所から始めなきゃならねえんだ、下手すりやおっさんの年齢で戦い始める可能性だつてあるんだぞ……。俺今二十五だぞ、全盛期つて言つてもこちとら会社で座りっぱなしのプログラマーだったんだぞ……。? いやあ、無理だねこりゃ。締め切り三日前に相手側から渡された仕様変更の宜しくメールくらい無理だわ。という事で天使さんよ、ちよいと相談があるんだが」

未だかつて魔王が討伐されていない理由が絶対にそれだろ。

比較的若い年齢層から勇者候補を算出してるんだらうが、十六ぐらいならまだしも二十五の俺は無理がある。

呼ばれる幅がどれくらいか分からないが、確実に天使陣営の方針は

戦力の逐次投入を愚直にし続けるぐらいに無駄があるものだ。

散々言われる逐次投入とてやり方やタイミングを弄れば人海戦術による圧殺戦法になるのだからもうちよつと考えて欲しいものだ。

きよとんと可愛らしく首を傾げる天使さんに特典の詳細を根掘り葉掘り、この状況で最適を選ぶための思考に燃料をくべる。

あれもこれも性能がチートで使いやすさは個人による差異があるくらいで、武器の形をしているものからしていないもの、所謂チートスキルの類も一応あるらしい。

過去の特典を選んだ者の何人かはゲームや漫画の武器やスキルを選んだ者も居るらしく、この羊皮紙の束には無いが倉庫から出すようなイメージで他のものも選べるらしい。

こうして羊皮紙と言う形で手元にあるとそこから選びがちであり、天使陣営的にも運営がスムーズで楽と言う裏話を聞けてしまった訳だが、そう言う事なら此方も手を尽くさざるを得ない。

卑怯とは言うまいな、と内心で口角を上げて嗤う。

身体が資本となる異世界に行くのは間違いない、そうなると今の過労死ボデイで行っても序盤で死にかけるのは必然。

「で、だ。天界規定にはそのままの身体で送るのが通例なのだろうが、正直に言つて魔王討伐の失敗の原因の半分はこれが理由だと考えられるぞ。俺を見てみる、過労死した人間だぞ？ その身体のまま彼方に行つて魔王を討伐できるまでの身体を作るのにどれだけ時間が掛かると思う。今年で二十五で、若年とは言え万年座りっぱなしのプログラマーだ。五年も掛けたら三十路で全盛期と呼べる年齢帯を越え始めるんだ。そう考えれば記憶を持ったままその異世界の住人として転生し直し、最初から魔王討伐の意思を持って身体造りを行ない、最良の形で魔王を討伐できる環境を作っておくべきだと思う。ああ、分かる、分かるよ。規定があるんだよな。天界の、絶対に守らなきゃいけないルールつてのがき。だから、俺を試金石にしてくれよ。テストケースつて奴だ。流星にこの転生のルールを考えた奴だつて最初は手探りだった筈だ。故に、今後の魔王討伐の可能性を上げるためにも転生の仕方を変えるパターンを、異なるアプローチをするべきだ。

それに、このテストが上手く行けば天使さんだつて上からの見え方が良くなる筈だぜ？ 現状打破のために考えに考え、俺と言う生贄になつてくれる賛同者も居て、上が頭を抱えている魔王を討伐するための画期的なアイデアを成功させる。それだけでも今後期待できる人材として見られる筈だ。ああ、この部下に任せておけば良い方向になるかもしれない。たつたそれだけの小さな意識でもアンタの出世の道は少し明るくなる。考えても見ろよ、規定通りに機械めいたルーチンワークだけをして何にも成果を出さない奴と、現状を顧みて協力者を作つて現状打破の気概を魅せる奴、どっちが良い部下に見える。アンタが上司だつたらどつちを採用するかつて話だ。な？ アンタも思う通り後者を選ぶだろう。こんなことを言い出す転生者、これまでに居たか？ 居ないよなあ。前例が作られていないからこそ規定のままなんだからさ。これはさ、お互いのためだ。俺はこの身体で異世界に行きたくない、アンタは上司から良い目で見られるチャンスだ。今の現状を良くしたいと思わないか？ 思うだろう？ それに成功すればアンタの名誉は固いもんだ。多分、俺はこの身体のままだと何もしないぞ。普通に魔王討伐から目を背けて日常生活を送るだろうよ。何せ、無理があるからな。でも、でもだ。此処でアンタが領いてくれれば俺はしつかりと仕事をするだろう。仕事に従事して過労死した男だぞ？ 説得力があるとは思わないか天使さん。なあ、今後の出世に関わる提案だ。そちらにとつても悪い話では無いだろう？」

肩を組むようにして耳元に畳み掛ける様に囁いていく。
抑揚を変え、気持ちを含め、さながら天使さんの味方であるように振舞いながら此方の提案を通すために言い包めをしていく。

学生時代にTRPGで培ったトーク力を此処で発揮してやる。天使さんは最初は距離の近さに戸惑いと羞恥を抱いていたようだが、段々と小さく頷く事が増え、最終的には「確かに……」と言葉を漏らした。

そして、此方を向いて確かな頷きを返した。

よっし、ちよろいなこの天使。多分、上司が糞で今まで大変だったタイプだ。

所々で領きに力が入ってたからな、随分と振り回されたいらしい。さて、第一案件は通した、では次だ。

随分と乗り気になった天使さんに俺は転生の特典を伝えた。

マジかお前みたいな表情で目を見開いたものの、先程の話も相まつて納得してくれたようだった。

「……随分と懐かしい事を夢見たものだな」

そう朝陽が差し込む窓からの明かりで目を覚ました私は上半身を起こして伸びをした。

まだ私が山風ハジメだった頃の終わりの話、それを思い返す夢を見たのは何かの前兆だろうか。

小鳥たちの囁りを耳にしながら窓を見やれば、鬱蒼と生い茂る森林が立ち並び、また父親のせいでひもじい思いをしているのか期待を瞳にためためぐみんの貼り付く姿があった。

……ほんとこの可哀想な幼馴染をどうかしてやりたいがどうしたのか。

父親のひよいざぶろーさんは希代の発明家にして糞産廃品の排出者でもあり、根がマツドなのか研究や開発に資金をぶち込んでお釈迦にする毎日を過ごしている。

そんな変わり者と結婚したゆいゆいさんも手慣れた様子であり、極貧生活に親しみを感じているが如く諦め模様を見せている。

そのため、幼い頃から交友のある私の所にめぐみんは通い詰めている。

もつとも、私に会いたいのが故ではなく、森で狩猟して作った食料品が目当てなのだが。

せつせと冬を越すために色々としている私のところにこうして泣きついて来るのはもはや日常だった。

しかも、年齢の若い彼女の妹であるこめつこも理由にしてくるので無下にはできない。

そんな私の心情を知ってか、絶大な信頼と親愛と共にめぐみんはこうして私を頼って来るのだった。

窓に近付いて期待に瞳を輝かせるめぐみんに笑みを浮かべてから、

シャーッとカーテンを閉めてやる。

するとお手製のガラス窓を叩く貧困の音が聞こえてくる。

「お願いです！ お願いしますから助けてくださいおんおん！ お腹が、お腹が大変なんですよお!! おんおん！ ねえ、起きてるんでしょ！ おんおん!!」

そう、めぐみんが泣き喚いている訳では無い。

おんおん。

それが今生の私の名前であり、紅魔族の墓守の一族として生を受けた少女の名だ。

確かにこの異世界の住人として転生する事は成功したが、性別を指定するのを忘れていた。

そのため、記憶を保持したままランダムで転生されてしまったようで、今や十三歳の黒髪貧乳根暗少女である。

まあ、現世と違って栄養がしっかりと摂れる贅沢な暮らしをしている訳では無いので発育が悪いのは仕方が無いのだ。

根暗なのは今にも死にそうな顔色をしているのが理由であり、その原因は私が得た転生特典にあった。

「……やっぱりダークリングは止めとくべきだったかなあ」

生前に繰り返し遊んだゲーム、ダークソウル3の主人公たちが持ち得る不死の証。

私の右目に浮かぶ輪っかの名称。

呪われた不死の証にして、死んでも蘇り、何れ亡者と朽ちる定めを帯びる。

これにより私は今生において不死を得た。

もつとも未だに死んでいないが、死んでもあの篝火の前に蘇るんだろうなあという感覚だけはあるので性能は確かだろう。

だが、この証にも副作用があったようでソウルの輝きを感じ取れるようになる体質を得てしまった。

それにより、寒暖差のように自身と比べて輝きの強さを測れるようになってしまい、どいつもこいつも私よりも遥かに強いソウルを持っている事が分かってしまった。

そのせいで不貞腐れるように私の自我は暗くなりつつあり、冒険者カードに記載されたスキルもまた呪術一辺倒になっているのも確かだ。

この身体の生まれは呪術師。呪術とは火であり、半身でもある。その温かさを知るが故に冷たさも知るのだ。

故に、人の素晴らしさを思い知る事ができる。

この人間性を守らなければと、ソウルの輝きの強い者を守らねばと思ってしまう。

もつとも、私にできる事と言えば『混沌の火の玉』を投げて焼き尽くすくらいしかできないのだが。

魔法、そして呪術と言う未知のものを研究したくて身体作りの一切を忘れていた弊害であった。

「あの、おんおん！ 足先が冷えて来たので本当に入れて欲しいのですが！ もしかして寝てたりしませんよね!? おんおん！ おんおーん！」

「はあ、取り敢えずめぐみんを入れて上げるか。まったく……忙しい」

そう愚痴るものの頼られるのは満更でも無いので笑みが零れてしまふ。

なけなしの父性でも残っているのだろうか、そう思いつつ小屋の扉を開けてやり、寒さに震えるめぐみんを暖炉の前に押しやるのだった。

暖炉の前で奥歯をがたがたさせて震えているめぐみんを尻目にキッチンスペースに立った私は鍋を掻き混ぜていた。

やはりと言うべきか、また資金難に陥ったらしく、なけなしの食事をこめつこに与えた苦労性の姉は私が起きるまで窓に貼り付いていたらしい。

無理矢理押し入って入らないあたりめぐみんの心の清さを感じるが、こうして食事を催促している部分は何と言うかもう、呆れを通り越して可哀想の域に達している。

昨晚作ったキノコと暴れ猪のスープをこうして温めている訳だが、

此方を見る顔は喜色一色であり、食事が与えられると言う確信で満々のご様子。

此処で意地悪をして一人分だけよそつて食べ始めたらどんな顔をするだろうと嗜虐心が込み上げてくる。

だが、ガチ泣き寸前の涙腺崩壊顔を見て愉悦するのも良いがその後に罪悪感が込み上げるのが目に見えているので止めて置く事にする。

「ほら、めぐみん。お肉多めに入れておいたぞ」

「ありがとうございますおんおん！ 貴女のおかげで今日も生き延びれます！」

「……はあ。そろそろ冬が近いのに大丈夫なのか」

「ええ、その、……正直今年も危険なので何卒援助の方をお願いしたいのですが……」

「……………はあ」

「あの、おんおん、その、本当に心苦しいのですが……、お、おんおん？　そこで黙られると凄く困る、困るんですが……」

「まあ、いいさ。多分、今年もそうだろうと思ってたしな」

本当にこの子はもう……。

私の庇護が無ければ木の根を齧る生活をしていたに違いないくらいに貧困の体現者と化すめぐみんの事だ。

まあ今年も援助と言う名の食料提供をしてやらねばならないとは思っていたので溜息も出ない。

と言うか、もはや虐待に近いのでは、と思いつつも家族仲は良好であるめぐみん家の在り方に私は驚く事しかできない。

何がどうなつてあの環境でめぐみんのような妹思いの健気なお姉ちゃんが出来るのだけか。

こんな良い子に何て真似するのだと直談判してやろうかと重い腰を上げた回数は幾星霜。

その度にめぐみんに宥められるので座り直すのが通例だった。

もぐもぐと心底美味しそうに私の作ったスープを食べるめぐみんの可愛らしい姿に、自分に娘が居たらこんな感じなのかなあと思わざるを得ない。

幸せそうな横顔を見ながらつい私は喉奥に出かかっていた言葉を口にしてしまっていた。

「もういつそうちの子になるかめぐみん」

「何がどうなったらそんな発想が出てくるんですか!？」

「かれこれ数年程めぐみんの世話をしている気がしてな。何と言うかもう、哀れを通り越して可哀想と言うか、うちで引き取ってやった方が幸せになれるんじゃないかなと本気で思い始めている自分が居るんだ」

「そ、それは……。確かにおんおんは料理が上手ですし、狩猟も上手で戦闘力もあつて、お風呂やベッドも融通してくれたり、汚れた衣服も一緒に洗濯してほつれも直してくれたりしますが……。……。……。あれ、うちのお母さんよりも母親っぽい事してませんか？」

「今更かめぐみん。最近、ふとした時にめぐみんの安否を脳裏に浮かべてしまっているくらいだ。さつさと私離れをしてくれ、このままだと私はめぐみんのお母さんになってしまう……。」

「その、おんおん、この流れで言うのも何なのですが……。」

暖炉の前に置いた椅子でうめうめと感想を零しながらスープを完食しためぐみんが神妙な態度で此方に向けた。

しれっと皿を突き出してお代わりを要求しているあたり実にめぐみんである。まあ、そこにスープのお代わりをよそってやる私も私なのだが。

猪肉の最後の一つも入れてやる。ほんと私はめぐみんに弱いな。

メンタルが男性であるという事もあつて可愛らしいめぐみんに頼られるとついつい愛でてしまいたくなる。

かと言つて性欲で動いている訳では無いのが不思議な所だ。

「私は冬が明けた頃に冒険者としてこの里を出ようと思つているんです。おんおんは知つていると思うのですが、私は爆裂魔法に惚れ込んで極めようと考えています。ですので、冒険者の街であるアクセルに赴き、冒険者として名を馳せようと考えているんです。ですので、その、おんおんも一緒に来ませんか？ さ、寂しいって訳じゃ無いんです。ですがその、付いて来てくれると嬉しいなあ……。爆裂魔法

しか使えないので一人だと撃った後が怖いと言うか……、その点呪術を極めし紅魔族たるおんおんが居てくれると安心できるというか……。どうでしょうか……。？」

「……………ふむ。まあ、今のめぐみんをそのまま送り出すと毎日心配してしまいかねないからな。同行するのは吝かでは無い」

「本当ですか!? いやあ、言ってみるものですね。おんおんが居てくれたら道中も非常に楽もとい安心できます」

「おいこら」

「うう……………だつてもうおんおんレベル二桁じゃないですか。私だつてまだレベル5なのに…………」

そう、紅魔族の学校は魔法を取得する事が卒業の証となるため、日頃森に入り弓で狩猟を繰り返していた私は入学二日目でこれを達成してしまつたぐらいにレベルが高い。

具体的には当時はレベル四、そして今はレベル十一である。

卒業後、紅魔族の里には時折魔王軍が攻め入って来るので、こつそりと暇人二一ト集団もとい勝手に自警団をやっている奴らの後ろから『混沌の火の玉』を放物線を描いて投げ込んでいたりしたら結構経験値を稼いでしまつたようで何時の間にか二桁になっていた。

まあ、早期卒業による弊害はあつた。

何せ魔法を習得したら卒業と言うルールは絶対視されるらしく、スキルポイントが既に溜まつていた事もあつて取得してしまつたらそのまま流れて卒業に至つてしまつたせいで紅魔族の常識を私はほとんど知らない。

最短卒業者としてちやほやされたのも束の間、近隣の同年代がわいわいと学校に向かう様子を見送る生活になつてしまつた事もあつて非常に寂しい思いをしていたのは確かだ。

……………まあ、朝と夜を食べにくるめぐみんから詳細は聞いていたので必要無いなど思つたのは確かであるが。

何で戦闘に前口上やら格好良い恰好や決め台詞、必要の無い長々とした詠唱が魔法の行使に必要なんだ。

ぼくがわたしがかんがえたさいきょうでかつこいいいえいしよう+

かつこういいぽーずを付け足さねばならないのか、これが分からないのか、これが分からないのか……。

成績優秀者にはスキルアップポジションが配られるらしいが、それを踏まえても何故中二病を学んで実行しなくてはならんのか……。

そんな羞恥プレイをさせられるなら誰が行くかと開き直ったのは良い思い出である。

ちなみに私が最初に習得した上級魔法こそ『混沌の火の玉』である。

教師は見た事の無い魔法を見て大絶賛していたが、そう言えばフロム言語において魔法とは魔術、呪術、奇跡、を内包した総称だったなあと思っていたのはこのタイミングだったな。

「あの、おんおん?」

「つと、すまない。つい思考に没してしまっていた。それで、具体的には何時頃行く予定なんだ?」

「既に私も爆裂魔法を取得して卒業しているので正直今直ぐにでも良いのですが、その、こめつこがひもじい思いをしないか心配なので冬を越してからが良いなあと。……つて何で無言で撫でるんですか、んんっ、まあおんおんに撫でられるのは心地よいので良いですけども……」

「いやなに、ちゃんとお姉さんしてるなあって感心したのさ。ならまあ、私が貯蔵している保存食を一括でくれてやろうじゃないか。なあに、六年くらい生活できるくらいの量だ。三人で分ければ二年は保てるだろうよ」

「……………おんおん!!」

「おっと、感極まって抱き着くのは良いけど一応食事中なんだぞめぐみん」

「貴女は私の救世主です! メシアです! 貴女を頼って良かったです!」

「はっはっは、そこまで言われると私でも恥ずかしい。いや、マジで止めろ。この里の連中が聞いたならそれを呼び名にしかねないからな」

私の乏しい胸元に抱き着いてきためぐみんを抱擁してやる。

やれやれ、調子に乗って周辺の獣を狩りすぎて倉庫にパンパンに

なっている在庫を処理できる良い機会でもある。

冒険者としてアクセルに向かうならば彼方に拠点を移す事になるだろうし、無駄にある保存食を貯め込んでおく必要も無いだろう。

それに、こうしておけばめぐみんも彼方に行つてこめつこの心配をしなくて良いだろうと言う気遣いでもある。

私の胸にすりすり甘い甘えてくるめぐみんも可愛らしいなあと思いつつ頭を撫でて愛でてやると嬉しそうに顔を緩ませていた。

「そう言えば、アクセルには私とめぐみんだけで行くのか？ 友人のゆんゆんとかあるえとかは誘わないのかい？」

「ゆんゆんは先ず無いですね。あの子は次期族長としてやる事があるでしょうし、何より面倒が過ぎます。ゆんゆんに頼るくらいならちよむすけを連れて行きますよ。次にあるえですが、小説家の道を歩むようなので付いて来ないでしょう」

「ふむ、そうなのか」

「あと、ついでに言うとな二人とも私より胸がでかいので連れ立つのが嫌です。隣に立ちたくありませんっ！ 何でこんなにも差がついてしまったんですか！ 魔力が良い感じに血行を促進させてくれるんじゃないんですか！ ううう……、その点おんおんは私と同類なので凄く安心します。……あの、ちよつと育ててませんかこれ」

「気のせいじゃないか。質素儉約な生活をしているからそこまで栄養は行かないと思うぞ」

地味に鋭いな。確かに少し育つた事でAAからAぐらいにはなっている。

レベルが上がって魔力が上がったのも理由の一つだろうか、めぐみん理論だとそう言う事だろうし。

私の普段の恰好は学生服では無くカルラの恰好を模した呪術師っぽい衣服をしている。

無論、普通の衣服かつお手製の手縫いの品である。

ちなみに紅魔族流の挨拶をすれば、私の場合はこうなる。

——我が名はおんおん！ アークソーサラーにして上級呪術を操りし者、暗き魂を持つ混沌なる呪術の申し子！

うむ、自分で言つててこれは無いな。

紅魔族の性なのか既に自己紹介をしていると言うのに事ある毎にこの名乗りをしてくるので仕方なく返しの言葉として考えてはいるがあんまり使いたくない。

ぶつちやけ、この名乗りを使ったの数回ぐらいだ。

基本的に里から少し離れた森の中の小屋に住んでいるので他の紅魔族に出くわさないからだ。

墓守の一族である私がこうして離れて暮らしているのは理由がある。

墓守の仕事と言うのは墓の管理であり、常々墓の近くの小屋で暮らす事になる。

役目を負う事になった家長は墓守として一人で墓を管理する事を担う。

そのため、幼少期から一人で暮らすための術を得るために、十歳からこうして森の近くの小屋に親元を離れて住まわされてる訳だ。

……と言うのは表向きの建前で、墓守として暗闇で一人孤高に歩く姿は格好良いだろうと言う先祖のノリを継承して修行と称してやっているに過ぎない。

そもそも寿命や病気以外で早々死なない紅魔族の墓守としての仕事は少ない。

近々弟か妹が産まれるらしいのでこの小屋もその子が暮らす事になるだろう。

そう考えるとこうしてアクセルに赴くのは良いきつかけだったように思える。ぶつちやけ墓守とかくつそつまんなさそうな家業を継ぎたくないのもある。

と言うかそれをするとな来の目的である魔王討伐を達成できないので万々歳である。

めぐみんがこうして言い出さなかったとしても近々里は出ていた事だろうし、ほんと良い機会だったのだこの提案は。

「まあ、なんだ。里を出る準備は手早くする事だ。アクセルまでの旅路は長旅になる事だろうし、色々と揃えておくんだぞ。……食料など

の消耗品の類は私が受け持つからな。安心して良いぞ。武器や防具、持ち歩く品々を用意するんだぞ。分かったな？」

「……おんおんって時折私の事を子供扱いしますよね。ううむ、私のお母さんはおんおんだった……？」

「正気に戻れめぐみん。お前の母親はゆいゆいさんだ。大体処女の私と同じ年のめぐみんを産める訳が無いだろう」

「分かっていますよそんな事！ 私と同じで男ツ気全く無いですからねおんおんは！」

「私の場合、こんな所に住んでいるからな。余計に出会いが無いんだ。それに比べてめぐみんは里の中に住んでいると言うのに……」

「余計なお世話です！ 大体、紅魔族で優良物件な男性はそうそう居ないんですから！」

「言つてやるなよ……。可哀想だろ、事実だが」

確かに定職に就かずにはふらふらと歩いてごっこ遊びや居もしない敵に対して出て来いとか宣つて叫んでいる暇人共が多い。

家業を継ぐのが嫌つてのは同感できるが、それを理由にニートとなるのは如何なものか。

まあ、前世で仕事に殺されたような私が言うのも何だがな、はっはっは。

「……笑えねえ」

「ど、どうしましたおんおん。そんな濁り切った死んだ目をして……」

「いや、生きるって大変だなんて思ったただけだ。だからなめぐみん。冒険者と言う不定所得の職業に就く以上、生活は確りとするべきだ。先ずは何処か賃貸の部屋を得よう。幸い先立つ物は多少ある。魔王軍の残した装備をちよろまかして売ったりしていたからな。一か月くらいならそれなりの生活ができるだろうよ」

「……ほんと、心からおんおんを誘つて良かったと思いました。持つべきは信頼できる幼馴染ですね……」

「ある程度は働いて貰わないと困るからなめぐみん。因みにヒモになつたら追い出すからな。爆裂魔法一辺倒である事は別に否定はしないが、それなりの努力はしてくれよ。爆裂魔法の欠点である膨大な

魔力消費は消費減少系のスキルを併用すればある程度抑える事ができるし、魔力集中系のスキルで爆裂魔法の威力を下げるようにコントロールして消費を減らす事もできるだろう。魔力が無くなると言うのなら魔力を補充する術を何かしら用意しておくべきだな。ポーションも実用的だが、ある程度の大きさのマナタイトに自分で魔力を補充して予備にする事も考えるべきだ。めぐみんが火力主義なのは知っているが、本当に爆裂魔法を極めると言うのならあらゆる場面で爆裂魔法を使えるようになるべきだ。……聞いているかめぐみん？」

「あ、はい……」

何故目線を逸らしているんだめぐみん、まさかと思うが考えてなかった訳ではあるまい。

爆裂魔法はネタ魔法、それが紅魔族の里での認識である。

だが、それをあえて爆裂魔法一筋で行くと決意しためぐみんの熱意を知っている。

故に、私はそれを笑わない。

笑わないが一発撃ってはい終わりですませるような体たらくを許す訳が無い。

最低でも疲労困憊の状態でも歩いて逃げるくらいはして貰わねば目を離せない。

まあ、あるいはそんな状態のめぐみんを引き摺って行ってくれるパーティメンバーが居てくれれば安泰か。

兎に角生き延びるためのあれこれを準備して欲しいのだ。

私ができるのは致命の一撃をあえて受けて肉盾になるくらいだ。

不死の身体を最大限使う方法なんてそれぐらいだろう。

「そう言えば、旅に出る事はもう親御さんには伝えたのか？」

「ええ、勿論。……まあ、旅立つための費用が足りないのでアルバイトでもして過ごす予定でしたから予定としか伝えてませんが」

「アルバイトねえ……。費用？　もしかしてレポート便を使うつもりだったのか」

「はい、そうです。アルカンレティアまでの片道切符が三十万エリスとの事でしたので何とか工面しようと思っていましたがおんおんが

居るなら大丈夫そうですね」

「金を出さないぞ?」

「ええ、分かっています——今何と?」

「いや、だからアクセルまで徒歩での旅の予定だからテレポート代は出さないぞ」

「此処からアクセルまでどれだけの距離があるか知っていますよね……? 正気ですか?」

「そんなに徒歩が嫌か。なら、仕方が無いな。馬でも買うか。ある程度は体力が無いと冒険者なんてやってられないから一石二鳥だと思っていたんだが……」

「その見た目で何て事言い出すんですか!」

いやまあ、貧弱ボディではあるがある程度の体力はあるんだぞ私。それからあーだこーだと相談しあった結果、結局テレポートによる移動になった。

決定的な理由は里に売りに出される馬が居なかった事が決め手だった。

そうなる二人分の代金を稼ぐ必要になったため、結局旅に出るのは冬が明けての事になるのだった。

2話

と、言うのが数カ月前の事だ。

冬を越すために保存食をめぐみん家に届けてやり、お互いにテレポート代を稼ぐためにアルバイトをする事に奮闘した結果、私の方は問題無く三十万エリスが貯まった。

主に保存食を雑貨屋に卸した事での収入だったが、最近手持無沙汰で魔王軍の装備を溶かしてインゴットにしたものがそれなりの値段で売ってしまったので実は二人分の代金を確保できてしまっていたのだった。

結構良い装備してるじゃないか魔王軍。

機会があればもつとちよろまかして溶かしてやろうと決意した。

めぐみんはあれから私の渡した保存食で食い繋いでいるらしく小屋に訪れていない。どうにも資金が貯まるまでは会う事は無いだろう的な捨て台詞を放っていたので、それを有言実行すべく頑張っているらしい。

「にしても、最近やけに夜中に爆裂魔法の轟音がするのはもしかや……」
近頃ゆんゆんと一緒にモンスターに追われる騒動に巻き込まれたらしく、その時に爆裂魔法を習得する事が出来たらしいと姉の代わりに訪ねてくるようになったこめつこから聞き及んでいる。

あれだけ爆裂魔法を褒め称えていためぐみんだ。ある程度家に帰りやすく、尚且つバレなさそうな山奥で爆裂魔法をぶっ放している可能性は非常に高い。

やれやれと肩を竦め、暴れ猪の肉を鉄板で豪快に焼いていく。じゅわじゅわと分厚い脂身から溶け出した旨味が良い感じに猪肉に絡んでいく。

岩塩と黒胡椒に似た実を振りかけて味付けし、お手製の麦パンを竈から取り出して皿に盛り付ける。地下に作った氷蔵庫に暴れ猪の肉はまだまだあるので大盤振る舞いだ。

そろそろめぐみんも三十万エリスを貯め終えた頃だろうし。

……流石に貯めたよな？ でもなあめぐみんだしなあ……。

めぐみんは持ち前の魔力量はしつかりあるし、ふにふらと言うクラスメイトの弟のために病気に効くポーシオンを調合した事もあると聞いていたので割かし給金の良いバイトに就けているならそれぐらいは貯まっている筈だ。

日用品が幾つか切れかけているし、里に向かうついでに様子を見に行くか。思い立ったが吉日と言わんばかりに食事を終えた私は歯磨きをしてから身だしなみを整えて外に繰り出した。冬が明けて寒さと温かさの間にある気温で比較的過ごしやすい。里への道は一本道であるため迷う必要も無い。

里の方へ出ると何やら広場が騒がしい。何かしらどうでも良い事で騒ぎ立てるのが紅魔族ではあるが、こうも上級魔法をバカスカ撃っているとなると何かしらの出来事があったんじゃないかと野次馬根性が惹きたてられるのも事実。そちらに向かってみると煽情的な恰好のムチムチボディの女性が彼方此方から魔法を撃たれて涙目で逃げ回っているようだった。

「……何があつたんだこれ。女性を追い回しているようだが、と言うか上手く避けるなあ……って角が生えてるから悪魔か。魔王軍の密偵でも紛れ込んだがその正体が露見したと言う感じかな」

「みたいだよ。めぐみんとゆんゆんにやられたらしい爆裂魔が仇討ちに來たらしくてね。黒猫を人質にしていたらしいけど結局ああなつたんだとき」

「ふーん……、ってあるえか。久しぶりだな」

「ふふ、そうだねおんおん。久方振りじゃないか。元氣そうで……、本当に元氣かい？ 微妙に顔が青白いが」

「元よりこの顔色だよ。まだ早朝だしね、血の通いが悪いんだ。にしても……あの魔力量からして上級悪魔だろうアレ。よつほど自信過剰なタイプだったんだらうな」

「そうだねえ。上級魔法を当たり前のように使いこなす紅魔族の里に単身で襲撃するなんてよつほど自信があつたんだらうね」

まあ、ところどころ被弾によって切り傷や燃え痕が残るくらいにぶちかまされているようだが。果たして本当にそんな理由で來たのだ

ろうか、先日の邪神の封印が解かれた件と繋がっていたりはしないだろうか。と、そんな風に思いながら見守っていると女性の進行方向が此方に向かつてくるように見えた。

まあ、貧弱そうな娘と小説家を目指すインドア少女だ。突破し易いと考えたのだろう、だが、甘い。最近狩猟に出かけていないので私も少し暴れたい欲があったりするので何発か御馳走してやろうじゃないか。

右手を上げて『混沌の火の玉』を出現させ放物線を描いて投げ付ける。距離的に届きはしないが女性悪魔の進路上にそれは落ちた。そして、地面に落下した火球は水溜まりの如く灼熱の溶岩溜まりを作り出した。咄嗟に跳躍した女性悪魔の着地点に向かって再び『混沌の火の玉』を投げ付けてやると勢いよく踏みつけてしまったようで足元から黒い煙が吹き上がっていた。

これこそが混沌の炎の業である呪術の一つ『混沌の火の玉』を用いた即席の罠だ。岩すらも溶かし尽くす混沌の火を足に受けてまともに走れる訳が無い。火傷を負った様子で走り辛そうにする女性悪魔からの鋭い睨み付けを受ける。

なかなかのガッツじゃないか、気に入ったよ、では死ぬが良い。

私はトドメを刺すべく炎を収束させ解き放つようにそれを投げ付けた。一瞬にして円状のサークルを生み出しながら高速で進む『苗床の残滓』が着弾する瞬間、それを飛び越えるようにして女性悪魔は空へ旅立った。

「……やるじゃん」

実際には凄まじい跳躍力によって飛び越えたらしく、私たちの上を通過して背後に降り立ったその女性悪魔は一目散にスプリントダッシュして森の奥へと逃げ去って行った。

出の早い『苗床の残滓』を前に逃げ切るとは恐ろしい悪魔だ。自身に強化魔法でも掛けてブーストしたのだろうか。

私の覚えている魔法は呪術一辺倒であるため森を燃やさないようにするとすると精々が『猛毒の霧』などの霧状のものくらいだ。口から岩を吐き出す『岩吐き』はスキルポイントが足りずにまだ取得でき

ていなので放つ事すらできやしない。

まあ、ビジュアル的に『岩吐き』は女性の身である今は使いたくないので、『苗床の残滓』を避けられた時点で逃走は確定していたようなものか。対峙すればソウルに変換したハンドアックスを取り出して振るってやり、直後に『大発火』をお見舞いしてやろうと思っていたのだが残念だ。

「次は仕留めてやる」

「……ず、随分と好戦的なんだねおんおんは」

「そうかな。敵を殺すのに理由なんて要らないと思うんだけど」

「おお……、そのフレーズ格好良いね。次の小説に使わせて貰っても？」

「構わないけど、こんな物騒な台詞を使う小説書けたっけ」

「酷いなー。これでも進歩しているんだよ」

「ふーん、なら三日前に書いた部分をもう一度見直して見なよ」

「何でそんな残酷な事を言えるんだいおんおん。ノリとテンションで書いた文章なんて黒歴史に匹敵する程に恥ずかしいんだぞ……」

知ってる。徹夜テンションで書き上げた意味不明な企画書を掘り返してしまった時の羞恥心は未だに忘れられやしない思い出だ。誰がこんなもん書いたんだよ、俺だよ馬鹿がとシユレツダーに掛けるまてがお約束である。

それは置いといてめぐみんの安否を確かめるべきか。あるいは小説のネタを拾いに行くためか追いかけて回っていた面々に話を聞くべく意気揚々と行ってしまったので一人で行くか。

めぐみんの家に通りに辿り着くと派手に戦闘をしたのか壁の一部が壊れており、風通りが良くされてしまっていた。

「おや、おんおん。この通り最強爆裂魔法の担い手である私は元気ですよ」

「ふむ、そのようだな。精々壁に穴が開いたくらいか？」

「そうなんですよ、やっと直したばかりだって言うのに。建材を拾ってくるのも一苦労なのですから勘弁して欲しいものです」

やれやれと肩を竦めるポーズを取っためぐみんの容姿を爪先から

頭頂まで確認し、怪我をしていない事を理解して安堵した。溶岩溜まりに足を踏み入れてなお走り抜く耐久力のある悪魔だ。扱う魔法もそれなりに強い分類を修めている事だろう。

「そうだな。一応、焼き尽くしてやろうと思ったのが一枚上手だったのか逃げられてしまったよ。安心しろ——次は必ず殺すからな」

「ひいつ、お、おんおん。わ、私は無事ですから報復なんてしなくて良いですからね。そ、それよりもこれ、これを見てくださいよ。テレポート代の三十万エリス貯まりましたよ！」

おつと、つい感情を昂らせて両目を光らせてしまった。紅魔族の習性として感情が一定値を超えるとこうして紅い瞳が輝く仕様になっている。因みにそれで強くなったりする訳では無いのでただのエクストでしかない。

必死な表情で袋を左右に揺らして話題を逸らそうとするめぐみんを見て微笑ましさを感じて和んでいた私は少しながら驚いた。まさか有言実行を果たすとは露とも思っていなかったからだ。

「なんと、一応の事を考えてめぐみんの分も稼いでおいたのだが杞憂だったようだな。やるじゃないかめぐみん。ふふふ、こんなに立派になろうとは……」

「え、私の分も？　という事は六十万エリスをこの短期間で？　……おんおんは冒険者では無く商人になった方が道が明るいのでは」

「営業をしたくないから嫌だ。絶対に嫌だ。あんな仕事をするくらいなら前線に立った方がマシだ」

「え、ええ……。何か妙に力がこもっていると言うか怨念的何かを感じるような……。ま、まあ良いでしょう。と言う事で、ゆんゆんにも言ったのですが旅立ちは明日にしましょう」

「ふむ、随分と急だな。問題は無いけども。時間はどうするんだ？」

「無論、旅立ちと言えば朝に決まっています！　朝陽を受けながら爆裂魔法の未来を背負う背中を魅せつけてやりましょう！」

そう言って右手を突き出し、きらきらとした瞳で此方を見やるめぐみんをどうしたものかと苦笑して受け止めておく。仕方が無い、此処は私が折れてやるべきか。どうせ旅立ちはするのだから言い出しつ

ぺであるめぐみんに選択権を渡してやろう。

明日、か。遊びに行く予定じゃないんだからもう少し日程が欲しかったが、こうも目を輝かせて微笑ましいめぐみんを見てみると延期を申し出るのも無粋に感じてしまう。分かつてはいたがめぐみんの保護者役として確りと役目を果たしてやろうじゃないか。

「分かったよめぐみん。テレポートで経由するから長旅にはならないが、アクセルの街に長居するんだ、常々持っておきたいものや使いたいものを確りと荷造りするんだぞ。生ものは腐ってしまうだろうから駄目だからな」

「むう、分かっていますってそれくらい。既にちゃんと準備してありますよ」

「そうかそうか。それは失礼したな。ご両親やこめっこは勿論、友人にも声を掛けておくんだぞ。……最悪の場合、それが最期の別れになるからな。私とてそうさせないよう尽力するが、里の外に出てしまえば危険性はかなり上がるんだ。……悔いのない旅立ちの別れをしておくんだぞ」

「……なんでこう、おんおんは変な方向に覚悟がガン決まりしてるんですか？ 戦争に行く志願兵じゃないんですから……」

すまんめぐみん、中らずと雖も遠からずなんだ。魔王討伐の使命を帯びてしまっている訳だからな、ある意味志願兵なのだ私は。流星にそのためにめぐみんを連れて行かせる訳にも行かないのでアクセルに着いたら一旦別れて見るべきか。

「ふふふ、それもそうだね。アルカンレティアは温泉と水の街とやらしいし、少しだけ観光もしてみようか。少し気負い過ぎてしまっていたよ」

「温泉！ 確かに楽しみですね！ 贅沢に湯浴みできるだなんて素晴らしいに決まっていますー！」

「うむ、私も楽しみだよ」

自分で言ってる思い出したがそう言えば温泉街だったなアルカンレティアは。

頭の可笑しいアクシズ教徒の総本山と言うマイナスイメージが根

強いが、温泉の質は水の町と呼ばれるだけあって素晴らしいとも聞いている。

ふふふ、温泉か。家ではこっそり作った五右衛門風呂もどきでしか風呂に入れなかったが、広い浴槽で温泉を楽しめるとあっては興味が湧いてくるものだ。

前世では精々スーパー銭湯くらいで本格的なものはTVで見たくらいのものだ。こうして浸かる機会ができたのは中々嬉しいものだ。

日本人の血が騒ぐと言うものだ、今生は違うけども。

「それではめぐみん。私も色々と準備をしてくるからおさらばだ。明日、里の入り口に朝方に待ち合わせる事としようか」

「はい！ 私最強爆裂魔法伝説が漸く始まるんです！ おんおんはその目撃者となり、後世に語り継ぐ権利を差し上げましょう！」

腰に手を当て無い胸を張り、ビシィツと言う効果音が聞こえてきそうな指差しが私に向けられる。肩を竦めて私は受け取ったような身振りをしてからそれをあるえの家の方角へ投げるジェスチャーを取った。

「その役目はあるえに投げとくわ」

「何ですか!？」

「私は王道な小説は書けないからね。そういうのはあるえの方が得意だから、私はめぐみんの雄姿を纏めて送っておくことにするよ」

「むむう……、では仕方ありません……。ん？ では王道じゃない小説は書けるんですかおんおんは」

「まあねえ……。めぐみんにはちよつと早いかな」

「子供扱いしないでもらおうか!」

「あはは……」

実際、私が書けるのは官能小説くらいだ。前世でそう言ったものを読む機会は多く、下手なAVよりも興奮できたから目が肥えるくらいには読み潰していた。

森の小屋で一人で居ると言うのは存外寂しく、ついつい前世の出来事を思い返してしまう事がある。そんな時に試しに書いてみたそれを、つい評価が気になりむつつりすけべなあるえに見せたのが運の尽

きだった。

……前世で友達が勝手に投稿しちやつてーみたいな展開を笑ったものだが、自身に降り掛かると全くもって笑えない事を身をもって知る事となったのだ。

『メイドスキーパーの優雅なる性活』と言うタイトルの官能小説が王都でこつそりと売り出される事となった時は本気で目を疑ったものだ。

そう選りによってあるえは出版社にそれを送ってしまった。しかも大賞を取ったと聞かされた時の私の顔は宇宙猫の如く呆けていた事だろう。

出版社の人間が里まで来て原稿を手に私を見た時の顔と来たら本当に愉快だった。そりやまあ十三歳の少女がねちっこい調教物の官能小説を書いた作者だと結び付けるのは無理がある。

だが、住所である森の小屋に住んでいるのは私一人であるため、頬を引き攣らせながら担当者は生原稿を見て納得してくれた。

そうして、今生ではエロカンノウ先生になってしまった訳だ。まあ、印税生活できる程に売れている訳では無いが。

「ま、大人になれば見せてあげても良いよ」

「ほほう、約束ですよおんおん！」

「ああ、勿論だ。男に二言は無いや」

「いや、貴女は女性でしょうに」

「そうだったね、あつはつは……」

いや、本当にそうだったわ。一瞬でテンションが下がって目が死んでいく感覚を覚える。

そう、もう私には心が震えても硬く膨張する相棒は居ないのだ。その事実若くは哀愁を感じながら、改めて女性として産まれ直した事を自覚する。

まあ、流石にこのぶにむにぼでいを見て男性らしさを思い出す事は早々無い。

月の物が来始めた頃は割と本気でこの世の終わりを感ずるくらいに絶望していたが、魔力の高い紅魔族だからか割と重たくは無く、

精々風邪引きの序盤のような倦怠感を感じるくらいだ。

目が覚めてベッドが血だらけになっていた時は一瞬寝ている間に暗殺でもされたのかとパニックに陥ったものだが、出血元が恥部と分かった途端にスンツと真顔になったなあ。

当時の事を思い出して若干ブルーになった私は心配してくるめぐみんに手を振ってから帰宅する事にする。今日はもう灰エラスト瓶グビってさっさと寝よう。旅立ちの準備はとづくに終わっているし、明日出発するなら生活雑貨を買ったところで消費できないしな。

「んんっ、んんんっ、はああ……。朝か」

翌日、伸びをしてから背囊に荷物を詰め込んで最終確認をしつつ今日の段取りを考える。

朝方に里の入り口で待ち合わせと言う事もあつてのんびりする時間は短い。珈琲を飲みたいところだがまだ手に入っていない事もあり、無難に『クリエイトウォーター』で作った普通に美味しい水を木のカップで一杯飲み干した。

両親には前々から旅立ちの事を伝えていたし、この時間に起きているかどうかも分からないので挨拶はまあいいか。

ぶっちゃけ墓守の日々の仕事は清掃くらいしか無いので比較的うちの両親は時間にルーズである。毎日休日のつもりか昼過ぎまで寝ている事もざらだ。

その理由が特段する事も無いから毎晩ハッスルしていると云うのが娘的に頭の痛い内容ではあるが、まあ、頑張っって新しい墓守の世継ぎを作っって欲しい。

ぜっってえなるもんか墓守なんぞに。肩書としては格好良い分類だが、実際にするとなれば話は別だ。王都辺りに拠点を作っって悠々自適に過ごしてやるからな私は。

「さて……。洗い物とかやるべきことはやっだし、待ち合わせ場所待っってるか」

毎日のルーチンワークで手慣れた作業を一通り終わらせて、寝間着からカルラ衣装一式に着替える。腰のベルトにカンテラを引っかけ、背囊を背負っって家から出る。

暫くは戻らないであろう小屋に別れを告げ、里の入り口へと歩いて行く。早朝に近い時間帯だからか人気は少ない。朝からパンを焼いているベーカリー『煉獄の息吹』から匂う美味しそうな香りを鼻孔に感じながら道の中央を歩いて行く。

これからめぐみんと一緒に冒険者になる、そう改めて思い返すと笑みが自然と浮かぶ。

冒険者、そう、冒険の始まりだ。里でぬくぬくと育った私たちが何処までやれるか楽しみで仕方が無い。

名誉も栄誉も要らない。欲しいのは金銭と確かな充実感と達成感だけだ。

ゆくゆくは魔王を討伐するパーティを作るのだろうか。それとも何かしらの出来事で心折れて腐っていくのか。これから色んな事を経験し、成長していく。その一步を今日踏み出すのだ。

心が躍らない筈が無い。こればかりは紅魔族と言うよりもピクニックに行く感覚の高揚感だ。私とて人の子、厄介な特典もあるけれどもそれもまたスパイスだ。

里の入り口には神話チックな巨大アーチがあり、さも凄い里と謳っているが実態は中二病患者の里なので私にとっては恥ずかしい建造物の一つである。

アーチから少し離れた場所に『アースウォール』を小さく作って椅子にする。初級魔法の一部は効果がしょっぱいものが多いが、要は使い次第だ。『クリエイトウォーター』なんて良い例だろう。何時でも飲み水が作れると言うのは冒険者にとって必須だと思う。

『ティンダー』『クリエイトウォーター』『ウィンドブレス』は取っていても損は無い初級魔法だと個人的に思っている。火種、飲み水、乾燥。移動の多い冒険者にとって必需品である物に取って代われるのだから。

『クリエイトアース』？ 知らない魔法だな、精々農家か花屋ぐらいだろう使うの。または観葉植物とか育ててる人ぐらいだろう取るのは。

精々が咄嗟の目潰しに砂を放るくらいだろうし、それをするくらい

なら普通に呪術投げた方が手つ取り早い。

「おや、もう着いていたのですかおんおん。気合ばっちりですね」

「ん、おはようめぐみ、ん？」

後ろから声を掛けられ振り返り様に朝の挨拶を返した私だったが、お洒落な帽子にマント、中二病チックな黒い眼帯、そして素朴でありながら確りとした杖を持っていためぐみの晴れ姿に驚いた。

普段使っていないだけで一式持っていたのだろうか、それとも冒険のために準備していたのだろうか。何にせよ馬子にも衣装だな、可愛らしい。

「ふふん、その様子だと一新した私に見惚れているようですね！ これらは託されし絆の品々です。では、改めておはようございますおんおん」

「お、おう……。随分とお洒落さんになっていたからつい見惚れてしまったよ。ゆんゆんたちに貰ったのかい？」

「ええ、私にどうしても押し付けるものですから仕方なくです、ええ！」

「その割には気に入ってるようだけどね。……ふふつ、仲の良い友人が居てくれて良かったじゃないか」

「……あつ、えと、そのおんおん、別に貴女をハブった訳じゃ」

「良いよ別に。個人的な付き合いをしている子も少ないしね」

まあ、別に悔しくは無い。悔しくは無いのだ。ただちよつと、寂しさを感じただけだ。

めぐみに恵まれた友人が居るのは喜ばしい事だ。何時までも私はずつと寄り添って上げられる訳では無いのだから、私以外の頼りにする伝手はあった方が良い。

……ただちよつと、早期過ぎる卒業は失敗だったかなと今更に思うだけだ。

わたわたと気まずそうにするめぐみに笑みを返し、レポート屋の居る転送屋の方へ連れだつて歩き始める。申し訳無さそうな表情でついてくるめぐみに苦笑を浮かべざるを得ない。

「ほら、めぐみん。せつかくの冒険の始まりなんだから笑顔で居なよ。

私としては君が居るだけで救われる気持ちなんだからさ」

「ううう、ごめんなさいおんおん。過去最速卒業記録のせいで友人が少ない事を気にしているのに私とした事が……」

「いや、そう口にされるとこっちとしても辛いから。ゆんゆんよりは友人が居るから大丈夫だよ」

「それもそうですね！ ……と言うか学校に通ってたゆんゆんが友人が少ないって今思えば不思議ですね？ まあ、ゆんゆんだしなあ……」

「ま、私はゆんゆんの事も友人だとは思っているけどね。……ぶっちゃけ、ゆんゆんは里の外的に常識人だからな。族長の娘って言う肩書が無ければ案外里の外で宜しくやってたかもしれないぞ」

「ええ、そんな訳無いじゃないですか。どうせぼっち拗らせて無駄に大きな胸のせいで大変な目に遭うか、ちよろい性格を利用して騙されてますよきつと」

「お願いだからもう少しゆんゆんに優しくしてあげてくれ。正論ってのは結構痛いんだぞ」

そんな雑談をしながら里の入り口近くにある転送屋の小屋まで辿り着いた。当初の予定では歩いてアクセルへ向かう予定だったが、アルカンレティアを経由する事もあってその道のりは安易なものだ。

朝早くの便を逃すと次の転送は昼頃だった筈なのでめぐみんがちゃんと早起きしてくれて良かった。もしや、そのために朝一を希望していたのだろうか。

そうなると随分とこの冒険に期待を寄せているらしい。可愛らしいところもあるじゃないか。……まあ、観光の時間が短くなるからだなんて理由かも知れないが。

「おや、随分と早く来たねお二人さん。朝一の転送は少し待って貰う事になるけど大丈夫かな？」

「ええ、構いませんとも。何なら早めても構いませんよ」

「言ってる事が一瞬でひっくり返ってるぞめぐみん……。取り敢えず、代金を渡しておこうか」

「それもそうですね。では、此方を」

三十万エリスの入った布袋を二つ受付の女性に手渡し、中身を確認して貰う。受付嬢は頷いてからカウンターの下へそれらを仕舞い込み、代わりに割り札を二つ返して来た。

「直前だったらそのまま行ってもらうんだけどね。はい、アルカンレティア行きの転送割り札。出発の際にこれを渡してくれれば大丈夫よ」

「はい、確かに受け取りました!」

「間違っても売りに出してくれるなよめぐみん」

「流石にしませんよ!」

「あはは……、まあそもそも買い取ってくれる人が居ないんじゃないかな。里から外に行く人少ないし。それじゃ、転送の準備が終わったら声を掛けるから少しだけ時間を潰してくれるかな?」

「ああ、承知した。外の椅子にでも座ってようか」

「そうしましょうか」

意気揚々と割り札を受け取っためぐみんを連れて外に出る。小屋に隣接するように並べられた椅子へと共に座り込む。

椅子が屋内に無い理由は転送の魔法である『テレポート』を扱う人物が紅魔族であり、態々無駄に儀式めいた事をするらしく雰囲気を出すために追い出しているとの事だった。

場所を思い浮かべて魔法名を言うだけで済むと言うのにお疲れ様な事である。

ぼんやりと転送屋から見える紅魔の里を眺める。あまり実感が湧かないがこれから此処を出て行くんだよなあ。そう思うと今更ながらにセンチメンタルな気持ちが入り込んできて来る。

特段印象的な思い出も無いし、これと言って郷愁も無い筈なのに、こーやって外に出る直前になると色々と思いつく事はあった。……なんだ、意外と好きだったんだなこの里が。

「ねえおんおん」

「ん、なんだめぐみん」

「どうしておんおんは私の旅に付いて来てくれたんですか? 里でやりたい事は無かったんですか?」

思わず見やれば揺れる瞳があった。めぐみんの不安が見て取れるような曇り顔が其処にあった。もしか、私がめぐみんのために態々付いて来ているとでも思っているのだろうか。

それは勘違いだぞめぐみん、私は私のために里を出るんだから。

「……そう言えば、教えて無かったな。実はなめぐみん、私は勇者候補だったりするんだ。魔王を倒す使命を持っているんだ。だから、いつかは里を出て攻略に向かうつもりだったんだよ」

「……おんおん、流石にそれはその歳になって恥ずかし過ぎませんか？」

「あはは、信じられないのも無理も無いよな。私とて、めぐみんの立場になれば熱があるのか確かめるところだ。まあ、信じて貰えなくても良いさ。だけど、いつか、分かる日が来る。それはきつとどうしようもない程に残酷で、目を逸らしたくなるような出来事がきつかけだろう」

「え、っ、な、何が起こるんですか？ あのおんおんがそんな事を言うだなんてよつぽど酷い状況じゃないですか」

私の転生特典はぱつと見地味だからな。露見するとなれば死んだ時ぐらいだろう。

捻じれた刀身の螺旋剣を刺した篝火を經由して移動できる事は分かっているの、死んだら灰になって最寄りの篝火で復活するのだろう。決戦の前には近くに刺しておかないとな。

まあ、そういう事態が起きるかは分からないが、匂わせるくらいの事は伝えておこうか。

「でも、大丈夫だ。私は死なないからな。その時になったらあんまり悲しんでくれるなよ。慟哭なんてされたら私とて出て行き辛いからな」

「え、ええと……？ もしかしてそけつとさんに死の予言でもされたんですかおんおん」

「いや？ されてないよ」

そう返すとめぐみんは頭を抱えてしまった。あー、紅魔族のノリで言っているとでも思われているのだろうか。しかし、普段のリアリス

トな私を知っているから困惑しているのだろう。

めぐみんから視線を外して空を見やる。曇り雲の無い綺麗な青空が其処にある。

排気ガスで汚染されていない綺麗な空が其処にある。此処は異世界だ。私はもう地球の人では無い。電気で生活は成り立っていないし、魔法のある不思議な世界だ。

こう言ったふとした瞬間に、自分が異物なのだと思ってしまう時がある。

ちやんとこの世界の人間から産まれて過ごして来た時間があると言うのに関わらず。

遠い目で空を見やっていたら右手を暖かな小さな温もりに握られた。見やればめぐみんが左手を私の椅子に置いていた右手に重ねたらしい。

「大丈夫です！ おんおんには私が、最強の魔法の爆裂を極めし者である私が居るんですから！ 絶体絶命なピンチになったら私が吹き飛ばしてやりますよ！」

それは綺麗な笑顔だった。私の一抹の不安を吹き飛ばしてやる玩意気込んだ自信満々な笑みだった。一瞬、その尊さと温かさに見惚れてしまった。

「……そうだね、その時は頼むよめぐみん」

だから、私も込み上げてきた感情を込めた笑みを返した。

どうしようもなく貧乏性で爆裂魔法に魅入られて暴走する可愛らしくも頼れる友人に。

……なんでそこで赤面してるんだめぐみん。格好良い事を言ったなら最後まで貫いてくれよ、そう言う所だぞ、詰めが甘いんだから、まったく……。

今生の生活はとても楽しいものだ。何せ、こんなにも素晴らしい友人が居るのだから。

3話

めぐみんと私を見送りに来てくれたらしいふにふらやあるえたちに別れを告げて、私たちは紅魔の里からアルカンレティアへと転送されたのがつい先程の事だ。

「アルカンレティアはベテラン冒険者の街……それがギルドのクエストにまで波及しているとは思わなんだ」

レベル制限によりめぐみんが脱落し、クエスト達成率により私が脱落し、見るも無残な事に私たちの冒険は止まってしまった。依頼はあれど受ける資格が無いため、ソロすらもできないと言う有様に私たちは出鼻を挫かれ、一先ず取った旅館の部屋で項垂れていた。

幸か不幸か、もしもめぐみんが転送代を稼げなかつたらと用意していた三十万エリスによって一か月程暮らすには十分な土台があったのが幸いした。

「くっ……！ 我が最強魔法たる爆裂魔法がそもそも発動すらさせて貰えないとは……っ！」

「ほんと誤算だったな。討伐系の依頼であればめぐみんも輝けたんだがな」

「そうですよ！ それなのに……！ それなのにい！ なんで依頼を受けられないんですか！ せめておんおんさえ受けられれば追従できたのにそれすらもできないだなんて！」

「すまないなめぐみん。里にはギルドが無いから……。ギルドも冒険者の死亡率を下げるために配慮した措置だろうし、諦めて別の手段で金策をしなくてはな」

「……私、里でのアルバイト全滅したんですけど」

まさかのカミングアウトに目を見開く。では、どうやって三十万エリスも集めたんだ。

今思えば確かに不思議ではあったのだ。変にプライドの高いめぐみんが平々凡々とアルバイトで稼げるかと思えば首を傾げざるを得ないのだから。

「ではあの三十万エリスは……そうか、カンパして貰ったのか。友人

の多いめぐみんだ、成程なあ」

「……ちよむすけを買い取ろうとした女悪魔から結果的に奪いました」

「……冗談きついぞめぐみん。では、なんだ、君はちよむすけを売ろうとして代金を貰う際に女が悪魔である事が露呈して大騒ぎになり、最終的に残されたそれに手を出したのか。相手は悪魔だぞ、窃盗や強盗などで奪い取った金だったらどうするんだ」

「あつ」

「考えてすらいなかったのかっ!? うぐぐ、やはりめぐみんには情操教育を施す必要があるようだな……」

いやまあ、盗難品の行方を捜すのは難しいか。ましてや物品では無く貨幣だ。見つかる術も無ければ当てもないから今回は仕方が無いか。一つ溜息を吐いて肩を竦めた。

「まあ、めぐみんの性根は良い子だからな。今回は釘を刺すだけにしておくが、もう少し考えて行動をしなくちゃ駄目だぞ? 何処ぞの貴族の宝物を押し付けられてなんやかんやで処刑とか普通にあるんだからなこの世界。取り敢えず宿代とかは負担しておくから、午後にも馬車代を調べて金策をするぞ。労働組合に登録する事も視野に入れないければな……」

「うう、おんおんが居てくれて本当に良かったです。軒並みバイトが全滅してお腹を空かす未来が見えた気がしましたし……」

「ううむ、めぐみんは器量は良いし容姿も良いのだからプライドを張らねば普通にバイトできると思うんだが……。客の言う事だなんて話一割で聞き逃せば良いんだぞ? やつかみをかけてくる奴は大抵そう言う事をしないと自分を保てない可哀想な奴なんだから」

「地味に辛辣ですねおんおん……。随分と実感がこもっているというか」

糞みたいなクライアントの仕様変更を断った際の遣り取りだなんてそんなものだ。何が「別のところに持ち込んでも良いんだぞ」だ。ならさつさとそこに回せよ、この糞みたいな内容をまともに取り扱ってくれる場所は三流以下のブラックくらいだったの。

ふつつつと前世の苛々エピソードを思い出してむかつ腹が立ち始める。仄かに瞳が灯っているのか周囲に赤い光源から帯びる影が見える。

「あの、おんおん？ 落ち着いてください。そ、そうだ！ お風呂に行きましょう！ この宿にも温泉が付いているのですから使わないのは勿体無いですよ！」

「……ふう、それもそうだな。温泉は何度行っても良いものだ。この濁り腐った感情も流しに行けばちったあマシになるだろうよ」

「ひいつ、あの温厚なおんおんが口調が崩れて恐ろしい事に……っ。いったいなにがあったんですか貴女に……」

お風呂セットを取り出しつつ、何やら戦慄しているめぐみんを連れて温泉浴場へと向かう。前世でもよくある旅館の温泉と言ったところで、男女に分ける暖簾をくぐれば仄かに温泉の香りらしき匂いが鼻先に漂ってくる。

カルラ衣装を脱ぎ去り、すっぽんぽんになった私は恥じらいから白い手拭いを前面に持って恥部や胸を隠す。めぐみんのようにバスタオルを巻いても良いのだが、後で持ち運ぶ事を考えると大きいので面倒な事もあって手拭いを使っていた。

「準備万端ですね！ では早速向かいますよう！ そうしましょう！」

「お、おお、分かったから肩を押すなめぐみん。温泉の床は滑りやすい事で有名なんだぞ」

強アルカリ系の温泉だと足の角質が溶けるからそれで滑りやすいんだっただか。

私の背はめぐみんと横並びすると拳半分程小さいので押されると耐えられん。いやまあ、本気で踏ん張れば耐えられるがそれをする場面でも無いしな。

単純に初めての温泉にめぐみんもテンションが上がっている様子であるし、それに付き合っただけか。……にしては何か必死のような気がするが、はて？

戸を開いてTHE温泉と言った石積みの浴場に辿り着き、身体の汚

れを落とすために桶にお湯を汲んで流す。めぐみんが即座に入ろうとしていたのでマナーを説き、横並びになつて身体を洗う。

ちゃんと言い聞かせれば従つてくれるめぐみんは良い子だな。……なんで母性を会得しているんだ私は。同年代の娘が居るとか可笑しいからな物理的に。

「ふう……、良い湯ですな……」

「そうだな……、心が洗われるようだ……」

二人で肩を並べて温泉に浸かる。じんわりと身体の芯が熱を帯びていくような心地につい呆けた声が漏れてしまう。やはり温泉は良いものだな……。

この世界は割と衛生が確りしており、中世のように汚物が窓から投げ捨てられたり疫病が発生しそうな悪環境が存在していない。それどころか領営の大衆浴場が大体存在しているぐらいに衛生的な環境が整っている。

大きな岩を組んで作られたこの浴場を見る限り、過去に転生してきた日本人が色々とやってくれたのだろう。そうじゃなかったらテルマエ式か、サウナ辺りが主流の筈だ。

……まあ、この世界の常識は私たち異世界人にとってマジでファンタジーなので全てを理解しようとする宇宙猫しそうになるが。

ほんと、なんで野菜が空を飛んで襲い掛かって来るんだろうなこの世界……。活きが良いつてレベルじゃないだろ本当にさあ……。

「さて、めぐみん。今後の事でも少し話そうか」

「ええ、構いませんとも」

「一先ず、此処を拠点にして金策をする。正直、一撃熊や暴れ猪とかぐらいなら私でも一人で倒せるが、それをしたところでギルドでの実績にはならないから冒険は今回は無しだ」

「因みにどうやって倒してたんですか？」

「ん、木に登ってから弓で頭を狙って一匹釣ったら魔法で地の利を取って嵌め殺してたぞ。『混沌の火の玉』を習得してからは正面から狩ってたな」

「おんおん、弓も出来るんですか？」

「ある程度はな。なるべく一対一を心掛けて、相手に何もさせないように倒すのがジャイアントキリングの鉄則だ。群れるのは囲まれて罅り殺されるのが目に見えてるから手を出さない。手を出すにしても一匹ずつ釣るんだ」

「へえ……、結構考えてるんですね」

「まあな。爆裂魔法のように広範囲高威力とはいかないから、それ相応に考える必要がある訳だ」

うんうんとめぐみんが非常に嬉しそうに頷いているが、一発だけ撃つたら終わりの戦術魔法と一緒にするのは畑違いと言うものだぞめぐみん。

実際、めぐみんの爆裂魔法を活かすのであればそれこそ軍団と軍団がぶつかり合うような規模の戦闘を想定しなくてはならない。また、大型のモンスターを迎え撃つ際の固定砲台としての役割くらいだろう。

何せ、一発撃てば森林が更地どころかクレーターが出来上がるくらいの超威力だ。魔法を通さない耐魔力障壁とかを纏っていない相手であれば確殺の威力を誇るだろう。

ううむ、案外里で魔王軍が群れている時にニート共もとい遊撃部隊の後ろからバカス力撃たせてやった方が経験値になったのではないかと思えてくる。

まあ、それをするとかかってくる魔王軍が軒並み確殺するから襲撃の頻度が減って何故か里から響盛を買いかねないが。

「さて、話は戻すが基本的にアルバイトを軸に貯めて行こうと思う。女将さんに尋ねてみたがアクセルまでの道のりは短いらしいから基本的に馬車が主流なんだそうだ。案外、直ぐに行けるかもしれないな」

「ある、ばいと、ですか……」

「そう言えば、里では全滅したって言ってたが、具体的に何が原因だったんだ？」

「その、私は生まれつき魔力が高いようで、そのコントロールを学ぼうにも爆裂魔法しか取ってないのでどうしようもなく……」

……成程。となると、案外爆裂魔法はめぐみんの適性魔法だったのかもしれないな。

膨大な魔力を必要とするが故に、使いこなせないとされてきた爆裂魔法。それに憧れ、ついに習得まで果たしたためぐみん。うむ、運命的な出会いだったのかもしれない。

「ふむ、だが、魔力を使わない仕事だってあっただろう。飲食店とかなら問題はあまるまい」

「その……、ふにふらたちに揶揄われまして、売られた喧嘩を買ったりしていたらクビに……」

「……プライドの高さが仇になった訳か。ふうむ、となると此処でも子供の手伝い扱いされて逆切れしてクビになる未来が見えるな……」
「言わないでください……ぶくぶくぶくぶく」

自分でもその光景が浮かんだのか不貞腐れてしまい、目元の手前まで潜水してぶー垂れてしまった。ううむ、めぐみんとてまだ十三歳の女の子だ。子供であるのだから感情のコントロールが上手いかないのも仕方が無い。

不貞腐れてしまったためぐみんの頭を撫でて宥めながら、どうしたものかと思案する。めぐみんが撫でられた当初は若干抵抗していたが、潜水を止めてからは目を瞑って甘え始めていた。

後でご機嫌を取るために久しぶりに耳かきでもしてあげようか。お手製の耳かき棒を作ってからしよっちゅう強請られたものだが、こめっこに見られてからは自重するようになったからな。

「ふむ……、ならばやはり……、こつそり街の外でモンスターを狩って素材を売り捌くか。または、簡単な露店を出して料理でも売るか」
「前者は流石にギルドにバレたらまずくないですか？」

「それもそうだな。では、後者を取ろう。モンスターを狩って食材費を浮かせて利益を出すか」

「それって大分グレーなのでは……」

「いや、大丈夫の筈だ。ギルド的に問題視するのは高価な素材を秘密裏に横流しされる事だからな。比較的安価なモンスターを狙って、串焼きか何かにして露店で売れば問題無いだろう。ちゃんと営業許可

も取ってな」

「下りなかつたらどうするんです?」

「そうだな、最悪の場合個人の商売人に直接交渉して馬車の護衛としてアクセルに向かおう。……ただまあ、私たちの身形で信用されるかは別としてだが」

「いや、おんおんのカードを見せれば良いのでは?」

可愛らしく小首を傾げためぐみんの案にハツとする。それもそう
だ。ギルドでも私の冒険者カードを見せれば問題無かつたかもしれない。ここ数年で狩り尽くす勢いで暴れ猪を筆頭に里周辺の獣系モンスターを狩っていたのだから実績の代わりになったかもしれない
かつた。

「……すまないめぐみん、里で狩猟するのは日課のようなものだったから感覚が狂っていたみたいだ。私のカードを見せれば依頼を受けられたかもしれない」

「あつ……。ま、まあ、選択肢が増えたから良いじゃないですか。荷馬車を守る用心棒。そっちの方が手っ取り早くアクセルに向えるでしょうし、良い案だと思いますよ!」

「ふふふ……。ありがとうなめぐみん。二人で来て良かったな。私一人では思いつかなかつたかもしれん」

「……私も、おんおんが居てくれて良かったです。寂しくないですか
ら」

ああもう、何でそんな可愛い事を言うんだこの娘は。思わず抱き寄せてぎゅつとしてしまった。されるがままにめぐみんも私に寄り掛かるように抱き寄せられてくれた。

「うう、恥ずかしいですよおんおん」

「ふふふ、すまないな。めぐみんが愛おし過ぎて感極まってしまった」

「別に良いですよ。私とおんおんとの仲じゃないですか」

「それもそうだな」

腕を外すとめぐみんはこてんと私の肩に頭を乗せて甘えてくる。

昔から隣り合って座るところで甘えるように身を任す時があった。

私と知り合うまでは家の貧困事情で外に出て食べ物を探し回って

いた事もあり、基本的に誰かに甘える事をしない性格だったからだろうか。

空腹に苛まれてゆいゆいさんに助けを求めるも「ごめんね」の一言で思いの丈を口にする事も出来ず、あの日森で狩った一撃熊の血抜きをしている時に出会っためぐみんはそれはもうやつれていた。

慌てて駆け寄った時の軽さに本気で心配したっけなあ。それからめぐみんとの交流が始まり、森の中で一人で暮らしていた私の生活に彩りが生まれた。

めぐみんは私を命の恩人だと言っていたが、私もまためぐみんに救われた身である。

一人だけの生活で前世の社会人生活を思い出してしまい、何をやるのも億劫になり、ただひたすらにモンスターを狩る事だけを愉しみに生きていた擦れた頃だったから尚更にだ。

擦れていく精神を癒してくれたのは、美味しそうに食べるめぐみんが魅せた笑顔だった。

「……そろそろ出ようか」

「そうですね、十分に堪能しましたし」

心の奥まで温まった心地で浴場を出る。身体を拭いて浴衣を着た私たちは湯冷めしないように一度部屋に戻り、まったりとした時間を過ごした。

何だかんだ部屋でごろごろしてしまい、結局午後には部屋で時間を潰して終わってしまった。少し長湯だったからか若干逆上せてしまっていたのかもしれないな。

夕飯は部屋ではなく食堂でのバイキングだった。本格的に前世で旅館に泊まった感覚に陥りつつあり、明日は何処を観光に行こうかと話を弾ませてしまったのは御愛嬌だ。

その後はもう一度温泉に入り、部屋でめぐみんに膝枕をして耳かきをしてやり、途中で寝落ちしてしまったので苦笑して敷き布団に寝かしつけてあげた。

「……明日はもつと良い日になるよね、めぐみん。……なんてな」

幸せそうに眠るめぐみんの頭を撫でた。就寝したのが早かった事

もあり、翌日は二人して早く起きてしまったのは笑い話だ。

浴衣から洗濯して乾かした一張羅に身を包み、準備万端で宿から出たのだが……。

「どうか！　どうか皆様の清き信仰心をアクシズ教に！　信徒一同笑って暮らせるアットホームな信教です！」

「信仰経験不問！　未信仰者歓迎！　学歴年齢不問！　皆にここにコアクシズ教に是非入信を！」

「アクシズ教に入ると高収入に期待できますよ！　勿論、今なら頑張りに応じて好待遇をお約束します！」

「アクシズ教はノルマも残業もありません！　あなたの頑張りをしっかりと評価！　さあ貴方もアクシズ教徒になりましょう！」

何処ぞのブラック企業のキャッチコピーめいた勧誘をアクシズ信者たちが広場で行っているようだった。

そういや水の女神アクアを信仰する紅魔族よりも頭のやばい事で有名なアクシズ教団の本拠地は此処アルカンレティアだったな。一心不乱に勧誘しているが、普通説法を説いて胸打たれて入信するのが信教と言うものではなかったらうか。

何故怪しいサークルみたいな感じで勧誘しているのだろうか。

「うわあ……、これが噂のアクシズ教徒なんですわ……」

「朝からお疲れ様な事だな。アレで入る奴の頭の中を見てみたいものだ」

「今なら食べられる石鹸が付いているみたいですよ」

「……新聞勧誘じゃねえんだからさ」

「呆れてものも言えませんね……」

まったくだ、と二人して肩を竦める。すると足首辺りに何か柔らかなものが触れた感覚があった。見やれば額に紅十字のある背中から小さな黒い羽根の生えた黒猫が居た。

……この世界の猫って羽根生えてるんだな、初めて見たんだが。

やけに人懐っこい黒猫を抱き抱えて見れば首輪をしていないようかどうかやら野良猫らしい。

「ふむ、うちの子になりますか？」

「んにゃあ」

「あれ、ちよむすけじゃありませんか。確かこめっこに食べられないようにゆんゆんに託したのですが……」

「ちよむすけ？ ……いや待て、その話が本当なら」

胸元にちよむすけと言う珍妙な名前を付けられた猫を抱き抱えてから辺りを見回す。すると幸薄そうな巨乳の少女が勧誘に右往左往しているのが目に入った。

……何してるんだゆんゆん。まさかと思うがライバル視しているめぐみんを追ってアルカンレティアまで態々来たのだろうか。

「ん？ おんおん何を見て……、ええ……。何故ゆんゆんが此処に？」

「さあ、案外寂しくて追って来たんじゃないか？ 人気者だなめぐみん」

「……理由が否定し辛いですね。ゆんゆんですし……。毎日顔を見ていた私が旅に出たから寂しさを理由に族長修行と称して後を追う可能性は否定できませんね……」

二人して可哀想なものを見る目でゆんゆんを見守つてやる。何やら勧誘に揺れていたゆんゆんだったが、ちよむすけが居なくなつたのに気づいたのか慌てた様子で辺りを見回し始めた。

そして、生暖かい視線で見守つていた私たちの姿を目にしたのだろう、満面の笑みを浮かべたかと思うとちよむすけを見つけて安堵するように胸に手を当ててほっとしているようだった。

「ああ！ 良かった！ ありがとうおんおん。何時の間にか抜け出してたから探してたの」

「ああ、それは別に良いんだが……。ゆんゆん、君は随分と寂しん坊なんだな」

「ち、違うから！ 別にめぐみんが旅に出て話し相手が居なくなっちゃって寂しかったから追って来た訳じゃ無いから！ しゅ、修行なの！ 中級魔法じゃ里の周りのモンスターを倒せないから仕方なくアクセルで頑張ろうって思つて！」

「ふっふっふ、皆まで言わなくて良いですよゆんゆん。私と言うライバルが居なくて寂しかったでしょう。ちゃんとわかつてますから」

「ううう……、そ、そんな目で見ないで……」

お姉さん振ったためぐみんの生暖かな視線に耐えられなかったのか、自爆して白状したゆんゆんは顔を手で覆ってしまった。どうしたものかとちよむすけを見やれば、にやあと返って来たのでにやあと返し、取り敢えず頭に載せて置く事にした。

……おお、何となく乗せてみたが体幹が確りしているのかちよむすけはピッタリとフィットして良い感じだった。

めぐみんは帽子を被っているので何となく真似してみたが、これは案外良いかもしれない。何よりも柔らかかなお腹が頭に乗っかっていると言うのが素晴らしい。

人懐っこいし良い子だなちよむすけは。後でおやつとして何か買って上げなくては……。

「いやなにメロメロになってるんですかおんおん……」

「わあ……、おんおんの顔が緩んでるの初めて見たかも……」

「む、悪いか。私は猫派だからな。可愛い猫がこうも大人しくしてくれているんだ、愛でなくてはなるまいて」

「まあ、確かにちよむすけは野生の猫なのに随分と賢いですけども……」

二人の視線が頭の上のちよむすけへと注がれる。いやまあ、明らかに何か混ざってるだろうなこの猫……。ソウルが無垢なのに淀んでいると言う矛盾を孕んでいるし。

いや、淀みから生じた無垢と言うべきか。本来あるべき混沌が裏表で分かれたような、そんな感じがする。

……まあ、可愛いからいいか。

「そう言えばゆんゆん、アクセルまではどうするつもりだ？」

「へ？ 普通に乗れ合い馬車で行くけど……。そこまで高くないし、二日くらいで着くみたいよ」

「へえ、ならめぐみん。数日くらい観光をしてから行こうか。普通に手持ちで足りそうな気がするしな」

「そうしましょうか。なら温泉巡りと洒落込みましょうおんおん。……あ、ゆんゆんちよむすけを連れて来てくれてありがとうございま

した。お帰りはあちらです」

「何ですよ!? 此処まで来たなら一緒に行動させてよ!? まだ来たばかりで温泉楽しんでないし!」

「……だそうですよおんおん、どうします?」

悪戯つけのある小悪魔微笑を浮かべるめぐみんと、置いてかれないよねと縫るような瞳を向けるゆんゆんの視線が私に集まる。

いやまあ、普通に付いて来て良いのでは無かろうか。それが分かっているからめぐみんも勿体ぶっているだけだろうし。

「それじゃ、ゆんゆんも一緒に極楽温泉ツアーに出発しましょう」

「ほ、ほんと! やった、やった! お友達と温泉でまったりするって言うやりたいリストの一つが叶う!」

「……もう何も言うまい。おいめぐみん、どうしてこうなるまで放置していたんだ」

「いやいや、絶対私のせいじゃありませんって。サボテンを友人と呼ぶ子ですよゆんゆんは。ぼっちを拗らせているだけでしょう」

「拗らせてないわよ! 私だってお友達はちゃんと居るんだから!」

「私とおんおんを除いて何人居るんですか?」

「それはっ、それは……、……その、私が勝手に友達って思ってるだけで相手はそう思っていないかもしれないし……」

「分かった、この話題はもう止めだ。はい、やめやめ!」

拗らせ過ぎだろゆんゆん。確かにクラスメイトを友人と豪語する奴や知り合いと分類する奴が居たりするが、そこまで卑屈になる必要は無いだろうに。

喜んだりしょんぼりしたりと忙しないゆんゆんに小さく肩を竦める。

めぐみんの話を聞くに、ゆんゆんは真つ当な感性を持つ少女だ。里の外の、と枕詞が付くが。

中二病みたいな台詞に対して大慌てで心配したり、人の好きが災いして疑う事無く信じて場の空気を凍らせたりする程に、致命的なまでに里の感性と反りが合わない。

そのせいで私がおかしいのだろうか、と言う疑心暗鬼が取り付いて

しまっているのだろう。何とも難儀な事だ。何せ、皆が楽しいと言う事を愉しめないのだから。

幼い頃から疎外感に苛まれ、同学年の少年少女を見て自分の可笑しさを自覚したのは何時だったのだろうか。きっと、こんな風に拗らせまくらうだ、物心付くぐらいの頃では無いかと憶測する。

そこに次期族長と言う重荷も乗っかっていたとしたら……、拗れるのも無理も無い気がする。

「ほら、ゆんゆん」

「あ、う、うん」

「仕方ありませんね」

ゆんゆんの両手を私とめぐみんで片方ずつ握ってやり、温泉巡りのために引つ張って行く。おどおどとしていたゆんゆんだったが、手を繋ぐと言う仲良し行動に感極まったのか良い笑顔を浮かべていた。

「素晴らしいわ！ こんな尊い光景を見られるだなんて、女神アクア様の思し召しだわ！」

さあ温泉へ、と足を踏み出したタイミングで横合いから女性の声が聞こえて来た。そちらを見やれば、頬を押さえて恍惚とした表情で此方を見やる女性が居た。

そこら中で見かける青い修道服からしてアクシズ教の人だろうか。行動と言動がまんま限界オタクと言った様子だが、はて。

「そこの姦しいお嬢さんたち！ 良かったら美味しいご飯を食べながらお喋りしない？ 今なら美味しそうなパンが沢山あるの！」

「え、いや、私たちは温泉に……」

「まあまあ、そんな事言わないで、このセシリーお姉ちゃんに任せなさい！ さあ、教団本部にご案内！」

「ちよ、手を、こらっ、手を放せ、って何だこいつ力つよっ!？」

「うへへ、儂げ美少女と手を繋いじやったわ、もうこの手洗わないんだから」

私の空いた手を握り、しかも恋人繋ぎにしているからがっちり掴まれて逃げ出せない。

そうだった、プリーストと言う職業はモンクに派生できる程に武闘

派でもある。前衛にもなれるのがこの世界のプリーストだ。

メイスを振るう職業の力が弱い訳も無く、私たちは引き摺られるかのようにセシリーの歩みに同調を余儀なくさせられていた。

所々言動が危ういのだが、ロリコンの気があるんじゃないかこいつ……。

いざと言う時は焼き払おう、そう胸に決意して私は諦めた。言動は怪しいが此方の歩幅に合わせたり、アルカンレティアの名所を遠目ながらに説明する姿は誠実そのものだった。

まあ、ちよつと個性的な案内役でも雇ったのだと自分を誤魔化す事にした。この人、黙ってれば美人なお姉さんなんだがなあ……。

4話

そんなこんなで連れて来られたのはアルカンレティアの一角に存在するアクシズ教徒の本拠地たる大教会。その応接室で数人のアクシズ教徒に歓迎されるように私たちはパンとシチューでちよつと早い昼食を取っていた。

使っている水が美味しいからかごつた煮なシチューでも美味しいのだが、長テールブルの私たちの反対側に位置する席に座る初老の白髪交じりな男性がニヤニヤと笑みを浮かべながら食べているもんだから味が少し鈍る感覚がしていた。

「ロリっ娘が三人……、来ますわ!」

「来ねえよ、セシリー」

「ふむ、いやはや、素質の違う三人の可愛らしいお嬢さんをお招きするとはやりますねセシリーさん」

「ふつ、流石次期最高司祭のゼスタ様ですわね。素晴らしい慧眼です」

……流石変態同士、気が合うらしい。

ロリコンの気のあるセシリーさんとはまた違ったベクトルのやばさを感じさせるゼスタさんのソウルがやけに眩しい事もあって相当な実力を持つているようだ。

印象は何をやらかすか分からないやべえおっさんなのだが、次期最高司祭の肩書は伊達では無いのだろう。

……頭のおかしいアクシズ教の幹部となれば、それはもう頭がおかしいのだろうかと疑ってしまうのも仕方無いのだ。

「……うっ、ふう……。ダウン系美少女に懐疑心の籠った視線を向けられると言うのも中々……」

「あはは……、そう言うベクトルかこいつう……」

小さく呟いてから溜息を吐く。ネタだよな、ネタなんだよな??? ネタじゃ無ければ初対面の女子の前で何やらかしてんだこのおっさん。

席を移動する様子は無いのでやらかしてはいないようだが、私の中の好感度はがつつり下がったからな。めぐみんを相手にしていたら手を出していた事だろう。

遠巻きから此方を見やる教徒たちも何やら視線が怪しいし……、はあ、本当にとんでもないところに来てしまったものだ。

「さて、小粋なジョークで場を温めたところでお三方、少し知恵を貸して貰えませんか。そう——このアクシズ教団勧誘実績の右肩下がりの現状に対する打破策を考えて欲しいのですよ」

「はい……、我らアクシズ教徒が日夜勧誘に励んでいるのですが憎きエリス教徒の妨害や警察官の出勤によって捕まるなどの厳しい弾圧を受けているのです」

さも重々しい顔で口にしてはいるがその実言っている事は当然の結果である。

此処アルカンレティアが本拠地だからか、この地ではアクシズ教徒が敬虔なエリス教徒にちよっかいを出す頻度が高いらしく、目の前の変態のようにお縄に付くような事をしでかす教徒も出てきているらしい。

そんな彼らの言い分はただ一つ、つい勧誘が熱くなって、と明らかに崇め奉るべき女神の顔に泥を塗るどころか泥パツクするかの如く言い訳を宣うものだから厄介者扱いされているのだ。

何故それが分からないのか、それはアクシズ教の教えにも原因があるだろう。

「ねえめぐみん。この人たち何で神妙な顔で当然の事を言ってるのかしら」

「……はあ、分からないのですかゆんゆん。頭の螺子が規格違いでもそも嵌ってすらいないのでしょうよ」

そう小声で話す二人の意見は辛辣極まりなかった。

だが、それすらも御馳走様ですと言わんばかりにゼスタさんがびくびくんと身体をビクつかせる光景からしてこいつ無敵かよと思っただけでは無い筈だ。

それにしても勧誘、勧誘ねえ。

「そもそも、アクシズ教ってどんな教義を説いているのですか？」

「ふむ、と、言いますと？」

「いや、広場での勧誘を聞いているとただただ勧誘しているだけで、ど

ういう活動理念を持って、どのような教えを説いているのか、それらが全く伝わってこないから何かやべー奴らぐらいの印象だったんですけど」

「……はえ？ いやいや、そんな……、……え、まさかアクシズ教の教えをお知りでは無い？」

私たち三人の動きが一つになる。噂が先走るところか突つ走っているの、本来どういう宗教なのか影すら踏ませない勢いで分かりやしない。

雷を受けたかのような衝撃的な表情を浮かべたゼスタさんがセシリーさんや他の信徒に目配せし、頷いてから立ち上がった。

「では、お教えいたしましょう！ 我らがアクシズ教は水の女神アクア様を讃え、崇め、愛しむ信徒の集まり！」

「アクシズ教徒はやればできる。できる子たちなのだから、上手くいかなくてもそれはあなたのせいじゃない。上手くいかないのは世間が悪い！」

「自分を抑えて真面目に生きても頑張らないまま生きても明日は何が起こるか分らない。なら、分らない明日の事より、確かな今を楽に行きなさい！」

「汝、何かの事で悩むなら、今を楽しくいきなさい。楽な方へと流されなさい。自分を抑えず、本能のおもむくままに進みなさい！」

「汝、我慢することなかれ。飲みたい気分の方に飲み、食べたい気分の方に食べるがよい。明日もそれが食べられるとは限らないのだから……！」

腕を此方に向け、誘い招くように掌を差し出すアクシズ信徒たち。諦んじられる程に繰り返してきたのであろう力の籠った台詞が飛び交う。

「犯罪でなければ何をやったって良い……！」

「悪魔殺すべし……！」

「魔王しばくべし……！」

何か演じている自分に酔っているのか物騒な事を言い始めたが、人たちは遣り切ったと言う様子で額の汗を拭いて笑顔を此方に向け

た。

ううむ、今のが教義だと言うのなら私はアクシズ教と言うものを見直す必要があるなど感じた。聞いていた感じ、普通に自己啓発セミナー染みたポジティブな内容だった。

と言うか、本当に信教かこれ。ポジティブ系のサークルじゃないのか、大規模な奴の。

この様子ならエリス教も似たような感じなのだろうか。

「……と、言うのがアクシズ教の教義なのですが、伝わりましたかな？」

「え、ええ。それはもう十分に……。因みに戒律とかはあるんですか？」

「無いですよ?」

「……無いんですか?」

「ええ。女神アクア様は仰られました、何事にも縛られない事が自由である! そのため、己を律する窮屈なものは存在しません」

「……ああ、だからこんな無法地帯な感じになってるんですね。良く分かりました。……まあ、教義に犯罪はしないってあるからまだ安心……なのか?」

「さあ……? でも犯罪以外ならって事はグレーな事はするっていう意味合いでは?」

「えっ、だからあんなめちゃくちやな勧誘を? さっきもエリス教徒っぽい人に迷惑かけてたし……」

ゆんゆんの言っていた場面を私たちはまだ見ていないが、この人ならやりかねないなあと思わざるを得ない。

さて、そういうのをひっくるめて勧誘の成功率を上げるためにはどうするかを考えなくちゃならんのか。

「……セミナーや講演はしないんですか?」

「と、言いますと?」

「アクシズ教の教義内容は極めてポジティブな印象を受ける良い内容です。ですが、他ならぬ信徒である貴方達の行為によってその印象を下げてしまっているのは理解していますか?」

「……それは、その……、可愛い女の子のパンツがあつたら欲しくなったりしません？」

「お前さつき教義で犯罪はしないって言って無かったか!? 普通にそれ窃盗罪だからな! まさかと思うが自分の判断で犯罪じゃないからセーフだとか考えてねえだろうな!」

「うわっ、びっくりした……。ねえめぐみん、おんおんつて……」

「ええ……。おんおんは怒っている時や苛々している時は口調が乱暴になるんです」

何となくであるが、アクシズ教と言う集団の根幹と言えるものを理解できてしまった。つまりはこいつら精神的子供の集団な訳だ。

明らかに犯罪な行為は控えるが、悪戯や嫌がらせで済ませられる範疇であれば躊躇い無くやれる精神性を持っているのだろう。

赤ちゃん人間……。もとい、子供人間と言ったところか。なんつー迷惑な集団だ……。

頭の可笑しいアクシズ教と言われる由縁は確かにあつた訳だ。

と言うか、そのせいでアクシズ教が毛嫌いされているだろうと考えても。

「……はあ。アクシズ教の入信者が減っていると言う問題だったよな。原因はお前らだよ。と言うか、お前ら我らが女神アクア様とか言っているけど、その顔に泥を塗っている自覚あんの?」

「え、あの、その……」

「正座しろ」

「は、はい?」

「正座しろって言ったんだ、ガチ説教してやるから、そこに、座れ」
「は、はい……」

そうおずおずしながらゼスタさんもとい、ゼスタたちが床に正座し始めた。

……。なんでこいつらちょっと嬉しそうな顔してるんだ。きもいんだが……。

少しテンションが下がってしまったが、こいつらのためだ、説教せねば……。

「正直に言おう。アクシズ教の教義は実に素晴らしいものだ。実際、教義だけを聞いていれば入信しても良いかなと思えてくるものだ」

その言葉に後ろからは驚愕から漏れる声が、前からは期待に満ちた感嘆が聞こえる。

「だが、昨今のアクシズ教の印象は悪い。それは何故か、アクシズ教徒が秩序を乱す存在だからだ。過激な勧誘、他教徒への嫌がらせ、軽度な性犯罪に加えて軽犯罪のオンパレード。人は秩序から外れた者を異物として認識する生き物だ。道で暴れる者が居れば、それを避けて歩こうとするのは当然の事だ」

アクシズ教徒たちが浮かべていた笑顔が死んでいく。上げて落とす、責める時の定石だ覚えておけ馬鹿者共め……。

「お前たちは自らの行動が女神アクアを貶めている事を理解していない。女神アクアの言葉を曲解し、自分勝手な思うままに行動するお前たちの行動がアクシズ教の品位を下げたんだ。新たな事に挑戦するポジティブなイメージを台無しにし、何をしても反省もせず迷惑だけを生み出すトラブルパニックメイカーでしかない」

「わ、私たちがアクア様の顔に泥を……っ!? それはそれで……」

「嬉しそうにすんな変態め。アクシズ教の印象を下げているのは偏にお前たち信徒の行いが関係しているんだ。規律を作れ。自らを律するための有難い女神アクア様の言葉を参考にしてな」

「で、ですがそれは……」

「人に迷惑をかけない。ただそれだけで良いだろ。自分のやらかした事に対して自分に責任を持ち、その上で教義を実行すれば良い。教義自体は控えめに見ても良い物だ。規律が無いのも縛られなくてもちゃんとできると信頼されての事だろう」

「……っ、つまり、私たちは……」

「そうだ。女神アクアの期待を裏切ったんだ。お前たちはできる子なんだろう、なのに、子供のように自分ルールで自分勝手に好きな事をした。女神アクアの言い付けを守らなかった悪い子だ！」

「「な、なんだってー!?!」」

「お前たちに必要だったのは叱られる事だ！ 自分たちで律せないの

であれば、誰かにして貰えば良い！ 次期最高司祭ってんなら規律を作る事も可能な筈だ！ 最初は自分たちに甘い内容でも良い！ 段階を踏んでしつかり更生しろ悪ガキ共め！」

人差し指でゼスタを示し、正論を突き付けてやる。

こいつらは根っからの子供人間。であれば、怒る事は意味を成さない。

反省を促し、叱ってやる事がこいつらの、そしてアクシズ教のためになるだろう。

……何でそれを部外者である私がやってるんだろうな、現実逃避しなくなってきた。

ゼスタたちを見やれば打ちひしがれた様子で啞然と呆けており、数秒程そのまま沈黙していたが、やがてだばーつと漫画みたいな涙を零し始めた。

「わ、私が間違っていました……。至急議会にこの案件を上げ、規律について話し合おうと思います……。こう見えても次期最高司祭なのですから、これぐらいはできますとも」

正座していたゼスタが立ち上がり、此方に右手を差し出して来た。言っている事がまともなのが非常に違和感を感じるが、まあ、考えを直してくれるならいいか。

差し出された右手に右手を返し、握手をする。

「では、そのためのアドバイザーを外部から招待しようと思いますので、是非お力を貸してくださいねおんおんさん」

「え、っ、お、おま、まさか私を誘致する気かっ!? 勘弁してくれ！」

此処に長居するつもりは無いんだ、明日にでも、いや、今日にでもアクセルに向うつもりなんだから！」

がっちりと掴まれた右手。追い打ちと言わんばかりに左手も添えてきやがったこのおっさん。抜け出そうとするも流石に成人男性の膂力に加えてアークプリースト人生で鍛えられたであろう握力がそれを阻害する。

しかもこいつ近付いて来やがる、鼻息を荒くして近付いてくるな変態中年オヤジ……っ！

「さあ、さあ！　これから末永くアクシズ教にご協力お願いしますよ特別外部顧問おんおんさん！」

「誰が特別外部顧問だ馬鹿者めっ！　ええい近寄るな放せ変態っ！　良いのか、私が参加したら規律は厳しくするからな！」

「構いませんとも！　それはそれで興奮しますから！　何より、年下のバブミ溢れる美少女に『めっ！』されるだなんて私たちアクシズ教徒からすればご褒美！」

「ええ！　しかもロリ系のダウンナー美少女なら尚更需要は高いわ！　おんおんちゃんの事だから私たちの事を心から考えてしつかりとした規律を作ってくれるに違いないわ！」

ゼスタの言葉にセシリーが追従するように言い放つ。

そりやまあ規律は正しくあるべきものだから変なものにするつもりは無い。

無いのだが……、何故それを私がやらねばならんのだ。完全に部外者だぞ私。

「あー……、確かにおんおんはそう言う所ありますもんね。冷たいようですんごい優しい所ありますし……」

「実際めぐみんが元気で居るのもおんおんのおかげなんですよ？　だっていつもおんおんの事を——」

「何を言い出しますかこのぼっちは！　そう言う事は言わない方が格好良いですよ！　だから学園でも浮くんですよゆんゆんは！」

がーんっと口元を押さえられながら意気消沈したゆんゆん。

ふうん、そうなのか。可愛い所あるじやないかめぐみん。少しぐらいは表に出してくれても良いんだぞ？　後で少しそこらへん突っついてみようかな。可愛い姿を見れそうだ。

……はあ、気概が削がれてしまったな。

「……仕方が無いな。見て見ぬふりはできないし……」
アクシズ教の本質は仲良しこよしの子供の遊び場、と言う訳では無い。

この信教の本質は傷の舐め合いだ。

アクシズ教徒は異常者が多いんじゃない、異常者が集まってアクシ

ズ教になつたんだ。

人は異物を排除したがる生き物だ。なら、排除された人は何処に行けば良い？

罵倒され、石を投げられ、行き場を無くした人はどうすれば良い？
戦う事に疲れ、我慢する事に疲れ、生きる事に疲れ、途方に暮れた人たちの集まり。

それがアクシズ教なのだろう。

でなければ、できなかった子を慰め褒めるような教義なんて作られる訳が無い。

成功した人が居れば、失敗した人も居る。その失敗した人たちを救い上げる事こそが、アクシズ教の神髄。……まあ、若干曲解されてはつちやけ過ぎてはいるが、おおよそ間違っていないと思うんだよなこの憶測。

そう考えるとある意味ゼスタたちの行動はおかしなものでは無いんだよな。あらかじめアクシズ教徒だしな、と先入観を作る事で実際にやらかした人物に対してのヘイトを下げているんだから。

あいつはやばい奴、から、アクシズ教の奴だからやばい、に印象が変わる。それだけで本人への精神的な苦痛は減る事だろう。実際、ゼスタがパンツ泥棒をしていても捕まっていけないのはそれが理由だろうし。

そして、そんなアクシズ教を何とかしようとして、彼らの事を考える人が生まれれば、その人はきつと彼らの実態を知って味方になってくれる。……そんな慈悲深い想いが根底にあるとすれば、この信教を作った人物はとんでもない愛の深さを持っている事だろう。

「めぐみん、ゆんゆん。すまないが何日か時間をくれないか。折角だからな、とことん矯正してやろうと思う。本来あるべき姿にな」

「へ？ どういう事？」

「ふつ、まだおこちやまなゆんゆんは分からないようですね。おんおんならば必ずやってくれると思っていました」

「え？ めぐみんは分かるの!？」

「ええ、分かりますとも。何故なら、おんおんは優しくて賢い、私の大

親友ですから！」

いや、絶対に分かってないなこいつ。分かった振りをして気持ちの良い風を浴びたいだけだなこりゃ……。

まあ、既に信教を考えた人のしたかった事の土台は出来ているからそれを整えてやれば良いだけの話だ。つまり、自製の心得を作ってやれば良いのだ。それも、幼い子供に言い聞かせるような文体で。

——汝、否定する事なかれ。誰かの頑張りを、自分の頑張りを否定してはいけません。貴方の頑張りを見守ってくれる人が居ます。その人を大切にしましょう。

と、言ったところだろうか。争いの火種はいつだって否定から始まるのだから。本当ならば人の嫌がる事をしてはいけません的な内容も含めたいのだが、アクシズ教の教義はあくまで自己肯定系。否定する内容は受けが悪い事は間違いないだろう。

「……と、思っていた時期もありましたってな。まさか、こうなるとは……」

数日程ゼスタたちと顔を突き合わせ、説教とお叱りと説法を説いてやった結果、考えていた一文は規律一条として無事アクシズ教に登録された。

そして、その栄光を勝手に讃えられた事で私は名誉外部顧問の肩書を与えられた上に、大々的にビラを撒かれた事で何時の間にかアクシズ教徒の一員として世間から数えられると言う悪夢めいた現状になっていた。

何と言う仕打ちだ。これがお前らの未来を重んじて考えてやった奴への返しか。

いやまあ、彼らからすれば誉れである、つまりは褒めてくれているのだらうけども……。

「何と言うか、お疲れ様です、としか言いようが無いですおんおん」「そうね……、選りによってアクシズ教の次期最高司祭の顧問、つまりは大幹部の顧問役だもんね……」

「……まあ、顧問役として毎月の賃金を約束しているから良いけどな」「そう言う所しっかりしてますよねおんおんって……」

「だって不労所得だぞめぐみん。誰もが羨む不労所得のチャンスがあるなら得るべきだろう」

「それはまあ……、確かに」

「でもアクシズ教よ？」

「ううん……、悩みどころですね……」

「ええい、止めてくれ。もう終わった話だ。それに、表立ってアクシズ教を名乗る必要は無いからな。今まで通りだ。どうせ私は無信教だしな」

大教会での缶詰から解放され、旅館に戻った私はめぐみんたちに迎えられる癒されていた。具体的にはめぐみんを抱き締めながらゆんゆんに膝枕されている。

ああ、ゆんゆんのむっちりした太腿に、抱き心地の良い小柄なめぐみんのやわつこい身体を堪能しているのが気持ちが良い。

「……ふと思ったのですが、おんおんってスキンシップ激しいですよね」

「え？ そうなの？」

「ええ。事ある毎に私を撫でようとしていますし、こうして抱き寄せる事も多いですよ」

「へえ……、愛されてるんだねめぐみん」

「……まあ、否定はしませんが……。実際、私はおんおんが居なかったら木の根を齧る生活を強いられていた事でしょう……」

「えっ？ でも、お昼時間に私のお弁当を事ある毎に強奪してたよね？」

「おんおんにご飯を食べさせて貰っていたのは朝と夜だけです。お昼はゆんゆんから摂取せざるを得なかったんです」

「そのせいで私お夕飯までお腹ぺこぺこなんだけど!？」

お昼は要らないと言っていたのはそれが理由だったのか。別にお弁当を作っても良かったんだがな。そこまで施される必要はありません、と拒否されて少し落ち込んだのがアホみたいだ。

少し悔しいのでぐりぐりとめぐみんの背中に額を擦り付ける。良い匂いするなあめぐみん。いやまあ、石鮫の匂いだって分かるのだ

が、其処に混じる別の匂いに癒しを感じる。

擦ったそうに身を振るめぐみんを逃がすまいとお腹に回した腕に力を籠める。

「うう、むず痒いですおんおん」

「めぐみんの抱き心地が良いのが悪いんだ。ふふふ……」

「まあ、頑張ったおんおんに免じて許してあげますか。……おんおんに抱き締められるのは嫌じゃないですしね」

「んふふ……、めぐみんは可愛いなあ。うちの子にしたい……」

久しぶりにまったりしたりしたからか、込み上げてくる母性が漏れてしまった。まあ、めぐみんも愛情に飢えているのか甘んじて受け止めてくれているから満更でも無いのだろう。

貧困への折り合いが付かなかった幼い頃のめぐみんはゆいゆいさに甘える事は少なかった。めぐみんは良い子だ。だから、ひもじさの恨み辛みを元凶であるひよいぎぶろーさんにぶつけなかったし、それを咎めないゆいゆいさんにも言わなかった。

優しい子だからこそ、その思いを貯め込んでハングリー精神として燃やす事で幼い心を守っていたんだろうな。

幼い頃の私に出会い、一緒に食事をして育んだ友情はいつしか餓えていた家族愛の情に変わっていて、私たちは家族ごっこをして過ごしていたようなものだった。私が母親役で、存分に甘えてくる娘役がめぐみんで。

今思えば共依存的な関係だったんだな。……まあ、それも学園に入った事で生活が一変し、終わりを告げたのだけでも。こうしてスキンシップを取ると根っこに残っている事を何となく感じられる。

「ふわあ……、何だか眠くなってきました……ぐう……」

「あれ、めぐみん寝ちゃったの……？」

「安心してくれるのか、私と一緒にだと寝ちやう事多いんだ。ふふ、可愛い寝顔だ」

くうくうと眠ってしまったためぐみんの頭を撫でる。さらさらとした黒髪は手櫛がよく通り気持ちが良い。なんだか私も眠くなってきたな……。

連日の缶詰の内容はほぼほぼ説教であるため疲れる事が多かった。普通に言っても意味が無いと分かってからは子供に言い聞かせるように何度も繰り返し伝える羽目になったからな。

……何で子供の私が大人を叱っているんだろうな、ほんと、何でだ……。

不労所得を得たからいいか……。まあ、呼び出されたら意見を出しに来なくちゃならないのが面倒な側面もあるが、いずれ『レポート』を取れば格段に楽になるからそれまでの辛抱だな。

いや、取得するまで呼ばれなければ良いのか。でもなあ、アクシズ教だしなあ……。

「……その時はゆんゆんに任せるか」

「何を!？」

「それじゃ、おやすみ……」

「えっ、どういうことなのおんおん？ わ、私は何を託されたの？」

ねえ、すんごい気になるんだけど!? と言うかこの状態で寝ないですよ！

！ 私が寝れないじゃない！」

「すまないゆんゆん……、後を……、頼んだぞ……」

「だから、何をー!？」

その後、ゆんゆんに布団を敷いて貰い、寝床を移して私たちは翌日までぐっすりと眠ったのだった。

温泉入っておくべきだったなあと思いつつ、寝ぼけ眼で布団の中で目を覚ました私は一つ伸びをした。お腹に顔を埋めるようにめぐみんが抱き着いて寝ているため、上半身を上げる事ができないので静かにする。

……観光のための日数をアクシズ教の説教もとい顧問に費やしたので、そろそろ滞在費が寄り合い馬車代を削りかねないのが現実だ。と言うか、お小遣いとして渡した額をそっくりそのまま飲食代などで消し飛ばしたためぐみんのせいでもある。確かに私の都合で日数を費やしたからその補填としてお小遣いを渡した。

無くなったら貰いに来いと言ったのは私だが連日来るとは思うまいて。おねだりするめぐみに負けて渡してしまったのは仕方が無

い、仕方が無いんだ……。

と、言う事で今日辺り寄り合い馬車に乗らないといけない訳だ。

「……た、足りるよな……う？」

おねだりする時のめぐみんが可愛くてついつい多めに渡してしまった気がするので少し不安だ。まあ、もしも足りなかつたら護衛として名乗り出れば良いだろう。

呪術とハンドアックスで前衛中衛をやれる私に、中級魔法だけではあるが後衛をできるゆんゆん。もしも上位のモンスターがでてくれれば切り札である爆裂魔法を放つめぐみんが居る。

……あれ、これ普通に強いパーティだな？

ヒーラーが居ないのが難点だが、エスト瓶で回復できる私が肉盾をすれば問題無い。

ギルドの実績の無い私たちではあるが、最悪私のカードを見せれば良いだろうし。アクシズ教で昼食を取る時の雑談で知ったが、一撃熊は割と上位に近いモンスターとして認識されているらしい。

一撃熊の手で作った鍋が美味いと言う話をしたら、ゼスタたちの表情が凍った時は驚いたものだ。

その名の通り、その鋭い爪と尋常じゃない膂力によって繰り出される一撃は鎧すらも穿つとされている巨大な熊だ。

そのため、本来一人で倒すべきではないモンスターである一撃熊を倒している私はベテラン級の力量を持っている事になる訳だ。

故に、十数体程倒しているこのカードを見せれば十分に信用されるとゼスタたちに太鼓判を押されたので護衛として乗る事も可能だろう。

「……あれ、普通に護衛として乗って、馬車代をケチるのが吉では？」

護衛と言う立場であれば馬車代を払う必要は無く、むしろ依頼されているため依頼料を受け取れる訳だ。無駄にエリスを使うのもアレだしな。

いや、決して財布の軽さに戦慄している訳では無い。足りない訳じゃないんだ、本当だぞ……。ちよつとだけ足り無さそうなんだよなあ……。

まあ、朝食を終えたら旅立ちを提案しよう。めぐみんたちもそろそろアクセルに行きたいだろうしな。観光に来たいならまたくれば良いし。

5話

行商人との交渉によりアクセル行きの荷馬車に護衛として雇われる事を勝ち取った私は満足げに笑みを浮かべていた。アクセルへの道のりはゆんゆんの聞いた通り二日ほどで、此れと言つて障害らしい難敵は居ないとの事だった。

そのため、内訳がアークソーサラーにアークウイザードと言う私たちは過剰戦力気味らしく、私のカードの履歴を見せた事で更に苦笑されたのは言うまでもない。

けれど、旅に困難は付き物と言う事で念には念を入れたいと言うのが行商人のお兄さんことカルグさんの本音らしく、最終的に一人頭五万エリスを依頼金とし、それ以上は出来高制でどうかと言う案に私は頷いたのだった。

乗り合い馬車代がケチれるのと冒険者としては駆け出しである私たちにそこまでの価値があるかと言う点が大きい。

正直、パーティとしては仮組であるし、連携して戦った経験も無い訳で。

なので、今回は経験を積む事を念頭に置いて冒険者としてステップアップする事が目的になる。

その旨を二人に伝えると否定意見も無くすんなり通つたので、カルグさんに挨拶をしてから荷馬車の後方の空きスペースにお邪魔する。

アルカンレティア周辺で取れる野菜は水が良いからか美味しくて栄養価が高いらしく、暴れ出す事を考慮して既に加工済みの商品が主になっているとの事だった。

そのため、近くのタルからは塩気のある匂いがしており、中にはきつと塩漬けにされた野菜の漬物が入っているんだろうなあと感じさせるものがある。

思い思いに座り込んだ私たちの準備が出来た事で前に合図を送ると、馬の嘶きと共に荷馬車が進み始めて多少揺れ始めた。

「……と言うかですね、基本的におんおんの指針は現実的かつ無難と言う安定を取りに行くスタイルなので否定する余地が無いんですよ。

依頼金が少ない事に腹を立てようとも正論で殴り返されるのがオチでしょうしね」

「確かに、おんおんってそつなくこなすイメージあるわよね。でも、何処からそんな知識を得たの？ 学園にも二日しか在籍してないし、基本森の小屋に住んでるって話だし」

「んー……、そうだなあ。何て言えば納得してくれる？」

「初っ端から説明する気無し!? 本当にいったい何処から仕入れた知識なの!？」

「まあまあゆんゆん。おんおんの秘密主義は今に始まった話では無いですから、ミステリアスな頼れる幼馴染として接するのが良いと思いますよ私は」

「めぐみんですら諦めてる!? あの知らない事を根掘り葉掘り聞いてくるめぐみんが!？」

「そうなのか？ それにしてはそういった素振りは見えなかったが」

「ああ、単純にゆんゆんを揶揄うために質問責めにしたりしてるだけですから、おんおんの前で見せた事無いですよ」

「がーん……、めぐみんに頼られて結構嬉しかったのに……、そんな理由だったの……」

露骨に肩を落とし、落ち込むゆんゆん。そんな様子に罪悪感が生まれたのかバツが悪そうな顔でめぐみんが視線を逸らす。

……まあ、いじめっ子の正体が好きな子にちよっかいかける悪戯小僧だった、と言う訳なのだろう。ゆんゆんとのめぐみんの普段の距離感はそんな感じらしい。

微笑ましいものを見たと思わずほっこりとして口元が緩んでしまふ。

「ふふふつ、めぐみんも私の知らない間に成長していたみたいだな。少し、悪戯ツ気が強いみたいだが」

「べ、別にかまってちゃんなゆんゆんで暇を潰すための方便ですし……、ああもうそんな暖かい視線を向けなくてくださいー!」

「安心しろゆんゆん。めぐみんは君で遊んでいると意地張っているようだが、ちゃんと友人として見ているよ」

「ふえ、そ、そうなのめぐみん……?」

「うっ、そ、それはその……」

実際凶星なのだろう。羞恥で頬を赤らめためぐみんがそっぽ向くが、期待の視線を込めたゆんゆんが見つめているため根負けしたのか小さく頷いた。

喜色に顔を染めたゆんゆんが満面の笑みを浮かべ、嬉しそうに小躍りし始めた。まったく、可愛らしい子たちだなあと私の頬も緩む。

「……嫌いな奴と学園生活を送る訳無いでしょう、そういう察せないところがゆんゆんの悪いところですよ」

「うん! ごめんねめぐみん!」

「ええい、うっとおしいです! 抱き着いて来るんじゃないですよ!」

「じゃあ、私も混ざろうか」

「ふにゃあ!?! 何でおんおんも抱き着いて来るんですか! つ、潰れる! 潰れます!」

感極まったのかスキンシップを取りに行つたゆんゆんが持ち前のどんくさを発揮し、見事につんのめり、めぐみに抱き着いたのでそれに乗じるように私も抱き着いて二人を抱き締めてやった。

和気藹々な姦しい遣り取りも十数分もすれば飽きてくるもので、お互いに冷静になり壁に背を預けて各々座り込んだ。

乗り合い馬車と違って屋根の無い荷馬車は窓席を奪い合う事無く景色を一望できるため、段々と小さくなっていくアルカンレティアを三人で見つめていた。

「さて、仕事をしますかねっつと」

一応護衛として乗っているの、外の景色に目を奪われている二人を残して私だけ前の方の荷積みのタルの上に座り直す。後方はめぐみんたちが見てくれるので、私は前方左右を見ておくとしよう。

カルグさんは意外とちやつかりしているのか、大規模な乗り合い馬車が薄っすら前に見えるタイミングで出発しているので露払いを彼ら彼女に任せて悠々と荷馬車を進めているようだった。

前方に見えるのは隊商であり、あえて人が座れるスペースを作つて商品を積む事で乗り合い馬車としても機能するように工夫している

らしい。人を多くする事で野盗やモンスターの被害を抑えられる他、搭乗代も取れると言う一石数鳥のシステムとの事だった。

個人運営の行商人であるカルグさんのような人たちはこういった大隊に紛れ込む事はせず、薄っすらと見えるくらいの距離を保って難癖を付けられないようにこつそりと追従するのが処世術なんだそうだ。

「実際、俺みたいな一般農村から飛び出して来た奴にはこのやり方が一番得するんだ。勿論、前の隊商が何かしらのトラブルに巻き込まれてたら可能な限り手助けしてやるのは当然の事だぜ。そこらへんの義理はしつかりしねえと難癖付けられて商いができなくなっちゃうからな」

「へえ、何事も無ければそれでよし、って事ですか」

「そうともさ。安全安心が第一つてな。あつちの速度に合わせなきやならんから歩みは遅いが、安全に行商できる事の方が大切だ。それを踏まえて俺は保存食を中心に買い揃えている訳よ。アクセルだと携帯食料として保存食は需要が高いから安定するしな」

「成程ねえ。存外強かだねお兄さん」

「はっはっは！ それはお互い様だぜお嬢ちゃん。乗り合い馬車じゃなくこんな小さな行商人の護衛なんざ頼み込むお嬢ちゃんには負けらあ」

此方に振り返って人の好い笑みを返すカルグさんにこつちも笑みを返しておく。

こういうちよつとしたコネを作っておくと後々便利になるのが冒険者の生活と言うものだ。二日もあるんだし、彼の性格を知るためにも雑談はしておくに限るしな。

「ふふふ、そうかもね。でも、可愛い子が三人も居るんだから役得でしょ？」

「そりやあちげえねえ！ 一人寂しくとろとろと道進むよりか遥かにマシだぜ。それに、アークソーサラーだなんて聞いた事の無い上級職のお嬢ちゃんが居るんだ、役得が過ぎるぜ」

「ふうん、やつぱりレアなのかね、アークソーサラーって」

「じゃねえのか？ 今日日聞いた事ねえぜ。しかもお嬢ちゃん紅魔族

の子だろ？ 紅魔族って言ったら大概アークウィザードって話じゃねえか。つまりは突然変異か先祖返りかで、優秀な遺伝子が仕事したんじゃないかねと俺は思ってるぜ」

勇者候補として別世界から転生しましたとは言えないので、曖昧に笑っておく。

明らかに外見が日本人の手が入っているのは間違い無いので、過去にそういう特典を持って紅魔族と交わった人が居るかもだし、案外良い線いっている説かもしれないな。

「成程ねえ。そんな優秀な護衛が付いているんだから安心してくれて良いよお兄さん」

「……一撃熊を一人で倒す嬢ちゃんが居りや安泰だったの。聞く話だと中位の冒険者グループが辛勝するって強さらしいじゃねえか。その歳で十四匹も狩れるんだ、こっちとしてもすんげえ安心できるぜ。しかも仕事熱心なのか、こうして見張りもちゃんとこなしてくれてるしな。いやほんと、そこらの冒険者よりもしっかり冒険者してるぜお嬢ちゃん」

「ふふふ、お褒めの言葉どうも。こっちも路銀が尽きそうだったから渡りに船だったんだ」

「そうなのか？ お嬢ちゃんの実力なら依頼は数多だと思っただが……」

「ギルドでの実績が無いから依頼を受けられなかったと言うオチなんだよね」

「ああ……、そーいやアルカンレティアは実績主義なところあるよな。地理的に仕方が無いってのは分かるが……」

アルカンレティアに住まうアクシズ教の印象が強いが、良い水と言っているのは何も人だけではなくモンスターたちにも恩恵を与えている存在である。

良い水を吸って成長した野菜などをモンスターが摂取すれば経験値を得る事になり、平均的なレベルが上がるのは当然の摂理と言う事だ。

そのため、比較的アルカンレティアの周辺には強いモンスターが生

息する地帯となるので、冒険者の死亡率などからギルドが実績主義を掲げるのも仕方が無いのだろう。

近くにアクセルがあるのだから駆け出しはそちらに行けば良い話だしな。

カルグさんと雑談をしつつ特段異常の無い道を進んで行く。前の隊商がお昼休憩を取り始め、私たちもアクセルまで続く何にもない草原に荷馬車を止める事になった。

「では、お昼ご飯を作りましょうか。『アースウォール』」

土壁を作り出す初級魔法の『アースウォール』を使って少し隆起させた場所に即席コンロを拵え、ソウルに格納していた調理器具一式と食材と調味料を取り出す。

鉄鍋に『クリエイトウォーター』で水を入れて乾物の野菜と暴れ猪の肉を投入し、薪に『ティンダー』で火を付け煮込んでいく。

岩塩で味を調べ、木製の深皿によそつてめぐみんたちに手渡している。

始めは何処から取り出した器具に驚いていた様子だったが、手慣れた私の調理風景を見つめるようになり、手渡された乾物スープを受け取ってぼかんとした表情を浮かべていた。

もつとも、私の普段を知るめぐみんだけがそれに当てはまらず、嬉しそうな顔でスープを受け取り食事を始めていた。

「いただきますー！」

「色々と気になるところはあるが、まあ、いいか。すまねえな、こっちは塩パンを出させて貰うぜ。足しにしてくれ」

「いえいえ、ありがとうございます。ほら、めぐみんたちもお礼を」
「ありがとうございます！ ううん、塩気のあるパンにおんおんのスープが合いますねえ！」

「あ、ありがとうございます……。おんおんって料理できたんだね。それも凄い手慣れてるし……」

「二人暮らしが長いからな。それに、めぐみんの朝と夜の食事は私が作っていたんだぞ？」

「そういえばそうだったね……。って、こんなに美味しいのを食べてた

のに私のお弁当を奪ってたのめぐみん!？」

「腹が減っては何とやらです」

「はっはっは！　こりゃあうめえや。長年乾物とかを取り扱ったが、野菜を干した乾物ってのは初めてだ。結構イケる味になるんだな」

「野菜は天日干ししてあげると栄養と味を濃縮できるんですよ。だからこうして煮込むだけで美味しいスープになるのでお手軽ですよ」

「へえ……、これだけで新しい商売になりそうだ。もし繁盛したらアクセルにも卸すからそんなときや頼むよ」

「ええ、物が良ければ大量に買い付けるのでお安くしてくださいね?」

実際、作る手間はあれど干し野菜はかなり美味しい。元の野菜がこの世界は美味しいので尚更にだろう。それに乾物状態の野菜は動かないので貯蔵に向く商品として良い分類になる事間違いないだろう。

「はっはっは！　良いアイデアをくれたお嬢ちゃんには特別価格で卸させて貰うさ。今後もご贖員につてな」

「ふふふ、因みにキノコとかも干すと旨味が強くなってお勧めですよ」
「へえ、そりゃ良い事を聞いたぜ。実家がキノコ栽培を生業にしているから帰ったら教えてやらなきやだな」

無論キノコも動くので大変美味だ。キノコの乾物も今後手に入るとなると料理の選択肢も増えるから嬉しい限りだな。

そんな主婦目線で会話しているとめぐみんとゆんゆんからの視線を感じた。そちらを見やれば目をぱちくりしており、想定外と言った様子の表情を浮かべていた。

「……ず、随分と仲が良くなっただすねおんおん」

「ん? ……ああ、なんだ妬いてるのかめぐみん。安心しろ。カルグさんは既婚者の方だ。商売相手としては良い関係になるかもしれないが、男女の関係にはならんよ」

「はっはっは！　そういうことだ！　こんな男だが好いてくれた幼馴染が居てくれてな。乾物の方は家内に任せる腹積もりな訳だ。是非、紹介するから都合が良い日にでも会ってくれ」

「ええ、是非に。幾つか助言ができると思いますので楽しみにしておきますね」

「お、大人だ……。私たちと歳が変わらないのにすごい大人してる……」

「……ふう、おんおんを取られるかと思いました。ほっとしたらお腹が空いたのでおかわりお願いします」

「はいはい。たんとお食べ」

具を多めによそってやりめぐみに手渡す。

いつもの可愛らしい満面の笑みで食べ始めたのを見届けてから私も食事を再開する。

正直な話、男性としての意識の強い私が男性と良い仲になる事は無いだろう。そもそも身体を触らせようとも思えないし、キスをするだなんて以ての外である。

そもそもの話、不死人である私に生殖機能がちゃんと機能しているかどうか怪しい。今はまだ成長しているから生理が生じているが、全盛期の身体になったら成長が止まるだろうし恐らく生理も止まるだろう。

別にこの世界のはじまりの火が弱まった訳ではないのでこの身は火の無い灰では無いが、特典を貰う際にダークソウル3のと言ってしまった事もあってその性質の一部を受け継いでいるのが我が身の正体だ。

人間性を持ち得る火の無い灰もどきと言うべきか、私と言う名の人間性の火が尽きた瞬間に真に火の無い灰となる定めを受けているよなものだ。

つまり、自意識を確立している間に死ねば亡者に近付き、人間性を手放してから死ぬと火の無い灰として再誕すると言えば分かりやすいだろうか。

真に火の無い灰となった私の自意識がどうなるかは未知数であるが、きつとソウルを求めて輝きを殺し続ける存在に成り果てる可能性が非常に高い。

それこそ新たな魔王のような存在に成り果てる事だろう。殺しても死なない悍ましい亡者の王として篡奪の限りを尽くすに違いない。

……なんてな。流石に憶測と言うか妄想に近い考えでしかない。

「我ながら業が深過ぎるな……」

そうならないようにこの人間性を大切に抱えながら生きなければならぬ。

そのためにもそもそも死ぬ事を忌避するべきだと考えた当初の私は里の周りの獣狩りを始めたのだ。紅魔の里周辺のモンスタは非常に手強く、それこそ上級魔法によって漸く打倒できると言う立地が出来上がっている。

そんな場所で地力を上げれば自然と力が付くと考えた幼い私は弓を握ったのだ。今や呪術師として活動しているが、弓を握れば弓術士としても活動する事ができるくらいの実力を持っている。

何せ、一撃熊を初めて狩った時の武器は弓なのだから、むしろ単純な技量としては弓の方が軍配が上がるのではなからうか。

どうせ死んでも生き返れるしな、と言う背景が私にトライアル&エラーの精神を与えたのだろうなあ。実際、エスト瓶で大概の大怪我は回復できるし。

「あ、食器は洗っちゃうので食べ終わったら此方に」

「すまねえな。しかし、初級魔法って奴だろそれ。随分と便利なもんなんだな」

「戦闘に使う事はほぼ無い魔法ですけどね。ゆんゆんもこうして旅路に出るのなら取っておいて損は無いぞ。『ティンダー』と『クリエイトウォーター』はおすすめた。火打石や水筒要らずだからな。どうせ紅魔族の私たちならこの程度の魔力消費は誤差だしな」

「へえ……、そうなんだ。丁度スキルポイント余ってるから初級魔法取っておこうかな……ってえ、あぶなっ!! 止めてよめぐみん! 今指を横から押そうとしたでしょ!」

「ゆんゆんがおんおんからおすすめスキルを取ろうとしていたので、私も爆裂魔法をおすすめるので取らせようかな、と」

「勘弁してよ!?! 流石にポイント足りないわよ!」

私たち紅魔族は多量のスキルポイントを持って産まれるが、其処に加えて成績優秀者であったためめぐみがスキルアップポーションを飲んで漸く手に入る魔法となると相当量が必要になる事だろう。

スキルや魔法を覚える時は自身のカードをポチポチつとすることで押し間違いは意外と多いらしい。今の様に横合いから押されて違うのを取ってしまい、喧嘩になるだなんて事もあったりするので取得する際には場所を選ぶと良いとされている。

そんなこんなでゆったりとお昼を満喫した私たちは、前の隊商が動き出したのを機に再び荷馬車へと戻った。

お腹が膨れたのかうつらと舟をこぎ始めている後ろの二人を微笑ましく思いつつ、一応の警戒を辺りにしていると何やら前の隊商が止まっているようだった。

「どうしたんでしょうか」

「んー、ここらで考えられるとしたらジャイアント・アースウォームだろうな」

「どんなモンスターなんですか？」

「畑や土の中のようによしてるピンク色の細長い居るだろ？」

あれが幼体で成長すると数メートル級の大きくなるんだ」

「……つまり、巨大ミミズという事ですか」

「ま、そうなるな。脅威度はあんまり無いんだがその見た目のせいで女性冒険者からは毛嫌いされてるモンスターとして有名だ。土の悪いものを食べてくれるってんで農家にはありがたいモンスターではあるんだがな」

「はあ……、一応手伝いに行った方が良いですかね？」

「いんや、あれぐらいなら大丈夫だ。ハウンドドッグの群れとか死人が出かねないのは助けに行っただ方が良いけどよ」

「そうですか……。うわあ、確かになんかによろしてる……」

遠目で道路脇からくねっているピンク色の物体が見える。

剣などであっさりと倒されているが数が多いのか立ち往生が長い。前の積み荷に巨大ミミズの好きなものでもあったのだろうか。

「……時間掛かりそうなので手伝ってきますね」

「おう、分かった。確かにちつとばかし量が異常だな。普通数匹ぐらいしか飛び出してこないんだがなあ」

「めぐみん！ ゆんゆん！ 私は前に加勢に行くから万が一こつちが

襲われたら守ってあげて！」

そう後ろに声を掛けてから前の隊商へと走って行く。到着してみれば前の方が大量に沸いているらしく、護衛らしき冒険者たちもてこずっているようだった。

「助太刀します！ 『炎の嵐』！」

一声掛けてから右手に呪術の炎を灯し、魔力を込めて地面へと解き放つ。私の周囲に居た巨大ミミズが根元から噴出した炎の柱によってこんがり焼かれていく。

駆け寄りながら『薙ぎ払う炎』を詠唱し、鞭状にしまった炎の束が攻めあぐねていた一団の前に居た巨大ミミズの胴を焼き払う。一度、二度と振るい、纏まった数のミミズを炭に変えていく。

片側の巨大ミミズを討伐できた事で冒険者側が優勢となり、反対側の方はあつと言う間に狩り切られて殲滅する事ができた。

「いやあ、助かったよ！ それにしても凄かったがアークウイザードの方がいい？」

「いえ、アークソーサラーをしている者です。違う荷馬車の護衛についていましたが、此方の隊商が襲われていたので助太刀に参った次第です」

「ああ、そうだったのか。態々助けに来てくれてありがとう。近年稀に見る異常発生だったからな、君が居なければ馬車を食い破られてたかもしれないからね」

「お姉さん！ ありがとうー！」

乗り合い馬車に乗っていたのであろう少女が私に向って手を振ってくれていた。

それに手を振り返しながら、私はカルグさんの馬車へと戻って行った。お礼はそこそこにギヴ&テイクな関係のため長居しても面倒しか無いだろうしな。

戻ってみれば此方も襲われたのか巨大ミミズが数匹道端に転がっていた。焼き焦げた跡があるのでゆんゆんが撃退したのだろう。めぐみんの爆裂魔法だと塵すら残らないだろうし。

「ただいま戻りました。近年稀に見る異常発生だったみたいですね」

「おお、おかえり。遠目ながら活躍を見てたぜ。君らを雇って正解だったみたいだな」

「いえいえ、それ程でも……で、めぐみんたちは大丈夫だった？」

「ええ、私の魔法を使うまでもありませんでしたよ」

「私が！ 凄い頑張ったんだけど!?!」

「あはは……、お疲れ様ゆんゆん。めぐみんを守ってくれてありがとうね」

ゆんゆんに労いの言葉をかけるとえへへとはにかみながら頷きを返してくれた。

どうやら活躍する事が出来てご満悦らしい。聞く話によればゆんゆんは目立ちたがらない性格のため、実習でも控え目な評価しか貰えていなかったらしい。

そのため、こうして実際に巨大ミミズから荷馬車を守った事で少しだけ自信を付けたようだった。

「よし、前も進んだし俺たちも出発だ、乗ってくれ」

モンスターとの戦闘の後は剥ぎ取り等を最低限してさっさと出発するのが定石らしい。

と言うのもモンスターの死骸に他のモンスターが食事しようと集まる可能性があるそうだった。

それからは何事も無く道のりは進み、予定していた野営ポイントで野宿をする事になった。馬を荷馬車から外してやり、木の杭にロープを縛り付け半ば自由にさせて休憩させながら、私たちも見張りをしつつ夕飯の準備をし始めた。

「ふむ、ではゆんゆんの頑張りを讃えるために塊肉でも焼こうかね」
ソウルから暴れ猪の肉塊を取り出し、人数分にカットして鉄板で豪勢に焼いていく。

その分厚さから三人の視線はステーキに釘付けのようで、誰も見張りをしていなくて苦笑してしまった。シンプルに塩で味付けしたそれを平たい木皿に移していき、乾物野菜スープを深皿によそって配膳していく。

いただきますの合図の直後に一心不乱に食べ始める三人を見て思

わず笑みが浮かんでしまった。まあ厚さ二センチはあろう塊ステーキだからな、無理も無いだろう。

私とて食べ飽きてなければ同じように食べていたに違いない。まだソウルに二スタックもあるのでじゃんじゃん食べるの良い。

「ふう……、久々に食べましたがやはり暴れ猪の肉は美味しいですね……」

「あ、これ暴れ猪のお肉だったんだ。初めて食べたかも」

「何言ってるんですか、お昼にも食べたでしょうに」

「あれもそうだったの？ それにしてもおんおんって料理上手なんだね。凄く美味しかった」

「ああ、この腕前なら普通に店を開けるレベルだぜお嬢ちゃん。もし開くとしたら是非食材を卸させてくれ、安くしとくぜ」

「あはは……。まあ、冬とかやる事が無くなった時だけするのも良いかも知れないな」

「その時はお手伝いしてあげますよ」

「めぐみんが？ なら、私も一緒に……」

「ふふふ、そうだね、それも良いな。その時は鉄板屋でも開こうか」

そんな他愛のない雑談をしながら談笑していく。

隊商の護衛をしているらしい冒険者らしき人が遠くから態々こっちの近くまで見張りに来てくれるようになって、視線が合うと親指を立ててサムズアップをしてくるのでそれにこっそりと返す。

巨大ミミズ討伐の恩恵と言うべきか、此方が少女三人である事を加味してのお節介だろうか。優しい人たちが居てくれて良かったと素直に思う。一応寝ずの番として起きているつもりではあるが、ああして警戒をしてくれる人が居ると心強い限りだ。

寝袋を敷いて寝てしまった三人の寝息を聞きながら辺りの警戒を続けていく。時折、暇潰しにか此方に冒険者の人たちが遊びに来て雑談をする事もあったが、特段何も無く夜を過ごしたのだった。

「……それじゃ、少し仮眠を取るからその間護衛を宜しくね」

「任せてください！ 最強魔法である爆裂魔法を操りし私がついてます！」

「あ、おんおん夜の見張りありがとう。安心して寝ててね、私も頑張るから！」

朝食を軽く済ませた後、荷台の余ったスペースに寝転がり、寝袋を枕に仮眠を取る。このまま何事も無くアクセルに着けば良いんだけどなあ。

けどまあ、初めての冒険でもあるのだし、ある程度の傾斜くらいのは何かはあっても良いかもしれない。そっちの方が刺激的で楽しいだろうしね。

ちよむすけを抱き枕のようにしながらその温かさに身を任せて意識を飛ばしていく。

アクセルについたら何をしようか、そう微睡みながら考えていくと段々と睡魔によつて瞼が落ちていく。

取り敢えず、三人でシェアできる賃貸の部屋でも借りるか。経験のためにパーティはあえて組まないが夜とかぐらいだったら一緒に居ても問題は無いだろう。

そして、その日にあつた事を教えて、貰おう……、かな……。

6話

「おんおん！ 起きてくださいおんおん！ 襲撃です！ ゴブリンの群れです！」

そんなとんでもない内容が起きたての私の耳に飛び込み、即座に上半身を起こして辺りを見回す。見やれば先陣を切る形となる隊商の方に緑色の小さい何かが蠢いているのが見える。

めぐみんの叫び声が正しいのであれば、あれがゴブリンなのだろう。

知性は低いもののその生命力はしぶとく、他種族の女の胎を使って同胞を増やす糞畜生の代名詞たるゴブリンは群れを成す事で低質を補うとされている。

「……起きた。ゆんゆん、めぐみんと一緒に待機。カルグさんを守れ。私は遊撃として打って出る」

中級魔法の使えるゆんゆんが居れば荷馬車を守る事は何とかなるだろう。

だが、それは前の隊商が全滅しない事が前提だ。あの量が此方に向えばどうしようもない。流星にゴブリン共の孕み袋になる気は無いので始末せねば。

寝起きでやや機嫌が悪い事もあって睨むようにゴブリンを見やり、ソウルからハンドアックスを取り出してから荷馬車から飛び降りる。

ゴブリンの武器に毒などが使われていたら面倒だ。左手に獣の皮を重ねて作った獣革盾を装備し、隊商の方へ駆け寄る。

近寄って来たゴブリンを袈裟切りに叩き切り、追い込まれている冒険者たちを攻めているゴブリンの裏を取るようにルートを取る。

後ろの方で粗末な弓を握っているゴブリンを見かけたので、アックスを地面に落として弓をソウルから取り出して速射する。この程度の距離であれば顔を狙う事は容易い。

「一つ、二つ、三つ……、草原だから見やすくて助かるな」

遮蔽物の無い草原であるからこそ俯瞰して戦場を見れる。脅威となる弓兵を殺せた事で冒険者の前衛への圧が減り、目の前の相手に集

中ができるようになった。

一応杖らしきものを持ったゴブリンが居ないか見渡してみれば、一塊になつている所の後方で頭蓋骨で飾り付けた悪趣味な杖を振るうそれっぽいのが居た。

「……距離はそこそこだが……、まあ、当たるだろ」

気持ち強めに弦を引き、頭では無く胴を狙うようにして射ると少し逸れて腰辺りに着弾した。メイジゴブリンは突然の痛みに呻き声を上げ、血走つた瞳で辺りを見渡し私を視認する。

勢い任せに矢を引き抜いたメイジゴブリンが此方に向おうと走つて来るが、横合いから魔術師が放つた『ファイアーボール』が着弾して上半身を焼かれ絶命した。

前衛にとつて致命的な一撃を放つメイジゴブリンが倒れた事で前線は完全に優勢と化し、瓦解したゴブリンの群れを追い詰める掃討戦へと移行した。

荷馬車の方を見やるがはぐれたゴブリンが向かつている様子は無いので、此度の戦闘は此方の勝利と言つて良いだろう。

「……ふう、何とかなつたな。にしても、巨大ミミズと言ひゴブリンの群れと言ひ、隊商の規模を見て襲ひ掛かつて来るものか……？」

『カースド・ライトニング』!!」

「なつ、あぶなつ！」

上空から聞こえて来た声を見やれば、此方に向けて手をやるあの時の女悪魔が雷撃を放つていた。咄嗟にハンドアックスを蹴り上げ、避雷針として一撃を躲す。

どうやらあの女悪魔が裏でモンスターたちを煽動していたのだろう。

「ちつ、勘の良い餓鬼だね。ウォルバク様を頭に乗せながら戦うだなんてふざけた真似をしやがつてからに！ 今日こそ渡してもらおうよ！」

「ウォルバク？ ……まさかと思うがちよむすけの事を言っているのか？」

「誰がそんなふざけた名前を呼ぶものか！ さあ、ウォルバク様を此

方に寄越しな！ というか既に代金は払ってるんだからしつかり渡すのが筋つてもんだらう!？」

「知らん。そもそも悪魔風情が道理を語るなよ、経験値として——ソウルを置いてけ」

落ちて来たハンドアックスを受け止め、獣革盾を構えて臨戦態勢を取る。自由に空を飛ばれると厄介だな。ハンドアックスをソウルに変換し、捻じ狂った長柄の杖を取り出す。

イザリスの杖を模したなんちゃって超長杖である。二メートル程の長さがあるこれならば闇術の展開も合わせてワンチャン当たる可能性が出てくる。

業を煮やした女悪魔が再び雷撃の一閃を放つ。方向が分かっている魔法なんて攻略も容易いものだ、獣革盾を斜めに構えて受け流すように弾く。

自然的な雷撃であれば私も死を覚悟するが、魔力の塊である魔法であればある程度の魔力耐性を持つ事で無力化できる。私の血を振りかけて作成してある獣革盾であれば持ち堪えられるッ！

二度も上級魔法を防がれた女悪魔は驚愕を表情に浮かべて舌打ちし、魔術師系統が苦手とする接近戦を仕掛けるべく五指の鋭い爪を此方に向けて飛び込んで来た。

「死に晒せ糞餓鬼いッ!!」

「飛んで火にいる何とやらってなあ！ 『闇の刃』!!」

超長杖を縦に構え、先端から人間性の闇を纏った刃を発生させ、三メートル程のリーチになったそれを渾身の力で振り下ろす。

女悪魔は咄嗟に両手を交差させて『闇の刃』を防ぐ。切れ味は刃が勝るが、それを押し返そうとする膂力は彼方に軍配が上がるため、冷や汗が頬を流れる。

押し切られ——瞬間、アクセルの方角からとてつもない神々しい光の柱が迸った。

悍ましい程の超魔力の波動に戦いを忘れて二人で其方を見やる。

『闇の刃』の展開時間が越え、ただの長い杖に戻った事もあり女悪魔が踏躡を踏んだ。

その好機を逃す私では無いッ!!

「しまっ——」

「この距離ならバリアは張れないなっ! 『大発火』!!」

力強く地面を蹴り、呐喊するように突き出した右手から呪術の炎を灯し、魔力を出し切るように『大発火』を発動させ爆炎を生じさせる。

面での攻撃である爆炎を防ぐ術も無く、超至近距離でモロに食らった女悪魔は勢い良く吹き飛ばされ草原を転がっていく。

「めぐみんっ! ゆんゆんっ!」

「やつちやえめぐみんっ! 『ストーンバインド』!」

「任せてくださいッ! 既に詠唱は済んでいます! 『エキスプロージョン』——ッ!!」

此方の様子を覗っていたためめぐみんが隙を逃さず、爆裂魔法を発動させる。逃げ出そうとした女悪魔だったが、ゆんゆんの『ストーンバインド』による石の檻に閉じ込められ逃げ場を潰された。

魔法陣が虚空に迸り、先程の超魔力の波動に迫る程の魔力が女悪魔に収束して爆裂を生じさせた。

一瞬、世界が止まったかのように音が消え去り、直後凄まじい轟音と風が巻き起こった。

女悪魔の居た場所は深いクレーターが出来ており、生じた熱で土が一部結晶化する程の光景が爆裂魔法の高威力を物語っていた。

「……けほっ、流星は上級魔法の爆裂魔法だな。此処までの威力があるろうとは……」

「おんおん! 大丈夫ですか!? 怪我してないですか!? 何処も異常無しですか!」

「わぷっ、お、落ち着けめぐみん。見ての通り私は無事だ。と言うか怪我してたら抱き着いたら駄目だぞ。絶対凄く痛いからな?」

「だって、二度も雷撃を受けてたじゃないですか!」

「二度目はアックスにぶつけて、二度目は盾で受け切ったから直撃してないから。ほら、ちゃんと生きてるだろ」

わーわーぎやーぎやーと涙目で騒ぐめぐみんを胸元に抱き抱えてやる。心臓の鼓動がしつかり動いているのを理解してか段々と腕の

中の力が抜けていく。

「そ、そうでした……。私今身体、魔力すっからかんで、動かないんです……。」

「……ふふふ、それだけ私を心配してくれたんだろう。嬉しい限りだよめぐみん。君にも怪我が無くて良かったよ」

火事場の馬鹿力辺りでも発揮したのか、私に抱き着いてからぐったりとしてしまったためめぐみんを抱き締める。一番美味しい所を持ってかれたとは言うまいよ。

上級魔法を扱えるとなると上級悪魔の類だったのだろうし、私の火力で仕留め切れたか分からない。と言うか『闇の刃』を受け止められたのが素直にショックだ。

ちゃんと理力と信仰を上げている筈なんだがなあと思っていると、おずおずと言った様子でゆんゆんが近寄って来ていた。

「ゆんゆんもお疲れ様。素晴らしいタイミングで拘束してくれたね」

「ううん、私の頑張りなんて些細なものだし……」

「まったくもう……」

「わわっ、お、おんおん？」

もじもじと自信無さげに俯くゆんゆんを引つ張り抱き締める。

私としては二人が無傷で居てくれた事が何よりも嬉しいのだから。

「ゆんゆんの拘束が無ければあの女悪魔を逃がしてたかもしれないんだ。やるべき所でしつかりと仕事したんだ。それだけは自分を褒めてあげなよ」

「……うん。なんだか、おんおんってお母さんみたいだね……」

「あはは……。ま、今は甘んじて受け止めてあげるよ」

まるで双子のように私の胸に抱き着く二人を微笑ましく見守る。

暫く抱き着いたままだったが、カルグさんを初めとして冒険者の皆々が集まり始めたので二人を解放する。

もつとも、めぐみんは急性魔力欠乏症に掛かっているのです、ソウルから取り出した魔力を込めたマナタイトの欠片を握らせて充填させつつ、肩を貸してやる。

「まさか上位の悪魔が出てくるとは思わなかったが、君たち三人が居

てくれて本当に良かった！」

「そうだな。そっちの長杖の子は厄介なゴブリンを始末して援護もしてくれたし、本当に助かったよ」

「君たちの名前を教えてくださいませんか？ 恩人の名前を知っておきたいさ」

そんな前振りをされてしまえば止まらない娘が居るんだが……。

多少回復したのか産まれ立ての小鹿のように、足をがくがくさせながら立ち上がろうとしたためぐみんを仕方が無く手助けしてやると案の定名乗りをしようとしているらしかった。

「我が名はめぐみん……！ アークウィザードにして上級魔法を操りし者、爆裂魔法の申し子……っ！」

「わ、わた、我が名はゆんゆん！ アークウィザードにして中級魔法を操りし者、次期族長の娘！」

「……はあ。我が名はおんおん。アークソーサラーにして上級呪術を操りし者、暗き魂を持つ混沌なる呪術の申し子」

紅魔族流の名乗りを行なった二人に合わせて一応私も名乗っておく。二人と比べてテンションは低いが、ちゃんと名乗りを行なったから問題無い事だろう。

紅魔三人娘として認識された私たちは前評判を突っぱねる程の評価を貰ったようで、カルグさんも隊商の後ろについて良い事になり護衛が格段に楽になった。

まあ、あの女悪魔がモンスターをけしかけていたのだらうし、この後の事を考えると杞憂な気もするが、好意は受け取っておくに限るし良いか。

「……落ち着いたらどつと疲れて来たな」

「あはは、そうだね。おんおん凄いわちやわちやにされてたもんね」

「流石は私のおんおんです……、おんおんは凄いですから……」

三人で荷馬車の後ろで並び座り、既に一角が見え始めたアクセルへと向かって行く。めぐみんはすっかりおねむなのか、私の肩に頭を乗せようとすると微睡み始めて寝言めいた言葉を漏らしていた。

緊張が抜けたのかゆんゆんも私の肩に頭を任せて眠りに就いてし

まった事もあり、何とも言えない時間が生まれてしまった。

まあ、此処までくれば襲撃があったとしてもアクセル側からも救援が来るだろう。私も少し寝てしまうか……。

「申し訳無い……、完全に油断してました」

「はっはっは！ 仕方ねえさ、お嬢ちゃんが一番活躍してたしな！」

だなんて思ってた時には寝てしまっていたようで、気絶するように意識を落とした事でアクセルへと辿り着いた頃に肩を揺すられ目を覚ます始末。

護衛だと言うのに初歩的なポカをしてしまった。戦闘疲れで寝入ってしまうとは非常に不覚だった。

多分、両肩にめぐみんとゆんゆんを乗せていたから温かさでつい眠りに落ちてしまったのだろう。何たる不覚だ、恥じ入る様に両手で顔を覆わざるを得ない。

「そんじゃ、依頼料だが、今後もご鼻屑についてんで一人頭十五万エリスだ！ 持って行ってくんない！」

「おお！ 太っ腹ですねお兄さん！」

「え!? そ、そんなに貰って良いんですか!？」

「無論だとも。是非受け取ってくれ！」

めぐみんとゆんゆんの対照的な反応に気を取られつつ、私もまた驚愕で目を見開いていた。

十万エリスも上乗せされているがいったい何が……、と思ったが、ミミズの群れにゴブリンの群れに上位悪魔の来襲を撃退してれば十分な内容だった。

実際、しっかりと守り切ったからカルグさんには一つたりとも傷もついていないし、最後の詰めは甘かったが護衛と言う観点からはほぼ満点か。

「すみません、お言葉に甘えさせて貰いますね」

「いやいや、正当な報酬だぜ。あんなモンスター群れに出くわしちまって、荷馬車も俺も損害が無いってなりや十分過ぎる話だ。貰い過ぎってんなら、次の機会があった時はまた俺の荷馬車に乗ってくれりゃいいさ！ お嬢ちゃんとの会話も楽しかったしな」

「それは此方もです。商いの方頑張ってくださいね」

「応ともさ。お嬢ちゃんたちも冒険者として名を馳せてくれよな！
ではな！」

そう朗らかな笑みを浮かべ、カルグさんと荷馬車はアクセルの道を進んで行った。

それを見送った私たちは手渡された布袋を仕舞い込み、アクセルの街を見渡した。

人種多様のごった煮と言うべきか、流石は駆け出し冒険者の街だ。冒険者となるべく奮起する姿や音頭を取って何処かに向かうパーティや、途方にくれる青髪の美人さんを冴えない黒髪の少年が宥めたりと、比較的年齢が若い層が散見できる。

「では、想定以上の報酬も貰えた事だし、これを資金に家でも借りようか」

「賛成です！ これだけあればそこそこの一軒家あたり借りれると思います」

「え、あ、その、しえ、シエアハウスだよね？ わ、私も……」
もじもじとか細く不安を口にするゆんゆんに苦笑してフォローを入れる。

「君も一緒だよ、ゆんゆん」

「そうですよ、流石にこの流れでハブにはしませんって」

「そうだよね！ 痛っ、夢じゃない！ わーい！ お友達と共同生活なんて夢に見たつきりで叶えられるだなんて思ってたのに叶っちゃった！」

「……もはや何も言うまい。さて、それでは不動産を冷やかす前に冒険者ギルドへ行くか。取り敢えず新人冒険者としてやっていく事を踏まえても挨拶に行こう」

「分かりました！ 取り敢えず、おんおんに任せますね！」

「全力で丸投げするんじゃないよめぐみん……、まあいいけどさ」

実質リーダーみたいない役割してるしね。保護者として引率はするつもりだから良いっちゃ良いんだけど、少しは考えて欲しいなあと今後の事を思っただけで考える。

冒険者ギルドへの道はそこそ近く、やはり駆け出し冒険者の駆け込み寺のようなものだからか入口から近い立地に作っているらしい。

中へ入ると煽情的な恰好をしたギルド員の女性が給仕をしているのが先ず目に入り、次に昼間と言うのに既に酒を飲んでいる一団や強面で屈強な男性たちが見えた。

成程、基本荒くれ者である冒険者を管理するために酒場も経営しているらしい。

非常に合理的だな。厄介な客として振舞えばそのまま冒険者の資格を失う羽目になる事だろう。

特に酒が入って羽目を外しやすい酒場をギルドが運営しているとみると、そういう輩も居る事を認知しての事なのだろうな。

いや、単純に交流の場として運営しているのかもしれないな。所謂王道なRPGのお約束と言うべきか、酒場で仲間を募ってパーティを組むと言うのは意外と合理的なのだ。

座って話せる場をギルド側が整えている事で、時間潰しと並行して同業者の動向を見られるのだから。

聞き耳を立てて情報を得たり、駆け付け一杯と言わんばかりにジョッキ片手に話しかけに行ってもよし、交流の場の大本がギルドなので双方安心して出逢える訳だ。

「おお……、これが冒険者ギルドですか。何と言うか、セオリー通りと言うべきか」

「ふむ。これからお世話になる場所だからな。ある程度の礼節を忘れずに」

一応釘を刺しつつ、冒険者ギルドの受付をしているカウンターの方向へ歩いて行く。

……何故か、三列ある内の一つが大盛況で残り二つが閑古鳥状態だった。

奥を見やれば豊満な胸の谷間を晒したセクシーな受付嬢に男性冒険者たちが並んでいるようで、思わず私たちの視線が冷たいものにな

る。

空いている方の受付に向かうと片方の受付嬢のお姉さんが手招きしてくれたので其方に歩いて会釈をして対面する。

「こんにちは、此方が冒険者ギルドの受付で宜しかったですか？」

「ええ、そうよ。私はエリー・ミアットソン。ギルドの受付嬢を担当しているわ」

「これは御丁寧に。私は紅魔族のおんおん。眼帯をしているのがめぐみんで、もう一人がゆんゆんと申します。今後、アクセルで活動をするのでご挨拶に来ました」

「へえ紅魔族……紅魔族!? え? き、聞き間違いじゃないわよね?」

「ええ、紅魔族と名乗りましたが……、どうかなされました?」

「いえその、……大体紅魔族の方はテンシヨンの高い方が多いので」

エリーさんの言葉に瞳が死んでいくのを感じた。

いやまあ、そうだよな。初対面だし紅魔族と言う偏見は切っても切れない腐れ縁のようなものだしな……。

意気消沈とした私の代わりにめぐみんがずっと前に出て無い胸を張った。

「ですが、おんおんは違います! おんおんは基本的に礼儀正しく謙虚でテンシヨン低めのダウンナー系なのです!」

「……めぐみん。それフォローのつもりか? まあ、言いたい事は分かるが、普通に言って良いんだぞ」

「…………おんおんは紅魔族の常識に囚われない性質を持っているのです」

「何と言うかも……、可愛い奴だなめぐみんは。別に貶されている訳じゃないから安心しろ。常識人でびっくりしてるって意味だから。うちの里とは逆の意味合いだから」

「あ、そうなんですか? てつきり、どうせこいつもやべー奴だろ的なニューアンスかと」

「…………いえ、その、御気分を不快にしましたのならごめんなさいね? 紅魔族の方を受付する時って大概が個性的な人たちばかりだったから驚いちゃったの。決して悪態の意味は無いわ」

まあ、そりやそうだ。仮にも冒険者ギルドの受付だ。駆け出しの街なら尚更だろう。

取り敢えず、此処での基本的な案内を聞いて使い方を把握しておく。

基本的に依頼はあちらのボードに貼られているのを引っぺがして此処に持つてくるらしい。中には事後受付の物もあり、そう言うものは剥がさないでくださいと言う注釈が入っているとの事なのでよく確認するようにしよう。

「と、言うのが此処での案内ですね。他に聞いておきたい事はありますか？」

「ああ、一つだけ。此方では冒険者向けの賃貸などは斡旋していますか？」

「賃貸、ですか。基本的に駆け出しの方は馬小屋か宿を取る形になりますね」

「先立つ物が幾らかある、と言っても？」

「……失礼ながらカードを拝見してもよろしいですか？」

「ああ、構わないが……、はい」

私のカードを受け取ったエリーさんはどれどれと言った様子で確認していくが、段々と顔色を変えて此方とカードを何度も見比べるように顔を縦に振り始めた。

小首を傾げ訝しむものの、ありがとうございますとカードを返却されたので受け取る。

「ええと、おんおんさん。貴女の討伐記録を確認させて頂きましたところ、ギルドでの規定を超える実績をお持ちのようなので幾つかおすすぬを案内できます。此方の封筒を不動産屋にお渡し頂ければ大丈夫です。既に話は通っていますので」

「ふむ？ 因みにどう言った規定なんです？」

「そのですね。ギルドから賃貸等の案内をするにはある程度の実力者である事が条件付けされています。過去に駆け出しの方を案内して一カ月も借りれなかった方が多く居まして、そのような規定を定めたそうです」

「ああ、冒険者は不定所得だから賃貸料が払えなかったのか。成程、理解しました。では、此方を渡せば良いのですね？」

「はい。冒険者が拠点としやすい大通りの物件の幾つかをギルドが預かっているんです。王都からの緊急クエストで高位冒険者の方にお貸しする時に使われたりしますね」

「ははあ、それなりにする、と」

「まあ、そうなります、はい」

冒険者は準備七割行動三割だなんて言うくらいに前準備と言うものが肝要だ。

毒を持つモンスター相手に解毒剤を持ち込まない馬鹿は居ないと言う事だな。

そのため、拠点からそれらの店舗へのフットワークが軽ければ、準備の時間を効率化して依頼をこなしやすい環境にもなる訳だ。

そうになると金回りも良くなるし、賃貸料も確り払える。なのでそれをできる相手にだけギルドがおすすめる訳か。

……よし、一度普通に聞いてからこれ出してみるか。最初からこれ出したらボられそうだし。

カルグさんから色々雑談の際に聞き及んでいる事もあって、鵜呑みだけはしないように気を付けねばなるまい。

「成程、分かりました。ご助力ありがとうございます。早速不動産屋に行ってみますね」

「お力になれまして幸いです。どうぞ、お気をつけて」

受付から離れ、二人を連れてギルドから出て行こうとすると入口近くで飲んでいる強面の男性と目が合った。

屈強な体躯に半裸姿、極めつけは睨み顔に目元の傷跡。明らかにヤーさんと言うか、裏家業な見た目の人物に会釈だけしてそそくさと入口へ向かう。

「おい、そこの嬢ちゃん」

「な、なんででしょう？」

——が、呼び止められてしまった。何だ、小さいガキはママのおっぱいでも吸ってる的な侮辱と嘲笑を投げかけてくるのだろうか。

「不動産屋は此処から出て左に真っ直ぐ突き当たりまで歩いて右に曲がった先にあるぞ。家の形をしている看板を出しているから分かりやすいだろう」

「あ、御丁寧にありがとうございます」

「構わんさ。ギルドから紹介を受けるような実力を持っているとなれば、共同する時もあるだろう。その時は宜しく頼むぜ嬢ちゃん」

「此方こそ、その時には宜しくお願いします」
「応」

めっちゃくちや良い人だった。心成しか微笑む姿の陰に父性が見える。見れば左手の薬指に指輪もあるし、凄く家庭的な人だこの人。人は見かけに依らないな、そんな教訓を得た私たちは歩みを進めた。

「おっと、すみません」

「いえ、此方こそ」

入口で黒髪の少年と美人なお姉さんと対面してしまい、お互いに会釈してすれ違った。

さて、不動産屋で良い物件が見つかるの良いのだが。流石に家を建てるとなるとローンを組んだとしてもそれなりにかかってしまうからなあ。

どんな家が良いか二人に尋ねてみれば、私に一任するだなんて言葉が返ってきてしまった。

「その、恥ずかしい話ですがおんおんに依存した生活になると思うので、少しでもおんおんが暮らしやすい家の方が良いかな、と思います」

「えっと、私もほとんどお母さんにして貰ってたからあんまりそういう事分からなくて……」

「……まあ、内装は殆ど一緒だろうし、立地で考えるか。出来るだけギルドから近い方が良いだろうしな。疲れた身体でとぼとぼ歩くのは嫌だしな」

「それもそうですね。まあ、私の場合一発撃ったら動けなくなるのですが一！」

「胸張って言う事じゃないぞめぐみん……」

どや顔で言うめぐみんに苦笑しつつ、そう言えば伝え忘れていたな、と思い出した。

「ああ、因みに私はソロで活動するから二人はパーティを見つけるんだぞ」

「え、っ!?!」

「今回の護衛依頼で思った事だが、私が居ると二人の活躍の場面が減るからな。冒険者として実力を付けるためにはそれでは意味が無いしな」

「そ、それじゃあ力尽きた私を誰が運ぶんですか!?!」

「魔力を込めたマナタイトを貸してあげるから自力で戻って来るか、パーティメンバーに運んで貰うんだな」

「わ、私パーティに入れる気がしないんだけど!?!」

「それも含めて族長修行だろう。入れないなら作ると良いぞゆんゆん。戦士、プリースト、シーフ辺りを募集すると良いぞ。中級魔法を扱えるゆんゆんなら何とかなるだろう」

私の両腕にしがみついて泣きついてくる二人の懇願を心を鬼にして突っぱねていく。

「すまないな、めぐみん、ゆんゆん。私もしたくてしている訳じゃないんだ。」

ただ、単純に私が居れば良いやと言うパーティを結成して二人の成長を止めたくないんだ。

上級呪術を使える私は二人のポジションを両方取れる万能枠だ。ハンドアックスや『闇の刃』で前衛もできるし、何なら弓もできる。

正直、私一人で大概が何とかなってしまっているので、二人に出番を譲ろうとすると私の成長の機会が失われてしまう。

それではアクセルに来た意味が無くなってしまふ。なので、此処は我が子を千尋の谷に突き落とす思いで自立を促すしか無いのだ。

「まあ、その代わり家事や食事などは私が請け負うから二人は出来る限り頑張ってみるんだ。生活費は勿論毎月幾らか入れて貰う予定だからその分くらいは稼いでくるんだぞ」

「ど、どうしてもですか？」

「無論だ。なら、里に帰るかめぐみん。この程度できなきや帰った方が良いぞ」

「ぐぬぬ……、それも、そうですね。良いでしょう！ 受けて立ちます！」

「よしよし、その意気だ。ゆんゆんもライバルがこうして奮起しているんだ、頑張り所だぞ」

「ううう、めぐみんが頑張るなら私も頑張らなくちゃ……」

「もしもの時は手助けしてやるからな、これも経験だ」

項垂れる二人を連れて不動産屋で大通りの物件を借りる事になった事で拠点もできた。

賃貸料も月々十万里スと言うところなお値段ではあるが、払えない額では無いので利便性を考慮して決定した此処が私たちの始まりの場所だ。

これから沢山大変な事に見舞われる事になるだろうが、それもまた経験だと成長せねばなるまい。何せ、将来は魔王を討伐せねばならないのだから……。

7話

アクセルの大通りに面したシェアハウスで暮らす事二週間が経った。

これと言つて大事は無く、冒険者としての生活に段々と慣れつつある段階だ。

「…………ふわあ。もう朝か。ねむ…………」

暖かな布団が恋しいが泣く泣く上半身を起こして伸びをして眠気を飛ばす。こうする事で一日が始まった気がする、そんなルーチンの一つになっていた。

布団の中で丸くなっていたちよむすけもあくびをして這い出て、そのそと定位置に着くが如く私の頭の上に乗っかる。

すっかり私の頭の上を気に入ったのか、脱力しているように見えるのにしっかりとバランスを取る器用なちよむすけの行動に私はもう慣れていた。

シェアハウスとして使っているこの家は二階建てになっており、一階にはリビングや応接室などに使える広めの部屋があり、二階には個人で使えるような個室が備わっている。

そのため、一階を共同スペースにして二階を個人の部屋として利用している。

今はまだ生活雑貨が最低限あるくらいで、殺風景極まりない光景が私の部屋の状況だ。正直、小さな庭の方に螺旋剣を突き刺した篝火を設置できた事でほぼ満足してしまったのが理由である。

めぐみんは厨二チックに染め始めているし、ゆんゆんはお友達兼お喋りの相手として観葉植物を買っているようで、自分だけの部屋と言う物を好きにアレンジして楽しんでいるらしい。

ベッドだけは各自質素なものを取り敢えず用意し、テーブルや棚なども似たような感じの値段の物を共有資産から捻出して生活ができるように整えている。

…………まあ、私の要望が大体キッチン周りの時点で二人からは察したような視線を向けられてしまったが。

「さて、朝ごはん作るか……」

家事を率先して行くと宣言してしまった以上、手を抜くのは筋違いと言えよう。

パジャマ姿で一階に降り、キッチンへと向かって口を濯いでからコップに水を『クリエイトウォーター』で入れて飲み干す。

こうして賃貸の物件を借りている訳だが、一番驚いたのは水回りだ。蛇口を捻れば綺麗な水が出てトイレも水洗式。小さなお風呂も浴槽が付いており、前世での生活を彷彿させる充実つ振りに眩暈がしたくらいだ。

手を入れ過ぎだろ日本からの転生者。ファンタジーの世界に住んでいる筈なのに何処か日本らしさを感じさせる物が多過ぎる。

……と言つても、同世代の女の子と同棲して食事や家事をしているのは前世とは掛け離れた生活ではあるのだが。この性別に変わってから十三年も過ぎた訳で、流石に女性らしい考えや身の振り方をする事も板についてきた事だろう。

魔力が続く限り中にフリーズを放ち続ける魔導冷蔵庫の中を見やれば、幾つかの食材が残っている。どれもこれも中途半端な量なので、朝は簡易にしてお弁当にサンドイッチを拵えるか。

献立を考えながら食材を取り出し、慣れた手付きでソーセージをフライパンで炒め、皮が弾けた頃合いで生卵を落として目玉焼きを作っていく。

空いたコンロの方でフライパンにバターを落として溶けたらパンを焼いていく。トースターが無いのでフライパンで焼き目を付けるしかないのだ。

「よし、良い焼き加減だ」

皿へ移したトーストの上に目玉焼きを置いて、ソーセージを二本ずつ添える。平行して乾物野菜を戻しつつ煮込んだ野菜スープの味を確認する。

野菜のkokoroのある美味しいスープが出来上がり、味見のための小皿をシンクへ置く。

野菜を天日干しするだけで簡単に作れるので乾物野菜のストック

はしっかりと作っているため、こうして日常に使うだけの量は生産しているのだった。

こうして住まう家も手に入れた事だし、燻製とかも手を出してみたものだ。塩漬けの干し肉は正直味がストレート過ぎてつまらないんだよな。

燻製と言えばハムか。暴れ猪の塊肉でハムでも作ってみようか……。

出来上がったそれらをテーブルに配膳し、お弁当のためのパンも焼いていく。

流石日本人の手の入った街と言うべきか、食に関するあれそれが行き届いている印象を感じる。

何せ、値段が高めな輸入品を取り扱う店で数種類の米が売られているのを見た時は驚いたものだ。ついでに味噌と醤油も手に入ったら、和食が恋しくなった時の備えは十分だ。

始めちよろちよろ中ぱっぱ、赤子泣いても蓋取るなつてな。釜炊きするのも手慣れたもんだ、今じゃ何となくであるが匂いで状態が分かるようになってきたぐらいだし。

「……随分と手慣れたもんだなあ」

冒険者として自立を促したあの日から私は主にソロで活動していた。

理由は単純な事でヘイト管理が一人だと楽だから、と言うのもあるが、腕の立つ冒険者として周知されるべく中位のクエストに手を出すためでもある。

初めのうちはエリーさんから苦言を呈されたものだが、今や普通のように依頼を受け付けてくれるようになった。

そして、それはギルドでの立ち位置も確立してきたという意味でもあり、ちらほら注目される事も増えて来た。

先日も傭兵の如く他のパーティに誘われて共同を行なった。自分の有用性を魅せる機会と言う物は中々気持ちの良いもので、臨時の助っ人として程良い評価を得る事ができた。

クエストボードに傭兵として活動する旨のものを貼っておいたの

で、今後も共同の依頼は増える事だろう。

理由としては自身の成長に繋がるから、と言いたいものだが実際のところは違ったりする。正直に言えばめぐみんとゆんゆんのためだ。

報酬を貰う際に、紅魔族の友人たちを気に掛けて欲しいとお願ひする事をしている。

正直言つてゆんゆんは兎も角めぐみんは爆裂魔法一本であるため使い辛いし、役割が薄い。そのため、前評判でパーティ組みを断られる可能性が出てくる。

そのため、一度でも良いから組んでみて上げて欲しいと私がお願ひをしている訳だ。

もしかしたら、めぐみんやゆんゆんを有効に扱えるパーティが居るかもしれない。そんな淡い気持ちを抱きながらお節介を焼いているのが実情であった。

実際、めぐみんは爆裂魔法の事をクエストの途中まで隠してポンコツを晒しているし、ゆんゆんに至ってはそもそもパーティに入る事もできておらずギルドで一輪の花と化している。

非常に頭の痛い有様な訳だが、二人とも自分なりに頑張っているらしいので応援だけをしていると言うのが現状である。

「さて、二人を起こしてくるか……。まったく、お寝坊さんめ」

こうして賃貸ではあるが持ち家がある事で二人は切羽詰まって依頼を受ける必要は無い。生活費が足りなければ私が補填すれば良いだけだしな。

二階に上がりながら前世の母もこんな気分だったのだろうかと思つて苦笑してしまう。手の掛かる事で大変でもあるが、それもまた可愛らしい事だと許せてしまう。

正しく家族と言う感覚で私は二人に接している。まあ、二人からはどう思われているかは分からないが。

二階に辿り着き、先ずはゆんゆんの部屋の方へ足を運ぶ。単純に寝起きの手間が掛からないからだ。

「おーい、ゆんゆん。朝だぞー」

ノックしながら声を掛けるが返事はない。すっかり熟睡している

らしかった。

ドアノブを回して中へ入るとこぎつぱりとしていながらも所々に観葉植物が置かれた光景が広がる。時折露店の方でぬいぐるみを見ている時があるので、そのうちそれらも並べられるのだろうか。

ベッドで健やかな寝息を立てているゆんゆんに近付き布団を剥ぎ取る。寒さから縮こまったゆんゆんに苦笑しながら声を掛けた。

「ほら、ゆんゆん。朝だぞ。起きるんだ」

「ううん……、おかーさん、まだねむい……」

「朝ごはんできてから早く起きるんだゆんゆん。此処は実家じゃなくぞろぞろ……」

「もうすこししたらおきるー………、っっておんおん!? あっ、そうだった、此処家じゃないや……」

「まあ、私たちの家でもあるがな。眠気は飛んだようだし、顔を洗ってきな」

「はーい……」

気が緩んだ姿を見られてか恥ずかしそうに顔を赤らめるゆんゆんにその声を掛けて部屋を出る。さて、次はめぐみんだな。

「おーい、めぐみん、ご飯だぞー」

めぐみんの部屋にノックをしながら声を掛けるがやはりと言うべきか応答が無い。

やれやれと苦笑しつつ中へ入る。爆裂魔法カラーと言うべきか雑貨やカーペットなどが紅系に統一されており、そこらの露店で買ったのだろう厨二心を擽られそうな置物などが散乱している。

ゆんゆんもだが衣類をそのまま放り捨てる習慣は無いためそこだけは安心して良いだろう。冒険者と言うのは身体が資本であり、まあ何を言いたいかと言うと汗をかく仕事が多いという事だ。

そのため、横半分に切った空のタルに衣類を入れて洗剤と共に『クリエイトウォーター』でじゃぶじゃぶと洗濯板で洗う必要が出てくる。

衣類を出してくれないとそれらの手間が二度手間になるので、しっかりと行ってある二人はきちんとお風呂の後に指定した空のタルに

衣類を入れてくれるようになった。

……まあ、此処に出さないのは回収しないし洗わないと言ったのが効いているのだろう。

やはり、女の子であるし衣類は清潔な物を身に着けたいしな。

この世界にはパンツはあるが、何故かブラジャーが無く薄い肌着が一般的に使用されている。そのため、でかい人は戦闘中や走っている時ばるんばるんしているのをたまに見かける。

ま、私とめぐみんにはあんまり必要の無いものだが、ゆんゆんも居るのでちよちよいと裁縫で胸当ての肌着を作り、お手製ブラもどきを作ったところ中々良い感触を得られた。

成長期である私たちくらい世代だと着ズレによる胸の痛みが結構あるようで、二人もそうだったのか嬉しそうにしていた。

「……ま、私はそろそろ成長が止まり始めてるからか痛みはもうあんまり無いんだけどな……」

ぺたんすとんつるん。あえて言わないが私の体型はそんな感じである。

まあ、いいけどさ。あんまり必要だと思って無いし……。

ぐっすりとすやすや寝ている寝相の悪いめぐみんを見ながら微笑みを浮かべる。

めぐみん理論だとこれからも伸びる魔力に比例して胸も成長するらしいからめぐみんの憂いも解消される事だろう。そのためにも健康的な食事を心掛けているしな。

布団を剥ぎ取り、これまた同様に丸く縮こまっためぐみんを起こすため肩を揺らす。

「ほら、めぐみん。朝だぞ。ご飯無くなっちゃうぞ」

「ごはん……、おんおん……？ ふああ、もう、朝ですか……」

ぼんやり眼で上半身を起こそうとして力尽きる様子に苦笑しつつ、伸ばされた手を引っ張って手伝ってやる。

ふにやふにや顔で「ん」と此方に両腕を伸ばすめぐみん。やれやれ、甘えん坊だなあめぐみんは……。

こんな可愛らしく頼られてしまえば仕方が無い。両脇に手を入

れて抱き起こし、床に立たせてやると私に寄り掛かるようにして抱き着いてきた。

「すっかりおねむだな。昨日夜更かしてもしたのか？」

「その……、今後爆裂魔法をどうやって強くしていこうか考えていたら途中で寝落ちしてしまつて……」

「ああ、それで寝不足なのか。駄目だぞ、めぐみん。冒険者たるもの身体が資本、ちゃんと睡眠は取らなくちゃだぞ」

「はあい……。ん……。すみません、そろそろ自分で立ちます」

「ああ、そうしてくれ。朝ごはんできてるから顔洗つておいで」
「そうします……」

ふらつふらと小刻みに揺れながらも自分の脚で歩いて行くめぐみんの後姿を見送り、今日もやり遂げたと軽く伸びをする。

……同性とは言え、根っこが男性であるからか、それとも匂いフェチでも発症したのかめぐみんたちの部屋の生活臭が妙に気になってしまう。

その上、甘えたがりなめぐみんに抱き着かれたりすると寝汗の匂いなどがダイレクトに鼻孔に飛んでくるので尚更に興奮してしまう。

まあ、そんな素振りを見せないように心掛けているから大丈夫だとは思うけどな。そうでなきや、こうしてシェアハウスが続く訳も無し。

「さて、私も朝ごはんにするかね」

めぐみんの部屋から出て一階のリビングに戻る。パジャマ姿でぼわぼわしているゆんゆんと顔を洗つてしゃつきりしたらしいめぐみんが席に座る。

三人で基本的に使う事もあり顔を合わせやすい円卓状のテーブルを使っているのでお互いの顔がしっかりと見やすい。会話する時も両隣に真横に居るよりも斜めの方が楽だしな。

既に座っている二人と私の分の牛乳をコップに入れて配膳し、私もまた席に座る。

手を合わせて「いただきます」と声を揃えて朝ごはんを食べ始める。
「んー……。この質素でありながらしっかりと美味しいおんおんの目

玉焼きトーストは最高ですね……。私好みにパンはカリッと目玉焼きも半熟ですし……」

「あれ？ めぐみんのは半熟なんだ。私は固焼きが好きだから美味しなくなってるだけ……」

二人の視線が交差し、小首を傾げてから此方を見やる。いや、普通に好みに合わせて焼き加減を変えているだけだぞ？

「そりゃ、君らの好みくらい把握してるからね。めぐみんには半熟で、ゆんゆんには固焼きのを作ってるよ」

「へえ、流石はおんおんですね。ありがとうございます」

「おんおんはちなみにどっち派なの？」

「ふふふ、中間くらいだよ。だから、二人の分を作るのも手間じゃないのさ」

まあ、どちらかに偏らないようにそうしているだけで、前世ではゆで卵にして潰してマヨネーズを混ぜてた。

輸入品店にもマヨネーズは無かったので自作する事になるのだが、植物油と卵黄を混ぜ合わせる事もあり、生で食べられる鶏卵を見つけれないのが理由でもある。

食中毒を起こしてあいたたーとなるのは流石に嫌だしな。何処かに生で食べられそうな鶏卵を作る農家さんは居ないものかね。

どっちつかずの解答に二人は納得してくれたのかトーストを齧るのに戻ってくれた。

調味料の方はあまり着手できていないので、少量の味噌や醤油を使う訳にもいかない。あくまで私が買った嗜好品のようなものだし、和食を作る食材が足りてないのもあって食べ損ねている。

んー、でもまあバターはあるし夕飯に暴れ猪のステーキをバター醤油で食べるってのも良いかもな。一応試食させて抵抗が無ければ使って行けばいいし。

……でもまあ、高いんだよなあ醤油と味噌。小瓶で十万エリスくらいするし。

大豆を仕入れて自家製のを作るか？ 温度の調整も魔法を使えば上げ下げは容易だしな。

……温度計って売ってただろうか。ガラスの中に水銀が入っているのは覚えているのだが、如何せん原理が思い出せない。でもまあ、密閉空間で上下するとなれば膨圧辺りだろう。

熱による膨張で目盛りを上下してるんだっけか。まあ、そこらへんは色々試行錯誤すれば良いだろう、時間はあるしな。

「御馳走様でした」

「お粗末様でしたっ」と

シンクの方へ使用した皿を回収してささっと洗ってしまおう。浸け置きする程の汚れでも無いし、汚れた直ぐに洗ってしまう方が楽なのだ。

「そう言えば、二人は今日はどうするんだ？」

と、背中越しに尋ねてみれば沈黙が返って来た。

まあ、言わずもがな、と言うべきか。パーティ加入の進捗が悪いのだろう。

めぐみんは一発屋が故に、ゆんゆんはコミュニケーション能力の低さ故に、中々パーティに定着する事ができていない状況なのだから。「その、やっぱり三人でパーティ組みませんか？ 何処も一度は受けてくれるのですが、私が爆裂魔法しか使えない事を知ると脱退を余儀なくされてまして……」

「い、良い考えだと思うなあ。わ、私もパーティを募集してるけど誰も来てくれなくてギルドの一角で暇潰ししてるだけだし……」

「そりゃあんな怪文書みたいな募集したらそうなりますよ。ゆんゆんが欲しいのはパーティメンバーの筈なのに、何故かお友達を募集してますし……」

「うう、だって、アクセルに来たんだからお友達できるかなって思ってたえ……」

「……ううむ、前途多難なのは分かるがなあ……」

こっそりお膳立てしても本人たちが日和っているので意味が無さそうだ。

めぐみんとゆんゆんでペアになると言うのも有りっちゃ有りなのだが、それをするとうんゆんへの負担が大きいなんだよなあ。

基本的にめぐみんはジャイアントキリングが専門だし、そんな相手にゆんゆんの中級魔法では威力や実戦経験が足りないから罔どろか肉盾に成り得る。

うーむ、どうしたものかな。一度二人が自立できるくらいまではキャリアすべきか？

私もパーティ戦闘は学んでいる途中だから変な感じの癖をつけてしまったらアレだしなあ。

……あつ、妙案を思いついた。

「と言うか、めぐみんがパーティを探して、ゆんゆんもそれに続けば良いんじゃないか？ 二人で入れれば継続してくれるところもあるんじゃないか？」

「ほう、確かに。爆裂魔法を理解しているゆんゆんに足止めと誘導させて、私が爆裂魔法をドカーンとすれば良いかもですね」

「それ、絶対私への負担が凄いなんだけど……。でもまあ、二週間もギルドで新しい遊びを考えるくらいならそっちの方が良いかも」

「よし、それなら今日の活動はそれで決まりだ。二人でパーティに入って経験を積むんだ」

「はい」

いや、私はお母さんかっつての。二人は声を揃えて返事を返し、私の決定だから納得したと言った様子で頷いていた。

ううむ、先が思いやられるなあ。ただまあ、何事も経験を積まないと成り立たないもんだしなあ。

今日の行動指針が決まったからか二人して二階に上がり、外出の準備をし始めたようだ。

まあ、やる気が少しでも戻ったなら良いのかもな。別にまだ焦る必要も無いし。

幸い初心者殺しの討伐や一撃熊の討伐などで貯蓄があるため借金でもこさえてこなければどうにでもなる訳だし。

「では、行ってきますおんおんー」

「い、行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい。武運を祈るよ」

お弁当を手渡してから、めぐみんに主導される形でゆんゆんも一緒にギルドへと向かった。

さて、今日の家事を始めるとするかな……。

基本的に午前中に洗濯や掃除、生活雑貨の買い出しなどを行ない、昼頃からギルドに向かうのが普段のルーチンだ。

パーティの傭兵を依頼された時は最低限をすませてから午前中から動いたりもするが、今日は共同の予定は無いので家の事を終わらせる日にする。

まあ、先日買い物は済ませているので洗濯と掃除くらいだな。

「さて、手早く済ませますかねっと」

玄関から廊下、リビング、応接室などを箒で掃き、雑巾で水拭きしていく。

掃除の手間を考えて玄関以降は土足禁止にしている事で、衣服についた砂や埃くらいしか無い事もあって掃除は比較的簡単だ。

一応玄関に泥汚れ用の衣服を入れる空のタルを設置しているので、普段から掃除している事もあって作業はささっと終わる。

脱衣場に向かい、衣服の入ったタルをお風呂場に移動させて粉状の石鹸を中へ振りかける。

『クリエイトウォーター』で水を流し入れ、じゃぶじゃぶと浸け置きしながら揉んで汚れを吐き出させる。

洗濯板を取り出して汚れの強い部分をこそぎ落とし、洗剤の泡が無くなるまで手動の濯ぎ洗いを繰り返し、木製のハンガーへと差し込んでいく。

そして、庭の物干し竿にそれらを引っかけて洗濯を完了する。ふう、中腰になるから結構腰にくるんだよなあこの作業。

誰か全自動魔導洗濯機でも作ってくれないものかな。大分手間が減るんだけどなあ。

……いつそ、ハンドル式の手動の洗濯機を作るか？ いや、その方が手間掛かるか。溝に引っ掛かって衣類が傷付いたら事だしな。

「魔法が自由に作れたら便利なのになあ。水と風系の合わせ技で水流竜巻とかできないもんかな」

まあ、明らかに私の魔法はこの世界の物とは違うのが混ざっているけれども、基本的な法則と言うかルールはこの世界準拠のものだ。

スキルとして覚え、詠唱と魔力を消費して発動する。逆に言えばカードにスキルとして記載されなければそれは魔法とは言えないと言う事だ。

爆裂魔法のような特殊な魔法に関しては一括の括りから外れて固有の魔法と化しているようだし、オリジナルの魔法と言うのはワンチャンあるかも、ぐらいいな確率だろうな。

血族限定の魔法だとかそういうものがあるのであれば、新しく魔法を作ると言う事はできる可能性はある。

「……まあ、最悪両手で魔法を発動できるようにすれば良いか。片方魔道具で片方魔法とかでも良いし。……ん？ 考えて見れば結構現実味を帯びて来たな。職人に湾曲のあるドラムを作って貰って手で回転させれば、必要なのは水だけになるから魔道具でも作れそうだな」

普段は料理のレシピとかを書いたりする紙を一枚取り出し、先程のアイデアを書き纏める。

手動のろくろのような足で踏んで回転させれる奴だと良いなあ。ずっとハンドル回すの大変だし、素材次第ではある程度理想に近い形で作れたりするんじゃないかなろうか。

「……ああ、成程。ひよいぎぶろーさんが開発費用で貧困に陥る理由が分かってしまった……。そうかあ、確かにアイデアを昇華させるために素材は欲しいもんなあ」

だが、それは家庭を顧みてからすべき事だろう。その辺りは受け入れられないので、私は自由に使えるある程度の金額で作れるかどうかを思案すべきだ。

しかし、足で踏んで回転する図面とかどうやって作るんだ？

ああいや、別にそれを作ろうとしなくても良いのか。似てるものから発想を得れば良い訳で、足で漕いで車輪の回る自転車の機構を真似すれば良いか。

どんな感じだっけかなとあーでもこーでもない紙に書き連ねる。

結局お昼の時間を少し過ぎるくらいまで没頭してしまい、知恵熱で頭がくらくらになってしまった。

「ふう……、水でも飲むか。『クリエイトウォーター』」

コップ一杯の水を作って飲み干す。作業の手間を減らして楽しようとしている筈なのになんで疲れてるんだろうな、と正気に返ってしまった。

もう午後になってしまっている時間帯だ。サンドイッチを頬張りながら、この後どうすつかなと思考に没する。

適当な討伐依頼でもソロで受けて狩ってくるか。

一応下位のものから順当にやっけていってどれが駆け出し向けかは分かっているからそれ以外を選ぶ必要がある。

駆け出しの街と謳ってはいるが、ギルドの依頼には普通に中位から上位のクエストも貼られている事もあり私のような実力者も滞在しやすい街になっている。

まあ、明らかにお前ら上位のパーティだろって言う男性陣も居たりするので、何かしらの男性向けの何かがこの街にはあるんだろう。

「んー、そう言えばアクセルに娼館って無かったよなあ。普通、こう言う荒くれな仕事をする冒険者の多い街にはあるってのがお約束と言うか鉄板なのに」

この二週間でアクセルを一度歩いて回った事があるのだが、娼館ですって言う感じの店は無かった筈だ。それなのに男性が女性を性的に襲ったと言う話を聞く事はあんまりない。

態々王都までテレポしてヘルスってる可能性もあるが、そんな面倒な事をするかねえと男性目線でも可笑しさを感じる事実に好奇心が芽生えて来た。

いや、別に働くつもりは一切無いがあるべきものが無いと言うのはそれだけで不自然に感じるものなのだ。

決して秘宝館的などころがあるのかなとかキャバクラに扮したハプバーでもあるのかなとか考えてたりはしないんだ。

そ、そう、めぐみんたちが知らずにそう言ったところの近くに行かないように調査する必要がある筈だ。

「……んやねえよ、頭沸いてるのか私……。シエアハウスになってからシ辛くなってるから溜まってんのかなあ」

いや、普通に疲れているから頭が働いてないだけだろうな。そう終止符を打って煩惱を抹殺した。

ただまあ少し気になりはするから情報だけは押さえておくか。異世界ファンタジーな世界だし、女性には見えないサキユバス娼館みたいなところがあるだけかもしれないしな。

ちらりと紙を見やり、久しぶりに原稿用紙に性癖をぶつけるのも良いかもしれないなあと思うものの、万が一めぐみんたちにガサ入れされて見つかってしまうと面倒だなとも思う。

……めぐみんたちも冒険者として頑張ってるんだし、流石に自重するか。

煩惱退散。そんな事を考えながらアイデアを書いていた数枚の紙を二階の自室に置きに行き、ついでにカルラ衣装に着替えて支度を済ませる。

さて、どんな依頼が置いてあるかな。この前ちらつとギルドの酒場でグリフォンを見たって言う話を聞いたし、そういうのもあるかなあ。

いや、対空用の魔法無いから無理だわ。討伐するとすれば地に足着いているマンティコアの方だろうな。

何故かグリフォンとマンティコアはこの世界だとハブとマングースみたいな敵対関係にあるらしく、よく縄張り争いとして道路で喧嘩が勃発して長々と戦い続けるらしい。

そのため、どちらかが負ければもう片方は主として去っていくので、どっちかを討伐してこいと言う依頼が貼られる事があるらしいかつた。

「片方倒したら普通、残った方が殺しに掛かって来るもんだと思うんだが、そうじゃないのが不思議だよなあ。ほんとファンタジーしてるよなこの世界……」

そんな事を考えながら戸締りをして、玄関口の大きな姿見でチェックしてから外に出る。

庭先にある何故か炎の消えない篝火と突き刺さった螺旋剣を一瞥してから、ギルドの方へと歩き出したのだった。

8話

大通りからギルドへの道のりはそう遠くはない。歩いて数分程度であり、駅近物件みたいな感覚で辿り着く事ができる。

ギルドに入ると好奇の目が集中するのはもう慣れた事だ。先日共同したパーティの人に手を振られたのでそれに返すように手を振る。

「おんおんちゃん！　またよろしくねー！」

……なんかマスコットみたいな扱いされてないか？

いやまあ、嫌われるような事はしていないが好かれる事もしていないと思うんだが。

まあ好かれている方がお得な感じがするし別にいいか。そんな事を考えながらクエストボードの方へと歩いて行く。

めぼしい依頼は既に粗方はけたようで残っているのは駆け出し向けかベテラン向けと言う極端な残り方をしていた。

「……ジャイアント・トードを五匹討伐、ねえ」

その名の通り巨大なカエルのモンスターである。死亡率は低い方であるが、首に舌が絡まった際に引き寄せられる時にゴキツと即死する可能性がある。

食欲旺盛なのか牧場の牛などの家畜を狙って丸飲みする習性があるため、農家からは不？戴天の仇として認知されている。

基本的に丸飲みにしてくる以外に攻撃手段は無く、聞く人に聞けば啞内は結構温かいらしい。

柔らかくゴムっぽい上皮が物理的な攻撃を吸収材の如く受け止めるらしく、斬撃であれば普通に問題無いがメイス等を得物とする人には不得手のモンスターであるらしい。

もつとも、普通に魔法が有効なので魔法使いにとってはカモである。

だが、たまに不意打ちを食らって文字通り食われ、短剣等を持ち合わせていなかったが故にそのまま脱出に失敗してお陀仏になる駆け出しも居るとか。

「……まあ酒場のメニューにあるくらいだしな、意外と美味しいんだよ

なあ」

鶏肉に似た淡泊な味わいで、それでいてもつちりとした食感が特徴であるジャイアント・トードはカエルのから揚げと言う名前でメニューに載っていたりする定番物の一つだ。

怖いもの見たさで頼んだ事があつたが普通に美味しくてたまに食べたくなるんだよなあ。

一匹の全長が五メートル程であるため解体の際に取れる食肉部分も多く、食べ盛りの子供並みに食べる冒険者たちへのメニューとして大助かりらしい。

「……焼き鳥とビールでまったりしたくなってきたな……」

何せ、ギルドは酒場も兼ねているため料理の匂いが広がっている。美味しそうな香りが充満している事もあつて食欲が進んでしまう。

たまにはそういう日もあつても良いかな、と酒場の方を見てしまうが今の年齢ではお酒が飲めないのもあつて損している気分になってしまう。

それに醤油ベースのタレが付いているポピュラーな焼き鳥はこの世界には無い。大概が塩を振っているか香辛料で味付けしたものが多い。

……いつそ、自分で出してみるか焼き鳥店。移動式屋台でギルド近くの大通りで販売すれば結構な収入を得られるかもしれない。

「……………コカトリスの討伐でも受けるか」

基本的にアークソーサラーは魔法対抗が高いジョブであり、特にデバフ等に分類される魔法に対する対抗が強い傾向にある。

そのため、石化対抗スキルを取っておけば石化で即死する事も無くなり、コカトリスがただなのでかい鶏に成り下がる訳だ。

……ジャイアント・トードの例からコカトリスの食肉部分は多いと判断していたが、そもそも美味しいのかコカトリス。

石化と言う強力な能力を持っているだけあつて高位寄りのモンスターとして認知されているためか流石に酒場のメニューには無い。

依頼のコカトリス討伐の紙を取る。内容を見ると農村地帯の養鶏家が飼育している鶏の中に何故かコカトリスが混ざっていたらしい。

餌遣りは壁越しなのでできるのだが、清掃中に石化されてしまう可能性があり飼育環境の悪化を懸念して早急な依頼完遂を求むとの事だった。

受付に向かって依頼受託の確認をし、紙を丸めて背囊に仕舞い込む。現地でこれを依頼者に見せる事で一種の割り札のような扱いになるためだ。

農村地帯へは馬で一時間くらい位置にあるため、馬貸し屋に向かって一頭借りる事にする。

「おつ、おんおんさんか。早速依頼に行くのかい？」

「ああ、そのつもりだ。トレントを貸してくれ」

「へいへい。あのプライドの高い馬を借りてくのはおんおんさんくらいだしな。いっそのこと買い取ってくれても良いぜ？」

「む、そこまで難儀する事か？ 普通に乗せてくれるが……」

馬貸し屋の年若い青年のケンドさんが苦笑する。彼曰く、最近借りるようになったトレントと言う馬は気品が高く、認めた相手しか背に乗らせない気質を持っている。

もつとも、女性や子供には優しい対応をするが、気に入らない男性だと触れさせる事すら拒否する徹底振りらしい。

そのため、見た目がかつしりとして気品のある容姿をしている立派な馬ではあるが、気性難のせいでお客を選ぶため人気が低いらしかった。

「お偉い騎士様の軍用馬の系譜らしくてな、だからその気質を継いでお堅い騎士みみたいな性格をしてるんじゃないかねえかなってのが見立てだ。実際、男性でも礼儀正しい奴には触れる事を許してくれるしな」

「触れるだけ？」

「そう、触れるだけ。乗せてはくれなかったみたいだ。そうなると馬を貸しておまんま食ってる俺らにあ扱いが難しくくてなあ。だからと言つて処分をするってなると惜しい馬でもある。なら、新進気鋭で駆け出し街道を突っ走るおんおんさんみたいな若い子に託すつて言う選択肢は悪い話じゃねえんだ」

「ふむ……、でもお高いんでしょっつ？」

「くはは、良いねそのノリ。実際、価値だけを見れば高い馬だ。だがまあ、さつきの理由で扱い辛いし、何より馬貸し屋の馬つてのが致命的だ。一部の客にしか貸せない馬は居ても困るのさ。先代の親父が仕入れた馬だから義理立ててたが、流石に一年もこうだと気が滅入らあ」

「代替わりの理由がぎっくり腰ですもんね……、死別とかならまだしも」

「そうなんだよなあ。普通に家に居るし、別にお気に入りつて訳でも無いみたいだし。元は百万エリスの一歳馬な訳だが……、轡や鞍とか込み込みで五十万エリスでどうだ？」

「ただけ厄介払いしたいんだ半値つて……。」

乗る人を選ぶと言う気質から個人に売る選択肢しか無いのは分かるが必死過ぎやしないだろうか。

そんな此方の葛藤を察したのかケンドさんは一つ溜息を吐いて、耳打ちするように顔を近づけさせた。

「実はな、前に視察しに来たアルダープっていう豚領主がトレントを見て気に入っちゃったみたいでな。流石に蹴り飛ばされるのが目に見えてる奴を近付かせる訳にもいかなくて、何とか誤魔化したんだ。どうせ忘れてるだろうけども方が一つて事はある。流石に領主の肩書を持っている奴にこのじゃじゃ馬をくれてやる訳にはいかんだろ」

「ああ……、そういう理由があったんですか」

「そういうこつた。どうせ売るなら気に入られてるおんおんさんに売った方が良いと思ってな。それに、聞く話じゃ高難易度のクエストも受けてたりする実力者つて話じゃねえか。なら、懐もさぞ温かいだろうってな」

「商売上手ですね」

まあ私とてトレントが欲しくない訳ではない。豚と揶揄されるような領主に貰われるくらいならポケットマネーを使うのも良いだろう。

ソウルから五十万エリスを取り出し、即決でトレントを買い取る。毎度、とケンドさんは良い笑顔でそれを受け取り、世話をする時の注

意点や食事などの情報を教えてくれた。

馬小屋の奥の方に居るトレントに会うべく二人で歩いていく。入口近くに置くとやかしかねないという判断だそうだ。

一番端に一馬の個室と化している場所にその馬は居た。逞しい肢体と屈強そうな筋肉美を感じさせ、端麗な顔に美しい双眸が格好良いイケメン馬。

一番の特徴としてはこめかみから伸びた短い角が生えている事だろう。他の馬には無い特徴であり、先祖返りでモンスターの特徴が出たのではないかと考えられているらしい。

だが、珍しい一方で見方を変えれば魔物種とも取れるために厄介払いのため安値で売られた経緯があるらしいが、私としては特段気にしている訳でも無い。

華奢で華美な長剣よりも重厚で武骨な大剣の方が好きな私にとっては、容姿の良し悪しは二の次であり、実際に乗った事で分かるその力強さと逞しき、そして何よりも知性の高い馬である事の方が大切だ。

「実は次におんおんさんが来たら売れるように色々と準備はし終わってたりするんでさあ」

「用意周到な事だな。私を買わなかったらどうするつもりだったんだ？」

「くははっ、そりゃあ無いさ。俺ら馬飼いは馬を見て人を見る職業だ。その人に合わせた馬を貸せるのが一流ってもんだ。トレントはおんおんさんが駆るに相応しい知的な馬だ。霊験あらたかな事を成す馬だろうし、こんな名馬、いや、霊馬は滅多に居ない。んで、そんな性能美の塊みたいな馬をおんおんさんが見逃す訳が無いだろうってな」
「……随分と買ってくれるじゃないか。それ程の事をしたつもりは無いんだがね」

「いやなに、親友のカルグを助けてくれた恩人に対して出来る事をしたいと思っただけさ。それに、その方がこいつのためにもなる」

そう言っただけでケンドさんはトレントの首に手をそつと添える。優しくも紳士的なその行動をトレントは嫌って離れようとはしなかった。

敬意を持つて接する者にはその身に触れる事を許す、そんな心情を察する事のできる光景だった。

「さあ、こいつを自由に使つてやつてくれ。何れ世界に名を遺すであろうおんおんさんならこれ以上の馬は居ない筈だ。霊馬トレント、愛すべきアークソーサラーの半身として活躍してくれる馬になる事だろうさ」

「ああ、その期待に応えられるよう頑張つてみるよ」

「あ、因みにトレントは高級な干し草をそこそこ食べるくらいの食欲だから、維持費は結構高く付くぞ」

「ん、それは問題無いよ。呪術で契約して使い魔みたいな存在にするから」

「……………マジで霊馬じゃねえか」

「あはは、私は紅魔族だから魔力は有り余つてるからね。維持するコストも魔力で何とかするつもり。多分、トレントとなら親和性が高いと思うんだよね」

魔術師の使い魔は契約してパスを繋ぐだけだが、呪術師の使い魔は盟約によつて縛り付けるので扱いがちよつと変わる。

どちらかと言えば眷属みたいな呼び方が正解だろう。まあ、そこは結ぶ盟約の強さ弱さで変わるの、今回の盟約は強制力よりも協力性を強めるものにしたと思つている。

カードを取り出し、スキル『使い魔契約』を取得する。トレントの前に立ち、両手を差し出すと頭の良い彼は頭を下げて擦り寄るように預けてくれる。

額と額を重ね、『使い魔契約』のスキルを発動する。一本の線が額を通じて心臓へと向かい、お互いの存在を繋がった感覚を生み出す。

もう一度カードを見やればスキル欄に『霊馬トレント召喚』のスキルが刻まれていた。

「よし、これで君と私は一心同体だ。私が死ぬまで君は死なないし、私の魔力で生き延びる存在になった。人馬一体の関係を築いていければ良いと思つているよ。これからよろしくね、トレント」

「ブルルウ、ヒインッ！」

トレントは私の言葉を理解してか頷いてから嘶いた。手綱を掴む事無く私の後に着いて来るトレントの様子を見たケンドさんは感嘆の声を漏らし、お似合いだと笑顔で頷いて送り出してくれた。

アクセルの街中を乗馬する事は原則禁止とされているので連れ立って入口まで歩いて行く。

正門を預かる衛兵さんに一声挨拶をしてトレントに搭乗する。馬術用の製品も過去の転生者が残してくれたからか鞍などが揃っているおかげで乗りやすい。

人や馬車が多い正門近くは歩いて進み、人通りが疎らになった道路からは徐々に速度を上げて走らせていく。

少女であり物理的に軽い私は重荷では無いと言わんばかりにトレントは速度を上げて行き、本来一時間程は掛かる農村地帯への道のりを半分くらいの時間で踏破してしまった。

「……やっぱり格好良いなあ君は。君を私の物にできたのは本当に幸運だった」

「ヒインツ」

「可憐なお嬢さんを乗せて走る事ができて光荣だって？ ふふふ、随分と紳士的だったんだな君は」

「ブルルルウ……」

「あはは、私もこうして意思疎通ができるようになって嬉しいよ」

「ヒンツ」

使い魔として契約したからかトレントの考えている事が脳裏にテレパスのように聞こえるようになり、紳士的な青年のような声が響いてくる。

本当に良い買い物をしたものだなど農村の入り口が見えて来た事もあり、下馬してトレントの首に手を添えて撫でてやる。

いやほんと、この子が居ればアルカンレティアまでも一日で踏破できるとは驚きやなからうか。

「家の庭に小屋を作って貰わなきゃな。それまではまたケンドさんのところでお世話になろうか」

「ブルル」

「えっ、庭で良い？ 屋根無いよ？」

「ヒヒン」

「……そっか。忠義者だね君は。できるだけ早く作って貰おうね」
「ブルウ」

「……………いや、流石に私の部屋で寝泊まりはできないよ？」

「ヒイン……………」

私の事好き過ぎだろうこの馬。寝食を共にしたいだなんて言い出すとは思ひもしなかったぞ。

宥めるために首筋をぽんぽんと叩いておく。流石に通ると思つて無かつたらしく、一声鳴いて大人しくなった。

農村へと足を運んだ私は依頼者である養鶏場を営むファルダッツさんの所へと向かう。

途中、トレントの格好良さに惹かれてか視線が集まっていた事もあつて、後ろに着いて来る農民の方々が意外と多かった。

まあ、農村だし娯楽もあんまり無いだろうしな。コカトリスの討伐だなんて見世物があれば見たくもなるのも頷ける。

養鶏場へと足を運ぶとビール腹が特徴的な男性が此方を見て良い笑顔で近づいてきた。

「すみません、冒険者ギルドの依頼を受けたアークソーサラーのおんおんと申します。ファルダッツさんでよろしかったでしょうか？」

「おお！ 早速来て頂けるとは有り難い！ 一刻も早くあのコカトリスを何とかして欲しいと思つていたのですよ！ ええと、お一人です？」

「はい。基本的にソロで活動しています。実績が気になるようでしたら、どうぞカードをご確認ください」

「ああ、これはどうも……………えっ、っ……………えっ？ ……………こ、此方お返しいたしますね。失礼な事を申し上げました、すみません」

カードの裏には討伐履歴と言うものがあつて最近倒したモンスタ―などの記録が残るようになっていた。

ギルドの専用の機械を使えば日時等の確認もできるが、今まで何を

倒したかと言う魚拓めいた大雑把なものであればカードの裏面を見せるだけで事足りる訳だ。

最近倒した一撃熊や初心者殺しなどの記録が残っている筈だから実力を示せた事だろう。

ファルダツツさんの様子から私が見た目に反した実力者であると理解してくれたようで、後ろに着いて来ている農民の方々も感嘆の声が漏れていた。

「そ、それではコカトリスの居る場所までご案内致しますね。室内ですのでもちらの立派な馬は残してくださると嬉しいですよ」

「はい、分かりました。そう言う事だからトレント、此処で待ってて。あ、もし盗もうとした奴が居たら蹴り飛ばして良いよ」

「ヒインッ！」

「いや、流石に無理だから。狭い所で君が暴れたら養鶏が死んじやうから」

「ヒヒヒン……」

「うん、分かってくれて有難うね。この子とは使い魔の契約をしているので意思疎通ができるんです。なので、このまま縛らずとも大人しく待っててくれると思うのでご安心ください」

「ええ、勿論ですとも。高位の冒険者の方の言う事ですから、納得しますとも。では、此方へどうぞ」

ファルダツツさんが此方のご機嫌を伺いながら話しているせいとか、若干居心地が悪い。

いや、別に実力を盾に強制するつもりとか無いからさ……。

まあ、農民の一人であるファルダツツさんたちは冒険者と比べて経験値を得る機会が少ないからステータス差で実力行使されると負けると踏んでのこの対応なのだろうけども。

さつさとコカトリスを倒して帰るか。そう内心で溜息を吐きつつ、養鶏場の奥の方へと歩いて行く。

コケツコケーと言う養鶏たちの甲高い鳴き声の合唱が聞こえてくる中、輪唱に失敗してやけに耳に入ってくるコカツコカーと言う低い鳴き声が聞こえる。

コカトリスの鳴き声ってコカなのか。ほんとかこの世界のモンスタ―安直過ぎやしないか、とテンションが駄々下がりしていく。

もつとも、案内しているファルダツツさんは辺りをきよろきよろと凝視するように警戒しているようで、私とのテンションの差で風邪をひきそうな感じである。

「ファルダツツさん。多分、コカトリスっぽい鳴き声が聞こえたので此処まで大丈夫ですよ」

「ほ、本当ですか?! ああ、大変申し訳無いが、自分は此処までです。コカトリスの容姿は養鶏と全く以って違っているので直ぐに分かると思います。では、ご武運を!」

そう言ってクラウチングスタートばりの速度で入口へと走って行ったファルダツツさんの背を見送る。

警戒しているのだらうけども臆病な性格のせいで台無しである。明らかに今のドタバタでコカトリスに気付かれた事だろう。

近くにある柱に身を隠しつつ、手鏡を取り出して奥の方を見やるとそれは居た。

黄色い羽毛の鶏のように見えるが、細部を注視すると羽根が被膜付きのものであるし、尾羽があるべき場所にはよろよろと鎌首をもたげる蛇の胴と顔が生えていた。

……そんな奇妙なキメラめいたコカトリスが養鶏の中に埋もれていた。

ちっさ!? いや、あれだけ小さいから養鶏に紛れ込む事ができたのか。幼体と言う訳だな。

……幼体、だよな? それにしては見た目が成熟した鶏のそれと酷似しているのだけだ。

コカトリスの周りで石化した養鶏は居ないようで、それ以外に石化していきそうなものも無い。

「……………何と言うか、普通に鶏に育てられたコカトリスって感じじゃないか? これ……………」

養鶏場は放し飼い形式らしく、卵を産みやすいスペースだけを作っているだけの簡易なものだ。

何となく憶測するなら黄色い羽毛と言う事からひよこの時に此処に混じって育ち、大きくなった事でその差異から存在に気付いたって感じじゃなからうか。

手鏡を戻して柱から出る。そして、ゆっくりと歩きながらコカトリスに近付いていく。

興味深そうに近付いて来る養鶏たちに交じってコカトリスも近付いて来て、しゃがみ込んだ私の目の前に来てコカーっつと鳴いた。

「……鶏じゃん。獣に育てられた人間とか、そういう感じで鶏に育てられたコカトリスじゃんこれ……。討伐するの？ これを？ よく見たら可愛いんだけど……ちっちゃいし」

成長すると大きくなるのだろうか。そんな事を思いつつ、慎重にコカトリスに手を伸ばして優しく掴み上げる。

すると特段抵抗無くコカトリスは持ち上がり、不思議そうな顔で此方を見ていた。

……石化すら放ってこないんかい。野生の本能を置き去りにした家猫ならぬ養鶏かよ。

「にゃあ」

「こかーっ」

頭の上のちよむすけが鳴き、コカトリスがそれに返すように鳴く。ちよむすけがちよつかいを出そうと前足をぶらぶらとさせるが届かない。

……どうしよう。ちよつとだけ情を抱いてしまったので首を絞める訳にもいかなかった。

抱き抱えたコカトリスを膝の上に乗せると自分の脚で立ち、そしてそのまま座ってしまった。

そして、ふるふるすると震えたかと思えば太腿に何かが転がって来た。「……コカトリスも卵産むんだなあ……」

ほかほかの生卵がそこにあつた。ソウルに変換し、見やれば以下のような文章が載っていた。

——コカトリスの無精卵。魔力の詰まった卵で非常に美味しいが、殻が石のように固い。

……ちようど新鮮な卵が欲しかったし、連れて帰るか。先程取得した『使い魔契約』を使ってコカトリスも契約しておく。

無事に一本の線が繋がった感覚が生まれ、スキル欄に『鶏獣コカトリス召喚』のスキルが刻まれていた。

「……帰るか」

「こかー」

流星に喋る知性は無いのか同意の感情が返って来る。なんかもう、呆れて疲れて来たぞ。

養鶏場の入り口へと向かい、胸に抱いたコカトリスのもふもふ具合を満喫しながら出ると首を傾げた農民の方々が其処に居た。

「ぼ、冒険者様!? そ、そちらのコカトリスはいつたい……?」

「その、人懐っこい様子でしたので下手に討伐するよりも契約で縛った方が安全と考えまして、こうして無効化した次第です。契約主の権限で石化のスキルは封印しているのでご安心ください」

「そ、そうでしたか! 因みに被害はどんな感じだったでしょうか?」
「その……、多分ひよこに混じって此処に連れて来られたのでしょうか。普通に他の鶏と同じように生活していたようで、特段抵抗もされなかったので被害は何も無いですね」

「へ? ……そう言えば、やけに骨格の強いひよこが居たような……。まあ、何にせよ解決してくださってありがとうございます! 何かの拍子にモンスターとしての本能を取り戻していたら大変な事になっていたでしょうし。依頼紙の方を貸していただけますかな?」

「あ、はい。サインの程宜しくお願いします」

ファルダツツさんに依頼紙を手渡し、下の方の解決の証拠となるサインを書いて貰う。

これを提出すれば予めファルダツツさんがギルドに渡した報酬を貰えると言う訳だ。

そんなこんなで依頼が終わってしまったので、精神的に若干疲れてしまったのでさっさと帰る事にした。

トレントの背に飛び乗り、ファルダツツさんたちに一礼してから帰路に着く。

「帰ったら巣箱を作ってやらないとな……。これで新鮮な卵を得られるからマヨネーズも作れるようになるな。……コカトリスにサルモネラ菌って居るのかね。というかこの世界にサルモネラ菌がそもそも居るのか……?」

まあ、最悪食中毒になるだけだから私には問題無いか。一度自分で試してみれば良い話だ。

先程回収した卵を後で食べて見る事にするか。単体でコカトリスの卵ってどんな味がするのか少し気になるところではあるし。

もう一つの問題はコカトリスの全長がどうなるかだ。今後すぐすと育っていくとなると飼えない可能性が出てくる。

一度ギルドで調べて見た方が良さだろうなあ。

コカトリスをもふりながらトレントを走らせ、アクセルの正門前にあつと言う間に辿り着く。

うむ、やはり足があるのは良い事だ。移動速度が恐ろしい程違うから大変便利だな。

「と、止まれ! いや、止まってください! 何故モンスターを懐に抱いているんですか!」

正門を通り過ぎようとしたら私の腕の中に居るコカトリスを見てぎよつとした顔の衛兵さんが近寄って来た。

まあ、鶏抱えて入るような人は居ないだろうから当然の申し出だろう。

「ひよこに混じって養鶏として育てられたコカトリスでして、使い魔の契約をしているので石化のスキルは使えないようになっていきますのでご安心ください」

「へえ、成程。……じゃねえんだわ!? そもそもモンスターを入れるのが不味いって話だからな!」

「では、許可を取れば宜しいんですね? 何処で手続きすれば宜しいでしょうか」

「ええと……、おおい! 通行許可証の奴連れて来てくれ! 至急!」

「お、おう! 少し待ってろ!」

衛兵さんが他の衛兵さんに声を掛けて責任者を連れて来てくれる

らしい。

数分程待つっていると如何にも文官と言った様子の方が衛兵さんに連れられて来た。

慌てて走って来たのか息が切れている様子で、申し訳ない事をしたなど少し罪悪感を感じた。

「ええと、聞く話によればそちらのコカトリスは、ええと」

「おんおんです」

「あ、はい。おんおんさんの使い魔になっているとの事でしたね。カードの方を確認させて貰っても宜しいですか？」

「はい、此方です」

「受け取りますね、ええと……、………ほ、本当のようですね。高位冒険者の方でしたか。でしたら、此方の用紙にサインの程をお願いできますでしょうか。内容としては、モンスターの管理についての契約となります」

文官さんが手渡した用紙の内容を一字一句確かめて読み込む。内容としてはモンスターの管理を許可するが問題が発生した時は全責任を負えよ、と言うものだった。

多分、これが使い魔化していないモンスターであればもつと色々問題になっていたのであるが、基本的に契約主に逆らえない使い魔であった事で穩便に済ませられた訳だ。

こうして念書にサインする事で使い魔を操る契約主に対しての責任を負う規則になっているのだろう。これから新しい家族になるコカトリスを捨てる訳にもいかなないので念書にサインを刻んで返した。「はい、ではこれで書類の方は大丈夫です。基本的に家屋の外に出さないよう管理の程お願いしますね」

「分かりました。お手数掛けました」

「いえいえ、こつそりと持ち込まれていないので此方も助かりました。今後、モンスターの使い魔が増えるようでしたら治安維持局の方で手続きをお願いしますね」

「了解しました。ありがとうございます」

「いえいえ、それでは」

文官の方が帰って行き、衛兵さんたちもほっと安堵しているようだった。

「すみません、使い魔であれば問題無いかなど思ってしまったていました。入る前に尋ねるべきでしたね」

「あー、そういうや魔術師系の職業だと使い魔のスキルを覚えるんだつたな。こつちも失念してたぜ。てつきり真正面からモンスターの密輸してるのかと思っちまったわ」

「あはは……、流石にそんなアホな真似はしませんよ」

「それもそうだな。大声で対応しちまってごめんな、教訓として覚えておくから許してくれ」

「いえ、此方こそすみませんでした。お仕事の方頑張ってくださいね」

「応。クエスト帰りだろ？ お嬢ちゃんもゆつくり休みな」

「はい、そうします」

まあ、何事も無くて良かったな。トレントのドンマイと言う感じの感情に苦笑しながら、今度こそシェアハウスへの帰路に就いた。

トレントのおかげで夕方前に帰って来れたので夕飯を作る時間は残っている。

……まあ、疲れたから少し手を抜いても良いかな。キャベツが美味しい時期になってきたし、一撃熊の肉を使って鍋にでもするかねえ。

コカトリスの巣箱も作らなきゃなあ。取り敢えず木箱とクツションで良いかな……。

ギルドへの報告は明日に回そう、そうしないと帰って来る二人の夕飯を作れないからな。

9話

家に帰ると既に灯りが付いており、鍵も開いていた。

どうやら久しぶりに私が最後に帰って来たらしい。普段は二人を夕飯の支度中に出迎える事が多いから少し新鮮だ。

トレントを庭に放ち、番犬ならぬ番馬の役割を命じておく。ふんすふんすと鼻息荒く頷いてくれたので頼り甲斐があった。

使い魔の契約を交わしているため意思疎通は離れていても可能なので非常に便利だ。

……もつとも、トレントは私が好き過ぎるのか数分おきに何かしらの言葉を囁いて来る。

そのどれもが求愛か口説きのそれなので、割と返答に困るのが実情である。

お前の前世、馬の特徴を持った人間めいた種族でレースに出てたりしないだろうな？

あんまり鬱陶しいと嫌いになるぞと脅してやればスツツと声が控え目になった。物分かりの良い子は好きだぞ、とフォローしておくのを忘れない。

「……はあ、なんか疲れたな。ただいまー」

そう玄関口で声を掛ければ、リビングの方から薄っすらとおかえりーと言う声が聞こえてくる。

やはり、我が家は良いな。特に誰かにおかえりを言っただけで貰える家と言うのが素晴らしい。

そこそこの金額でシェアハウスを決めた甲斐はあったようだ。

リビングに向かうと既に私服姿になってくつろぐゆんゆんとゆんゆんの姿があった。

二人してテーブルでトランプパワーを作っており、対決でもしているのか何処か急ぎ気味だった。

ギルドで暇を潰している時に遊んでいたのか、はたまた前から遊んでいたのかは分からないがゆんゆんの方が優勢らしい。

頂上の二枚を立てれば勝ちと言った具合で、対してめぐみんは上段

二段が残っている。

「ただいま」

「おかえりなさい、随分と珍しいですね。おんおんが最後に帰って来るなんて」

「おかえり、おんおん。確かに、何かクエスト行つてたの?」

「ああ、そんなところだ。……ところで、二人に相談事があるんだが此方を見てくれないか」

「今、真剣勝負の真っ最中なんで——「こかーっ」——えっ!? 今渋い感じの鶏の鳴き声しませんでした!?」

「い、今こかーっって鳴いた!? そんな鳴き方する鶏なんてコカトリスぐらいじゃない!」

あ、マジでコカトリスの鳴き声はこかーっなのか。二人して此方を見たせいで風圧により、タワ―は呆気なく崩れ落ちた。

「あっ」

二人のしまったと言う声色の言葉が漏れ、努力の成果が水の泡になつた瞬間であつた。

特に最後の二枚を乗せようとしていたゆんゆんはダメージが大きいらしく、肩を落としていた。

胸に抱く黄色い羽毛のふわふわボディと尾蛇の何とも言えないつるりとした感触を楽しみつつ、二人に見せつけるように掲げる。

「実はコカトリスの討伐に向かったんだがな。ひよこに紛れてコカトリスの幼体が混ざつたまま育てちゃつたと言うオチだったんだ。見た目も可愛いし、つい衝動的に使い魔にしてみました」

「えっ、使い魔契約のスキル持つてるんですか?」

「ああ。馬貸し屋で一頭馬を買つてな、その時についてに取得したんだ」

「あ、あの、窓からこつちを見つめてるあのお馬さんの事?」

ゆんゆんの言葉に釣られて窓を見やれば、慈愛を秘めた眼差しで此方を見やるトレントの姿があつた。

どうやら口説く代わりに見つめる事を選択したらしい。

……まあ静かだから良いか、問題無し、ヨシッ。

「ああ、名前はトレント。女性と子供と紳士だけには紳士的なお馬さ
んだ。因みにオスだぞ。結構力強いからあんまりおちよくらないよ
うにな」

「……そう言えばおんおん馬欲しがってましたもんね。アクセルへの
道のりも馬を使ううだなんて言ってますし……」

「えっ、此処から里まで相当な距離あるけど……」

「おんおんだしなあ……」

何か言いたげな視線を向けられ、少し気落ちする。

別に良いじゃないか馬、馬だぞ。自転車や自動車の無いこの世界だ
と馬車が主流だ。

それに、旅人や冒険者が馬に乗って旅するとか普通に格好良いだ
ろ。

何で君ら紅魔族なのにそういう泥臭い武骨な浪漫に対して反応薄
いんだ……。

「……何か変なイメージ定着してないか私に。良いじゃないか別に
……、交通の利便は良いに限るだろ」

「あつ、その、貶していた訳じゃないですから！ だからすねないでく
ださいー！」

「すねてないし」

「ごめんなさい！　そうですよね！　一家に一馬有って良いですよね
！　なんかこう、良いと思いますー！」

ボキヤブラリー貧弱かよめぐみん……。本当に学院の成績優秀者
か？

あそこ中二病の巣窟な訳だからそう言う言い回しのために語彙力
とか高める環境にあると思うんだが。

慌てて私に抱き着いて必死に宥めにくるめぐみんの抱擁に少しだ
け気分が持ち上がる。

……コカトリスが私とめぐみんにサンドイッチにされ具と化して
いるのはどうにかするべきだろうか。何やら庭でトレントが羨まけ
しからんと騒いでいるし。

「何をしているんですかゆんゆん！　このままでは夕飯のピンチです

よ！完全にテンションが下がった時のおんおんはガチのダウンー化するんですから！基本的におんおんは面倒臭がりで、普段は私のために過保護なくらい世話を焼いてくれるんです！今も忘れません。水と塩の入ったコップを手渡されて。完全に冷え切った瞳で、夕飯だぞ喜べよ、だなんて塩対応された時は本気で心折れ掛けましたからね!？」

「えっ!? あめぐみにべったりで過保護つてくらいに優しくしてくれてるおんおんがそんな対応を!？」

ああ……、あの時か。確か、めぐみんが調子に乗って夕飯を早くしろーとせがんで煽ってきたんだっけか。

生理中で苛々していた私がめぐみんの小生意気な煽りに対応するのも面倒臭かったのでそうしたんだった。

その後、めぐみんがガチ泣きして「捨てないでください！調子に乗り過ぎました!」と泣きついたんだっけか。

「……はあ。まあいいや。めぐみん、何か夕飯のリクエストある?」「え、あ、はい！ええと、は、ハンバーグ！ハンバーグと言うのが良いです!」

「ハンバーグ?」

はて、紅魔の里でハンバーグは売っていないからめぐみんが知る訳無い筈なんだが。

デミグラスソースを作ると言うのは割と難易度が高いため、王都などのガチめの定食屋さんくらいでしか見かけないらしい。

前に共同した時にアクセルの料理事情を教えたのだが、日本食は薄っすらと浸透しているだけで家庭に並ぶ事はあんまり無いと言う認識らしい。

まあ、料理好きな転生者がレシピを残さない限りはこの世界に残る訳が無いからな。

残りかすを集めた挽肉を丸めたなんちゃってステーキみたいな扱いでなら存在しているが、ハンバーグと言う名称で通じている訳では無い。

故に、ハンバーグと言う単語をめぐみんが知っている事が疑問に

思ったのだ。

「えつと、ああ！　そうでした！　おんおん、私たちついにパーティに加入できたんですよ！」

「へえ、そうだったのか。それはおめでとう。何処のパーティに入っただんだ？　テイラーさんのところか？　それともファルブンケさんのところか？」

「ええと、そのお二人の所は既にお断りされてしまいました……。実は、同じ駆け出しのカズマがメンバーの募集をしていたのでそれに乗った感じなのです。冒険者とアークプリーストの組み合わせだったので、攻撃職である私たちは都合が良かったようでしたね」

「カズマ……？　誰だ？　ううむ、此処最近でギルドに立ち入る者であればある程度名前と顔が一致するんだが、すまないが分からんな」
「えーつと、その、カズマさんは昨日の午後に募集を出したみたいで今朝お試しでパーティを組んだって感じなんだ。だから、丁度おんおんはすれ違ったんじゃないかな」

「それに、ギルドに登録はしたものの昨日まで土木作業員のアルバイトに精を出していたと言う事なので知らなくても仕方が無い気はしますよ」

「ふうん……。まあ、何にせよ変な事をされないようにな。まだ十三歳とは言え、君らは可愛い女の子なんだから。恋人でも無い相手に粗相されては将来困るからな。ちゃんと相談するんだぞ？　——首を縊り落として、蘇って来れないように骨まで燃やし尽くしてやるからな」

ついつい力を強めてしまい瞳が発光する。めぐみんが後退ってゆんゆんとひしつと抱き着いて恐怖で震えてしまった。

おつと、想定以上に低い声が出してしまった。怖がらせるつもりは無かったんだがな……。

って、なんでトレントとコカトリスも震えてるんだ。視線を向ければ何故かこくこくと頷いている。何に頷いているんだか……。

「んで、そのカズマさんからハンバーグを教えて貰ったのか？」

「は、はい！　クエスト帰りに少し酒場で休憩した時に話題に出たん

です。私たちを見てからメニューを見て、そーいやハンバーグ無いんだな、って呟いてたんです」

「ふうん、……成程ね、そう言う事か。因みに、年齢は幾つだった?」「ええと、確か十六って言ってたような? アクアさんは……秘密ってウインクされましたね」

「なら、カズマくんか。君らを見て何やら劣情の籠った視線は受けたりしたかい?」

めぐみんとゆんゆんはお互いを見て小首を傾げた。だが、めぐみんだけが視線が下がって豊満でたゆんたゆんなところを凝視して睨み付けていた。

ああ、うん、ゆんゆんの胸に釘付けだったのか。ゆんゆんのたゆんたゆんは年齢と比べても大分豊満だからな。

まあ表立って鼻息を荒くするようなタイプでもなく、性的な興奮を覚えるロリコンでも無い訳か。理性があって何よりだ。

恐らく、そのカズマくんは転生者だろう。私と同じ勇者候補である筈だ。

……まさか、な。確かアクアってアクシズ教が崇める女神の事だったよな。んでもって、アクセルに来た日に神々しい魔力の昂りが生じていた。

………そっかあ。カズマくんは転生特典として女神アクアを選んだのか。

道理でめぐみんたちに手を出すつもりが無かったのだろう。となると、あの時ギルドですれ違った男女がカズマくんとアクアさんか。

アクセルに来た高揚感で見落としていたが、そう言えば少年の方はジャージを着てたな。連れの女性も水色の綺麗な人だったような……。

ふむ、女性を特典としたのだし、色々とずっぽりとした関係なのだろう。

特典を盾に夜な夜な性欲的にプレイをして、それに飽きて来たから冒険者として働き始めたと言う感じだろうか。

………めぐみんに鉄製の首輪を付けて裸で夜な夜なプレイ、か。

良いな、実に良い。

……。
感度が良いめぐみんの事だ、可愛い声を漏らしてくれる事だろうな

情欲の孕んだ視線をめぐみんに向ける。きよとんと首を傾げる無垢な姿を見て――。

「落ち着け馬鹿あつ!」

「おんおん!」

何頭の中をピンクに染めてるんだ。正気に戻るべく両手で顔を叩く。

……ふう、わたしはしょうきにもどった!

ううむ、やはり禁欲的な生活で溜まってるんだろうか。新しいのを執筆すれば幾らか発散できるだろう。新作、書くかあ……。

「……………ふう。ハンバーグだったな。作って来る」

「あ、はい。だ、大丈夫ですか?」

「大丈夫だ、問題無い」

直後にボコボコにされそうな台詞を吐いてから、若干茹だった頭でキッチンへと歩いて行く。

おっと、コカトリスを胸に抱いたままだった。濡れ布巾で足を拭ってからリビングに解き放つ。

新しい場所で興味が尽きないのかコカトリスはあちらこちらを見やって探索を始めたようだった。

「あ、そう言えばおんおん。このコカトリスって名前付けてるの?」

「ん? いや、特段考えてないが……、そうだな。ヒヨトリウス……、いや、ヒヨトリアだ。卵を産むから雌だしな。仲良くしてやってくれ」

「うん! 新しいお友達になってくれると良いなあ……」

「……頼むから人間の友達も増やすんだぞ」

「う、うん!」

ひよこみみたいなコカトリス、略してヒヨトリス。そのままだと安直だから有名な名前を模してヒヨトリウス、その女性名でヒヨトリア。壊滅的なネーミングセンスの紅魔族からすれば程々に良い名前で

は無かろうか。

まあ、深淵を歩く騎士のようになるかは分からんけどな。鶏サイズだし……。

さてと、ヒョトリアを放ったし、取り合えず着替えてくるか。

手洗いうがいをしてから二階に上がり、カルラ衣装をハンガーに移し、部屋着に着替える。

キッチンへと戻り、ソウルからバタン牛の肉塊を取り出し、まな板の上で包丁を使って挽肉にしていく。

バタン牛は極度のビビリ症を患った牛の一種であり、驚くとその場にバタンと倒れる事で有名だ。

それだけを聞くと変な牛なのだが、実態を知ると恐ろしい牛であると分かるだろう。

近付いてきた肉食動物に対し気絶して倒れた振りをして、鋭利な角を突き刺して振り回し、傷跡を広げて返り討ちにすると言うアグレッシブな自衛をするのである。

獲物に短角を突き刺す時の威力は鉄の盾を貫通する程であり、生態を良く知らない者に対して初見殺しを發揮する。

……里の森で偶然出会ったバタン牛にまんまと引っ掛かって脇腹に風穴開けられた時は本気で死を覚悟したものだ。

その時にソウルの奥底にエスト瓶が収納されていた事を知って事なきを得たんだったか。

ほんと、九死に一生を得る経験だったな。それからは見た目に騙されないように気を付けるようになった訳だ。

「よし、初めてのハンバーグだし、繋ぎは無しで行くか」

アルミのボウルなんてものは無いので木製のボウルをさつと濡らしてから挽肉にした牛肉を移す。

流水で手を冷やしてから、岩塩を振って挽肉を潰しこねていく。あんまりこねすぎると手の熱が入りべちゃついてしまうので手早く混ぜ、形を整えながら空気を抜いていく。

六つ成形したハンバーグを作って木製トレイに並べて置く。うむ、掌が小さいから一個一個が小さく感じてしまうなあ。

まあ付け合わせを増やすか。木箱からジャガイモを取り出して鉄串を突き刺して活〆し、包丁で皮に切れ込みを入れてから鍋で茹で上げる。

水を張った木製ボウルで皮をつるりと剥き、一部残ってしまった芽の部分を取り除いていく。水を捨て、木製ボウルの中でじゃがいもを潰し、塩コショウで味を調べてマッシュポテトを作る。

野菜の乾物と干しキノコを小さな寸胴鍋に入れて煮込んでいく。ベーコンを足してポトフもどきとして汁物にする。

流石に今からデミグラスソースを作るには時間が掛かり過ぎるので、ケチャップ風のトマトソースを搾えるか。

魔道冷蔵庫から低温睡眠中のトマトを取り出し、鉄串をへたの所に差し込んで活〆する。

「……ほんと、なんで野菜を活〆しなきゃならないんだか……」

手元でぴくぴくと痙攣するトマトを見やりながら溜息を吐く。

気を取り直して包丁でへたを取り、先程ジャガイモをゆでた鍋でさつとゆでて湯剥きする。

フライパンでトマトを潰しながら煮詰めていき、水分が減り始めたら魔道冷蔵庫から瓶に入れて冷やしたお手製チキンブイヨンを取り出して加える。

チキンブイオンは鶏骨を野菜と煮詰めて白湯スープにし、最後にコーラーゲンを混ぜて冷やして固めたものだ。

流石にお手製なので一カ月保たないが、スープなどにちよくちよく使うので痛む前に使い切れているので問題無い。

煮詰めてとろっとしたら塩で味を調べて小鉢に移し替える。ハンバーグはそのまま食べても普通に美味しいので後掛けできるようにしておきたいからな。

フライパンに油を引き、ハンバーグをじっくりと焼いていく。その隣で溶けだした肉汁を絡めながらアスパラをソテーしていく。

平皿にマッシュポテトとアスパラを盛り付け、綺麗な焼き色が付いたハンバーグを二つずつ並べていく。

主食は取り置きのお白パンがあるからそれで良いか。本音で言えば

白米が良いが、二人が食べ慣れてないからなあ。

流石に一人だけ食べるのもアレだし、今回はパンで妥協だ。

スープの味を調べてカップに入れて完成だ。流石に三人分を一気に持つていく事はできないのでリビングの方へ顔を向けて……、つて、なんでこつちをじつと見てるんだ二人とも。

「ほああ……凄く美味しそうです……。これがハンバーグ……」

「料理も凄くいけど調理過程が凄く手慣れてて、お母さんの背中を見てる気分だった……」

「こかー」

あ、ヒヨトリアの食べるもの忘れてた。ゆでたコーンで良いかな。ささつとトウモロコシを半分茹で上げて包丁で種をそぎ落とす。

これはヒヨトリア専用の木皿にするかな、と適当な浅めの深皿にコーンを入れて床に置く。

こかこかーとありがたいがどうの感情を此方に送ったヒヨトリアが啄んでいく。

「トレントに夕飯あげるから、出来上がったそれ配膳しておいてー」

「はーい」

めぐみんたちに配膳を任せ、トレントには……生のにんじんでいいか。四本程活めにし、庭に繋がる窓へ向かう。

にんじんを差し出すとバリボリと美味しそうに食べていく。四本目を差し出してから、リビングに戻って清掃用に予備に置いておいた清潔なバケツを持って行き、庭で『クリエイトウォーター』で作り出した水を入れてやる。

嬉しそうに飲み干すトレントのお代わりの声に応えて三杯程足してやる。……後で半樽に替えよう。そう見えないように振舞っていたがバケツだと飲み辛そうだった。

まあ気遣いを言葉にするのも無粋であるし、それとなく明日にでも替えといてやるか。

リビングに戻ると円卓テーブルに配膳し終えた料理をまだかまだか見つめている二人に苦笑する。

「待たせたな。これがめぐみんが食べたがっていたハンバーグだ。本

格的なものだとソースが違うが、まあこれでも美味しいだろうから今日はこれで勘弁してくれ」

「とんでもないです！ おんおんが作ってくれる料理は全部美味しいんですから文句なんて無いですよ！　じゆるり……」

「あはは……、めぐみんお肉好きだもんね……。かく言う私もちよつと限界……、凄い美味しそうだもんこれ……」

「ふふふ、作り甲斐があつて何よりだ。それじゃ、食べようか」

「「いただきます」」

目をキラキラと輝かせながらフォークとナイフで食べ始めためぐみんとゆんゆんを見つめる。

うっとりとした様子で美味しそうに頬張る姿に思わず笑みが零れる。こんなにも美味しそうに食べてくれるんだから作り手冥利に尽くと言うものだ。

ケチャップ風味のお子様ハンバーグではあるが、我ながら美味しく作れたと自負できるくらいのも出来栄えだった。

「んん、美味しいです。これ何てお肉ですか？」

「バタン牛だよ、バタンキューでお馴染みの」

「ああ、あのびっくりしたら倒れる牛ですか。……え？　あれって家畜化が難しいって言われてて高級じゃありませんでしたっけ？」

「う、うん。数は揃えられても交配が難しいから主に狩猟でしか食べられないって話だよ。よく手に入ったね」

「里の外でたまたま遭遇してね。仕留めてあつたんだよ。流星に一匹分しか無いからそう多くは無いかどね」

「へえ、そうだったんですか」

「ああ、ちなみに外で見つけても近寄っちゃ駄目だからな。バタン牛は気絶した振りで自分を狙う敵を油断させて、近づいたら頭の角で突き刺して暴れるからな。ほんと痛いぞ。めっちゃくちゃ痛いからな。近づかずに魔法で仕留めるなら良いが、気絶してるだろうってナイフで首を切りに行っちゃ駄目だからな、約束だぞ？」

「……まさかと思うのですが、返り討ちに？」

「……………ちゃんと仕留めたからノーカンド。次は無いさ」

気恥ずかしさからそっぽ向いたが、円卓テーブルなので丸見えだろう。

致命傷だろうとエスト瓶二口で回復できる身体だからな。

ゲームと違って即死さえしなければ瀕死の重傷でも根性でエスト瓶を飲めさえすれば前線に復帰できる。特典様様だな。

……二人からの視線が痛い。そりやまあ知らないところで幼馴染が死にかけてましただなんて聞けばそうなるか。

「まあまあ、その一件で私も考えを変えたんだ。今は安全第一に生きてるから安心してくれ」

捨て身で戦う必要なんて無いなど考えを変えたのがちようどその頃だ。

私とて人間である、それも少女だ。痛いのが好きって訳じゃ無いので、大怪我を負った事でその事に気付けたのは僥倖だったと言える。

マジで痛かったからな……、生前に胃腸炎になった時以上に痛かった覚えがある。

遠い目をしているとめぐみんが溜息を吐いて、じつとりと睨むのを止めてくれた。

「仕方がありませんね。おんおんはそういうところ微妙に不器用ですから……」

「何と言うか、仕事はかっちりしてるのに一人の時の私生活が自堕落、みたいな感じなんだねおんおんって」

「ぐふうっ、……仕方が無いだろう、面倒じゃないか。どうせ……」

あつぶね、死んでも生き返るんだからどうでも良いだろ、と続けかけた口を止める。

はあ、やはり私の根幹は不死人としてのそれが強いな。特に考え方が。

めぐみんと出会う前の生活で心の贅肉をそぎ落とし過ぎた弊害だろうなこれは。

前提が不死であるから常識の天秤が揺れまくってるので、普通に生きるめぐみんたちの在り方とぶつかるとうこうして不安定な部分が見えてしまう。

……まあ、一番の問題はソウルを渴望するこの飢餓感だろうけども。モンスターなどからもソウルは得られるが、日頃からソウルの輝きを見ているが故に人へと視線が向いてしまう時がある。

私がソウルを得るには私自身がとどめを刺さなければならぬよ。遠くで死んだモンスターや誰かに倒されたモンスターなどはその人の方へ経験値として入るようだ。

共同している際に非常にもどかしい思いをしたのを思い出す。ゲームなら適当にくたばった奴も手に入るのになあ、と。

如何せん、ここは現実。乖離しているのは当然の事だろうと現実を飲み干さねば生きていけない。

「誰も見てないし、つてところですかね。おんおんそういうの気にしがちですし」

「実際そうだろうか？ 人に見られる部分くらいは取り繕っておかないとボロが出るじゃないか」

「……まあ、おんおんの場合、見えたボロが意外なギャップになって好感度上がるんですけどね」

「そうなのか？ 私としてはそういうボロはあんまり出していないと思うのだが。」

首を傾げる私にめぐみんが額に手を当てて溜息を吐く。どうしてそこで私困ってますアピールをしたんだめぐみん。困らせた覚えは無いぞ？

「あるえ曰く、おんおんの魅力は、気の知れた頼り甲斐のあるお姉さんが時たま魅せるずぼらな一面の親近感から来る愛おしさ、だそうですよ。ほんと、それに振り回される身にもなつて欲しいです……」

「ふうん、あるえがねえ……」

「……ん？ 何でそれでめぐみんが振り回されるんだ？ めぐみんを見やれば頬を染めてそっぽ向かれた。」

「可愛いかよめぐみん。ううむ、良く分からないがめぐみんにも通じる私の魅力と言う奴なのだろうか。」

私と違ってめぐみんは普通のノーマルだろうから、男友達的な見方でもしているのかねえ。

そう内心で独り言ちしているとめぐみんが意味深な溜息を吐いた。ううむ、女心は難しい。私とて女である筈なのにさっぱり分からん。やはり、中身が伴わないと駄目なのかもしれん。

「……はあ。この話は此処で終わりにしておきましょう。ええと、それで明日から私たちはそのカズマとクエストを受けていく感じだまともりました」

「そっか。それは大変喜ばしい事だ。おめでとうめぐみん、ゆんゆん。初のパーティ入りだからと言って無理に合わせる事は無いからな。無理な時はちゃんと無理と言って示すんだぞ。それでも無理矢理しようものなら——」

「分かってます！ 分かってますから瞳を輝かせないでください！ 私たちと同じの筈なのに妙に迫力あるんですよねおんおんのは……」

……右目にダークリングが浮かんでいるからかもなあ。威圧感を増す可能性があるとするればそれぐらいだろう。

別に勇者候補ならソウルの輝きが強くて美味しいんだろなあだなんて思っではないんだぞ。

……ほんとだぞ？

「取り敢えず、明日はジャイアント・トード狩りの続きになると思いますが……ゆんゆんのおかげで飲まれはしませんでした、やっぱり良い気はしませんね……」

「あはは、まあまたアクアさんが飲み込まれて足を止めたのを倒す感じになるんじゃないかな」

「ジャイアント・トードか。それなら一応短剣を腰に忍ばせておくの良いぞ。万が一、飲まれた後に地面に潜られたらそのまま連れてかれるからな。内側から脱出する手段を用意しておいた方が良いでしょう。後は毒薬とかだな。カエルは異常物を飲み込むと吐き出す習性があるから、そう言った小物も用意しておくが良いぞ」

「そうなんですか？ なら、明日は雑貨屋に寄ってからギルドに行きましようか」

「そうしよっか。私は『ブレード・オブ・ウィンド』があるけどめぐみんの爆裂魔法はお腹の中じゃ使えないしね」

「流石に巨大カエル相手に自爆は嫌ですね……しよぼすぎます」

上級魔法の派生魔法である爆裂魔法を取得しても上級魔法のそれらを扱える訳じゃ無いしな。

アークウイザードの魔法スキルの基本ツリーが初級、中級、上級魔法とすれば、爆裂魔法は上級魔法から派生する特化魔法に当たる立ち位置だ。

これはテレポートと称される空間転移魔法と同じ立ち位置であり、その魔法スキル一つで成り立つ扱いをされる訳だ。

なので、こういった特化魔法は上級魔法までの基本ツリーを完成した後取るのが一般的な考えだ。

めぐみんのように何かしらの意図があって特化魔法を先行する者も居るだろう。

特に空間転移魔法はそれだけで一生涯の職業として成り立つので取っついておいて損は無いのだから。

「……まあ、ジャイアント・トードの唾液はめっちゃ臭いって話だから飲み込まれないようにな」

「そうですね……、アクアが泣いてトラウマになってたぐらいですし……」

「うん……、凄く臭かったね……」

スプレータイプの消臭剤だなんて便利な物は無いからな。唾液を拭ってから水洗いするしかないだろう。

と言うか仮にも女神であるアクアさんが飲み込まれていたのかよ。

いやまあ、アークプリーストだと昇天系の魔法くらいで後は物理で殴る事ぐらいしかできないか。だが、それなら普通別の得物を使うとか工夫するだろうに……。

案外、カズマくんとやらに出し抜かれるような女神だし、おつむが悪いかももしれないな。

そんな事を思いながら私は一つ小さく溜息を吐いたのだった。

10話

……ふう。午前中に家事や洗濯などを終わらせて、トレントとヒョトリアの寢床と生活雑貨を一通り揃え終えたらもうお昼の時間になつてしまつていた。

随分とお母さん業が手に付いてきてしまったな……。めぐみんとゆんゆんは正反対な感じで手の掛かる娘たちだから飽きがこなくて良いな。

調理が面倒なのでキャベツにオリーブオイルと塩で丸かじりして昼食を終え、午後は何をするかなと珈琲を淹れる。

雑貨屋にインスタントコーヒーが売つていたのを見た時は度肝を抜かれたものだ。

やはり居たのか、過去にもカフェイン中毒の社畜転生者が。

いやまあ、普通に珈琲が好きつてだけかもしれないけどな。こうして日常的に常飲するなら特にこだわりが無ければインスタントな粉の珈琲の方が楽で良いし。

コーヒーミルとか買ってこだわってみるか？ めぐみんとゆんゆんは子供舌で飲めないから私だけが楽しむ事になるな。

そうなる共と共有財産から出すつてもアレだし、ポケットマネーを使うか。

……二人が無事にパーティ入りした事で共同でクエストを受ける理由も無くなつたし、金欠つて訳でも無いので依頼を受ける理由はあるまい無いなよなあ。

苦め濃いめで淹れた美味しい珈琲を啜る。うむ、前世で飲み慣れたあの糞不味い黒い物体は珈琲では無かつたんだ。これこそが珈琲だな、そう独り領いた。

「ぶるう、ぶるるるう」

「は？ 自分も飲みたい？ これを？」

「ひんっ」

「うーむ……。馬に珈琲って大丈夫なのか？ ビールは飲めるって聞いた事はあるが……」

まあ、今は使い魔の状態だし、状態異常になるくらいで死にはしないか。

熱いのは流石に飲めなさそうだから一度お湯で溶かしてから水を入れて冷やしてやる。

流石に瓶一本分を飲ませる訳にもいかないのだから少量を舐めるように飲んで貰うけどな。

それでもトレントは私と同じ物を飲めるからか非常に喜んでいて。私の事好き過ぎるだろこのイケメン馬……。

深めの皿に入れてやり、庭から顔を出すトレントにやるため床に置いてやる。

すると待つてましたと言わんばかりに舌を伸ばし、周りに飛び散らないようにかゆつくりとしたペースで舐め取っていく。

「びん、ッ!?!」

「苦いって……、そりゃ珈琲だからな。苦いだろうよ。仕方が無い牛乳足してやるか……」

「ひいん……」

「けど、美味いって? ……まさかと思うが私がそのまま飲んでるかどう飲みたいって事か?」

凶星だったようでトレントがそつと顔を逸らした。羞恥心が顔に出たら耳まで真っ赤になってそうな様子である。

まあ、そこまで愛されて嬉しくない訳では無いので甘んじて受け取ってやるでしょう。

ふーむ、外に出るのも億劫だな。家で他に何かやる事は……あつたっけ?

ああ、そう言えば官能小説の新作を書こうかなって考えてたな。

メイドスキー伯爵シリーズにするか、それとも別にするか……。連番で良いか、面倒だし。

地味に前置きな設定を考えるのが面倒なんだよなあ、こういうのつて。

エロ漫画なら雑な導入でも受け入れられるのだろうけども小説となるとそうもいかない。

地味に下地と言うか世界観の土台が重要なのだ。

私が前に書いた『メイドスキー伯爵の優雅な性生活』は、辺境伯爵の所に主人公にしてヒロインのメイドの少女が奉公に来ると言う導入から始まる。

借金返済のため身売りさせられたメイドが伯爵に優しく迎えられ、心を許し始めたところで伯爵の裏の一面を知ってしまい、忠義心と乙女心が揺れる中ドスケベ調教されると言うストーリーだ。

この前書いた一巻分の内容は半分が日常生活で後半が調教生活……だったっけ？

二階の自室から出版前に確認として送られて来た小説をさらっと読み返し、未だ羞恥心の方が勝るくらいの調教度で終わっていたのを確認した。

「ぶるるるう？」

「ん？ これか？ 私の書いたえっちな小説だ。待て待て待て、怒涛な勢いで読みたいアピールするんじゃない。大体読めないだろう、これ共通語で書かれてるからまずは文字の読み書きからだろうが」

「ひん？」

「は？ 読める？ 何で？ ……使い魔として繋がってるから知識もある程度入ってるって？」

「ひんっ」

「……………マジかよ。いやまあ、確かに指示出しのためにある程度はそういう認識を揃えておかないといけないのは分かるが便利過ぎるだろう」

「ぶるる、ぶるう……」

「いや、困りはしないけどさ……。流石に自分の小説を開いて読み聞かせるのは勘弁だぞ。内容的にも」

「ぶるるるるう、ぶるう、ひいひいん！」

地面に置いてヒョトリアにページを捲って貰うから問題無いだあ？

自分の前足でやったら蹄と体重で小説が駄目になるから必死に考えた策のようだ。

「……で、そんな感じなんだけどヒヨトリアはどう思う?」

「こかつ」

「だよねえ」

「ひいんっ!!」

めんどくせつ、と言う感情がヒヨトリアから送られてくる。うん、まあ、そうだよなあ。

トレントが嘆くようにして突っ伏して膝を突いてしまったが、協力を得られなかったのだから仕方が無いんだ、うん。

心成しかヒヨトリアのトレントを見る視線が冷たい気がする。まあ、女の子に官能小説読むの手伝ってくれだなんて普通頼まないわな。

そんなアホみたいな遣り取りにくすくすと笑みが零れる。めぐみんたちが居ないから少し寂しい気持ちではあったが、トレントとヒヨトリアが居てくれるから寂しくないな。

……もしかして、トレントが私にこうして積極的に構ってくれアピールしてるのはそのせいだったのか?

少し気落ちしているのが精神的なパスで気が付かっていたのだろうか。そうなるとこの申し出も案外冗談交じりのものかもしれないな。

……その割には本気で慟哭しているように見えるが。

「若いなあ。性欲を持って余すのも仕方が無いけど、時と場合を考えろよ?」

「ひん……」

「こかつ」

分かっています……と言う落ち込んだ返答に、ヒヨトリアの疑念の追撃が飛ぶ。

あはは、既に上下関係が出来ているようだ。まあ、物理的にもヒヨトリアはか弱いからしっかり守ってあげてくれよ私の馬騎士くんよ。さて、内容を考えるんだったな……。

……この世界って獣姦とかってどういう感じなんだろうな。

実際にモンスターも居る訳だし、ゴ布林みたいなのがゲスの極み

扱いされている事からモンスター姦の延長線上にあるのだろうか。

流星にこれは別シリーズだな。女騎士を拷問するみたいな感じの題材で書こう。

まあ、上中下巻と言う感じにして、そろそろ堕ちますよって感じぐらいにまで攻めてみるか。

何なら世界観だけ纏めて、外伝と言うか同じ世界線での別の話として他のシリーズを書いてみるのも面白いかもしれない。

……と、方針が定まったからか原稿用紙に内容を書き込んでいく速度が上がっていく。

うむうむ、良いぞー。裸に鎖付き首輪で屋敷内で露出プレイとかさせちゃうぞー。

「……駄目だ。集中力が切れた。今日は此処までだな」

時間にして二時間ちよい程執筆にのめり込み、大体二万文字くらい書いて筆がノリにノった。

この世界の小説は大体百ページくらいが一般的だ。

パソコンに内容を打ち込んでバババーつと印刷できる訳では無いので、羊皮紙サイズに横書きで版面擦りが基本なのである。

そのため三桁の大台に乗る百ページ、これが文庫本や書籍として本にするための最低枚数として扱われているようだ。

聞く話によるとドルイド系列の職業の人が木板に変形魔法を撃つて版面を作るとか。

本来であれば木を武器にしたり盾にしたりする魔法らしいのだが、手彫りするのが面倒になってきたと言う理由で試しに抜擢した所大活躍したらしい。

随分と俗っぽいドルイドだなあとは思いますが、結局人間楽な方が良いのだから仕方が無いのだろう。

ある意味ドルイド関連の職にもスポットライトが当たるようになったと考えるべきなのだろうな。

「さてと、自室に仕舞って来るか……」

うっかり外に出して二人に見られたら羞恥どころの話ではない。

恥ずかしさのあまり自ら首を切り落として死にかねない。

何せこういった小説は作者の性癖を元に書き起こしていると言って過言ではない。

万人に好かれようとして官能小説を書こうとする奴は居ないのだ。溢れ出る性癖を書き狂いたいからこそ書いているのであって、性欲のアウトプットによる発散がメインなのだから。

自室の鍵の付いた木箱に仕舞い込み、しっかりと施錠したのを確認して指差しヨシツする。

さて、夕飯を作ろうにも微妙な時間帯だな。ちよつくら雑貨屋でも見にぶらついて時間でも潰そうかな。

「ちよつとだけお散歩に行ってくるから留守番お願いね」

「ひんっ」

「こかー」

「ありがと、じゃ、行ってきまーす」

一応揉め事が起きても大丈夫のようにカルラ衣装に着替えて出て行く。

ギルドから発せられる緊急クエストがあつたりするらしいので、こうして冒険者はフリーな時でも戦衣装に着替えておくのが鉄板らしい。

なので外で冒険者に出会ったらその時の服装が普段の戦衣装であると言う訳だな。

それにしても盗賊関連の職の女の子の露出度高過ぎやしないか………？

特に、あそこの胸だけを隠すようなトップブラ型の上に、ショーツと黒いレギンスの少女みたいな感じで非常にけしからんのが多いのである。

盗賊の共通スキルに軽衣服みたいなのでバフのかかるスキルでもあるのだろうか。

無いのであれば、斥候とかして毒草とかに露出してる肌を切ったら大惨事だし、トラップの付いた宝箱の解除に失敗したりした時に死亡率が上がるんじゃないだろうか。

「ひゃっはあ!! ジャックポット! 大当たりだぜえ!!」

「か、返して!! 私のパんつを返してえええ!!」

「……………ええ」

何やら対峙していた少年が『ステイール』と叫んだら少女の方が股間を隠して泣き喚いていた。

ステイールとやらをしたらしい少年は白いパンツを振り回して喜び吠えていた。

喜び方が斬新だな。普通振り回す事はしないと思うんだが…………。

と言うか少年の姿に見覚えがあるな。年期の入ったよれたジャージに黒髪の若い少年。

…………あれがまさかとは思うがカズマくんなのでは？

紅魔族くらいしかこの世界では黒髪は居ないので、それ以外となると日本人の転生者くらいだろう。

…………連れ合いと思われる金髪のナイスボディな騎士っぽい女性が少女の方を見ながら恍惚とした表情でぞくぞくと身体をくねらせているのは何故だ。

傍から見ればかなりやばい集団にしか見えない。しかもここ広場の近くだぞ？

辺りを見やればひそひそと彼らを見て話し合う人たちが多し。

それなのに彼らはそれに気付かず変態コントをしているようであつた。

「…………うむ、大丈夫か？ めぐみんなちを預けて本当に大丈夫なのか…………？」

どうやら少女はカズマくんから盗つたらしい小振りの布袋を差し出しているが、その程度の値段ならこれは我が家の家宝になるぞと脅されて泣く泣く大きな布袋を差し出していた。

この世界では前世のサイズの財布だと金貨などが入らないので、あして布袋を財布代わりにするのが鉄板だ。

つまり、ぱんつを盾に少女の財布を巻き上げた場面と言う事になるのだが…………。

「…………すまない、通報した方が良いか？」

「ん？ ああ、いや、あれはクリスも悪かったからな。じゃれ合ってい

るようなものだ。クリスは遺跡やダンジョンで稼いでいるからな、流石に全財産では無いだろうよ」

「そ、そうか。じゃれ合い、じゃれ合いかあ……」

いやまあ殺傷沙汰になっていないから問題無い、のか？

無理矢理だったらクリスさんと言う少女も反撃に出るだろうしな。

あの短剣、何かしらのバフが掛かっているのか薄っすらと魔力を帯びているようだし結構なレア物だろう。

「そうだ。公衆の面前であんな破廉恥な酷い目に遭わせるだなんて……最高じゃないか！」

「……ええ」

どうやらこの女性も個性の強いタイプらしい。話の内容からして被虐願望、それもそれをオープンに晒せるポテンシャル付きだ。

そんな痴女みたいな内容を初対面の少女に言える度胸がある奴は普通ではなからうよ。

隣を見やれば呼吸を荒くして上気した顔で興奮している金髪の美人さんがエキサイトしていた。

……首輪付けて飼えないかな。だなんて前世の業がしれつと脳裏に現れるが、めぐみんたちの教育に悪いので理性が却下した。

「うう……、ちよつと物陰に行つて来るからダクネスは此処で待つて……」

「ああ、分かった。にしても運が良いな、カズマは。ピンポイントでパンツを剥ぎ取るとは……」

「あ、あはは……、いや、ほんと何でだろうな。これランダムで窃盗するスキルなのにな？」

ここそと樽が積まれた場所の裏に歩いて行つたクリスさんを送り、ほくほく顔だったカズマくんは話の途中で真顔になって困惑を露わにしていた。

金髪変態女騎士さんの名前はダクネスさんか。あんまり聞いた事の無い名前だが、もしかしたら先程のクリスさんとペアで活動していたのかもな。

そうなると三人以上の安定したパーティを優先して共同を持ちか

けていたので、ペアのパーティは見送っていたのでリサーチしていない。

それに遺跡やダンジョンを生業にしているのであればギルドで出くわさないのも頷ける。

……さて、現実逃避は止めよう。やっぱりこの少年がカズマくんだったか。

何と言うかぱっとしない一般的な少年って感じのルックスをしている。ジャージ姿も相まって若干芋臭いと言うか、出不精な印象を醸し出している。

先程の様子からしてえっちな事に対してオープンではあるが、ある程度は隠そうと努力するむっすりすけべ型の性格をしているらしい。

……実に思春期のエロ少年だな。この分ならめぐみんたちに手を出す事は無いだろう、ヘタレ臭いし。

「ええと、そっちの子は？」

「うむ、クリスとカズマの様子を見て心配になって通報するかを訊ねてくれた子だな」

「大問題だよ!? いや、その、俺も態とやった訳じゃ無いんだ。窃盗のスキル『ステイール』は基本的にランダムで装備を剥ぐスキルであって俺の意思は無いんだ！俺のステイールが勝手に！」

「ああ、うん。大丈夫だ。恐らく衣服も装備扱いになるんだろう。……まあ、流石にこんな初対面は嫌だったんだが……、仕方あるまい。どうも、カズマくん。私はめぐみんたちの保護者みたいな事をしている幼馴染のおんおんと言う。二人が君のパーティに加入しているらしいから挨拶をしたいとは思っていたんだが……」

「ごめんね!? 流石に俺もこのタイミングでとは思って無かったわ！ああ、うん。確かにめぐみんたちが言うようにめぐちやくちや常識人だ……。何だろう、最近濃い面子しか出会ってないから清涼剤みたいな感じがする……」

「は、ははは……、それはまた……、難儀なものだな？」

「分かってくれるのか、良い子だなあ……」

随分と感極まった返答が返って来て困惑の極みである。

先程の印象から一変して苦労人の印象に変わってしまった。

いやまあ、アクアさんは人成りを知らないが、爆裂馬鹿とコミュ障の極みの二人に、変態女騎士だもんな。

クリスさんは知らないがあの様子だと何処かしら変な人なんだろう、多分。

「そう言う特典でも貰ったのかい？ 何と言うか、優秀変質者誘引体質的な感じのとか」

「誰が戯言遣いだ。俺の特典は駄女神……んん？」

「まあ、そう言う話は今度二人つきりで話そうじゃないか」

「お、おう、いや、了解です、はい」

「ふふふ、別に敬語にしなくて良いよ。見た通りただの十三歳の小娘だしね」

此方が見た目通りの年齢では無いと感じ取ったのか、冷や汗を流し始めたカズマくんにとつと微笑みを返す。若干にへらとしたが、すぐに表情を戻すあたりやはりむつつりすけべな性格だなこの少年。

まあ、精神年齢は君より上だが、身体の年齢は見た目通りだ、安心して良い。

「いやあお待たせ。何か疲れちゃったからギルドに戻ろつか。……てえっ!?!」

「ん？ ああ、私の事はお構いなく。カズマくんのパーティーメンバーの知り合いと言ったところだ。今日は顔合わせくらいで十分だろうしな」

したかった事は暇潰しであって三者面談って訳でもなし。この様子だとギルドにめぐみんたちが居るだろうからそこに合流するのもアレだしな。

……にしてはクリスさんの此方を見る視線がおかしいような。

嫌悪と困惑の入り混じった感覚と言うべきか、何処となく不快感を感じる視線だ。

時折首を傾げつつ、私を凝視するクリスさん。最終的に唸って首を大きく傾げた事で解決には至らなかつたらしい。

ううむ、割と本気で思い至る事は無いのだが。まあ、一応ソウルの

強さを測っておくか。

瞳のピントをずらすようにしてソウルの感知に天秤を偏らせて……。

「まぶしっ!？」

調整した結果、めっちゃやくちや光り輝いていて視界が白く焼けてしまった。

何だこのソウルの輝き、明らかに人じゃないぞ。けれども、黒さが無いから人間性は淀んでいない、むしろ澄んでいると言って良い。

「だ、大丈夫か？」

「もしや、私の鎧で光が反射でもしたのか？ それはすまない事をした……」

瞳を押さえた私にカズマくとダクネスさんが心配して声を掛けてくれるが、それどころではない。

目の前のコレは何だ？ 今まで見た事の無い輝きを放つソウルを持つ人物。

いや、そもそも人では無い可能性が高い。人の皮を被ったナニカだ。

「……えっ、まさか見破られた……?？」

その眩きで確信した。こいつの自身は人じゃないナニカで、けれども淀みや汚さの無い純粹な何か……。

まさかとは思うがこの人、神様か？ 女性だから女神だろうか。人に連なる神であるならば、極致と呼べるソウルの美しさを持っていても可笑しくは無い。

………おおっと、まさかとは思うが、この人の正体……女神エリスじゃなからうな。

カズマくんの特典である駄女神、もとい、女神アクアがアクシズの女神であれば、この世界におけるもう一つの信教であるエリス教に存在する女神エリスが存在しているもおかしくない。

こうして人の皮を被って正体を隠し、名前も偽って活動していても何ら可笑しさは無い。

神様や女神と言う存在はそう言う超常的かつ非常識な存在である

のだから、出来ないことを探す方がよっぽど楽だろう。

「……すみません、ダクネスさんの鎧に反射した光で目が眩んでしまったみたいです。もう視界も戻ってるので大丈夫ですよ」

「やはりか。ううむ、モンスターに見つけられやすいようにピカピカに磨いたのが凶と出るとは……」

「ほんと余計な事しかしねえなこの変態クルセイダー」

「んんっ！ 急な言葉責めは止めるんだカズマ！ 時と場合を考えて、もつとしてくれ！」

「……見た目は良いのになあ。なんでこう、変なのしか来ないんだ……」

「あ、あはは……。取り敢えず私は素寒貧になっちゃったからダンジョンに行つて来るよ。ダクネスをよろしくね！ じゃあね！」

「あつ、おい！ 押し付けやがったな!? くそつ、……はあ、仕方が無い。戻るか……」

疲れた表情で肩を落としたカズマくんは此方に視線を向けた。

あれ、さつきお暇するつて言つた筈なんだが……。どちらかと言うと助けてくださいと言つた様子の視線を向けられてるなこれは。

ああ、うん、常識人が足りないのか。それでそのツケをカズマくんが払っているから、保護者である私を連れて行けばめぐみんたちの舵取りは問題無いので楽できる、と。

……いや、別に君らのパーティに混ぜて貰うつもりは無いからお断りなんだがね。

「それじゃ、私もこれで失礼するよ」

「お願いだから失礼しないでくださいよ！ 頼む！ 後生だから残つてくれ……！」

「あ、ちよ、掴むな！ ええい、こんな泥船に乗つてられるかつ！」

「こつちだつて必死なんだちくしょうめつ！ 何でもするから手伝つてくれ！」

「……ん？ 今何でもするつて言つた？」

「……あつ。ぐう……。お、男に二言は無い！」

ふむ、そう言う所は男らしさを出せるらしいな。

逃がさない様に掴まれた腕に込めていた力を抜くとカズマくんはホツとした様子だった。

……いや、単純に女の子に今の台詞を言われたから腹をくくっただけかこれ。

確かに同じシチュエーションであれば私も条件を後にしても言質を受け入れるかもしれん。

それにまあ、何と言うかこうも不憫だと可哀想と言った憐憫な視線を向けざるを得ない。

カズマくん、アクアさん、めぐみにゆんゆん、そしてダクネスさんの計五人のパーティか。

アクアさんが常識枠に入っていないとなると一対四で舵取りに支障が出るだろう。

……仕方が無い、あんまりしたくは無かったんだがある程度形になるまでは手伝ってやるか。

あくまで過度なキャリアはしない方向で、突発的なトラブルに対処する立ち位置に居てやるか……。

「……ふむ、まあ、仕方が無いか。私としては同じパーティに入ってしまったと役割を奪ってしまっただけだと思っただけだ」

「へ？ そうなんですか？」

「まあ、こう見えても中位くらい冒険者でね。駆け出しではあるものの実績は確りしたものだよ。ほら、カード」

「あ、はい。ご丁寧にどうも。……嘘だろ、バーニイ」

「ところがどっこい現実だ。それらはソロで狩ったモンスターだ。呪術を覚えるまでは弓一本で狩猟をしていたし、それ以降は言わずもがな。私の実力が分かるだろう？」

「そうですね……。その、本当にめぐみんたちと同じ年なんですか？ ベテラン冒険者のカードのそれなんですけど……」

「ああ、そうだよ。……あんまり女性に年齢は聞かないようになる？」

「あ、そうですね。すみません、デリカシー無かったですね」

「分かれば宜しい」

女慣れは……してなさそうだな。と言う事は生前は健全なただの

少年だった訳だ。

恐らくアクアさんである程度女性に慣れたと言う感じなのだろう。駄女神と称するぐらいだ、女友達くらいの扱いで接してきたのだろうなあ。

その割にはちよいちよい顔を赤らめているような、意外と初心なのかね？

そんな風に会話していると横合いからダクネスさんがしかめっ面でカズマくんに向かって行った。

「お、おい、私との遣り取りはそんな丁寧な感じじゃ無かっただろう。おんおんは私より年下なのになぜ……」

「さんを付ける、変態女騎士い！ おんおんさんは貴重な常識人粹だ！ 希少価値だ！ ぜってえ逃がしてたまるものか！ あらゆる手段を使ってでも誘い入れるぞ俺は！」

「最後の方の言い方不穩だぞカズマくん……」
と言うかその言い方でも興奮できるのかダクネスさん。筋金入りのドMだな……。

何で悦びを噛み締めるような表情を浮かべているのか……これが分からない。

取り敢えず、私はめぐみんとダクネスさんの手綱を掴んでいれば良いか。

カズマくんには特典のアクアさんと扱いやすいゆんゆんを任せようか。

……それに、ご両親からお願いしますと頼まれているのはめぐみんだけだしな。

次期族長として男慣れさせておいた方がゆんゆんのためだろう。いつか里を先導する時に男性に声を掛けられないようじゃ困るしな。

……別にめぐみんが取られる心配をしている訳じゃないんだぞ、本当だぞ？

ギルドへの道を歩いて行くと何やら視線を感じる。ああ、うん、先程の遣り取りで大分注目を集めていたみたいだ。

「あのおんおんちゃんを連れてるわよあの少年……」

「ちよつとした修羅場つてたみたいね、若いわね……」

「嘘だろ、なんでうちに来なくてあんなガキンチョのところに……」

「くっそ、俺に足りなかったのはあそこまでの熱意か……」

と言うか内容エ、主に私の事を眩かされてるじゃないか。

いや、待て、話の内容が変な方向に行つてないかこれ。

パーティーの話だよな？ 何か恋愛沙汰みたいなノリで話してないか？

くそつ、どちらにでも取れるせいで煽りにしか聞こえない……。

カズマくんを見やればたははと満更でも無い様子で素通りしている。

そりやまあ君から見ればこちとら女の子だからな、そりや少しは優越感に浸りたくなるだろうよ。

でもこつちからしたら良い迷惑である。男性とそう言う仲になる気は皆無だからほんと諦めて欲しい。

……けどそれを表立って口にするとも明らかに支障が出るよなあ。

マイノリティは打たれる定めか、儂いなあ……。

内心独り言ちて小さく溜息を吐く。此方に歩幅を合わせてくれるおかげか足取りは揃ったものだ。

ギルドへと戻つてくると奇異の視線が集まる。まあ、そりやそうだろう。

めぐみんたち以外で特定の人物と一緒にいた事はあんまり無いからな。

……おいそこの奴、何が俺のおんおんちゃんが、だ。

共同の時にちよろつと親切してあげたくらいだろうに、十三歳の子供にそういう感情を抱いてるんじゃないよ全く……。

「何と言うか、おんおんさん、人気者つすね……？」

「めぐみんたちのサポートのために共同で依頼を受けてた時期があつてね、その名残だよ多分。後はまあ、私がソロで依頼を熟してたから面白半分なところもあるだろうよ」

「へえ、成程なあ。そう言えば募集の紙貼ってましたもんね」

「ああ、そう言えばそうだったな、ついでに剥がしておくか」

そう一言断ってクエストボードの方へ歩いて行くと、そうはさせまいとずらつと今まで共同してきたパーティの人たちが横並びになつて阻止された。

「ええと？」

「それを、剥がすだなんて、とんでもない！」

「あの時の事が未だに忘れられないんだ！ 君が必要なんだよ！」

「毎日じゃなくても良い、都合の良い日でも良いから私の所に来てよ！」

「……ああうん、内容を更新するだけに留めておきな……？」

その言葉にホツと安堵の息を吐く皆さんが解散する。

何でこう、変な一体感を持つてるんだこの街の冒険者って。

長年居ると緊急クエストとかで連帯感でも強くなるんだろうか。それにしては必死過ぎやしないだろうか。

「……いや、恐らくおんおんが考えている事は間違ってますからね。普通におんおんがパーティに居た時の恩恵が強かっただけです。前衛中衛後衛のできるオールアタッカーで、家事やちよつとした出来事に対する対処も完璧に近くて、悪態や態度の悪さの欠片も無い品行方正な助っ人とか引つ張りだこになるに決まってるでしょうよ……」

「そうなのか……？」

「……はあ。おんおんは自分の魅力が分かってませんね、まったく……私が苦勞するんですからもっと自覚して貰わないと困ります」

「具体的にどう困るんだめぐみん」

「それは、その……、そうほいほいと他所に行かれたら私との時間が減るじゃないですか！」

何時の間にか出迎えてくれためぐみんの言葉に、家でいつもべつたりだろと返すのは流石に無粋だろうな。

喉まで出掛かったそれを飲み込んでおく。

こういう素直なデレは心に特効が掛かってほっこりするからたまにして欲しいな。

……ああ、そういう関係なのね、っていう視線は止めるカズマくん。私とめぐみんの関係は健全的でプラトニックなんだからな。

……だからと言って、分かっていますよみたいな視線も止める、恥ずかしいだろうがっ。

剥ぎ取った羊皮紙の一部をナイフで削り、報酬を割り勘に変えた。今まではめぐみんたちをよろしくお願いしますと言うお願いをメインにしていたのと、顔見せと実力を示すための試用期間のようなものだった訳だ。

こうしてめぐみんたちがパーティに入ったのなら自分の都合だけで良いので、ある程度顔も売れたようだし正規の金額を受け取る事にする。

手直した羊皮紙を張り直し、めぐみんたちの所へ戻る。どうやら依頼に行かずに酒場の方で昼の食事を取っていたらしい。

めぐみんに手を取られ、何故か扇子から水を出す宴会芸をしているアクアさんらしき青髪の女性と拍手している見物人に混ざっているゆんゆんの居る席へと連れて行かれてしまった。

……やれやれ、暇にならなさそうだなこのパーティは。そんな事を思ってくすりと笑みが零れてしまった。

11話

めぐみんに手を引かれて連れて来られたせいで辿り着いてしまったが、何か友人が居るから一緒の所に入るみたいな感じで気恥ずかしいものがあるな……。

テーブルには大型の食事は無く軽く摘まめそうなフライドポテトなどが主に並んでおり、明らかに遊んでましたと言う光景が広がっている。

ああ、うん。ジャイアント・トード討伐の打ち上げなのか、これ。

そう言えば続きをするって言ってたし、アレくらいなら午前中で終わるだろう。移動時間の方が長いくらいだろうしな。

「さあ、おんおんはこつちです！ いやあ、やるじゃないですかカズマも。このギルド随一の最高戦力をスカウトするだなんて！」

「ああ、うん……、実際には折れてくれたってのが正しいけどな……」
「あー……、おんおんですからねえ。多分、カズマの苦勞っぷりを感じて同情してくれたんだと思いますよ」

「歯に衣着せぬ言い方は止めろお！ 多分、めぐみんへの心配が八割くらいで加入してくれたんだと俺でも思ってるよ。カード見て絶句したわ、明らかにこんな駆け出しパーティに入るお方じゃねえからな」

「そうでしょうそうでしょう！ おんおんは凄いです！」

「……随分と嬉しそうだな？」

「そりやそうですよ。大切な人が褒められて嬉しくない訳無いじゃないですか！」

「あつ、ふーん……」

「ええい、止めんか!? 私を羞恥心で殺す気かっ!？」

めぐみん可愛すぎか、と言うか純粹過ぎる……！ 可愛いなあもう！

私専用の特化スキルでも持っているのかと言うぐらいに心にクリティカルヒットする言葉を投げ付けてくれるじゃないか。

私の心からの叫びにめぐみんは首を傾げ、カズマくんは肩を竦め

た。

そして、宴会芸で盛り上がっていた集団の主が漸く此方に気付いたようで、今日はこれで終わりねー、とあっさりとした解散の言葉を放って此方に歩いてきた。

「あ~~~~っ!! 貴女ね!」

「ど、どうも?」

突然指を指されて叫ばれてしまった。

青色の髪がさらさらと煌いて美しい、ほんのりと神々しさのあるアクアさんと思われる女性が突進するような速度で近付いて来た。

先程の暫定エリス神の様子からして私の正体が怪しいのだろう、となればアクアさんも似たような反応を取るのだろう。

がしつと私の両手を取って満面の笑みで彼女は言った。

「ありがとうね! 私の可愛い信者たちの面倒を見てくれて! 喜ばないな。アクシズ教の女神たるこのアクア様が直々に認めてあげる! 特別外部顧問としてこれからもよろしくね!」

「あ、はい」

可笑しいな? 明らかに反応が違うぞ? もしや、二人は敵対しているとか、派閥の違いから方向性が明確に違っていたりするのだろうか。

内心首を傾げながらぶんぶんと上下に振られる両手に込められた神聖な雰囲気で両手が熱くなる。

まあ、不死人と言ってもベースは人間であるからして、神々しいオーラで成仏って事にはならない。

……だが、私の人間性、特に闇術を扱うに当たって必要な黒い部分が悲鳴を上げている気がした。

ピントを調整しなくても確実にこの人のソウルの輝きは無垢の様に透き通っていて綺麗な色をしているに違いなかった。

「何か変な混ぜ物されてるみたいだけど大丈夫? 呪いと祝福が混じったような感じで、肉の筋が歯に挟まったみたいな違和感を感じるけど、浄化しとく?」

「えっ、そんな感じなのか?」

「そうね。具体的には白か黒かって言えば白なんだけどグレーっぽい
な、みたいな違和感よ」

「あー……、うん、大丈夫です。そう言う特典なんで」

「あら、そうなんだ。………もしかして、私がサボゲフンゲフン、休憩してた時に部下の子に送られた人かしら？ 結構な大目玉食らったらしいけど、貴方の育ちで評価を取り戻してたからよっぽど優秀なのね」

あちやー、やっぱり怒られては居たのか。すまんな天使さん。

弓での狩猟などで真面目にやってるアピールになったみたいだな。

……と言うかあの天使さんの上司アクアさんなのか。カズマくん
に駄女神と称される人だし、迷惑のベクトルが何か違うんだろうなあ
多分。

「元ヒキニートのカズマも見習わなきや駄目よ？」

「余計なお世話だ。お前もおんおんさんの爪垢煎じて飲んだ方が良い
んじゃないかねえか？」

「私が？ 見ての通り完璧な女神なんだから必要無いわよ」

「はいはい、そーですねー……」

言い返すのに疲れたと言う様子で私の反対側に座ったカズマくん、
その隣にアクアさんが座り、こっそりと戻って来たゆんゆんがめぐみ
んの横に座った。

私はどうすれば、と言った様子で立っていたダクネスさんだったが、
雰囲気に乗ると言った様子でアクアさんの隣に座った。

「あら？ カズマこの人もスカウトしてきたの？ 一気に二人もだ
なんて結構やるじゃない」

「いや、そっちは別にいらん」

「ごふっ、随分と切れ味の強いのを入れてくれるじゃないか。だが、良
いのか？ そのおんおんさんは多分私の事を含めてこのパーティ
に加入してくれたのだと思うぞ？」

「お前がそれを言うのかよ!? くそう！ 自覚してるならもう少し治
す努力をしろよ！ せめてプライベートだけにしとけ！」

「ふっ、そんな事をしては大衆の面前であると言うシチュエーション

が死ぬではないか！」

「……もうやだこの変態、無敵かよ」

あらら、死んだ目でポテトを齧り始めてしまった。ちよろいなラツキーと手籠めにしない辺り遊び人では無かったようだなあ。

ダクネスさん実にちよろいな感じがしているのだけれども。案外押しに弱く、言い包めたらそのままやれそうな雰囲気があるのは何でだろうな？

装備などは確りしていて、美容関連も良い物を使っているように見える。

もしや、お金持ちの道楽で冒険者をしているのだろうか。

または、没落貴族の令嬢だったけれどストレスのあまり被虐による快楽で心を保っているタイプだったりするのだろうか。

ううむ、人によっては過去の事は重いからな。聞き辛い内容であるし、気付かれない程度に憶測の材料を会話から拾っていくか。

「あ、おんおんちゃんは何飲む？ シュワシュワにする？」

「シュワシュワ？」

「うん、シュワシュワしててふわふわってなって美味しいのよ。すみませーん！ シュワシュワニっ！」

「いや待てアクア!? シュワシュワってクリムゾンビアの事だろが!? 酒は駄目だろ！」

「カズマくん……、この世界は中世ヨーロッパのようにワインなどが水として扱われるような流れを汲んでいるから子供の飲酒は問題無いんだぞ？」

「いやいやいやいや、駄目だろ、倫理的に」

「………すみませーん！ 焼き鳥盛り合わせも付けてくださーい！」

「あ、ちよ、おんおんさんはそういうタイプかあああああ!?!」

まあ、アクアさんのご厚意だし？ 飲める機会があるなら飲みたいんだよ私も。

折角の飲酒ができるならば楽しまねば不作法と言うもの。

クリムゾンビア、か。名前からして赤いビールみたいな感じなのだ

ろうな。

……隣から何か凄い視線を感じる。見やればめぐみんとゆんゆんが驚愕した表情で此方を見ていた。

「あの、まさかと思うのですが、の、飲んじやうんですか？」

「駄目か？ 私としてはもうその気なんだが」

「いや、その……、お酒って大人の飲み物じゃないですか。私たち、十三歳ですよ？ 興味があるのは分かりますが……」

「そ、そうだよおんおん。お酒って成長を妨げるらしいから駄目だつて」

「別に私としてはこのまま成長が止まっても問題無いんだけどな」

「ぐっ、そうでした。おんおんは容姿に対して最低限くらいしか気を遣わないタイプの人でした……！」

だって……なあ？ こんな成りのちんちくりんだぞ？ 成長も見込めないとなればもう諦めるしか無いだろうに。

私とてももう少し身長が欲しいなあと思った事はある。ハンドアツクスのリーチが伸びるからな。

私生活では別に困りはしないし、上の方に荷物を置かないようにすれば良い話だしな。

「お待たせしましたー、シユワシユワ二つに焼き鳥盛り合わせです」

「きたきた。それじゃ、おんおんちゃん、かんぱーい！」

「かんぱーい！」

「あ、ああああ……、見た目幼女が酒を嬉しそうに飲んでる姿とか脳が破壊されそうなんだが」

「ほら、アクアさんも焼き鳥どうぞ」

「あら、悪いわね。それじゃハツ貫おーつと」

「んぐんぐっ、ぷはあ、美味しいですねえ」

「ぐくぐくっ、ぷはーっ、美味しいわねっ！」

いやー、久しぶりのアルコールで気分が良い。

前世では現実逃避のための導入剤でしか無かったが、こうして昼から遊び呆けるために飲むだなんて思いもしなかったな。

焼き鳥も味が確りしておつまみとして最高だ。……やばいな、こ

の背徳感、嵌りそうだな。

「昼からお酒が飲めるだなんて……最高だなあ」

「うぐぐ、おんおんさんの知りたくなかった一面が目の前につ」

「んー、別に誰かに面倒を掛けてないから問題あるまいて」

「そう言う問題じゃないんですよ！ お酒は二十歳になってから！常識でしよう!？」

「なんだ、カズマくん、生前はそう言うの確りしてたタイプだったのか。……お酒ってのはな、嫌な現実を忘れるために飲むための睡眠導入剤だ。現実には疲れたら飲むのさ、キマるぜ？」

「駄目だこの人、典型的な疲れ切った社畜の人だよっ！ こっちでの生活は違ったでしょうに!？」

「……ま、それはそれ、これはこれだ。久しぶりで気分が良いんだ、これくらいは見逃してくれたまえよ」

「うあああああ、明らかに素が出てるっ。あの頼れるお姉さんなおんおんさんは何処へっ」

「あっはっは、そいつはもう居ないっ！ もう死んだんだ！ あっはっは！」

不死人だから死なないけどな私。

やばいな、久々に籠が外れたように気分が高揚している。

成程、確かにシユワシユワでふわふわだな。前世でもこんな風に酔った事は無かったが、環境が変わればそういうのも変わるもんなんだなあ。

アクアさんとカパカパとシユワシユワを飲み干していく。焼き鳥も燃料の如く追加され、大変気分が宜しい。

多分、状態異常の対抗値が高いから酔いの悪い部分が抑えられてるんだらうな。

流星にこんなに飲めば吐くだろって量を飲んでいる自覚がある。

アクアさんは……ああ、水の女神だもんな、ビアもまた水みたいなものか。飲み終えてから無害な水にでも変えてるのだらう。

「ふう……、久しぶりに満喫した気がする」

「うわあ、おんおんが今まで見た事の無いくらい満足気な顔してます

……」

「ふふふ、こうして入り浸るのも良いかもしれんな」

「駄目です！ もっと節度を持って飲むべきですよ!? 八杯も飲んでるじゃないですか！ ほら、もう駄目です！ お酒、終わり！」

「ええ……、せめて飲み切らせてくれ。一杯で終わりにするからさ」

横合いからめぐみんにコップを取られてしまった。ううむ、抱き締めるようにガードされているから奪い取れん……。

……仕方あるまい。あんまり駄々をこねて嫌われてもアレだしな。

ハツを噛み千切り、もぐもぐと咀嚼する。はて、これ何本目だろうか。結構焼き鳥頼んだ気がするな。

ちよつと塩分の取り過ぎかもしれん。この世界に硬水の概念はあるのだろうか、カリウムが欲しいんだが……。

「すまない、お水を貰えるだろうか」

「はい、今行きまー……っておんおんちゃん飲み過ぎじゃない!?」

まだ子供でしように！」

「アークソーサラードだからな。デバフ関連の対抗値が高いから、酒にも強いんだよ」

「へえ、そうなんだ。なら安心……かなあ？ まあ、程々にね。お水で

良かったかしら？」

「うむ、ジョッキで頼みます」

「はいはい、承りー」

あの人酒場のアルバイトしてたのか。前に共同したアーチャーの人だったかな。

二人でゴブリンを的にして殲滅した仲だ。……他のパーティーメンバーには引かれたけどな。

暫くして樽ジョッキのお水を持って来てくれたので、お礼を言っごごくぐくと飲んでいく。

……ううむ、若干お腹がたふたふになってしまった気がする。帰る時が大変だ。

「あんだだけ飲んでほろ酔いで済むのかよ、おんおんさん酒豪なんだな……」

「んー？ 多分、ステータスの恩恵だぞ。アークソーサラーは呪術を扱うデバフの職業だからな、転じてデバフ対抗値が高いんだよ。ダクネスさんのクルセイダーも、火力よりも防御重視のスキルが多いから筋力よりも体力とか防御力が上がりやすいんだ。職業補正つて奴だな」

「へえ、そういう所はファンタジーしてるんだなこの世界……。因みに冒険者は？」

「冒険者？ ……ああ、確か職業補正は無いが、その代わりにスキルをラーニングできる特性を持つてるぞ。その他の職業には無いから、ワソオフだぞ」

「へ？ 地味にコスト高いから不便だなと思ってたけど案外悪くないんだな」

「ああ。器用貧乏にもなれるし、方向を固めて極振りする事もできるのが冒険者の強みだ。最弱ではあるが、何にでもなれるポテンシャルを秘めている大器晩成型の努力職だ」

「おお……。なんか未来に期待が持てるな」

「まあ、カズマくんの立ち位置は前衛だからそれを踏まえてスキルビルドすると良い。最初にダクネスさん、その後ろが君だ。クルセイダーのスキルである『デコイ』で引き付けている間に、横合いから切り掛かっても良いし、盗賊系のスキルで不意打ちしても良い。どう組んでいくかは肉体次第だからな。剣を扱うなら素振りはした方が良いぞ。ソードマンの職業に就いている人に教えを乞うて剣術系のスキルを得ても良いし、クリスさんに盗賊系のスキルを学んでダガーなどの武器を扱っても良い。ついでに斥候みたいな事もできれば大活躍だ」

つらつらとビルドに関するアドバイスをしていく。

カズマくんはぼかんと口を開いて呆けており、めぐみんが何故か溜息を吐いた。

「言ったじゃないですか。おんおんはこう言う事がざらりと言える実力者なんですよ。相手の立場で物事を構築して伝えるのが上手いんです。ただ、あんまりにも正論な時もあるので耳が痛いんですよね」

……」

「いや、その……、正直此処までちゃんとした常識人だと思つて無くてだな……。さっきの光景のせいで未だに脳がボコボコにされた気分だけだな」

「ははは……、すまないな。何せ十三年振りなんだ、はしゃぐのは見逃してくれ」

「……う？ その歳にはまだおんおん産まれてないでしょうに」

「む、そうだったな。案外結構酔つてるのかもしれないな……」

一つ息を吐くと酒精の強さを感じられた。ううむ、割と本気で酔つてるなこれは。

思考のエンジンが止まったからか電源が落ちていくような感覚に陥る。

……ううむ、眠いな。くらりと身体が揺れてめぐみんにぶつかつて止まる。

ほんのりと衣服から漂う嗅ぎ慣れた匂いに心が落ち着く。

すまない、少し肩を借りるぞめぐみん……。

↑
↓
▽カズマのターン！へ

ね、寝ちまつたんだが……。

めぐみんの肩に頭を乗せてぐつすりくうくうと気持ちよさそうに寝ちまつたんだが……。

にしても……、可愛いよなあおんおんさん。

普段は気の知れた頼れる姉貴つて感じで、聞く話によれば家事も料理もできて、さつきみたいになベテランな一面もあつて、そしてこれだ……。

ギャップ萌えのスクランブル交差点みたいな人だな……人気者なのにも頷ける。

肩を貸すめぐみんも満更でもない感じだし、リアルロリ百合……。

尊いが過ぎる。

内心で拜んでしまうくらいに目の前の光景は尊いものであった。ぶつちやけめぐみんは中二病が過ぎるってだけで容姿は整ってて可愛いしな。

そこにダウンナー系姉御なおんおんさんが絡んだらもう……薄い本ができるレベルだ。

「そういえばアクア。転生特典にあんなのあったのか？」

「あんなのって？」

「ほら、おんおんさんのだよ」

俺はアクアの耳元に内緒話をするべく声を潜める。

「俺たち勇者候補ってのは一度死んでそのままの姿でこっちに送られるんだろ？ おんおんさんは恐らく転生者だ。なのに、こっちの現地人として生を受けてるだろ？ つまり、知識を持ったままこっちに産まれ直したって事だろ。そういうの見かけなかったんだが、もしかして別の所にあつた感じか？」

「んー……。一応異性に成れる特典スキルがあつた筈だけど、確か性同一性障害に苦しんでた男の子が貰ってカズマの時には残つてなかつた筈よ。一応、その身のまま送るのがルールだしね。……あ、そういうえば私の部下に天使の子が居るんだけど、サボりのために転生業務をやらせた時に何かやらかしたみたいなのよね」

「サボってんじゃねーよ……。その人も不憫な……」

「それでも無いわよ？ あの子からすれば出世してからじゃないとやれない業務を先んじてやれたんだから良い経験になつてた筈だし。……それに、こうして私がこっちに居るからその時の経験を元に業務を受け継いでる筈だもの」

普段のアクアとは思えない上司っぽい様子に少しだけ感心する。

何だこいつちやんとできる時もあるんじゃないか。

「ふーん……。まあいいか」

「何よちやんと答えてあげたのに……。まあ、いいわ。おんおんちゃんのおかげで気分も良いし、今回は特別に許してあげるわよ。で、話の続きだけど、多分、あの子ルールを破つたからお説教を受けたん

じゃないかなーって思うのよね。原則、転生者はその身その形のまま異世界に送り出すのがルールなの。おんおんちゃん凄い賢そうだから言い包められて、産まれ直す形で転生してるんじゃないかしらね」「って事は、あの姿は特典とは別って事か?」

「多分ね? 幼馴染って言ってたから擬態とか寄生とか入れ替わりとかも無さそうだし、見た感じ呪い寄りの祝福系のスキルを貰ったんじゃないかしら。分かりやすい武器を持つてる訳でも無いし」

「成程、確かにな。すっげえ武器を持つてたら普通持ち歩くもんな」

「そう言う事ね。だからおんおんちゃんは凄いのよ。あの実績を自分の力で成してるんだから」

「……加入してくれてほんと良かったな」

「そうね。私としてもアクシズ教徒が増えてくれるのは嬉しいもの」「は?」

アクシズ教?

聞く話によれば水の都市アルカンレティアに総本山を置く、こいつを崇めるやべー奴らじゃなかったっけ?

なんでそんな奴らの名前が出てくるんだ?

俺の疑問顔にふっと笑ったアクアがシユワシユワをくびつと飲んでから口を開く。

「私は女神だからね。この世界を一望できる権限は持ってたの。だから私の可愛い信徒であるアクシズ教の子たちを見守ってたのよ。ちようどカズマに拉致される数日前におんおんちゃんはアクシズ教のために真摯に叱ってくれたのよ。確かにちよつと甘やかし過ぎたかなって思ってたけど神託を下ろそうにも何を言うべきか分からなくて困ってたのよね。そんなこんなでおんおんちゃんはアクシズ教の特別外部顧問って言う肩書きを持つてるって訳。だから、私がおんおんちゃんを猫可愛がりするのも当然の事なのよ」

「……………うっそお?」

「ほんとよ? 実際、おんおんちゃんから私に信仰パワーがちよつぷり来てるからちゃんと敬つてもくれているみたいだし、ほんと良い子よね」

いや、申し訳無さでいっぱいなんだが？

要するにお前の尻拭いをしてくれてるんだろおんおんさんは。

そんな人を俺は自分可愛さにパーティに勧誘しちまったのか……、ちよつとだけ罪悪感が芽生える。

お前ももう少し悪びれるよな。頑張っておんおんさんへの負担を減らさなきゃな。

もう無理面倒だから抜けるって言われたら土下座してでも引き留めるから俺は……。

そう溜息をひっそりと吐いてシユワシユワを飲む。……ふう、少し落ち着いた。

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ 至急冒険者の皆さまは冒険者ギルドへと集まってください！』

と言う拡声器めいた大声がギルドの外から聞こえてくる。

緊急クエスト？ なんだそりやと辺りを見回せば他の冒険者の方々はやつたるぜえと言う感じでスタンバイをし始めていた。

文字通りに捉えれば何か厄介な事が起きたから全員で対処するぞーって言う感じで良いんだよな。

「ふむ、そういえばそんな時期だったな……」

然も知り尽くしたような声色でダクネスが嬉々とした様子で語る。

もしか、魔王軍による掛け出しの街への襲撃の時期なのだろうか。

確かに屈強な冒険者になる前の駆け出しの時に殺しちまえば人類の弱体は免れない。

……にしては、鬼気迫つたと言う感じの雰囲気ではない。

むしろ、儲けるぞと言った現金な感じが強いんだが。

「つて、そうだった。めぐみん、おんおんさんを起こして——」

「問題無い、もう起きている」

先程まで気持ち良さそうに寝ていた様子とは打って変わった真剣な表情のおんおんさんが居た。

その何処か冷え切った声に背筋が凍り、冷たい視線が辺りを見回すのを息を呑んで見ていた。

「アクアさん、解毒の魔法を貰えるか？」

「え、ええ。『デトファイケーション』」

「ありがとう、酔いは取れたな。緊急クエストか。カズマくん各員の戦闘準備を。後手に回るとしてもいざと言う時に動けるようにすべきだ」

「あ、ああ、分かった」

立ち上がったおんおんさんが身体を解しながら身動きができる恰好になったのを見て、俺も慌ててそれに続く。

他の皆もそれに感化されてか、思い思いに身体を動かしながら続々とギルドの広場に集まる冒険者たちの居る場へと歩いて行く。

あれ、俺がリーダーだったと思うんだがおんおんさんが前を歩いているかこれ。

……此処で任せきりにしたら今後もそうなりかねないな。少し足早におんおんさんの隣へと付く。

「良い判断だカズマくん。パーティーリーダーとして行動する時は前に居るべきだ。暫くは私が助言をするからしっかりと前に立ってくれ」
「は、はい、分かりました」

「して、緊急クエストらしいが他に何か聞いていたか？ 警報の途中で目を覚ましたから全文を聞けてなくてな」

「ええと、いや、内容までは言っただけだね。あ、そういうダクネス、何か知ってるようだったような」

「ふむ、そうなのか。となると危険度は低い案件なのかもしれないな。流石に襲撃が見えました、呼びました、行って来てください、だなんて悠長な事はしないでだろう。となれば、比較的安全なもの……ああ、そうか、アレの時期かあ……」

おんおんさんから漂っていた覇気が段々と萎んでいき、気怠そうな雰囲気が変わってしまった。

そして、辺りを見回して楽しそうにしている光景に合点がいったような素振りで頷いた。

「……カズマくん。この世界に来てアクセルから外に出た事はあるか？」

「い、いえ、昨日ジャイアント・トードを狩りに農村地帯に行つたくら

いんですね」

「成程な……、はあ。呆れずに聞いて欲しいのだが、この世界の常識は前世のそれと全く違うんだ。魔法が、モンスターが、というレベルではない。知ってるかカズマくん。この世界では秋刀魚が畑から取れるらしいぞ」

「……………はい？」

「この世界における野菜は活きが良い。自ら動き出して大陸を横断する程にな。恐らく、今回の騒動は春キャベツの大陸横断だろう。ガンダムハ口つて居るだろ、あんな風にキャベツが飛び回る。それを収穫するのが今回の緊急クエストの内容だろうな……」

「ええ……………」

これを言ったのがアクアならふざけんなと叫ぶところだが、常識人でありこの世界の先駆者であるおんおんさんが言うなら信じざるを得ない。

小声で飲み直そうかなあだなんて呟いているのだからマジで言っているに違いないのだろう。

「でもまあ、稼ぐなら都合の良いイベントではあるんだ。まだ駆け出しであるカズマくんたちの懐はまだ寒いものだろう？　こういう機会に稼いでおくと良い。上質なキャベツの収穫だと一万エリス程の報酬を貰える事もあるらしいからな」

「一万エリス!?　え、マジで言ってるんすか?」

「うむ。その分捕獲の難易度も上がるらしいからな。実際、重みのあるキャベツを投げ付けられたら痛いだろう？　当たり所が悪ければ最悪死に至るんだ、ある意味冒険者向けの仕事なのさ」

「へえ…………、成程なあ…………」

「まあなんだ、私たちのパーティは幸運な方だろう。何せ、衝撃を殺してくれるドMな肉盾が居るからな。被虐願望も満たせて、報酬も望める。うむ、win-winだな」

「なんかダクネスの扱い方慣れてません…………?」

恐る恐るおんおんさんを見やれば視線を逸らされた。自覚はあったらしい。

いやまあ、めぐみんとゆんゆんの保護者役をしているなら嫌でも慣れるのかね。

……または、地球に居た頃の話を持ち出しているのかもな。

「いやなに、ああいう癖の強い人を扱う時のコツはな、相手の願望をある程度叶えつつ誘導してやるのが一番だ。本人がやりたがっているんだから仕方が無いんだ。それを押さえ付けようとするから余計な面倒が出るんだ。幸いな事にダクネスさんの性癖は他人に迷惑を掛けるものではないからな。人の血が好きだとか悲鳴が好きだとか、そういう猟奇的な性癖じゃなくて良かったと思うべきだ」

「……前に居たんすか？」

「……………性癖ってのは業が深いんだ。だから、私は常々こう思っている。性癖を満たす生活こそが真の幸せだ、とな。だからカズマくん、自重しつつ楽しく生きるんだぞ」

「は、はい」

その和やかな笑みがとても綺麗で、思わずドキリとした。

年下である筈なのにこうも色気のある微笑みを魅せれるおんおんさんはどんな生き方をしてきたのだろう。

そんな風に思ってしまうのも無理も無いくらいに、俺はおんおんさんに惹かれていた。

……でも、この人百合っぽいんだよなあ。めぐみんに対する感じが明らかにその……。

ああ、うん、成程。おんおんさんはおんおんさんで性癖に生きてる訳か。

一度、二人きりで話してみたいもんだな……………。

12話

さて、ギルド職員による今回の緊急クエストの詳細が告げられた訳だが……。

やっぱりと言うべきか、キャベツの収穫祭であった。

出来の良いキャベツだったらしく一玉につき一万エリスと言う太っ腹な報酬だった。

ギルド職員が用意した檻付きのプールみたいな所へ持っていけば良いとあるが……。

「これ、地味に大変だな？」

あくまで捕獲して引き渡した事で支払いがあるのであって、先程景気良く爆裂魔法をぶっ放して気持ちの良い顔をしながら木陰で寄り掛かっているめぐみんはノーカウントである。

討伐数では無く捕獲数だとあれ程言ったのにな……。

まあ、経験値は非常に上がったようで喜んでいたのでまあいいか。

どうせ、私たちはシェアハウスしてるからお小遣い稼ぎにしかならんしな。

手を握ってやり魔力を供給してやれば後数分程度で動けるようになるだろう。

マナタイトに魔力を込める方法の応用だ。

もつとも、人に対してやるのは非常に難易度が高いので繰り返し行う事が必要になってくる。

此処最近疲れて帰って来ためぐみんに膝枕しながら供給してやるのが日課になっているのでそこそこスムーズに熟せるようになっていた。

そう言った点ではめぐみん専用の技術とも言えるのか。

「んー……、あつちでカズマくんたちも頑張ってるみたいだな」

私は倒れたためぐみんを連れて行くと言う形で抜け出したので、後方から四人の様子を眺める事ができた。

ダクネスさんが肉盾し、その横合いからカズマくんとゆんゆんがスキルと魔法で頑張り、アクアさんが転がって離れてしまったものを回

収する。

そんな感じで奮闘している姿を私たちはぼけーっと見ているのであった。

にしてもすんごいぶるんぶるんしてるなあ。上半身の鎧が砕け、衣類が見えてしまっているのだが、ダクネスさんの巨乳が上下左右にぶるんぶるんと動いている。

……クーパー韌帯大丈夫か？ あんなに激しいと切れるんじゃないか？

でもまあ職業クルセイダーだしな。防御力が上がっている筈だから韌帯も強靱になっている事だろう。

何せ、あんなに勢いよくぶつかって来られているのに実に楽しそうにしている。

……あの見た目で動かない相手に剣を振って空振りする運動音痴っぷりには溜息が出るが。

まあ、タンクにはタンクの使い道があるので問題は無い。

あの様子だとクルセイダーのスキルで自身の鎧よりも肉体の方が耐久値が高くなっているのだろうと推測できる。

いや、ほんと不思議な事に鎧よりも肉体の方が強いんだよな、スキルって怖い……。

なので、ダクネスさんには今後背水型肉盾方式で活躍して貰う事にする。

体力が減れば減る程威力が上がるバーサーカー系職業の対であるクルセイダーにも似たようなものがあり、此方は体力が減れば減る程防御力が上がると言う代物だ。

決死の覚悟で最後まで味方を守るためにあるスキルなのだろう。結構ポイントを使うらしい。

今回キャベツ相手には殺傷力が高過ぎる私は後衛に回り、指示出しと不意打ちに対する迎撃に徹する予定だったのだがダクネスさんの『アコイ』の強制ヘイト集約効果が非常に高かったが故に暇になっていた。

なので、つい先ほどまでダクネスさんのカードをお借りし、スキル

内容の吟味とビルド構築を考えていたのだった。

剣も駄目なら拳も駄目、接近戦は役立たずなダクネスさんであるが最高峰とも言える肉体強度はタンク役として素晴らしいものがある。

「……ぶっちゃけアクアさんが居るから死ななきや安いしな」

「何か物騒な事言いませんでしたかおんおん!？」

「いや、別に。ダクネスさんの使い道について考えてただけだぞ」

「それは……まあ、その、ううん、否定はできないですね……。アクアは最高峰のアークプリーストですし、致命傷も治せるくらいの実力がありますからね」

ダクネスさんと言う案山子にモンスターが群がったとしても限界手前でアクアさんが回復してやれば何度だって使える訳だ。

本来タンク役と言うのは死に直結する最前線であり、文字通りパーティの盾役である。

そのため、死への恐怖に打ち勝つ強靱な心と度胸が無ければ成り立たないポジションだ。

故に、それを被虐願望と言う性癖でカバーできるダクネスさんは最適解とも言える。

うん、数ある性癖の中で防御力に関してはドMが一番強いんだよなあ。

ドM精神が折れない限り高性能な肉盾として活用できる訳だからな、便利過ぎる。

幸いかズマくんはネットゲプレイヤーだった事もあってそこらへんの理解が得られたのは大きい。

騎士であるパラディンでは無く、盾持ちのクルセイダーと言うのがミソだ。

そこを勘違いしていると指示出しを間違えるだろうからな。

『受け止めて反撃しろ』と『受け止めて足止めしろ』では大分内容が変わる。

多分、其処を指摘してなかったらカズマくんは間違った運用をしていた事だろう。

防波堤にそれ以上の効果を求めてはいけないんだぞカズマくん。

……まあ、正直剣じゃなくて大盾を装備して欲しいものだけだな。後ろから鞭を振るってやるから構えろと言えば頷いてくれたりするんだらうか。

後で聞いておくか。

「何か怖い事考えてませんかおんおん……？」

「いや、別に。そんな事は思っただけで無いぞめぐみん。後ろから鞭を振るえば盾を構える様になっただけでくれるかなあだなんてそんな事思っただけで無いぞ」

「……おんおんって地味にドSですよ。意地悪体質と言うか何と言うか……」

「そうか？ あんまりそういう事してないと思うんだがな」

趣味全開で良いならダクネスには衣服の下にレザーボンテージと首輪を付けてやりたいとは思って口にはすまない。

んな事言ったらめぐみんにドン引きされるのがオチだからな。めぐみんそういう所は普通な感性だし。

大分凶悪に仕上がると思うんだよなあ。

清楚な衣服の下に卑猥な衣装を着せるとか非常に興奮できるんだが。

多分、ダクネスの被虐の方向性ってそう言う事だよなあ。

下卑たおっさんにくっ殺されたいとかぬかしてたし、尊厳を貶められる系の好きな筈だ。

……あれ、割と有りなのでは？ 年下の少女に調教管理される変

態ドM痴女。

メイドスキー中巻を書き終えた後の新作はこれで決まりだな……。

年下令嬢に調教管理される年上のメイドの百合調教物か……、実に良しだ。

「あの、おんおん？ 何か握る手がえつちな感じなんですけど……おんおん？」

「おっと、すまない。つい手を遊ばせてしまった。そろそろ復帰できるかめぐみん？」

「まあ、そうですね。三割くらいは回復したので大丈夫だと思います」

「よし、それじゃ戻ろうか。手伝いをしてくれ」

「あれ、合流はしないんですか？」

「そろそろ本格的に動こうかなって」

パスで了解を取ってから『鵜獣ヒヨトリア召喚』を行使し、魔力を糧に足元にヒヨトリアを召喚する。

それを見て何をしようと思っっているのか把握したらしいめぐみんが苦笑を浮かべた。

ヒヨトリアのスキルの一つに対象を金縛り状態にする『蛇睨み』と言うのがあって、それを使って捕縛するつもりだ。

石化状態にしてしまうと戻るのが大変なので動きを封じるだけのスキルで十分だ。

キャベツの性質に一度屈服するとその相手に食べられるまで大人しくなるというのがある。

そのため、一度叩き落すなりしたキャベツをギルドの檻に保管するまで暴れる事や逃げ出す事を考慮しなくて良いのだ。

そうでなければキャベツの捕獲報酬ももつと上がっていた事だろう。

ある程度の強さである程度の難易度で捕獲できるからあの値段なのだから。

ヒヨトリアを抱き抱え前線に歩き出す。今回の捕り物はパーティーで山分けの予定なので、二カ所で捕獲できるならそっちの方が効率が良い。

まあ、やる事はあつちでゆんゆんがやってる『パラライズ』とそう変わりは無いしな。

さっさと終わらせてギルドの酒場で乾杯をし直そう。

「と、言う事で我がパーティーの総報酬はキャベツ百八十五玉にレタス二十五玉で計百八十五万エリスだ。一人頭三十万と八千三百エリスと言ったところだな。そういうえばこのパーティーは共有資産は作らないのか？ 何かしらあった時の備えとしてあった方が良いと思うぞ」

ギルドの受付から受け取って来たずっしりとした布袋を一度ソウルに収納してから額を確かめ、小さな布袋に三十万八千三百エリスを

入れた物を六つ作りテーブルに置いた。

うちのパーティが収穫したキャベツとレタスを一度私がソウルに収納してから、運動会の玉入れの如く数えながら檻に放ったので手早く報酬を貰える事ができた。

他のパーティは逐一持つて来たようで、対応した別々のギルド職員の持つ集計用紙の計算が必要だった事もあり支払いは遅れているらしい。

思い思いに布袋を手にした面々がにつこにこの表情を浮かべていた。

……いや、共同資産はどうするんだ。もしや作らないのか？

いやまあ、アークプリーストであるアクアさんが居れば一番高くなるであろう治療費が不要になるので問題は無いと言えば無いんだが……。

まあいいか。私たちは家に帰ってから報酬の二割を共有資産に回すから問題無いし。

この様子だと装備費は自前でやる感じになるみたいだな。旅に出ている訳でも無いのでそれで問題は無いしな。

「いやあ、大収穫でしたね。……アクアが結構な数のレタスを納品してみたのですが」

「普通手触りで分かるだろ……。お前はアレか、ブロッコリーとカリフラワーの違いが分からないみたいないな感じでキャベツとレタスの違いが分からない感じか？」

「違うわよ！　ちゃんと分かるわよそれぐらい！　黄色がカリ……ブロッ……、どっちだっけ？」

「ああ、うん、皆まで言うな。大体察したから……」

「因みにブロッコリーとカリフラワーは同じアブラナ科だから、栄養価が少し違うくらいでほとんど同じだぞ」

「なら別に見分けなくても大丈夫ね！」

「……………はあ。なんで俺こんなの貰ったんだろ」

朗らかに笑うアクアさんとは対照的にカズマくんの目は死んでいった。

まあ手触りが全く違うキャベツとレタスを間違えるのはある意味至難な事ではあるが、料理に携わらない人だとたまにある話らしいけどな。

「……こつそり十玉程ソウルから変換せずにと取っておいたキャベツがあるから今日の夕飯は好み焼きにでもしようかな。」

「好みソースだなんて洒落たものは無いからケチャップもどきとマヨネーズもどきで好みソースでも作るか。」

「めぐみんとゆんゆんは子供舌だから美味しく食べられる事だろう。」

「おんおん、今日の夕飯はキャベツを使った料理が良いです！ あんなに活きの良いキャベツなら絶対美味しいですよ！」

「うん、私もそれが良いな。おんおんの作る料理美味しいし」

「ふむ、では好み焼きにでもするか」

「好み焼き！ 見た事も聞いた事も無いですがきつと美味しいに違いありません！」

「ふふつ、めぐみんおんおんの作ってくれる料理いつも美味しそうに食べてるもんね」

「当り前じゃないですか！ というかそれはゆんゆんも同じでしょうに」

「あはは、まあね。……お友達二人と一緒にご飯が食べられるだなんて最高のシチュユだし」

「……少しは治って来たと思ってましたが、ぼつちを拗らせ過ぎなんですよゆんゆんは……。普通に喜ぶ事が出来ないんですか？」

「普通に喜んでるけど？」

「……痛み過ぎてる、早すぎたんだ。どうしてこんな事になるまで放っておいたんだ。」

「もはや、心の傷跡が瘡蓋と化して痛みを痛みだと感じない状態になつてやしないかゆんゆん。」

「シエアハウスで大分症状が緩和されたと思つてたんだがなあ……。」

「どろりと淀んでいて底なし沼のような瞳で笑ってる姿はマジでやばみを感じる。」

「カズマくんが引き攣った顔でゆんゆんを見ていたので、ゆんゆんの

癖の強さを改めて理解した事だろう。

「そ、それにしてもおんおんさんって料理が上手なんですね。めぐみんたちから聞いてましたけど、その、よく料理していたんですか？」
前世でも、と言う見えない枕詞が付いていそうな感じの質問だな。

正直に言えば同僚が料理好きでその話をよく聞いていたからある程度覚えていただけであって、社畜時代ではもっぱら惣菜と弁当が主食だったよ私は。

まあ、今生では一人暮らしとめぐみんの世話があったから済し崩しに料理をするようになったので此処まで手慣れてしまった訳なのだが。

「ふむ、自分的にはそこそこな実力だとは思ってるよ。幼い頃からめぐみんに食わせるために色々と工夫はしていたしね。知識だけはあったのさ、教えてくれる友人が居てね」

「へえ、そうだったんですか。……作れない料理とかってあるんです？」

「……食材の問題があつてな。再現できるものとできないものがある。一部の食材は輸入品頼りだから原価が高くてな。おにぎり一つで九百エリスくらいだと言えど何となく分かるだろう？」

「あるんですか米！ めぐみんたちの容姿からしてそういうのもあるとは思ってたけど実在してたんですね！」

「そりゃまあ、過去に同じような奴が来てるからな。それなりに進んでいるようだよ。大通りに輸入専門店があるから其処を覗いてみると良い。流石に魚介類は無いが穀物や醤油とかは売ってるぞ」

「うおおおおお!! 日本食キタコレ!!」
「でもカズマ、私たち馬小屋暮らしだからそもそも料理ができないわよ」

「そうだったああああ!! くそつ、目の前に和食があるって言うのに食えないだなんて……!」

ちらつちらつとカズマくんとアクアさんが此方を見やる。

……もしかして催促されているのだろうか。今夜あたり夕飯にお呼ばれしたい的な。

まあ日本食専門店はアクセルには無いしな。自分で作るか同じ転生者に作って貰うしか方法は無いだろう。

だがなあ、ぶっちゃけ面倒なんだよなあ。三人分は作りやすい分量だから楽なのだが、この流れだとダクネスさんも誘って六人分作る事になる訳だ。

うちの竈は二カ所しか火を扱えないので私だけ調理係になるのは必然。そうなると食事を一緒に取ろうとすると既に冷えている可能性もある。

非常に面倒臭そうな雰囲気を出してカズマくんたちを見やる。彼らも理解しているのか視線を逸らした。

「……一枚五万エリスで良いぞ」

「たつか!? お好み焼き一枚五万エリス!? ぼったくりにも程があるだろおんおんさん!」

「そうか、なら結構だ。うちは飲食店じゃないからな、別に来て欲しい訳でも無いんだ。今日は此処で解散しようじゃないか」

「うぐぐ、めっちゃくちゃ良い顔してやがる……。でもなあ、お好み焼き……、く、食いてえ……!」

「ふむ、それは私も良いのかおんおん」

「払ってくれるならな」

「では、一枚頼めるだろうか。聞いた事の無い料理だし、手間賃も兼ねてそれだけの価値はあるだろう」

「そう言って五万エリスを差し出したダクネスさん。」

「……食事一回で五万エリスは普通に躊躇う額だぞ? 私が言うのもアレだが、金銭感覚大丈夫かこの人。」

「あっさりと渡したダクネスさんにカズマくんたちが驚愕の表情を浮かべる。」

手に持った布袋を見やり、私を見やりと何度も往復し、暫くして此方に視線を止めたので小首を傾げて微笑んでやったら俊敏な速度で五万エリスが私の前に置かれていた。

「背に腹は代えられねえ……! よろしくお願いしますおんおんさん! どうか、俺に美味しいお好み焼きを何卒……!」

「ね、ねえ、おんおんちゃん、女神割引とかしてない？　こう見えてア
クシズ教の女神なの私……」

「三千エリスで良いですよ」

「やった！　それじゃあよろしくね！」

「俺の決意が!?　あつさりと踏み躪られたんだが!?　えっ、どう言う
事!？」

「いやほら、アクアさんのおかげでお酒飲めたし、原価代で良いかなっ
て」

「原価代たつか!?　え、ぼったくり価格じゃなかったら一枚三千エリ
スのお好み焼きなんですか?」

「カズマくんは普段料理をしていないようだから知らないのかもしれないな。この街の物価は微妙に高いぞ。名称通りの駆け出しの街で
あればもう少し物価は安いだろうけども、ベテラン冒険者も居る街な
んだ。それに忘れたのかカズマくん。活きの良いキャベツ一玉いく
らだったかを」

「……一万エリス、です」

「三千エリスのうち二千くらいがキャベツ代だ。あんまり前の常識に
囚われては駄目だぞ?」

「そうっすね……」

まあ、ソウルに仕舞っているキャベツだから売値は付かないんだが
な。

そう何度も来られても困るので現実を覚えておくに限る。

飲食店の料理が程々な値段なのは仕入れなどの部分で安価に手に
入れていると言うのが前提だ。企業努力とも言っても良いだろうな。

ギルドの場合は輸送と解体を引き受けているし、依頼料は依頼者か
ら出ているから中抜きと言う形で食材等を得ているので酒場であの
価格で出せるのだ。

この世界にチェーン店が無い理由はそれが大きいのだろうな。個
人店であれば自分で食材を狩ってくれば食材費分が浮くのだから儲
けも多いだろう。

「あれ、だとしたらおんおんさんお店出したらめっちゃ儲けられるの

では？」

「ん、儲ける事を目的とすれば、な。ああいう店はお客さんの喜ぶ顔が見たいだとか自分の料理を褒められたいだとか趣味が転じて天職になっただとか、そういう続けられる理由が無いと長続きしないもんだ。確かにそういう一途で一本芯の通った考えは好きだが、私自身に適用されるかと言うとそうでもない。私はめぐみんが美味しそうに食べてくれるのが嬉しいから作ってるのであって、その他有象無象が喜んでいたところでどうでも良いしな」

「あつ、はい。そうだったんですね、確かに無理を言うのもアレですもんねー」

「……なんで若干棒読みなのか分からんが、まあ、そもそも料理を作るのは別に趣味じゃないしな。食べるなら美味しい方が良いだろって色々してるだけだぞ。一人で食べる時は割と雑だよ」

「そうなんですか？」

「ああ、キャベツにオリブオイルと塩で齧るくらいには適当だ」

「雑過ぎますよ!?! まさかとは思いますが昔に干し肉齧ってた時のあれっておやつじゃなくてブランチだったんですか!?!」

「……まあ、そういう日もあるだろ？」

「ありませんよ!?! ああもう仕方ありませんね。おんおんのためですからね、私はずっと一緒に居てあげなきゃ駄目ですなこれは」

ふんすと無い胸を張るめぐみん可愛いなあ。

だけど、いつかはお嫁に行ってくれなきゃ困るぞ？

いやまあ、めぐみんの人生だから独身を貫くつてのも有りっちゃ有りではあるが、人並みに幸せな人生を送って欲しいとは思うので良い人が出来ればと祈るしかないな。

……なんであちこちから生暖かい視線を受けているんだ私は。微笑ましいものを見たって顔してるけど、今の会話に微笑ましさがあったか？

めぐみんが私離れができないと言う意味合いだろうか。まあ、これは追々何とかしていけば良いだろう。まだ若いんだし。

「……うう、鈍感な幼馴染を持つと苦労しますね……」

「……苦労してんだなめぐみんも」

「その言い方には物申したい気分です。はあ。まあ、良いでしょう。おんおんのこれはいつもの事ですし……。お好み焼きとやらを早く食べたいので帰りましょうか」

「ん、キャベツ狩りは大変だったからな。お腹すいちゃったか。なら、早く作らないとな。一応食材は揃っているからこのまま帰っても大丈夫だぞ。だが、結構残っちゃってるな……」

「緊急クエストだったもんね。あちゃー、ジュースも温くなっちゃってますね」

「まあ、それなら良い案があるぞ。すいませーん、余り包みたいんで葉っぱ貰えますかー?」

「はい、かしこまー!」

「葉っぱ?」

「つつい頼み過ぎちゃったーって時にお持ち帰りできるように大きな目の葉っぱを用意してくれるのよ此処って。少し多めに頼んで朝ごはんにするっていうのも良いしね」

ウエイトレスさんから大きな目の葉っぱを数枚貰い、汁気の少ないものを手早く包んでいく。

まるで昭和のアニメで親父キャラがお土産を吊るして帰って来る時のあの形で余り物を包み終えたカズマくんたちが頷いた。

「どうやら準備が終わったらしい。そういう勿体無い精神を表に出せる子は好きだよ私は。」

出して貰った物は出来る限り捨てずに食べ終えたいしな。

飲み食いした物を割り勘して支払い、ギルドを後にした私たちは大通りからシエアハウスの方へと歩いて行く。

随分と人数が多くなったものだ。これはこれで楽しいものがある。

……まあ原価相当の食材費を払ってくれたらこうしてたまに御馳走するのも良いかもしれないな。

なーんて思いながらシエアハウスに辿り着く。

「あ、めぐみん洗濯物を回収して渡してくれるか? そういえば干

しっ放しだったよ」

「了解です。先に入ってください」

「あいよー」

鍵を回しドアを開き、先んじて靴を脱いで中へ上がりリビングの方へ。

リビングの窓から洗濯物をリレーして貰い受け取り、脱衣所の方へ移していく。

そうしてリビングに戻るとめぐみんに続いてカズマくんたちも居た。

「さて、着替えたらずぐに作ってしまうからのんびりしていてくれ」

「あ、はい、お構いなく」

恐縮した様子のカズマくんに見送られ、自室へと戻って部屋着に着替え始める。

セーター調の衣服で太腿の下まで長いので短いワンピースのようにも見えるそれに着替え、下は短パンを履く。

一階に戻り、リビングに戻ると予備の椅子を出したようで皆座っていた。

「それではちやちやと作っていくからな」

粉物なので髪が入らない様に首の後ろで束ねておく。

何やら後ろでカズマくんが胸を抑えて机に突っ伏していたが何かあったんだろうか。

見やればめぐみんが手をひらひらと甲を見せて振ったので気にしない事にする。

さて、先にベースとなるものを作っていくか。

ボウルの中で薄力粉を水で溶き、魚介の乾物を砕いたものと卵を入れて掻き混ぜる。

本当なら天かすを入れたいが揚げ物はあんまりしないので今回は見送りだ。

山芋を取り出してすりおろして加え、キャベツをソウルから取り出して活めし、一枚一枚剥いて重ねて行きぎく切りにする。

まとまりを考えて千切りにしても良いのだが手間だし、今回は一口

サイズのざく切りで良いだろう。

豚バラは……まあ暴れ猪のバラ肉で良いか。ソウルから取り出した肉塊を薄切りにしていく。

後は空気を含ませながらスプーンで掻き混ぜて……っと、それを三回行って三つのボウルでタネを完成させる。

フライパンに油を引いてバラ肉を敷き、タネを丁度良いサイズに流し入れる。

金属製の蓋をして弱火でじっくり焼いていく。その間にソースを作らねば。

魔道冷蔵庫から作り置きのカチャップもどきと試作したマヨネーズもどきを取り出す。

マヨネーズの卵黄はヒヨトリアの卵を使ったからか濃厚な味わいで美味しいものができた。

二つを一对一の割合で小皿で掻き混ぜてなんちゃってお手製お好みソースの出来上がりだ。

「ふふふ、綺麗にこんがり焼けたな。そう言えば六等分か。変に考えなくて良いから楽で良いな」

木べらで六等分に切り分け、お皿に分けてソースを塗っていく。流石に一度に持っていけないのでめぐみんとゆんゆんを召喚し二皿ずつ持って行って貰う。

「後五枚焼く予定だから先に食べてて良いぞ。冷めちゃうからな」

「うう、仕方が無いですね……。それではお先にいただきます！」

「私も、いただきます！」

「うおおお……、美少女のお手製お好み焼きだ……。すげえ、嬉しい。手料理とか初めて食べるし……。いただきます!!」

「ほう、これがお好み焼きか。キャベツをベースに焼き上げているんだな。このソースはいつたい……。まずは食して見るか。いただきます！」

「わーい！ 見た事はあったけど食べた事無かったのよね。いただきますーす！」

「はい、どうぞ召し上がれ」

思い思いにフォークでキツシユのようにお好み焼きを食べる光景は違和感があるが、箸文化が無いから仕方が無いよなあ流石に。

……ふふっ、美味しい美味しいと食べて貰えるのは嬉しいものだな。

新しいのを焼いている間にキッチンで食事を始める。うむ、ちゃんと中まで焼けてるな。

お好み焼きなどの粉物を料理する時に一番気を付けないといけないのは焼き加減だ。

外はカリカリ、中はべちよべちよでは意味がない。粉らしさが無いようにしつかりと火を通すのが鉄則だ。

なので弱火でじっくりと蒸し焼きにしていくのが私流だ。まあこれも受け売りだけどな。

ホットケーキみたいに見分けが付きやすい訳では無いし、初心者にはこれがベストだろう。

焼いては六等分して切り分けて、皆の空いたお皿に乗せていく。あつと言う間に皆完食して御馳走様の言葉を貰った。満足して貰

えて何よりだな。

「いやあ、美味かった……。ほんとにおんおんさん料理の天才っすよ。また食べたいですね……」

「そうね、毎日食べたいくらいだわ！」

「うむ、我が家の食卓に出ても問題無いくらいに美味しかったな」

「そうでしようそうですね！ おんおんの料理は最高なんです！」

「ほんと美味しかった。ねえ、おんおん、料理の作り方って教えて貰えたりする？ 私も作ってみたいなって」

「ふむ、こういうのは数を熟す事が重要だからな。ゆんゆんには簡単なおかずを一品ずつ作って貰うようにするか。最初は基本的な卵料理からだな」

「ほんと？ やったあ！」

「ず、ずるいですよゆんゆん！ おんおん！ 私にも教えてください！」

「ふふふ、分かったよ。ちゃんと一から教えていくからな。基礎から

しつかりとだ」

そうかそうか、めぐみんとゆんゆんが料理を覚えてくれるのか。そうなると将来的に私の手間も減って楽ができるな。いやはや、嬉しい限りだ。

…：切り傷用のポーシヨンを買って足しておくか。あかぎれ対策に軟膏も用意しておかねばな。

若いとは言えども女の子だ、スキンケアはしつかりとしておかないとな。

春のキャベツ大行進の緊急クエストの打ち上げが大成功に終わって何よりだ。

13話

春キャベツ大行進から特段何事も無く平穏な日々が過ぎ去っていった。

何やら私がアルカンレティアに定期集会に向かっている間に集合墓地でリッチーに出会ったらしいが、聞く話によればとある雑貨屋の店主さんであった事が判明したそう。

私はアクアさんの主観混じりの説明に小首を傾げていたものの、溜息交じりのカズマくんの説明で漸く内容が知る事が出来た。

……心優しきおっぱいの大きい美人リッチー、ねえ。

何となくカズマくんがその魔物を見逃した理由が見て取れる思いであったが口にはしなかつた。

まあ内容が内容だからな。守銭奴な街のプリーストに代わって浄化してくれていたらしいので人に仇なすタイプの人物では無いらしく、物腰が低いおつとリッチーとの事だった。

……その事を話すカズマくんの鼻の下の伸びっぷりはピノキオに匹敵する程であったがな。

そんな人物居たっけかなと記憶を探るととある小さな雑貨屋の店主を思い至る。

あのとんでも産廃品倉庫な雑貨屋の店主ウイズさんだ。

一部ソウルが黒く淀んではいたものの殺人による人間性の淀みでは無く、今思えばアンデッドであるリッチーであったが故の淀みだったのだろうな。

散々アルカンレティアで説法と言うか説教をしてきたが故に精神的に疲れていたが、ウイズさんがリッチーであったと言う事実には打ちを掛けられた気分だった。

と言うかりッチーって腐った死体じゃないんだな。理性のあるゾンビと言う印象だったのだが、ウイズさんと言う実例が居るとその違いに気付かされた。

「さて、どうすつかな……」

いつものように午前の家事を終えた私は指を組んで伸びをして長

息を吐いた。

先日の大行進でそこそこ稼いだものの暫くはジャイアント・トード狩りに勤しむと言う事だったので私だけ別行動を取っている訳だ。

何でもダクネスさんを態と食わせた後に全員で刃物で止めを刺す戦法にしたらしく、そこそこの効率で狩りが上手く行っているらしいかった。

一度心配になり見に行ったら、ヌルヌルテカテカ状態で楽しそうにしているダクネスさんと死んだ目で狩り続けるカズマくんは何故か一発目は素手で殴りに行くアクアさん、いつもの杖から槍に持ち替えたためぐみんと『ライトニング』をぶつ放すゆんゆんと言う大変面白い光景が見れたので安心して帰って来たんだよな。

「んー……、メイドスキーマの中巻も昨日送ったし、下巻書くにはパトスが足りないしなあ」

完全燃焼と言う訳ではないが、ある程度性欲がアウトプットによって解消されたため一種の賢者タイムに入っているようなものだ。

この状態で書き始めると飽きてしまうので、また暫くは充電期間だな。

「……酒場で飲もうかなあ」

この前羽目を外したのを機にクリムゾンピアを飲む事を解禁したため、そんな選択肢も取れるようになった。

もともと私のちんちりんぼでえを見て心配され、途中からネロイドと言うシャワシャワする酒でも炭酸でも無い不思議な飲み物を飲むように言われてしまったんだがな。

何だろうなあ不思議な飲み物は。一種の魔法水らしいが製造方法は企業秘密らしいので判明していないとの事だった。

ある程度気持ち良く飲めるので焼き鳥盛り合わせとセットにするのと大分良かった。

後味が何と言うか……シャワシャワするんだよな、ネロイド。ほんと良く分かんが好き。

「いかん、駄目人間まっしぐらじゃないか。流石に十三でそれは早すぎるぞ私……」

装備の更新でもしてみるか。

この前のキャベツの報酬でうちのパーティは色々と装備を新調したらしい。

カズマくんはよれたジャージから一端の冒険者らしい軽装な恰好を。

めぐみんとゆんゆんはマナタイトを装着した新しい杖を。

ダクネスさんは新しい胸当て鎧と私がこっそりとおすすめた衣服下の卑猥な拘束着を。

アクアさん？ 飲食代に消えた。どうにも水の女神だからか素手で触れてしまうと飲み物が真水になるらしく、祝福のようで呪い染みたそのせいで楽しく飲めないとの事だった。

なので、素手で触らないように肌触りの良い手袋をお勧めしてあげたら「触れても真水にならない！ 最高じゃない！」と大層喜んで飲んだくれになっていた。

私？ それに付き合ったので一緒に金は溶けた。やはりお酒は長寿の薬なんだなって。

アクアさんがお酒を注文してくれるので私はそれに便乗する形でおつまみを頼むのである。

おかげで少しお腹がぶにっただ気がする。太腿も曖昧3センチって感じた。

……運動するか。そうなると適当にソロで依頼でも受けるが吉か。「と、来てみたんだが……ろくな依頼が無いな。半日で終わらないものばかりだ」

シルバールフの群れの討伐、ゴリゴリラの巣の調査、一撃熊の討伐及び撃退、ゴブリンの巣の殲滅。残りはお使いクエストみたいな薬草などの納品やレポート屋の範囲外の村への配達などのものくらいだ。

どれもこれもアクセルから遠いものばかりで身近なものとなるとめぐみんたちが行っているジャイアント・トードくらいしか残っていない。

どうも最近こんなばつかなんだよな。はて、近隣のモンスターが

狩り尽くされるくらいに熱心な冒険者だなんて居たっけか？

そう小首を傾げていると後ろから近付く気配があった。

「あれ、おんおんちゃんじゃん。久しぶり、元気してた？」

「おや、ダストくんか。お久しぶりだね。リーンさんに迷惑掛け過ぎでないだろうね？」

「あ、あはは……、それはその、ほ、程々に、な。ほんとだぞ？　んで、どうしたんだ、ボードの前で悩んでるみたいだったが」

「ふむ、それがだな。手頃なクエストが見つからなくて困っていたんだ」

「ん？　もしかしておんおんちゃん知らないのか？　ほら、正門から出て少し離れた丘の上に古城があるだろ？　そこに魔王軍の幹部が居座ってるって話だぜ。だから近隣のモンスターが逃げちまって大混乱らしいぞ」

「それは、本当か？　魔王軍幹部だなんて大物がこんなところに来るとは……。魔王軍も本気で此方を潰しに来たのかもしれないな」

「んー、どうだろな。偵察班の奴に聞いたら朝昼晩全然外に出て来ないって話だぜ。軍勢の内容はアンデッドらしいから、恐らく首無し騎士デユラハンじゃないかって話だ」

「ほほう、そうなのか。ありがとうダストくん」

「へへっ、構わねえさ。おんおんちゃんみたいな可愛い女の子の役に立てて嬉しい限りだぜ」

鼻の下を人差し指の横腹で擦りながら照れ臭そうにするダストくん。

彼はカズマくんと歳の近い悪名のあるタイプの冒険者の一人だ。同じパーティのキースくんとセットでチンピラ扱いされていて、小物っぽいムーヴが多いお調子者な印象を受ける。

……だが、よく見れば立ち振る舞いが洗練されている所が垣間見れる。

戦闘も長剣を使い辛そうに振るってはいるが、より長い射程の武器を得手としていた名残が見受けられた。

恐らく槍がメインウェポンなのだろうな、突然の不意打ちなどには

滅法強いので空間認識能力が発達しているように思える。

何となくであるが軽薄なチンピラを気取っているだけで、実際は実力者なんじゃないかと言う疑念があるんだよなあ。

なので、何かしらの事情があつてそう振舞っているのではないかと思うのだが、それを暴く程私との関わりは薄いので自重している。

時々リーンさんにダストくんの事で相談を受けるのだが、多分両想いなんじゃないかなと思う今日この頃だ。

この前ダストくんの野菜嫌いを何とかできないかと相談されたので、お手製のお弁当を作つてやれば良いと回答したら今でも上手くやれているらしい。

早くくっつけよ、とテイラーさんとキースくんも思っているらしく、進展はまだまだ遠そうだ。

「という事はダストくんたちも足踏みをしている感じか？」

「おう、そう言う訳でちよつとお願いがあつてな。ゴブリンの巢の殲滅依頼を受けようかとうちのパーティは考えている訳だが、また助っ人に入つてくれないか？」

「ふむ……、構わないと言いたいところだが、ちよつと距離が遠いだろう？」

「ああ、そこらへんは考慮するさ。先に俺たちが視察に行つて、本格的に殲滅する時に来てくれりや良い」

「それで良いのか？ そちらに負担が掛かるが……」

「良いつて別に。俺らのパーティだと火力がイマイチだからおんおんちゃんが居るだけで効率が段違いなんだよ。呪い殺すだけの呪術師とは違つて、アークソーサラーの魔法は攻撃一辺倒だから殲滅具合がちげえしな」

「ん？ 職業に呪術師があるのか？」

「へ？ 知らないのか？ まあ、うん、意外とマイナーだしな。病原菌を呪い殺したりして医者っぽい事をしてる職業だよ。プリーストの回復と違つて物理っぽい感じだし、外科医的な印象があるな」

「へえ、そうなのか。物知りだなダストくんは」

「へへっ、伊達にアクセル随一の遊び人と呼ばれてねえさ」

アクセセル随一のチンピラと呼ばれてなかったっけか？

まあ、気持ち良く話してくれているようだし水は差さないようにしておくか。

「ほほう、頼り甲斐があるじゃないか」

「そうだろうさうだろ。と言うか、おんおんちゃんこそなんであの最弱職の居るパーティに居るんだ？ 明らかに過剰戦力だろ。ハーレムみたいな事しやがってあの餓鬼」

「あはは……。だがな、実情を知ると大分印象が変わるんだぞ。あの癖の強いパーティを仕切っているカズマくんはよくやってるよ、いや、ほんとに……」

「お、おう。おんおんちゃんが言うなら信じざるを得ねえが……。いちよ吹っ掛けても良いか？」

「穏便な形ならな。私の居ない時にしてくれよ」

「分かってるって。難癖付けてトレードでもしてやろうかなって。あの最弱職が仕切れるなら俺でもできるだろうしな」

「……まあ、頑張ってくれ。応援だけしてるよ」

「おう！ って事で、明日のお昼に農村地帯を少し越えた先にあるケルル村に来てくれるか？ あそこに貼ってある依頼とは別の奴なんだ」

「ああ、分かった。ダストくんたちも気をつけてな」

「応よ、たかがゴブリンに負ける程弱つちくないぜ俺らのパーティは」

「それもそうだな。では、また明日に」

「応、じゃあな」

テイラーさんたちが座る酒場の席に戻って行ったダストくんを送る。

ふむ、魔王軍幹部が居るのか。手を出しても良いが……。どうしたものかな。

多くのパーティがこうして酒場でだらだらしているのもそれが理由だろうし、私なら一人で行って死んだとしても何とかなるから挑戦しても良いかもな。

良い経験値稼ぎにもなるかもしれないし、明日の共同が終わり次第

向かってみるか。

そうなると私も少し装備を新調しておくべきかもしれないな。

手持ちは薪割り用のハンドアックスに狩猟用の弓矢一式に超長柄杖くらいだしな。

私の技量でも扱えそうなものは……メイスぐらいか。首無し騎士と言うぐらいだ、さぞかし立派な鎧を着ているだろうから鈍器は必須だろう。

……でもなあ、バスタードソードのような大剣も捨てがたいんだよなあ。

両手持ちすれば何とか持てる筋力はあるし、こっそり買ってしまったおうか……。

ソロの時にだけ使えば良いだろうしな。パーティの時は呪術で十分だし。

さて、武器屋を探すか。流石駆け出しの街と言わなければならない。大通り以外にも幾つかお店が点々としているようで、大通りは大商店や古参のお店が多く、裏通りや細道の方には後から来た個人店が存在している。そのため、適当にぶらぶらと歩きながら気に入ったお店を探すのもまた冒険者の醍醐味の一つになっている。

どうせなら個人店でユニークな品物を探してみたいものだ。完全にプライベートで使う武器だしな。

表通りから裏通りへと入り、薄っすらと暗がりをおっかなびっくり歩いて行く。

「こうして散歩するのもたまには良いもんだな」

前世であればGPSによる迷いの無い歩みができただろうが、この世界にそんな便利なものは無い。

なので、知らないところを歩く新鮮な心地が心を躍らせる。

裏通りから細道へ、細道から裏通りへと適当に歩いて行く。ティンと来る店が中々見つからないんだよなあ。

そんな事を思いながら歩いている時だった。ふと視線を感じ、そこらを見やる。

ある一件の店の窓際に置かれた精巧な人形と目が合った気がした。

……にしても、美人な人形だな。中世の貴婦人めいたフリル付きのケープに赤いスカートが印象的で、今にも動き出しそうな程にリアルな女性の人形だった。

立ち止まり、その店に近付く。……心做しか人形が此方に視線を向けている気がする。

「雑貨屋フロム・ヘル、ねえ。まさかとは思うが……」

熱狂的なフロム信者の転生者でも居たのだろうか。

店名を見て思い出したがあの人形、人形ちゃんじゃないか。

私はダクソ3しかやってないライトユーザーだったから、SNSで賑わってた事ぐらいしかブラボ知らないんだよなあ。

そういう特典でも貰った人でも居るのだろうか、そうなると同じ勇者候補として顔を出しておくべきか。

そう思いドアにOPENの札が掛かっているのを視認してからドアを開く。

小気味良い甲高い鈴の音が頭上から響く。見やれば開いた時に鳴るように仕掛けられていたらしい。

「やあ、いらつしやい。こんな所に来てくれるとは、酔狂なお客さんも居たもんだね」

カウンターの奥に首裏で茶色の髪を纏めた中性的な女性の言葉に出迎えられた。

薄い黒のインナーシャツにサスペンダーと言う涼しそうなファッションであるが、雑貨屋の店員というよりは鍛冶師のそれである。

雑貨屋と呼ぶには棚に並ぶ商品は少なく、防具屋と呼ぶには鎧よりも衣服が多い。

端っこの方には樽に入った武器が無造作に突き刺さっている。

……何か喋るインテリジェンスソードがあそこから手に入れられそうな雰囲気だな。

文字通りの雑貨屋、と言う事だろうか。あれもこれも中途半端に手を出しましたと言う感じで店の内装が纏まっているように思える。

「……ね、ねえ、まさかと思うんだけどそれ、カルラの衣装、だよね？もしかして転生者の人だったりする？」

「如何にも。そう言う貴女もそうだったりするのかな？」

「えへへ、良く分かったね。ボクの事はユウキと呼んでよ。いやあ、まさか同じフロム好きな人が居るだなんて思わなかったよ」

「手先が器用になるタイプの特典を？」

「……ううん、この見た目だから分らないかもだけど、性同一障害って言えば何となく分かる？」

「性転換系のスキルか、または身体変化か？」

「わあ、凄い洞察力だね。前者が正解。元は男子だったんだけど、転生の特典で性転換を願ったんだ。だから、戦力的には役に立たないんだよね」

「ふむ、まあ、それは仕方が無いだろう。自由な生き方をできるなら其の方が優先度が高いだろうしな」

「そう言ってくれると嬉しいよ。……前世でも君みたいな人に会いたかったよ」

儂い微笑を浮かべたユウキは遠い目で外を見やって溜息を吐いた。

……性同一障害、か。理解を得られる環境に居たかどうかで心労の具合が変わる事だろう。

見た所カズマくん以上の年齢に見えるがまだまだ若いように見える。

先程の物言いからして大分辛い人生を送ったのだろう、深くは聞かない方がお互いのためだな。

「戦力にはならない、と言っていたが此処にある品々は君が作ったんじゃないのか？」

「……あはは、そうだよ。生前は隠れコスプレイヤーでね。衣類専門だったんだけど、鍛冶にも手を出して色々再現品を作るのを生き甲斐にしてたんだ」

「へえ、その歳で此処までのものを……」

「ええと、多分特典スキルのおかげで見た目が不老化してるんだ。だから、年齢的にはそこそこいってたりするんだよね」

「おおっと、すまない、藪蛇を突いたな」

「ううん、いいよ。……ねえ、もしかして君は」

「……………分かるものか？」

「何となく、ね。身振り手振りは女性のそれなんだけど、基本的な動きが男性のそれなんだよね。だからついつい目に入っちゃって」

「そうか。……はあ。まあ隠すものでもなし、踏み入った事を言わせてしまったしな。転生する際に天使さんを言い包めて記憶を保持したまま現地に転生して貰ったんだ。特典とは別にな」

「えっ、そんなのありなの？」

「いいや？ 正規の送り人じゃなかったからこそできたインチキのよ
うなものだよ」

「そっか……」

まあ、特典を使わずに性転換が出来ると知ってたならそっちを選ぶ
だろうしな。

すまないなユウキさん、私の場合は非常に特殊な例だ。

少し目を瞑って小さく息を吐いたユウキさんは先程と変わらない
儂い雰囲気のまま表情を戻した。

「因みに、どんな特典を貰ったか聞いても良い？」

「構わないぞ。少し近付いてくれるか？ ああ、それくらいで良い。
右目に浮かんでいるだろう？」

「うっそ……、ダークリンググじゃん。えっ、って事は不死人なの君」

「ふふっ、我が名はおんおん！ アークソーサラーにして上級呪術
を操りし者、暗き魂を持つ混沌なる呪術の申し子！ ってな。ダクソ
3 準抛の不死人だ。碌な死に方はしないさ」

「いやほんとにね……。それならエルデンでも良かったんじゃない
？」

「エルデン？」

「……………」

おおっと？ もしかしてフロムの新作でエルデンと略せる何かが出
てたのだろうか。

可笑しいな、私の時代の最先端フロムゲーがダクソ3だった筈なん
だが……。

多分、転生した時期が違うんだろうな。それだけの時間が経ったと

言う事なのだろう。

または時間の流れが違う可能性がある。もしくは生まれ直しと言うプロセスを挟んだ事で時間が経っている可能性もあるな。

「ま、まあ兎に角、今後ともよろしくねおんおんさん」

「此方こそ、よろしく頼むよユウキさん。バスタードソードが欲しいのだけど良い物があつたりするかい？」

「その見た目で大剣使うの？ ……ああ、両手持ちの補正で何とかできるんだ、凄いな不死人……。一応作つた奴はこの樽に差ししてるよ。習作だけとそこそこの品質は保証するよ、一律五万エリス」

「随分と安いな。では、拝見させて貰おうじゃないか」

普通武器の相場は短剣が一万エリスから、長剣が五万エリス、それ以上だと十万エリスぐらいがざらな値段だ。

モンスターが身近に居る世界なので身を守るための武器は需要が高く、それなりの値段がするのが当たり前だ。

「たーるっ！ と樽の中身を見やれば武骨な武器がごろごろと入っていた。」

「……なんか鏢の辺りが動いて喋りそうな長剣を見つけた。成程なあ、流石元コスプレイヤー。」

「……生意気言うんじゃねえ、坊主。ってな」

「ん？ ああ、それ分かるんだ。ついついそう言うのも懐かしくて作っちゃうんだよね。ちゃんと実用性はあるから安心して使つてくれて良いよ」

「ふーん……。って、なんじゃこりや、腕？」

「小アメンの腕って言う変形武器だよ。折り畳んだ腕が伸びる感じに変形するんだ。ブラッドボーンの武器だね」

「……………普通のは無いのか普通のは」

「あはは、そこにあるのは再現品ばつかだよ。おすすめは折りたたんだ鋸みたいなのだね。変形するとリーチが伸びるから使いやすいと思うよ」

「んー……。これか？」

「そう、それぞれ。鋸鉈。ブラボの初期に手に入る終盤まで使える武

器だよ。いやあ、変形機構を再現するのが凄い大変だったんだよそれ」

「へえ、そうなんだ」

だからやけに重いのか。にしても変形機構を再現とかできるものなんだな。

流星にこれは私が使うには扱い辛いな。樽にあっさりと戻した。

「ああ、戻しちゃうんだ」

「流星に重過ぎる。今の私は十三歳の少女だぞ」

「なのにバスタードソード担当とうしてたんでしょ？」

「浪漫だろ？」

「浪漫だねえ……」

結局、ダクソ3をやった頃の愛用品であった打刀を選んだのは言うまでも無かった。

大剣重過ぎだわ……。両手持ちでギリギリってレベルじゃないくらいに重かった。

サンライズ立ちすらできなかつたわ。これを振れる人すげえわ。

まあ、ゲームの中での不死人は成人してる大人だろうしな。

この打刀ですら結構重く感じる。これは素振りとかしてある程度振れるようになってからじゃないと実用化はできないな……。

打刀も十分に私の身長だと大きいので浪漫も達成できていると言えるだろう。

五万エリスを払ってソウルへと打刀を仕舞い込む。

「良いなあそれ、便利だよな」

「実際便利だな、冒険者として破格だろうよ」

「一応似たような魔道具があったりするけど凄い高いんだよね」

「へえ、あるにはあるのか。流星魔法のある世界だな」

「ほんとだよな。こうして不便無く過ごしてられるだけでも十分だと思ってたけど、やっぱり魔法とかにも触れてみたいよねえ」

「私の場合は色々と特殊だからなあ。ダークリングのせいかな、ダクソ3の呪術と闇術を扱ってるんだよ」

「そうなんだ？ 中級魔法みたいに一括で取得できるものなの？」

「いいや、一個ずつ取得する感じだよ。今使えるのは『大発火』『混沌の火の玉』『苗床の残滓』『猛毒の霧』『混沌の嵐』『カーサスの狐炎』、後は『闇の刃』だな」

「十分過ぎると言うか過剰過ぎない……？　ほぼ最終装備レベルじゃん」

「その分スキルポイントもでかくてな……。混沌と苗床は二十ポイントもしたからな、それで最初のスキル貯蓄が吹っ飛んだよ。おかげで魔法は初級魔法しか取ってないよ」

「いや、中級も上級も要らないでしょそのラインナップなら」
「それもそうだ」

呆れた様子で肩を竦めたユウキに苦笑を浮かべられてしまった。

まあそうだよなあ。ソウル錬成せずに苗床とかを手に入れられているだけ十分過ぎるよなあ。

こうして打刀も手に入れた事だし、そろそろ戦闘スタイルを変えても良いかもしれないな。

左手に呪術の炎、右手に打刀を装備して戦う本来のスタイルを確立すべきかもしれない。

「……殴打武器も欲しいところだな」

「良いのがあるよ。爆発金鎚って言うハンマーなんだけど」

「軽い？」

「重いねえ。試作型だし」

「この見た目だからな……。そこそこの重さの方が良いんだが」

「そこにあるのしかないねえ」

「じゃあ、オーソドックスなメイスでも買うか……。うぐつ、結構重いな」

樽から引き抜こうとしたが地味にきつい。半ばまで引き抜いたもののそのままそつと戻す。

ううむ、担ぎさえすれば扱えるのだろうか、樽の大きさがそこそこあるから私の身長だと厳しいものがある。

ユウキを見やればたははと苦笑していた。元男性だからか私よりもたっぱがあるので失念していたに違いない。

隣に来て私が先程引き抜こうとしたメイスを片手であっさり引き抜くあたり、立派に鍛冶師をしている証拠なのだろうな。

「軽く振っても良いか？」

「良いよ。そのために真ん中を少し空けてあるんだこの店は」

受け取ったメイスを肩に乗せるように担ぎ、中央の空いたスペースで縦に振るう。

遠心力に任せる形で斜めに振り下ろし、三段目は腰を入れたフルスイング。残身を残しつつ肩に乗せ戻し、息を吐いて構えを解く。

「わあお、流石冒険者だね。持ち上げられなかった筈なのに確り使えてるじゃん」

「まあ、これぐらいはな。これも買わせて貰うぞ」

「毎度ありー」

ソウルにメイスを収納し、五万エリスをカウンターに置く。

良い笑顔でそれを手に取るユウキ。仕草が普通に女性のそれなんだよなあ。

恐らく今の私に足りない部分だろうな。流石に魂レベルでこびり付いている仕草の癖は直せない。

まあ、別に女性として雰囲気できているだけに過ぎないしな、困る訳でもなし問題あるまい。

……自分で言っていてなんか虚しくなってきたな。

さっきのデルFRINGER買おうかな、喋らないし魔力も吸収しないけども。

カズマくんネタと戦力強化のためにプレゼントしてみるか。

めぐみんたちを守って貰うためにも彼の戦力強化は必須だ。

けれども、小金を手に入れるとそれでほそぼそと生活をしようとするぐらいには出不精だ。

折角冒険者になったのだからもっと活発的にクエストに出て欲しいのだけだね。

「これも貰ってくぞ」

「毎度ー。なにに、サイト君が居る感じ？」

「いんや、私は男性に興奮する気はないんでね。パーティーリーダーの

少年がカズマくんと言う十六の少年でな。同じ転生者だから気に掛けてあげてるんだよ」

「へえ、そうなんだ。その子も可哀想に……」

「ん？ 何でだ」

「いや、自覚していないようだけど君、美少女だからね？ そこの水準よりも遥かに高いからね君。地球だったらアイドルやれてるレベルだからね」

「あはは、そんな世辞を貰っても困るだけだぞ」

「……はあ、駄目だこりゃ。そんな子に気も無いのにプレゼントするだなんて……、罪な女の子だね君は」

「そ、そこまでか？ 私自身、女性らしいとは露とも思っていないんだが」

「はあ。だからこそ需要があるんじゃないか。男性の思考に寄り添えるから下手な男友達よりも友人になれて、ちよつとした時に美少女面で微笑めば一発解決。思春期の男子に自覚の無い色気で接するだなんて……、その子の性癖が歪まないか心配だなあ」

「ああ、大丈夫だぞ。カズマくんおっぱい星人だからこんなまな板に興味無いだろうよ」

「……だと良いね」

心底疲れたと言う様子のユウキさんに退店を促され、小首を傾げながら店から出る。

カズマくんにはこれから頑張って貰わねばならんからな、プレゼント喜んでくれると良いんだが。

……ただ、そもそもカズマくんが元ネタを知っているかどうか不安だ。

ユウキさんとの会話から察するにこの世界と前の世界の時間軸は地続きじゃない可能性が高い。

ましてや、規定から外れた転生を果たしている私だ。年代がズレている可能性は非常に高い。

ま、最悪ただの長剣として使ってくれるだろう。最近、素振りを始めたと云っていたしな。

……三日坊主になってなければ良いんだが。

14話

午前中の家事を手早く終わらせてしまい、昼前には着けるようにとトレントと駆ける。

ただでさえ都合の良い助っ人をさせて貰っているのもあって遅れる訳にはいかないからな。

「ヒヒイイン!!」

「そうだな、風が気持ち良いな」

「ヒント!」

「……頼むから人は轢くなよ?」

俺は風になる、じゃねえんだわ。安全疾走で頼む。

にしても、普段の視界よりも遥かに高い事もあって爽快感が凄い。

私は低身長だからな、こうして体躯の良いトレントに乗ると成人男性より高い視界を得られる。

そのため、広い原っぱである農村地帯への道のりは視界が開けている事も相まって非常に楽しい。

これが森の中だと背が高いのが災いして枝にぶち当たるのが目に見えるので、草原は本当に快適だ。

地面も土ではあるが程度整地されている事もあってトレントの走りは軽快だ。

……単純にトレントが私に配慮して揺れないように走っているのかもしれないが。

そう考えるとトレントは本当に賢い馬だよなあ。

噂に聞く乗馬は太腿で馬体を抑え込まないと衝撃と突き上げで死ぬるらしいが、手綱で落とされない様に掴んでいる必要はあるものの曲がる時以外は椅子に座っているのと変わりないくらいに楽だ。

「そこんとこどうなのトレント」

「ひひん」

「紳士的だろう? って……。ふふふ、本当に格好良い馬だよトレントは」

「ぶるう?」

この馬私の事好き過ぎだろ……。

惚れた？ とか聞かれても既にお前にも惚れ込んでるよ私は。

分かってて聞いているだろこのイケメン馬め。

照れ隠しに左手で首を撫でてやると嬉しそうに嘶いた。

……なんか足元からぺちんぺちんと言う音が聞こえるんだが。

うへえ、怖くて流石に見れん。流石にお前のサイズは入らんぞ。そ

もそも処女だからな、余計に無理だ。

暫くすると謎のぺちぺち音は消えたが、私の思考を読んだのかトレントが気まずそうに走っている。

「さて、地図によればそろそろケルル村だと思うんだが……。あれか？」

簡素な門に見張りらしい自警団の青年が立つ村が見えて来た。

近寄ってみれば門番の青年は何かを我慢するようにそわそわしており、此方を視認した時には慌てて槍を構えるだなんて物騒な姿を見せた。

ううむ、何かしらのトラブルが起きてそうだな。

こちらと十三の少女だぞ、それに対して槍を向けるだなんてよっぽど慌ててないといけないだろう。

「と、生まれ！ って、女の子？ ……はあ、焦った、びびらせんなよ」「すまない、少し宜しいか？ 私はアークソーサラーのおんおんと言う者だ。此方にテイラーさんが率いる冒険者のパーティが来ていると思うんだが」

「ああ！ あの人たちか！ もしかしてエルフだったりするのかな？」

……いや、耳は普通だな。確かに女の子が来るって聞いてはいたけど……」

「その様子だと何事かあったんだろう？ 手短かに教えて貰っても良いか？」

「あ、ああ、構わないが……」

青年が言うには先日獵師をしているゴールドさんと言う男性がゴブリンの群れに襲われたとの事で、その娘であり幼馴染のジャクルさんが薬草を取りに行つてから帰つて来ないそうだった。

なので、門番をさせられている青年ことジャックさんは気が気でない心地なのだそうだ。

テイラーさんたちは先程の証言から先んじて向かったらしく、今はその帰りを待っているとの事だった。

「成程な……。にしても大分時間が経っているのが拙いな」

「だ、だよなあ。ゴブリンって他種族の雌を孕み袋にするっていう話だし、ジャクルが無事か心配で心配で……」

「詳細をありがとう。私も直ぐに追いつこう。ジャクルさんの命の無事を祈っていてくれ」

「ああ、頼むよ。上級職の君なら俺よりも上手くやれるだろうしな」

命の無事だけを祈っておいてくれ。流石に貞操までは面倒見切れない。

それに、ゴブリンの群れが居ると言う事は確実にアレも居る事だろう。

ゴブリンやコボルドなどの弱いモンスターを囮に、駆け出し冒険者を狩る初心者殺しと呼ばれるモンスターがこの世界には存在する。

ある意味最下級モンスターたちと共存関係にあると言って良いモンスターだ。

そちらにジャクルさんが食べられていたら遺体すらも残らないだろう。

ゴブリンの群れだなんて一目で分かるようなものが急に村に現れる事は多々ある事で、その原因がこの初心者殺しと呼ばれるサーベルタイガーのような黒い体毛を持った虎に追い立てられてと言う事は珍しくない。

ジャックさんからゴブリンが村を抜けた先にある森の奥に居たと言う事を聞き出し、失礼ながらトレントに乗りながら村を縦断して森へと入る。

気配察知などのスキルは職業上持っていないので、生来の能力であるソウル感応能力を疑似レーダーにして辺りを警戒しつつ突っ走る。

まずはテイラーさんたちと合流するのが先だな。

森の中のゴブリンは洞窟や遺跡などの残骸などある程度生活がし

やすそうな場所を好むとされている。

ただ総数が多い場合は広場のような場所で野営のような生活を送る事が知られている。

辺りに崖や山は無く、森林しか見えないので今回はそっちのパターンだろう。

冒険者や商人を襲ってテントなどを奪い、それを使って生活をしている可能性があるな。

「……声が聞こえるな。もう戦闘に入っているみたいだ、急ぐぞトレント！」

「ヒヒインッ!!」

トレントも既に気付いていたようで進路が騒がしい方へと変わっていく。

数十秒程駆け抜けた先の少し開けた場所で大量のゴブリンに襲われているテイラーさんたちの姿があった。

リーンさんの腕の中にはジャクルさんらしき少女が震えていて、ぱつと見衣服が汚れているだけで性的に襲われた様子が見られなかった。

……成程、リーンさんの事だから襲われそうになっているところを強襲して救ったのは良いが、数が多くて持久戦になってしまっている訳か。

彼らの周りの地面に突き刺さる杜撰な作りの矢がそこそこの量あって長引いているのが良く分かる。

弓持ちのゴブリンは四匹程度なので二時間程は粘っていたのかもしれない。

ゴブリンたちは粗末な槍を持つ者が前衛に立っている事もあってテイラーさんたちも迂闊に距離を詰める事が出来ずに泥沼と化しているようだ。

「トレント、後ろのゴブリン共から狩るぞ。跳べっ」

「ヒンッ!!」

速度を増したトレントがその馬脚を以ってして跳躍し、囲まれているテイラーさんたちを飛び越えて後ろで弓を構えていたゴブリン共

の目の前に着地する。

『苗床の残滓』!!』

左手に収束した火球を即座に放ち、サークル状に広がる火炎が唾然とした弓持ちを燃やし尽くす。

一つ、二つ、三つと続けて『苗床の残滓』を投げ付け、灰エスト瓶を叩く。

魔力が回復したのを確認してからトレントから降り、ソウルから打刀を取り出して即座に手近なゴブリンに切り付ける。

家に帰ってからの素振りとは違って実際に肉を切り裂く感覚が伝わってくる。

骨まですっぱりと切れている事もあって中々の業物らしい。五万エリス均一の物とは思えん切れ味だな。

トレントは踏み潰すようにゴブリンたちに蹄を向けて私の背後を守ってくれた。頼りになる愛馬だ。

「おんおんちゃん!」

「ナイスタイミングだ! 助かったぜ!」

「流石おんおんちゃんだ! マジで助かった!」

「すまない、助かった!!」

後方の弓持ちを一掃した事でテイラーさんたちも目の前のゴブリンに専念できるようになり、アーチャーのキースさんとウィザードのリーンさんによる遠距離攻撃が飛び交う。

……当たらないとは思いますが真正面からゴブリンたちの後ろを取るのには止めようかな。

密集の薄い左後方から打刀を構え、距離を詰めて切り掛かる。

近寄ったゴブリンから袈裟斬りにし、返す刀で隣の奴の首を撫で切り、切り上げに繋いで足を切り裂く。

ハンドアックスよりも切れ味が良いおかげか一体毎における体力の消耗が抑えられて嬉しい限りだ。

一気に優勢となった私たちがゴブリンたちを一掃するのは容易い事で、数分で片が付いた。

「ふう、皆さん怪我はしていないか? ポーションが足りないような

ら貸すが」

「へへっ、前におんおんちゃんに言われて盾を買ったからな。ぴんぴんしてるぜ」

「ああ道理であのダストが装備にお金を掛けてたのね。中古のだけど盾を買って来た時は何事かと思っただわよ。それにしてもおんおんちゃん、ありがとうね。危ないところを助けてくれて」

「いやはや、ほんと助かったぜ。ダストが盾持ってたから何とか粘れたが、その娘を守りながらじゃ厳しいもんがあったからな」

「だな。流石に矢を切り落とし続けるのは無理があったからな。俺も盾買つとくか……」

幸いにもテイラーさんたちは掠り傷程度で済んだようで軟膏で十分らしい。

正面から震えているジャクルさんの様子を見てみれば、ダストくんを見つめて頬を染めているようだった。

ああ、吊り橋効果で守ってくれたダストくんに惚れてしまったのか。

憎い男だねえダストくん。……にしても、盾の使い方が上手かったな。

誰かを守る盾の使い方は熟練が必要だ。限られた盾の大きさで守る人へ当たる物を選別せねばならない。

持っているのが大盾であれば話は違うが、ダストくんのそれは普通のラージシールドだ。

胴を覆う程度の大きさしかないため、後ろに居るリーンさんたちを守るとなれば幾つか取り逃しもあるものだが二人にその様子は無い。

となるとしっかりと盾を使って二人を守った事になる訳で。

「にしてもダスト、あんた盾の才能があるんじゃないの？ 盾使うの初めて見たけど凄かったじゃない！」

「お、おう。昔取った杵柄っつーか、なんというか……、よくごっこ遊びで使ってたからな！」

「遊びでどうにかなるもんか？ まあ、何にせよ意外な特技の発見だったな」

まるで誰かを守護する騎士のような立ち振る舞いだったな、だなんて言うのはよしておこう。

恐らくダストくんが隠している何かしらの過去に通ずるものなのだろう。

まあ、何にせよ皆が無事で良かったな。ゴブリンも一掃できたし一件落着だ。

「よっし、それじゃ死体集めて焼いて帰るか」

「うへえ、ゴブリン退治は楽だけどこの後始末が面倒なんだよなあ」

「仕方が無いじゃない。うちのパーティにプリースト居ないんだから、アンデッドにでもなつて復活されたら面倒事になるんだからきりきり動く！」

「へーへー、分かりましたよっ」と

手分けしてゴブリンの死体を中央に集めていき、火打石で着火して火葬する。

この世界では土葬がポピュラーであるが、それはあくまで人類であつてモンスターに対してではない。

先程リーンさんが言ったようにアンデッドと化して復活するパターンも多々ある。

そのため、ゴブリンのような何の素材にもならないモンスターはこうして焼き捨てるのが通例だ。

モンスターの討伐数は冒険者カードに記載されるため不正のしようがないからな。

「にしても二十体は居たよなあ。見た感じ流れだろうけど、どっかにでかい巣がありそうだよな」

「そうだな。比較的年老いたのが多かったからな。恐らく口減らしも兼ねて追い出されたんだろう」

「つまり、その母体となる集団がどっかに居る訳ね」

「厄介な話だなあ。けどまあ、俺らの飯のタネになつてくれるんだ、食いつぱぐれなくて助かるぜ」

人が襲われてなければ、な。

つい言ってしまったキースくんは襲われた直後であるジャクルさ

んに気付いて気まずそうに頬を掻いた。

でもまあ、ジャクルさんは自分を守ってくれたダストくんの横顔に夢中のようなだから助かったな。

……まあ、それを見てリーンさんがどう思うかは別としてだが。

さて、これにて一件落着だな、と気を抜いた時だった。誰かに見られる視線を感じ取ったのは。

其方を見やれば、木の枝に立つゴブリン、の、ようなものが居た。先程まで対峙していたゴブリンは餓鬼のような、チビで小柄、そして腹だけが出ているのが特徴だった。

そこに居た異形なゴブリンはシュツとした筋肉質な肢体の所謂細マツチヨな容姿をしていた。

枝から飛び降りるとスーパーヒーロー着地を魅せ付け、近場に落ちていた粗末な槍を二本拾い上げた。

器用に両手の槍をくるくると回してから腰を落とすように構え、ギリついた双眸で此方を睨み付ける。

明らかな異常個体の登場に全員が顔を顰める。緩めた雰囲気に戻し、各々が得物を構える。

「……そういや、聞いた事があるぜ」

「知っているのかキース！」

「同じ母体で繁殖したゴブリンが世代を重ねる事で稀に生まれる個体が居るって話だ。酔っ払いの与太話として聞いてたが、こうして対峙してみるとやべえな……」

「因みに名前は？」

「ロクブリン」

「ゴブリンの上の存在だからか？」

「安直ね……分かりやすいけど」

シチブリンとかハチブリンとか、シブリンとかも居そうだな……。

普通ハイゴブリンとかホブゴブリンとか名前を付けるんじゃないかと思うんだが、この世界だしなあ。

ふざけた名前を付けられているもののロクブリンはそこらのゴブリンよりも手強い雰囲気がある。

左手に獣革盾を取り出し、前に構える。ロクブリンの槍の持ち方が何やら奇妙なのが気に掛かる。

バランス良く突き出すのであればあんなに石突の近くを握る必要は無い。

「ギャギギッ！ ギツギシヤ!!」

ゆらりと腰を捻るようにして両手に持った槍を振り回すようにして此方に振るつたのを見て、ロクブリンの意図を察する。

こいつは長い槍を長剣に見立てて振るっているのか。

遠心力が加わった連撃を盾で受けるものの重い一撃が身に響く。

こいつ通常のゴ布林よりも遥かに膂力が強いな。

まるで大剣を振るうかの如く、腰の入った円状の回転連撃が私に振るわれる。

少し位置取りを変えればテイラーさんたちと挟み撃ちにできるな、大振りの一撃を盾でいなしつつ移動していく。

が、ロク布林もそれを察してか、突然跳躍してテイラーさんたちの方へと躍りかかる。

「くそがっ！ 粗末な槍を使ってやがるつてのに何でこんなに重いんだ！」

「逆に考えろ！ 槍で良かったってな！ こいつが大剣でも握ってたらやべえ事になってたぞ！」

クルセイダーの『デコイ』を発動したテイラーさんが前に出て大剣で連撃を受け止める。

間髪入れずにキースくんとリンさんの援護射撃が差し込まれ、その隙を狙うようにダストくんが切り掛かるがロク布林はひらりと身軽に避け、力強い跳躍によって迅速に位置を変えていく。

出の早い『苗床の残滓』を投げ付けるものの背に瞳でも付いているかの如く避けられてしまう。

……距離を詰めて切り裂くしかないか。

ロクブリンの速度は尋常じゃなく早く、そして何かしらの武術を習っているかの如くその足捌きが上手過ぎる。

「ごめん！ 後二発が限界！」

「リーンはその子連れて一旦村に戻れ！」

「でも、そんな！」

「言ってる場合か！ 此処は食い止めるから早く行け！ 予備の物資が宿にあるだろうが！」

「……くっ、分かった！ 直ぐに戻って来るから！ ほら、行くよ、村に帰るよ！」

リーンさんが背を向けた瞬間、ロクブリンが仰け反って粗末な槍を投げ放った。

テイラーさんの巨体をすり抜けるようにして肩越しに投げられたそれを、ダストくんが気合で弾くも相当な威力があったのか仰け反ってこけた。

立ち上がる時間を稼ごうとキースくんが矢を放つが、ロクブリンはそれをつまむようにして紙一重で避け、未だに尻持ちをついたダストくんへと槍の切っ先を向ける。

「当たれっ!!」

形振り構わず私は打刀をロクブリンの背へとサイドスローで投げ付ける。

縦に投げれば避けられる可能性が高いが、横の回転であれば大きく避けざるを得ないだろう。

ロクブリンは奥歯を噛み締めるようにして歯ぎしりし、ダストくんへと向けていた槍を打刀への迎撃に回すため振り向き様に振るう。

甲高い音を立てて弾かれた打刀が宙を舞う。くるくると縦に回転しながら落ちるそれに向かって私は左手を向ける。

私が我武者羅に打刀を掴もうとしているのだと考えたロクブリンが槍を構え、突きの恰好を取る。

「馬鹿がッ！ 『大発火』!!」

落ちてくる打刀を突き飛ばすように爆発が生じ、不意を突いた一撃にロクブリンが驚愕の表情を浮かべた。

だが、打刀の刃がロクブリンに突き刺さる事は無く、勢い良く刃の腹側を叩き付けるだけに終わった。

しかし鋼鉄の塊である事は変わりなく、ある程度の威力はあったの

かロクブリンが仰け反る。

「ダストくん、刃を突き刺せ！」

「お、応よっ!!」

生まれた大きな隙に乗じてダストくんのバックスタブが決まり、ロクブリンの腹から長剣の切っ先が露わになった。

血反吐を吐いたロクブリンが槍を振り回してダストくんを狙うも、横合いから近寄ったテイラーさんの薙ぎ払いに打ち負けて半ばから得物を断たれ、浅くはない傷を負った。

勝機っ！

ダストくんが長剣を振るようにしてロクブリンの動きを封じ、キースさんの針に糸を通す様な射撃により槍を持つ肩を穿たれたロクブリンは引き攣った顔を浮かべていた。

「これで！」

「終わりだッ!!」

挟み打つようにソウルから取り出したハンドアックスを振るう私とテイラーさんの返す薙ぎ払いが決まり、ロクブリンの胴に深い一撃が刻まれた。

駄目押しと言わんばかりに脳天へと渾身の振り下ろしを放ち、頭蓋を叩き割る感触を感じながらトドメの一撃を与えてやる。

刃の半ば程突き刺さったままロクブリンの体が前に倒れたので、倒れ伏したのと同時に頭に蹴りを入れてハンドアックスを引き抜く。

地面に脳漿混じりの血液が噴き零れ、痙攣するロクブリンの姿に全員で安堵の息を吐く。

「はあ〜、ただのゴブリン狩りの筈が命懸けになるとか勘弁してくれっての」

「だな。でもまあ、危なかったなダスト。おんおんちゃんの機転が無けりゃ槍で突かれてたろ」

「いや、ほんと助かったぜ……。本気で死ぬかと思ったわ。ありがとうおんおんちゃん」

「いやなに、良いバクスタだったぞダストくん。あそこで動きを止められていたからトドメがさせたんだ」

「へへっ、そうだろそうだろ、もつと褒めてくれて良いんだぜ」

「ナイスガッツだったぞダストくん」

本当に褒められるとは思ってなかったのか、きよんとした後にダストくんがたははと苦笑した。

いやあ、中々の強者だったなロクブリンは。右目のダークリングが疼いていたから中ボス程度の強さはあったようだ。

もう少し強ければ条件が達成できていただろうな、と地面に落ちた半ば断たれた粗末な槍を見やる。

インベントリに収まったロクブリンのソウルに、六武輪ギヤシイのソウルと銘打っていたためネームドであった事が分かってしまった。

今思えばロクブリンの動きは輪を描くような舞踏のような薙ぎ払いが中心だった。

もしも、ロクブリンがその動きを活かせる得物を持ち、十分な経験を持って此処に現れていたら負けていたのは此方の方だったかもしれない。

それほどまでにロクブリンは強敵であった。……生きて帰す事が無くて本当に良かった。

この場から脱出して生き延びて経験を積んでしまえばゴブリンたちの用心棒として活躍した事だろう。

初心者殺しにロクブリンだなんて最悪の組み合わせだ。よつぽどのパーティーでなければ討伐は難しいだろう。

……初心者殺しの上にロクブリンがライダーとして乗っかるとかほんと止めてくれよ。

そんなロクブリンライダーだなんて居たら地獄絵図が目に見える。

ケルル村へと戻り、リーンさんと合流した後は、村長さんたちから熱烈なお礼を言われた。

依頼書にサインを貰い、馬車で帰るテイラーさんたちの好意に甘えて同車させて貰う。

魔力消費が激しかったらしいリーンさんはくったりとして早々に寝てしまい、今では私の膝でぐっすりだった。

ダストくんやキースくんも大分疲れていたようで思い思いに寝転んで寝てしまっている。

草原から吹く爽やかな青臭い風を浴びながら私たちはアクセルへと帰って行く。

……たまにはこういう刺激的なクエストもあって良いな、そう独り言ちた。

ギルドに着く頃には夕暮れ近くになってしまっていて、手綱を握っていたテイラーさんの疲れた顔が印象的であった。

受付で報酬金を受け取って山分けする。ロクブリンと言う強敵もあって追加報酬を貰えた事もあって懐が大分温まった。

早速酒盛りするらしいテイラーさんたちと別れ、離れていても賑やかな我がパーティへと足を運ぶ。

「お疲れ様、そっちはどうだったんだ？」

「あ、おんおんさん。お疲れ様です。こっちは……まあ、概ね上手くいききました」

「の、ようだな。恍惚としてるダクネスさんの様子を見れば分かるよ」「ですよー……」

存分に生餌となりぬるぬるになったであろうダクネスさんは既に私服へと着替えていて、今も尚余韻を味わっているのか大変愉快的な表情を浮かべていた。

何でも前にアクアさんがジャイアント・トードに食われて泣いていた光景を見ていたらしく、自分もぬるぬるに辱められたかつたらしい。

その念願が叶った事で恍惚な表情を浮かべてびくんびくんと悦んでいた。

……ほんとこの人めぐみんたちの教育に悪いな。いや、反面教師として見れば中々、か？

ダクネスさんの正面に回り、肩に手を置く形で右耳に囁く。

周りに聞こえないように此方の胸に抱き抱えるようにしてダクネスさんの口元を肩で隠してやるのを忘れない。

「で、おすすめた物は着たんですか？」

「あ、ああ……。おんおんの命令通りにちゃんと着ているとも。い、今もだ」

「へえ……。えらいじゃないですか。どうでした？ 年下の女の子に命令されて卑猥な拘束着を付けて下着を付けずに衣服と鎧を着た感想は」

「……さ、最高だった……。っ！ これ以上ない羞恥心と屈辱感が相まって、何度達した事か……。っ！」

「ふふふ、それは良かった。では、今後もこっそりと続けてくださいね。誰にも気づかれちゃいけませんからね」

「わ、分かった」

「分かった？」

「わ……。分かりました……。っ」

ぞくぞくと背筋を振るわせて快感を得ているらしいダクネスさんの様子に笑みを浮かべる。

やっべえ、この人マジで楽しいな。玩具扱いがむしろ嬉しいとか性癖やばすぎでしょ。

おかげで此方の嗜虐心も満たされてwin-winな関係を築けていけそうだ。

「……なんかおんおんが小悪魔に見えて来たんですが……」

「やだなあ、めぐみん。そんな訳無いじゃないか。いつから私がそんな酷い奴になったんだ」

「いや、ダクネスの様子を見てたら分かりますって……。絶対に何か入れ知恵してるじゃないですか」

「してないぞ？」

「嘘ですね」

「ま、待ってくれめぐみん。おんおんは私の相談に乗ってくれたに過ぎないんだ。そんな言い掛かりは止めてくれ」

「怪しさが増したんですが……」

「ははは、仲が良いってただだよ。いや、ほんと」

めぐみんの後ろに回り、頭を抱くように首に手を回して後ろからぎゅっと抱き締める。

急激に上昇したためぐみんの体温にくすくすと笑みを浮かべながら、
椰揄うように耳に嘯く。

「心配しなくても良いさ。仲良くする人が増えたとしても私たちの仲
が薄れる訳じゃないんだから。そうだろう？ 私たちの関係はそん
なもんじやないだろう？」

「ひゃ、ひゃい……」

「ふふふ、もしかして妬いたのか？ 可愛いなあめぐみんは」

「は、はわわ……、ち、近い、近いですおんおん……」

「おや、家ではよくしてるじゃないか、恥ずかしがり屋だなめぐみんは
……」

「ひゃう、や、やっぱり小悪魔度が増してます!? なんか色っぽいんで
すけど!？」

「……尊い光景ね」

「分かりて御膳。……いや、マジで尊い。小生意気ロリがダウンナー口
りに籠絡されてあうあうしてるとかマジで尊い……。死んで良かったわ、こんな光景あつちじゃ見れないって」

「むう……、いつもおんおんばかりといちやいちやして……、めぐ
みんは私のライバルなんだからもっとしやつきりしてよね……」

なんかゆんゆんが可愛い事言ってるなあ。

……まあ、めぐみんは私のだけだな！ こんなに可愛い娘は嫁に出
さんぞ！

健やかに育って良い人と出会って幸せな結婚をして笑顔で居てく
ればそれで良いんだ。

何せ、こんなに良い子に育ったんだからな！ めっちゃくちや大変
だったからな！

物心付き始めたくらいから私がお世話していたと言っても過言で
はないからな。

それくらいめぐみんの家は色々と問題があり過ぎたからな。

いやほんと、仲睦まじい両親であるとは言えども生活環境が最悪過
ぎるからなあそこは。

なんで食う物が無いのに子供こさえているんだか、本気で理解がで

きない。

大方めぐみんが健やかに育っているからと楽観的なのが本当に――

「おんおん?」

「おおつと……、すまないね。テイラーさんたちとのクエストで強敵と出会ったからまだ余韻が残ってるのかもな」

めぐみんを一度強く抱き締めてから解放する。名残惜しいがずっとしているのも体勢が辛いからな。

もう少し背があれば違ったのだろうけども……。

呼吸を整えて精神の苛立ちを鎮めてめぐみんの隣に座る。

こうなったらお酒で流すしか無いな。アクアさんに目配せすれば良い笑顔でサムズアップを返してくれた。

「シュワシュワ二つよろしくー! シャワシャワじゃなくて、シュワシュワだからね!」

「かしこまー!」

「あと焼き鳥の盛り合わせ十人前もお願いしまーす!」

「はい、よろこんでー!」

……ふう、大きな声を態と出したからか少しすつきりした。

心配そうな表情で此方を見やるめぐみんに苦笑を返すが、それで納得してくれる性格をしてないよなあ。

私の左手に重ねるようにめぐみんの右手が置かれる。

触れた場所から伝わる温かさと柔らかさが私の苛立った精神を慰めてくれた。

分かってる、分かっているんだ。でも、重ねてしまうんだ。

――両親との関係は違えど、生前の私の育った環境に似ていたから。

だから、どうしても心配してしまう。

めぐみんが私のように、変な方向に振じり狂ってしまわないようにと願ってしまうんだ。

人は独りでは生きられない欠陥品であるからして、壊れてしまわぬようにと丁重に包み込んであげなければならぬと私は生前に学ん

だから。

嗚呼、だから、私はめぐみんを守ってあげなくちゃいけないんだ。壊れぬように、傷付かぬように、誰でも無いこの私が守ってあげたいんだ。

左手をそつと裏返してめぐみんの右掌を重ねて握る。

どうか、この優しい手が傷付かぬようにと祈るしかできないのだから。

15話

それはとある昼下がりの出来事だった。

いつものように家事を終わらせ、縁側で特段何かをする訳でも無くぼけーっと日に当たっていた私に訪ねてくる人物が居た。

冴えない凡庸なT H E日本人顔をした、我がパーティの駆け出しリーダーことカズマくんだった。

最近のパーティの活動はクエストを受けた翌日が休日というスケジュールになっているようで、めぐみんとゆんゆんは先程出かけて行ったばかりだ。

「おや、カズマくんじゃないか。こんにちは」

「こ、こんちわ、つす」

「めぐみんたちは出かけたよ。旬な衣服を買いに行くと言っていたから大通りの方へ向かえば出会えると思うぞ」

「あ、いや、その……」

ふむ、草食陰キヤ童貞な感じ丸出しの反応だな。

恐らく私に用があつて来たのだろうけども……

女の子に直面して喋り掛けるのが苦手なのか、それとも改まって女性と接しているのが恥ずかしいのか、はてさてどっちかなこれは。

まあ分からんでもないよ。私も前世では女性の同僚に声を掛けるのは至難の業だった。

……まあ、同じデスマーチを経験して同じ地獄の釜の飯を食った仲間になってからはそれなりに喋り掛けられるようになったけども。

ええと、と前置きをたつぷりと置いた後に、カズマくんは意を決したように視線を合わせた。

が、へタレたのか少し目線を逸らした。このへタレめ……、仕方が無い、助け舟を出すか。

「もしや、私に用かな？　こう見えて色々な経験は豊富だ、力になれると思うよ」

「すみません、改まって対面したら頭真っ白になっちゃって……。ええと、少し相談がありました……。あつ、お時間大丈夫ですか？」

「ふふふ、大丈夫だよ。こうしてのんびりしていただけたからね。ほら、隣においで」

「あ、すみません、ありがとうございます……」

酒場では非常にツツコミを入れていたように思えたが、その場のノリで凌いでただけだったのか。

後ろ髪を触りながら会釈して隣に座ったカズマくんはコップを出して水差しから麦茶を入れてやる。

麦をフライパンで炒ってから煮立てた本格麦茶だ、良い感じにできているから飲むと良い。

緊張で喉が渴いていたのか良い飲みっぷりだ。随分と美味しそうに飲むじゃないか、実に良し。

おかわりもして、大分落ち着いたのか長めの息を吐いていた。

「これめっちゃ美味しいっすね。なんか香ばしさが凄いつて言うか……」

「こつちの世界にお手軽なティーバッグなんて無いからね。飲みたかったら自作するしかないんだよ。昔ながらのお手製麦茶って奴だ」
「へえ……、そういうや紅茶とか急須で茶葉使って飲むのとかの方が多いですもんね」

「そうそう。お手製の場合は弱火でじっくりと良い匂いがするまで炒るのがポイントだ。……そう言えばカズマくんとアクアさんは未だに馬小屋住まいなんだっけか」

「……そうなんすよね。いやまあ、始めの一カ月くらいで寝泊まりには慣れたんですけど、隣にアクアが居るのがなんっーか、その、たまに気恥ずかしくなるんですけど、しょーもない事で一喜一憂したり変な事してたりするのを目撃する度に正気に返るんですよね……」

「ふむ。と、言うけどなカズマくん」

「はい」

「ぶつちやけた話をするが、アクアさんはそれなりに常識的な方だぞ？」

「え、っ、あのとんでもな姿を見てそれを言いますかおんおんさん」

「無論だ。カズマくん、不躰な質問ではあるが学校には通っていたか

い？」

私の質問にカズマくんはきよとんと困惑した顔をしてから、何かを思い出したのか真顔で「まあ一応は」と呟くように返した。

おや、もしかして前にアクアさんが言っていた元ヒキニートと言う悪態はそのままの意味合いだったのか。

あんまり藪を突くのもアレだし、深入りはしないようにするか。

「まあ、ある程度通っていたなら問題あるまい。目的に対して最低限同じ事をできるようにすると言う、協調性を育む場であると言うのが日本の教育機関の在り方だ。在り来たりな授業で、個々の個性を伸ばすような授業はあんまりした事が無いだろう？ それに日本人には顕著だが、集団的行動を好んでそれに対し安心すると言う無意識的な教育を施している場でもある。まあ、何を言いたいかと言うとだな、女神であるアクアさんが果たしてそう言った教育機関で暮らしていた事があると思うか？」

「え？ それは……、どうなんでしよう。そう言う事あんまり話題に上げてないからちよつと分からないです」

「で、だ。仮にそう言った教育機関、つまりは学校に通わなかった生徒は協調性を学ぶ機会を大幅に削られる事に成る訳だが……、そう言った人物にはある特徴があつてな。論理的な思考や数学的な考え方の欠如が見受けられる場合がある。この場合は学校以外で確りと勉強をしなかった場合の者に見受けられるな。特に計算によつて得られる演算思考能力は顕著に出る。凶を見せても分からない、要点を理解できずに苦しむ、などの弊害が社会で噴出する事が多々あるんだよ」

「そう、なんですか？」

「うむ、そうなんだよ。これの厄介な所はね、誰かが指摘しないと自覚ができない点なんだ。自分では一生懸命にやっているのに業績が振るわない、そんな風に表面化して漸くと言うパターンが多いんだよ。で、だ。それらを踏まえた上でアクアさんはどうかかな？」

「んー……、どっちかっていうとそう言うのじゃ無い、と思います。何と言うか、子供と言うか、純粹っつーか……、常識知らず、あつ、もしかしてそう言う事っすか？」

「まあ、そういう事なんだよ。アクアさんはカズマくんの特典として此方に連れて来られた訳だろう？　つまり、人間一年生って訳なんだよ。女神的な、一つ上の次元での考え方とこの世界との折り合いがまだ上手く行っていないんじゃないかな」

「あー……、成程、何と言うか納得できました……。確かに普通はしねーだろって感じのやらかしとか、今が楽しいから後は行き当たりばったりみたいなのが多いのはそれが理由か……」

ふむ、割とマジで被害者の側なんだぞアクアさん。君が此方に連れて来てしまった訳だからな。

どういう経緯でそうなったのかは知らないが、大分此方に馴染んで来ていると見て良いだろう。

バツの悪そうな表情で麦茶を飲むカズマくんは何処か申し訳無さそうな雰囲気であった。

「だから、ある程度は大目に見てあげたりしなきゃ駄目だぞカズマくん」

「はい、そうします」

「よろしい。助言としては、ある程度尺度となる事を教えてあげれば良いと思うよ。アクアさんにとっては此方は知らない事ばかりなんだから、あれこれやっておけではなく、ああしてこうしてくれって素直に言ってあげた方が良いと思うよ」

「そうっすね……。思えばそこらへん厳し過ぎたのかもしれないです」
「うむうむ。アクアさんは君が死ぬまで傍に居るんだろう？　なら、お互いに気を許せる仲だと過信はしないでちゃんと信頼を育むべきだ。実際、アクアさんと一緒に居るのは楽しいんだろう？」

若干遠い目をしてから、苦笑交じりに小さな溜息を吐いたカズマくんは頷いた。

実際、男女で今まで馬小屋で生活できている方が凄いくらいなんだからな。

そう言った点は見直してあげようじゃないか。よしよし。

「……さて、派手に脱線してしまったがカズマくんは何しに来たんだ？」

「あつ」

きよとんと数秒、時が止まったかのように呆けたカズマくん。

……どうやら世間話に花咲かせて、本来の話の種を植えるのを忘れていたらしい。

あははと誤魔化すように頭をかいたカズマくんが姿勢を正して然も真剣ですと言わんばかりに修正を図った。

「ええと……、前にアクアと話した事なんです、おんおんさんの特典って現地人としての転生って訳じゃないんですよね？」

「まあ、そうだな。この姿は担当した天使さんに言いくるめをして成功したからだな。特典は別にあるぞ」

「あ、やっぱりそうだったんですね。あつ、いや、それを羨むとか妬むとかじゃないです。アクア曰く、強い武器を貰って大成する奴が多いらしくて、おんおんさんはスキルとその身一つで活躍してるから凄いつて話をしてたんすよ」

いやまあ、確かにダークリングはリスポン保険とダクソ3呪術を使えるくらいしか目立つ能力は無いからな。

一応とっておきな能力も備わっているのだが、発動条件が厳しいから中々使えたものじゃないし。

成る程、側からみれば呪術を扱うソーサラーにしか見えないな確かに。

「そこまで大した事をしているつもりは無いんだが……。私の強さの根幹は弓を扱う狩人として幼少期を過ごした経験があつての事だ。正直に言えば私と言う人間は、アークソーサラーや呪術師と言うよりも狩人の一面の方が強いんだ」

「そうなんですか？」

「ああ。近接戦闘もするがあくまで独学、いや、ただ武器を振るっているに過ぎない拙い我流でしかない。もし、相手が武術や剣術を学んだ者なら掠らせる事もできないだろうな」

まあ、接近戦ありきの相手に態々近接戦闘を仕掛けはしないけどな。

数が多くなければ普通に弓や呪術で殺すだろうよ。

「正々堂々の真剣勝負なんて私はしない。限られた手段を有効的に使って圧殺する事だけを考えて行動を起こしているに過ぎないよ。相手の長所の杭が出る前に叩いて、出来る事を減らす。相手の考えの真逆に賭けを張り、動揺させて致命的な一撃を与える。徹頭徹尾相手を封殺する事しか戦闘中には考えてないな」

「おお……、なんかアサシンみたいな考えなんですね」

「そうとも言えるな。自分の出来る事を並べてみて、状況に合わせて調整して使っているだけだ。恐らくカズマくんも私に似たスタイルを確立する方が良いと思うよ。側からみれば器用貧乏でしかないが、柔軟性と戦術的な一面を組み合わせた戦い方は、生き残るための一番の戦い方だと私は考えているからな。臆病と取られようが死んだらそこまでだ。命あつての物種だからな」

「成る程……。確かに俺は最弱の冒険者の職ですし、いのちをだいに、な戦い方は重要かもしれないね……」

「ものは工夫だ。幸い冒険者ならスキルのラーニングがあるからな。沢山学んで沢山悩んで沢山やれる事を増やすと良い。初級魔法も良いだろうな。『ティンダー』で火炎瓶に火を付けて投げてても良いし、『クリエイトウォーター』を水鉄砲のようにして不意を作っても良い。『クリエイトアース』を投げつけて咄嗟の目潰しにしても良いし、『ウインドブレス』で薬品の粉末を吹き付けても良い。『フリーズ』で相手の口を凍結させて窒息を狙っても良いかもな。あくまで魔法は手段だ。それをどう料理するかは君次第だ。物を、状況を、上手く使うんだ。だから、場を扱うための準備は怠るな。戦闘の勝敗の八割は前準備で決まるもんだ」

「は、はいー」

……ふう、柄にもなく高説を垂れてしまった。

でもまあ、カズマくんが満足そうな顔をしているから問題ないか。カズマくんの悩み事は、強くなるにはどうしたら良いか、みたいな駆け出し冒険者らしいものだったんだろうな。

少しでも参考になれば良いのだが、カズマくんは賢い方だから物にしたら強くなれる筈だ。

ふむ、丁度良いしデルFRINGERレプリカをあげるか。

胸元のソウルから引き抜くように仕舞い込んだデルFRINGERレプリカを取り出す。

何も無い場所から長剣を取り出したのでカズマくんの目が丸くなっている。

……にしても、胸への視線が強いな。胸の谷間も無いのに何処から出したんだ、つてか。喧しいわ。

黒シャツと七分丈のズボンと言うラフな格好だからだろうか。

こんななだらかな丘に満たないものを見て何が楽しいのやら。

此方の薄い胸を凝視しながら驚いているカズマくんにやや乱暴に投げて手渡す。

「インベントリから出しただけだよ。それは君への餞別だ。ショートソードだけではなく、ロングソードも持っておくと良い。武器の予備はあるに越した事は無いからな」

「こ、これは……、なんか見た事があるような……。ああっ!? デルフ!? ゼロ使のデルFRINGERじゃないか!? どうしてこれがこの世界に!?!」

「ふふつ、落ち着きたまえよ。それはレプリカだ。転生者が慰みに作った再現品だそうだ。生憎この世界にはレモンちゃんは居ないが、作品を知ってるならそれだけでも楽しめるだろ?」

「い、良いんですか? 貰っちゃっても」

「構わないよ。君にあげるために買ったものだからな。うちのめぐみんが世話になっっているからな、そのお礼だ。よくもまあ、爆裂魔法しか使えない固定砲台なめぐみんをパーティに入れてくれたものだ。ありがとう」

「あ、はい。いやまあ、アレしか出来ないって聞いた時はクーリングオフしようと思ってましたけど、後々の事を考えたらめぐみんの爆裂魔法は必要不可欠っーか唯一無二と言うか……。貴重な戦術的範囲魔法の使い手ですからね。よくよく考えたら手離さない理由が……。なくも無いかなって」

「ほほう、カズマくんも魔王討伐を前向きに考えているのだな。それ

なら君のパーティに入ったのは正解だったな」

「と、言うとおんおんさんも魔王討伐を？」

「ああ、無論だ。……言いくるめた手前、成果を出さないのは義理じゃないからな」

「ああ……、成る程。そういや、おんおんさんってなんでそのまま転生しなかったんですか？ 話してる限り歳上な感じがするんですけど」

「……死因が過労死だったからだ」

「あつ。……そりゃ、そのまま転生はしたく無いですよね……」

「うむ……。最悪、特典で何とかせざるを得ないくらいに考えてたからな」

過労死状態の身体で、体が資本な冒険者とかできんわ。

カズマくんの同情的な視線が痛えな……。

「因みになんの特典貰ったんですか？ 俺はその場のノリで……、アクアへの嫌がらせでアクアを選んだんですけど」

その場の情景が浮かぶようである。

売り文句に買い言葉な感じで、冗談で言ったらそのまま通っちゃったみたいなコントな感じだったんだろうなあと。

して、特典を……別に教えても良いのだが、教えないのも面白そうではある。

言うなればミステリアスな感じで、程良い尊敬を得られ続けられるだろうな。

「……知りたいかい？」

「ええ、まあ」

……なんかあんまり反応が芳しくないな。

遠慮がちと言うか、無理に言わなくて良いですよ、と言う駆け引きだなこれ。

やめた、教えてやらん。分からずにずっとヤキモキすると良い。

「ふむ、ないしよだ」

「えっ」

「いやなに、吹聴するような特典でもないしな。秘匿できるのであればしておくに越した事は無いんだ」

ふふふ、目論みが外れて焦っているのが手に取るように分かるぞカズマくん。

実際ダークリング（ダクソ3仕様）だなんて分からない人には分からないしな。

説明する程簡単なものでもなし、露見した時に教えれば良いだろう。

……まあ、恐らくその時は私が死んだ時だろうけどな。

「それに、知ったところで使い道も無いしな。この特典は私一人で完結するタイプのものだ。他者に与える恩恵は皆無だしな」

「そうなんですか……。ちよ、ちよろつとだけでも教えてくれませんか？」

「なんだ、そんなに知りたいのか？ 私のを？」

チエシヤ猫が笑う様な悪戯な笑みを浮かべると、可愛らしい事にカズマくんは赤面してしまった。

ふふふ、うぶな反応をするじゃないか。

左肩を軽く当てるようにして覗き込むように見やれば、テンパった雰囲気が増えて面白い事になってきた。

「そ、それはその……。パ、パーティーリーダーとして知っておくべきかなと思いますよ」

「へえ、リーダーとしてか。それは、少し残念だな」

「え、あ、おんおんさんに興味が無い訳じゃないです！」

「おや、そうなのかい？ 私としてはこんなちんちくりんに魅力など無いと思うんだがね」

なだらかな胸の上に手を置き、正中線をなぞるように下ろしていく。

……随分と食い入るように見ているが、もしやカズマくんロリコンの気があるのか？

若干前屈みだし興奮気味な雰囲気露わにし始めている。

「ふふふ、少し揶揄い過ぎたか。すまないね、つい」

「……おんおんさんってSっすよね」

「どうやらそうみたいだ。前世では気付かなかったが、こういう性分

をしているらしい」

「揶揄われていたと理解して少し冷静になつたらしく、やや長い溜息を吐いていた。」

「まあ良い感じに話題を誤魔化せたのでよしとする。」

「こんなちんちくりんぼでえでも使い道はあるんだな、びつくりだ。」

「む、となるとカズマくんはおっぱい星人では無いか。こうして私に色の籠った視線を向けていたようだし、普通に性の対象にカウントされているようだ。」

「まあ、私にその気がないので今暫くは遊ばれていてくれたまえよ、良い暇潰しになる。」

「そう言えばスキルの方はどうなんだい？ ソードマンやアーチャーの人に教えを請うたと聞いているが」

「ええと、一応剣術のスキルは取ったんで先ずはそこから始めようかなって思ってます」

「ふむ、成程な。あれもこれもとするとポイントが足りなくなるだろうしな。前線を張れる剣士を軸に万能化していく感じかな？」

「そうですね。初級魔法が割と使い勝手が良くて、『ウインドブレス』で『クリエイトアース』で作った砂を飛ばすとか、『フリーズ』が割としっかりと凍るんで『クリエイトウォーター』で濡らした地面を凍結させて転ばせるとか色々考えてます」

「成程なあ。して、カズマくんは魔力の数値は高いほうかい？」

「いえ、割と貧弱です……。ぶっちゃけ初級魔法が使えるだけでも冒険者としては有難いかなあって。火起こしとか飲める水とか、必需品ばかりですよこれ」

「そうなんだよな。生活魔法として扱う分には初級魔法は必須ものだ」

「うんうんと二人して初級魔法の良さに頷く。案外それを見越して作られた魔法なのかもしれないな。」

話を聞いていくとシーフ関連のスキルも手に入れたそうで、特に『敵感知』のスキルは使い勝手が良さそうで私も欲しいくらいだった。アークソーサラーのスキルは主に身体能力の低下や眩暈や息切れ

を齎すなどの妨害系の魔法が目白押しだ。

魔法職の共通なのか中級魔法までは取れるようだが、ダクソ式呪術があるからそれらは取る気は無い。

ポイントが貯まったら『空間転移魔法』ことテレポートを取りたいものだな。

一部の魔法は資質があれば他の職業でも取れる可能性があるらしく、『爆裂魔法』は私は取れないが『空間転移魔法』は三十ポイントで取れるようだ。

恐らく、全ての職の原点である冒険者を經由しているためだと思われる。

「つまり、アークウイザードだったら、冒険者、ウイザード、アークウイザードって地続きにジョブツリーが伸びてるって事ですかね」

「恐らくはな。でなければ、冒険者特有のラーニングの性質はおかしいだろう？ その手の分野に長じたものから教えを学ぶ事で最低保証の資質を得られるんだろう。だから資質に合わせてポイントが割高になるんだろうな」

「へえ……。って事は俺でもアークソーサラーの呪術魔法が習得できちゃうんですかね」

「恐らくできると思うぞ。ただまあ、私は『使い魔契約』しか取ってないからなあ」

「え？ そ、そうなんですか？」

「うむ。特典の副作用で得た特殊な呪術魔法を優先して取ってたからな。多分、そっちは習得は無理だと思っぞ。何せ、特典の武器はその持ち主にしか使えないワンオフ品らしいからな。魔法の特典なども似たような扱いだろう」

「そうなんですな。じゃあ、特典武器を拾ってもただの武器なんですね」

「そうなるだろうな。聞いた話では血筋や継承であれば一部の機能は使えるとか何とかって話だ。あくまで酒の席の噂話程度でしかないから鵜呑みはできないし、検証もできないしな」

「それもそうっすね。取らぬ狸の皮算用しても意味ないですもん

ねえ」

話の合間に麦茶を飲む。うむ、香ばしく美味しい。これくらい濃い方が私は好きなんだよな。

冒険の話という事でカズマくんも落ち着いてきたらしい。視線に籠る色と言うのが抜けていた。

生前では気にしていなかったが、女性目線だと割かし分かりやすいものなのだな。

主に胸、脚、そして顔と言った具合にカズマくんの視線が散らかっている。

恐らく顔が最後なのは目線を合わせるのが恥ずかしいというか、意識してしまうために無意識的に外しているんだろな。

そういう経験は生前でもしていたし、こうして客観的に見ると人間って面白いもんだよなあと他人事のように思えてしまう。

いや、確かに不死人ではあるが人を辞めたつもりはないんだけどな私……。

「そういえば、クエストの方はどうするんだ？ 近頃、古城に魔王軍幹部が住み着いて依頼が激減していると言う話じゃないか」

「ああ、それなんですけど……、一応ジャイアント・トードみたいな害悪畜生な生物系モンスターは鈍いのかそこそこ残ってるみたいで、野生本能の強い犬系とかのモンスターは逃げちゃってるっていう状況みたいです」

「ほう、そうなのか。であれば、暫くはトード狩りを続けるんだな」

「はい、そのつもりです。ただまあ、繁殖期なのか倒しても倒しても減らないですよね……。奴らの生息地が地下なので全体数も分からないんで、冬眠してる奴が多かったのかもしれないんですけど」

「ふむ、最低限の食い扶持があるだけマシじゃないか？」

「そうですね。何でか知らないけどダクネスがやけにやる気で、最前線で丸飲みになれに行くんですよね……。おかげでトードに呑み込まれて若干トラウマ感じてるアクアも安心して戦えるんで助かってはいるんですけど……、その、光景がアレ過ぎて……」

その光景が脳裏に浮かぶのは容易かった。

一直線に走って行ってそのままパクつと食われて足だけ見える光景が浮かぶ。

カズマくんはそれを思い出したのか微妙な表情を浮かべて苦笑していた。

「あはは……、ダクネスさんも中々の性癖だからな。それを発散できるのであれば丁度良いじゃないか。もう何となく把握できてるんだろう?」

「ええ、まあ……。あれは生粋のマゾヒストです。先天的なのか後天的なのかは知らないですが、相当なMですよ。痛みにも順応したくつ殺女騎士って言うか……、見た目が綺麗なだけすんげえ残念な人って言うか……」

「ふふふ、そうか? 私としてはアレくらいの方が好きなんだがな。人間やはり性癖には正直であるべきだ。裏でこつそり抱えて然も常識人振っている奴よりも遥かに信用できると思っているよ」

「そう言うもんなんですか?」

「ふむ、考えてもみろカズマくん。普段真面目に接していてくれる人が、裏では人を殴ったり傷付けたりするのが好きなサディストだった。そんな人を彼女にしたり、知り合いの彼氏になったとしたらやきもきするだろう。そんな人だと思っていなかったとか、知ってたら関わらなかつたのに、とか多少なりとは思うだろうよ。当人が理解と納得をして接しているならまだしも、そうと知らずに関係を繋いでいたら、それを知った時に恐ろしくも感じるだろう。それなら普段からSMクラブに行くのが趣味だと豪語する奴の方が信頼感があるだろう。あいつは生粋のSだしなあ、と性癖を知っている方が安心できるだろう? そちらの方が相手を傷付ける事はないし、お互いの関係も守れるというものだ」

「なる……ほど……? まあ、確かにそうですね。知人の裏の一面を見た時よりも、知っている事の再確認じゃあんまり傷付かないですもんね。……ああ、そっか。だから俺、あんなに傷付いたのか……。あいつが不良とそんな仲になるだなんて思って無かったし、思えばお互いの事をあんまり知らなかつたんだな……」

なにやら独り言を呟くように腑に落ちた様子でカズマくんは感傷に浸っているようだった。

生前の関係で何かあったのだろうか。内容としては知人が不良の彼女になっっている姿を見て傷心したと言う感じなのだが。

まあ、あんまり踏み込む必要は無いな。男女の関係であつたなら心の痛みもあつた事だろう。

実際にその何かしらでカズマくんは傷付いたようだしな、優しくしてあげようじゃないか。

「まあ、そう言う事だ。既に何かしら感じる事があつたなら共感もしやすいだろう?」

「ですね……。俺、もつと人と喋るべきでした。好きな事とか、嫌いな事とか。お互いが何となく知っているってだけでなあなあにしてたツケがアレだつたんだなって。おんおんさんに出会えて良かったです、いや本当に」

「そうか? それは喜ばしい事だ。私もカズマくんと知り合えて嬉しいよ。君は他人の目に敏感でありながら、自己を貫ける気概のある子だ。生前がどうだったかは知らないが、私は今の君を評価するよ。毎日頑張ってくれている君を、ちゃんと見ているよ」

「おんおんさん……」
小さな声で「やべえ惚れそう」と呟いたカズマくんの目が潤んでいる。

生前で何かしらがあつてニートになってしまったのだろうか、今のカズマくんはちゃんと冒険者をしている社会人の一人だ。

それをちゃんと評価する事は何も特別な事じゃないんだよ。人として当たり前のもそれだ。

だが、そんなのは環境あつてのものだ。生前の私であれば「何を甘ったれた事言つてんだこのクソガキ」と目線を下ろしていたかもしれない。

……そうだな。今生はもう少し人間らしく生きてみるか。最低限の人付き合いで終わらせないで、ある程度は深くなれる仲を模索してみようか。

泣きじやくるカズマくんの背を撫でてやりながら、優しい気持ちで
私はそう思ったのだった。

16話

厄介事と言うのは突然現れるから問題なのであって、かと言って嵐前の静寂があつて欲しい訳では無い。

アクセルの正門近くの草原にて目の前でぎゃーすかとお怒りなデュラハンの言い分はこうだった。

——俺が住み着いた古城に爆裂魔法を毎日打ち込む馬鹿は何処のどいつだ!?

やばい、うちのめぐみんしか心当たりがない。確かにトード狩りで『エクスポロージョン』したら被害が甚大になるので槍を持ってチクチクと突き刺していたらしいが、帰りにこっそりと爆裂していたらしかった。

いやまあ、確かにめぐみんは爆裂ジャンキーではある、あるのだが……。

流石に国が所有する古城に撃つちゃ駄目だぞ。歴史的な遺産として残してたらどうするつもりなんだめぐみん……。

今回はあのデュラハンこと魔王軍幹部が潜伏していたらしいから問題を押し付けられるから良いが、後でちゃんと叱っておこうと心に誓ったのだった。

さて、なけなしの勇気を以てして前に出ためぐみんとデュラハンがコントしてる間にどうするべきか考えるか。

「はあああ？ あなたがあんなところに住み着いたせいで商売上がりたりなんですけど！ だから私はストレスを解消すべく爆裂魔法を日課にしているのです！ あれで潜伏してるつもりだったんですか？ 気配駄々洩れでモンスター散っちゃったんですけど！ どうしてくれるんですか、補填はちゃんとするんですよね!？」

「する訳無いだろ!？ ちつ、俺だつて魔王様から頼まれた調査が終わればこんな場所からおさらばするわ!! 毎日毎日爆裂しやがってこのガキンチョコがあ！ 人の迷惑を考えないのか！ 親の顔が見てみたいわ!」

「存在自体が害悪なあなたに言われたくないんですけど」

「真顔で言うなよ、地味に傷付くだろうが……」

と云うかなんで舌戦が続いているんだ。何と云うかぬるいんだな魔王軍。

普通、切り捨てるだろ問答無用で。なまじつか理性と云うか人間性を保っているからあなっているのか。

ソウルを見通す瞳で見やれば……、おい、こいつ割と真つ当なデュラハンなのかよ。

やや鈍く濁っているものの輝き自体は強く、ほんわかりっちいことウイズさんのようにアンデッドである事が理由で濁っているタイプらしい。

デュラハン、首無し騎士と呼ばれるモンスターでその発生理由は名のある騎士が首を落とされる事で生じる、のだったか。

言うなればレイスなどの悪霊系のアンデッド、リビングデッドに肉体を足したようなモンスターだ。

見た目は漆黒に染められたフルアーマー、かつては名のある騎士であつたのだろうと云う風格がある。

……あるのだが、少女に舌戦でぼこぼこにされている姿を見ていると疑いが生じてくるな。

「ええい！ 喧しい小娘がつ！ そんなに死にたいなら殺してやるわっ！ ただし、惨たらしくな！」

会話も佳境を越えたのか物騒なものになってきた。

デュラハンが小脇に顔を抱えながら、右手をすつとめぐみんへと伸ばした。

——それを許す私だと思っているのか？

即座にロングボウを取り出し、威嚇射撃も無しに矢を解き放った。

宙を裂いて駆ける矢は寸分の狂い無く抱えた顔へと飛び、流石にそれは許容できないのか動作を止めて右手で打ち払った。

成程、伊達に騎士を名乗っている訳では無いようだ。

「何奴ッ！ 姿を現せ！」

「良いだろう。私とて、大事なめぐみんを殺させる訳にもいかないの
でな」

めぐみんを庇うように前に出て、デユラハンを睨み付ける。

先程のアレは恐らくデユラハンが持つ『死の宣告』だろう。

呪術系に分類されるのであれば私であれば十二分にレジスト可能だ。最悪女神であるアクアさんが居るしな。

「ふん、随分と小柄なガキだな……。だが、先程の一射は見事なものだった」

「さぞかし名のある騎士の成れの果てであるとお見受けする」

「……はっ、俺はそんな大それた騎士じゃなかったさ。でなければ、裏切りを受けて断頭台に上がる事は無かつたらうよ！」

当時の事を思い出したのか怒りによる威圧感が辺り一面に発せられた。

成程、先程のコントは強者であるが故の戯れであり生来の明るさが表に出ていただけか。

今の姿であれば魔王軍幹部としての威厳は保たれている事だろう。

……最初からそうして来てくれよと言いたいが、舐めて掛かって来てくれる方が殺しやすく遣り易い。

そうなると少し対応を間違えたな。あのまま嘲笑と悪態で我を無くす程に怒らせた方が楽できたか。

だがまあ、こうして誇りを持って対峙するのもまた良いものだ。

「それはぐ」愁傷様だ、お悔やみを申し上げる。貴殿は魔王軍幹部の者と見てよろしいか」

「然り、我こそは魔王軍幹部が一人、首無し騎士ベルディアである。勇ましき少女よ、名を名乗れ」

「我が名はおんおん。暗き魂を扱う呪術の申し子にして、汝を土に返す者」

お互いの名乗りにより緊張感のある雰囲気は広まっていく。

……流石に今回は名前を茶化さないようだ。

まあ、紅魔族の名乗りって本来こういう格好良い問答で引き出すものだからな。

後ろで「ほああ」と感嘆の声を漏らしているめぐみんの反応からして百点満点な名乗りだったんじゃないかね。

此方の名乗りに気を良くしたのかベルディアはふつと笑みを浮かべ、一度瞑目してから見開いた。

「良かろう。貴様であれば俺を楽しませてくれるに違いない。此処より離れた古城の最上階で待つ」

「承知した。近いうちに参ろう。去るが良い、誉れある黒き騎士よ」

「……楽しみに待っているぞ、勇氣ある少女よ！ では、さらばだ！」

そう言つて近くに寄つた首無しに馬に跨り、ベルディアは颯爽と草原を駆けて古城のある方へと走り去つて行つた。

……ふう、流石に万全な準備もせずに戦う事がなくて良かった。

こちとら昼寝の最中に緊急クエストの警報で集まつただけだからな。

流石に魔王軍幹部と渡り合うだけのやる気は無かつたしな。ふわあ、ちよつと眠いし……。

さて、明朝に城攻めでもしてやるか。女神印のアクアさんに聖水を作つて貰つて、アンデッドに効果靦面な火炎壺の準備もしなきゃな。

後ろを振り返れば恍惚とした様子のめぐみんが私に抱き着いて喜びを露わにしていた。

少し震えていたあたり、怖かつたのだらうな。安心させるべく背中を撫でてやり、ぎゅつと抱き締め返す。

「あまり無茶をするなめぐみん。最近槍を握っているからと言って接近戦は得意じゃないだろう。長距離から不意打ちでぶちかますべきだ」

「おんおん……！ とつても格好良かったです！ 流石は私のおんおんです！ 最高でした！」

「あつはつは、めぐみんが無事で良かったよ。前に出て行つた時はひやひやしたもんだ」

「うう、その、責任を取るべきかなつて思いました……。いざとなつたらアークプリーストのアクアにお任せすれば良いかな、と」

「……間違つては無いが、相手が問答無用で殺しにかかる相手だったらどうするつもりだ。ベルディアは生前は誇りある騎士だったのだから大丈夫だったが……」

めぐみんを抱き締める力を少し強めて、心配を込めた声色で話す。

「本当に心配したんだぞめぐみん。相手は人型であろうがモンスターなんだ。ましてや魔王軍の幹部だ。これからはもう少し距離感を確りするんだぞ。君は後衛なんだから前に出ちゃ駄目なんだからな」

「あの、おんおんも後衛なのは……」

「私は前衛もできるから良いんだ」

「あつ、はい……。なんか腑に落ちないけど気を付ける事にします
……」

「それでいい」

抱き締めていた腕を放し、めぐみんの無事を改めて確認して安堵の息を吐く。

不死人である私であれば死んでも蘇れるが、アクアさんが居るからと言って蘇生魔法に賭けるのは得策じゃない。

ささやき、いのり、えいしよう、ねんじろつて感じに失敗したらどうしようもないんだからな。

はあ、エリクサーとか一本だけでも仕入れておくべきかな。

私自身はエスト瓶さえあれば生命力がミリ残つてれば復活できるし、そう考えるとめぐみんのためにもそう言った回復アイテムを揃えておくのは得策のような気がしてきた。

今度ウィズさんに仕入れを頼んでみるか。法外に高いが、それだけの価値はある物を仕入れてくる変な商才を持っているからなあのは。

駆け出しの街でそんな値段で買う人が居ないってのにな……。そう言う点では残念な店主なんだよなウィズさんは。

「ええと、爆裂魔法による魔王軍幹部らしき相手の誘い出しが成功し、首無し騎士ベルディアである事が判明したんですね？」

「ええ、遣り方が少し強引ではありましたが、仮にも魔王軍幹部の可能性があった訳ですから致し方ないと判断して頂きたいものです」

「……それもそうですね。斥候をお願いした方々も潜入まではお願いできなかつたので、相手の確認ができた事は非常に有益であつたとギルドは考えております」

場所は変わり、私を先頭にずらずらと他の冒険者たちも纏めてギルドのエントランスの方へと出向いて報告をする。

古城を占拠するアンデッド軍団と言うだけしか情報が集まっていなかった事もある、正式に魔王軍幹部の襲来であると判明した事はギルドに対して貢献したと言えるだろう。

……まあ、ぶつちやけめぐみんが罪に問われないようにするための言い訳でしか無いんだがな。

ちゃんと理由がありました、と言う事にしておけば駆け出しらしい言い訳に落ち着く可能性があったからな。

この様子だとギルドの方も依頼の激減で冒険者からの突き上げもあって現状打破を願っていたのだろう。

これにより王都のギルドへ正式に応援要請を送れる訳だからな。

私たちができるのはその応援が来るまで耐え忍ぶ事、または打って出て少しでも敵の戦力を減らすべきだろう。

私としては後者を選びたいところだ。相手は弱点の多いアンデッド軍団だ。やりようは大いにある。

ベルディアは帰還後に古城の正門を閉じたと報告されているので、やるとすれば本当に城攻めだろう。

……普通立場逆じゃないか？ 籠城するの人間側じゃないか、普通……。

まあ、あれだけ古い城であれば何処か抜け道もあったりする事だろう。

だが、真正面からぶちやぶってやるのも面白いだろうな。

「と、言う事でアクアさんには聖水を作って貰います。臨時の立場として私がアクシズ教外部顧問の名で広め、聖水瓶の製造に取り掛かって貰います。恐らくこの世界で稀に見る最高級の聖水が出来るでしょうから、期待しておきます」

「分かったわ！ 大船に乗ったつもりで任せて！」

「次に破城槌を作成するので指揮をダクネスさんをお願いします。丸太を伐採し、先端に鋼鉄を被せてください。最低でも三本は予備も含めて作っておいてください」

「承知した。陣頭指揮は任せておいてくれ」

「次に、火炎瓶を作るのでカズマくん、安酒を蒸留して高濃度なアルコールを作つて欲しい。また質の悪い油を割れやすい壺に入れた火炎壺もあると良いな」

「了解です。汚物は消毒しないですもんね!」

「めぐみんとゆんゆんはマナタイトに魔力を込める作業をしていくれ。いざと言う時は魔法による圧殺を展開するかもしれないからな」
「任せてください! 紅魔随一の魔力を誇る私の手にかかればちよちよいのちよいです!」

「……うん、心配だから私が寄り添っておくね」

「頼んだぞゆんゆん、くれぐれも込め過ぎで爆発騒動なんて起こさないようにな」

使い勝手と言いつつペの法則めいた義務感からパーティーメンバーを動かしていく。

私は一番何かしらやらかしそうなアクアさんについていかねばなるまい。

ギルドにある酒場で使っていた空の酒樽をあるだけ持って来て貰い、そこにアクアさんの『セイクリッド・クリエイトウォーター』を流し込んで貰う。

なんか祝福しなくても十二分に聖水なのでそのまま使えそうだなこれ……。

流星は水の女神の化身たるアクアさんだ。神々しい能力はこういった場面では頼りになるな。

ユウキさんの雑貨屋で買って来た二本の純銀製バヨネットを高純度の聖水に浸し、アクアさんに頼んで『セイクリッド・ターンアンデッド』を掛けて貰いながら、アクシズ教徒とエリス教徒に頼み込んで祈りを捧げて祝福して貰う。

この世で一番えげつない対アンデッド用武器の完成である。

効果の程は樽から取り出した瞬間にギルドの端に居たウイズさんが顔を真っ青にしてこっそりと逃げ出したレベルである。

神罰の代行者級の武器が出来上がったので、着実にベルディアを屠

る算段が整っていく。

にしても何でか皆ノリノリで作業しているんだが、この世界の人は本当に生き生きとしているよな……。

「おんおんちゃんの前準備だからな、勝ったな！　がはは！」

「私、こんな気持ちで前準備したの初めて！　きつと勝てるわ！」

「勝ったなこの戦い、この聖水で風呂入って来る！」

……本当に大丈夫か？　そこはかたなく心配な台詞が聞こえて来たんだが……。

なんか不安になつてきたな、もう少し手段を考えるか……。

どうせなら火矢の準備もした方が良いな。アンデッドは良く燃えるからな、効率的だ。

なんかめつちや良い鎧を着てたし『酸の噴射』を取っておくか。

テレポートを取るまで少し時間が掛かるが仕方があるまい、準備は万全にしておくべきだ。

篝火による転送は可能なのだが、自分限定になってしまうので使どころが難しいんだよな。

そうなると多少言い訳のしやすいテレポートを持っていると誤魔化しやすいからな。

それに、めぐみんたちを連れて行きたい場面もあるかもしれないしな、得ていて損は無い魔法である事は間違いない。

「おんおんさん！　火炎壺と油壺、百個ずつ作成完了しました！」

「流石だカズマくん！　何か使えそうなアイデアはあるか？」

「幾つか考えたんですけど、聖水を染み込ませた網を投げ付けてやるのはどうでしょうか」

「採用だ！　早速取り掛かってくれ！」

「分かりました！」

成程、投擲して一網打尽にしてやるのか。

網から逃げ出そうと掴めば聖水によって身を焼かれる訳だ、実に理にかなっている。

駆け出しの街アクセルvs魔王軍幹部ベルディアという構図でもある。

人数の利を得ている此方としてはプリーストの人数の少なさがネックなため、こうしてアクアさん印の聖水を有効活用する策はあるだけ使うべきだろう。

……まあ、アンデッドは正直大した事が無いので聖水を得物にぶっかけて切れれば普通に倒せるだろうけどもな。

念には念をだ。此方側が疲弊せず、相手だけが消耗していく狩場にできれば万々歳だ。

↑
↓
▽カズマのターン！へ

一晩ぐっすりと寝て明朝にアクセルの正門へと集まった俺たちは各パーティのリーダーを先頭にして横に並んでその時を待っていた。

古城に辿り着く頃には夜が明けるであろう、そんな時間帯に集まったにも関わらず冒険者たちの様子は気概溢れるものがあつた。

そりやそうだろう、何せ、俺たちの総大将はおんおんさんだ。

昨夜の話し合いでベルディアに啖呵を切つたおんおんさんこそが総大将に相応しいと決まり、此度の魔王軍幹部ベルディア討伐戦における指揮を執る役目を負つたのだ。

今か今かと待ち侘びる中、捻じれ角を持つ逞しい馬に乗っておんおんさんは全員の前に現れた。

普段の呪術師スタイルの衣服ではなく、生前の修道女を感じさせる黒のシスター服を纏い、十字架を模した長柄の旗にはアクセルを象徴する剣と盾の意匠が施されていた。

あれこそがアクセルに集う冒険者を纏める旗印なのだ。

……まあ、急遽用意されたので伝統とか歴史とかは皆無なんだけだな、あれ。

新たな装いを披露したおんおんさんを見た事で冒険者たちのボルテージが自然に上がっていく。

人気過ぎるだろおんおんさん。流石はおんおんさんだ、さすおんと

称したいくらいだ。

……シスターベールの代わりにちよむすけを頭に乘せているのはちよつとだけシニールだけだな。

正門の中央で、霊馬トレントの背に立つようにして旗を掲げたおんおんさんの演説が始まる。

「諸君、此度は私の招集に賛同してくれて感謝する！ 我らの生活を乱す彼の魔王軍幹部ベルディアを討伐するべく、こうしてアクセルが誇る冒険者が集まってくれた事を誇りに思う！ ベルディアは待ち構えると言ったにも拘わらず、卑怯にも古城の正門を閉じ籠城を始めた！ ならば、我らは人類の矜持を魅せ、その城門を破城槌により粉碎し、ベルディアの操るアンデッド軍団を殲滅せねばならない！」

普段聞いた事の無いおんおんさんの張りのある大声が冒険者たちに飛んでいく。

そうだそうだと俺たちは合いの手を入れて場の雰囲気を高め、神聖な雰囲気醸し出すおんおんさんを讃え始めた。

その返しに自信満々な笑みを浮かべたおんおんさんが旗を頭上へと掲げた。

「アクシズ教外部顧問たるおんおんが宣言する！ 此度の戦いは聖伐である！ 彼の憎きアンデッドの軍勢は我らが女神の威光により滅ぼされる事だろう！ 我らにはアクセル一の、いや、人類最高峰のアークプリーストの加護がある！ 強力な聖水を用いて、汚らわしいアンデッド共を浄化し、焼き払うのだ！」

「応ー」とこの場に居る冒険者たちの声が重なる。

まあ、確かに腐っても水の女神の化身であるアクアの作った聖水だしな。

セイクリッドだなんて言葉が付いているものだし、そこらのプリーストよりも遥かに浄化力が強い事は、共同墓地で出会った一応リッチーナウイズの反応からして確かなものだ。

……そう考えるとアクアって凄いな。こういうアンデッド特效を付与出来る訳だし。

「此度の聖伐は三段階のフェーズを以て進行する！ 第一段階は城門

を屈強な力自慢が操る破城槌で盛大なノックをしてやる事だ！ 城壁からアンデッドの妨害が予想されるため、風魔法及び盾によって破城槌を防衛、遠距離攻撃の手段を持つ者は迎撃を行なって欲しい！」腕がなるぜと屈強な男性陣がマッスルポージングを取り、弓の弦を弾いて任せると頷くアーチャー陣が頼もしい。

俺も覚えただてではあるが弓を持って参戦するつもりだ。そのために『狙撃』のスキルも覚えたいな。

一拍置いておんおんさんが頷いてから続きを語った。

「盛大にお邪魔した後は第二段階、古城のアンデッドの殲滅に移る！ パーティ毎に分散し、階下から順に古城に住み着く穢れを我らの手で葬り、滅するのだ！ 第三段階に移行した際の横槍を入れさせないためだ！ 荷馬車に聖水樽や火炎壺など対アンデッド用の道具を用意してあるので存分に使って欲しい！」

おんおんさんが指さしたギルドが用意した荷馬車に乗せられた様々な物資を見て、安心感が俺たちの胸に宿る。

これだけの物資があれば相当な戦働きができるだろう、そう思えてくる。

腕が疲れて来たのだろうか、おんおんさんは掲げていた旗を下ろす。

そして、真剣な表情を浮かべて第三段階の事を話し始めた。

「第三段階は最上階に待ち構える魔王軍幹部ベルディアの討伐だ！ プリースト部隊による『ターンアンデッド』により足を止め、ウィザードたちによる魔法の一斉射、それに加えて横合いからの妨害を加えて圧殺し封殺する！ 一騎打ちを求める者は居るか！ ……居ないな。感謝する！ 彼の強大な敵に立ち向かう誉れを捨て、アクセルのため尽力してくれる事を私は誇りに思う！」

いや、流星に一騎打ちは無理だろ。おんおんさんじゃあるまいし。多分、この場に居る全員がそう思っていたが、蔑む訳でも無く持ち上げてくれる発言をしてくれた事で不思議な一体感が場に流れ始めた。

乗るしかないだろ、このビッグウェーブに。それは俺だけではな

く、他の冒険者も同じのようだった。

再び旗を頭上に掲げたおんおんさんに全員の視線が集まる。

「これよりアクセル冒険者による共同依頼、魔王軍幹部ベルディア討伐を開始する！ 全員馬車へと乗り、古城に辿り着くまでに最終準備を行なうように！ では、行動開始！」

「「応ッ!!」」

冒険者全員の返答に満面の笑みを浮かべるおんおんさん。

我らが誇るダウンローリシスターおんおんさんを旗印に、一体感を以て俺たちはパーティ毎に乗り合い馬車に使われている大きな馬車へと乗り込む。

言うなればアクセルのジャンヌダルク、おんおんさんがトレントに座り直し、旗を掲げながら先頭を駆け始めた。

それを追うようにして前の馬車から出発を始め、ベルディアの居る古城へと向かい始めた。

「おんおんめっちゃ格好良かったですね……」

「分かる。あの人について行くこうって思うよな」

「ですよー！ 分かってるじゃないですかカズマ」

めぐみんがうっとりとした様子で先程の勇ましいおんおんさんの姿を褒め称えていた。

ぞっこんと言うか一途と言うか、めぐみんほんとおんおんさんの事が好きだよな。

……もしかしたら好きより上の感情を持っているのかもしれないな。良きかな良きかな。

「ん〜！ 久しぶりに信仰パワーが溜まって来たから調子良いわね。何気にアクシズ教外部顧問の権限を上手く使ってくれてるみたいで嬉しいわ」

「何だそれ？」

「ああ、この前おんおんちゃんがアルカンレティアに行った時に貰った権力なんだって。如何なる場合でもアクシズ教の名を使って好き勝手して良いって言う特別優遇措置だそうよ。おんおんちゃんなら悪用はしないだろうし、こうして旗印になる時に便利でしょ？」

「ふうん、けどアクシズ教だろ？ 普通あんまり頼りにされないだろうに」

「無論、おんおんの人徳に決まってるじゃないですか。それぐらい普通分かるでしょうに」

「め、めぐみん、それはちよつと辛辣過ぎない？ 確かにセシリーさんやゼストさんを見てたら分かるけど……」

めぐみんが真顔で言った事でゆんゆんが苦笑する。

否定はしないあたり、アクシズ教の悪い噂は当然の事実として扱われているらしい。

それを見てアクアはそつと視線を逸らした。自覚あるんかい。

「ならもう少し自分の信徒に神託でもして自重を促せよ、駄女神め……」

いやまあ、こうして俺が連れてきちゃったからそれできないのか。口にしないでおいてやるか。

にしても、シスター姿のおんおんさん良かったな……。

スレンダーな体型に腰まで伸びる艶やかな黒髪も相まって、非常に清廉とした雰囲気があったな。

頭の上のちよむすけが良い感じに……、いや、流石に無理だ、そこは褒められんわ。

何気にあそこまでボディスタイルが出る恰好で前に出たの初めてじゃなからうか。

清廉潔白なシスターでありながら、総大将として先陣を駆けるその姿は正しくジャンヌダルクだ。

まあ、神託はそのアクアから聞けば一発であるし、間違いでは無いんだけどな。

「アクセル総出で討伐だなんて……、少しわくわくしてくるな」
「過去にそういうのは無かったのか？」

「ああ、私が生きている限りには無かったな。精々がこの前のキャベツ狩りくらいだろう。あれはどちらかというと採取依頼の範疇だからな。あれもまた素晴らしいイベントではあったが、騎士の末端である私としては此度の討伐クエストは誇れるものだ。恐らく、他の冒険

者たちも同じような面持ちだろうな」

「……なんか最近のダクネス変な暴走しなくなったよな。何と言うか大人しいというか……」

「そ、そうか？ 私としては以前よりも遥かに充実している毎日を送っているのだが……」

そう言っただクネスは頬を赤らめて恍惚とした笑みを浮かべ始めた。

豊満な胸に手を置いてはあはあと息を荒くする姿は下半身が苛立つから勘弁してくれ。

変な挙動さえ無ければダクネスは巨乳な美人だからな……。

そんなダクネスを訝しむように見つめるのはめぐみだった。

どうやらめぐみんは此処最近のダクネスの変化に何かしらの引っかけかりを覚えているらしい。

……十中八九おんおんさんだろうけどな。

あの人Sだし、裏で何かしらダクネスに手を打っている可能性が非常に高いんだよな。

あの酒場での一件からダクネスは振舞いを変えている。痛みによる快楽を得ようと一目散に暴走する悪癖が無くなったのだ。

ジャイアント・トードの討伐依頼のように、率先して矢面に立つ事は多いのだがパーティの和を乱すような暴走は無くなった。

何となくではあるが言い付けられていると言うか、躰けられているような様子があるんだよな……。

実際、クエストの後に酒場で打ち上げをした後はおんおんさんと何処かに消えているようだし。

も、もしや、何処かしらでおんおんさんがダクネスを調教してたりするんだろうか。

ダクネスは相当なDMの変態クルセイダーであるからして、あの暴走が無くなるくらいの何か、つまりは快楽を得ている事は間違いない。

そのお供に友人であるクリスが付き添っているとは思えないし、となるとやはり可能性があるのはおんおんさんくらいだ。

にしては、それらしい傷を負っているように見えないんだよな。

「な、なんだカズマ。私の事をそんな目で視姦しても受け入れてはやれないぞ」

「えっ、いや、そういうつもりは無かったんだが……」

「ま、まあ、カズマもお年頃の年齢である事は確かだ。そう言う事に興味を示すのも仕方が無い。仕方が無いんだ。でも、それでも私は駄目なんだ、既に先約があるからな」

「……先約、だと」

思わずごくりと唾を飲んでしまう。恍惚とした表情で髪先をくると遊ばせて笑みを浮かべるダクネスの表情はそれはもう色っぽく、淫靡な気配を魅せていた。

それに当てられた同じ馬車に乗る男性陣が生唾を飲んで前屈みになる。

そんな様子を見て女性陣の冷たい視線が向けられているのだが、それを気にしないくらいにダクネスの色気は凄かった。

女性として一皮剥けたような、そんな様子にめぐみんが静かに驚愕していたのを対面する俺は気付いてしまった。

……何か修羅場になりそうだな、と視線を逸らすしか俺にはできなかった。

17話

アクセルにおける全戦力を投入して行われる討伐戦の指揮を執る事になったのは正直困惑物であったが、こうして御旗を振るって先頭を駆けているのは楽しいものだな。

だって私アクセルの街では下から数えた方が早い新参者だぞ？
なんで指揮官として振舞っているんだ？

流石にベルディアを呼び寄せてしまった責任がめぐみんにはあるから、それを請け負うために色々と積極的に動いてはいたが、本当にそれだけなんだが……。

是非に是非にと神輿に担ぎ上げられてしまったのでこうして頑張ってはいるが……、これ本当に私がすべき事か？

他にもっと良い人選無かったのか？ これ失敗したら責任私に押し付けられる奴だろう？

うへえ、何が何でも成功させねば更に面倒な事になるのは明白だ……。

かつてのジャンヌダルクも先陣切る時はこんな気分だったのかね。だから当時の戦作法を無視した戦法を取らざるを得なかったのだろうな。

だって失敗したら自分の命がやばいからなこれ……。

「ひんっ」

「ああ、うん。頑張るよ、頑張るさ……。はあ」

内心を読んだトレントに慰められるものの、下がっていくテンションは止まらない。

古城に近付くにつれて朝焼けが草原を広がっていく様を眺める。
美しい光景だ、爽やかな草原の風が相まって非常に素晴らしいものだった。

……何が悲しくて自分の進退が掛かった朝駆けをせねばならんのか。

それもこれもギルドのせいだ。しれっと古城の価値について語りやがってからに。

こうなつたら討伐成功報酬をぶんどってやらねば気が済まん。

「……そろそろ、だな。上手く行けば良いが……、はてさて」

丘の上にある古城へと続く半端に舗装された道を私たちは踏破し、城門の前へと辿り着く。

……が、城壁の上にはアンデッドの様子は無い。

まさかと思うが直ぐに来ると思つていなかったのだろうか。

好都合だ、盛大なモーニングコールで目覚めさせてやる。

沸々と沸き上がる苛立ちをぶつけるべく、軍旗を頭上に掲げる。

舗装された道の左右に馬車が止まり、最後尾に積まれていた破城槌を屈強なる筋肉自慢の男性たちが担ぎ上げ、鋼鉄の城門前に陣取る。

魔法使いが杖を構え、盾持ちが破城槌を守るべく左右に展開し、弓使いたちが後ろに並ぶ。

すうーつと気持ちの良い朝の空気を吸い込み、古城に朝陽が差したのと同時に声を張り上げる。

「これより第一段階を開始する!! 破城槌部隊、呐喊せよ!」

「おつしやああああ!!」

「やったあああよおお!!」

「いよつしやああ!」

「ひゃっはー!!」

破城槌の先端を覆う鋼鉄の蓋が鋼鉄の城門をぶち破ろうと炸裂し、甲高くも鈍い金属音をこだませた。

一度、二度と繰り返し、声を掛けながら叩き付けられる破城槌の音で漸く気付いたのか、城壁にアンデッドどもがわらわらと現れ始めた。

その手には朽ちた弓と矢が握られており、破城槌を阻止すべく弦を引き始めた。

「ウィザードは風を張れ! 全員が一辺にやる必要は無いからな!

左右から一人ずつ順に発動して、節約しろ!!」

「了解! 『ウインドカーテン』!」

「ひゃあ、我慢できねえ! 『ウインドカーテン』だ!」

城壁から放たれた弓矢を吹き荒れる風の盾が巻き上げるように阻

止し、それでも逸らし切れなかったものを盾持ちのクルセイダーたちが万全な体勢で弾き飛ばす。

城壁の射手が構え直すその隙を逃すまいとアーチャーたちの双貌が鋭く睨んだ。

「今だ！ 『狙撃』！」

「鳴打ちじゃい！ 『狙撃』！」

「狙い撃つぜえ！ 『鷹の目』！」

「燃やし尽くしてやるわ！ 『ファイアボール』！」

「これも持つていけ！ 『ライトニング』！！」

射手の隙を埋めるように中級魔法を放つウィザードの支援もあり、射的の的の如くアンデッドアーチャーたちが城壁の裏へと落ちていく。

だが、待ち構えていたアンデッドの総数が多かったのかそれを埋めるようにわらわらと補充されていく。

梯子を掛ける案もあったがこの様子を見るに採用しなくて良かったな。

仮に登り切れても大量のアンデッドに襲われて死者が出ていた事だろう。

何せ、相手は死んでいる死兵だ。操る力さえ残っていれば上半身と下半身が別れていても襲い掛かるモンスターである。

魔法の一撃は兎も角、ただの弓矢の一撃では押し返すのが精々だろう。

それを証明するように頭に矢を突き刺した状態で再び登り現れるアンデッドアーチャーの姿があった。

それを見て齒噛みする冒険者たちの姿が見える。……さて、動くか。

「補給兵！ 聖水樽に浸け込んだ矢を射手へ渡せ！ 火矢の準備もだ！」

松明に火を灯して貰ったものを掲げて貰い、松脂を塗った矢じりに向けて火を付ける。

狙うは城門上に位置するアンデッドアーチャーだ。見やすい奴程

効果があるからなっ！

この程度の距離ならば鼻歌を歌ってでも当てられるからな！

解き放った火矢は放物線を描いてアンデツドの眉間へ吸い込まれるように突き刺さり、死体松明と化したそれが真後ろに倒れて消え失せる。

その後、城門の後ろから黒い煙が見える。集まっていたアンデツドに引火したのだろう。

「おお!! おんおんさんがやったぞ！ 俺たちも続け!!」

「す、すげえ、この距離を『狙撃』無しで射貫くだなんて！」

「私たちも負けられないわよ、本職の意地を見せるのよ!!」

遠距離手段を持たない戦士たちが支援に回り、松明が彼方此方に浮かぶように掲げられる。

投擲自慢が城壁を追い越すように油壺を投げ始め、相手の被害を甚大にしていく。

城門が段々とひしやげて行く最中、此方の優勢で第一段階が進行している。

ウィザードたちも二次被害を期待できる『ファイアボール』に切り替え、ある程度の余力を残して支援に回り始める。

「どっこいしよおっ!!」

「もう少しで挟じ開けられるぞ!!」

「気合！ 入れて！ ぶつけろお!!」

「うおおおおおおお!!」

気合集中と言った様子で破城槌の渾身の一撃により鋼鉄の城門が挟じ開けられた。

城門が悲鳴を上げるかのように音を立てて古城側へと倒れ伏し、内側へと侵入する戦端が導かれた。

破城槌を放り捨ててガッツポーズを決める男性陣の笑みに、私もつられて笑みを浮かべる。

「よくやった!! 素晴らしい成果だ!! 作戦は第二段階へと移行する

!! 迅速にパーティを組み直し、古城へと流れ込め!! 我らが敵を葬り、土へと返せ!! 補給兵は城門前に前進し、補給場を整えろ!!」

「「応ッ!!」」

城壁の上へと登るパーティや我先にと階下へと走って行くパーティを見送る。

城門まで補給のための荷馬車を進め、此処を簡易的な補給兼衛生場として組み立てる。

最悪の場合、王都からの援軍が来るまでの時間を稼ぐための足掛かりにしないといけないからな。

城門近くの安全が確認できれば土木系の職人が城門を徹底的に破壊し、再び籠城できないようにぶち壊す算段になっている。抜かりはない。

トレントから降りて送還した私もまたカズマくんやめぐみんたちと合流すべく歩みを進める。

「朽ちたアンデッドには『ターンアンデッド』ではなく聖水を掛ける！この後の事を考えて出来る限り節約をするんだ！いのちだいに!!」

「「いのちだいに!!」」

力自慢たちによって聖水樽が彼方此方に置かれ、聖水瓶や聖水のエンチャントのための補給場を設置する。

無論、ひしゃくやバケツも置いてあるので後始末もこれで大丈夫だ。

パーティ毎に分かれている事もあって連携の齟齬は無いが、誰もが血眼になってアンデッドを追いかけるせいで競争になりつつあるのが少し不安である。

別に討伐数で報酬が変わる訳ではないので無理はしないで欲しいんだがな……。

「おんおん！」

「よし、私たちも合流したな。一階はもう終わりそうだから二階へ向かうぞ」

「了解しました！ダクネス先頭を頼む！」

「ああ！任された！クルセイダーの誉れを見るが良い!!」

「皆燃え上がってるわね！アンデッドや悪魔は消毒よ!!」

「せ、精一杯頑張ります！」

古城のエントランス付近で合流できた事で少し安堵する。

大分もみくちやになってたからな、はぐれていなくて良かった。

ダクネスさんの『デコイ』によりヘイトを管理しながら、階段を上ってアンデッドナイトたちと立ち向かう。

……なんでダクネスさんの『デコイ』よりもアクアさんにヘイトが寄っているのか分からないんだが。

ええと……、ああ、確かアンデッドの習性で聖なる力を持つ人に救いを求めて近寄るんだっけか。

「アクアさん、引き付けながら『ターンアンデッド』！ ゆんゆんは『フリーズガスト』！」

「分かったわ！ 女神の威光に浄化されなさい！ 『ターンアンデッド』！」

「凍っちゃえ!! 『フリーズガスト』！」

出の早かったゆんゆんの凍結魔法によりアンデッドナイトたちの足が物理的に止まり、アクアさんの強烈な『ターンアンデッド』により天に召されていく。

周りを見るとプリーストの『ターンアンデッド』が効いていないのが幾つか見える。

流星は魔王軍幹部と言うべきか、恐らく配下のアンデッドに神聖魔法抵抗を付与するパッシブバフを与えているのだろう。

一般プリーストには荷が重いそのバフを貫くアクアさん凄いな。

「聖水と火を使い!! 凍らせて足を止めさせろ！ 『ターンアンデッド』の効き目が弱いぞ!!」

「わ、分かりました！ えいっ!! ええーい!!」

「バケツで聖水をお届けしてやらあああ!!」

階下で押されていたパーティに助言を投げかけつつ、集団を突破した私たちは二階層のホールへと足を踏み入れる。

ずらっと食堂だった場所に並び立つアンデッドの群れに引き攣りつつも、殲滅すべく指示を出していく。

「アクアさんとダクネスさんで左右に別れる！ カズマくとめぐみ

んはアクアさんを支援！ 私とゆんゆんはダクネスさんの方へ回れ
!!」

「分かった！ 行くぞめぐみん！」

「やってやりましょう！ ちよつと槍使い上手くなっただんですよ私も
!!」

「私の拳が光って唸る！ ゴツドブローが火を噴くわ!!」

アンデッドを吸い寄せるアクアさんと『デコイ』を使えるダクネス
さんを配置し、横合いから二人掛かりでアンデッド共を殲滅してい
く。

この日のために用意した二振りの純銀製バヨネットを両手に構え、
先日のロクブリンの戦い方を参考にして一陣の嵐となるべく身を躍
らせる。

ヘイトがダクネスさんに向かうので、その隙を突くようにして横合
いから堂々と不意打ちを決めていく。

流星は祝福されたバヨネット。するりすんとアンデッドを切り
捨て、切断面から音を立てて浄化する始末だ。

ゆんゆんは得意な『ライトニング』で頭を焼くようにしてぶちかま
し、時折近くに置かれた聖水樽から律儀に聖水をぶっかけている。

此方側の殲滅が終わったので後ろを振り向けば、聖水を染み込ませ
た投げ網に身動きを止められたアンデッドに総攻撃を加える三人の
姿があった。

カズマくんは前にプレゼントしたデルフレプリカでアンデッドを
突き刺すようにして首を断ち切り、槍を構えためぐみんは喉元目掛け
て勢い良く突き入れては蹴り飛ばしていた。

アクアさんは何やら神々しい光を纏った右手でアンデッドをぶん
殴って浄化しながらぶち殺していた。

「ふう、何とかあったな。しかし、神聖魔法耐性を持つアンデッドとは
厄介な……」

「でも、聖水や火と言った浄化に関するアイテムなら問題無さそうで
すね」

「恐らく耐性を付与するのはあくまで魔法のみなんだろうな。聖水や

火はある意味属性ダメージみたいなものだから貫通と言うか別計算なんだろうよ」

「オンラインゲームだったら計算式面倒ですねそれ……」

「現実だから問題無いのさ。予めアクアさんに聖水樽を沢山作って貰っておいたのが功を奏したな」

「ふっふーん、こう見えても水の女神、み、ず、の、め、が、み！ 女神ですからー！」

「ああ、今回は褒めてやるよ。流星はアクアだ！ ひゅーひゅー！」

水の女神！ アクア様万歳！」

「えへへ、この調子ならゴッドレクイエムも打てる気がするわ！」

そう左拳をぐっばぐっばするアクアさん。

さつきもゴッドブローとか言って右拳で殴ってたが、モンクスタイルなんだなアクアさんって……。

花卉を模した杖を持ってたからプリーストスタイルだと思ってたんだが、良い意味で期待を裏切られたな。

実際、今までその杖を使っているところ見た事ないし……。

案外ファクションで持っているのだろうか、アレ。それにしても材質が見た事無いと言うか、頑強な花卉を模した部分とかどういふ感じで作っているのか分からない。

もしかして背中や腰に回しているあの羽衣みたいなのと一緒で天界から持って来たアイテムなのだろうか。

アンデッドに近寄られる性質を持っているからこそ、接近戦の花形とも言えるモンクスタイルは非常に相性が良いからな。

拳を痛めないようにナックルダスターとか用意してあげた方が良いんじゃないだろうか。

思いつきり素手で殴っているが、それが通用するのは相手が鎧を着ていない一般アンデッドだからだ。

ちよいちよい居るアンデッドナイトは普通に鎧を着ているので、それを殴ったらアクアさんの拳が痛むのは当然である。

後でカズマくんに助言しておくか。アクアさんだけだと別の何かを買って散財する未来が見えるし。

若干ダクネスさんたちの視線が胡乱な感じがするのは、まあ流石に女神が地上に降りてきているだなんて信じられないだろうからな。

でもな、ダクネスさん。地味にエリス教徒として一番恩恵を受けているのは貴女なんだぞ。

実際女神エリスはクリスと名を偽って地上に降りてきている訳だし、コンビを組んでいたんだからな。

……あれ、まさかとは思うがクリスもといエリス様って、アクアさんみたいに教徒の生活を見ていたりするんだろうか。

そうなる私がダクネスさんにやっている事は全て見られている可能性があるな……。

でもまあ、今の今まで何のアクションも無いし問題無いだろう。

流石にそこまで一教徒の様子なんて逐一見ていないだろう。

「さて、階下の制圧も終わって皆二階に上がって来ているみたいだし、三階への階段を探すぞ」

「そうですね！ ベルディアに私の渾身の爆裂魔法をお見舞いしてやらねば！」

「……頼むからベルディアが窓際に居る時に撃つてくれよ？ 爆発に巻き込まれて死にたくないからな……」

カズマくんの言葉にめぐみん以外が頷きつつ、ホールを出て三階へと至る道を探し始める。

そもそも何階層まであるか分からないし、少し横着するか。

両目に力を集中させ、ソウルを感知する瞳によって強大なソウル、ベルディアのソウルを天井越しに感知してみれば二階程上に居る事が分かった。

ふむ、後二階か。ベルディアが一晩で、いや、潜伏期間で配下を増やしたかは知らないがこの様子なら上はアンデッドナイトなどの精鋭を置いている事だろう。

此処に居たアンデッドも全てがアンデッドナイトであった訳じゃないし、混合で配置されているんだろうな。

神聖魔法が効き辛かったのはどれもアンデッドナイトであった事から、ベルディアがこの古城に連れて来た配下のみが耐性を持っている

るんじやなかるうか。

その証拠に普通のアンデッドなどはプリーストの『ターンアンデッド』で浄化できている一例もある。

「……だとしても厄介な。ほんと聖水多めに作って貰って正解だったな」

そう独り言ちながらソウルから取り出した聖水瓶を、通路の先から現れた集団の真横の壁に投げつける。

勢い良く壁にぶつかり砕け散った瓶から聖水の飛沫が拡散され、先頭を歩いてきたアンデッドたちの足が止まる。

その隙を逃さず距離を詰め、身長差から死角になるように立ち回りながらアンデッドどもをバラバラに切り裂いていく。

骨も確りと断つ切れ味も相まってバヨネットの軌跡を止められるものは何も無い。

あつと言う間に通路に蠢く死体の山が出来上がり、聖水瓶の中身をじやばじやばと上からぶちまけて雑に浄化していく。

突破口を開いたこの通路を通り、曲がり角を歩いた先に三階へ続く階段を見つけた。

のろのろと階段を下りてくるアンデッドを振り返りにしつつ、階段付近をクリアリングしていく。

奥の方からどたばたと走る音が聞こえるのでこの階はもう大丈夫そうだな。

カズマくんの領きに、領きを返して四階への階段を上っていく。

「さて、恐らくベルディアはこの階に居る。構造上考えられるのはダンスホールだろうな」

「うむ、おんおんの考えに賛成だ。外から見た高さ的にこれ以上は塔になる。恐らく此処は地方領主伯の城だったんだろう。ある程度外敵から来客を守りやすいように上階にダンスホールを建築しているんだろうな」

「ああ、確かに丘の上にあるから見張りもしやすいし、此処等辺の領地を守る城の可能性は高いですもんね」

「そうだ。さあ、ボス戦だぞ、皆、覚悟は良いか？」

そう言つて振り返り、五人の顔を見やる。

此方を見て何処か呆けていたがサムズアツプを返したカズマくん
に、満面の笑みを返すめぐみん、握り拳を魅せ付けるアクアさん、頷
きを返すダクネス、おどおどとしながらも決心したように表情を引き
締めたゆんゆん。

いやまあ、恐らく既に四階に他のパーティも流れ込んでいるだろう
から私たちだけで討伐する訳じゃないんだけどな。

まあ、雰囲気潰すのもアレだし口にしなければいいだろう。

全員の意味を確認してから四階の階段を上り、二振りのバヨネット
で先陣を切りながらアンデッド共を皆殺しにしていく。

伸ばされた腕を切り捨て、続く刃で胴体を泣き別れにさせ、新たな
アンデッドの首を落とし、振り下ろされた刃こぼれした剣を避けて足
を切り裂き、崩れ落ちたその身体の首を断つ。

私のステ振りには技量寄りの理力信仰振りであるためか、辛うじて足
りている技量によって動きが保証されているのか踊るように身体が
動く。

ふふ、ふふふ、ふはは、楽しい、楽しいなあ。

私の糧となつていく微量たるソウルの甘美な味に酔いながら、ダン
スホールへの道を埋めるアンデッドたちを切り捨てていく。

聖水を掛けて怯ませたアンデッドを殺す、突き飛ばしたアンデッド
に体勢を崩した奴を殺す、バヨネットを投擲して串刺しにしたアン
デッドを殺す、引き抜いて腐った血液を顔に飛ばして怯んだ所を殺
す、流れるように二振りのバヨネットを用いてなます切りにして殺
す、返す刃で三枚に下ろして殺す、殺して、殺して、殺して殺して殺
して……、殺して……。

「だあああああ!? 流石に多過ぎるだろ!? 一体一体が糞雑魚でも
此処までみっちり詰め込んだら面倒だろうが! 古城ごと燃やし
て焚くしてやろうかこの糞アンデッドツ!!」

これもベルディアの策略か、ぜってえ許さねえぞベルディアアアア
!!

自身が待つ最上階に辿り着かせる気が全く無い密集具合に苛立ち

が沸く。

ソウルに酔っていた心地も忘れて、もはや苛々でアンデッドをぶち殺す作業と化していた。

古城が燃える可能性を考えて流石に廊下で火力のある呪術は使えない。

よって、特効を持つ純銀製のバヨネットによる双銃剣術によって切り殺していくしかない。

後ろからアクアさんの『ターンアンデッド』が飛んできているもののアンデッドナイトだけは浄化寸前で食い縛って形を保っている。

恐らく連れて来た配下の精鋭を此処に集結させているのだろう。

アンデッド共の腐った臭いが鼻に付く。不快過ぎて苛々が有頂天に達する心地である。

バヨネットに時折聖水をぶちまけて腐った血と脂を流しつつ、浄化のエンチャントを付与させながらぶち殺していく。

どっかのイスカリオテの最終兵器な神父もこんな気分だったのだろうか。

存在しているだけで憎たらしく感じて来たアンデッドを殺してキルスコアを跳ね上げていく。

そんな作業をどれだけ続けた事だろうか。漸く華美な装飾が目立つダンスホールへの巨大な扉を見つける事ができた。

どうやらコの字の中央にダンスホールの扉はあったらしく、反対側から無傷そうな冒険者たちの姿が見えた。

……………ああ、うん、成程な、そう言う事か。

「……………あの、これ、アクアに釣られて四階に居たアンデッドが全部こっちに来てたんじゃ……………」

めぐみんの言葉に内心で頷いた。流石に唾を吐き捨てたくなるくらいに苛立ちが込み上がったが、周りの視線もあるために必死で自制して怒りを呑み込んだ。

ふうー……………、大丈夫、落ち着いた、落ち着いたから大丈夫だ。

反対側から近付いて来たダストくんたちの表情が恐怖に引き攣っているが大丈夫だ。

わたしはしようきだ。

「ご、ごめんねおんおんちゃん。ほら、私ってこれでも女神だからね」
「ぼつかアクア！ 火に油を注ぐような自画自賛してるんじゃないやねえよ！ 謝るなら謝る事だけに専念しとけッ!!」

「ごめんなさーい!!」

アクアさんは悪くないのだ。悪いのはアンデッドの習性だ。

救われるべく信仰深く神聖なプリーストに向かう習性が悪いんだ。
確かにこの場で元女神でありアークプリーストであるアクアさんに浄化して貰おうと近付いて来るのは当然の事だ。

当然の事なのだ、ただしそれを許すかどうかは別として、だ。

「……マジで絶滅するまでぶち殺してやろうか糞アンデッド共……」

「ひいつ、今まで聞いた事の無いくらい怒ってますよアレ……」

「お、おう、災難だったなおんおんちゃ、さん。その、一番槍どうぞ、その資格はあると思います」

「すまないなダストくん……。ちよつとこの怒りを……晴らしてくるわッ!!」

憎たらしいくらいに華美な扉を蹴破って、ダンスホールに待ち構えているであろうベルディアにこの怒りをぶつけねばならない。

一発、二発と扉に渾身の力を蹴りに込め、老朽化で脆かったのか鍵の部分をぶち破る形で内側へと道が開いた。

両側に音を立てて扉が開き、かつては栄光と名誉ある素晴らしいダンスホールであったのだろう広々とした空間が露わになった。

その中央、意匠が凝らされたシャンデリアの真下に、そいつは居た。

黒に染まる漆黒の鎧を身に着けた長身の首無し騎士——魔王軍幹部ベルディア。

「ほお……、あの数のアンデッドナイトを越えて、此処に辿り着くとは……。流石だと褒め称えよう。かつて俺が味わった苦難の一つを再現したものではあったが……、まさか、無傷だとはな。勇気ある少女よ、認めよう。貴様は俺に立ち向かう価値のある強者であると。願わくば、貴様にこの首を落として欲しいものだ。……まあ、もうこの首は落ちているがな」

巨大な黒き大剣を頭を抱えぬ右腕一本で握り締め、腰下に構えるベルディア。

その姿だけで尋常じゃない膂力と筋力を兼ね備えている事が理解できる。

一撃貫うだけで胴体が泣き別れする事必至、それだけの実力が垣間見れる。

嗚呼、だが、今の私は正気では無い。これでもかと言うぐらいに逆巻く溶岩の如く怒りに思考が寄っていて、元々盾とメイスで挑む予定だったそれを捨てて、アンデッドに対して致命的な一撃を与える純銀製のバヨネットを二振り握り締めている。

戦う準備をせねばならない。それを待つだけの許容性をベルディアは持つてくれている事だろう。

右手の指に挟むようにして左手に持っていたバヨネットを持ち替え、左手に呪術の火を灯した。

左手を刀身に添えるように持ち手側から刀身の先へと動かしていく。

『カーサスの弧炎』

呪術の火を帯びるようにして二振りのバヨネットに炎がエンチャントされる。

砂の国、カーサスの呪術たるこれは彼らが用いた曲刀を彩るための付与呪術である。

対アンデッド特効純銀製バヨネットに、アンデッドの弱点である炎が加わり、その特効性能は飛躍的に上昇する。

廊下でアンデッドナイト共に使うには死体が燃えて古城が燃える可能性があったため使えなかったが、この場でなら問題無い。

この世界に馴染むようにか、詳細が少し差異のあるこの呪術は魔力を込める事で延長ができる利点があり、この呪術の火は戦いが終わるまで灯り続ける事だろう。

片方のバヨネットを放り投げ、眼前でキャッチして右手のバヨネットを交差させる。

後ろからカズマくんの息を呑む音が聞こえた。なあに、やるなら全

力でやらねば勿体無いだろう。

どうせ、この『カーサスの弧炎』を使ったバヨネットの寿命は此処で終わりなのだ。

なら、最後まで楽しまねば不作法と言うものだろうか？

「私は神の代理人。神罰の地上代行者。私の使命は、我らが神に逆らうアンデッドを——」

バヨネットを立てて金属の悲鳴を上げさせる。

正面に立つベルディアが一步だけ後ろに下がった。

その様子には私は少し救われたような心地で笑みを浮かべた。

「——その魂の一片までも絶滅する事。AMENツ!!」

少し台詞を変えてしまったが、まあ、なんだ、お茶目な愛嬌だとでも思つて笑つて流してくれ。

さあ、ベルディア、舞台は整った。私の準備は万端だ、十二分だ。

法儀礼済み純銀を用いた一尺の刀身を持つバヨネット、祝福の刃はお前に効くぞ。

付与呪術『カーサスの弧炎』、神聖魔法に分類されないが故にお前に効くぞ。

これから全力を以てしてお前を殺してやるぞベルディア、貴様のその首を土に返してやる。

——誇り高き黒騎士よ、死に場所遠きこの地こそがお前の墓標だ。

眼前で十字に構えるのを止め、腰元に下ろして脱力姿勢を取る。

双剣の扱いは少ないがかったのロクブリンは身体をしならせるようにして、さながらバネの様に連撃を放っていた。

それを私なりにアレンジして剣技に昇華させる。私に膂力は無い、私に力強さは無い。

故に、連撃による速度とバヨネットの特効性を持ち味とした出血戦を強いるのが吉だろう。

リビングデッドと違ってあの鎧の中には本体となる人の姿がある。

それにデュラハンの代名詞とも言える首が取れており、そしてそれを左肩脇に抱えている事も此方の利点になる。

あの巨大な剣を振るうには両手で扱うしか繊細な動きはできない。故に、必然的に大振りとなる一撃を避けて連撃を捻じ込む事に専念すべきだ。

お互いに実力を測り合う前半戦とも言える戦いは、私の駆け出しにより始まった。

「シィッ、はあっ!!」

構えたバヨネットを頭上で交差してクロスに振り払う。

大剣を縦に構えて受けたのを機に、頭を抱える左側へと跳び込むように懐に入り、二振りの刺突を放つ。

ベルディアはそれを察していたと言わんばかりに頭を背中に回し、胴で受ける形でそれを避けた。

流石にバヨネットでは鎧を突き貫く事はできない。表面を滑るバヨネットを引き戻しながら、振るわれた大剣の一撃を避けるべくしやがみ込む。

騎士鎧を観察するも差し込めるような箇所は存在せず、唯一あるとすれば首を乗せるための首元だけだった。

バヨネットがあっさり鎧に弾かれた事から持っただけでも仕方が無いと判断せざるを得ない。

ゲームと違って双剣でペチっても精々が鎧に擦り傷を付けるくら

いでダメージにならないからな。

このまま近くに居ても意味がない、そう判断して左手のバヨネットをソウルに戻し、呪術の火を灯して『大発火』を放つ。

懐近くで放たれた爆炎が鎧の表面を焼き焦がすもののお互いに爆発の余波に押されて距離を取るだけに終わってしまった。

「ふむ、やはりと言うべきかそれが貴様の本来のスタイルか。右手に得物を持ち、左手で呪術を放つ。少し前の魔法剣士のような戦い方をするのだな。ククツ、素晴らしい。様子見と思えば少し遊びが過ぎたな。魔王様から頂いたこの鎧を汚すとはな、敵ながら見事だ」

「よく言う。恐ろしい程硬い鎧の癖に関節部分などもしっかりと覆っているだろう。おかげで貴様を殺す手段が減ってしまったぞ」

「ははは！ それはすまないな。騎士の頃に思っていた事があつてな。こうして魔王様に頂く事になった時にその憂いを払うべく事細かな注文をさせていただいたのだよ。これがその成果だ。この騎士鎧であれば、例え仲間がダガーを差し込まれようとも肉体に刺さる事は無い！」

「……ちっ、昔の仲間とやらがやらかしてくれたせいで面倒が過ぎる。貴殿を見るによっぽどな性格をしていたのだろうな、その輩は」

「ふんっ、野心の強い臆病者でな。俺様の手柄を掠め取ろうと何度も隠蔽を繰り返しやがったゴミカスだ。まあ、既に俺が蘇った後にこの手でぶち殺したからこの世には居ないがな」

次は此方の番だ、と言わんばかりにベルディアは凄みのある笑みを浮かべて、己の首を天井近くに放り投げた。

一体何をするつもりだ、と観察を続けると不可思議な事に首がベルディアの頭上に留まり、虚空に浮かび続けた。

サイドパーソンかよ。確かに死角は減るが正面からの戦いにそれは意味があるのだろうか。

回り込んだ所で弱点らしき弱点も無いので真正面から戦う事になるのだが……。

と、思っていたら首を抱える必要が無くなったからか大剣を両手で確りと握り締めていた。

「行くぞっ!!」

それが目的か、と思考を一瞬乱すも集中を取り戻す。此方に素早く距離を詰めたベルディアの渾身の薙ぎ払いが迫る。

盾を出すか、いや、そんな時間は無いっ！ 多少泥臭いもののしやがみ込みながらのローリングを以てして薙ぎ払いを避けて懐へ潜り込む。

無論、それをベルディアが察せぬ訳も無く右足を軸に一回転し、眼前を切るようなコンパクトな薙ぎ払いを放たんと動いた。

右手のバヨネットをソウルに戻し、メイスを取り出して迫りくるベルディアの手首を狙って両手で振り下ろす。

甲高い金属音が鳴ったかと思えば、ふわりと身体が宙に浮いていた。完全に打ち負けて衝撃で吹き飛ばされたらしい。

床を両足で削るようにして着地し、大剣を肩程まで振り上げて袈裟切りの追撃を放たんとするベルディアの姿を見て絶句する。

くそっ、致命打になりそうな一撃が此方側に無いッ！
正面から見て左から右へと向かうであろう大剣の軌跡を思い浮かべ、唯一の逃げ場である左下へとローリングして避ける。

ベルディアの後ろを取る形になり、メイスを振るおうとするも嫌な予感として縦に構える。

瞬間、右腕だけで大剣を振るった回転切りが放たれ、メイスを半ばまで切り裂かれながら再び私は宙を飛ばされ床に着地する。

「クハハッ、俺様に死角は無い。けれど、よくぞ受けたな。並みの奴であれば一撃を察せずに胴を泣き別れにされるんだがな」

「……それなりの騎士どころか、騎士団長クラスの腕前か。付け焼刃な私の剣技では到底敵わないな……」

「ふむ、付け焼刃でそれだけ動いていれば十二分だと思うが……。クッ、惜しいな。俺が魔王軍幹部ではなく、首の繋がった人間であれば貴様に教えるを説きたい程の才能だ」

「お褒めの言葉をどーも。一応ちよっと嬉しいから受け取っておくよ」

「ふんっ……。さあ、続きをしようじゃないか。避けるだけでは俺様

を討ち果たす事叶わんぞ!!」

「無論だつ!!」

メイスをソウルに仕舞い込み、次点で扱える打刀を取り出す。バヨネットよりも刀身が長く、切れ味が良いがそれだけだ。ジリ貧である事は変わりない。

お互いに得物を構え駆けだす。重鎧と軽装の差から私の方が早い
が、ただそれだけだ。

むしろ、ベルディアはそれを逆手に取ってカウンターの構えを取る
始末。

なら、いつそ——戦法を変えるか。

打刀を右後方から切り上げるようにして振るい、ベルディアのカウンターである迎撃の袈裟切りを引き出す。即座に打刀をソウルに仕舞い込み、バックステップを刻みながらロングボウを取り出す。

そして、唯一の弱点である首元へと矢を放つ。ちっ、身長差から角度が甘い。首元に向かう前に胸を掠めて弾かれてしまった。

周りを見るも踏み台になるものは無い。牽制にもならんな、自分の低身長に苛立ちを覚える。

嫌がらせのように頭上に浮かぶベルディアの首に速射するも、器用に顔の向きを変えて兜の頬部分で受け止めやがった。

成程、流石は歴戦の魔王軍幹部の事はあるな。実に厄介だ。特に有効打となる得物を此方が持っていないのが何よりも歯がゆい所だ。

「どうした! 万策尽きたか器用な少女よ! 俺様はまだ生きているぞ! さあ、俺を殺して見せろ! 死力を尽くし、この俺様を討ち倒して見ろ!!」

「お望み通り此処で貴様を葬ってやるツ!! その首を置いて逝けえツ!!」

ああもう、様式美だなんて言ってられないな。完全にぶち殺すための戦い方をするべきだ。

ロングボウで再び首を狙って一時の隙を作ってから装備を再び切り替える。

左手に獣革盾を、右手に呪術の火を灯した私は盾を眼前に構えなが

ら呐喊する。

獣革盾の物理のカット率は100%だが、あの膂力を以てして放たれる一撃に盾自体が何処まで保つか分からない。

もしかしたら運悪く一撃で真つ二つになる可能性だってある。だが、それでも構えて前に出なければ呪術を当てる事はできないだろう。

闇雲に投げたら俊敏に避けられるか大剣で防がれてしまう未来が見えるからな。

前方より迫り来る大剣の一撃。尋常じゃない重さのそれを気合で盾でいなし、間髪入れずに『混沌の火の玉』を投げ付ける。

確実に葬るために致命的な毒を差し込んでやるッ!!

『ファイアボール』!」

「苦し紛れの『ファイアボール』なぞ効かぬぐあああああああああああああ!」

着弾した瞬間に鎧の表面が赤熱化し、肉を焼く音が聞こえる。

『混沌の火の玉』は呪術の故郷とされるイザリスの業である。混沌の炎に魅入られ、飲み込まれその地が失われた程に悍ましい呪術なのだ。

この呪術の特性は一瞬にして岩を溶かして溶岩と化す程の高温を持つ事だろう。

現にこうして鎧に叩き付けた事で、例え破壊は免れたとしても残る熱によって金属の鎧は激しく熱された事だろう。

歴戦の魔王軍幹部としてウイザードとの闘いも経験している筈であり、『ファイアボール』を受けた事も幾度もある事だろう。

それを逆手に取った口上のフェイクがもの見事に突き刺さった形となった。

ダクソ3由来の呪術は詠唱を必要としないが故に使える禁じ手のようなものだった。

「熱そうだな、これも馳走してやるッ!」

インベントリから聖水瓶を取り出して首元に投擲してやる。硬い鎧にぶつかって砕けた瓶からアクアさん印の聖水が飛び出し、ベル

ディアの身体を浄化せんと効力を発揮する。

尋常じゃない痛みと熱さに思わず胸を押さえて膝を突いたベルディア。

此処を逃せば致命の一撃を入れる隙は難しくなるだろう。

右手に二振りのバヨネットを再度ソウルから取り出し、駆け寄りながら『カーサスの弧炎』により炎をエンチャントして両手に逆手で握り締める。

これで終いだっ!! ベルディアの膝を踏み台にぽっかりと口を見せた首元めがけてバヨネットの切っ先を突き刺す。

鎖骨の隙間を縫ったその一撃は刀身の半ばまで深く突き刺さり、対アンデッドの特効と未だ燃える刀身によってベルディアに致命的な一撃を与える事に成功した。

鎧の胸を蹴って距離を取り、ベルディアの反応を見る。

「ぐああああああつ!! 燃える、俺様がっ! 何だそれは!! 何だその威力は! 魔王様の加護を持つこの特注の鎧を半ば溶かし、熱を残すその異常な魔法は何だツ!! ぐううあつ、刀身が燃え盛っているのかっ!! クソツ、身体に火がっ、熱いつ、ああ、火炙りを選んでいたらこんな苦痛を味わうところだったのか……、首を落とされて良かった、だなんて、思う日が……、来るとはな……」

両膝を着き、その場に倒れ伏した鎧の上に虚空に留まっていた頭が落ちる。

鎧に弾かれころころと此方に転がって来た頭は私の靴に当たって止まった。

……スカートの中に転がって来るのは流石に困惑する。

ひよいと後ろに下がれば少し顔をニヤけたベルディアの顔があった。

「……ふむ、その歳で黒とはな……」

「潔く死んどけファツキンアンデッド」

「ちよ、待っ、がぼぼっ、溺れっ、溺れるっ! この聖水ツ、深いツ!」

ぼそりと私の下着の色を口にしたベルディアに、真顔で中指を立ててから惨たらしく殺すべく聖水瓶を取り出す。

真上に向けた頭に聖水瓶から中身をぶちまけて雑に浄化していく。ベルディアの強さの秘密はその鎧にあるため、こうして剥き出しの部分を狙えば実に良いダメージを叩き出してくれるようだ。

計十本程聖水瓶を消費したものの、残念な事にベルディアは実にしぶとく生き残っていた。

もう一発『混沌の火の玉』でも顔にぶつければ流石に死ぬだろう。

右手に『混沌の火の玉』を浮かばせ、最後の問答をすべく息絶え絶えなベルディアと対峙する。

「変態覗き騎士ベルディア、遺言はあるか」

「ちよ、ちよつとしたお茶目だろ。デユ、デユラハンジョーク……。スカート下にまで転がったのは偶々だ、本当だぞ。こほんっ。よくぞ俺を倒した勇氣ある少女よ。いや、勇者候補のおんおんよ。俺様はこの街から神々しい柱が立った事について調べるように言われて来たが、貴様がその正体なのだろう。これまで生きて中で貴様が使う呪術は見た事の無いものだった。実に見事だった」

「……はあ。先程のが無ければ綺麗な終わり方だったのにな……。冥土の土産に教えるが、それは私じゃないぞ。では、これにておさらばだ、ベルディア」

「……クククツ、クハハツ、クハハハハハハハハツ！ ああ、潔く負けを認めよう。お前こそが俺の死神だった。ああ、なんて、なんて素晴らしい終わりだ。完敗だ、俺は貴様に負けた。こんなに清々しい負け方は初めてだ。——誉れある少女よ、汝に武運と幸運があらんことを」

そう言い残してベルディアの瞳から輝きが失せ、その場でサラサラと塵の様に遺灰と化した。

中身を失い地面に転がった兜と鎧に大剣をインベントリに回収し、一応触媒になるかもしれないので遺灰も壺に回収しておく。ついでに半ば溶けたバヨネットも回収しておくか。

それもインベントリに確りと回収して後ろを振り向けば、冒険者たちの歓声が沸き上がった。

「「うおおおおおおおおおおお！！！！」」

う、うるさつ、そう愚痴りたくもなるが、彼らからすれば魔王軍幹部を倒した瞬間を目撃したのだ。

それだけの反応を示すのも無理も無いだろう。だが、される側からすれば迷惑もいい所だ。

めぐみんが走り寄って来たのを皮切りに他の冒険者も集まって来る。

興奮極まったと言わんばかりに満面の笑みでめぐみんが私に抱き着いた。

「ああもう、恰好良過ぎですおんおん！ 口上も戦いもドキドキして見入っちゃいましたよ！」

「ははは、正直辛勝だったけどな。ベルディアが慢心していなければ私は負けていたよ、恐らくな」

「それでも勝ったのはおんおんです！ 魔王軍幹部をソロ討伐だなんて最高に格好良いですよ！」

ぐりぐりと私の胸に頬をぶつけながら、めぐみんがはしゃいで喜ぶ姿を見たら疲れも吹き飛んだ。

切り札を切ろうにもこうも人が多いと巻き込む可能性があったかな、大分泥臭い戦い方をしてしまったが勝って本当に良かった。

私とベルディアの身長差が結構あったからローリング回避によって大剣を受ける事がなかった。

インベントリに仕舞い込んだ獣革盾は一度受けただけだと言うのに、九割程耐久力を失っていたので二発目を受けていれば確実に盾諸共切り裂かれていた事だろう。

これもダクソ3由来の呪術の特異性による勝利だな。『ファイアボール』と口ずさんでいるのに全く別の魔法が出てくるだなんて詠唱詐欺も良い所である。

もしもベルディアの鎧が全ての魔法に対する抵抗であったなら勝敗は分からなかった事だろう。

そう考えると神聖魔法のみに対してメタを張ってくれた魔王様とやらにお礼を言いたいぐらいだ。

貴様の無能のせいで有能な騎士が死んだぞ、とな。

「お疲れ様です、おんおんさん！」

「ああ、ありがとう。今回はカズマくんには荷が重かったからな、随分と出しゃばってしまつてすまなかつたな」

「いえいえ、流石に俺も魔王軍幹部相手にタイマン張る実力は無いですつて」

「……正直、私も勝てるとは思つて無かつたからな。ほんと辛勝だった。もう少し鍛え直さないと駄目だなこれは」

「あ、そ、そしたら俺もご一緒しても良いですか？ 俺も強くなりたんですよ」

「ふむ、それは良いな。クエストの後休日の日訓練を入れようか。私も接近戦は見ての通り付け焼刃だからな、練習相手が居ると助かるよ」

「はい！」

実際、私の本来のスタイルは盾で受けて呪術を投げる、オーソドックスな呪術師スタイルだからな。雑魚相手なら呪術と武器が良いが、ベルディアとの闘いで分かつたように専門職には到底敵わない。

本来のスタイルで今後活動しても良いが、それを魔王軍にメタを張られると困るからな。

ある程度近接戦もできる、いや、ベルディアが言っていたような魔法剣士のような在り方がベストだろう。

破れかぶれに盾と呪術のスタイルになった、と相手が慢心して油断してくれば儲けものだしな。

ある意味私の呪術はこの世界において異端にして初見殺し。これを有効活用せねば生き残れないだろうな。

「さて、後始末をしようか。アンデッド共を外に出して、浄化しなくちゃな。古城の掃除は私たちの仕事じゃないからな。後詰めにお願いますとしようじゃないか」

「それもそうっすね。ほら！ おんおんさんのお帰りだぞ！ 控えおろう！ 控えおろーう！」

「……水戸黄門じゃねえんだから。まあ、楽に帰れるなら良いか」

そうカズマくんの茶化した言葉に苦笑しながら一步踏み出したら

がくんと膝が落ちた。

おおっと、流石にポーカーフェイスを保ってられないくらいに疲労が溜まっていたらしい。

アドレナリン全開で感覚が誤魔化されていただけに過ぎなかったみたいだ。

「おっと。大丈夫かおんおん」

「すまない。緊張が解けて足元が緩んだらしい」

「ははは。おんおんは立役者だからな。よっと、私が運ぼう。楽にしててくれ」

「……お姫様抱っこをされる日が来るとはな……。はあ、まあ、いいか。頼んだ」

「ああ、任された」

ダクネスさんに受け止められ、次の瞬間には腰と膝を抱えられ横抱きにされていた。

端正な綺麗な顔を見上げる形になり、豊満な胸が身体に密着してぐにゆりと形を変えていた。

……いや、流石に討伐戦の時くらいは下着着ても良いんだぞダクネスさん。

言い付けを守っている事は嬉しいのだが流石に命の危機のある場面では自重して欲しい。

これは後でまた躩けてやらねばならないな……。まあ、気持ち良いからいいか。

最近鎧よりも自身の身体の方が硬くて強いと判明してからか、ダクネスさんは鎧を着る事が無くなった。

具体的には金属鎧ではなく、革製の軽装鎧に着替えたと言うものだ。

何でも普段から卑猥な拘束具を付けるに当たり、こうして引き締めするようなタイプの鎧の方が心地良いらしく、ハマってしまったらしい。

また変な性癖を拗らせてしまったかなと思いつつも、こうして触れ合う時に金属の硬さが無いのは嬉しい限りだ。

……まさかと思うがそれが理由じゃなかろうな？ 確かに鎧が硬くて痛いと言ったが……。

まあ、ダクネスさんが良いなら良いか。困るものでも無し。

ぶっちゃけスキルのおかげでダクネスさんは裸でも今と変わらんだろうしな。

「……ええと、すみません、もう一度お願いできますか？」

「まあ、信じられないのも無理もないが、その台詞五回目だからな……。そろそろ面倒が過ぎるぞ」

「すみません、その、実際にカードで確認してはいるのですが、内容が内容なので信じる事が難しく……。その、此度おんおんさんが魔王軍幹部であるベルディアと一騎討ちをして勝った、んですよね？」

「ああ、なんなら鎧と大剣とか見るか？」

「……こほん、申し訳ありませんでした。ギルドの一職員として疑った事を謝罪致します」

「良いよ別に。実際、十三歳の紅魔族の少女が魔王軍幹部を倒したとか眉唾ものだからな」

「他の冒険者の方々からの嘆願も踏まえて、首無し騎士ベルディアに掛かっていた討伐報酬はおんおんさんに渡されるものとなります。そして、その一部を他の冒険者さんに分配する、そういう形でよろしかったでしょうか？」

「ああ。流石に四億エリスだなんて貰っても困るからな。一億エリスの方は皆に分配してやってくれ。三億エリスでも十分に多いくらいだ」

「畏まりました。では、そのように分配を計算します。して、古城の修繕費の件なのですが……」

「私の報酬から補填するとか宣ったら魔王軍側に寝返るからな」

「め、滅相も無い。あの古城は既に引継ぐ者も居ない物件ですので、修繕費は掛からないとお伝えしたかったんです、はい」

その割には冷や汗と視線がぐるぐるとしてるがこのギルド職員。

ダクネスさんにお姫様抱っこで外まで運ばれた私は、城門前の広場でアンデッドたちが火葬される様をはしゃぐ冒険者たちと過ごし、意

気揚々と行きと同じようにトレントに乗って馬車と共にアクセルに帰還した。

そして、小一時間程同じような事を繰り返す男性ギルド職員と此度の一件の報告と報酬の話をしていたのだった。

既にギルドの酒場では魔王軍幹部討伐を祝う宴が始まっているようで、そんな中受付で話し合う私たちの姿は非常にシユールな光景だっただろう。

「あ、漸く終わったんですね」

「ああ、しようもない時間だった……。十分くらいで終わる内容だったよ」

「あはは……。まあ、おんおんの見た目から魔王軍幹部を倒したただなんて思いもしないもんね」

「事實は事実じゃないですか！ 大体カードを見れば一発なんですから疑う意味なんて無いでしょうに！」

「まあまあ、ゆんゆんの言っている事も一理ある。私はまだ十三の小娘だからな。だから、これは最初の一步だ。これからもっと活躍すれば、私を疑う者なんて居なくなるさ」

「それも、そうですね！ このまま魔王軍幹部をコンプリートしちゃいましょう！」

「……そんなに出会うとは思えんけどな。それに、私でも倒せたんだ。他の冒険者が倒せない道理も無いだろうさ」

はしやぐめぐみんを宥めつつ、どっと疲れが身体に乗っかって来るのを感じる。

そうなんだよな、まだこれ一体目なんだよな……。いつか魔王を倒すために今日のように幹部を倒していかねばならない。

魔王軍の幹部がどれだけ居るのかも分からないし、後から追加される可能性だってある。

しかし……。困ったな。ダクソ3の不死人である私はレベルアップによるステータスアップぐらいしか勝ち筋が無い。

土壇場でスーパード不死人に覚醒、だなんて便利な設定は無いのだ。つまり、私は自力を研鑽して高めて行き、今日のように泥臭く勝たね

ばならない訳だ。

……折角のファンタジーなのにな。何で私だけダークファンタジーしてるんだろ。

私の切り札は本当に禁じ手のそれだからな。願わくば使いたくないくらいに禁じ手である。

「……もつと強くならねばな」

そう愚痴ってしまうのも仕方が無いのだ。今後の課題だなこれは。防御力の高い相手に対して有効打を与えられるための何かしらを見つけないければならない。

呪術一辺倒で倒せるような相手ではないのだから。そうなると新たな武器の更新のためにユウキさんのところに相談しに行くべきだな。

……でもなあ、とんでも武器を渡されるのは勘弁して欲しいものだな。

ユウキさんは頭火薬庫と言うかとんでもない武器を好んでいる節があるからな。

この前色々と買いに行ったら回転鋸だなんてやべえものを店内でギョングューンと回して笑みを浮かべていたからな。

正直怖かった……。と言うかなんでそんなのを再現できるんだ。この世界に科学技術は無いんだぞ。

いや、ある意味魔導回路と言う科学もおっかなびつくりな代物があるからこそなのか。

もう少し筋力を付けるべきなんだろうか。ユウキ印のとんでも武器の一つくらい持てるくらいの手力を鍛える事ができれば、接近戦のバリエーションが増えて勝機が見えてくる可能性もある。

やはり、火力だ。今の私には呪術以外の火力が足りない。今回は『混沌の火の玉』の火力があつて何とかあったが、火に耐性のある相手であれば決定打に成り得ない。

……はあ、難しいところだな。取り敢えず筋トレでも始めてみるか。確か、ダクネスさんがそういうの詳しいんだったか。

実際、綺麗な腹筋してたしな。あの引き締まった筋肉は正直憧れ

る。

そう考えると、今の私は少し怠惰が過ぎたか。これまでそこその努力で成果を成してしまっていたのが精神的な惰弱を齎しているように思える。

「そう言えばおんおん、大分報酬を貰ったようですが……」

「ん？ まあ、そうだな」

「家、買ったたりしません？」

「……家かあ。シエアハウスで十分じゃないか？」

「いやまあ、それはそうなんですけど……」

めぐみんがもじもじとしながら此方を見やる。

はて、何か問題が今のシエアハウスにあったらどうか。

首を傾げているとゆんゆんが呆れたような表情でめぐみんを見やった。

「……はあ。めぐみん、自分の部屋をもっと改造したいみたいで、貸家だとそれができないのがもどかしいって愚痴ってました」

「ゆ、ゆんゆん!? 何故それを!?!」

「改造ねえ……。例えば？」

「そ、その、実を言うとな防音性のある部屋が欲しいな、って……」

「ふむ?。」

「……おんおんの口上とか凄く格好良かったのでそれを大声で真似できると可憐な場所が欲しいなって……」

随分と可愛らしい理由が出て来て思わずにんまりと笑みを浮かべてしまった。

めぐみんも自身の言葉が恥ずかしい事は自覚していたようで、縮こまって頬を赤らめていた。

確かに今のシエアハウスは壁はそこそこ薄いし、庭ですると大通りに面しているから丸聞こえだ。

表から庭は見れないように遮られてはいるが流石に声は通ってしまふ。大声なら尚更にだろう。

家、家かあ……。まあ、紅魔の里に戻る気はさらさらないからアクセルに定住の地を作っても良いかもしれないな。

幸いにも先立つエリスを手に入れたしな。後で不動産屋に行ってみようか。

「ふむ、ゆんゆんはどう思う?」

「え? わ、私は今のままでも十分かな。でも、お友達を置く場所がちよつと無くなつて来たから大きくなるなら嬉しいかな」

「……ゆんゆん。観葉植物を友達と言ひ張るのは止めなさい。ドリドにでもなるつもりか?」

「へう……、だ、だつてえ、育てるのが楽しくなつてきちやつて」

「それで人との関わりを減らしたら本末転倒だろうが……。一応族長修行としてアクセルに来ているんだらう。もう少し頑張りなさい」

「はあい……」

ゆんゆんも多少なりとも不便には思っていたのか。

まあ、確かにヒヨトリアはまだしもトレントは未だに庭の端っこに住まわせているしな。

馬小屋を付けられるような物件を買い求めるのも良いかもしれないな。

……そう言えば、廃教会の近くに誰も住んでいなさそうな屋敷があったな。

広さも立地も丁度良いし、不動産屋で聞いてみるのも良いかもしれない。

見た目も良かったしそれなりの値段がする事だろう。あんまり金を持っていてもそれを狙う輩が現れる可能性があるしな。

……まあ、インベントリに仕舞うから私以外に取り出せる奴は皆無なんだけどな。

家、探すかあ……。

19話

ベルディア討伐から翌日、いつものような午前中を過ごした後はユウキさんに会うべくお出かけをしていた。

深刻な火力不足を補うために何かしらの武器を得られるのではないかと、という淡い希望があったが故だ。

何せ、ユウキさんはフロムのゲームだけではなく雑多な武器のレプリカを再現している人物だ。

打刀と言い、バヨネットと言い、確かな品質を持つ武器を作るユウキさんであればそのレプリカであつても十二分に力になってくれる事だろう。

彼方此方からの熱い視線を無視しつつ、これも有名税かと辟易しながらもフロム・ヘルの扉を開く。

聞こえの良いベルの音が響き、来店を知らせる仕事を終えて黙る。

……外の人形ちゃんがちよつと動いていた気がするのは気のせいだろう、多分、メイビー。

カウンターの裏で何かを書き連ねているユウキさんが此方の姿を認識して、やや疲れた表情を浮かべて手を上げて歓迎してくれた。

「やあ、噂に聞いたよ。大活躍だったみたいじゃないか。ちゃんとアンドンルセンしてAMENしたかい？」

「無論だとも。ちゃんとやったよ、めっちゃくちや楽しかった。……まあ、一歩間違えれば死んでたけどな」

「でも君不死人だから死なないじゃん」

「暗き穴も持ってないからほぼノーリスクだが、死にたくはないさ、極力な」

「それもそつか。それで、何の依頼かな？」

「ああ、先ずは……『カーサスの弧炎』で溶けたバヨネットを十字架のネットワークに出来たりするだろうか」

ソウルから取り出した二振りのバヨネットをカウンターに置く。

ユウキさんはうわちゃーと苦笑しながらそれを持ち上げて、色々と観察してから頷いた。

「大丈夫だよ。むしろ余るくらいだね。水銀弾にでもしておくね。他には？」

「ああ、ベルディアが言っていたんだが鎧に魔王の加護が宿っているらしくてな。神聖魔法に対する耐性を付与するもののだが、そう言ったのが付いたままでも素材にできるのか聞きたくて」

「ほほう、と、言うど？」

「盾を作って欲しいんだ。可能なら二つ」

「成程ね。と言うか貰って来れたんだ。普通、提出とかするもんじやないの？」

「言っていないからな。と言うか戦利品を何で献上しなくちゃならんのか」

「それもそうだね」

ソウルからベルディアの黒騎士鎧と兜をカウンターに置く。

ユウキさんは感嘆の声を漏らしながらルーペのような魔道具で鎧と兜を観察していた。

「これはまた……凄いな。胸元が少し溶けているけど、これは？」

『混沌の火の玉』を当てた部分だな」

「ほへえ、アレを耐えるってやばくないこれ。ああ、だから盾にしたいのか。おっけ、頑張ってみるよ。サイズはミドル？」

「そうだな。可能ならラージも欲しい」

「おっけ。完成したら代金を頂くよ。付与された加護はもう霧散して見みたいだから、頑丈な鎧と兜って感じみたいだ。多分、加護の対象がベルディアだったんじゃないかな。あくまでベルディアが着ていたから残っていただけな感じがするよ」

「ふむ、成程な……」

そう言えば、とベルディアの遺灰を集めた壺もカウンターに出してみる。

ユウキさんはいきなり置かれた壺に首を傾げ、中身を見て更に深く首を傾げた。

「ベルディアを倒した時に灰になったから持って来たんだが、何かしらの触媒に使えたりするのか？」

「えっ、これ、遺灰？ ……うーん、作品が違うから難しいかもだけども……。ちよつと待っててね」

カウンターの裏にある部屋の方へと歩いて行ったユウキさん。数分程してから戻って来ると手元にベルを持っていた。

「一応試作しただけのものなんだけど、霊呼びの鈴って言ってエルデリングで遺灰から霊体を呼び出す道具なんだよね。多分無理だろうけども、使ってみて貰える？」

「ふむ。どうやって使うんだ？」

「ええと、左手に遺灰を持って、右で鈴を鳴らしてみて」

「ふむ、こうか」

ベルディアの遺灰の入った壺を左手に持ち、霊呼びの鈴を鳴らしてみる。

甲高い綺麗な音が鈴から鳴り、壺に響くような感覚があった。

だが、ベルディアの霊体っぽいものは現れなかった。もう一度鳴らしてみるも出て来なかった。

「あははー、やっぱり無理だったか。一応システム的には仲間になってくれる霊体を一定時間召喚するものなんだけど、作品を越えての効力は特典には無いのかな」

「ふむ。となると、作品を跨がない方法なら可能性があるという事か？」

「そうだね。ダクソ3なら……白サインだっけ。あー、召喚される霊体の持ち主が刻まないと無理だね。それじゃあ無理かあ」

「そうか……。可能なら剣術を教えて貰いたかったんだがな」

「そんなに強かったの？」

「ああ。今まで戦ってきた相手の中では断トツにな。恐ろしい大剣の使い手だった」

呼び出せない理由に何となく心当たりがあるんだよなあ。

インベントリに入っているベルディアのソウル、これが問題な気がする。

霊体として呼び出す筈のソウルが外に無いからそもそも出て来れないんじゃないだろうか。

一応鈴を買っておいて、後々で考察してみるか。

「……ああ、そうだ。それで少し相談があつて来たんだ」

「さっきの依頼は違ったんだ。まあ、良いけども。なにになに？」

「先程の鎧を見て貰っていたら分かると思うんだが、呪術以外の戦闘手段が軒並み意味が無くてな。火力のある武器が欲しいんだが、何かおすすめは無いかな、と」

私の相談にユウキさんは納得の言つた表情でベルディアの鎧をこんこんと甲で叩いた。

そう、私の手持ちの武器ではその鎧を貫く事は出来なかつた。ユウキさんとして自分の作つた武器の性能くらい覚えている事だろう。

此処で買った打刀とメイスではこの鎧に勝てない事は理解している筈だ。

「……成程ね。それなりの武器を作つて来たけど、手抜き感は否めなかつたんだ。と、言うのもボクは本当にただの一般人だからね。数年ほどある程度のクオリティのものが打てるくらいに修行させて貰つたぐらいのペーパーだ。けどね、そんなボクだけ一つだけ誇れるものがあるんだ」

カウンターの下から取り出した回転鋸を握り締めて、凄まじい勢いで刃を回転させ始めた。

いまいち貫性が分からないが、何かしらに繋がるのだろう。そつと口を閉じておく。

回転を止めたそれをカウンターの下に戻し、一枚の紙をカウンターに置いた。

「ボクは鍛冶と魔道具を組み合わせる事に関しては一家言あるんだ。これだけは親方を凌ぐ才能があるって褒められた。そんなボクにも弱点があつてね、複雑過ぎる機構の物はお金が掛かつて作れないんだ」

「成程？　つまり、これを作るために投資すれば良いのか」

「うん。試作から完成品までに恐らく五千万エリスくらいかかる代物だ。材料がある程度の品質が無いと内部構造的に使い捨てになつちやうから、それなりの強度が要るんだ。でも、エリスさえあればそ

れをクリアできる。ほら、懐温まってるんでしょ？ 投資してみない？」

蠱惑的で挑戦的な笑みを浮かべたユウキさんに不安の表情は一切無かった。

本当に金さえあれば作れると言う自信があるようだった。

カウンターに置かれたその設計図を覗き込むようにして見やる。

これは……まさか、パイルバンカーか!?

冗談だろ、此処ファンタジーの世界だぞ、こんなやべえのどうやって作るって言うんだ。

「思考に思考を重ねてこれ以上ない設計図だと自負してる。これはブラッドボーンに出てくるボクの愛武器だったパイルハンマーの設計図だ。射出機構の所に希少部位を使うから当然費用も嵩む代物だ。今ならこれを君に合わせた専用のパイルハンマーとして作ってあげられるよ」

「……本当に、作れるのか？ これを？」

「勿論。ミニチュアサイズのもので再現はできてる。けど、実物大だと素材が足りなかったんだ。これならどんなに頑丈な鎧であつても打ち破れる威力がある。今の君に足りない、火薬庫のような火力を補える」

「……分かった。ユウキさんの言葉を信じましょう」

「ありがとう！ ボク史上最高傑作を作り上げてみせるよ！」

ユウキさんの情熱に負けたよ。いや、うん、浪漫武器良いよね……。

善は急げと言う事でソウルから一億エリスをカウンターに置いた。

そのとんでもない大きさにユウキさんも目を白黒していたが、正気に返ったようで貨幣を数え始めた。

「倍あるんだけど!？」

「やるなら徹底的にやっちゃってください。何なら追加で二億ありますよ」

「……覚悟してる瞳だね。分かった、これ以上ないものを作り上げてみせるよ。余った分は完成後にちゃんと返すから」

「期待してます。宜しくお願ひします」

「うん、任せて!!」

胸の前で握り拳を作ったユウキさんが気合の籠った返事を返してくれる。

ふう、武器に関してはこれで大丈夫だな。にしても……パイルハンマーか。

完成図を見る限り、展開前はジャマダハルのような使い方ができるらしい。

そうなるならグレイデウスなどのショートソードを扱えるようにしておいた方が良さだろうな。

五万エリス均一の樽を見やれば、樽の長さが半分になっていても取りやすい感じになっていた。

取り敢えずそれっぽいグレイデウスを買い求めて、一応ミドルサイズの盾も買った。

これで十万エリスなんだもんなあ、お得過ぎる。ほんと趣味道楽で運営しているのが感じられる。

フロム・ヘルを出て、次に不動産屋へと足を運ぶ。

以前と同じ中年の男性が店番をしていて、私を見るなり姿勢を正しずらりと羊皮紙を並べ始めた。

商売根性逞しいと言うか何と言うか……、三億エリスの報酬の話は街全体に行き渡っているみたいだなこれは。

「これはこれはおんおんさん。お久しぶりです、住み心地は如何ですか?」

「ええ、お久しぶりです。中々快適ですよ。ですが、うちの子たちは少々広さに物足りなさを感じてきたみたいで、大きい物件に移ろうかなと考えているんです」

「ほほう、それはそれは……」

話をしながら手元の羊皮紙を素早い仕草で操作する不動産屋さん。

全ての物件の内容を暗記しているのだろう、それはそれで凄い技術だな。

「他にも条件はありますか?」

「ええ。街の端に元エリス教会だった建物がありますよね、その近く

にある屋敷が良いなと思っっているのですが、あれは売りに出ていますか？」

「ああ……、選りによってあの物件ですか。売りには出ているのですが……、問題がありました」

「ふむ、問題とは？」

「それがですね……。出るのでですよ。悪霊が」

「出るんですか、悪霊が……」

斬新な切り口だな？ 確かにアンデッドが居る世界だからゴーストも居るだろうけども。

話を聞いてみるとその屋敷に最近めっちゃくちや悪霊がたむろしているらしく、並みのプリーストに頼んでも返り討ちに遭うレベルらしい。

元はある貴族の物件だったのだが、相続人が居なくなつて売りに出された後に突如として悪霊のたまり場になってしまったと言う。

仕方が無いのでギルドに悪霊討伐依頼を出したのだが、何度も悪霊が戻つて来てしまうらしい。

流石に派遣された冒険者側に問題があるのではないかと不動産屋さんが行して一部始終を見たらしい。手練れなプリーストによるちゃんとした『ターンアンデッド』による浄化作業に不備は無いとの事。

だが、一夜過ぎると悪霊が戻つて来てしまっている。困惑して原因解明の依頼を出して様子を見れば、悪霊が団結して並みのプリーストでは太刀打ちできない程に強くなつてしまったらしい。

何でも現場に向かったプリーストたちは誰もが殴打の痕跡があり、物理的に負けてしまったとの事だった。

ガラの悪い輩が住み着いている可能性もあつたが、床に積もる埃にできる筈の足跡も無い事から悪霊の仕業であると断定。

「そんなこんなで一カ月が経ちまして……。正直維持費用が土地代などを越えているので此方としても安値でも良いから売り飛ばしたい物件なのですよ」

「ふむ……。それは難儀な事ですね。土地含めて買い上げるとなると

「御幾ら程になります?」

「おお! あれを引き取ってくださいるのですか! ではでは、出血大サービスに加えて痛い腹を切った分も加味した三千万エリスで土地の権利書ごと差し上げます!」

「元値は御幾らで?」

「此処だけの話、そこそこの名のある貴族が残した屋敷ですので、それだけでも一億エリスはくだりません、アクセルの三等地と言う事もあって一億五千万程でございます」

「それはまた……、随分と身を切りましたね」

「ええ、まあ、少し訳がありましてね。一つお願いがありまして、よろしいですか?」

「聞くだけ聞きましょう」

不動産屋さんは朗らかな顔で何かを懐かしむように条件を言った。

——住まう事になったのなら、できれば夕飯の時にでも冒険話で花を咲かせてほしい、と。

それはまた随分と不思議なお願いがあったものだ。

何となくではあるが、その貴族の屋敷に出る悪霊とやらに不動産屋さんが噛んでいるのだろう。

または、その悪霊になる前の生前に何かしらの交流でもあったのだろうか。

まあ、そこらへんを詮索しても仕方が無いだろう。

土地の権利書をソウルに仕舞い込み、不動産屋を出た私はそのままギルドへと足を運んだ。

並みのプリーストでは勝てない相手でも、うちのパーティの元女神であるアクアさんなら勝てるだろう。

存在自体が悪霊特効なのだから私が護衛すれば悪霊もぼつちり滅ぼしてくれるに違いない。

と、ギルドの酒場に来たのだがアクアさんの姿が見えない。

ううむ、先日の報酬で飲んだくれていると思ったのだが、当てが外れたな。

「すまない、セドルさん、ヘインズさん、ガリルさん、少し宜しいだろ

うか」

「おお！ おんおんちゃんじゃねえか。どうした、何か用か？」

「少し聞きたい事があったてな。すまない！ シュワシュワ四つ！」

「はーい！ シュワよん入りまーす」

「お、すまないねえ。それで、何が聞きたいんだ？」

近くで前にダクネスさんたちと飲んでいた事のある冒険者の人たちの一角に座らせて貰う。

話の代金としてシュワシュワを奢る、それが冒険者同士の暗黙の了解である。

歩き回って喉が渴いていた事もあって私も少しだけ飲む事にしよう。

「それがだな、アクアさんを探しているんだが見ていないだろうか。多分、此処で飲んでいたと思うんだが」

「ああ、アクアの嬢ちゃんか。確か、ダストがカズマに喧嘩を振ったな」

「何でも最弱冒険者の癖に綺麗所の上級職に挟まってるんじゃねえ、とかだったかな」

「そうそう。それで、立場を代わってやろうかだなんて挑発したら、カズマが喜んで代わってやるよおだなんて叫んだんだ。あつはつは、あれは傑作だった」

その光景が浮かぶようである。実際、私の居ない時のパーティーの舵取りは大変だと聞くしな。

ある程度は私がめぐみんとゆんゆんに言い聞かせてはいるが、その場のノリにはしゃいだら大変な事になるのは自明の理である。

「ふうん、本当にやったのかダストくん。面倒な事をしたもんだ」

「ん？ おんおんちゃんは知ってたのか？」

「ああ、前に尋ねられた事があってね。カズマくんは最弱の冒険者ではあるが、ああ見えてうちのパーティーのリーダーをやってるんだよ」

「へ？ おんおんちゃんじゃなくてか？」

「ふふふ、面白い事を言う。折角男の子が頑張っているんだ、それを応援するのが良い女と言うものだろうか？」

茶目つ気のある笑みでそう言つてやれば、彼らは笑みを返してその通りだと頷いていた。

「ふっはっは！ ちげえねえ！ 腕つぶしもあつて、男を立てる器量もあつて、別嬪さんなおんおんちゃんだもん！ そうかそうか、カズマも隅におけねえな」

「おっと、勘違いしては困るぞ。別に恋愛感情を抱いている訳じゃないからな。出来の悪い弟を見守っているようなものだよ」

「それはまた……、カズマも可哀想に。年下なのに確りとしたおんおんちゃんが相手じゃあ敵わんわな」

どわっはっは、と三人の笑い声が酒場に響く。ふふふ、気分が良いな。酒が美味しい。

丁度良いので最近あつた出来事について冒険話を強請つてみれば、雪精が出てくる時期になつた事や泉の除染のためにプリーストが足りないとか、デストロイヤーの偵察任務が王都の方へ出始めているなどの情報を得られた。

この三人地味にアクセルでは古株で、時々王都に癒しを求める事があるのですその時に酒場から情報を拾つてくるらしい。

冒険者の処世術と言うべきか、こうして酒を奢る事で円滑に情報を交換する場は意外と多い。

むしろ、それに馴染めない冒険者は大事な情報が足りずに死に至るだなんてジंकクスもある程だ。

そう言った点ではこういうおっさんたちは非常に便利だ。

今生が美少女で産まれた甲斐があつたというものだ。もつとも利点はそれだけじゃないが。

「ふーむ、生活雑貨は何処で買うのがおすすめだ？ 近々買い集めようと思つているんだ」

「それならロウヤンのところだな。輸入をやつてる店の近くにある。あそこは女子供が好みそうなものを置いている雑貨屋だから気に入ると思うぜ」

「ははは、まだまだだなヘインズ。分かっちゃねえな。おんおんちゃんはそこらのガキンチョやませたガキと違って実用性の高い機能美

の物を好むんだよ。裏通り二丁目にあるワイルドハンドがおすすめだ。シンプルで頑丈で多機能なもんが置いてあるからよ」

「ほお、それは良い事を聞いた」

「たはー！ 見た目通りの性格じゃねえもんなあ。じゃあ、ルククツカの店はどうだ。キャンプとかに使える実用品の売ってる店だ」

「何処にあるんだ？」

「へへへ、三丁目の曲がり角の近くだ。使い勝手の良いランタンとかが売ってて良い店だぜ」

「ほうほう、それは良い。実に良いな」

「がはは！ そこらの女冒険者と違っておんおんちゃんは確りしてらあー！」

「だよなあ、カズマが羨ましくなってきたぜ」

「ふふふ、共同の依頼ならまた受けてあげるから連絡してきなよ」

「はっはっは！ 言ってみるもんだな。おんおんちゃんが居りやあ大抵のクエストは大成間違い無しだ！」

わっはっは、と四人で笑う。シユワシユワも四杯目で大変心地が良い。焼き鳥の塩加減が最高だ。

夕飯前だと言うのにお酒が入るとついつい食べてしまっただよな。

いけないとは思っているんだが止められないんだよなあ、困っちゃうなあ。

「そう言えば、時々王都に癒されに行くらしいけども、アクセルにはそういう店は無いのか？」

「んへへ、なんだ、おんおんちゃん、そういう事が気になっちゃうお年頃かあ？」

「いやなに、純粹な疑問だよ。命懸けの冒険者生活をしているならどこかしらに娯館があつて然るべきだろう？ よくもまあテレポ代の掛かる王都に行くものだなと思っっているんだよ」

「ああ、成程なあ、そういう見方をすりや確かに疑問だわな。実はな、此処だけの話なんだが……」

ガリルさんが手で口元を隠して近付いて来る。耳を向ければこっそりと詳細を教えてくれた。

何でも裏路地の何でもないような店にサキユバスの店があるらしく、そこで男共は精を抜いて貰うらしい。

と言っても現実ではなく夢の中の話らしい。要するにえっちな夢を見させてくれるお店なのだから。

「ふうん、道理でベテラン冒険者がちらほら居るもんだ」

「お、おいガリル。お前酔い過ぎだ。秘密の店の話をしちまってどーすんだ」

「そうだぞ、おんおんちゃんは女の子なんだぞ」

「ん？ その店は女人禁制なのか？」

「ん、んー……、そう言う訳じゃないが……。いやほら、女性冒険者的には未来の旦那を掴む機会が失われるからサキユバスつてのを目の仇にするのさ。同じ馬小屋で寝るのも手を出して貰ったり意識して貰ったりするためだとか、色々考える女も居る訳よ」

「ふうーん、別に大丈夫だな。私、女性にしか興味無いし」

「「お、おう……」」

ぷはあつ、シユワシユワが美味いつ。……なんか致命的な事を漏らした気がするけどまあいいか。

なんだ、三人とも手が止まってるじゃないか。仕方が無いなあ、代わりに頼んであげるか。

それにしてもサキユバス店か。凄い興味があるな。と言うか居るのかサキユバス。

サキユバス由来のアイテムとか売ってたりするのだろうか。

淫夢を見せてもらおうつても面白そうだなあ。明晰夢の中で前世の身体に戻るのも面白いかもしれないな。

「そこってユニークなアイテムとか売ってたりするの？」

「んー、聞いた事無いな。と言うか、それ目当てで来る奴はほぼ居ねえからなあ」

「ちらつと聞いた話だと眠りやすいお香とかムラムラするお香とか売ってるとか言ってた気がするな」

「そんな良いもん売ってたのか。今度行く時間いてみるか」

「へえ、つて事は魔界由来のモノなのかな」

「どうだろうな。でも、確かにそうかもしれないなあ」

「意外と身近な所にそんな不思議なもんがあったとはな、びつくりだぜ」

わっはっは、と四人で大爆笑する。いやー、酒が進んで良い感じになってきたな。

若干セドルさんがふらついてるがまあ大丈夫だろ、成人してる良い大人だし。

ちらりと外を見ると夕焼けが見えていた。そこそこ長居してしまつたなあ。

「すまない、お水を三つ貰えるか、ジョッキで！」

「はい、かしこまー！」

「それでは、私はそろそろお暇させて貰うよ。興味深い話をありがとう」

「へへ、良いつて事よ。また一緒に飲もうぜえ！」

「なんだ。可愛い子と飲めて役得だぜ」

「気を付けて帰るんだぞお」

「ああ、そうさせて貰う。水を貰ったから飲んでおくと良い。ちよつとふらつき始めてるからな」

ありがとよーと言う声に適当に返事してから、飲んだ分のエリスを置いて酒場から離れる。

ううむ、結構飲んでしまつたな。九杯くらい飲んだ気がする。お腹がたぼたぼだ。

若干ふらつきながらもシェアハウスを目指して歩いて行く。

ううむ、確か路地裏のつて言つてたな。ソウルを見通す瞳に変えて散策を始める。

そうして明らかに人間ではないソウルの輝きをしている小柄の少女を見つけた。

ふむ、あれがサキユバスのソウルか。心做しかピンクに見えるな。

まあ、人のえろい妄想が餌なんだから当然と言えば当然か。

……つて、なんでダストくんとキースクんに連れられてカズマくんがあそこに居るんだ。

随分と仲良さそうにしているが、喧嘩の一件は丸く収まったみたいだな。

まあ、年齢的にもカズマくんとダストくん、キースくんも気の合うタイプだろうし、こうしてちよつとした息抜きとしてそういう店に入るのもおかしくはないか。

ふむ、見なかった事にしてあげよう。

しかし、近くにサキュバスが来たら流石にアクアさんに排除されちゃうんじゃないだろうか。

確か夜に寝る時に合わせてサキュバス嬢が派遣されてくるって話だったような気がするんだが。

……まあ、どんな夢を見るかは自由だし、どういう結果になるのかも自由だ。

良い夢見ろよカズマくん、それくらいの役得があっても良からうて。

「ふわあ……。眠たくなってきたな。今日の夕飯どうしようか……。手軽に雑に作れるシチューにでもするか。練って、煮込むだけだし……」

ふわふわとした心地でシェアハウスの扉を開く。どうやらすでに二人は帰っているようだ。

ただいまと声を掛ければおかえりの声が帰って来る。……良いものだな、これは。

カルラ衣装から部屋着に変えてキッチンに下りるとテーブルに二人が座ってぐったりしていた。

「おや、どうしたんだ二人とも随分と疲れた顔をして」

「ああ、それがですねおんおん……。今日、ダストと言う輩にカズマがちよつかいかけられました」

「その一環でそのダストさんとカズマさんを入れ替えてクエストをする事になったの」

「ふむ、それでその様と」

「最近のカズマ、やや後ろに立って全員にちゃんと指示を出してくれるんですよ。分かりやすいように。でもダストは駄目駄目でした。」

ダメダメのダメです」

「あはは……、それで、カズマさんの重要さを皆が改めて感じたんだよね」

「ふむ、そうだったのか。……でもまあ、大丈夫だと思うぞ。先程カズマくんを見かけたがそのダストくんたちと仲良くしていたからな。同世代の男子で息が合うんだろう」

「ふうん……、まあ、カズマがうちのパーティーから抜ける事は無いと思いますけどね」

「まあね、だって……」

二人の視線が私に向かう。はて、その文脈だと私が理由でパーティーに居るような意味合いだが。

好意的に見れば私をベテラン冒険者として頼りにしてくれているのだろう。

強くなりたいと気概も見せてくれているようだしな。

そう領いていると二人の溜息が聞こえた。……まあ、うん、分かっているさ。

それっぽい感情を抱かれているくらいはな。そこまで鈍感じゃないさ私とて。

けどまあ、カズマくんにはもつと良い人が居ると思うんだけどな。

多分だが、アクアさんとか良いと思うんだが。元気いっぱい疲れた時に笑顔を魅せてくれて、悲しい時は一緒に悲しんでくれて、嬉しい時に一緒ににはしゃいでくれる、そんな人だし。

「さてと、ちやちやつとシチューでも作っちゃうから少し待っていてくれ」

「わーい！ 私おんおんの作るシチュー大好きです！」

「わ、私も好きだな。コクがあって美味しいんだよね」

「ふふふ、楽しみに待っていてくれ」

流石にこの二人は彼女には出せん。まだまだ幼過ぎるし。

親離れのできていない子みたいなものだしな。

……実の親からは卒業できているあたりがアレなんだよなあ。

いつまで私は二人のお母さんを演じれば良いのだから。まあ、成長を

楽しみにしておくかね。

二人とも良い子だから健やかに育つ事だろう。私はそれを見守ってあげれば良い。

20話

家事を終えたお昼頃、私はアクアさんを連れ添って例の悪霊物件へと歩いていった。案の定酒場で飲んだくれていたので、小遣いをチラつかせて誘ったのだが予想外に乗り気ですべてついて来てくれた。

どうやら先日のベルディアの一件から聖職者として頼られる事に飢えていたらしい。当然ながら酒場に説法もお祈りも要らないので、欲を満たされる事なく不貞腐れていたとの事だった。

「おんおんちゃんは分かっているわね。私の可愛い一信徒としてすべき事を理解してるもの」

「あはは……。一応外部顧問の肩書きと権力を預かっていますからね。流石に女神様を蔑ろにはしませんよ」

「うんうん、良い子ね。今のところおんおんちゃんはお気に入りでかろうんと可愛がってあげるわ。最近はずまもなんか優しいし、地上に降りて来て良かったなって思うもの」

「そうなんですか?」

「天界じゃお仕事ばかりだったしね。猫被るの面倒だったからこうして開放されて万々歳よ。最初はふざけんなーって思ってたけど、今思えばカズマ様ね!」

そう胸を張るアクアさんはとても楽しそうに笑って、スキップをし始めた。

今を生きている、そんな前向きな印象を抱く程にアクアさんの笑顔は今日もピカピカに輝いていた。

「そう言えば、カズマ頑張ってるわよ。早起きして走り込みと素振り、あと筋トレも頑張っているみたいね。ベルディアを倒した時のおんおんちゃんが忘れられないみたいでね。強くなるんだって意気込んでいたわ」

「へえ、それはそれは。私も負けていられないな」

いや、ほんと負けれないんだわ。

ベルディアとの死闘は私の中の価値観を大分ぶち壊してくれた。今まで負けた事が無い事で積み重なった確かな自信が、その実、薄氷

の上にあつたと理解させられたのだ。

大剣が頭上を通り過ぎ、その風圧を感じながら叩きつけられる真剣な殺意を浴びて、私はその場の高揚感で誤魔化していたが恐怖を感じていた。

本当に騙し騙し生きて来たのだと自覚を以て理解させられたのだ。狩猟であれば一方的に狩れば襲われはしない。低能なモンスターであれば少しの工夫で簡単に殺せる。一撃熊のような恐れられるモンスターであっても呪術による一撃で大概が殺せた。

——本当に初めてだったのだ。命が失われる可能性が続く状況での戦闘は。

それを昨日の夜にベルディアの大剣を検分しようとソウルから取り出した時に私は理解した。

手から零れ落ちる大剣を他人事のように私は見ていた。

あの真つ黒な剣を見ているだけで手が震えていた。あの重さを知ってしまった、それが自身に叩き付けられたらどうなるかを本能が理解してしまった。

それを理解した昨日は震えて眠った。悪夢を見た。ベルディアの一撃によって盾ごと切り裂かれ、無抵抗なまま無様に胸に大剣を突き刺されて苦しみながら死ぬ夢を見た。

あれが本当に夢だったのか、自分の胸から感じる鼓動が確かにある事を確認して漸く分かる程にまで、私は恐慌に陥っていた。

死ぬのが怖くないと無意識に笑っていた自分が馬鹿みたいだった。ゲームの世界でしくじって死んでは、篝火からリスタートする。それがどれだけ客観的で他人事であったのかを私は漸く理解した。

死にたくない、と私は当たり前のことを漸く気付いたのだった。

「おんおんちゃん？ 大丈夫？ 顔色が悪いけど……」

「ああ、少しナーバスな事を思い出してしまつて……。大丈夫です。アクアさんも居ますしね」

「そう？ なら良いんだけど」

深夜帯に悪夢で飛び起きた私は荒療治をした。

ベルディアの大剣を震える手で握り締め、あの日を思い出して真似

するようにそれを振るい続けた。手の皮が剥けようが気にする事なく、ベルディアの剣技を身体に馴染ませるために庭で振るい続けた。悪夢の一夜が明けて、朝になった頃にはベルディアへの恐怖はなくなっていた。

彼の剣技を身に着ける事で、恐怖が恐怖足り得る未知と言う原初の恐怖を殺す事でそれを克服したのだ。

幽霊の正体見たり、枯れ尾花。

その実態を理解してしまえば恐怖が無くなるであろうと言う割かし脳筋な荒療治だった。

おかげで今の私は若干筋肉痛気味である。こればかりはエスト瓶でも治せないらしく、酷い有様だった両掌は治ったのでついはいけると思っただがな……。

あくまで負った傷、つまりはマイナスの負傷は修復してくれるが、筋肉痛のようなプラスな痛みは修復の対象になっていないらしい。

健全な肉体を1として見た時に、擦り傷などはマイナスになるから1になるように治してくれる。だが、1・1に成長するために発生した0・1の筋肉痛は治らない。

つまりは健全な肉体と言うベースが1・1に移行するので修復しようにもできない、と言う事なのだろう。

「そろそろ例の悪霊屋敷ですね。あの廃教会の横にある建物です」「うっわあ……、なんか凄いビンビンくるわね。迷える魂の坩堝と言うか、ごっちゃ煮と言うか……。けど、悪霊って感じまではしないわね。精々が悪戯好きって言うか……」

アクアさんが屋敷の正門に近付くと何やら霊視の結果とやらを早口で呟き始めた。

電波受信、と言う言葉が頭に過ぎるアレっぷりに若干引く。

高位のプリーストってそんなんでできるのか。そういうのって霊媒師とかイタコみたいな、専門の職業の人がビビビッと来て話すもんじゃないのか……？

まあ、アクアさん元女神だし、なんかこう、あるんだろう、多分。昼頃に屋敷に来た事もあって外から見た景観はそれなりに立派な

お屋敷のように見える。

不動産屋から受け取っている鍵で正門横の小さな移動用の扉を開き、馬車等が通れるくらいの道を歩いて屋敷に近付いていく。

何回か清掃の手が入っているのか花壇等に枯れた花などはなく、草木がジャングルのように生い茂っている訳ではないようで少し安心する。

いや、自分でやるつもりが無いなら業者を呼んで手を入れてもらおうべきか。

花壇なども花などを植えた方が景観が良くなるだろうしな。

「……うわぁ」

試しにソウルを見通す瞳で屋敷を見やれば点々と存在するソウルが動いている様子が見れてしまった。幽霊の正体は肉体を失った魂、つまりは彷徨うソウルだったのか……。

少し調整して普段の視界にぼんやりとソウルが見えるくらいにピントを合わせておく。

これで不意打ちは受けないし、させないし、やらせもしない。

「あー……、アクアさん。中にめっちゃ悪霊居るみたいです。除霊して貰っても良いですか？」

「任せなさい！ けど、アンナちゃんはちよつと事情が事情だから勘弁してあげて貰って良い？ どうやら霊視によると墓場から来た悪霊が合体して面倒な輩になってるみたいなの」

「まあ、実害が無ければ良いと思いますよ」

良く分からないがアクアさんはすっかりアンナと言う少女に情が移っているらしい。

まあ、アクシズ教の理念的にも慈愛の精神が強いのは明らかだし、少女の境遇を考えると荒事よろしく除霊しなくても良いだろう。

……まあ、言った通り実害が無ければ、だ。

屋敷の扉を開くと黴臭さが鼻に付き、そして外から入った風で埃が舞った。

中も掃除しておいてくれよ面倒な……。『ウインドブレス』で辺り一面の埃を吹き飛ばし、奥の方へ追いやる。何回か除霊部隊が出入り

しているからか、その時に一度くらいは清掃の手が入っていたのかそこまで酷くは無いようだ。

——真上から落ちて来たそれを避けて掴み取る。

手元を見ればよくある西洋甲冑の置物が手にしている模造剣であり、それに薄つすらと見えるソウルの様子から悪霊が取り付いているらしい。私の手から逃げ出そうとガタガタと震えている。

「……ふむ、えいつ」

ソウルを砕く時の要領で模造剣から抜け出して逃げ出そうとした悪霊を掴み、握り締めると形を失って崩れて微量のソウルを得られた。

その光景を見た天井近くで浮いていた二本目の模造剣がぴたりと止まり、すーつと天井すれすれに浮かび上がって逃げて行ったのを何とも言えない表情で見送った。

アクアさんは此方を見て若干戦慄した表情を浮かべており、にこりと笑みを返せば怯えた様子で頷かれた。

「え、つとお……、あの、おんおんちゃん？ 今のつて、何？」

「ソウル砕きですね。ソウルを掴んで砕くと糧が得られるんです」

「そ、そっかあ……。それ、輪廻に魂が還らないから大分拙いんだけど……」

「大丈夫ですよ。私が死ねば一緒に輪廻に還ると思うので」

「な、なら大丈夫ね。……お願いだから人にはそれやっちゃ駄目よ？」

「あはは、やだなあ、人にはしませんよ、人には」

「それなら安心ね！ おんおんちゃんは良い子だから信じてるわ！」

直接ソウルを掴んで砕くだなんてできないからな、嘘は言っていない。

ちやんとこの手で殺さないと手に入れられないからな、プロセスが違う。

なので、アクアさんへ言った事は嘘にならないから信頼関係はそのまま、ヨシっ。

『ウインドブレス』で埃を掃除しつつ、一階から上階に怨霊を追い立てていく。

時折、アクアさんに縋りつくように怨霊が除霊されに来るのが笑いを誘う。

案外私、エクソシストとして職業を成立させられるのではなかろうか、と思う今日この頃。

「さて、屋根裏部屋に怨霊がぎゅうぎゅうに集まったのでアクアさん、一思いにやっちゃってください」

「う、うん……。だ、大丈夫、痛みも無く安らかに逝けるからね『ターンアンデッド』」

怨霊同士のコミュニケーションが出来上がっているのか、ソウル砕きを見せた後はどの怨霊も憑依していた物を捨て去って全力で逃げ出した。だが、この屋敷に囚われているというか、住処にしまった事で地縛霊のように離れられなくなったようでもうどうして窮地に陥り一網打尽にされる運命にあった。

若干涙目なアクアさんの仕事を後ろから見ていると、腰辺りの衣服を掴まれた感覚があった。

其方を見やれば震えた様子のショートボブの赤髪の少女が私の腰を掴んでいた。

「……ふむ。アンナ＝フィランテ＝エステロイド？」

少女は何故分かったのと言った様子で驚愕の表情を浮かべ、そして相手が私である事を思い出したようにこくこくと即座に頷きを始めた。

ううむ、完全に怯えられている。けれど、衣服を掴まれているあたり甘えられている。

いや、庇護欲を前面に出して除霊の対象外になろうとしているのか。賢いなこの子。

左手を持ち上げてアンナの頭に乗せると恐怖の表情を浮かべてがくぶると震え始めた。

……ふむ、可愛いな。どうやら上下関係は確りと植え付けられているようなので楽で良い。

宥める意味も含めて赤毛の柔らかな髪を撫でてやる時よとんとした表情で此方に上目遣いで見つめていた。

「もしや、ソウルを砕かれると思ってたのか？ あれは質の悪い悪霊だからしたのであって、実害の無いアンナにはする予定は無いよ」
心底ホツとした様子で安堵の息を吐いたアンナは震えるのを止めて、大人しく髪を撫でられて嬉しそうにし始めた。

見た目からして十歳行かない程の年齢だろうな、甘え盛りの時期に死んでしまったのだろう。

故に、こうして人との温もりを、愛情を注いで欲しくて仕方が無いのだろうな。

……この世界において幽霊とはモンスターに分類されたりするのだろうか。

「……因みに成仏するつもりはあるか？ 出来ないなら除霊と言う手段もあるが」

アンナは私の手をその小さな掌で掴んで、ふるふると首を振って確かな意思表示をした。

やりたい事があり過ぎて死ぬ事を選べない、と言う感じか。

まあ、完全に自我を失って彷徨っている訳でも無く、こうしてこの屋敷の地縛霊のように成立してしまっているが故の問題でもあるんだろうな。

ふむ、不動産屋さんのお願いは十中八九これだな。

本当のお願いの詳細は、この子に夕飯の時に冒険話を聞かせて欲しい、と言う内容だったのだろう。

……だが、直接言及しない辺りに不自然さを感じる。となると、本来であれば幽霊の姿は見れないものなのだろう。

眉唾な理由を伝えれば不信感が募り、人によつては強制的に除霊を敢行する可能性もある。

なので、此方の性格を知り得ていないが故に内容をぼやかしたのだろう、多分これが正解だ。

「そうか。では、挨拶をしよう。私はこの屋敷を、そして土地も買ったおんおんと言う。君は……アンナ、で良いんだよな？」

こくりと頷かれる。この世界の名前は良く分からない事が多い。

ダクネスの様に家名が前に来る者も居れば、こうして後ろに家名が

ある場合もある。

もしやと思うが、過去に転生した勇者候補に外国人も混ざっていたんじゃないだろうか。

そのため、アメリカなどではメジャーな名前＋家名の呼び方が伝わっているのも頷ける。

……ややこしいな、統一するか国で分けろよ面倒な……。

「ではアンナ。聞きたい事が幾つかあるんだが、君の姿を見れる人は多いのか」

首を振られる。そして、私とアクアさんに指を指して、窓を指して、指を四つ見せた。

成程、高位のプリースト、もしくは魂の扱いに長けた人物にしか見れないのか。

……もしや、あの不動産屋は元凄腕のプリーストとかだったりするんだろうか。

その割には除霊を自分でやらなかったのが気に掛かるが、歳だから上り下りが厳しいとかそう言う理由でもあったのだろうか。

もう一人は……誰だ？ まあ、少ないと言う事が分かれば十分だ。つまり、アンナは普段は誰にも見られる事無く、存在を知られる事無く、ひっそり生きて来た訳だな。

……それは、辛い。辛過ぎるだろう。この歳だぞ、アクアさんの霊視の言っていた事が正しいなら外を知らずにこの屋敷で幽閉されて死んだ事になる。

「……ふむ、君以外に意思疎通のできる幽霊は居るのか？」

これも首を振られた。つまりは完全に一人でこの屋敷で過ごして来たらしい。

だから、ソウルを砕かれる可能性があるにも拘わらず私にコンタクトを取って来たのだろうか。

こうして見る事ができて、触れる事もできる私に縋りついたのだから。

「……では、最後の質問なんだが。……この世界において、幽霊と言う存在はモンスターとして扱われる可能性がある。私は『使い魔契約』

の魔法が扱える訳なんだが……」

少し首を傾げたアンナだったが、その意味を理解したらしく大きく目を見開いていた。

何となくだが、幽霊ってモンスターだったの、みたいな頓珍漢な事考えてそうだなこの子。

前の世界と比較して、幽霊、つまりはゴーストと言う名称でモンスターとして存在しているから成仏せずに留まれているんじゃないかなるか、と言う私の憶測だ。

『使い魔契約』の魔法はモンスターと魔力を交わす事で隷属状態にして使い魔として使役できるものだ。つまり、幽霊として姿の見えないアンナが使い魔としてその性質を変えれば、私以外にも触れたり見れたりするんじゃないか、と思ってるんだ」

なんだってー!? と言った感じで口を開いて大きなりアクションで驚いているアンナに苦笑する。

……いや、これって会話ができないアンナの処世術だったりするのだらうか。

相手に分かりやすい大袈裟なりアクションで返す事で意思疎通を図ろうとしているのか。

途端に愛おしい気持ちになったので頭を撫でた後はほっぺをむにむにしておく。

うむ、艶と張りのある卵肌にもっちりとしたほっぺで触り心地が良いな。

「さて、どうだろう。もし、アンナが領いてくれるなら『使い魔契約』をしてみよう。それからはこの屋敷の維持管理を手伝って欲しいんだ。流石に私一人ではこの大きさは持て余すからな」

数秒程言われた事を咀嚼するためかほかんとしたアンナだったが、ぱああと向日葵のような笑みを浮かべて力強く領いた。

成仏もせず、除霊もされず、こうして私とアクアさんにだけ知覚されるだけの寂しい毎日を過ごされるくらいなら、こうして抱き抱えてしまった方が精神的によろしい。

しゃがみ込み、アンナの頬に両手を当てて額を合わせる。どうか、

この契約が成功しますようにと祈りを込めて魔力を与える面積を増やして『使い魔契約』を発動させる。

……仮説はドンピシャだったらしい。冒険者カードを見やれば、『白霊アンナ召喚』の文字が刻まれており、私からアンナへと魔力のパスが繋がっている感覚がある。

「やったああああ!!! わたしを見れるお姉ちゃんと一緒に居られるっ!! 好き! 大好き! お姉ちゃんが死ぬまでずっと一緒だよ!!!」

「おおっと、声まで分かるようになったな……。随分と可愛い声をしていたんだなアンナは。まあ、なんだ。メイド見習いとしてこれから頑張ってくれ」

「うん! ぶわーっと力を使って皆でぱぱーってピカピカにするね!」

……あつ、そうか、地縛霊は幽霊よりも脅威度のある存在だからそれなりに力があつたのか。

道理で何処からか現れた怨霊に屈する事無くこうして無事で居たんだな。

「……皆って?」

「それはね! お人形さんと遊びたいなって思ってたら自由に動かせるようになったの! 他の幽霊さんと違って全部私が動かしてるの! 凄いでしょ!」

「ああ、それは凄いな」

確かアクアさんの霊視で悪戯っ子って言ってたような。こうして出会って無かつたら夜にでもその人形たちを使って悪戯を敢行されてた可能性があるな……。

むふーっと私のお腹に抱き着くアンナを受け止めて頭を撫でてやると、更の上機嫌に頬擦りをし始めた。

やれやれ、甘えたがりだなアンナは。そう言えばアクアさんの方はどうなったのだろうか。

屋根裏の方を見やれば一仕事終えたと言った様子で額の汗を拭いて歩いてくるアクアさんの姿があつた。どうやら一般住み着き怨霊

「私たちは見事除霊されたらしい。」

「お疲れ様ですアクアさん」

「ふいーっ、久々にプリーストっぽい事をした気がするわね。あつ、その子！　って、あれ？　何か色彩が強くなって実体を帯びてるわね。何かしたの？」

「ええ、どうやらアンナを見れるのが極少数だと分かったので、使い魔として契約したら他の人にも見れるようになるんじゃないかなって思ってた」

「ああ、幽霊ってゴーストだしね。一応低級のモンスター扱いだから使い魔にできるわね。良い事したと思うわっ！」

満面の笑みでサムズアップのお褒めの言葉をいただいた。

「と言うかやはりモンスター扱いだったのか。元人である利便性は計り知れないので使い魔を契約できる人は狙い目かもしれないな。」

「でも、低級な分ゴーストって自我を失いやすいのよ。今浄化してきたゴーストもポルターゴーストって言う種類の悪霊だしね。恨み辛みを抱いて死んだら悪い地縛霊になっちゃうんだけど、後悔や希望に縋るように死ぬと良い地縛霊になるのよね。そのまま居付いて悪い事をしなければ座敷童に成長したりするそうよ？」

「……成程、道理でただの幽霊にしては人形を操る力があつたりした訳ですね」

「多分、座敷童に成り掛けてたんだけど、子供なのに甘いお酒を飲んだりしてやんちゃしてたからそのせいでストッパーが掛かって地縛霊止まりだったんじゃないかしら」

「(えっ、ひんひよーかいしなかつたらそのざしきわらし？　になれたの?)」

「みたいだな。まあ、座敷童になつてたらその分この屋敷に囚われる事になつてただろうから外に出る事もできなくなつてたかもな」

一段階前の地縛霊だったからこそ力のあるゴーストと言う括りで終われたが、仮に座敷童になつていたらこの屋敷の管理人みたいな扱いになつてたに違いない。

この屋敷でしか召喚できない使い魔として契約が成立していたん

じやなからうか。

そう考えると大人ぶってワインを飲んだのは良かったのかもしれないな。

喜んで良いのか悲しんだら良かったのか分からないと言った表情で、頭上に？を浮かべていたアンナだったが私の言葉を聞いて目を輝かせた。

「お外！ 出れるの!？」

「分からんけどな。多分、出れるんじゃないか？ あー……、でも、元は幽霊だから日の当たる場所はまずいかもな。ダメージが入るかもしれん。試すとしたら夕方か夜だな」

「(はーい。……それでも可能性があるだけ良いもんね)」

「そうだな。だから、時間を潰すためにもこの屋敷を掃除しようじゃないか。引越しの手続きとかをするために今日からは無理だが、明日にでも此方に移り住むからな」

「(本当？ 嬉しい！ お姉ちゃんと一緒に過ごせるなら今日だけは我慢する！ よーし！ 頑張っちゃうよ!!)」

ばんざーいと両手を上げたアンナに私から魔力が流れていく感覚がある。

どうやら人形操作に魔力を消費する必要があるらしい。『大発火』一回分くらいの魔力量の消費だから普段使いでも大丈夫そうだな。

暫くするとアンナが手を動かした。階下の扉が独りでに開いていき、そこに小さな人形が入って行くのがちらりと見えた。

試しに近くの部屋を覗いてみると小さな人形がせつせと身の丈以上の大きさの箒を使って部屋の掃除をしていた。はたきのように上部の埃を落とし、手に持った刷毛で机の上などの埃を床に捨て、それを箒で掃いて部屋の片隅に集められていく。

そして、廊下から塵取りを持った人形が入って来て埃の塊を回収して去って行く。

すると箒が独りでに浮かんで廊下に飛び出していき、すれ違うように濡れ雑巾が飛来して人形が受け取る。今度は濡れ雑巾で掃除をはじめ、吹き終えたところを雑巾を乾拭きする別の人形が入って来て分

担し始める。

「……清掃業者を呼ばなくて良さそうだな」

「(お姉ちゃん！ 凄いよ！ いつもよりもっと動かせるの！ 前は動かすのが精いっぱいだったのに！)」

「動かす魔力が足りなかったのかもな。私が家に居る時はこうして魔力を使ってくれて大丈夫だ。毎日掃除はしなくても良いからな。二日、いや、三日に一回くらいの頻度で良い。後は自由に使ってくれて構わないよ」

「大丈夫だよ。今の皆はもうお掃除の役割を与えたからこれから勝手に掃除してくれるんだ」

「……オートメイション化したのか。もうこれは立派な才能だな。凄いでアンナ」

「(えへへ。お姉ちゃんが喜んでくれるかなって)」

「ああ、この様子ならもう引越しの手続きを進めて良いかもしれないな」

褒めて褒めてとアピールするアンナの頭を優しく撫でてやる。嬉しそうに目を瞑ってそれを受け入れる姿は甘えたがりの女の子にしか見えない。

まあ、これからは一緒に住むから寂しくもないだろう。

アンナの純粹無垢な笑顔を見て私も笑みを浮かべる。

「(あ、そうだ。このお家がお姉ちゃんになるならあの通路の事を教えてあげるね！)」

「通路？ この屋敷に隠し通路みたいなのがあるのか？」

「(うん。お父さんが病弱だったから、隣の教会の人に直ぐに来てもらえるように通路を作ったんだって。そのプリーストのおじちゃんが言ってたの)」

「……ふむ。成程、な？ ああ、そういう繋がりなのか……」

あの廃教会に恐らく不動産屋さんがプリーストとして勤めていたのだろう。

けれど、支援者となる貴族が死んだ事で援助が無くなって教会が立ち行かなくなり、老朽化などの理由から立地の良い所に移って新任が

着いた、と言う感じだろうか。

あの人がこの屋敷に除霊に来なかったのはもしかしたら救えなかった後悔が此処に残っているからなのかもしれないな。

アンナが見える程の実力者であったのに関わらず、それでも救えなかった事を悔やんで立場を下りた。

……うむ、大分しつくりくる憶測だな。多分殆ど間違つてないだろう。

まあ、何だ。シエアハウスを解約する手続きのついでにこの事の顛末を教えてやるか。

「隠し通路はね、一階にあるしよさい？つて所にあるの。すうーつと本棚が横にずれるんだよ！ 凄いんだよ！」

「それはまた……、王道な隠し通路だな。正直好きだよそう言うの。案内してくれるか？」

「うん！ 良いよ！ 行こつ、お姉ちゃん！」

きゅつと私の左手を握ったアンナがニコニコしながら私を連れて廊下を歩いて行く。

アクアさんはアンナの人形の方に気を取られているらしく、ふらりと部屋の中に入って見学をしているようだった。

一階の奥側、立地的には廃教会の横に隣接する部屋であり隣は執務室があるようだった。

成程、普段から仕事で入り浸る場所に近い位置に隠し通路を作ったらしい。

書斎に入るとインクの匂いが香り、部屋には壁一面に本が敷き詰められた棚が並んでいた。

「(こつちだよ、ほら此処！ この本棚の裏にロープがあつて、これを引くとー！)」

入って右側にある中央の棚によって死角となる壁際の棚から本を二冊抜き、その裏の壁にあるロープを引っ張ったアンナ。

するとすうーつと無音で横の壁に棚が飲み込まれるようにスライドしていく。

どうやら壁が入るように回転扉のような仕掛けが施されているら

しい。

成人男性の肩幅程にずれた柵の裏にある引き戸を開けると地下へと降りる階段があった。

ええと……、廃教会の内観的に、何処だったかな。多分、資料室だ。『ティンダー』で通路の足元を照らしながら歩いて行く。すると五メートル程の通路の先は扉が存在し、鍵穴は此方側に無いようだった。

「これで終わり！ 教会の方で鍵が掛かっているみたいでこれ以上は進めないんだ。残念だね」

「ああ、そうだな。これ以上は教会の方に迷惑が掛かるからこのルートは封印だ。良いな？」

「うん、分かったよ。お姉ちゃん以外には教えないから安心してね！」

「ああ、私のパーティの一人には伝えるから、入って行っても咎めないようにしてくれ。金髪の胸のどかい美人なお姉さんだから直ぐに分かると思う」

「うん。お姉ちゃんの大切な人なんだね。あはは、優しい顔してるから分かるよ」

そんなに分かりやすい顔をしてたのか、と口元に触れるも自分では分からなかった。

アンナはそんな私を見てくすくすと上品な笑みを浮かべて、私の手を取って抱き着いた。

「他の皆には内緒だからな。約束できるか？」

「(勿論！ お姉ちゃんの都合の良い感じにしとくね！)」

「賢くて嬉しい限りだ。指切りでもしようか」

「(指切り？ エンコ？ 詰める？)」

「どっからそんな知識を知ったんだ……」

「(前に居た幽霊さん。日本？ って所の生まれだったんだって。なんか、帰る、くみに、怒られ、指を詰める、許し、みたいな事を断片的に言ってたの)」

「……そうか。その幽霊は上に居たか？」

その言葉にアンナは静かに頷いた。

私は上を向いて瞑目し、数秒程黙禱を捧げた。

目を開くとアンナも上を向いて瞑目していた。

「どうやら気を遣ってくれたらしい。頭をそつと撫でてやり、指切りの仕方を教えた。」

「指切りげんまん、約束破ったら尻打ち千回に処す。指切った」

「(……なんかこれわたしの罰則しか決まってるような)」

「気付いてしまったか。まあ、約束通りに内緒にしておいてくれれば良いのさ。これはただの念押しに過ぎないしな」

「(う、うん……)」

まあ、アンナの声は契約のパスに乗って来ているみたいなので、私にしか聞こえないようだし失言する事は無いだろうから杞憂なんだけどな。

21話

「おんおんさん！　どうか、どうか俺にも部屋を貸してください！」
アクアさんに手間賃としてそれなりの酒瓶を渡して帰り、不動産屋で事の顛末を伝え涙泣きされ感謝された事もあって、その他諸々の事は明日で良いだろうとシェアハウスに帰った翌日の事だった。

めぐみんに家の前にカズマくんが居ると聞かされ、へえデートかよと送り出そうとしたのだが……。

話を聞けばどうやら私に会いに来たらしかった。

そろそろ冬越しのための準備をしなきゃとアクアさんと世間話をした時に、屋敷の一室を貸す約束をしたのだが、それを理由にカズマくんが寢床である馬小屋で煽られたらしい。

ーあらあらカズマさん、まだ冬越しの準備してないのかしら。私はおんおんちゃんのご厚意でお屋敷の一室を借りるの。内装もしっかりして寒さにも負けない立派な部屋をね。悪い事は言わないからベルディアの報酬を崩して小さくても個室を借りるべきよ。あ、私は明日から屋敷に移るから寂しくても我慢してね。

と、宣ったらしいのだ。

煽りのようでカズマくんへの心配も含まれていてキレるにキレられなかったらしい。

そう言う優しい所がアクアさんと喧嘩別れしない秘訣なんだろうなあ、と他人事のように思いつつ宥める。

玄関口で話すのもなんなのでシェアハウスに招き、飲み物を淹れてあげた。

ふむ、実のところダクネスさんも屋敷に移るので、他のメンバー次第ではあるが部屋を貸す予定ではあったので手間が省けた。

確かに私の持ち家な訳だが、それなりの貴族の作った屋敷であるため広過ぎて使わない部屋がただ余りするんだよな。

なら、生活費として屋敷の維持費を徴収して部屋を貸すのもやぶさかでは無い。

まあ、カズマくんだけハブるのもアレだな。

「ふむ、カズマくんの申し出だが……、一旦保留だ」

「へ？」

「いや、割と単純な話でな。屋敷に住まうのは、私、めぐみにゆんゆん、ダクネスさんにアクアさん。皆女性なのだよ。同じパーティとしてカズマくんの人柄は知り得ているつもりだ。私は構わないが、後の四人はどうか分からない訳だ」

「あつ、それもそうっすね……」

「と言う事だ。めぐみん、ゆんゆん、どう思う？」

話を聞いてた二人の視線がカズマくんではなく何故か此方に向かう。

二人は揃って溜息を吐いてカズマくんを見やった。

「まあ、義理堅いおんおんの事ですから即答はしないとは思ってましたが……」

「あはは……、今更だね。おんおんの屋敷なんだから決めちゃって良いのに」

「と、言う事でカズマ。私たちに貸しイチですよ。一人ハブられるのも可哀想なので認めてあげます」

「うん。カズマさんなら良いかな。時々視線がえっちいけどおんおんが居るから大丈夫だろうし」

「ぐつ、お、恩に着るよ。これで後はアクアとダクネスか」

「いや、馬小屋で寝泊まりしてる時点でアクアは大丈夫でしょうに。必要なのはダクネスだけですよ」

「ん、ああ、そうだった。ダクネスさんもカズマくんなら良いと承諾を得ているぞ」

「へ？ そうなんですか？」

「あれ？ いつダクネスさんに会ったの？ 不動産屋さんに行つてそのまま帰つて来たつて昨日言つてなかった？」

……やっべ、昨夜の件で疲れてて余計な事を言った気がする。だがまあ、リカバリーは簡単だ。

「ん？ 別に言つてなかったただけぞ。ダクネスさんとは帰り道に会つたんだ。屋敷の勧誘も兼ねてな」

「ふうーん……？　なんか怪しいですね。最近二人の距離が近い気がするんですよね。物理的にと言うか精神的に近いような……」

めぐみんのジト目の視線が私に突き刺さる。

なんか浮気を疑われた夫になった気分だ。ハーレム系の主人公もこんな感じで居心地の悪さとすくみ上がる心地を抱いたんだろうなあ。

「そうか？　ダクネスさんとは趣味が合うからな。交友が深いのも当然な事と思うが」

「なんだ、めぐみん。おんおんさんを取られて嫉妬してるのか」

「取られてませんが!?　おんおんは私のですが!？」

「いつからめぐみんの物になったんだか……。おおっと、抱き着くのは構わないがもう少し勢いを緩めてくれ」

「むうー、絶対に渡しませんとも！　おんおんは私の母になってくれるかもしれない人なのですから!」

何処ぞの赤くて三倍の人のような事を言いだしためぐみん。

いやまあ、確かに着る物も瞳も赤いけども。

……まあ、私はダークリングの影響か瞳は黒、と言うか濁った黒紅だからなあ。

一見前世の日本人のそれなのだが、明るい所で見ると一応分かるくらいの色彩をしている。

なので、紅魔族特有の瞳グポーンをするとめっちゃくちや怖く見えるらしい。

闇夜に赤い双眸が浮かんでいる、そんな感じに見えるのだとか。

「やれやれ……。うちの大きな子は甘え盛りだなまったく……」

「……の割には嫌がらないっすよねおんおんさんって」

「そりやまあ、幼少期から育てた実績があるからな。……めぐみんは私が育てた、と言って過言ではないからな」

「そ、そうなんですか。……複雑な事情があんのかな」

いや、割かし浅くて単純な理由だぞ。まあ、こればかりは紅魔族の雰囲気と言うか、生き様と言うか、生来の物が原因な気がするからあんまり強く言えないんだけどな。

紅魔族は基本的に、ロマンチスト、拗らせオタク、夢見るお年頃（生涯）、中二病を患っているからな……。

ひよいざぶろーさんも魔道具開発を拗らせて家庭環境がアレな訳で。仮に利き腕を失っても足で開発を続けようとするくらいには情熱的な性格ではあるのだ。

まあ、前世の価値観を持つ私からすれば穀潰しの産廃ニート野郎なんだがな。

せめて魔道具がそれなりに売れていれば話は違うんだけどな……。

「……はあ」

「うっ、我が親ながらおんおんに迷惑を掛けているので胸が苦しいです……」

「大丈夫だぞ、めぐみん。私は絶対にめぐみんを見捨てはしないからな。ちゃんと栄養のあるご飯を毎日食べさせてやるし、怪我や病気の時は看病をして寂しさを紛らわせてやるし、恋人や結婚となったら後方母親面して涙をそっと流してやるからな……」

「……思ってた以上に深刻っていうか、ガチでおんおんさん母親っぽい事言ってるんだけど……。若き未亡人なシングルマザーみたいな雰囲気……。あの、前世でそういう感じでした？」

「いんや、普通に独身だったよ。仕事に殺されるくらいに働いてたしな」

「あっ、そっぴやそっぴやでしたね……」

アクアさん情報で引き籠りニートだったカズマくんが気まずそうに顔を逸らした。

お腹にぐりぐりと頭を擦り付けて甘えるめぐみんを撫でて宥めつつ、若干冷めた珈琲を口にする。

……よし、ダクネスさんとの関係は誤魔化せたな。

正直この場で告白する事ではないしな、実際関係としてはずぶずぶな泥沼のような感じな訳だし。

お互いの趣味の相性が良過ぎるのが悪いんだ。それに、名家のお嬢様の生活のおかげかダクネスさんの身体と顔は素晴らしいの一言であるし、時々照れてはにかむ笑顔とか可愛いし、反応も劇的で飽きが

来ないしな。

精神的に男勝りな私がダクネスさんに沼るのも仕方が無いんだ、うん。

「さて、という事でめぐみん、ゆんゆん、昨日伝えたようにお引越しの準備をしようか。木箱を部屋の前に置いてあるからそれに荷物を詰めてくれ。後は私がインベントリに収納して運ぶからな」

「はーい。にしても随分急ですよ。何か理由があるんですか?」

「うむ。実は使い魔がまた増えてな。私がい取った屋敷で幽閉されて幼いまま死んだ少女が幽霊、つまりはゴーストとして残っていてな。話を聞けば数年も一人で、誰にも認知される事無く寂しい日々を過ごしてきたと言うじゃないか。私を含めて視認できた者は居たのだが、よつぽどな資質が無いとはつきりと見えないらしいんだ。十歳いかないくらいの精神年齢で、成仏も除霊もしたくないようだったから、ワンチャン賭けて契約してみたらできてしまっただけな。私が魔力を譲渡する事で誰にでも見えるようになったから元氣いっぱい、あまり寂しがらせるのも可哀想だから急ぎたいんだ」

「つまり、養子みたいなもんですか」

「まあ、そうなるのか?」

「むむむ……、おんおんに甘えるのは私だけで良いと言うのに……。でもまあ、境遇に同情しない訳でもないので許してあげますか……」
「ふふふ。これからめぐみんはお姉ちゃんになるんだから、ちゃんと仲良くするんだぞ」

「……やべえマジでおんおんさんが未亡人に見えて来た。ママちからが強過ぎんよ……」

愛する夫なんぞいないけどな。けどまあ、めぐみんと知り合っただけからそういう保護欲と言うか、この子は私が守ってあげなきゃなという使命感と言うか、……庇護欲が、な。

ううむ、生前の生活が原因なんだろうけど自覚すると恥ずかしいものだな。

けどまあ、めぐみんには経験して欲しくなかったんだ。

渡される一枚の五百円硬貨。ラップに覆われた冷めた夕飯。テレ

ビの雑音しか聞こえない自宅。

……ほんと、冷めた幼少期だったものだ。

仕事の大変さを理解して何とか飲み込んだと思っていたのだが、こうして機会があると然も当然のように出しゃばって来るこの感情を何とかしたいものだ。

心の中でそつと折り合いを付けて思考を中断する。今はもうどれだけ振り返ろうがどうにもならない過去を見ているも仕方が無いからな。

今、こうして抱き締めている未来を胸に、前を見ていく事しかできないのだから。

「さて、それでは私たちは庭で少し訓練でもしてみようか。走り回るには狭いがそれなりに広いから木剣を振り回すには十分だしな」

「良いんですか？　ならば是非！」

「と、言う事だからめぐみんとゆんゆんはちやっちやと荷造りを終わらせるように。まあ、昨日の夜に伝えてあるからある程度は纏めているとは思いますが……、こら、視線を逸らすな。はあ。暫く時間を潰しておくからさっさとやるように。お昼までには終わらせるんだぞ」

「はい」

「よし、それではカズマくん庭に移ろうか。木剣などの用意は此方です。してあるからそのまま来てくれ」

「あ、はい、分かりました」

カズマくんを連れ添って庭へと出る。今の私は黒シャツに七分丈ズボンとラフな格好なので訓練もしやすい。ただまあ、指導というか訓練は初めてだし、一応買っておいたレザーメイルも使うべきだな。

お互いにレザーメイルを装着して上半身の防御を固める。カズマくんには長剣タイプの木剣が良いだろうな、あのデルフレプリカを愛用してくれているようだし。

木長剣を手を取ったカズマくんに対し、私は木盾とショートソードタイプの短い木剣を手取る。

「では、訓練を始めようか。先ずカズマくんには戦い方を学んでもらう」

「はい！ 師匠！」

「ふふふ、師匠か。不思議な響きだな……。さて。カズマくん、私が教える戦いの術と言うものは総じて、相手の長所を潰して此方の長所を押し通す事が基本となる」

「一方的な戦いを仕掛けるって事ですね」

「ああ、そうだ。私が接近戦を仕掛ける場合に盾を用いるのはそのためだ。この盾と言うのは武器ではなく身を守るための防具として扱われがちだが、それは視野が狭い者の考えだ。盾は受け止めて守る事もできれば、こうして、縦に横に振るえば鈍器にもなる。こうやって構えて、相手の視界を塞ぐように繰り出せば即席の壁になり、そのまま押し込めばパンチのような殴打になる。何よりも盾は剣と違って耐久性に優れた道具だ。よっぽどの達人でもなければ盾を切り裂くだなんてできやしない」

「おお、それもそうですね。ベルディアの時も師匠は大剣を防いだ事で隙を作り出して仕留めてましたもんね」

「そうだ。受けに回ってガン盾するのも悪くは無い。しかし、盾を扱う事で生じるデメリットも存在する。今まさにカズマくんが長剣を両手で扱うように、盾を持つと空いた手は一本、つまりは片手で武器を握らざるを得なくなる。そのため、どうしても両手使いの武器よりも威力が下がってしまう」

片手でぶんぶんと振ってやれば何とも頼りの無い速度で木小剣が虚空を薙ぐ。

カズマくんは成程確かにと両手で握った木長剣を軽く振って、その差異を実際に感じ取った。

「だからこそ、盾を扱う場合は長剣ではなくこういった小剣を採用する事になる。もつとも、片手で長剣を難なく振り回せる膂力があれば話は別だ。まあ、私のような小娘にはできないが、成長の余地のあるカズマくんならできるかもしれない？」

「あはは……、いやあ、流石に無理っす。これ木剣ですけど実際は金属の塊ですし」

「そうなんだよな。だからこそ冒険者は身体が資本な訳だ。筋トレは

しておいて損はないぞ。いつか、もう少し頑張っていれば救えたのに、だなんて状況に陥りたくないだろう?」

「……ですね」

「ああ。だから、私たちは前衛として常に身体を磨かねばならない」

「……師匠、後衛職では?」

「それは愚策と言うものだよ、カズマくん。戦場で近寄られたら何にもできない後衛職だなんてカモでしかない。前衛が磨り潰された後にあっさり殺されるだけだ。撤退する事の出来るだけの自衛力は持つべきなんだよ」

「あつ、だからめぐみんに槍を?」

良い気付きだな。めぐみんに態々槍をプレゼントしたのはそういう裏もある。

特に一発撃つたらふらふらになるめぐみんには絶対に必要なものだ。

ある程度魔力が回復するまでにその槍で抵抗できれば、駆け付けてくれる応援や逃げる隙を作れる可能性が高くなる。

私と違ってめぐみんは死んだらそこまでだ。例えば、生き返れる魔法があったとしても、だ。

因みにゆんゆんは短剣を選んだらしい。小回りの利く武器を選ぶあたりセンスを感じるな。

中級魔法は上級魔法よりも威力が低いのが欠点ではあるが、込める魔力の違いや発動速度と言う点で優れる一面もある。

そのため、中級魔法を発動する隙を潰すために短剣と言う護身の武器を持つのは正解だ。

金属の塊ではあるので一度や二度であれば盾として受け止める事もできるだろうしな。

「では、実際に少し動いてみようか。話だけ聞いていても分からないだろうからな。カズマくん、私に軽く打ち込んで来てごらん」

「わ、分かりました!」

そう伝えて盾を前に突き出し、木小剣を隠すように構える。

カズマくんはオーソドックスに利き手側の半身になって木長剣を

下方で構え、五メートル程の距離を詰めるように駆け出して薙ぎ払いを放つ。

私はその動きを予想できていたので彼が振るうであろうタイミングの二歩前で、跳ぶ様に近付く。

放たれんとした薙ぎ払いの最初の一步を挫くように、私の盾はカズマくんの突き出た左肘を押し当てる様にして受け止める。

「うわわっ!？」

「長剣の長所は腰の入った両手持ちによるフルスイングな訳だが、こうして起点となる動きの一つを潰してしまえば——」

そして、盾の下に構えていた木小剣をカズマくんの胸元に押し付ける。

その硬い感触にギョツとした様子で動きを止めたカズマくんは、何かを理解した表情になって頷いた。

「——こんな風にあっさりと殺せる。これが実戦ならもっと強く盾をぶつけていただろうし、こんな分かりやすい速度で突き刺してもいい。これは一例であるが、実際に受けてみてその厄介さがかかるだろう?」

「……はい。聞くよりも受けてみて理解できました」

「よろしい。私はこんな事をいつも考えている。相手の長所とは、何を起点としているか、どんな手数を持っているか、どんな事をしてくるかを考えられるか、此方の手札をどうぶつけるか、そういった事を私は考え続けて戦ってきた」

「はい」

お互いに構えていた木剣を下ろして向かい合う。

ちゃんと真剣に聞いてくれて何よりだ。まあ、もつともらしい事を言っているが私のこれは独学のそれだ。我流に過ぎない。

……まあ、○○流の派閥、みたいな有名なものがある訳でも無いしな。「一番大事な事は、自分が何を何処まで出来るかを把握している事だ。カズマくんであれば、デルフレプリカを何回振れるか、身体を守るために構えて何度受け止め続けられるか、フル装備でどれくらいの時間を戦い続けられるのか、そう言った自己把握は逃げ出す事になった時

にも重宝する情報だ。分を弁える、と言うとアレだが、強い敵に自分の何が有効になるか、何を使えるか、と考えられる素材は大切だ」

「成程……。そういう心構えを知っておく事が重要なんですね」

「そう言う事だ。この考えはこれまでの私の培った経験で口にしていくだけだから、肌に合わないようなら使わなくても良いし、アレンジを加えて昇華させたって良い。幸い、カズマくんは冒険者だ。ラーニングによって新しい戦法に繋がるスキルを手に入れて考えるのも有りだ」

「確かにそうですね。酒場で色々教えて貰っているんで活かせそうなのは幾つかありますね」

「うむ、羨ましい限りだ。その調子でどんどん強くなってくれ」

「はい！ いつかは……。おんおんさんを守れるような男になります！」

「へえ、それはまた、嬉しい事を言ってくれるじゃないか。期待しているよ、我らがパーティーリーダー。年若いカズマくんなら努力次第で何処までも強くなれるさ」

最近成長が止まってしまったこの私よりもカズマくんは強くなれるだろう。

身体の成長が止まった事により、後は地道な筋トレなどによる身体造りくらいしか成長が見込めないからな。

身長はこのまま変わらないのだろう。もう少し伸びる事を期待していたのだが、神様は意地悪だ。

それからはカズマくんと軽く打ち合う形での模擬戦を行ない、シエアハウスから二人の声が聞こえてくるまで続けた。

……デルフレプリカを使っているからと言ってサイトくんみたいな戦い方はしなくて良いんだぞカズマくん。

別にガンダールヴの力を持っている訳でも、魔法吸収機能を持つ長剣を扱う訳じゃないんだから。

けどまあ、何となくあげたデルフレプリカだったが、そこまで喜んでくれていたんだな。

良い贈り物をしたと少しだけ誇らしい気分だ。

「ふう、良い汗をかいたな……」

「しつとりしちやつてるじゃないですか。お風呂入ってきたらどうですか？」

「それもそうだな。めぐみんの言う通りに少し入って来るよ」

了解を取るためにカズマくんへ視線を向ければぜえぜえと荒い息を吐きながら、上気した顔で此方を見つめていた。

ううむ、やはり持久力が足りないな。でもまあ、走り込みなども最近始めたそうだし、まだ言うべきタイミングではないな。

頑張っているのに成果が無いからと叱り付けても意味が無いしな。

「そう気を落とす事では無いよカズマくん。カズマくんはちゃんと一歩目を踏み出している。これからはそれを毎日ちゃんと続けられる事を目標に頑張るんだ。頑張ってる君は格好良いよ、自信を持つんだ」

「ぜえ……はあ、……は、はいー！」

真面目に頑張っているカズマくんが微笑ましくて笑みが浮かぶ。

私に笑われたからか少し呆けていたようだが、しつかりとした返事が返って来てくれて何より。

「ならよし、では少しシャワーを浴びてくるから待っていてくれ。私の次にカズマくんも入ると良い」

「あ、ありがとうございます。助かります……」

「ふふふ、では、またな」

カズマくんはめぐみんたちに任せてお風呂に入るべくシエアハウスへと入って行く。

ううむ、男ものの衣服はあったらどうか。何かの時に使うかもしれないとソウルに仕舞い込んでいた筈だが……。

ああ、あったあった。

男女どちらが着てもおかしくないような無地タイプの衣服を脱衣所に置いておき、憂いの無くなった私はお風呂に入るべく衣服を脱ぎ始めた。

……やばい、まだドキドキしてるなあ。

訓練の汗でしつとりと濡れた鴉の濡れ羽色と称せる綺麗な長髪から覗いた可愛くて綺麗な横顔が脳裏から離れない。

ましてやサキュバス店でお願いした淫夢の時のそれと重なって、その蠱惑的で意地悪な笑みが俺の性癖の急所に当たってしまったでしょうもない。

「……けど、相手にされてないって言うか、子供に見られてるよなあ、アレ」

おんおんさんを守る男になる、だなんて片腹大激痛な事をつい宣ってしまった。

それをやんわりと受け止めて嬉しそうにしてくれたものの、反応が明らかに師匠が弟子の背伸びに微笑むそれだった。

ぐぬぬ、でもまあ、それだけの実力差があるから仕方が無いとも言えるのか。

ベルディアと戦っていた時のおんおんさんの勇ましくも壮絶な姿が今でも思い出せる。

死中に活を求め、ベルディアの猛攻を凌いだ上で鮮やかな逆転を魅せたあの姿を。

してやったぞ、と言うあの可愛らしくも格好良い横顔の笑みが未だに脳裏に残っている。

「……っと、いけね。この後屋敷に連れて行って貰うんだからさっさとしねえと」

おんおんさんのご厚意で俺もシャワーを浴びれるんだった。

……にしても、異世界ファンタジーの世界でシャワーがあるってのも中々アレな光景だよな。

過去に俺みたいな転生者が不便を感じて開発してくれたんだろうけども……。

まあ、便利だからいいか。すっかり汗でびしょびしょになった衣服

を脱いで、ふと、気付いてしまった。

流石に衣服を洗って貰うつてのは厚顔無恥に当たるのでは？

一応予備の革袋持って来てるし、そちらにに入れて持って帰った方が
良いよな流石に。

そう思つて流れて衣服を半分に切つた樽に入れようとしていた手
を止めて……ぬあ!?

「こ、これは……ッ」

そこには先程までおんおんさんが着ていたであろう黒いシャツが
入っていた。

思わず持つていた衣服を足元に落としてしまった。それを拾おう
としてかがんで……、アツ、に、匂いがする。

やばい、なんてこつた。この世界に柔軟剤とか香り付きの石鹸なん
てものは無い。

故に、こうして鼻孔を擦っている形容し難い甘い匂いはおんおんさ
んの……。

「待て、待て待て待て、流石にそれは駄目だろ。極刑ものだ、踏み止ま
れ俺の男心」

俺とて思春期の男子なのだ。気になる女性の私物に興奮してしま
うのは分かつて貰える。

だが、それに便乗して私物に手を掛けるのは流石に犯罪だ。アウト
である。

どうせバレないだろ、と心の悪魔が囁く。

衣服を拾う振りをして少しだけなら、と心の天使が囁く。

……うおい!? なんでもどっちも肯定してんだ、駄目だから流石に!
「心頭滅却すれば火もまた涼し……っ」

俺は鋼の意思で衣服を蹴り飛ばす事でおんおんさんの衣服の入つ
た樽から距離を離す事に成功する。

危なかった。俺の童貞力が低ければ心の誘惑に負けて変態行為に
及んでいた事だろう。

親しき仲にも礼儀ありだ。それも気になる女性とは言え恩人にす
べき事ではないだろう。

近くに居るから危ないのだ、と風呂場の方へさつきと逃げる。

内装はぱつと見地球の、日本のそれと同じだ。アパートやマンションにあるような四畳あるかないかぐらいのこじんまりとした浴室だった。

……さつきまで此処でおんおんさんが身体洗ってたんだよな。

「うおおおおお、煩惱退散っ」

拳を額に叩き付けて先程考えた事を脳裏から追い出す。

危なかった。サキュバス店で本番まで行つてたらそれ以上の妄想もしてしまつていた事だろう。

サンキューアクア、お前のおかげで助かった。

お前ほど肉体の色気はあつても精神的な色気のない女はいないだろう。

……でもまあ、話を聞く限りでは地味に人気はあるんだよなアクアも。

この前の一件からダストとキースと飲みに行く事が増えた事もあつて、その手の話をこつそりとする機会も増えた。

流石にあいつらもおんおんさんをそういう目で見るのは恐れ多いらしい。

と、言うのもアクセルに來た頃のおんおんさんは共同で依頼を受ける傭兵のような事をしていたらしく、その時の有能っぷりに誰もが称賛の声をあげているとの事だった。

時に窮地を助け、時に的確な助言をし、傲慢さや偉ぶった素振りも無く、真摯に依頼を成功に導くその姿は正しく冒険者のプロフェツシヨナル。

そのため、困つた時のおんおん様、みたいな感じでアクセル在住の冒険者は頼りにしているらしい。

ベルディアとの一騎打ちもその伝説に加わり、いまではひつそりと紅魔黒瞳倶楽部だなんてファンクラブができているとか。

無論、俺もこつそり入会した。腕利きの作るおんおんさんブロマイドは今も俺の懷に仕舞われている。

何でも紅魔族の瞳は赤いのだが、珍しい事におんおんさんは黒い瞳

なのだ。

なので、その功績なども含めて突然変異の紅魔の英雄として囁かれている。

いやあ、ほんと俺も運が良いよな。推しの人物と同じパーティに居られる訳だし。

こうして同じ屋敷で暮らせるようになった訳だし。幸運が過ぎるぜほんと。

……へへっ、ダストとキースに自慢してやらねば。

「おーい、カズマくん。少し良いか」

「はい!? お、おんおんさん!」

「ああ、おんおんだ。すまないな、替えの衣服を出したのは良いがタオルを出すのを忘れていた。一緒に置いておくから使ってくれ」

「は、はい! ありがとうございます!」

「ふふ、そう恐縮する事では無いよ。師匠だからな」

ふんすと胸を張ってる姿が脳裏に浮かぶ。

ほんとこの人可愛いし、美人で、綺麗で、最高過ぎる。

そうだった、今の俺はおんおんさんの弟子と言う肩書きも手に入れてしまった訳だ。

……ぐふふ、あいつらが嫉妬して怒り狂う様が思い浮かぶぜ、へへへっ。

「……つと、そうだった。ついでに私の衣服も回収しておくか。うむ、触った形跡は無いな。めぐみんたちが言うから少し心配してしまっただが杞憂だったな。カズマくんがそんなことをする訳ないだろうに……」

だなんておんおんさんの眩きが聞こえて俺は心底安堵した。

心の中の天使と悪魔が顔面蒼白で項垂れているのは当然の事だろう。

理性の勝利だ! これからもおんおんさんの心象を良くする行動を心掛ける事を肝に銘じる。

脱衣所からおんおんさんが出て行った事を確認して、俺は無言でガッツポーズを取った。

と言うかめぐみん俺を疑っていたのか。いやまあ、おんおんっ子だしな、心配もするか。

さて、あんまり長シャワーするのもアレだし、さっさと出るか。

あの糞寒い馬小屋とおさらばするのだと思うと笑みが止まらない。

いやあ、ほんと俺は幸運だな、と思わずほくそ笑んだのだった。

22話

かつての十三歳であった私はなにをしていたか、だなんて感傷を、書斎の椅子に座って私はしていた。

カズマくんを誘い、屋敷に招待した後は各々が普段使いする部屋を決める事になった。

屋敷の持ち主と言う事で私に優先権が来たので、これ幸いと書斎と執務室、その隣の貴賓室を搔つ攫った。

もつとも、それって仕事をする部屋だから私室には向かないんじゃないのか、と言う心配をされたが、私としては手の届くところに使える物が多い場所の方が昔を思い出して安心するのだ。

それにこの書斎と言う場所は特に私のお気に入りに近い場所だったので尚更に欲しかった。

本を参考文献として扱い、詳細な資料を作るためにあつたのだろうこの書斎は書き手に取って扱いやすい構造をしていて非常に居心地が良い。

特に書き留める机と椅子が部屋の入口から見ると死角になっており、隣に近付かない限り書いてある物の詳細が分からない作りが何とも隠者っぽくて良い。

「……私も紅魔族だったんだなあ、だなんて初めて思ったもんだ」

どうやら私はこう言う隠者、隠れ潜む者と言った隠居っぽい在り方に心が揺れるらしかった。

まあ、書斎に残っている本は世間一般的なものしか置いておらず、隣の執務室はほぼほぼ空だ。

前の家令が貴族の手引書通りに書類の隠蔽もとい処分をしたらしく、此処で行われていた仕事の事に関するものは全てこの屋敷が引き取られる前に済まされていたようだ。

貴族の仕事を盗み見る事は普通に重罪なので此方としては有難いとしか言えないが、少し残念でもある。

家財などが残っている理由としては屋敷を売り払う際に加点とし、此方で働いていた者たちへの退職金の当てにされたようだ。

そのおかげで買い足す事をしなくて良いので私としては貴族様様である。

前に住んでいた貴族は効率主義だったのか、主な使用部屋はこの書齋及び執務室を中心に設計されているらしく、非常に利便が良い。

もつとも、一番警戒が薄れ易い風呂場に関しては四階にあるんだがな。

万が一賊が入ってきたら入口近いところに設置すると危ないからな。武装を持って風呂に入る訳にもいかないし、護衛を置くにしても足止めにもならないだろう。

「……いかな、こうも心にゆとりがある何事も面倒臭くなる……」
家を持つと冒険者は怠け者になると言うジンクスが良く分かるな。

確かに心安らぐ場所があれば、資金さえあればクエストを受けずにだらだらと過ごす事だろう。

一億七千万とんで三十六万五千百二十エリス。それが今の私の全財産である。

……ぶつちやけ依頼を受けなくても普通に余生を送れるレベルの額だ。

これと言って散財する趣味も嗜好も無いので、精々が食材費の重い生活費程度の出費になるだろう。

しかも、此処にアクシズ教外部特別顧問代とめぐみんたちから徴収する生活費と言う名の家賃が入って来るので安泰にも程がある。

「……金のかかる趣味、ねえ。弾いて良い音がする壺とか買うか？
これは良い物だつてか」

自分で言っていて虚しくなった。そんなのに金を使つてどうすると言うんだか。

……ふむ、丁度良いしメイドスキーの下巻でも書くか。
前は何処までやったんだっけかな……。ああ、そうだ、最後にメイドを墮としてオチにしたんだつた。

じゃあ、墮落した爛れた性活に溺れていく過程でも書いて、最後は

……どうすつかな。

別シリーズを書くための布石にでもするか。そうだな……。ちよつ

と過激なのを書くとするれば、野蛮な蛮族国家みたいなのを作って暗躍、いや、戦争でもさせてみるか。

次のシリーズは蛮族国家バルバロと言う架空軍部物にして、騎士国家でも襲わせてみるか。

それなら女騎士をくつころする流れを書けるから丁度良いし、メイドスキーでは書けなかった複数人プレイものも書ける。

ダークファンタジーものとして売れるんじゃないだろうか。

……ファンタジー世界でダークファンタジーを書くとか笑えないけどな、お隣みたいなもんだし。

と、言う事で下巻を取り敢えず書いていくか。

貴族っぽい裏の遣り取りを裏商人とするシーンを入れて蛮族国家を作中に登場させておいて……。

メイド調教物だったし、三角木馬とか拘束台とか書いておくか。

そう言えば退廃通りでこういうの売ってなかったし、良い刺激になるかもな。

鞭と蠟燭は……取り敢えず前戯として入れておくか。ちよつとしたアブノーマルさが私の作品の売りになっているみたいだしな。

「そうじゃん、印税もあつたわ。今生の私の人生順風満帆だな……」

金に困らない生活ができそうで将来に期待ができそうだ。

窓から夕焼けが見える頃には下巻は書き終えていて、しかも次作であるバルバロの一卷目の半分は書いてしまっていた。

シエアハウスで書くよりもずっと集中できたのは書齋のおかげだろうな。

誰かが来れば扉と歩いてくる足音で分かるし、書き物の入れ替えも容易だ。

一応表向き理由として前世の料理レシピを書いていると伝えているので、実際に作る側ではないめぐみんたちからの興味を外せているのが役に立っているな。

メイドスキー下巻の束を封筒に入れて縛り、明日にでも配達に送るかトソウルに仕舞い込む。

バルバロの書きかけは……、まあ、引き出しでいいか。どうせ此処

には私しか来ないだろうし。

長時間執筆活動をしていたからか背中がばつきばきだ。指も痛いし少し休憩でもするかな。

珈琲でも飲むかなとキッチンの方へと歩き、扉を開くとダクネスさんが立っていた。

「おや、おんおんか。何か飲み物でも取りに来たのか？」

「珈琲を飲もうかなって、ワインの類は置いてなかったと思うぞ。手前に出してあるのは料理用に使う奴だからな」

「ああ、やはりそうだったか。酒精が弱く味が濃いものだったから不思議に思ってたんだ。うちのセラーから幾つか持ってくる事にする」

「その方が良いな。ダクネスさんも飲むか？」

「ああ、ご相伴にあずかるう」

戸棚からインスタント珈琲を取り出し、鍋に『クリエイトウォーター』を入れてお湯を沸かす。

私は普段ブラックで飲むのだが、ダクネスさんはどうだったかな。

「ミルクと砂糖は入れるか？」

「ああ、貰おうか。……おんおんは普段は入れるのか？」

「私は入れてないな。苦味がある方が好きなんだ、コクがある気がして」

「ふむ……、では私もそうしてみるかな。試しにそのまま飲んでみよう」

戸棚から木製のコップを二つ取り出して珈琲の粉を匙を使わず目分量で入れていく。

匙を使っても良いのだが結局面倒になるんだよな、どうせ変わらないし。

普段と同じ濃いめの量を入れ、お湯で溶かしていく。途中でコップを回して混ぜて匙を使わず作る。

できたそれを手渡せば、ダクネスさんはその深い黒色にやや戦慄した様子でそれを見ていた。

少し苦笑しながら私がコップに口を付け、苦くも深みのある味に心を落ち着かせる。

ダクネスさんもそれに倣って恐る恐る口にしているが、一口目でその苦さに悲鳴を上げて口を離していた。

まあ、珈琲って飲み慣れないと苦さがネックになるからな。

普段から常飲しているとお茶とか麦茶と変わらないくらいに感じてくるんだが、貴族の令嬢であるダクネスさんはワインが主体だろうから飲み慣れてないんだろうな。

「こ、これを普段飲んでいいのか……？」

「そうだな。飲み慣れているとこれくらいじゃないと味が薄く感じてしまつてなあ」

「そ、そうか……。すまない、ミルクと砂糖を入れさせてもらう」

「どうぞどうぞ、好きなように飲むのをおすすめるよ」

さて、リビングに居るであろう四人にも作つてやるか。

めぐみんとゆんゆんは薄めミルク砂糖多め、でカズマくとアクアさんはどうするかな。

まあ、シンプルに作つてミルクとかを小瓶で持っていけばよいか。

ダクネスさんの手を借りて三個ずつコップを持ってリビングへと向かう。

……今思えば最初からくつろぐリビングに飲み物セットを置いておくべきか。

いや、勝手気ままに飲まれても頻繁に補充しなくちゃならないからキッチンそのままでもいいか。

「この香しい匂いは……。おんおんの作つてくれた珈琲ですね！」

リビングにおいてある唯一のソファにゆんゆんの膝を枕にして寝つ転がっていためぐみんが起き上がって、此方を見やった。

いやまあ、確かに毎日夜飯の後に私が飲むついでに作っていたから気付けるだろうけども。

嬉しそうな表情で私の手から二つのコップを受け取つためぐみんがいそいそとソファに戻って行く。

……まあ、冬頃だからなあ今。窓を見やれば寒暖差から露が垂れるのが見える。

このリビングには暖炉が備わっているので寒いのが苦手なめぐみ

んたちは、此処を拠点とすると言わんばかりに屯っている訳だ。

「はふう、ありがとねおんおん。めぐみんの枕になつてたから足が痺れちゃって……」

「辛い時は辛いつて言わなきゃ駄目だぞゆんゆん。花摘みに行けなくなるぞ」

「あつ、それもそうだね……。あつ……。お、お花摘んでくるねっ！」
話題に出されたから思い出したと言う感じでゆんゆんが全速力手前の速度でトイレへと競歩して行った。

流星に各室にトイレを設置する文化はこの街には無い。

どちらかと言えば学校やビルなどの設計と言うべきか、各階に男女で別れたトイレが設置されている。

やれやれとゆんゆんから預かったコップの中身を少しだけ自分の所に移したためぐみんがカフェオレで一息吐いていた。

「ほら、カズマとアクアも飲むと良い。好みが分からなかったから小瓶で用意してあるぞ」

「おつと、悪いなダクネス。助かる。作業が佳境に入ってたからちよつと休憩したかったんだ」

「あ、ダクネスも見てみて。カズマって凄いのよ。手先が器用だから地球の道具を作ってるのよ」

「チキユウ？ 何処かの地域の名か？」

「あー……。何て言うか、その、んー……」

ダクネスさんの問いにカズマくんが言葉を詰まらせていた。

「どうやらカズマくんは生前の、地球の話と言うか、勇者候補である事も伝えていないらしい。」

「仕方が無いから助け船を、と言うか普通に答えを言うか、別に知ってるしなダクネスさんは。」

「地球は前に私が住んでた場所だ、と言えば分かるか？」

「ん？ ……ああ、そう言う事か。何だ、カズマも勇者候補だったのか。道理で変な挙動や言葉が多いと思っただぞ」

「うえ!? し、知ってんのかダクネス。つて言うか今の言い方からして……」

「ああ、おんおんから聞いているぞ」

「惑星やらの話はまだしてなかったからな。分からなくても仕方が無いだろうさ。地球ってのは私たち勇者候補が住んでいた惑星、つまりは星の事だ。地球にある大陸の一つに日本があり、其処に私たちは住んでたって訳だ」

「星？……つまりは空の彼方の事か。凄いなだな、基本的な知識の土壌が違うとは思っていたがそこまでとは……」

「……自分の身分隠す気あるのかダクネスさん。それは市井の一般知識から外れてる奴だぞ」

「……あつ」

思わずと言った様子でダクネスさんが口を手で塞ぐ。

こつそりと忠言してあげたので聞こえてはいないだろうが、不審がっている素振りを見せていた。

何でも、貴族の令嬢であるとバレると接し方を変えられてしまうだろうからと未だに内緒にしているのだ。

あんま変わらんと思っただけだな、実際私は変えていない訳だし。本名を知って、愛称も知っている私からすれば口が滑りそうになるから改善して欲しいんだがな。

まあ、バレるのも時間の問題だろうし、それまでは付き合っただけかこの茶番に……。

「それで、何を作るつもりなんだカズマくん」

「えっと、ですね。オイルライターって言えば分かりますか？」

「ああ。冬の季節に、いや、冒険者からすれば野営の道具として売れるか。市井に魔導コンロが何処まで普及しているか分からんし、案外化けるかもな」

「ですよ。ダストとキースと駄弁っててピンと来たんですよ。聞けば魔導コンロに使う魔力を込めれない家庭もあるみたいで、普通に竈で飯作ってるところもあるみたいなんですよ。火付け石の代わりにこれを使えば主婦の人たちに売れるんじゃないかな、と」

「ふむ、成程な……。構造はどうするんだ？ 特に火種の所は複雑だろう」

「そうなんですよね……。ぶつちやけ、俺も既製品を外から見て何となくで試作してるんでどうにも上手くいかなくて……」

まあ有名だもんなあジツポライター。暇潰しにカチャンカチャン遊ばせるのも楽しいし、火を眺めるのにも使えるしなあ。

ふむ、ならさらつと構造を書いてみるか。羊皮紙にカリカリとジツポライターの構造を書いてカズマくんの手渡ししてやる。

「……えっ、こんな複雑だったんすか」

「そうだな、細々とした部品が多いんだぞ実は。だからオイルライターまで発展させずに、先端の火花を散らせるフロント部分だけのを作ったらどうだ？ 火付け石をカンカンとぶつける手間が省けるだけでも大助かりだと思うぞ。あれはコツが要るからな」

「おお……。確かにそうっすね。これならギアの部分と発火石の構造だけ考えれば……」

「鍛冶師もできる友人が居るから話を通しておこうか。そいつも勇者候補だから話が通じやすいと思うぞ」

「えっ、他にも居たんすか？」

「ああ。私が知る限りではあるが、ユウキと言う女性だ。ボーイツシュ系の鍛冶野郎で、武器とか防具などの再現品を作るのが趣味らしいぞ」

「へえ、あつ、じゃあデルフを作ったのって」

「ああ、ユウキだ。……ああ、そう言えば今は私の専用武器を開発してるから無理かもしれないな。それが終わったら話を付けてみるから、他のも考えてみると良い」

「了解っす。にしてもそうか、最初から一体化つて言うか完成してる品よりも、部品でも良いんだよな……」

暖炉の前に座って唸り始めたカズマくんだったが、集中力が切れたように諦めて珈琲に口を付けていた。

ふむ、ミルク砂糖少なめが好みか。覚えておこう。

因みに隣のアクアさんは一口飲んで涙目になって、ざらざらと砂糖を入れて飲んでる。

アクアさんに出す時はめぐみんたちのと一緒に良さそうだな。

めぐみんが寝っ転がるのを止めたソファを見やる。二人か三人くらいが限界な大きさなので合わないな。新しいソファを左右にでも置くか。

ソウルから取り出した木製の椅子に座り、暖炉の前で一息吐く。そう言えば家具ならこの屋敷の何処かにありそうだな。

「アンナ、ちょっと来てくれ」

そう呟くとどっからともなくばびゅーんっと半実体化したアンナが私目掛けて飛んできた。

「(わたしを呼んだ？ お姉ちゃん！)」

どうやら霊体化して壁を抜いてショートカットしてきたらしい。

私の腹に抱き着くようにしてわくわくとした表情で此方を見上げた。

そんな様子を見ていた五人が困惑の表情を浮かべていた。

「あの、おんおんさん？ その子がもしかして……」

「ん、ああ、この子がアンナだ。普段は部屋の掃除とかしているから、人形や掃除道具が浮いていても気にしないでくれ」

「あつ、はい」

「な、なんですかその子供は!? そこは私の場所です!」

「待て待てめぐみん、年齢を考えろ。この子はめぐみんよりも五歳は年下なんだから」

「ぐっ、ぐぬぬ……。い、良いでしょう、少しぐらいは譲ってあげます。

私の方がお姉さんですから……っ」

「めっちゃくちや歯軋りしてんじやねえか……。にしても幽霊を使い魔って、何でもありだな……」

それは私も思った。利便性があり過ぎて幽霊の乱獲をしたくなるくらいには。

つと、そうだった。聞きたい事があつたんだつた。

「アンナ、少し聞きたいんだが」

「(なにかな、なにかな?)」

「この屋敷で使っていない家具の置き場とかあつたりするか？ ソファがこれ一つだと不便だと思つてな」

「んー、ああ、あるよ。ソファが欲しいんだっけ。ちょっと待ってて、運ぶから)」

そう言ったアンナは私から離れて、両手を万歳してむむむっと力を込めた。

それを見た面々が首を傾げていたが、突然扉が音を立てて開き、埃の被っていないソファが宙を浮いて飛んできたのを見て驚愕の表情を浮かべていた。

小さな一人用の椅子も二つ程飛んできて、暖炉を囲うようにストーンと設置された。

「(これで良いかなお姉ちゃん!)」

「うむ、助かったよアンナ。良い子だ」

「(えへへ、褒められちゃった。うーれしー)」

アンナの柔らかな赤毛の髪を撫でてやると嬉しそうに再び腹に抱き着いて来た。

「あー……、ポルターガイストって奴か。凄いなだなアンナちゃん」

「ど、何処から飛んできたんですかこのソファ。随分重いと思うんですけど……」

「うふふ、アンナちゃんは甘えたがりなのね。良い人と出会えて良かったわね、本当に」

「なんでアクアが後方保護者面してんだ……。でもまあ、これでソファ争奪戦が起きなくて平和になったな」

「そうですね。血を血で洗うバトルが無くなってしまいましたね」

「なんで不満そうに言ってるんだお前は……。もう少しおんおんさんを見習っておしとやかにしとけよ」

「おしとやかか? ……カズマの目にはおんおんがそう見えてるんですか? 何と言うか……」

「恋は盲目ってやつだな。カズマもそう言うお年頃なのだろう、……不憫な」

ダクネスさんがぼそりと呟いた最後の言葉は聞こえなかったが、何となく同情のソレだろうな。

コップに入った珈琲を飲み終えたのでソウルに仕舞い込み、アンナ

を抱き抱えて近くの長いソファに座る。

ずつと立っていたダクネスさんも私に続いて隣に座った。

カズマくんとアクアさんは一人用の椅子を暖炉前に引き摺って、より暖かな場所に陣取ったようだった。

「……平和だな」

「そうだな。ベルディアの一件の後に冬に入ってしまったからな」

「なーんも依頼がねえんだよなあ。ベルディアシヨックに冬眠事情も重なって、冬越しに皆専念し始めてるみたいだしな」

「そう考えるとほんと幸運でしたね。こうしておんおんが屋敷を買ったのは」

「しかも土地付きみたいだしね。高かったんじゃない？」

「三千万エリスだったぞ。除霊代も込みでな」

「たっかつ。いや、この屋敷の具合を考えたら安い方なのか」

「一般的に見てもこの屋敷は立派な分類だぞ。風呂場にも魔道具が付いていたし、そこそこの値段がするだろうな」

「……んん？ 除霊代？ まさかとは思うが……」

カズマくんの視線が此方に、私の膝に頭を乗せてごろごろしているアンナに向けられる。

良い勘をしているなカズマくん、正解だ。

私が頷いてサムズアップを見せれば、ああやっぱりと苦笑の表情を浮かべていた。

「まあ、どちらかと言うとアンナは被害者みたいなの……もんか？ どうやら共同墓地の方から悪霊が流れて来ていたようだな、アクアさんが対処してくれたんだ」

「……おい、アクア。ちよーつとだけ聞きたい事があるんだが」

「ナ、ナニカシラー？」

アクアさんに耳打ちしたカズマくんの表情が何かに気付いた様子だった。

まるで取り調べ室で罪を告白する罪人のようにアクアさんが項垂れ、手首を揃えて差し出す。

「やーっぱりお前かつ。あれほど手抜きするなって言っただろうが!？」

ウイズとの約束だったろ!？」

「その、リッチーとの約束を守るのなんかヤダな、って」

「子供じゃねえんだからよ……。んで、後始末はしたのか」

「うん。ちゃんとしたわよ。流石に迷惑掛けちゃったみたいだし、こつそりと解除したわ」

「……なら、まあ、いいか。人的被害は出てないんだよな？」

「……たぶん？ 所詮霊魂からの野良怨霊だし、そんなに強くない筈よ」

「……ああ、うん。何となくであるが今回の騒動の発端が分かった気がする。」

恐らく共同墓地に自動で浄化する結界でも設置したのだろう。そのせいで留まる事が出来なかつた悪霊がアンナと言う下地のあつたこの屋敷に迷い込んだ、と言う訳か。

ウイズさんの名前が出ているあたり、前の一件の時にでも何かあつたのだろう。

屋敷から追い出される時に打撲などの被害はあつたようだが、まあ、死んで無いからいいか。

にしてもアクアさん、恒久的に張り続けられる結界なんて使えたのか。

流石、元女神と言うべきか。

……ん？ そう言えば、此処にまた屯されるのもアレだから、この屋敷に結界を張って貰った気がするな。

もうアンナは使い魔になつているから影響は無いが、それ以外には効くだろう。

「そう言えばおんおん」

「ん？ なんだめぐみん」

「この前ベルディアを倒して屋敷まで買ってしまった訳ですが、クエストはもう受けなかつてもりでいるんです？」

「ふむ、と、言うとは？」

「いえ、その、少し小耳に挟みまして。ある程度暮らせるお金が出来たから暫く隠居する、みたいな冒険者も少なくなみたいで」

成程、まあ、冒険者って不安定賃金の何でも屋みたいなもんだからな。

完全出来高制みたいなもんだし、ベルディア討伐戦の報酬で馬小屋住まいから卒業したと言う者も多いらしい。

冬の時期なので当然ではあるが、財布の緩み方次第ではその後にも堅実に依頼をこなせばそのまま賃貸住まいも夢ではないようだ。

まあ、一部の大馬鹿者は酒代やらに報酬を溶かして馬小屋で寒い思いをするのだらうけども。

基本的に現地人の冒険者は火力が低い事がネックとなっているようで、パーティを積極的に組んで効率化するのもそれが理由の一つらしい。

強い弱いと言う問題ではなく、ただ単純にスキルポイントがカツカツなので早熟型で器用貧乏するか、大器晩成型としてコツコツと腕前を磨いてポイントを貯めるかのどちらかになるらしい。

まあ、ダークリングの影響かソウルと言う副収入がある私は比較的ポイントが貯まるのが早い。

それは他の勇者候補も似たようなものであり、最初から戦闘に特化した者や武装を得た者であれば俺TUEEEして楽々とポイントを貯められる環境が得られるので順風満帆と言う訳だ。

……そのカズマくんのように、ユウキみたいなパターンを除いて、だが。

「いや、身体を鈍らせる訳にもいかないからちよこちよことクエストは受けるつもりだ。纏まった金が入った事で売りに出さなきゃいけないかったモンスター素材も使えるようになった訳だしな」

「そ、そうですね。良かったです。実は面倒臭がりなおんおんなら適当な理由を付けて私たちだけをクエストに送り出して悠々自適な生活を送るのかとばつかり思っていました」

「……………そんな訳ないじゃないか」

すまん、正直少しだけそうしようかなとは思ってたりもしていた。

ぶっちゃけ、生涯年収くらいは稼げてしまっているので支援に回る側になって楽しようかなと思ってもいたのだ。

だが、書齋で見つけてしまった錬金術の教本で少し学んでからは考えが変わったんだ。

異世界で錬金術、実にファンタジーで良いな、と。

魔道具？ 紅魔の里に有り触れているそれを作って何が楽しいんだ。二番煎じみたいなもんだろ。

どうせやるならオンリーワン、それが駄目でも希少価値を付けたいのが男心と言うものだ。

錬金術教本にはモンスターや薬草などを素材とした色々なポーションの作り方が書いてあり、よくある壺でぐーるぐるするタイプのものと違った作り方がそこには書いてあった。

一部抜粋するならば、薬草を細かく刻み磨り潰し、沸騰したお湯で色を取り出し、お湯に滲み出た薬効を鍋で煮詰めて乾燥させ、粉末状にして薬用ポーションの素材その一である薬草粉になる、らしい。

……色を取り出す？ と首を傾げたものだが、図解には網で漉す詳細が書かれていたのでお茶のようにするんだろうなあと少し興味が湧いたのだ。

ぶつちやけ、薬草をそのまま煮詰めても良いのでは、だなんて考えたりと色々試作を試してみたくなったのが理由の一つだった。

「本当ですかー？ でもまあ、何かしたい事ができたみたいですし、大丈夫そうですね」

「む、分かるのか？ 私には分からんが……」

「ふっ、私はおんおん検定二級の持ち主ですからね。ダクネスには分からないでしょうが、私には分かります。多分、書齋が何かで面白そうな本でも手に入れてそれを実験してみたくてうずうずしてる感じですね。先程もモンスターの素材だなんて言っていましたし、ずばり、魔道具、いや、おんおんの性格なら……錬金術ですね！ どうでしょう！」

「……………何で分かったんだ」

「ええ？ ほ、本当なの？ 凄いなめぐみん、私には分からなかったよ」

「ふんっ、そりゃあんまり接点無いですからねゆんゆんは。人生経験

値の低いゆんゆんでは一生掛けて漸く好きな食べ物が判明するくらい塩梅でしようし」

「がーんっ……、そ、それは言い過ぎじゃない？ え、えつとおんおんの好きな食べ物……、駄目だ、わっかんない、わっかんないよ……」

「はあ、そこで普段常飲している黒珈琲でもあげられないからゆんゆんはゆんゆんなんですよ」

ソファのひじ掛けにショックのあまりに突っ伏したゆんゆんをめぐみんが鼻で笑っていた。

いやまあ、確かに珈琲は好きだけでも……。にしても、バレてしまったか。

折角こつそりと役立つアイテムを作って、こんな事もあるうかと、と出したかったんだが。

……ダクネスさんの視線が痛い。ああ、うん、何となくその心内は察せるけど、暮らしてる日数が日数だからなあ。

幼少期から殆ど私の家で暮らしていたためぐみんであるし、ある程度以上の私の情報を持っているのは仕方が無いと思うんだが。

「め、めぐみんはおんおんの事をよく知っているのだな。羨ましい限りだ。それ程までの信頼と実績があるのだな」

「ふふん、そうですよダクネス。何せ、おんおんは私の第一のお母さんなのですから！」

「こら、しれっとゆいゆいさんを第二に据えるな。逆だ、逆」

「そうでしたっけ？ 私としては育ての親はおんおんだったと思うのですが」

「……それに関しては私は何も言えねえなあ……」

お腹を痛めて産んだ経験なんてないからな。それは流石にゆいゆいさんが可哀想だから宥めておかねば。

はあ、少し昔を思い出して苛々し始めてるなめぐみん。

今が幸福であれば幸福であるほど、当時のひもじさや家族関係が浮き彫りになるからな。

然もあらん、と静観するしかないかねえ。……そうだ、そう言えばダクネスさんの家から引越し祝いとして何か高級そうな箱を貰っ

ていたんだった。

中から冷気も感じていたし恐らく何かしらの食材だろうから、それをご機嫌取りに使わせて貰うか。

それをダクネスさんも思っていたのか、此方に視線を合わせて苦笑しながら頷いた。

……ダクネスさん貴族だし、その家から祝いに届く食材となれば……高級なものだな！

今日の夕飯は少し豪勢になりそうだ、これは腕を振るわねばなるまい。

23話

さて、また一段と寒さが増して来た今日この頃、何をして過ごすべきだろうか。

そう思っていたのだが良い笑顔のアンナに背を物理的に押されて外に追いやられてしまった。

「(冒険譚よろしくね!)」

だなんていつてらっしやいに次ぐお見送りをされてしまったのである。

と、言うのもこれと言って話になるような冒険話が私に無かった事が原因だった。

アンナは冒険者が鼻高々に語る冒険譚を聞くのが好きらしい。

冒険者がこの屋敷に来るたびに待ち遠しい思いを抱いていたそうだ。

と、言うのも除霊に来たプリーストの付き添いに来た冒険者の中にビビりな者が居たらしく、俺は凄いんだ強いんだと自分に言い聞かせるかのように冒険譚を仲間に披露していたのを聞いた事があったそうだ。

幽閉されて死んだ拳句、半ば地縛霊として屋敷に憑りついていたので外にも出られず、そんなアンナは外への憧れがあった。

少し変な形ではあったが外への欲求を紛らわせる事ができたので、次に来る冒険者に期待し続けたそうな。

……まあ、それに私が応えられるかはまた別の話なのだが。

ぶっちゃけ、此れと言って冒険譚らしい話を私は持つておらず、そしてそれは他のパーティーメンバーも同じだったようで、カズマくんが若干盛ったクエストの話をしてきたもののついに話題が尽きたらしい。

なので、アンナは然も当然のように私を送り出したのであった。

……追い出されたと言っても良いな。ううむ、あんまり度が過ぎるようならお仕置きだな。

と言うか使い魔になったのだから普通にアンナも外に出れる筈な

のだ。

それを指摘すると幽閉されてたからーと露骨に視線を逸らしてもじもじし始めたので、今度初めてのお使いとして外に出す事を決めただけだな。

冒険者的に冒険譚と言うとやはりクエストだろう。そう思いギルドに向かったはいいものの、クエストボードは酷い有様だった。

冬季に出てくるモンスターは主に冬眠をしなかった個体、つまりは休まずに動けるポテンシャルを持つ強個体と言うのが一般的な認識らしい。

「……森林地帯に出たフォレストアイスウルフの群れの討伐、オークの縄張り縮小のための討伐ただし女性に限る、ねえ。オークなのに女性が求められるのか。……何でだ？ 性欲に忠実だから狩りやすいとかか？」

「あれ、知らないんですかおんおん」

「ん？ めぐみんか。どうしたんだこんなところで」

「いや、私もクエスト探しに来たんですよ。……おんおん屋敷に居ないですし」

「……ふむ、一声掛けてくるべきだったか」

「あはは……、いや、あの様子見てたから大丈夫ですよ。物理的に浮かされて追い出されてたじゃないですか」

「道理で足のふんばりが効かない訳だ……。で、何でオークは女性のみんなだ？」

「へ？ 知ってたんですか？ その通りですけど」

「んん？」

「ん？」

二人で目線を合わせてきよとんと首を傾げ合う。ええと、つまり、どういう？

「ええと、オークがメスしか居ないってのは有名な話なので言うまでもないと思うんですが」

「は？ メス？ オークが？」

「はい。一応オスのオークも産まれるそうですが、精通したら最後、搾

り取られて死ぬらしいです。オークは性欲が旺盛で他種族の雄にも突っかかって来る奴らなのです」

「ああ、だから女性が討伐するのか。男性だと襲われるから」

「そう言う事です。知らなかったんですね、意外です。割と常識なのですが……」

マジか、私の中のオークは体液に媚薬効果のある緑色の生殖猿のイメージなのだが。

あの見た目のオークを性転換して思い浮かべて……ううむ、ゴブリナみたいなのならギリセーフだが、豚顔に緑肌はちよつときついものがあるな。

いや、顔の形次第だろうか、人間に近い豚人程度くらいな感じならあるいは……、ううむ。

我ながら業が深過ぎるなこれは……。

「ふむ、そうなのか……。聞いた事が無かったな」

「そんな馬鹿な。学園で普通に習う内容で……あつ」

合点がいった。ああ、そういや私この世界では小卒並みの知識量だったわ。

めぐみんもそれに気付いたからか何処となく気まずい表情を浮かべた。

ああ、うん。そうだった。私、入学式とオリエンテーションと最初の方の授業を数回受けた頃に魔法を取得して卒業したんだったわ。

碌に授業を受けずに普通に平凡な生活に戻ったからなあ。

「ま、まあ、私が教えてあげるから大丈夫です！ デストロイヤーに乗ったつもりで居てくださいい！」

「なんて？」

「へ？ デストロイヤーはデストロイヤーですよ。多脚でワシヤワシヤしててでっかくて子供に人気のアレですよアレ」

「……都会は知らない事が多いなあ。森の中とは大違いだ」

「ああ！ 不貞腐れて遠い目をしないでくださいよおんおん！ 貴女それでもベルディアを倒した人ですか!？」

「ふふふ、けどなめぐみん。古今東西勇者つてのは片田舎で産まれて

なんやかんやで騒動に巻き込まれて最終的に魔王を倒すのがセオリーなんだ。だから、勇者候補である私が無知であるのもそういう理由があるからであって、決して私は世間知らずの野生狩人少女って訳じゃないんだ……」

「語るに落ちてますよおんおん!?!」

久々に落ち込んだ私は壁に右肩をもたれるようにして項垂れた。

あはは、そうさ、どうせ私は紅魔の里と言う閉鎖的な環境で追い打ちをかけるように森で過ごして来たガチ田舎者だ。

学も無ければ取柄は狩猟技術くらいだろう。胸も小さくて安産型でもない女性として貧弱なボディだし、前世の知識を扱える分野やダクソ3呪術を使えるぐらいしか本当に取柄が無い。

「……もしや、私はゆんゆんよりも常識知らずだったりするの……?」

「いや、それは無いと思いますよ。あれは箱入り、おんおんは野生ですし」

「……………そうか、めぐみんの印象だとやはり私は野生系なのだな……………」

「ああっ!?! つい失言を、うう、この状態になったおんおんは強敵だからどうしましょう……………」

森に帰ろうかな。食べるためだけに動物やモンスターを狩って、それを糧に日々を過ごすんだ。

そう言えば最近弓を使っていない気がするな。鈍ってたら困るし、あの程度は常用するか。

いや、いつその事カルラ衣装も止めて野生狩猟ガールとして再誕すべきなのではなからうか。

ずるずると壁に削られるようにしゃがみ込み、膝を抱えて顔を伏せる。

「ええと、前回はどうかやったんでしたっけ……。おんおんって気分屋ですから変なスイッチが入るとこうなっちゃうんですよね……。何故か実績に比べて自己評価が低いって言うか……」

ああ、でも、そうだな。別に都会っ子を自称している訳でもないし、

問題はないのか。

ベルディアを倒してお金も手に入れた訳だし、お金持ちの一角を名乗っても良いだろう。

よくよく考えればあの生活に戻るといふ事は今の生活を捨てるのと同義だ。

何処かの戯言を紡ぐ少年が言っていたように、変わりたいという気持ちは自殺に等しいのだ。

過去の自分を捨てられる程に今の自分が立派かと言えばそうでもない。

ぼんやりと顔を上げて視線を虚空に置く。

むしろ、あの生活を基準に私と言う存在を形作るのがそもそもナンセンスなのではなからうか。

あの頃と違って今の生活は遣り甲斐がある。私に求められる役割がある。

確かに自由は失ったけれども、今の関係からの不自由は居心地が良い。

……そもそも、前世の生活と比べて今はどうだろうか。充実しているじゃないか。

膝に手を置いて押すようにして上半身を上げて立ち上がる。

「……まあ、別にいいか。面倒だし……」

「あ、そうでした。何か勝手に沈んで勝手に戻ったんでしたっけ。結構前だから忘れちゃってましたね……」

「んー、さてと、暇つぶしにオークでも狩るかあ」

「いやいやいやいや!? そんなゴブリン狩るかーってノリで倒せる相手じゃないですよ!?!」

「そうか? 眉間に矢が刺されば死ぬだろ」

「いやまあそうですね……。オークはゴブリンと違って普通に知性があつて喋れますからね。群れを成してますから手を出すとしたら討伐隊が組まれるのが通例ですよ」

「そうなのか?」

「ほら、依頼書をちゃんと読んでください。此処に人数が集まり次第

出発って書いてあるじゃないですか。だから、先に受付で進捗を聞いた方が良いんじゃないですか？」

「そうか……。遠くから一方的に矢で暗殺していけば良いかなって思ってたんだが」

「何でそんな物騒な事をさらりと言うんですかおんおんは……」

いや、それが現実ではなからうか。

見張りを殺し、二、三匹殺して、食料庫あたりに火を放ち、混乱した所を影から殺して、追って来たのを罫にハメて殺して、それでも近付いた奴を複数人で囲んで殺して、それを続ければ群れくらいなら殲滅できると思うんだがな……。

ああ、いや、でも皮膚の硬さくらいは測らないと駄目だな。

基本一射即殺が肝なので矢が通らないと流石に無理だ。ああ、でも食さないなら毒矢でも良いか。

「一体くらい何処かで捕まえられないものか……」

「いったい何に使うつもりですか……?」

「毒の致死量とか身体の構造とか調べて研究とか」

「……普通に文献を調べれば良いんじゃないんですかね。基本、はぐれのオークは居ないそうですし」

「そうか……。それもそうだな」

「ええと……。あつ、これ！ これなんてどうですか！ 雪精の討伐！

これなら簡単ですよ！」

「雪精？ ああ、これか。簡単と言うが、こうして残っていると……って常駐依頼か。雪山で発見された雪精を狩るだけで十万里ス？ ……却下だ。絶対これ書かれてない情報があるだろう。どうせ凶悪モンスターの庇護下にいるみたいなおチだろうどうせ。受けるならこつちだな、冬眠に失敗した一撃熊の討伐。こつちの方が良いな、慣れてるし」

「いや、世間一般的に一撃熊を倒すのに慣れてるのはおかしいですからね……。でもまあ、一撃熊ですか。お肉、美味しいんですよ……」

「最近寒くなつて来たし、一撃熊の鍋も良いんじゃないか？」

「……ですね！ あの、ミソ？ っていう味付けでお願いしたいです

！」

「ふふふ、熊鍋めぐみん好きだったもんな。それじゃ、これを受けてくるか。少し待っててくれ」

依頼書を取り外し、受付で受託を申し出る。やけに胸のでかい金髪の受付嬢が依頼書と私を交互に見て困惑していたが、ベルディア討伐の一件を思い出したのか納得した様子で受理してくれた。

めぐみんの方へ戻る時に酒場の方から私の取った依頼書を知っていたらしい面々が恐れ戦いていたのが聞こえた。

「嘘だろ、あれ受けるのか。……って、おんおんさんか。なら、問題無さそうだな」

「噂によると夕飯に出てくるレベルで一撃熊を狩ってるらしいぜおんおんさん」

「あんなにちっちゃいのに凄いわよね……。流石おんおんちゃん、アクセル随一の狩人ね」

「呪術師だろ？ え？ アークソーサラー？ 聞いた事のない職業だな……」

「だろ？ 選ばれし者って奴だよ。流石おんおんさんだよな。同じアクセルってだけで鼻が高いぜ」

「飲んで話してくれたけど、普通に弓も使えるって話だぜ」

「そーいやベルディア戦でも牽制に使ってたな。道理であんなに鮮やかに射れる訳だ」

「だなんて称賛の声が聞こえてくる。……ふふふ、少しだけ誇らしく思えてくるな。」

「……いや、褒められ過ぎでは私。なんか怖いんだが。私の評価ってどうなってるんだ？」

この前のベルディアの一件から私の評価は更に上がったらしく、行く先々で英雄を見る視線で見られる事が多い。

そう言えば、王都から何か凄腕のソードマスターがアクセルに来たって聞いたがどうなったんだ。

聞く話によればベルディア討伐のために王都からの応援としてアクセルに来たらしい。

……私が討伐した三日後に、だ。

そのため、噂になる事はあっても実物を見ていないんだよな。年若い少年と二人の若い少女の三人組との事らしいが、それっぽい姿を見た事ないんだよな。

そう思いめぐみんにその話題を振ってみると小首を傾げられた。そもそも認識すらされていなかったらしい、哀れな。

と、なると噂になる程度で終わってしまい、誰も注目しなかったので情報が揃ってないのか。

もしかしたらどつかで見えていた可能性も出て来たな……。けどなあ、若い三人組とかこのアクセルだと有り触れているからなあ。

「まあ、別に良いんじゃないんですか？ 話題にすら上がらないって事はそこそこの程度の人たちだったんでしょう」

「一応王都から来ているから上級冒険者だと思っただがな……」

「別に良いじゃないですか。聞く話によればイケメンらしいですけど、興味無いでしょう？」

「それもそうだな。それじゃ討伐に行こうか」

「……ほんと、おんおんに男つ気が無くて良かったです、安心できます……」

何かぼそぼそと胸に手を置いて呟いているめぐみん。

安心できると言う所だけ拾えたので、今のパーティーの所感でも口にしていたのだろうか。

「何か言ったか？」

「いえいえ、何でもありません。どうやって行くんですか？ 今の時間だと馬車ありましたっけ？」

「いや、トレントに乗って行く。場所はジャイアント・トードが出ていた辺りらしいからあつと言う間だぞ」

「おお！ そう言えばおんおんは馬を持ってましたね。あの角がかったちよいい馬に乗れるんですねー！」

「ああ。私たちは軽いだろうから二人乗りでも大丈夫だろう。……一応、カズマくんらに伝えておくべきかね」

「あ、カズマたちはもうキールのダンジョンとやらに向かって朝から

動いてましたから大丈夫ですよ」

「む、そうなのか」

「何でも初心者クラスのダンジョンらしいので、鍛えるのを目的に行ったみたいです」

「ふむ、ダンジョンか……、いつか潜ってみるのもいいかもな」

「そうなるど私は荷物持ちですね」

「ははは……、流石にダンジョン内で爆裂魔法したら大変な事になるだろうしな」

でもまあ、最近は槍を握ってるし、最低限は動けると思うんだけどな。

にしてもキールのダンジョンか。初心者ご用達の街近ダンジョンとしてアクセルの近辺にあるとは聞いていたが、まさかそこに向かうとはな。

ふむ、それだけカズマくんもやる気と言う訳だな。

カズマくんの性格を考えるに安全マージンを取りつつレベリングができる場所として選んだのだろう。

聞く話によればキールのダンジョンはアンデッド系、特にスケルトン系が多いらしい。

アークプリーストのアクアさんも居るんだろうし、余裕だろうな。

ベルディア戦の一件でアクア印の聖水をギルド経由で売り出したようだし、その浄化力をきちんと知っている筈だしな。

めぐみんと雑談をしながら歩く事数分程度で正門の方へと辿り着いた。

衛兵に冒険者カードを見せてからクエストに向かう旨を伝え、街道へと出る。

「よし、召喚び出すか。サモン、トレント」

まあ、詠唱なんて必要無いんだがめぐみんが居るので様式美として口上しておく。

案の定、キラキラとした瞳で私を見つめてご満悦の様子であった。

幽体から実体化したトレントが青白い召喚エフェクトを伴いながら隣に召喚される。

屋敷の方の馬小屋に住処が変わった事で伸び伸びと暮らせるようになったからか毛並みの色艶が増しているようだった。

手慣れた様子で鐙へと乗っかり、めぐみんへと腕を差し出した。

……のだが、何故かめぐみんは頬を赤らめ此方を見つめて動かない。

小首を傾げてみればハツとした様子で慌てて私の手を掴んで馬上へと乗った。

「すみません、つい見惚れてました」

「む？ 見惚れる要素があったか？」

「勿論です。格好良い馬に凛々しいおんおん、素晴らしい光景でした！」

「お、おお……、まあ、楽しそうだなによりだ？」

「……そういう所ですよ、おんおん」

「何がだ!？」

ううむ、年頃な娘の心が分からん……。めぐみんも多感な時期に入ったと言う事だろうか。

だが、洗濯物の様子からしてまだ赤飯の用意はしなくて良いっぽい。が、はてさて。

私の後ろにめぐみんを乗せ、腰に手を回して貰い身体を安定させる。

……にしては随分と力強く抱き締めるなめぐみん。手綱要らずだから良いが、普通の馬だと困るくらいに密着してるんだが。

ふうむ、少し成長したか。やはり食生活が良くなったのが良かったのだろうか。

めぐみん理論の恩恵かもしれんな、少なくともレベルは上がっているだろうし。

はいよー、トレントと言わんばかりの速度で街道を駆けさせ、私たちは一陣の風となった。

トレントの馬力はそこらの馬よりも遥かに強いのでこの速度が出る。

そこらの馬がオートバイくらいの速度なら、トレントの速度は大型

バイクのそれである。

私にしつかりと抱き着いているからかめぐみんも駆け抜ける速度を楽しむ余裕があるらしく、終始にっこにこの笑顔であった。

「凄く速いです、カズマよりも速かったです」

「言い方あ!?! カズマくんたちと来た時よりも、だろ?」

「ん? そうですね。あの時はそれなりに時間掛かりましたが、この子だとあつと言う間ですね」

「そりやまあ、うちのトレントだからな。……はいはい、久々の疾走で嬉しいのは分かったから前向け前、安全疾走を心掛ける」

「ひいん」

「え? 今、返事しました?」

「ん? 使い魔だからな、流石に喋れはしないがある程度意思疎通はできるんだ」

「へえ……、使い魔、便利ですね」

「そうだろう。めぐみんもするか? 魔法使いにぴったりな黒猫なら用意できるぞ」

年がら年中私の頭の上に寝転がっているぐうたら猫ではあるが。

ちよむすけの事を言っているのだと理解したためぐみんが渴いた笑みを浮かべて苦笑する。

まあ、戦闘のサポートは無理だし、精々が可愛いマスコットだしな。

「いやあ、流石にお断りしておきます。ちよむすけはもはやおんおんの一部みたいなもんですし……」

「ふむ、完全に野生を忘れてるよな最近のこいつは」

「と言うか、野生の時あったんですかね? 最初から家猫みたいな感じだったような気がするんですが」

「……確かに。人懐っこいと言うか人に慣れてたしな。案外あの上級悪魔が世話してたんじゃないか」

「んー、どうでしょう。それだったら譲ってくれとは言わないような。うちの猫だから返せと言うのでは?」

「それもそうか。となると、……禁忌の実験の成れの果て、とか?」

案外有り得そうな憶測である。何せこのちよむすけには悪魔っぽ

いデフォルメ翼が生えているし、額の十字の模様とか傷跡と言われればそれっぽいしなあ。

額に垂れるちよむすけの顔を見やれば「んなあう」と言う返事が返って来た。

使い魔契約してないからさっぱり分からん。してみても良いが貴重な枠を意思疎通したいからと言う微妙な理由で潰すのもなあ。

「……まあ、突然変異みたいなもんじゃないですかね。または先祖返りとか？ おんおんも似たようなもんですし」

「待て、私はそんな風に思われたのか？」

「そりやそうですよ。魔法に憧れを抱き、格好良い詠唱を胸に、ズバババーンと決める時を夢見るのが紅魔族なのに、おんおんはその反対を行く狩人思考のリアリストじゃないですか」

「むう……、それは、その……環境が？」

「いや、実際魔法使ってるよりも弓握ってる時の方が楽しそうじゃないですか」

もう何も言うまい。認めざるを得なかった、私がゆんゆんに次ぐ紅魔の異端児である事を。

……だってなあ、前世の記憶がある私が紅魔のそれをやると痛々しく感じてしまったってどうも恥ずかしいのである。

勇者と魔王ごっこはまあ、分かる。だが、モンスターの軍勢を前にした紅魔パーティーの名乗りを遊びにするのは流石に無理がある。

せめて敵役を作れよ。何で全員ヒーロー側なんだよ。そこらへんに居た犬を適当に座らせて魔族の使い魔ケルベロスだなんて呼んで決め台詞を吐いてるんじゃないよ。

あの中に幼少期の私が並んで遊ぶ姿がマジで見えなかった。

割と本気でこいつら頭やべえなとか冷めた視線を向けてた気がするわ。

「……紅魔族止めるかあ」

「アウトローに生きると言っても限度がありますよおんおん!」

「どっかに種族を変える薬とか売ってないもんだろうか」

「錬金術で作ろうだなんて思わないでくださいよ!? なまじおんおん

優秀だから何となくで作っちゃいそうで怖いんですけど!？」

「……なるほど、その手があったか」

「ああっ！ 私の馬鹿っ、余計な事を言ってしまった！」

「めぐみんの発想は柔軟で良い事を言うから有難いな」

「褒められても今の流れだと嬉しくないです!？」

だなんて姦しい会話を馬上で続ける事一時間ちよい。農村地帯から続く山の方へと駆けていく。

そこはすっかり冬景色と言うべきか浅く雪の積もった場所へと降りてトレントを送還する。

獣は臭いに敏感だ。新品な金属製の罨なんて張ったら普通にバレて避けられると聞く。

なるべく風下に陣取りながら私の服の裾を掴むめぐみんを連れて歩いていく。

「ふうむ、それらしい足跡がこつちに無いとなると少し深い方へ行つたみたいだな」

「分かるんですか？」

「ん、地面を見れば分かるが浅く積もってるだろう？ 足跡が埋まるのはそこそこの時間が経たないと無理だろう。冬眠から目覚めた獣つてのは飢えを満たすために歩き回る傾向にあるからな。小動物が埋めたものや木の実を探そうと確実に痕跡を残すもんなのさ」

「へえ、そうだったんですか」
まあ、割とメタな話だがソウル感知に引っ掛かってないってのが理由なんだけどな。

それっぽい事を言っているだけで、依頼から数日は経っているだろうからそもそもこの森に居ない可能性だってあるのだから。

目を閉じてソウル感知の感度を上げる。……ん、微かにそれなりにでかい反応があるな。これか？

そちらの方向を凝らして見れば、黒い点のような何かが動いているのが見える。

多分あれだなと当たりを付けてめぐみんを先導していく。

一撃熊、そう呼ばれる所以はその巨体と爪の鋭さ、そして寧猛な性

格をしている事が挙げられる。

まあ、実際に熊になんて出会ったら運が悪ければ一撃で大体死にかけるとは気がするけども。

黒い点であったそれが段々と丸みを帯びた球体になり、数十メートル先まで近付いた事でその全貌が薄っすらながら見えるようになる。

……いやあ、よりによつて又シ級じゃんか、五メートルくらい？
めっちゃやかいんだけど……。

そりや冬眠も失敗するわ、木の実とかじゃ足りないだろ確実に。

弓で射殺す予定だったけどもあそこまで大きいと皮下脂肪も厚くて刺さりきらない可能性があるなあ。

一撃熊の弱点は遠距離手段を持たない事だろう。

近付いて爪で切り裂き、牙で噛み砕く。それぐらいしかできやしない。

ソウルから鉤爪付きのロープを取り出し、近場の頭上の枝へと放り投げて引っかける。

先にめぐみに登って貰い、枝の上で待機して杖を構えて貰っておく。

熊は木登りができるがすぐに登れる訳では無い。ある程度時間が掛かるので避難場所として枝の上は優秀な場所だ。万が一仕留め損ねた時には吹っ飛ばしてしまえば良いしな。

「はてさて、それじゃさくつと熊狩りでもすつかな、と」

雪の下から掘り当てた小石を一撃熊の方へと投げれば、木の幹にやや高い音を立てて転がった。

辺りを見回していた一撃熊が私の姿を見て動きを止め、咆哮を上げて四つ足で駆け出し始めた。

私は口角を上げてそれを迎える準備をする。ソウルから取り出したクロスボウに矢筒から引き抜いた普通の矢をつがえ、一撃熊の眉間を狙い澄まして放つ。

当然のように一撃熊はこれを見ていたので避けようと顔をその巨体を揺らすように避ける。

——のが予測出来ていたので経験則からくる勘に従い二の矢を放

っ。

避けた顔の眉間に突き刺さるようにして後追いの矢が命中する。

「……普通はこれで死ぬんだけどなあ。ヌシ个体だからしぶといか」
通せなかつたなこれは。一撃熊も眉間に額があり、皮膚の次は頭蓋骨が存在する。

そのため、普通の矢では貫き通す事が出来ずに浅く刺さっただけなのだろう。その証拠に一撃熊が煩わしそうに顔を振れば突き刺さっていた筈の矢はあっさりと抜けて落ちていた。

目を狙うか、首、重要な臓器、太い血管を射抜くかしないと殺せないなあこれ。

続いて三、四の矢を放つが掠る程度で上手く避ける。

もしやこいつ、狩猟されかけた経験があるな？ となると先程の一撃はあえて受けたのか？

何だこの一撃熊こっわっ。覚悟決まってるってレベルの胆力じゃねえ。

ううむ、弓縛りするには此方の弓が弱すぎるなあ。しゃーない、ちよつとズルをするか。

「グウオオオオオオオオオオンツ!!!」

「はい、飛び付き見てからの『大発火』余裕ですよつと!」

「グウアオツ!」

眼前に迫り来る一撃熊を冷静に見つめていられたのはこれがあるからだ。

前の空間に生じる爆炎から生じる衝撃が一撃熊の巨体を弾き飛ばすように押しやる。

ひっくり返って吹き飛ばし一撃熊を見据え、矢をつがえてこの世界におけるバグ技を使う。

「これこそは禁忌の闇、母の慈悲にして、汝の自刃、『闇の刃』」

矢を杖と見立て先端に人間性の闇を転じた漆黒の刃を形成し、質の良い矢じり代わりにする。

そうこの世界においてダクソ3の呪術及び闇術は応用が利く。恐らくながらこの世界の魔法の性質と喧嘩してその在り方を変じてい

るのだろうか推測できる。

この世界はゲームの世界ではない、この世界は私にとって現実であり、この世界は変容を許容する。

『ティンダー』に魔力を込めれば色が変化し火力が変わるのを知っているだろうか。

『クリエイト・ウォーター』に聖なる力を籠めれば『セイクリッド・クリエイト・ウォーター』と派生するように、この世界の魔法は自由が利く余地がある。

多分、『ウインドブレス』と『ティンダー』を合わせた『ブレスティンダー』だなんて魔法も作れる事だろう。

では、ただの矢と『闇の刃』を組み合わせたこれがどんな効果を発揮するか、御覧じろッ!!

解き放った漆黒の矢は寸分狂う事なく、縦に一回転して腹を晒す一撃熊の心臓を貫く。

そのまま勢いを失って漆黒の矢じりの無くなった矢が木に突き刺さった。

「終いだ。毛皮程度じゃこれを防げないだろうよ」

『闇の刃』の威力を削ぐ事ができなければ殆どのものは障害物とならず貫通し切り裂く。

やろうと思えば壁抜きもできてしまうこの『闇の刃』をただのかい熊が耐えられる訳も無く。

心臓を刃の形に穿たれ、体重を感じさせる重い音を立てて地面に倒れ伏した。

「おおおおお!! な、なんですか今の!?! と言うか詠唱?! か、恰好良過ぎます……!」

限界オタクめいた恍惚とした表情でめぐみんが後ろの方で褒め称えてくれる。

ふふん、そうだろうそうだろう。私は知っているんだ、こういうの好きだよなめぐみんは。

……まあ、詠唱の内容は説明みたいなもんだけだな。色々と解釈できる文だよなあと当時感慨深く思ったものだ。

枝の方からするするとロープで下りたためぐみんが私に抱き着くようにして興奮気味に聞いて来る。

ふふふ、最近めぐみん成分が補給できてなかったからな。

こうして私の株を上げておく良いチャンスだった。

すまん又シ一撃熊。お前の血肉は今晚の鍋に使って供養してやるからな……。

「……そう言えば、この一撃熊見た事無い大ききなんですけど血抜きできるんですか？」

「……無理、かなあ」

「ですよねえ……」

私たちを足しても足りないであろう巨体の重量。

……ソウルに仕舞って、屋敷で捌くかあ。アンナに吊り上げさせれば良いだろう。

別に此処に呼び出しても良いのだが、まだ外に出るのは無意識に怖がってるみたいなので配慮してやるか。

この又シ一撃熊ならアンナも満足する事だろうよ、多分。

24話

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ これは訓練ではありません！
至急冒険者の方々はギルドへとお越し下さい!! 大至急ッ!!』

一撃熊の鍋に舌鼓を打った翌日の事だった。私は晴れ渡る空を窓から見やりながらリビングで珈琲を飲んでいた。

そんな中、大分切羽詰まった声色の緊急クエストが発令された。

同じくしてリビングでまったりとしていた面々に顔を向ければ、力強い領きが返って来る。

『避難勧告！ 避難勧告！ 機動要塞デストロイヤーが接近中！ 迅速に対応できるように非冒険者の方々は避難の準備を始めてください！』

だが、そんな警報が街中に響き渡った途端、アクアさんとめぐみんにゆんゆんが一瞬にして顔を青褪めさせていた。

はて、デストロイヤー？ 何処かで聞いた名だな。昨日めぐみんから聞いたような気がする。

反応の様子からカズマくんは私と同じくして知らないようで小首を傾げており、ダクネスさんは神妙な顔で苦虫を噛み潰したような表情で窓を睨み付けていた。

「デストロイヤーってあの子供に人気のわちゃわちゃしてるっていう奴か？」

「お、おんおん。それは見た目の事です。実際のデストロイヤーはマジでやばいんですよ。それが通った後には何故かピンピンしてるアクシズ教徒以外は形も残らないと評判なんですよ!」

「……アクシズ教徒にはギャグ補正でも付いてるのか？ まあ、それは兎も角として取り敢えず準備だ」

「嘘でしょおんおん？ あのデストロイヤーだよ？ 戦うなんてできないよ!」

「……分かった、迅速に準備しよう」

「あつ、ダクネス!?!」

私に一つ頷いて自分の部屋に戻ったダクネスさんを、アクアさんが

止めようとするも失敗していた。

デストロイヤーとやらの全貌が分からない以上、此処で足踏みしている意味は無い。

そう思いめぐみんとゆんゆんに詳細を聞けば三人の反応を理解できた。

全長は首が痛くなるくらいの大ささだそうで、八脚の機械製の大蜘蛛、それが世間一般のデストロイヤー像であるらしい。

……それなんて局地制圧兵器だ？　　と言うかそれ世界観的にどうなんだ？

戦闘方法、と言うよりも基本的に結界を纏ってガシヨンガシヨンと歩いて来るらしい。

背中にはゴーレムが居て迎撃されるらしい。暴走した古代兵器と言うには最新鋭だな……。

「……確実に勇者候補案件だろ、これ」

どう考えても過去に此方に転生した勇者候補が作って暴走してるだろ。

その理由は単純にこの世界の生活水準が中世ナーロッパ的であり、魔道具が精々の最新器具、オートメイシヨンのテクノロジーは見当たらない。

……いや、もしかして栄華を極めたが一度滅んだオチか？　　それでロストテクノロジーとしてこうして牙を剥いている……在り得る話だな。

しかし、巨大兵器か。これは……無理だな。単純に対抗手段が無い。

私の呪術の最大火力は『苗床の残滓』か『混沌の火の玉』くらいだ。機動要塞デストロイヤーの行き先は何も残らない、そう残されている以上普通に八脚で歩いてくるだけじゃないんだろう。

ああ、うん、そう言う事か。丸い球体だか四角いかは知らないが、結界が展開されているらしいから磨り潰される訳か。いや、死ぬわ。

漸くめぐみんたちの反応が分かるくらいの理解度を得た。

「なあ、アクア。前にウイズンとこで魔王の結界ぶち壊せるって言っ

てたけどよ、それ結界にも使えるのか？」

「んー、多分？」

「じゃあよ、お前が結界壊して、めぐみんの爆裂魔法で吹っ飛ばせば良いんじゃないの？」

カズマくんのひらめきに似たアイデアに思わず私たちは成程と感心していた。

結界を潰せれば魔法が通る。幸いこの世界には爆裂魔法のような遠距離手段が多い。

更にその使い手が此処に居る、めぐみんへと視線が集まる。

「わ、私ですか!？」

「おう、良かったなめぐみん。唯一の取柄である爆裂魔法の出番だぞ」
「軽く言ってくれますねカズマっ！ 良いでしょう、そこまで言うなら魅せてやりましょうとも！」

「決まりだな。では、今の案をギルドに持っていくか」

久々に鎧を着込んだダクネスさんも合流し、皆揃って冒険者ギルドへと向かう。

一応リーダーであるカズマくんを先頭にギルドへと顔を出すと、此方を、と言うか私を見て歓声が上がった。

いや、頼りにされるのは嬉しいが今回は私は脇役だぞ？

ちらりとカズマくんを見やれば、意を決したように頷きを返して前に出た。

「聞いてくれー！ うちのアクアは結界を破る魔法を会得している！
これで遠距離からの魔法による先制攻撃が可能だ！ そして、この世で一番破壊力のある魔法、爆裂魔法を取柄とするめぐみんが居る！
よって、俺たちはこの手段による迎撃を対抗策として提案したい！
どうだろうか！」

カズマくんの身振り手振りによって説得力の増した提案の声がギルドに響くと、騒めきと共に希望に満ちた表情が浮かび始めた。

そんな中、集団の一塊から抜け出すように此方に歩いてくる少年の姿があった。

青銅色の立派な鎧に身に包んだ少年が前に出て来た事でギルド内

に騒めきが起る。

それは決して悪い意味ではなく、むしろ歓喜の声が聞こえてくるようだった。

「ミツルギさんだ！ おんおんさんに次ぐこのアクセルに居る実力者の一人だぞ！」

「ああ、結界で歯がゆい気分だったろうが、それが無くなるなら打って出るつもりなんだろう」

「流石ミツルギさんね！ 王都の新鋭冒険者！」

ミツルギ？ ……どつかで聞いたような名前だな。確か、ベルディア討伐のために来てくれた人だったか。

ぱつと見好青年の戦士職だろうか、それっぽい得物を腰に下げている。

そんなミツルギくんがカズマくんの前に歩いて来たかと思えば、素通りしてアクアさんの前に跪いて手を取っていた。

握手の体勢を取っていたカズマくんは梯子を外された事とアクアさんに跪いた事の二つで困惑しているようで、何だこいつと言う視線で振り返ってミツルギくんを見ていた。

「ああ、まさかこの地で貴女様と再会できるとは思っていませんでした。女神様、覚えていらっしやるでしょうか。貴女様に魔剣グラムを授かった御剣響夜です。再びお会いできて嬉しいです」

「え？ 誰？ ごめんなさい、転生業務って工場で言うところの流れ作業だからよっぽど印象強くないと憶えてないのよ。でもまあ、そんな名前の剣を上げた覚えはあるわ」

「ぐふうっ」

と、思ったら天然な言葉の袈裟斬りに致命傷を負ったようだった。

よろめいた彼を支えるべくやけに露出の高い少女二人が近寄る。

ふーん、ハーレム系か。まあ、顔は整っているし、強そうな武器や鎧をしている事から実力はあるんだろうな。

くっそどうでも良いけど。

ん？ そういや見方を変えればカズマくんもハーレムメンバーを引き連れているようにも見えるのか。

つまりこれはハーレム主同士の争い、男同士の戦いの流れだな。

胸に手を当てて割と深刻な精神ダメージを負ったらしいミツルギくんが立ち上がり、今度はカズマくんと対面する。

なんだやるのか、とカズマくんに若干身構えるとミツルギくんは顔を横に振った。

「なんで女神様が此処に居るのか問い質したいところだが、状況が状況だ。カズマと言ったか、後で話し合いの機会をくれないか？」

「あ、ああ。もしかしてだけどお前も勇者候補？」

「ああ。そうだ。僕はこの魔剣グラムを女神様から授かった勇者候補だ。君は……、まさかと思うが女神様を？」

「……売り言葉に買い言葉だったけどな、最終的にはそうなる。つつてもお前が最初の第一印象で変な期待を胸に抱いているのは分かったわ。このぽんこつ天然駄女神にどんな妄想抱いてるのか知らんけど、神聖な雰囲気とか皆無だからな。普通に泥酔して暴れ回るOLみたいな奴だからなこいつ」

「……くっ、僕の知らない女神様の一面を知っているからと言って良い気になるなよ！ 必ず女神様は僕の物にしてみせる！ 首を洗って待っておけ！」

「いやいや、いやいやいやいや、なんでそーなる。まさかとは思うが一目惚れしたのかよ、この駄女神に？ いやー、止めとけて。こいつと一緒に居ると楽しいけど大変だぞ？」

「自慢か？ 自慢なんだな!? くそっ、こんな奴に女神様が……っ！」

おおっと？ なんかアクアさんの取り合いみたいになってるな。

先程まで対デストロイヤーだった雰囲気霧散して、面白いものを見る視線が集まっていた。

……はあ、このまま見ていたい気分だが、状況を考えろ馬鹿共め……。

手を打って注目を集めると観戦ムードが霧散して少し引き締まった。

「そういう話は後にしろ。話の途中だがデストロイヤーだ。そっちを優先しろ」

「す、すいません、おんおんさん」

「むっ、それも、そうだな……。カズマと言ったな、君とは後で決着を付けよう」

「分かってくれて何よりだ。兎も角、作戦概要は三段階だ。アクアさんによる結界破りが第一、次に高火力魔法による迎撃が第二、そして第三はデストロイヤーを操る何者かを討伐する事だ。何か異論があるものは居るか？ ……居ないな。では、この中で爆裂魔法、もしくはそれに準ずる魔法を持っている者は居るか？」

「いや、流石に居ないだろ……。ん、待てよ、確かウイズ魔法店の貧乏店主さんはかつて凄腕アークウィザードとして名を馳せた人だった筈だ！」

「誰かウイズさんと呼んで来い！ おんおんちゃんのところの爆裂娘みたく、道楽で爆裂魔法を習得してるかもしれないぞ！」

「すみません、遅くなりました！ ウイズ魔法店の……。って、あれ？」
ギルドの入り口に現れたウイズさんへと視線が集まり、名乗りを上げようとしていたのだろうが困惑する姿があった。

「来た！ メイン魔法使い来た！ これで勝てる！」

「黄金の鉄の塊でできているマナタイト製の杖を持つウイズさんが負ける訳ないだろ！」

「えっ？ ……えっ？ ……えっど？」

困惑しているウイズさんに先程の流れを説明すると、豊かな胸を張ってお任せくださいと頷いてくれた。

「どうやらポイントが余っていたから爆裂魔法を取得していたらしい。」

「案外、記念受験みたいなノリで爆裂魔法を習得している人って結構いるんじゃないだろうか。」

「そんな事を思っていると後ろから肩を叩かれ、振り向いてみれば露出過多で煽情的な恰好をするクリスさんの姿があった。」

「シーフだからってベルトファッションはえっち過ぎやしないだろうか。此処デイスガイアじゃないんだから。」

「ごめん、ちよつとだけ良いかな？ 渡したいものがあるから裏手に

来てくれる?」

「ええ、構いませんよ。それにしてもお久しぶりですね、お元気そうで何よりです」

「あはは、ダンジョン巡りも一段落って時にこれだったからね、驚いたよ。……いや、ほんと、驚いたよ」

「なんか最後に呟いた言葉は別の何かに対しての言葉のように聞こえるが、まあ、いいか。」

「クリスさんに先導される形で一旦外に出て裏手に回ると樽に立て掛けられた一本の大きな剣がそこにはあった。」

「どつかで見た事がある独特なデザインの剣だな。」

「刀身の下側に両端へ短く伸びる刃が付いており、ってよく見たら先が割れてるなこれ。折れてる様に見えるんだが……。」

「渡したいものとはこれの事だろうか?」

「そう内心首を傾げていると耳元に囁くようにしてクリスさんが話し始めた。」

「多分、もう私の正体について気付いていると思うんだけど、私は女神エリスの分体なんだ。こうしてシーフとして活動してるのは理由があって、勇者候補の人たちが志半ばで死んじゃって残された神器を回収する役目を負ってるんだ」

「そうだったんですか。アクアさんが居るからエリス様も下界に降りているんじゃないかなと思ってはいました」

「それでね、君の生前の情報と特典の内容を確認させて貰った訳なんだけど、君にならこれを扱えると思ったんだよね」

「これが渡したいものですか?」

「うん。ストームルーラーって言えば分かるかな?」

「は? ストームルーラーだと? 巨人殺しの折れた大剣じゃないか。」

「こんなデザインだったんだな、当時巨人ヨームに追われて切羽詰まりながら装備したからあんまり細部を見てなかった。」

「なんでそんなものを私に渡そうとしてるんだ?」

「そんな私の心境を察してか苦笑しながらクリスさん、もといエリス」

様が続きを話し始めた。

「これはその、これが欲しいって言った勇者候補の子がね、原作通りの武器が欲しいって願っちゃったもんだから力を使い熟す事無くただの大剣に終わっちゃったものなんだよね」

「……はあ、戦技が使えなかった、と？」

「多分、そうなるのかな？ 構えても魔力を込めても使えなかったみたい。でも、君の特典の内容からしてこれを扱える資格があると思わない？」

「……成程、これを使ってデストロイヤーを倒せ、と」

「私はさ、こうして下界に降りてくるくらいにこの世界が好きなんだ。同時に、この世界に住む人たちも愛している。だから、こう言うチャンスを上手く活用したい訳なんだ。まあ、それに……先輩が思いつきり干渉しちやつてるからこれぐらいの手助けなら良いかなってね」

樽に立て掛けられたそれを持ち上げたエリス様から、ストームルーラーを手渡された。

ずつしりとした大剣を受け止めて若干大変だったが、何とか落とす事無く持つ事ができた。

鞘の無いストームルーラーを上段に構え、魔力を込めてみるが変わりは無い。

——【戦技・嵐の王】、そう脳裏に浮かべてみれば剣身に風が集まり収束し始めるのが肌で分かった。

マジで使えるのかよ、やべーな神器って。戦技をキャンセルして風を霧散させるとエリス様が何とも言えない表情で此方を見ていた。

あー、エリス様からすれば本来の使い方を今更に使ってくれたみたいなものなんだしな。

「そう言えば、この武器って一部の場所ではか効果を発揮しない類のものですけど、そこんところどうなんですか？」

「えっとね、一応それらしい改造がされてるよ。一つ、相手が自身よりも強大な体躯を持つ事。二つ、資格ありし者が持ち扱う事。三つ、相手を視認して狙い撃つ事。この三か条を守ってくれば真の力を発揮するように作ってあるみたいだね」

「普段使いするには一か条目で制限される感じ、ですか」

「あ、因みにレンタルだからデストロイヤー戦が終わったら返してね。一応封印する神器だから、今回だけ特別だよ♪」

そう言うってエリス様はお茶目にウインクと舌出しと言う可愛らしい仕草を此方に魅せた。

……まあ、分かってたけどな。ぶっちゃけ、大剣なんて普段使いするには重過ぎるしなあ。

コレクションとしては少し欲しかったなあ、一ファンとして。

「……性能封印してコレクションに貰えたりしません？」

「あー、うん、気持ちは分かるけど駄目なんだ。天界規定に抵触しちゃうから。君が何処かで拾ってきたものならワンチャンあるけど、そのまま渡しちゃうと横流しになっちゃうからね」

「そうですか、残念……」

「あはは、まあ、この武器は君ぐらいしか扱えないから私としても良いかなーとは思うんだけどね。決まりは決まりだから、ごめんね」

「いえ、出過ぎた事を言いました、すいません」

困らせてしまうのは本意では無いので引き下がるとしよう。

ソウルにストームルーラーを仕舞い込み、今回限りのアイテムとして運用する事にしよう。

さて、デストロイヤーを迎え撃つ準備をするか、そうエリス様に一礼して去ろうとした時だった。

「ねえ、おんおん」

「はい、なんででしょう」

「最近ダクネスと良い感じっぽいけど、もしかしてもしかする？」

「……んっー、まあ、女神様ですもんね。流星に分かりますか。お互いに納得してお付き合ひさせて貰っている感じですね」

「そっかあ……。いやほら、ダクネスって敬虔なエリス教徒の子だったから色々と目を掛けてたりしたんだよね。……今、幸せ？」

「……はい。まだ身内には教えてないのでこっそりですが、充実しています」

「……………だらうね」

何かしらの言葉を呟いたエリス様は何処か疲れた様子で、けれど頬を赤くした状態で此方を見ていた。

ふむ？ もしや、ダクネスさんが何かしらを口漏らしたのだろうか。

……まさかと思うが、い、一応聞いておいた方が良いだろうか。

いや、止めておこう。もし頷かれてしまったら今後の営みがし辛くなるし。

けどまあ……、エリス様の恰好も大概えっちなんだけどな。シーフだからってベルト服は煽情的過ぎるんだよなあ。

変な気分になってきたのでこちらでお暇させて貰うか。

会釈してその場を離れ、ギルドの方へ戻ると色々と話を進めてくれているようだった。

「二先ず、アクセル正門前の街道に前線を張る形になりました。まあ、聞く限り意味無い気はしますが、やらないで無秩序になるのもアレだな、と」

「ふむ、まあ仕方あるまいよ。相手は見上げるような機械蜘蛛らしいしな」

「ですよねえ。取り敢えず、アクアとめぐみん、ウイズを街門の上に配置して、左右の足を破壊してダウンを取ったら乗り込めーって感じのふわっとした作戦になりました」

「まあ、残当だなあ。そうするしか無いだろうな。怪獣大決戦をするための味方が居ないしな」

「あはは……、ですね。取り敢えず、デストロイヤーが見えてくるまでは前で待機ですかね」

「そうだな。……あ、そうだった。クリスさんが神器を貸してくれたから私も攻撃に参加するぞ」

「へ？ 神器？ あー、ダンジョンに行ってるって話ですし、レアドロップしたんですかね」

「いや、勇者候補が持っているチート武器の事を神器って言うらしいぞ。どつかでくれたばっいたらしい人のそれで、お誂え向きなのを預かっているからぶちかましてやろう」

「……またおんおんさんの英雄譚に伝説が刻まれるんすね」

何処か嬉しそうな様子で言ってくれるカズマくんは笑みを返し、無い胸を張ってみた。

タイミングとしてはめぐみんたちの後押しとして扱うのが良いだろうな。

爆裂魔法でよろめいたところを【戦技・嵐の王】で吹っ飛ばしてやるのだ。

愉快痛快な光景になるのは間違いないだろう、少しだけ楽しみだ。

……まあ、巨人ヨームと比べてデストロイヤーがどれだけの大きさは分からないんだけどな。

確定的な死を迎えないとは言え、凄く痛いのは嫌だなあ。せめて一思いにぶちつと殺して欲しいものだ。磨り潰すのは勘弁な。

それからは前線基地を急ピッチで仕上げる事になり、主役と言っていいめぐみんとウイズさん、急遽名乗り出た私、そしてアクアさんとその暴走を戒めるために付き添ったカズマくん以外が木材等を荷運びし始めた。

私たちは射線の確保のために街門の屋上部にある左右の塔へと移動し、真価を發揮するべく英気を養っていた。

「大丈夫かめぐみん。その震えは武者震いじゃないだろ」

「あ、あはは……。そ、そんな訳無いじゃないですか。やだなーもう……。はあ、おんおんには隠せませんね」

「当たり前だ。何年一緒に居ると思っっているんだ。めぐみんのおしめを替えた事もあるんだぞ」

「いや、その頃にはまだ出会ってませんから。と言うか、初対面だった頃のおんおんがそこまでしてくれるとは思えないんですけど」

「さて、どうだろうな」

私の冗談で少しは肩の力が抜けたのか、強張っていためぐみんの表情に苦笑の色が浮かんだ。

小さな溜息を吐いたためめぐみんが視線を外して外を、遠くに見える巨大な砂埃に包まれているデストロイヤーを見やる。

「……アレが、来るんですよね。この門よりも大きいデストロイヤー

が

「ああ、そうだな。私たちはやるべき事をするだけだ。伝説を作るんだ。そうだろう？ 爆裂魔法の申し子たる紅魔族の秘密兵器めぐみん」「そんな呼ばれ方したの初めてなんですけど……。ま、そうですね。いつちよやったりしましょう！ 私とおんおんとならできます！ デュストロイヤーにだって勝てるんです！」

「ああ、その意気だめぐみん」

しれつとウイズさんが省かれた気がするがまあいいか。

反対側の塔に居るウイズさんには聞こえてはいないだろうし。

と言うよりも、アクアさんに浄化され掛かってカズマくんに助けられているし、尚更に此方に意識を向けるのは無理だろう。

……。いや、なんでこんな場面でもアクアさん浄化しに行ったんだ。貴女結界破りのために其方に行ったんでしょように。

呆れて普段通りだなと苦笑していると、私の胸元に顔を埋めるようにめぐみんが抱き締めてきた。

小刻みに震えている身体を抱き締め返し、頭を撫でてやる。

まあ、めぐみんはまだ十三歳の子供だからな。そもそもこうして主役に担ぎ上げられるのがおかしい状況なのだ。

と、言ってもこの世界は弱肉強食だ。

幼いからと言って力を発揮すべきステージから降りる事はできない。い。

自分の身は自分で守る。それが冒険者の鉄則なのだから。

だから、心だけは大人な私がめぐみんの恐怖を受け止めて慰めてやらねばならない。

そして、冒険者の仲間として困難に立ち向かえと言ってやらねばならない。

「……はふう、おんおんをキメたら心が落ち着いてきました」

「ふふっ、これぐらいで良いならいつでも構わないさ」

「ねえ、おんおん」

「ん？ 何だ？」

「もしも、デュストロイヤーを倒したら言いたい事があるんです。時間

を貰っても良いですか？」

めぐみんは勇気を振り絞った表情でそんな事を宣った。

……あの、めぐみん？ 死亡フラグ立てないで欲しいかなあって……。

ああ、うん、茶化す場面じゃないよな。けど、ううん、何となくではあるが内容に予想がつくんだよなあ。

そっかあ、男っ気が無かった理由それかあ……。

これは、暴露大会を計画しなきゃならないだろうか。

いや、ほんとどうしよう。……嫌われたりしないだろうか。

「ああ、勿論だ。そのためにも無傷でデストロイヤーを倒さなきゃな」

「……っ！ そうですね！ うおおお！ 勝ちますよ！ 勝つに決

まってるじゃないですか！ 私とおんおんとなら楽勝です！」

「……そうだな。それじゃ、準備を始めようか。後十数分あるかないかぐらいだろうしな」

私の言葉に振り返っためぐみんは目撃した事だろう。

平原地帯に突入し、よりくつきりと見えたデストロイヤーの全貌が。

お気に入りの杖をぎゅっと握り締めて、デストロイヤーに向けためぐみんの背中に手を当てて魔力を全力で譲渡する。

灰エスト瓶を飲み干し、めぐみんの過充填も済んだので私も準備を始めるべくソウルからストームルーラーを取り出す。

めぐみんの隣に立ち、ストームルーラーを上段に構えて戦技を繰り出すために準備を始める。

「折れし巨人殺しの剣よ、嵐を纏いて我が敵を打ち倒さん。【戦技：嵐の王】」

少しでもめぐみんのテンションを上げるために小っ恥ずかしい詠唱をキメる。

案の定、隣のめぐみんは瞳を紅く輝かせてノリノリでオリジナルの詠唱を始めた。

……いや、その、収束まで時間掛かりそうだから早めに発動してるんだよね。

ストームルーラーの戦技は、溜めと発射の二段階だからさ……。まあ、いいか。いつでも放てる状況にしておいて損は無いだろうしな。

周辺の風を吸い込むようにして徐々に収束を始めたストームルーラー。私は収束が完了するまで気を抜く事が出来ないくらいに追い込まれていた。

これ、非常に重い。けど、下ろす訳にもいかなないので意地と根性で上段に構え続ける。

……こつそりと下ろせないだろうか、収束が進むに連れて重さと言うか振り回されそうになるんだが。

ゲームだと数十秒の感覚だが、現実となると担い手の技量も加味されるらしい。

二分程時間を掛けてその身に嵐を内包したストームルーラーが唸りを潜め、満足したと言わんばかりに大人しくなった。

小さく溜息を吐き、デストロイヤーの迎撃に合わせるまでは、切っ先を地面に下ろして柄尻に掌を重ねる仁王立ちスタイルで休憩する。

側から見れば騎士団長がやりそうな威厳ある格好なのだが、ストームルーラーが大きいので顔に柄尻が来るんだよね……。

身長もう少し欲しかったなあ。最近伸びる気配が無いんだよなあ……。

「そろそろ、ですね」

「ああ、大丈夫そうか？」

「勿論です。おんおんから魔力を供給して貰ったので正直オーバーロード気味なくらいですからね」

「それは頼もしいな。……デストロイヤーと言う名前は正しくって感じだな。塔に登ってなければ首を痛めてたかもしれん」

「あはは、そうかもですね。私の華麗なる爆裂魔法によって見下ろす姿に変えてやりますとも！」

胸を張って吼えるめぐみに頷きを返し、ストームルーラーを下段に構え、上段に移行できるように準備をしておく。

反対側の塔に立つアクアさんが花卉を模した杖をデストロイヤー

に向けて構え、作戦実行まで秒読みと言った様子で緊張感が漂い始めた。

カズマくんが此方を、特にめぐみんを心配そうに見遣ったが、気概を見せている様子に安心したのか息を吐いていた。

魔導の資質の高い紅魔族、しかも爆裂魔法にのみポイントを注いだ挙句に魔力の過充填済み。このアクセルにおいて追隨を許さない威力を発揮するメイン砲台たるめぐみんがビビってたら様にならないもんな。

私と視線が合い、頷いたのを機にカズマくんが赤の手旗を真上に上げた。さあ、作戦実行だ。

デストロイヤーをデストロイする時間だ、理不尽を打倒して平和な日常を取り戻してやる……！

25話

……嘘だ、こんな、結末があつて良い訳が無い。

白い霧が晴れたその場所には何も無かつた。デストロイヤーの残骸も、確かにあそこに居たおんおんさんの姿も無い。

やけに熱い風がからからに枯れた喉を焼くように、ひゅうひゅうとか細い吐息が時折引き付いた。

無かつた、何も。確かにデストロイヤーの進む先は何もかもが、いや、アクシズ教徒は残るらしい、あつ、おんおんさんはアクシズ教の特別外部顧問だつた、筈だ、何で、何で居ないんだ。

ぜひゆぜひゆと気持ちの悪い音が聞こえる。それは俺の口から発せられていて、段々と気持ち悪さに吐き気が込み上がってくる。

目の前の光景を知覚したくない。

草原だつた筈のそこは、熱波の余波で荒野の荒れ地の如く酷い有様だ。

ただ、ただ一人で白い霧の内側に居たおんおんさんも恐らくきつとー。

「おえっ、げぼ、お、ええ……！」

爆炎に巻き込まれたその最期をフラッシュバックしてその場で吐き出した。

此方を振り返らずにその小さくも大きく見えた背中が灰の様に焦げ散る様を、Windowsのエラーのように脳裏に何度も、何度も張り出されるように思い出してしまふ。

内側から朝に食べたものを全て吐き出したのに楽にならない。

嫌だ、こんな、こんな最期あつてたまるか。

おんおんさんは俺たちを護るために死んだんだ。

めぐみんの慟哭が聞こえる。ああ、そうだよな。

一番仲が良かったもんな。そりゃ、泣くさ。

何も無い場所に縋り付くように、指が傷付く事も厭わずに地面を掘り返そうと必死になるめぐみんの姿があつた。

「嘘です、おんおんは死んだりしてません。きつと穴を掘って逃げた

んです。だから大丈夫なんです。死んでません。死んでなんかいません。探さなきや。今頃大変な思いをしている筈です。探さなきや。何処ですか。おんおん。まだ、私、好きだって伝えてないんです。ねえ、おんおん。おんおん。何処。此処。違う。死んで無い。其処。違う。違う違う違う……っ！ 死んでなんか、無いんです。おんおんはいつだって私の傍に居てくれるんです。そう、これからもずっと。ずっと、ずっと、ずっとずっとずっとずっとずっと、一緒なんですから」

正気に返ったゆんゆんが止めても、それを振り払うようにめぐみんは発狂し続けた。

あんなに普段は騒がしいアクアもだんまりを決めていて、現実を受け入れられないのか首を捻って何かを考えているようだった。

そういえば、ダクネスはどうした。最近おんおんさんと物理的に近かった彼女は怎么样了。

今の俺は正気じゃない。誰かの姿を見て、反応を見て、冷静になろうとパズルのピースを探していた。

吐瀉物塗れの地面から離れるように力無く立ち上がる。

振り返ってみれば、そこには珍妙な反応をするダクネスが居た。

悲しんでいる訳でもなく、苦しんでいる訳でもなく、そういう事かーと何かに納得している様子だった。

剣を握っていない左手は首筋に向かっていて、何かを撫でるような動作を繰り返していた。

「ダクネス？」

「ん、ああ、気分は大丈夫かカズマ」

だなんて暢気な言葉を吐いたダクネスを信じられないモノを見た心地で見やる。

ダクネスは剣を鞘に仕舞い込み、めぐみんの方を見て深い溜息を吐いた。

「まったく……、おんおんめ。ちゃんと伝えてなかったのか。嬉しさと申し訳なきが混在した気分だ、はあ……」

あつ、ちげえわ。目の前の現実を受け入れてないだけだわ、これ。

明らかにダクネスは錯乱しているようだった。

おんおんさんが死んだ事を頭から追い出して空想のおんおんさんを見ているようだ。

ほんと、どうしてこうなっちゃったんだろうな。

俺は何を間違えたんだ。

もしかしたら、あの時赤旗を上げたタイミングが悪かったのだろうか。

俺は問題点を探すために、先程までの事を思い返した。

○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×
×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×

目の前に迫る八脚の巨大機械蜘蛛、機動要塞デストロイヤーを睨み付けてタイミングを図る。

おんおんさんを見遣れば此方に頷くように視線を合わせてくれた。

当初は拡声器による指示の予定だったが、デストロイヤーが進路を変える可能性を考えて赤旗による原始的な信号を取る事になった。

白旗を振るのは縁起が悪く、此方の秘密兵器爆裂娘にあやかつて赤旗を振るう事になったんだっけな。

作戦の予定距離に差し掛かったのを見て、俺は赤旗を高らかに上げた。

やべっ、少し速かったか？ 遅かったかもしれない。

そんな俺の内心の焦りを置いて、状況が進み出す。

「来たわね、デストロイヤー！ 喰らいなさいっ、これぞ必殺の『セイクリッド・スペルブレイク』ッ!!」

いや、それ殺傷能力皆無だろうが。

そんな阿呆な様子とは打って変わって、花卉を模したお気に入りらしい杖から神々しい純白混じりの蒼色の光線が発射された。

虚空を貫き、デストロイヤーの近くで何かにぶつかった光線。あれが噂の魔法を防ぐ結界か！

だが、アクアも黙って弾かれるのを良しとはしなかった。

「んあああああああああ!! んにやあアアアアア!!」

女神パワー全開!! とでも言っておけば様になったであろう気の抜ける気合いの叫び声により、力を込めたその一撃がデストロイヤーの結界を砕いた音を誰もが聞いた。

第一フェーズの成功に全員の士気が上がる。

無敵と称された古代の結界が砕かれた事で零に等しかった成功確率が上がったからだ。

続く第二フェーズ。アクセル正門の左右の塔に立つ二人が杖を掲げ、デストロイヤーへと先端を向けた。

瞬間、二つの巨大な魔法陣が空中に浮かび、実は大魔道士なウィズのとそれと同等なめぐみんの爆裂魔法の準備が完了する。

いつの間実力を上げたんだ、と思ったが魔法陣がチカチカと点滅して自己主張を始めた事でおんおんさんによる魔力供給によって強化されたものと理解した。

あれは暴走し掛けているのを押し留めているから起きる現象らしく、前に合体技と称して練習もといイチャついていたので覚えてい

る。
おんおんさんは受け渡す事に限定するが魔力の譲渡ができるらしく、親しい間柄であればほぼ百パーセント渡せるとの事だった。

電力で言う電圧みたいな概念が魔力にもあるらしく、親しい事で魔力の波長を知っているからこそ無駄なく譲渡できているらしい。

試しに俺に渡して貰った時は三割くらいしか上手く渡らなかつた事もあり、仲間内、と言うよりもおんおんさんの身内限定な技術っぽいな。

「行きます! 『エクスプロージョン!』」

「これが私の全力全開です! 『エクスプロージョン』ッ!!」

ウィズとめぐみんの気合いの入った詠唱により、紅い魔法陣に導かれるように杖の先へと魔力が収束していく。

めぐみんに囁くようにしておんおんさんが何かしら助言すると、普段足元に展開されていた魔法陣が杖先に重なるようにして再展開され、魔力の密度が遥かに増した。

「す、凄いですね。この土壇場で収束魔法式に転換するだなんて……！」

「ウイズ、今なんて？」

「後で詳しく説明しますが、魔法には拡散型とか収束型とか魔法の型があるんです。資質が無いと出来ない魔法技術でして、めぐみんさんはそれを才能と感覚で成功させたんですよ！あの収束された爆裂魔法は私の魔力任せのこれと同等の威力がありますよ！」

「お、おう」

何それ、そんなんあつたのか。と言うか、収束して同等ってどんだけ魔力あるんだよウイズ……。

言いたい事は言ったという感じでウイズが爆裂魔法を解き放つと右側面の脚を軒並み粉碎して吹っ飛ばした。

一秒程度の遅れでめぐみんの爆裂魔法が解き放たれ、アクセルの紅い悪魔だなんて呼び名がされそうな一筋の砲撃が虚空を切り裂いて左側面の脚を焼却した。

それ本当に爆裂魔法か？ スカーレットブレイカーとか名前付いてないか？

撃った本人はポカンと口を開いて嬉しそうな、けれども物足りなさそうな表情を浮かべていた。

まあ、爆裂って感じじゃなかったしな。

そう苦笑していたら、真打登場と言わんばかりにおんおんさんの威圧感が肌で感じられるくらいに高まっているのに気付いた。

「戦技解放——ストオームルーラーアツ!!」

真剣な表情で巨大な折れた大剣を上段に構え、最前線に居るダクネスへと地面を削りながら滑り近づくデストロイヤーを睨み付けて振り下ろした。

瞬間、音が途絶えたかの様に空気が破裂し、嵐を纏った斬撃がデストロイヤーへと叩き付けられた。

風の悲鳴のような音が聞こえたかと思えば、デストロイヤーの頭部に当たる壁が粉碎され、転がって来ていた方向とは真逆に吹き飛んでいた。

その壮絶な一撃に皆ポカンと口を開いておんおんさんの成した光景に見惚れていた。

正しくアクセルが誇る英雄、残心を解いたその姿を誰もが目に焼き付けた。

「第三フェーズ！ 総員、デストロイヤーを破壊しろ!!」

「「「うおおおおお!!」」」

ギルド職員が持つてきた魔導拡声器を受け取ったおんおんさんの気合いの入った指示に、前線に居た冒険者たちの雄叫びと言う返しが草原に響く。

最前線に彼らの盾として待機していたダクネスが肩を竦めているように見えたが、ゆんゆんを伴ってデストロイヤーへの一番槍になるべく走り出していた。

……ダクネス、お前止まった敵にも当てられない運動音痴だろうに。

まあゆんゆんの護衛みたいなものと思えば良いか。

「さあ、カズマ！ 私たちもデストロイヤーに乗り込むわよ！」

「ああ、そうだな。一時はどうなるかと思っただが上手く行って良かったぜ、本当に」

「当たり前じゃない、私と言う勝利の女神が居るんだから！」

「……はいはい、そう言うのは自分で言わない方が良い奴だからな……。まあ、あながち間違っではないか。アクアが結界を壊さなきゃ俺たち挽肉だっただろうし」

「ふふん、カズマも私の価値に漸く気付いたようね」

「……まあ、なんだかんだで頼りにしてるよ、お前を連れて来て正解だったわ」

「……ふえ？」

素っ頓狂な声色で驚きを露わにしていたアクアは、なんか一丁前に照れて顔を赤らめていた。

何気に普段は感謝を伝えてなかったから丁度良い機会だったんだと思う。

小っ恥ずかしい気分になり、視線を外す。

恥つず……っ!!

正直に言えばアクアが隣に居てくれて、賑やかしてくれていたから転生の一人寂しきなどを誤魔化せていたんだと思うんだよな。

皮肉な事にミツルギの一件が今の俺を意識させていた。

あいつにアクアを諦めさせようと幾つかの悪い所を羅列したものの、まあそれぐらいだしなあと擁護しようとする自分が居た訳で。

なんだかんだでこのバ可愛いポンコツ駄女神を嫌いになれないんだよなあ。

「……………」

照れ臭さから頬をかいた時に、ニコニコしながら微笑ましいものを見る瞳で俺たちを見ていたウイズと目線が合ってしまった。

恥つず、そうじゃんアクアと二人じゃねーわ。

つい普段のノリで会話しちまってたが、今デストロイヤーと戦ってたわ。

色々と現状を思い出した俺はデストロイヤーに向けて親指を立ててジェスチャーした。

それを見たアクアがハツとした様子で杖を掴み直し、力強く頷いた。

先程の雰囲気霧散させるべく、アイコンタクトで俺とアクアは塔を降り始めた。

下に辿り着くと、若干疲れた様子で角の生えた格好良い馬に乗ろうとしていたおんおんさんとめぐみんと合流できた。

「おや、束の間の逢瀬はもう良いのかい？」

「ごふっ、み、見てたんすか？」

「二人して顔を赤らめていたから何かしらあったんだろうなとカマを掛けただけだよ。仲良しは良き事かなってね。まあ、取り敢えず先に行ってるから、ごゆっくり」

「あ、あの!! 何か誤解されてませんか？」

トレントとか言った馬に乗ったおんおんさんに詰め寄ると、ふふつと笑みを浮かべて俺とアクアを見遣って言った。

「そうか? 普段の様子からして君らの性格的な相性は良いものだ」と

思っていたんだが。普通、一ヶ月も馬小屋で同棲できる男女は兄妹を除いて居ないだろうよ。ふとした事から破綻して喧嘩別れでもする筈さ。お互いに何かしら好意を抱いてない限りはね」

だなんて特大の爆弾発言をしておんおんさんはくったりするめぐみんを連れてデストロイヤーに向かってしまった。

あの、この空気どうしたら良いですかね。

隣で顔を真っ赤に染めて両手で覆い隠したアクアが居るんですが。ついでに俺も顔を隠して良いだろうか、顔があっついんだけど……。

暫く二人してとぼとぼとデストロイヤーの残骸まで無言で歩いて行った。

くそう、何で俺はアクアにこんなに意識してんだ。と言うかこいつもこいつだ。

何で普段の煽りマウントじゃなくて可愛い乙女してんだよ、調子狂うわ……！

デストロイヤーだったものに近付くと背中に張り付いていたらしいゴーレムと戦っている冒険者たちの姿があった。

「だらっしゅあ!! お? カズマじゃねえか、おんおんさんたちはもう中に行つたぜ、お前も早く行きな!」

「お、おう。良いのか? 美味しいところ取りじゃねえの?」

「はあ? 何言ってやがるんだ、お前のパーティが居なけりや俺たち全員デストロイヤーにデストロイされてただろうが。俺たちはこうしてお溢れを拾うから良いんだよ。今回はそういう役回りなのさ!」

そうゴーレムの頭を蹴っ飛ばしたテイラーがニヒルに笑った。

……まあ、こいつらがアクセルに残ってる理由が理由だしな。棚ぼたみたいなものか。

テイラーの言葉に気を使う気が無くなったので、未だに無言なアクアを連れて亀裂の入った壁から中へと侵入する。

うっわ、結構奥まで切り裂いてんだな。一番奥の方に眩い光が見え、誰かが居るのが見えたので其方に向かう。

……途中で足元を見ていなかったアクアが躓いたのでフォローし

つつ、俺たちは神妙な顔持ちのおんおんさんたちと合流できたのだつた。

「何かあったんですか？」

「ん、カズマくんか。まあ、なんだ。これを読めば分かるさ、今の私の気持ちだ」

おんおんさんが何処か疲れた様子でぼろぼろな本を手渡して来たのでそれを受け取り、アクアと一緒に中を読み進めて……心情を察した。

玉座のような所に座り込む白骨死体を見遣り、こいつのせいでこんな糞面倒な事に巻き込まれたのかと呆れと怒りを覚えた。

今のデストロイヤーは機関部が暴走しており、排熱が効かずに熱を貯め込んでいるらしい。

そんな旨のアナウンスがデストロイヤー周辺に響き渡っており、ゴーレムをしばいていた冒険者たちもぞろぞろと逃げ出している最中のようなだった。

まあ、此処にはおんおんさんが居るからな。誰もが皆なんとかしてくれるだろうと言う精神なのだろう。

難しい表情をしているおんおんさんが原因であるコロナタイトが収まった機関部を見つめている。

「うむ、どうしたものかな。流石に壊して取り出すのは無理だろうし、手段がなあ……」

「やっぱり壊すとまずいですかね」

「……私だけなら問題無いが、皆が危ないからな」

「あ、それならこう言うのはどうですか？ 『ステイール』」

俺は何となく思いついた案を実際にやってみる。この近距離なら移動させられる筈——瞬間、俺の差し伸ばした腕をおんおんさんが蹴っ飛ばした。

一体何を、そうひりつく右腕を摩りながらおんおんさんを見やる前に足元から凄まじい熱気に襲われその場を離れる。

「……はあ。熱暴走を引き起こしているぐらい高熱を放っているんだぞ。そのまま触れてたら手がこんがりを通り過ぎて焦げていただろ

うよ」

「あ、ありがとうございます……」

「発想自体は良かったから次は一度言葉にしてくれ」

「……はい、すみません」

肩を竦めたおんおんさんがコロナタイトへ手を翳すとあれ程までに熱気を放っていた原因が何処かへと消え失せていた。

テレポート？ いや、そう言う素振りはしてなかったな。

「危ないが有用性は高いから私が預かっておくよ。インベントリに仕舞い込めば何の問題は無いしな」

「おお、いつも言ってるソウルに仕舞い込む、でしたか。便利ですよね、それ。私も使えたりしませんか？」

「いやあ、無理じゃないか？ 似たような事は出来るかもしれないが、空間魔法的な奴の応用でなら？」

「あ、じゃあ要らないです。おんおんが居れば問題無いですしね！」

流石めぐみん、爆裂魔法にしか興味無いからそれ以外の魔法は取る気が無いらしい。

さて、これにて一件落着か、そう安堵の息を吐いた時だった。

近くにあったパイプが破裂して高温の蒸気を吐き出し始めたのは。

甲高い音を立ててどんどんと連鎖していくように破裂箇所が増えていくのを俺たちは青褪めた表情で眺めていた。

いち早く正気に返ったおんおんさんの脱出の一言で俺たちは一目散に亀裂から外へと飛び出したのだった。

「うわあ、あのまま居たら火傷じゃすまない感じになってましたね」

「この前食べた蟹さんみたいになっちゃうところだったね」

「いや、それより酷いでしょう。と言うか本当に蟹みたいに赤くなってるんですけど!?!」

めぐみんの悲鳴に残っていた冒険者たちの表情が段々と悪くなつていき、一人逃げ出したのを機に雪崩れるように撤収を始めた。

赤熱化し、辺り一面に蒸気を吹き出し始めたデストロイヤーをおんおんさんは一人、前に出て見つめていた。

「こ、このままあれをそのままにして良いんですか?!」

「いや、爆裂より酷い事になるだろ確実に……!!」

「そ、そうだ！ なら爆裂魔法で相殺すれば！」

「……相殺のタイミングが分からないだろう。早ければ乗算的に被害が増えて、遅ければ諸共ドカンだ」

「だったらどうすりやいいんだ！ そうだアクア！ 女神式封印術で何とかしてくれ！」

「漫画やゲームのし過ぎよカズマ！ そんな便利なもの持ってないわよ！」

「……封印、か。それ自体はできないが……似たような事はやれなくはないな」

おんおんさんの言葉に全員の視線が集まる。流石おんおんさんだ！ 略してさすおん！

一步二歩とおんおんさんが前に出てデストロイヤーに近付いていく。

その小さな背中が大きく見えるのはいつもの事だが、何故だろう、沸々と嫌な予感がしてくるのは。

後ろ姿で顔の見えないおんおんさんが離れていくに連れて、その姿が遠くに行ってしまう感覚が沸き上がって来る。

それはめぐみんも同じだったようで震える手をそつと伸ばしていた。

「まあ、この辺りで良いだろう。これなら——巻き込まない」

そうおんおんさんが独り言を呟くようにして自嘲気味に言った。

嫌な予感が警鐘を鳴らすように最大になり、思わず掛け出そうとした矢先の事だった。

俺たちとおんおんさんを塞ぐように白い霧がぼんやりと立ち上がり、デストロイヤーの残骸を中心に円状に展開されたそれはまるで境界のようだった。

「ああ、げほっ、チツ、やつぱり無理があったか。こう言う無理矢理の展開は身を削るのか、折角貯めたソウルが大半吹っ飛んだな……」

びちやりと液体が地面に零れた音が聞こえ、何処か喋り辛そうにするおんおんさん。

その姿は白い霧の結界に遮られ全貌が見えない。……遮られる？
おんおんさんの立ち位置を見て、俺は、いや、俺たち全員が気付いて目を見開いた。

めぐみんが結界の内側に居るおんおんさんを連れ出そうと白い霧の結界に近付くが、物理的な移動を封じているのか触れられても入る事ができなかつた。

白い霧にその小さな拳を必死に叩き付けるめぐみんを止めようとゆんゆんが近付く。

「そんな！ 冗談でしょうおんおん！ なんでそっちに居るんですか！ 出ないと巻き込まれてしまいますよ!!」

「……すまないな、めぐみん、この結界は私とその同類、敵しか入れない必殺空間でね。敵が死ぬまで張り続けられる代物なんだ。まあ、今はちゃんとした発動じゃなくて、無理矢理使つていと言うのが正解なんだけどな。ごほっ」

「おんおん!? まさか、そのまま死ぬつもりなんですか!? 私たちを守るためにこの結界を張つて!」

めぐみんの叫びに俺たちはもうどうにもならない事を理解してしまった。

おんおんさんは街と俺たちへの被害を出さないためにその身を以つてデストロイヤーの爆発を封じ込めるつもりのようなのだ。

近付こうにも白い霧の結界で入れず、おんおんさんの意思が無い限り外に出る事もできないのだろう。

俺は、何もできなかった。おんおんさんを救うための術を何も持ち合わせていなかった。

そして、俺たちの嘆きを嘲笑うようにデストロイヤーは甲高い音を立てて――。

「まあ、先に――」

何かを伝えようとしたおんおんさんだったが、それよりも先にデストロイヤーから発せられた赤い光に巻き込まれ、白い霧の結界の中が何も見えなくなつた。

それを間近で見えていただろうめぐみん的心情を俺は嫌でも察する

事ができた。

回避不能な絶望を俺たちは味わわせられたのだから。

○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×
×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×○×

その惨劇を思い返していた俺だったが何が悪かったのか何も分
らなかつた。

今や茫然自失で死んだ目でおんおんさんの名前を呟いているめぐ
みんを何故か元気なダクネスが担ぎ上げ、屋敷へと向かうその背を俺
たちは無気力に追う事しかできなかつた。

「……ねえ、ダクネス。一ついいかしら?」

「なんだアクア。答えられる事なら答えよう」

「もしかしておんおんちゃんの特典の内容を知ってるの?」

「ふむ、詳しくは聞いていないが概ね、と言ったところか」

「だから、そんなに明るいのかしら」

「まあ、そうなるな。別に私は正気を失っている訳ではないぞ。むしろ、仲の良いめぐみんに伝えてない方が驚きだったんだ。まあ、屋敷に戻れば分かるだろう。私の言葉よりもその方が分かりやすいだろうしな」

「そうだ、俺はまだおんおんさんの転生特典を教えて貰ってなかつた。」

「少しだけ希望が見えて来た。下を向いていた視線が上がって、虚空を見ているめぐみんの虚無の瞳を見てしまって少しSAN値が削れたが。」

広場の方へと俺たちは足を進めていく、屋敷まではもう少しだ。

戦勝ムードな街中の雰囲気とは打って変わった俺たちの様子に、誰もが困惑して声を落としていく。

何せ、アクセルの英雄であるおんおんさんが居ないのだ。そのパーテイメンバーである俺たちが暗い雰囲気をしている事もあって何かしらの事があつたのだと理解してしまったのだろう。

そして、何よりもめぐみんのやばい雰囲気にも誰もが困惑を露わにしていた。

まあ、アクセル随一の爆裂娘が自暴自棄の茫然自失で瞳孔が開いた瞳で何かを呟いている姿は一種のホラーだろう。

街の外れへと歩いて行き、俺たちはおんおんさんの屋敷へと辿り着いた。

勝手知ったる我が家のように正門を抜けて、玄関へと手を掛けて――

「おお、おかえり。すまないな、先に戻ってたぞ」

開いたエントランスに元気な様子のおんおんさんが立っていた。

足を見てちゃんとあるのを確認した俺は目の前の人物が生きている事を認識できて――涙を零した。

十人十色な俺たちの様子にきよとんと困惑した表情を浮かべたおんおんさんは小首を傾げていた。

そして、合点がいったと言わんばかりに手を打ち鳴らして暢気に言った。

「ああ、そう言えば私が不死だって伝えてなかったな。それはすまない事をした。私は例え死んでも生き返るからこれからは心配しなくて大丈夫だからな」

「とぅういっうこつてすかッ!？」

「うごあつ!? め、めぐみん? 急にタツクルだなんて危ないだろう」

「うゝあゝわゝあゝあゝあゝあゝあゝん!! いゝきゝてゝよゝかゝつたゝてゝす!!」

「お、おう。前に言っただろう、それはきつとどうしようもない程に残酷で、目を逸らしたくなるような出来事がきつかけで分かるだろう、つて。ああ、うん。私が悪かった。ちよつと悪戯が過ぎたな、うん、ごめんよ、よしよし、気が済むまで泣いていいからな、よしよし」

おんおんさんを視界に入れた事で再起動しためぐみんがホームिंग生肉よろしくおんおんさんにぶつかるように抱き着いていた。

めぐみんの言動に驚愕して固まっていた俺はおんおんさんの言葉

を噛み締めるように脳裏で反復していた。

ふ、不死？ 死なないって言った？ 誰が？ おんおんさんが？
死んでも生き返るって？

安堵と緊張の糸が切れた事で俺は思わず膝を落としてから座り込んでいた。

嬉しいのだが、目の前の現実がファンタジー過ぎて全く以って呑み込めなかった。

まるで粉っぽい薬剤を唾液で飲んでいるかのような気分だった。全然飲み込めねえ。

と言うかこれを知っていたからダクネスは余裕かましてたのか。

「まあ、そういう事だ。それを踏まえて関係を築いているからな」

俺の視線から内容を察したのかダクネスはそんな風に宣って豊満な胸を張った。

くっ、俺の知らないおんおんさんを知っているからって良い気になるなよダクネスう!!

何処かのミツルギもこんな気分だったのだろうか、次あったらもう少しだけ優しくしてやるか。

そんな事を考えながら俺は酷く疲れた身体から力を抜いて大きく溜息を吐いた。

……まあ、おんおんさんが生きていてくれて本当に良かった。本当に……良かった。

号泣めぐみんに縋りつかれているおんおんさんの困った様子を見て俺は安堵の息を吐いたのだった。

26話

……ううむ、最初の一乙くらいは劇的にしておこうだなんて考えていたのが仇となったか。

ギャン泣きするめぐみんを胸に抱えて頭を撫でて宥めて、お通夜ムードだったカズマくんたちの様子からしてやり過ぎた事を悟った私は少しだけ反省していた。

いやまあ、普通に考えれば目の前で知り合いが焼却されたとかショッキング映像不可避だよな。

今は場所を移し、リビングの方で各々がくつろぐ形で安息を取っている。

そう記念すべき第一回不死人危機一髪（即死部門）のお披露目が誠に残念な結果になってしまった事もあって色々な説明をする場を設ける形で反省を促されているのだった。

暖炉の前に集まる各々に飲み物が行き渡ったので、熱い視線も受けている事もあって語り始めるべきなんだろうなあ。

「あー……、その、なんだ。私はかつて過労死した身体で転生したくなかったから、担当に無理を言っただけ転生する際に特典を貰った所謂勇者候補なんだ。勇者候補は一つだけ転生する際に特典を貰えるのだが、私はこれ、右瞳に浮かぶ黒い輪を貰った。名称はダークリング。不死人と呼ばれる死んでも篝火から生き返る事の出来る存在になると言うものだな。不死人にも色々種類はあるが、まあ、私の場合はデメリットが一番少ない不死人のタイプと言っておこうか」

ダクソ3の仕様なので暗い穴と呼ばれる特殊アイテムが無ければ私は亡者化する事は無い。

ただ、従来通り死んだ場所にソウルを落とす事もあってソウル渴望症を引き起こす可能性が非常に高い事が今回の件で分かった。

屋敷に戻ってから一部のソウルを除いて只管に砕き続ける作業を行なって漸く正気に返れたからな。

最低でもソウルは三千は無いと飢えを感じるらしく、アンナを見かけて美味しそうだと思ってしまうくらいには正気度と言うか人間

性が削られるようだった。

今回はデストロイヤーからはソウルを得られなかった事もあり、相打ちとはならずソウルを全て落とす状態に帰る羽目になったのが要因だろうな。

……まあ、そもそも残り火が無いからデフォで灰状態なんだよなあ私。

「で、だ。この屋敷の中庭に差ししてある螺旋状の剣が燃えているのがあるんだが、あそこが私の復活ポイントになっている。あれを篝火と私は呼んでいるよ。私は篝火を通じて復活し、また行き来もできる。時折アルカンレティアに出張している時はこれでこっそり行つて戻つて来てたりしてたぞ」

これも今の内にばらしておくべきだろうな。逆説的にこの篝火さえあれば私は復活できる、と言っているようなものなのだから。

頭の良いめぐみんは私の太ももに頭を乗せてごろにやんしていながらも理解を示し、少しだけ瞳を赤くした事から何かしらの興奮を抱いたらしい。

まあ篝火移動は不死人の特権のようなもので皆で移動するたぬにいつかレポートは取得するけどな。

……ぶつちやけ語る事なんて少ないんだよな、単に私は死んでも死なない特殊な呪術魔法を扱えるだけの紅魔族の小娘でしかないのだから。

「……んで」

「ん？」

「なんで、ダクネスは知ってたんですか？」

「そ、それはだな……」

ああ、うん。そういや明かして無かったな。

んー、どうしよう。この世界の常識的に同性の恋人はマイノリティなんだよなあ。

伝えるべきか？ でもなあ、嫌われたくないしなあ。

気持ち悪いです、だなんて言われたら心が抉られるぞ私は。

踏ん切りの付かない私は眼下のめぐみんからの視線から逸らすよ

うに虚空に向ける。

ああ、だがあの時のめぐみんの様子からして伝えたい内容がもしかしたら、だなんて事を考えるチキンな私の心情を察してか、意を決した様子でダクネスさんが口を開いた。

「それは、私とおんおんが恋仲だからだ」

「……ダクネス」

「私からおんおんに想いを伝え、それを受け入れて貰った。その時におんおんが教えてくれたんだ。私は、いつかおんおんを置いて先に死ぬだろう。けれど、それでも私はおんおんの事を想っている。愛している」

やだ、このダクネスさんイケメン……。

思わずトウUNKする程に気持ちを吐露するダクネスさんは格好良かった。

私の太腿に縫り付いていためぐみんが起き上がり、ダクネスさんを睨むようにして見つめた後、私の顔に触れて唇を押し付けた。

顔を斜めにせず真正面からキスしたせいで鼻先が当たる。私はそれを他人事のように知覚する事が出来なかった。

いや、驚き過ぎて思考が追いつかないだけだった。

唇に瑞々しい感触と端正で可愛い顔が眼前にあって、不意を突かれた私はされるがままだった。

息を呑む音を聞いた事で正気に返るが、振り払う事は出来なかった。

私とめぐみんの唇から銀糸が伸びて顔が離れた。

「おんおんを愛する気持ちは私も負けません！ 七歳の頃から片想いしてたんです、ポツと出のダクネスに負けるもんですか！」

「……へ？ 七歳って初めて出会った頃か？」

「そうです。一目惚れだったんです。爆裂魔法とおんおん、何方かを選べと言われれば、爆裂魔法を捨てるくらいに私はおんおんが好きなんです！ 幼馴染の関係が壊れてしまうのが怖くて言い出せなかったのですが、この際です、この気持ちをちゃんと伝えます！ 好きです、大好きです！ 愛してますおんおん！」

だなんて熱い告白をされてしまった。

……ゆ、夢じゃないよな？ 死んでからまだ復活してなくて都合の良い夢を見ている訳じゃないよな？

こっそりと爪を立てて指を押せば確かに痛みが返ってきた。つまり、これは夢ではなく、現実で……!?

「そうか。確かに横恋慕の様なものだったな。だが、私もおんおんを諦める事はしたくない」

「……良いでしょう。私とておんおんとダクネスの近さを見て理解はしています」

「それは有難いな。正直おんおんの無い生活が考えられないんだ」
「奇遇ですね、私もです」

……あれ？ なんか私を挟んで意気投合しているが、私の意志は？

確かにめぐみんの告白は嬉しいし、断る気は無かったけれども、あれ？

左右からがっしりと腕を掴まれ、左からはダクネスさんのたわわな弾力が、右からはめぐみんの発展途上な素晴らしい柔らかさが押し付けられた。

まるで大きなぬいぐるみを左右から抱きしめたような構図で私は二人に拘束されてしまった。

「あ、あの？ ……まあ、いつか。拗れるよりかはマシか……」

「んふふー、これからはずっと一緒ですよおんおん。お風呂とか寝る時も一緒ですから」

「む、それは魅力的だな。我らが夫を癒やして差し上げなければな」
ぎゅむむにと両腕から伝わる感触が大変宜しい。三人揃って姦しいとはこの事だろうか。

……うん、現実逃避は止めよう。

めぐみんの瞳がやばい。私と違って紅ベースである筈なのにハイライトが仕事をしていないからか黒く濁っているように見える。

恐らく目の前で私が死んだ事で何かしらの精神的な傷を負ったに違い無かった。

親愛な人物の死を目撃した事でSANチェック、失敗からの一時的な発狂……あたりだといいなあ。

絶対に離すものかと言わんばかりに右腕が抱き締められているからな。このままだと鬱血する勢いだ。

まあ、腕が千切れようが痛いだけなので問題は無いが、純粹に締め付け強くて痛いんだけど……。

……はあ、精神的に疲れたからか喉が渴いたな。ダクネスさんに視線をやつて、珈琲の入ったカップを渡して……って何で飲ませようとするんだ手渡せ。

左腕を離す気は無いらしい。諦めてカップに口を付ける。ぐいと飲み干して一息吐く。

……ん？

「おんおん？　どうかしたのか？」

「ああ、いや。……問題無いさ」

渴きが続く。砂漠に水を溢したような、止め処無く求める欲求が鎌首をもたげる。

……そうか、砕いたソウルで得た三千は死ぬ前の許容値。今の私が必要なソウルには足りてなかったのか。

利き腕の右腕を持ち上げようとしてめぐみに妨害され、左腕も同じくダクネスさんに封じられている。

危ない、舌打ちが出掛かった。渴きを癒せぬ身体が、いや、精神が邪魔する者を振り払おうと動き掛けた。

これは……まずいな。ソウル渴望症は魂の飢えだ。空腹を満たそうと意識が移るように、今の私はソウルの飢えを満たそうと考え始めてしまう。

今、私の視界には御馳走が並んでいるかのように見え始めている。

この場で左右の、そして元女神の輝くソウルを喰らえばどれだけ腹が満たせるだろうかと思いが乱れていく。

落ち着け、思い出せ、私はそこまで堕ちてはいない。まだ、人のソウルは喰らつてないんだ。

「……ララ、一度手を離せ」

「わ、分かった」

底冷えした低い声でダクネスさんに命令し、左腕を振り払う。

そして、胸元に開いた掌にソウルから取り出した低級なソウルを乗せて咀嚼するかのようには砕き始めた。

私のしている事の真価が分かるのだろう、目の前で行われているソウル砕きにアクアさんの小さな悲鳴が聞こえた。

今砕いているのはゴブリンなどのモンスターのソウルだ。私とて分かっているんだ。クエスト中に山中で出会った山賊や盗賊などのソウルを砕けばさっさと満たされる事を。

けれど、それをするのは最終手段だ。

人肉の味を覚えた野生動物のように、ヒトのソウルの味を覚えた私は確実に精神に変調を齎す事だろう。

ゴブリンなどの脆弱なソウルを砕き終え、一撃熊などのモンスターのソウルに手を出していく。

飢えが終わらない。渴きが止まらない。

もつと、もつと喰わねばならない。取り出したソウルを砕き続け、漸く五千を越えたところで最低限のラインに達したのだろう。飢餓感が漸く失せた。

「ふうー……、まずいな。またモンスターを乱獲しないと在庫切れになるな……」

「おんおん？　だ、大丈夫か？　恐ろしい雰囲気では何かを砕き始めたから何事かと思ったぞ」

「……すまない。言うなれば不死の代償みたいなものだ。維持するために必要な燃料を焼べていたんだ。初めて死んだからな、その弊害を今知ったんだ」

そう他人事のように淡々と説明した私は内心で安堵していた。

今のが人間性の喪失の第一段階か。飢えたまま殺され続ければ理性を捨てる可能性は非常に高い。

水や食糧を奪われ続けたら、殺してでも奪い取ろうと考えるのは当然だ。そう、手段を選ばず、鬼畜外道の謗りを受けようが、卑劣にして貪欲にソウルを奪おうとするだろう。

……いや、ほんと危なかつたな。これは気軽に死ねないな。ソウルのストックをある程度抱えていないと、周りの誰かを殺しかねないなあ。

アンナに背を押されるまでもなく外に出る理由ができてしまった。

「だ、大丈夫なんですか？」

「……一応、な。屋敷に戻ってから幾らか砕いたんだが、死ぬ度に必要とするソウルの最低ラインが上がるのかもしれない……。我ながら厄介なものを貰ったもんだ」

「えっと、側から見た女神的な視点での話なんだけどね。おんおんちゃんの身体が多分正常に動いてないんだと思うわ。あるべき状態に至ってないから身体が治そうと無理をしているように見えるわ」

「成程、そう言う絡繰りか……。分かりました、でも、今は無理ですね。そもそも、これを直すためのそれが手に入るかすら分からないので」
残り火。それは英雄の残滓にして、私たち火の無い灰が持たぬ故に求め惹かれるものだ。

強大な力を得てその魂を昇華させた英雄の持つソウルから溢れる人間性の火、その零れた火こそが残り火の正体だ。

だが、この世界に英雄はきつと居ない。何せ、人間性が摩耗して擦切るような環境は存在していないし、文化的な営みもこの世界にはちゃんと存在している。

自らを熱した鉄の如く打ち付ける修羅の道を越えてこそ、英雄はその真価を発揮するのだから。

私が長く生きた先に英雄だなんて呼ばれる事があれば、いつか本来の姿になっっているのかもしれないな。

……いや、その火が無い不死人じゃん私。火の無い灰だから他所から貰わねば薪状態になれない訳で。

誰か英雄になつてくれないだろうか、そして、願わくばその火をちよろつと頂けると……。

「……はあ、無い物ねだりをしてても意味が無いな。諦めよう。無理なものは無理だしな。出来る事を考えよう、そちらの方が建設的だ。精神的にも」

「そう言う所がおんおんの良い所だと思えます」

「ただのリアリストなだけけどな」

溜息を吐き、ソファに背を任せる。

何やらあたふたしているアクアさんと何処か納得した面持ちの力ズマくん、そしてめぐみんの告白辺りから動きを止めたゆんゆんの様子に苦笑する。

今後の方針としては『いのちだいじに』だな……。

次死んだ時にどれだけ要求されるか分からないからソウルのストックは増やさないといけない。

……正直この世界のモンスターはソウルの質が悪いから数が無いとしんどい。

ゲームと違って揺れ幅があり、ゴブリンだと三十から六十くらいで下に振れている方が多い。

恐らく長生きして経験を蓄積したものや、ロクブリンのように進化した個体でない限りは期待できない。

野生動物系は割と高い。一撃熊が大体五百前後なのでやはり自然環境でサバイバルしてる奴らは風格が違うのだろうな。

生物的な強さがソウルに直結している可能性は非常に高い。ロクブリンやベルディアなどがこれに該当する。言うなれば小ボスや中ボスだな。

実際にまだ砕いてはいないがネームド級としてソウルに記載されているあたり、相当なソウルが手に入るに違いない。

ただまあ、ベルディアの方は遺灰と鈴の事もあってもう少しだけ研究したので大分後回しになる事だろう。

そんな事を考えているとあつとゆんゆんがやや大きめな声を出し、全員の視線がそちらに向かった。

「えっと、その……おんおんが死んでないって事を伝えた方が良かったも」

「ん？ 何でだ？」

「いや、その、私たち屋敷に帰るまで大分暗い表情をしていたし、めぐみんが現場で泣いてたのも見られてたと思うから。おんおんも前線

に居る筈なのに屋敷に戻っちゃって居なかつた訳だし」

「それも……そうだな？」

よくよく考えてみれば私って敵前逃亡的な扱いをされる可能性があるのか？

いや、流石にそれは無いか。トドメ刺した後だしな。となるとゆんゆんの言う通りに、私が何かしらの原因で死んだと思われる可能性はあるのかもしれない。

そうなる時間が経てば経つ程私の立場が悪くなるな……。

すわアンデッドか!? だなんて勘違いをされかねない。

「そしたら顔出しでもしてくるか。本人が居れば噂も立たないだろうしな」

「それが良いと思います。一応俺らも一緒に行つて明るい顔してた方が良いかもですね」

「よし、では決まりだな。外に出るのだしまだ着替えもしなくて良いだろう。鎧姿のままの方が私たちだと分かりやすいだろうしな」

「そうだな。まあ、爆発直前でテレポートで屋敷に戻つた事にしておこうか。口裏合わせは任せたぞ」

先程よりも良い顔になった五人にふぎけ口調で言えば、ニツと笑つた頼もしい笑顔が返ってきた。

さて、立ち上がるかと腰を上げると、釣られるようにめぐみんが右腕に抱き付いて来た。

左手の指を重ねてちやつかり恋人繋ぎにしているあたり、これを口実に関係を見せつけたいのだろうな。

出掛ける準備をし始めた面々から離れるように先に入り口へと向かい、めぐみんと二人きりになる。

「なあ、めぐみん。私はめぐみんを実の子供の様に思つて今日まで愛でてきた自負がある。それはきつと恋人になりたかつたためめぐみんにはもどかしい思いをさせた事だろう。……すまなかつたな」

「……いえ、私もそう思つてました。我慢ばかりを強いるお母さんよりも、甘やかしてくれて、叱ってくれて、衣食住を見守ってくれたおんおんを母親の様に思つてました。でも、目の前でおんおんが死んだ

時に違うって気付けたんです。私、口にしてたんです。好きだって言ってないって……。私は、おんおんの事を恋愛的な意味で好きです」

先程の勢い任せな告白とは違う、少し冷静に戻って理性的な告白に私は……非常に迷った。

何せ、私には既に想いを受け止めたダクネスさん……、いや、ララと言う恋人が居るのだから。

それにめぐみんは、ガワだけが若い私と違い身体も心も十三歳の幼い少女だ。

一時の感情に流されて恋心を錯覚している可能性は否めない。

実際、私は吊り橋効果的な心の動きがあつたのだろうと疑ってさえいる。

ただ、まあ、個人的な欲望に身を任せるのであればララも肯定的であつた事だし、めぐみんも私の人生に組み込みたい所存ではある。

私とて、好きでもない娘の世話を焼きたいとは思わないのだから。

「めぐみんの気持ちを知れて嬉しいよ。……騙しているような心地がしてきたから今白状するが、私はこの身体、紅魔族のおんおんになる前は男性だったんだ。産まれた時から私は男性の心を持ち合わせていた。めぐみんのお世話は役得でもあつたんだ。……だからこそ、ケジメは付けておくよ」

何処か怯えた表情を浮かべためぐみんと向き直り、本心を語るために瞳を合わせる。

「私にはララ、ダクネスさんと言う恋人が居る。けれど、めぐみんと恋人関係になる事を嬉しく思っている自分が居るんだ。優柔不断な事に私はララを諦めてめぐみんの手を取ると言う選択肢を取りたくない。……二人目の恋人として、ならめぐみんの気持ちを受け止める覚悟がある。……どうかな?」

漫画やアニメのハーレム野郎が煮え切らない様子でのらりくらりと関係が続ける理由がよく分かる。

今の関係を壊したくないが、それはそれとして好いた女の子の気持ち射止めておきたい。

そんな独りよがりな感情が内心で逆巻く。頬を打たれて怒られても仕方ない行為だと自分でも分かっていた。

けれど、そんな内情を吹き飛ばすようにめぐみんは抱き締めていた右腕を解いて、真正面から胸元に顔を落とすように抱き締めてきた。

「……はい。私はダクネスを蹴落とすつもりは無いんです。多分、私だけではおんおんの愛を受け止め切れないでしょうし……。おんおん、隠し切れてると思ってるでしょうけど、時々視線がえっちいです」「えっ!?!」

「お風呂上がりとか、着替えの時とか、私が前屈みになった時とか、その、おんおんの視線が熱くて、気付いちやって……」

めぐみんが耳元に近付いたかと思うと、それと、と前置きしてからこう囁いた。

「や、野生の紅魔」

「グボアっ!?! な、何故それを?! ま、まさか見たのか引き出しを!?!」
「……はい。その、お菓子とか隠したりしてないかなって探した時に、その……、原稿を見てしまいました……」

ま、マジか……。私が野生の紅魔と言うペンネームで書いているのを知られてしまったのか。

やはり鍵を掛けておくべきだったか……。

「だからその、おんおんがダクネスと相性が良いってのは分かっているんです。あのダクネスが最近大人しいのはきつとそう言う事なんですよね? お、大人の階段登っちゃった的な……」

すまん、めぐみん。大人の階段と言うかむしろ落ちる所まで墮ちる下り階段だ。

ただまあ、めぐみんもそう言うのに興味を持つお年頃になっていたのか。

微笑ましいものを見る目でめぐみんの成長を噛み締めていた。

「まあ、ダクネスにおんおんのサディスト面を担当して貰って、私は健全にイチャラブできれば当面は良いかなって……」

「で、本音は?」

「……その、まだそう言うの怖いなあって」

「可愛いなあめぐみん……。初心過ぎてむしろ安心してきた……。」

いつの間にかめぐみんのハイライトが帰って来てくれていたようで、普段の雰囲気に戻っているようだった。

ヤンデレめぐみんは解釈違いなので、いつもの様に可愛く纏わりつく仔猫みたいな愛らしさで居てほしいな。

愛憎劇を回避し、大分ほっこりとした雰囲気でも和やかに終わって良かった。

雑談をしている最中に皆の準備も終えたようで屋敷の前に集まり、ギルドへと向かう。

時折私の姿を見てガッツポーズを決めて喜ぶ人たちの姿があった事から、ゆんゆんの提案を採用して正解のようだった。

「あの小柄なシルエットは……。！」

「おんおんちゃんだ！」

「おんおんちゃんは死なない！ 何度だって生き延びるさ！」

「ほら言っただろ、おんおんさんに限って死ぬ訳無いつて」

「英雄の帰還だ！ 祝えッ！」

いつもに増して騒がしいが、私死亡説が流れていた形跡がちらほらと聞こえる。

手を振られたので振り返してみれば歓声が返ってきたので、内心私の評価が気になり始めた。

なんか歓迎され過ぎじゃないか？ 私の評価が一人歩きしてないかこれ？

首を傾げていると呆れた様子のめぐみんが溜息を吐いて私の耳元に囁いた。

「おんおんって自己評価低いですけど有り得ないですからね。魔王軍幹部の一人を単独撃破、高額賞金首にして災厄の代名詞の爆発を防いだ上でアクセルに被害無しだなんて偉業を成したんですから。噂話とか興味無いでしょうけど、アクセルの英雄って呼ばれますからねおんおんって」

「…………へ？」

「アクセルの英雄、依頼成功の立役者、呪術姫、屋敷主、武魔両道、最

優秀冒険者、酒豪姫とか、色々と呼ばれているみたいですよ。皆おんおんに忖度して面と向かって口にしてないみたいですが、酒の肴におんおんさん、だそうですよ」

……道理で遠巻きからめっちゃ見られてるなあと思ったわ。

てか小さいからって姫は止める、高貴な血は継いでねえわ。

暇潰しに飲んでた時に、彼方のお客様からです、ってクリムゾンピアとか貰うのそれが理由かよ。

気が利く事に焼き鳥もセットで贈られるから最初の一杯以外は貰い物でテーブルが覆い尽くされたんだよな。

勿体無いから全て飲み食いしたけどさあ……。

後期の妊婦みたいに丸くなったからな、もう少し加減してくれ頼むから。

「あ、因みにこのパーティーのリーダーは、本当はおんおんなのですが経験を積ませるためにカズマに代理させてるだなんて噂話もありますよ」

「聞き捨てならない噂を聞いたんだが!? 俺大分頑張ってると思うんだけど!」

「あー……、それね、ベルディアの時にカズマが引率される新入りポジションだったからよ」

「何も言えねえわ、ど真ん中火の玉ストレート級の豪速球でバントすら無理なくらいに妥当な理由だったわ」

がつくりと肩を落としたカズマくんが暗い表情で空虚な笑いを浮かべる。

それを隣に居たゆんゆんが肩を叩いて慰め、遠い目をしながら口を開いた。

「大丈夫ですよカズマさん! 私なんて話題にすら上がらなくなりましたから……」

「おい! めぐみん、どうしてこうなるまで放って置いたんだ!」

「そう言われても困ります。私はおんおん専門なので。と言うかこうしてパーティーに入ってるんですからもうぼっちじゃないでしょうに。なに卑屈になってるんですかゆんゆんは。だからゆんゆんって言わ

れるんですよ貴女」

「私の名前が悪態で使われる時があるの!? 流石にそれは傷付くんだけど!!」

「あー、大丈夫だぞゆんゆん。私が聞く限りそう言う使い方をする人は居ないからな」

ダクネスさんの慰めの言葉にほっと安堵したゆんゆんだったが、何か引つかかるものを感じたのか小首を傾げていた。

……まあ、悪態には使われていないな。一人で過ごしてる事をゆんゆんってるだなんて造語が生まれているらしいけども。

何だよお前、ゆんゆんってんのかよー、みたいな軽いノリで会話のジャブに使われているのを酒場で見た事があるんだよなあ。

このパーティーに参加しているのに関わらず、何故ぼっち根性が抜けてないんだゆんゆんは。

ある意味私の身内みたいなノリが伝播してしまっていたのだろうか。

ゆんゆんは他人との会話はテンパるしどもるし早口になったりするが、家族やめぐみ人などには普通に接している事から人見知りを発症しているに違いなかった。

「ううむ、今度村長修行と称して百人の名前と特徴を知るまで帰れないコミュニケーショントレーニングでもさせてみるか?」

「鬼ですかおんおん。そんなのゆんゆんが突破出来る訳無いじゃないですか、ゆんゆんですよ?」

「それもそうだな。何日も徹夜でゾンビが如くふらふらしかねないな。止めておくか」

「中止は嬉しいけど侮り過ぎじゃないかな!? わ、私だってお喋りできるとだから! 家で練習してるもん!!」

「サボテンに手を出し始めたのはそれが理由だったのか……。この前、夕飯に呼んだ時に虚空と喋ってたのはそれかあ。んー、しゃあねえな、少し手伝ってやるか。どんな奴とも明るくコミュを築けるアリアと人間観察が趣味な俺が今度授業でもしてやるよ」

「ふっ、カズマ。マイナスにマイナスを掛けてもプラスにならないん

ですよ現実はい

「誰がコミュ障元ヒキニートだ!? 今は立派に冒険者してるだろうが！」

カズマくんにあくアさんにゆんゆんでマイナスが三つだから結局マイナスなのは、とは口にせず、和気藹々と談笑する五人を見て笑みを浮かべる。

そうなんだよな、この時間が楽しいんだ私は。この尊い時間を続けるためにもソウルのストックは急務だな。明日辺りから早速クエストに繰り出して頑張ってみようか。

だなんて考えながら、ギルドで私の生還を伝えた後の事だった。

ギルドのざわめきが静まり、変な静寂が生まれた。その発生源は何処かと後ろを見やれば、丁度入口のところに王都から来たのだろう騎士二人を護衛に付けた、黒髪の女性とエリス教徒が着る白い法衣に着飾った男性が立っていた。

そして、男性が此方を視認したかと思えば子供も真つ青な睨み付けを放たれ、此方に敵意を持っている事を隠さない様子でずかずかとその巨体を進めて近寄って来た。

「貴様が今回の立役者にして、彼の悪名高きアクシズ教の特別外部顧問を名乗るおんおんだな? 我らが主たるエリス様の神託に倣い、貴様を異端審問に掛ける! 無駄な抵抗はせずに、付いて来て貰おうか!!」

「……は?」

異端審問? 異端審問って言ったかこいつ。そりや教義が違うんだから他の教徒は異端だろうが、って、それよりもとんでもない事を言っただけだったか?

エリス様の神託って言ったか今。どういう事だ。ストームルーラーを他の事には使って無いし、異端審問に掛けられる理由なんて――。

「つい先ほどの街に強大な悪魔に似た反応があった! その正体が君であるとエリス様は神託なされたのだ。もしも、自身が潔白であると言うならば、潔く異端審問を受けてその汚名を雪ぐと良い!」

エリス教徒の男性の言葉に何となくであるが心当たりがあった。

……まさか、ソウル渴望症に陥ってた時の私、そんな感じの何かを出してたりしたんだろうか。

今思えば、初対面の時に何とも言えない表情をクリスマスに向けられていたしなあ。

考えれば考える程に心当たりしか無く、私は内心で困り果てていた。

まあ、死ぬ事はあるまい。仮に死んでも……す、ストックはギリギリあるし、最悪森に走って狩れば良いしな。

一難去ってまた一難、そんな言葉が脳裏に浮かんだのだった。

27話

さて、ギルドの中心で異端審問だなんて宣ったせいで変な注目を浴びてしまっている訳だが、どうしたものだろうか。

目の前のエリス教徒の男性は法衣を着ている事からそこその立場に居る事が窺える。

もう一人の女性は……おや、私ではなくカズマくんの方へ行っているな。何かしらぎやーすか話し合っている事からこれまた面倒事が舞い込んで来ているようだった。

カズマくんは運は良いが悪運だけなんだよな。最後の最後で勝ち取るタイプの幸運の持ち主なので過程が何ともトラブルメイカーなところがある。

このまま相對してもアレだし、一応相手の言い分を聞いてみるか。何か変な誤解をしているような気がしてならないんだよな、あのエリス様だし。

「異端審問とやらは此処で行うつもりか？」

「いや、万が一の配慮も兼ねて個室で行う予定だ。仮に君の正体が悪魔でなかった場合、謝罪などをしなくてはならないからな」

……さつき貴様とか言つてなかっただろうか、随分と下手に出るんだな。

ちよつとした変化に小首を傾げつつ、男性がギルド職員に応接室を借りるべく交渉を始めていた。

応接室の鍵を受け取った男性が戻ってくると私を追い抜くようにして壁際へと歩いて行き、此方を見やった。

付いて来いつて事か。仕方が無い、さつきと冤罪を晴らして屋敷に帰らせて貰おうじゃないか。

私を心配する視線で見やるめぐみんたちに頷きを返して背を向けて、応接室へと入って行く。

対面する形でソファが置かれており、その間には資料を並べられるようにか長机が置かれている。

男性が奥側のソファへと座り、どうぞと手前側に私を誘導して座ら

せた。

「では、簡易版の異端審問を始めさせて貰います。僕はオルナルドと申します。エリス教異端審問科悪魔撲滅部隊の隊員の一人です。先ずは人物鑑定から行わせていただきますね」

「あ、ああ。それは良いんだが、また随分と印象が違うな」

「あー……、そのですね、悪魔って大概プライドが高いので、ああ言う風になら目線で断定的に言うとは、良くぞ見破ったとノリで返すか、良い度胸だと激昂して正体を現すパターンが多いんですよ。その点、おんおんさんは非常に冷静でしたので、神託の読み間違いも在り得るかなと愚考致しまして、このようにさせていただきました」

「そ、そうか……。何と言うか、お疲れ様です」

「あはは、そう言っていたけると幸いです。では、嘘感知の魔道具を起動しますね。此方の鈴が鳴った場合、嘘であると判別する事になります。できるだけ具体的に返答願います。では、始めていきますね。貴女の名前はおんおんですか？」

なんか街角のアンケートみたいなノリで始まったんだが異端審問。

先程から悪魔悪魔と言っているし、異端審問と言うよりかは悪魔祓いなのではこれ。

もしかして悪魔に憑かれてるとかそういうのを疑われている感じか？

先程のギルドでの周りの様子もんな訳ないだろみたいな雰囲気だったし、間違ってる無さそうだな。

「私の名前はおんおんです」

「……はい、貴方の職とレベルをお答えください」

「アークソーサラ、レベルは……ええと、三十二だ」

「三十二！ そのお歳で三十越えとは凄いですね。流石は魔王軍幹部の一人を破ったアクセルの英雄ですね」

「ははは、そうでもないさ」

「いえいえ御謙遜を。貴女は人を殺した事がありますか？」

急にぶっこんできたな。この柔らかい物腰も態度の緩急も、此方の調子を崩すための方便と言うか駆け引きなんだろうな。

まあ、私は悪魔では無く不死人なので、どっちかと言うとアンデッドに近い訳だな。

「はい。クエストの帰りで山賊を葬った事があります」

「……それは、お辛かった事でしよう」

「いや、商人を嬲り、女性を犯していた奴らなのでモンスターの延長線上として見ていたので問題無かったですね。きつちりとアジトも根絶やしにしました」

「そ、そうでしたか。では、貴方は悪魔と関わりはありますか？」

「……すまないが、質問の具合が分からない。出会った事はあるし、上級悪魔と戦闘して殺した事もある」

「おっと、失礼しました。悪魔と契約して人類を貶めようと思いましたか？」

「いいえ。……因みに悪魔の線引きは何処からだ？ 俗に言う淫魔、サキュバスは悪魔に該当するののか？」

「悪魔は主に魔界に住まい、此方に出現する個体を指します。言うなれば悪魔族ですね。サキュバスは悪魔の配下、即ちモンスター扱いです。……サキュバスとなら関係がお有りで？」

成る程？ 悪魔は悪魔単体で扱われているのか。

それとも脅威度の違いか？

サキュバスとの契約……と言うか口約束はカウントすべきか？

まあ、今後の心象を良くするために嘘は言わないでおくか。

「ああ、実際に会った事はあるし、プライベートな内容を相談した事もある。無論、人類に仇成す内容では無いよ」

「……ふむ、魔道具も反応しませんし、真実のようですね。プライベートな内容であれば追及は止めておきます。……ふうむ、これは神託読みを担当が勘違いした可能性が高いですね」

「私が悪魔である事を隠すために、舌先三寸で騙しているとは思わないのか？」

私の疑問にオルナルドさんは苦笑して頭を搔いた。

「思わないですね。悪魔は確かに狡猾ですが、そもそも自尊心と種族的優位から人間を見下しがちなんですよ。それにこの魔道具を嫌っ

ていて、今すぐ逃げ出そうとするのが大半です。よっぽど高位の悪魔が人間を装ってない限りはこの問答に入った時点で分かるんですよ」

「へえ、そうなのか」

「はい。何故なら僕ら討滅部隊は、十体以上の悪魔を祓った者しか入隊できないので。人には分かりませんが、悪魔を祓った時の臭いが染み付いているんですよ。だから、僕らと相對した時点で敵意を見せない悪魔は居ないんです。……と、言う事で神聖魔法での確認を以て異端審問を終わらせていただきますね」

「ああ、勘違いだったと判断してお帰り頂こうか」

「ははは……、では『セイクリッド・エクソシズム』」

詠唱を終えた瞬間、オルナルドさんがかざした右手から青い火が解き放たれ、思わずギョツとしたが熱さを感じなかったので避ける事はしなかった。

衣服を撫でるように青い火は流れて行き、その様子にオルナルドさんはやっぱりなと言う表情を浮かべていた。

「今のは？」

「すみません、説明を省いていました。悪魔を滅する破魔魔法、浄化の炎を噴射する魔法です。見ての通り人には無害な火ですね。本来なら『ターン・アンデッド』でも良いのですが、神託と言う事もあつて念を入れさせていただきました。ですが、貴女が高位の悪魔でも無い事の証明にもなりました。此度は此方の都合で異端審問を受けてくださり、ありがとうございます。そして、貴女の名譽を傷付けた事を深く謝罪致します。エリス教会から後程、この異端審問の結果をギルド及びアクセルで掲載し、神託の撤回及び誤報と周知させていただきます。此度は誠に申し訳ございませんでした」

丁寧な所作で此方に頭を下げたオルナルドさん。頭を上げるように言おうとした瞬間の事だった。

勢い良く扉が開かれ、扇状的なベルトファクションの少女もといクリスさんが慌てた様子で入って来た。

「その異端審問ちよつと待ったーっ!? ……つてあれ? もしかし

てもう終わってる感じ……かな？」

「おや、貴女は……、其方の羊皮紙を持って来てくれたのですか？」

頭を下げていたオルナルドさんは怪訝な表情を浮かべていたが、青い紐に縛られた羊皮紙を見遣ると合点がいった様子で対応していた。

そうですそうです、とクリスさんが羊皮紙を手渡すと中を検分したオルナルドさんはこめかみに手を当てて溜息を吐いた。

「どうやら憶測が当たっていたようですね。神託読みの担当が読み違えたようです。悪魔の名はおんおんと言う少女である、ではなく、悪魔ではなくおんおんと言う少女である、が正しいようです。再度に渡り御迷惑をお掛け致しました」

「あ、いえいえ。そう言う日もありますよ。神託読みって精度が悪いんですか？」

「そうですね。聞く話によれば、遠くから投げかけられる声を耳を傾けて聴く、との事で、神託読みの担当も人の子なのでミスは出てしまうんですよね。もっと親和性の高いエリス教徒が居れば、と思う時もあります」

「それは……、大変ですね」

だだよ、エリス様の分体さん。クリスさんは非常にバツが悪そうに視線を逸らした。

まあ、お忍びで来てる訳だし仕方が無いか。

「まあ、その、私が言うのも何ですがお気になさらず」

「……ありがとう、その言葉で報われます。後日お屋敷の方に謝罪の品を贈らせて頂きますね。本日はお付き合い頂きありがとうございます」

「はい、お疲れ様です」

オルナルドさんは少し疲れた表情で一礼して退室した。

……さて、事の次第を問い質そうか。それに相応しい人が来てくれたからな。

立ち上がった私はがっしりとクリスさんの肩に手を置き、壁際に追いやってから股下に足を置いて完全に逃げ場を塞いだ。

トドメに特に意味の無い壁ドンを行使し、か細い声であろうとも逃

がささない布陣を展開する。

クリスさんは顔を真っ赤にして視線を逸らそうと無駄な足掻きを見せたので、空いた左手で顎クイをキメて視線を固定させた。

「話を聞かせて貰おうか」

「こ、この体勢になる必要あった?! 話す! 話すから離れて!」

「逃げるかもしれないから駄目だな」

「ああもう……、分かったよ……」

声を低くして無駄に良い声で尋問してみたのだが、割りかし響いたのか萎むような声で音を上げた。

視線を合わせながら今回の一件を尋ねた結果、誤審による判断ミスと伝達失敗と言うスリーアウトだったらしい。

「その、エリス教の教義に掲げている通り、悪魔に対する反応を重視して下界を見ててね。下界ウォッチングしてたら悪魔に似た何かを感じて、ついいつもの癖でデストロイ指示を神託しちゃって……。おんおんだって気付いたから慌てて取り消そうとしたらもうオルナルド君が行っちゃってたんだよね。もっかい神託を送ってクリスで飛脚したって訳なんだ」

「ふーん、ギルティ」

「ごめんって! 世界を守るためのリビドーが溢れちゃったんだ!

デストロイヤー討伐戦に魅入ってて興奮してたから尚更に!」

「そっかあ、なら……」

「許してくれるの?」

「いや、許さないけど。失ったソウルを回収しに行きたかったのに、こんなに注目されたらこっさり行けないじゃん」

「そ、それは……」

まあ、正直疲れてたから明日行くつもりだったけどな。

白い霧の結界を強制発動したせいで、大半のソウルを失っているのがカス残りくらいしか無いだろうしな。

ぶっちゃけ、私死亡説のせいで既に注目はされてたからな。

さて、これを手札に強請るか。股下に入れていた足を曲げて膝を壁に置いた。

「謝礼に神器欲しいなあ」

「だと思ったよ!? ストームルーラー返す気無いでしょ! 駄目だつて言ったよね!? こればかりは駄目なの! それ以外の事にしてよ、私にできる事なら何でもするからさ」

「ん? 今、何でもするって言ったな?」

「……あつ」

慌てて取り消そうとするクリスさんの顎を上げて黙らせ、お互いの吐息を感じられる近さで私はニヤリと笑った。

「明日の夜に廃エリス教会に来るように。その時にストームルーラーを返すよ」

廃エリス教会と言う単語を聞いた瞬間に、クリスさんは赤面し、ぱくぱくと口を遊ばせた。

……見ているな、貴様っ!

お仕置きも兼ねて耳元に唇を近付かせ、ねっとり囁く。

「むっつりすけべ」

「ひゃうつ、だ、だつてダクネスが心配でっ」

「そんな事言つて、本当は混ざりたかつたんじゃないか? ん?」

「そ、そんなこと……」

尻すぼみしていく返事に羞恥の混ざった表情でクリスさんの可愛さが増していく。

嫌あ嫌あと腰をくねらせているが私には誘っているようにしか見えないぞ……。

むらむらと込み上がつて来た衝動を抑えるべく、クリスさんを解放して距離を取る。

無い胸を抱えるように自分の身体を抱き締めたクリスさんはふるふると震えており、それが恐怖からではなく羞恥と困惑からくるものだと言うのは表情で分かる。

……カズマくんもそうだが、初心な子を誑かすの楽しいなあ。普通に考えればダクネスさんと言う恋人が居る私がクリスさんに手を出す訳無いのにな。

増してや今はめぐみんも増えた事で夜の営みは大混雑だ。交互に

私の身体を割り振るしか無いだろうなあ。

まあ、今日辺りは心配かけさせた事もあってめぐみんと一緒に寝てやるか。何なら耳かきとオイルマツサージも付けて癒してやらなきやなあ。

「まあ、そう言う事なので、明日お待ちしますね」

「いや、その、だ、ダクネスが居るじゃん？　な、なのに私もだなんて、そ、そんなの……」

「アクシズ教外部顧問の名前でエリス教に神託の親和性が高い人が居るって報告しようかなあ」

「んなあ!?　そ、そんな事されたら困るよ！　わ、分かった！　明日！　行けば良いんですよ?!」

「ええ、ダクネスさんと一緒にお待ちしますね」

あわわと目をぐるぐる始めたクリスさんだが、此方としては普通に持て成すだけなので、あんまり期待されても困るんだがな。

……けどまあ、この一件とは別に覗きの罪には問わねばならないからお仕置きはしなきやなあ。

ダクネスさんと結託してお仕置き考えるかあ。クリスさんの事はあんまり知らないからダクネスさん任せになりそうだが。

茹だつた顔のまま、私の後ろについて応接室から退室したクリスさんはふらふらとギルドから出て行ってしまった。

ううむ、少しお灸をすえ過ぎたか？　ちよつとやり過ぎたかもしれないな。無事に帰宅できると良いんだが。

応接室の外に居たのだろうめぐみんたちを見やると、何故かカズマくんの姿が無かった。

はて、トイレにでも行ったのだろうか。そう首を傾げていると深刻そうな顔でアクアさんが近寄って、私の肩に両手を置いた。

「落ち着いて聞いてね、おんおんちゃん。カズマは、カズマは……、留置所に送られたわ」

「はい？　何で?」

「何かアルダープとか言うおっさんに窃盗罪で訴えられているらしいんですよ。カズマが作ってたオイルライターでしたっけ、あれの権利

がうんぬんかんぬんだそうです」

「……ふむ？　つまり、売れると見込まれたから横槍を入れて裁判沙汰にして権利を奪おうと画策された訳か」

「えっ、なんで今の説明でそんな事が分かるのおんおん。どんな頭してるの……？」

何かゆんゆんに頭を心配されたが、少なくとも君よりかは賢いぞ、基礎学力的に。

……異世界基準だけだな。

にしても……、どういう経緯でそうなったんだか。まさかとは思うがカズマくん、それを酒場なんかで吹聴したのだろうか。

それをアル豚ーぶう、じゃない、アルダープお抱えの冒険者にでも聞かれて報告が上がり、その利便性と収益性を嗅ぎ取られて難癖を付けられている段階にあるんだらうな。

一応この世界、貴族平民の括りがあるので基本的に平民は貴族に逆らえない存在である。

そして、それを利用して暴利や悪徳な商売などを企て、懐を温めようとする糞領主がこうして実際居る訳で。

「今カズマくんは留置所に居るんだったな？」

「ええ、そうよ。セナって言う女性に連れてかれたわ」

「行くんですか？」

「ああ、無論だ。パーティの仲間が不当に陥れられたんだ。心配するのは当然の事だろう？」

「そうですね、一応パーティリーダーですしね」

「うん、私に何か出来る事あるかなおんおん？」

「んー……、私も今後の流れが見えてないからなあ。簡易的な取り調べをするのか、または貴族に仇成したとして略式裁判で判決がくだるのか、その流れが分からないと手出しがし辛いなあ」

「……おんおんってほんと何処からそんな知識を手に入れたの？」

「前世」

あー……、と納得された。ゆんゆんは忘れがちだが私は転生者だからな。

何故かめぐみんは胸を張って満足そうにしている。

「……まあ、可愛いからいいか。」

ぞろぞろとめぐみんたちを連れて留置所のある警察署まで歩いて行き、門番の人に面会を申し出ると快く受け入れられた。

これもおんおんの人徳ですね、なんてめぐみんがよいしょしてきたので頭を撫でてやった。

留置所の中は地下一階程度深く掘られた場所にあるようで、窓から脱走できないよう工夫がされているようだった。

見張りの男性に声を掛ければ奥の方だと居場所を教えてくれた。

薄暗い奥の方からおろろーん、おろろーん、と泣き声のような何かが聞こえてくる。

「……気のせいかな？」

「いや、気のせいじゃないですよ。確かに聞こえています」

「今日日おろろーんと泣く声は滅多に聞かないんだがなあ。意外と余裕があるなカズマくん」

何時からこの世界はギャグ漫画の世界になったのやら。なつたとしても表現古いなと思いつつ、奥へと足を運ぶ。

「……お家に帰りたい、温かい我が家が待ってるんだ……」

と、嘆きの声が聞こえて来た。いやまあ、不当逮捕だしな。冤罪だし、むしろ訴え側に判決が下る事だろう。

まあ、それは然るべき対応が取られれば、だが。貴族、それも領主となればそれなりの地位だ。最悪なあなあにされるか、それとも強制執行で口封じか。

心底疲れた様子のカズマくんが独房の端つこに三角坐りしていた。

此方を虚な表情で見つめたかと思えば、段々と生気を回復して顔色が良くなり、ダパーッと涙を流してから立ち上がって近付いてきた。

ゴーストスイーパーな横島君じゃないんだからさ……。

いやまあ、十六歳の少年だしなカズマくん。流星にこんな扱いを受けるのは初めてだろう。

ここぞとばかりに聖母めいた他所行きな表情をしたアクアさんがカズマくんを抱き止め、辛かったわね大変だったわね、と慰め始めた。

それはもう修道女を通り過ぎて聖母では、と口に出しかけたが、最近頼られる事に飢えていたアクアさんはニッコニコである。

多分、屋敷に帰って数日後に調子を取り戻した頃に、カズマくんにもマウントを仕掛ける時のネタにするんだろうなあ。

カズマくんも分かっているのだろうか、心寂しい時に優しくされたらコロリと来るのが男の子だもんな、分かるぞ。

……あと、単純に豊満な女神っぽい顔を埋めるチャンスだしな。仕方があるまい、男の子だし。

後方姉貴面して腕組みをして頷きつつ、この後はどうするべきかと考える。

相手が相手だからなあ、悪徳領主と呼ばれるアルダープの事だ。権利を奪うまで執拗に粘着質な嫌がらせをマネーパワーで仕掛けてくるに違いない。

「……ありがとなアクア。ちよつと持ち直したわ。おんおんさんたちもすみません、面倒掛けちゃって」

「ふふん、良いのよカズマ。人は誰だつて甘えたい時があるもの。……だから私も甘やかしてね？」

「お前は下界に降りてから甘えっぱなしだろうが、酒代くらいは流石に出せよ。つまみなら兎も角」

「ええー。人の金で飲むから美味しいのに」

「だからと言ってツケは止めるお！ しかも俺名義にしゃがって！

ああ、アクアさんの保証人の方ですか、だなんて呼ばれ方されたくねえんだよ俺もなあ!？」

ぴゅーひゅるるーと下手くそな口笛をかますアクアさん。先程までの絵画染みた尊い光景は何処へやら。

調子が戻って来たみたいで何よりだな……。

だがまあ、そろそろ話を進めないと二進も三進も行かないな。

「それで、どういう経緯でこうなったんだカズマくん」

「あつ、ええとですね。選りによってダストにオイルライターの制作が知られまして、そこからウザがらみされるようになってからなんで十中八九あの屑が原因だと思います」

「……ダストくんかあ。確かに酒場で吹聴してそうだな。よつ、小金持ちのカズマ、懐暖かいんじやねえの奢ってくれよ、な？　みたいな感じで擦り寄って来て、かーっ、安酒一杯すら恵んでくれねえのか、オイルライターとやらで一攫千金を狙うお上品な奴になっちまったんだなテメエは！　みたいに大声で顰蹙を買うような事をして丸め込もうとしそうだ」

「……あの、あの場に居たんすかおんおんさん。一語一句同じなんすけど……」

先程のゆんゆんのような視線を投げられ肩を竦める。

別に見ては居ないが、普段のダストくんの様子からしてそうするだろうなと憶測は付く。

「これこそがおんおんの強みの一つ。人間観察及び直感による言い当てです。昔、ひもじい思いをしながらおんおんの家にとりかかると、家での遣り取りをしれっと言いついて当てられた事が多々ありました。別にひよいぎぶろーさんとゆいゆいさんならこうしてこう考えてこう言うだろ？　みたいな返しをされるんですよね。なので超能力者なのかなと一時期疑っていた時があります」

「……そういや、手彫りの木製スプーンを持って来て曲げるように言ってきた事があつたな。あれ、そういう一環だったのか」

「本に載ってたんですよ、人体の不思議、超越したパワー、常人が成し得ぬ秘匿された選ばれし力、みたいな感じで」

「うわあ、紅魔族ホイホイなラインナップ……。ええと、それでダストさんがカズマさんを売ったの？」

持ち前の会話クラツシャーによって超能力の話題をサイコクラツシュしたゆんゆんに視線が集まる。

それを見ためぐみんが溜息を吐いて肩を竦めて話しかけた。

「ほんと、話の腰をシャイニングウイザードするの得意ですよねゆんゆんって」

「えへへ、そんな事無いよ」

「褒めてませんよ、このつ、ゆんゆん!!」

「待って!?!　今私の名前を悪態に使わなかった!?!」

「……はいはい、話が進まないからそこまでだ。大方、ダストくんが悪酔いして、いびりに失敗して逃げ出す口実にカズマくんを売ったんだろう。金目の物持ってますぜ、つてな。それがあの豚の私兵だったんだろうな」

「豚は流石に直諭すぎるぞおんおん。それに豚に失礼だ」

「いや、ダクネスも大概な事言ってるぞ……？ えーつと……、あ、商人ギルドで特許を取ろうとして向かったら既に商品登録されてまして、あの糞、あろうことか同じ名前前で登録しに来た奴は自分の考えを盗み見した盗人だ、だなんて吹き込んでたみたいで衛兵に取っ捕まって裁判まで拘留。今に至る感じです」

「それはまたアレな……。 ただまあ、豚領主も可哀想にな。選りに選ってカズマくんを選んじやった訳だからな」

「と、言うつと？」

めぐみんが隣で可愛らしく小首を傾げて疑問を浮かべた。

いやあ、ほんとアルダープとやらは馬鹿だ。仕組みも原理も分からないのにマウントを取ろうとするだなんて馬鹿の極みである。

「恐らく、今回の逮捕は分捕るための大義名分を得る策略だろうな。相手は盗人である、設計図も盗まれてしまつて手元にない。貴族に喧嘩を売った盗人を裁判にかけて持つていない筈の設計図を取り上げようとしているのさ豚領主は。相手が平民だからと舐め腐つた態度と言う訳だ。だから、裁判で相手が知つていなくてはならない事を突いて証言を吐き出させればこっちの勝ちだ」

「……逆転裁判的な感じですか」

「まあ、そう言う事だな。オイルライターと言う名前と、火を付けるための道具である、それぐらいしか知らないんだよ豚領主は。設計図を盗まれたから分からない、だなんて言い訳を十中八九するだろうから、頃合いを見て足元を横合いから蹴つ飛ばせば無様に転ぶだろうよ」

豚領主からしてみれば今までやってきた悪行の一つなんだろうな。売れる商品を自分の商人に抱えさせて、利権を分捕るための言い掛かりな訳だ。

これまでも相手が平民だったから貴族パワーと領主と言う立場から暗躍と圧力を掛けて泣かして来たんだろう。

……ふふふ、真正面から不意打ちしてすっ転ばして、悪行を露見させてやろうじゃないか。

こちらら根無し草にもなれる冒険者だ。ただの平民と違って圧力も掛け辛い上に、ダステイネス家への直通なコネとアクシズ教外部顧問の肩書きで真正面からぶん殴れる秘密兵器もある。

前者はダクネスさんが、後者はアクアさん関連の物品でゼストを動かせるのでイージーモードだ。

さて、裁判が始まる前に色々仕込んでおかねばな。そんな事を考えていたら久しぶりに嗜虐的な笑みが浮かんでしまった。

「あの、おんおんの表情からして大丈夫そうですね。あれ里の森で獲物を狩る時の表情ですからしつかりと仕留めてくれますよ」

「そりゃまた心強いな……。でもまあ、確かに今思えば不利って訳でも無いんだよな。俺の弁護人におんおんさん立てれば良い訳だし。あのセナにも普通に勝てそうだわ」

「そう言えば、そのセナってのは誰なんだ？ さっきから名前だけ聞くが」

「えーと、王国検察官だそうです。一応領主からの訴えだったので事がだから派遣されたみたいです。何でも、魔王軍幹部やらの討伐劇で王国が安定してるから暇になってたとか。何で私がこんな事を見たいな事言っていましたね」

「いや、確実にあのきつそうな性格のせいで厄介払いされたんじゃないですかね」

「め、めぐみん！ 本当の事だろうけどそんな風に言っちゃ駄目だよ！」

「……ほんと、ゆんゆんはゆんゆんですね。その死体蹴りみたいな糞下手フオロー止めた方が良いと思いますよ」

「ええっ!？」

一連のコントみたいな内容に全員に笑顔が浮かんだ。

雰囲気が悪くなったし、ちよくちよく面会に来てカズマくんをフオ

ローしてやらねばな。

まあ、アクアさんにお酒の瓶持たせて面会させれば良いか。持ち前の明るさでこの牢獄も明るくなる事だろう。

さあて、やれる事を万全にしてやらねば。正々堂々手段を選ばず真つ向から不意討つてやろうじゃないか。

28話

さて、カズマくん任せろと言ったものの何処から手を付けていくべきか。

今回のカズマくんの行く末を決める一件は、アクセルの裁判所で民事裁判と言う形で判決が下る沙汰となった。

刑事裁判とならなかった理由としては、アルダープ側の主張に対する証拠が薄かった事、そして本題となる設計図の在処が分からなかった事もあり、カズマくん vs アルダープと言う一対一の裁判になったからだ。

まあ、裁判を起こしてくれるだけ有難い。最悪の場合、略式裁判による貴族に仇なした平民を罰すると言う即死めいた判決が下る可能性もあつたからだ。

そこら辺は私の有名税だろうな。

一応、魔王軍幹部を倒し、アクセルをデストロイヤーから守った功績のある私が所属するパーティのリーダーだ。

平民不敬、判決死刑。だなんて結果に私が噛み付き、散々脅しに使っているように魔王軍へ寝返られたら大事だからな。

ぶっちゃけ、外付け良心回路と言うべきダクネスさんとめぐみんが居なければ、私と言う存在は実に恐ろしい結果を招く災厄となるだろう。

仮に魔王軍に寝返った場合、最前線で私は人類を殺しに掛かるだろう。餌として、だ。

何度殺されても、何度でも蘇り、ソウルを求めて前線に立つ正真正銘の化け物。

相性の良い神器などを持った相手が居たとしても白い霧の結界に閉じ込め、孤立無援の状態にしてゾンビアタックによる確殺戦法を取ればいつか殺せる。

「……こうして箇条書きして見ると酷いな私のスペック。悪堕ちしないように健全に過ごさねばな」

復讐鬼めいた尖った性能してんな、と自嘲しつつ、呼ばれていた事

もあってユウキさんの店へと赴く。

例のパイルハンマーの試作品が完成したらしい。デストロイヤー戦に間に合わなかった事を大分気に病んでいるようで、急ピッチで仕上げたらしい。

フロム・ヘルの店の前に着く。ふと視線を感じたので見やれば窓際の人形ちゃんが会釈していた。

……目を擦り、目薬を差して、再び見る。少し困った表情でもう一度会釈してしまった。

もしかして死んだ事で啓蒙が深まったのだろうか。生と死の狭間を垣間見た事で真理を覗いたと言う感じで。

ははは、ご冗談を。まさかと思うがユウキさん上位者だったりしないだろうな。

内装が木製で古めかしいのはまさか……、よそう、私の予感だけでみんなを混乱させたくない。

若干SAN値チェックに失敗した心地で、ドアベルを鳴らして中へと入る。

「やあ、待っていたよおんおんさん。先の一件に間に合わず申し訳無かった」

「いえ、お気になさらず。仮に完成していたとしても使いどころなかったのでは……」

「そうなのかい？ 一度死んだって聞いてるんだけど」

「あー、ダクソの白い結界を用いてデストロイヤーを閉じ込めて心中したんですよ。じゃないと、アクセルごと吹っ飛びそうな感じだったのよ」

「そうだったんだ……。でも、肝心な時に使える相棒が無かったのは事実だ。此処にあるのは試作品だ、是非見て欲しい」

そう言つて奥から二つの鞆を取り出した。カウンターのの上に置かれたそれらを開いて見せたユウキさんが妖しく微笑む。

……あの、片方違くない？ 人体錬成で右腕と左足を持ってかれる最年少錬金術師の腕じゃないかこれ。

そんな私の疑問の視線を受け取ったのか、につっこにこな様子で語り

始めた。

「これはパイルハンマーの機構を内蔵した籠手なんだ。衝撃を逃がすために腕を覆う形になっちゃったけどね。ほら、内臓攻撃つてあるじゃないか。相手の腹に捻じ込んでぶしやあする奴が。流石に素手でやるのは大変だし、女の子の膂力じゃ大変だろう？ だから、これは肘から先を相手の腸にぶち込めるように加速する機能を持たせているんだ。炸裂式の魔力弾丸をカートリッジ機構で消費して、所謂漫画的な貫き手を再現するものなんだ。鉄鋼板も貫通する威力で申し分無し、無論、機構に耐えるために装甲もしっかりしたものを使ってるから安心だね！」

「私の世界観ダクソだから……、と言うかさっきの人形ちゃんといひ汚染されてないか私？」

「え？ あの人形ちゃんレプリカ？ 動いたの？ あはは、疲れてるんじゃない？ あれ、本当にただの再現した人形だよ」

からからとしたからかい気味な口調で笑うユウキさんの言葉に、私は背筋を凍らせる思いであった。

嘘だと言ってよバーニイ。この世界、神様転生のせいで狂い始めるんじゃないか。明らかに狂気のそれが汚染してきてるじゃん。

ちらりと後ろを振り返り、人形ちゃんを見やるが動いている様子は無い。それどころか安楽椅子に座って外を見て鎮座している。

……振り返ってにこつと笑みを浮かべられた。あはは……、窓にっ！ 窓にっ！ くそう、此処一階だから投身自殺できねえっ！

窓から逃げようとする描写に見られがちだが、あれは教団の魔の手から逃げれないと悟って窓から投身自殺を凶ろうとする場面だからなっ!!

「ど、どうしたんだいおんおんさん!? 微動だにしてない人形ちゃんを見て青褪めて、えっ、本当に動いて見えてるの？ マジで？ 何処で啓蒙を得たの？」

「……多分、一度死んだから、かなあ」

「あー……、確かに大抵の人はあの犬にやられて夢に還るから、死による啓蒙獲得の可能性はあるかあ。……いや、無いのか？ でもなあ、

生と死の行き来だなんて狂気沙汰だしね。ある意味、女神様との対談とかも上位者との会話と考えても可笑しくないしね。……あの人形ちゃん持って帰る？ お世話して貰えるんじゃない？」

「……子供が出来てから考えるわ。信用できる人手が欲しい時に頼るかもしれない」

「へっ？ 彼氏できたの？ おめでどう！」

「いや、彼女。魔法で男性器生やせるようになった」

「……お、おう。それはまた……、お、おめでどう？」

「ありがとう。因みにパーティメンバーの金髪の女性のダクネスさんと黒髪のめぐみんが私の恋人だ」

「わああ、異世界ハーレムだなんて……、しかも百合とか、最高に満喫してるねこの世界を」

「はははー……、ユウキさんには負けるかな。で、こつちがパイルハンマー、だったか。持ち上げても？」

「ああ、構わないよ。そのために作ったものだしね」

もう一つの鞆に収められたパイルハンマーを手に取り、右手で構えてみる。

なんかこれ見覚えあるなと思ったら型月のカレー先輩のアレに似てるのか。

ただまあ、片手で振り回す事を前提にしているからか軽量化されており、右腕の長さに大体収まるくらいの大きさに調整されている。

固定化のためかベルトで腕に締めれるようで、取り付けて見れば左右にぶらつく事が無くなり使いやすくなった。

けれど、手放す事も辛いし、再度装備する時にも不便なので腕をくぐらせるリング等の固定具にして貰おう。

一言断って部屋の真ん中で振り回してみる。先端から突き出した穂先の部分を突き刺すような形で刺突し、切り上げ、振り下ろしをするが、リーチが短いので適さないな。

ナックルダスターに刃物が付いている、くらいの距離感か。

剣として振るうのではなく、拳の延長線上に使う方が良いなこれは。

パイル機構は手元のスイッチを安全装置を握りながら押す形になつており、突き刺しの動作の後に作動させてみれば凄まじい反動と共に虚空を抉る一撃が放たれた。

その衝撃で近くの棚のものが幾つか倒れる程に、とんでもない威力をしていた。

「……痛ったあ。凄い腕が痺れるんだけどこれ。間違えると肩が抜けるぞ」

「んー、火薬の量が多かったかな……。もう少し量を抑えたものも用意してみるよ。他には何かある？」

「そうだな、ベルトで固定するのは駄目だ。取り外しや再装備が面倒だ。腕を通す形で固定するような形にしてくれ」

「やっぱそうだよねえ。弄っておくよ。他は、大丈夫そうだね。それじゃあちやちやつと修正して、完成したら屋敷の方に送っておくね。この内臓攻撃用の片腕鎧はどうする？」

「んー……、一応使ってみるか」

パイルハンマーを戻し、隣の鞆から片腕鎧を取り出して右腕に装着してみる。

ぐっばぐっばと動かしてみたり指をゆらゆらと動かして見たりしたが、見事な事に動作に不良は無く、使い勝手はとても良さそうだった。

それに見た目が非常に良い。幼女の右腕が機械鎧腕とか見栄えがとても良い。何とも浪漫ある恰好だろう。

内臓攻撃機構は指先を強く接触させると発動するらしく、使い捨ての鎧をマネキンに着せてユウキさんが持って来てくれたので腹パンよろしく貫手の形で腹部を殴ってみた。

接触の瞬間に肘辺りから炸裂音と共に排気口から噴出した一瞬の暴風が生じた。肘から先が加速し、鋼鉄製らしい鎧のどてっばらをぶち抜いて貫通させていた。

……先程よりも衝撃は無いが、肘から先が勝手に動くので脱臼の可能性がありそうなくらいだった。

「……なあ、むしろこっちの方が性能も使い勝手も良いんだけど、完成

度も高くないか？」

「あ、あはは、やだなー、ボクが適当な仕事をする訳無いじゃないかー」
「成程な、大方こっちに意識が行って、息抜きの方に力を込めたんだらう。これ、装甲はどうなってるんだ？」

「え？ ああ、その樽に入ってるハンマーで叩いてもへこまないくらい強度はあるよ。それなりの値段の仕上がりだし」

「って事は、これ合わせて一億ってところか？」

「えー、あー……そうなります、はい」

まあ、ハガレンも好きだから良いけどさ。見た目は完全にオートメイルな片腕鎧だ、再現勢の匠の技と言うべきか。

本当はおまけ程度だった筈の片腕鎧だが、使い勝手も奇襲性も高いし、何よりも盾の代わりに行けるのはでかい。

片腕鎧を付けた状態でパイルハンマーを右腕に装備し、左手に呪術の火を灯す。

……うむ、痺れるくらいに格好良い様になる姿だ。トレントに搭乗している時は弓でも使えば良いだろう。

ああ、そう言えばそれを頼んでみるか。私の持っている弓は全部お手製なので威力がイマイチなんだよな。

「余った金で弓を作れたりするか？ コンパウンドボウ的なのが欲しいんだが」

「んー、大丈夫だよ。二千万エリスくらいは残ったから」

「因みに二つの内訳は？」

「……パイルハンマーに六千万、オートメイルに二千万です」

「ならいいか。性能がしっかりしてるなら文句は言わないよ」

「へへへ、ごめんね、助かるよ。自分としても悪い癖が出た感じだからさ。そのオートメイルは持って帰って大丈夫だよ」

「ああ、そうさせて貰うよ。所で少し相談があるんだが」

「はいはい、何でしょう？」

この性能の良い片腕鎧の噴出機構。それを見て思った事があった。

それを現実に書き起こすためにユウキさんに箇条書きで内容を伝えると、ニタアと笑みを浮かべてサムズアップで了承してくれた。

残りの二千万エリスでそれを作って貰う事にし、羊皮紙を用いてデザインに口を出しておく。

ふふふ、これならダクネスさんも活躍の機会が増えるだろう。得られなくなる痛みは私が与えれば良い話だしな。

人形ちゃんに一礼されながらフロム・ヘルを退店し、次の予定を消化すべくアルカンレティアに篝火で飛ぶ。

アクシズ教の本部のあるアルカンレティアに設置した篝火は、何とアクシズ教本部の庭の中央である。

何となく円状にしたのは良いが殺風景で勿体無いとゼスタがぼやいていたので、丁度良いので場所を融通して貰った訳だ。

前の定期集会以来のアルカンレティアだが、いつ来ても空気が美味しい感じがする。

ゼスタに会うべく大教会の方へと歩く最中で、アクシズ教徒である少年に会釈をされた。

「こんにちは、マザー」

「待て、なんだその呼び名は」

「あれ？ 知らないんですか？ この前ゼスタ様が特別外部顧問では呼び名がイマイチだからって、聖母の特別称号を与えたって話ですけど。なので、教団員はおんおん様をマザーと呼ぼうと決まったんです」

「……そうかあ。なんで決定事項なのかは分からんが、まあ、理解はした。納得はしないが」

「マザーのお役に立てて何よりです！ 女神アクアの清き導きがあらんことを」

「……なんか変なお祈りも追加されてるし……、マジで何があったんだアクシズ教」

すたこらさつさと行ってしまった少年の背を見ながら独り言ちる。問題児の巣窟である筈のアクシズ教なのに、今の少年の様子は非常に宗教っぽい敬虔な教徒のそれだった。

ううむ、聖母の件と言いゼスタに聞かねばならない事が増えてしまった。

さて、あのどうしようもない変態の馬鹿は何処に居るのやら。先程の少年に尋ねれば良かったが、内容が衝撃的過ぎて忘れていた。

礼拝堂を暇そうに掃除していた女性教徒に場所を聞けば、夏のスイカよろしく近くの水道に首に縄を括りつけられた状態で流されているそうなので、礼を言つて近くの水道を探し始めた。

すると、少し遠目の場所からばっしやばっしやと溺れる誰かが藁に縋ろうとするような水音が聞こえて来た。

其方に向かつてみると水道をよぎるための小さな橋の柱に縄が括り付けられており、柱との縄の結び目を首に括られている上に身体をぐるぐる巻きにされ、俯せになって窒息している変態もといゼスタが溺れていた。

近くには長い棒があり、背丈の小さな子供が逃げていく背中が見えたのでひっくり返す悪戯をされたのだろう。

……割と生死に関わる悪戯と私刑なのだが、何をやらかしたんだこの馬鹿は。

仕方が無いので棒を使つて引つ繰り返すと、ダチョウ倶楽部よろしく口からぴゅーつと真上に水を吐いてから荒い息をしていた。

「おや、（無沙汰でゴボツ、げほつ、一つ頼みがあるのですがどうガボツ、おえつ、助けてくれないでしょうか）構わないが、何をやらかしたんだお前」

がぼがぼと肺の空気が無くなり始めたタイミングで水を飲むので、埒が明かないとソウルから火掻き棒を取り出して縁に引っかける。

「ふふふ、行き遅れのエリス教徒の女性に合コンのチラシを送つて、アクシズ教の未婚の者とお見合いをさせたのですが上手く行かなかつたようでした」

「ふむ、なんだ案外まともな案件だな。八つ当たりでもされたのか?」「いえ、熟女好きの者を揃えた結果、まだまだ若いわとキレられました」

「……それで?」

「三十路迎えて若いとか無いわーだなんて煽ったらこの有様です」

「残当だわ。もっかい溺れて来い馬鹿野郎」

「がつ、ありがとうございます！　ありがゴボツ、おえつ、ゲホツ、鼻につ、オアツ、溺れつ、ごぼぼつ、ぼぼぼつ、この水道つ、深いっ！」

良い笑顔で失礼な事を抜かしていたので鼻っ面を蹴り飛ばして水道に戻し、上から棒で頭を抑え込んで冷やしてやった。

死なない程度に私刑に処し、もう一回火搔き棒で回収してから、何となくもう一回蹴り飛ばして天井させてから引き上げた。

随分と水を飲んだのかふつくらとした腹をまるで我が子のように摩りながら、ニコニコしているゼスタの気持ち悪さに辟易しつつも本題を語るべく大教会を親指で指した。

無論ですとも、とびつちやびちやのまま大教会に歩いて行くゼスタを引きつれて歩く私に、畏怖と尊敬の眼差しが彼方此方から降り注いだのだがマジで何があつたんだアルカンレティア。

礼拝堂を掃除していた女性教徒から臭そうな雑巾を顔に叩き付けられてご満悦なゼスタを応接室へ叩き込み、私用に置いてくれているらしいクッションに尻を置いてソファで対面する。

何時の間にか濡れていた衣服が乾いてキリツとしたゼスタが居て、マジでこいつギャグ世界の補正掛かってないかと疑いの視線を向けざるを得ない。

「して、どのような案件でしょうか？　アクシズ教のために此方に住まわれる手続きとかですか？」

「手短に言えば、顛末によってはアクアさんが天界に帰るかもしれない、そう言う案件だ」

「すみませんでした、真面目に聞きます。最初から宜しくお頼み申し上げます」

ソファに座っていたゼスタが床に跪き、敬虔な教徒が如く祈るポーズで此方にシリアスな顔を向けて来た。

ほんとアクアさんが関わると人が変わるよなアクシズ教。まあ、便利で良いんだが。

「アクアさんがカズマくんの転生特典として下界に降りている訳だが、その期限はカズマくんが確定的に死ぬまでだ。で、今カズマくん

は地方領主アルダープに一方的な訴えで裁判に掛けられ拘留されている」

「ふむ、となれば、私たちはカズマ殿が勝訴するように手筈を整えろと言う事ですな。承知致しました、何なりと命令に従いましょう」

「……なんで特別外部顧問の私にそこまで全幅の信頼を向けているのかマジで分からないんだけどもさ、少しは疑わないのか?」

「滅相も無い。おんおん殿はアクシズ教の聖母となられる御方です故、そして、あのアクア様のお世話もされている人物。もはや教主ですら貴女に頭を下げる立場にあるのですよ」

「おまけに変な肩書を増やしよってからに……、何だ聖母って。お前から変態の母になった覚えは無いぞ私は」

「ふふふ、自覚なされておられないご様子。定期的な集会によりアルカンレティアに居る教徒は既に貴女様へ全幅の信頼と信用を捧げ、慈愛の籠った説法に感動で噎び泣き、その類稀な美しさと色気と幼さが生んだ容姿に心を奪われ陶醉している者も多いのです。ぶっちゃけると次期最高教主の最有力候補に挙がっております」

「……嘘だろ?」

「誠にございませぬ。ですので、そのような立場は恐らく突っぱねると思われましたので、殿堂入りみたいな感じで聖母の称号をでっち上げた次第です、はい」

「……つまりこいつが動かなかったら教主に祭り上げられてた可能性あるのか私。」

こつわ、何それ知らん、勝手に進めるなそんなの。

これに関してはゼスタに感謝しておくべきだろう。ソウルから一本のワインだった聖水を取り出して投げ付けておく。

一瞬でどのようなものかを理解したゼスタが、下賜されたかの如くははあと畏まった様子でそれを受け取った。

その瓶の正体はアクアさんがいうっかかり触れてしまつて聖水にしたワインである。

コルクを抜く時に噴き出して慌てて塞いだ結果、聖水になった残念なワインだったものだ。

ストックは幾つかあるのでアクシズ教への賄賂や褒美に使える便利アイテムでもある。

「で、だ。アルダープの証言は証拠も何も無いでっちあげの脅迫でな。当日、私が弁護士側に立ってそれを論破するから、逃げようとした豚野郎をとっ捕まえるための人員を用意して欲しいんだ。頼めるか?」
「勿論ですとも。私も参加し、一個中隊程の精鋭を当日観衆に紛れ込ませましょう。必ずやアクシズ教に仇なす糞野郎を亀甲縛りのローストハムにしてやりましょうとも」

「見苦しいだけだから普通に捕まえろ」

「ですよー、流石に野郎の緊縛とか反吐が出ますし、でもシヨタのなに見たいかも」

「お前のストライクゾーンが広過ぎて困惑するわ……。まあ、兎も角裁判の日程を伝えておくから準備しておいてくれ」

「承知しましたマザー。アクシズ教の神髓をお見せ致しましょう」

何やらかすつもりだこいつ……。まあ、もしもの備えができたからいいか。使い勝手が良くて助かるな。

まあ、それはそれとして聖母としての賃金交渉に入ったら苦い顔をされたが。

そりやお前勝手に祭り上げられるのは勘弁だが、変な称号で呼ばれるのも勘弁だわ。

縁を切ろうとしないあたり温情を感じてくれたまえよ、いや割と本気でマジで。

何が嬉しくて気持ち悪いおっさんを筆頭に変態予備軍及び手遅れ性癡堕ち済み馬鹿共の世話をしなきゃならんだ。

……いや、待てよ? こいつらがハチャメチャやってるのも表に出す機会が無いからでは?

「……ゼスタ、ちよいと良い事思いついたんだが、誰もが自分の性癖を語っても問題の無い集会とか需要があると思わないか?」

「貴女のそう言う所が皆大好きなんですよ、流石マザー! 女神アクアの次に私たちの事を考えてくださる慈愛の聖母です!」

日本の誇りあるオタク文化の象徴とも言えるコミックマーケット

の概念を伝えてやった。

半年に一回ペースで大規模なアングラ集会を開き、皆々が日々抑圧している願望や性癖を表に出すチャンスを作ってやるのだ。

男なんてどれだけ興奮してもシッコって出せば冷静になるのだから、規制なんてするから悪いんだ。

へへへ、無論売りに出されるであろう春画や薄い本へは局部修正のお達しなんてしてやらん。

ジャンル分けしてライトとディープな層を物理的に分けて配置すれば住み分けもできるし、日にちで男性用、女性用、共通一般用にしておけば更なる住み分けが可能になる。

いやあ、水の街アルカンレティアが、性癖と欲望の坩堝の温床になるのも夢では無いな。

参加するのにアクシズ教徒である事を理由にしておけば、エリス教徒からの苦情も無く、逆に教徒が増える可能性も出てくる。

うーむ、我ながら外部特別顧問として良い働きをしてみましたな。よし、紙を作る技術やレシピもこの際だし放出しておこう。大量に水もあるから一大産業と化すだろう。

「……その見た目で本当に業の深いお方ですな。だからこそ、私たちはアクア様を貴女にお預けできるのですが」

なんかゼスタがぼそぼそ言っていたが、どうせ変態ちつくな事を呟いているのだろう、無視に限る。

さあて、モチベーションが上がって来たし、ある程度コミケ、いや、アクシズマーケット、略してアケットの草案を作っておくか。

こいつらに任せたらエリス教徒を巻き込むような変な内容にするかもしれないし、ちゃんと言い出さずとして監督せねば。

会場も此処の礼拝堂でやれなくもないし、大規模になったら設営すれば良いだろう。

ぶっちゃけ、自分の好きなように絵を描くのって時間を掛けないと難しいからな。

でもまあ、逆るパトスとエロスと変態性で何とかするだろアクシズ教徒だし。

最初の方は小説とかをおすすめておこうか。そこから絵に走ったり、フィギュアに走ったりして貰えば良いだろう。

……そんな風に草案を纏め終えたのが夕方の事で、ほぼ一日使ってしまったがそれなりの大作が出来上がった。

「では、次の定例会議の時にこの草案を提出しておきます。いやはや、本当に貴女が此方側で良かった」

「この世界娯楽が少ないから良い機会になると思ったんだ。それに、何かに集中させとけばお前ら大人しくなるだろう」

「たはは、これまた手厳しい。ですが、効果の程はありましよう。我々は新しいもの好きですからな、お祭りのチャンスを見逃すような間抜けではありませんので」

「……程々にな。いや、本当に。エリス教徒に迷惑掛けるなよ」

「ああ、その事でしたら問題ありません。貴女の恋人がエリス教徒であると周知されてからは嫌がらせなどは収まりましたから」

「はあ？　なんでそこに私が理由になるんだ？」

「いや、その……、間違つて貴女の恋人殿に粗相をしたら確実にやばい事になるでしょう？　なので、ちゃんと裏を取った相手以外には軽はずみでしないように注意しているのですよ。まあ、あの金髪の女性である事は知られているのですが、暗黙の戒律なようなものです。実は皆止め時を探してたんですよ。昔のノリで過ごすのを止める理由ができた、ただ、それだけの事です」

「ふーん、てつきりあの変な勧誘やエリス教徒への軽犯罪を止めたら見る目を変えられてちよつと良い感じだから継続していこうだなんで下心が見えるんだが、まあ、いいか」

「そ、そんな事は、あり、ありませんぞ、ええ」

まあ、アクシズ教徒から変な部分を抜けば、親しみやすいノリの良い奴だからな。

案外喋り易くて趣味に通じてて、悪戯ツ気のある気の良い隣人ではある訳だし。

そうじゃ無かったら今の今までアルカンレティアでアクシズ教徒とエリス教徒が混じって生活できているのが変だしな。

今朝のゼスタのお見合い話だってそう言う善なところが無ければ実現しなかつた事だろうし。

……こいつらも成長してんだなあ、だなんてしみじみと思う辺り私も毒されてるんだろうなあアクシズ教に。

乗り掛かつた舟とでも言うべきか。すっかり馴染んでしまっているからか、縁を切り辛いんだよな。

まさかとは思うがそこまで考えてこの変態私に粘着してたのか？ 在り得そうな話ではある。

「……まあ、こうして頼られるのも気分が良いから許しておくか。その分こき使うけど」

草案も纏め終わったのでお暇する事にする。……なんで私、草案纏めてるんだ。協力を求めに来た筈だったんだが……。

まあ、いいか。次は商人ギルドあたりに顔を出して根掘り葉掘りしていくか。

取り敢えず、今日は帰るか。カズマくんの裁判までは日にちがあるので、やれる事はやらないとだしな。

大教会の篝火に触れて、教徒たちに見送られながらアクセルの屋敷へと帰還する。

いやー、魔力も消費しないし本当に楽だな篝火転送。一家に一台篝火設置、流行るんじゃないか、いや、無理か。

そんなアホな事を考えながら屋敷の庭から入口の方へと周り、玄関を開いて帰宅を果たす。

実家に帰って来たかのような心地に肩の荷が下りる思いだった。いや、うん、やっぱりあいつらの相手するの疲れるなって。

主に精神的にと言うべきか、そこそマザーモードと言うべきか、良い方向へ導こうとついつい思考が走るんだよな。

ぱたぱたと階段を下りて来たダクネスさんを見て、頬が緩んでしまった。ああ、我が家って良いなあ。

ただいま、と言って、おかえりなさい、と返ってくる日常の何と尊い事か。

それを守るためにもカズマくんの裁判に勝訴せねばな。よし、明日

からも頑張ろう。

29話

この世界に来てからろくでもない事ばかりだ、そう嘆き続けた馬小屋生活を経て、超絶美少女おんおんさんのご厚意で屋敷に寝泊まりができて本当に俺は恵まれていたんだと思う。

この世界における裁判は前世のそれとほとんど同じではあるが、弁護士と言う職業は居ないらしく、被疑者側から要請して知人や伝手で集める事しかできないらしい。

それを何故か隣の牢屋に入れられていたダストから武勇伝の如く聞かされた俺は正直勝ったと思っていた。

何せ、おんおんさんは精神的年上であるし、何よりもパワータイプと言うよりも頭脳派、技巧派の人だ。

毎日酒瓶とグラスを持って面会に来てくれたアクアから聞いた話であるが、色々と伝手を使って人を集めてくれているらしい。

どうもダクネスに対するアルダープのセクハラめいた苦情を聞いてしまった事で手段を選ばなくなったそうだ。

……その結果が、これだ。

裁判が行われる場所は裁判所の外に設営された広場であり、野次馬や見学者が見られるように柵でぐるりと囲ったスペースに日本の裁判所のそれを設置した感じだ。

手枷を付けられ、被告人席である半円の柵の前に立たされようとする俺の隣には心強い人が居た。

瞳に紅魔族特有の感情の昂りから来る妖しい輝きを炯々と灯したおんおんさんだ。

睨む先は裁判官……では無く、被害者面をしたでっぷりとした豚領主ことアルダープだ。

その異様な威圧感ある凄みと殺意めいた臃げな暗黒を纏ったおんおんさんの睨み付けに、完全にガクブル状態のアルダープだが、お前の敗因がダクネスへの粘着である事からギルティ案件だろう。

ちらりと観客席を見ると、そんなアルダープを睨む異様な人々が幾人か混ざっており、その筆頭はニコニコと笑みを浮かべながら何匹も

モンスターをぶち殺したであろうごついメイスを柵に立て掛けて
いる法衣服姿のおっさんだ。

時折おんおんさんがそのおっさんにアイコンタクトを送り、頷きを
返しているあたり味方なのだろう。

「……ねえ、めぐみん。あれってゼスタさんじゃない？」

「……そうですね。と言うかあっちで見かけた事のある人たちがそこ
らに居ますし……」

「その、おんおんが応援を呼んだらしい。その人たちがそうなのか？」
「みたい、ですね。アクシズ教外部顧問、いや、今は聖母でしたっけ。
その肩書きをフル活用しているみたいですね……、本気ですよおんお
ん」

そして、おんおんさんが少し驚いた様子を見せていたが、そちらを
見やれば先日おんおんさんに異端審問だと宣った青年も居た。その
隣にはクリスも居る辺り、あそこはエリス教の伝手だろうか。

……オーバーキルが過ぎないだろうか。この面子を怒らせるとか
よっぽど悪事に手を染めていたんだなこの豚領主。

「それでは、裁判の時間となりましたので開始とさせていただきます。不
法侵入および窃盗の告発を受けているサトウ・カズマは前へ。告発
人、アレクセイ・バーネス・アルダープ、前へ」

木槌で取っ掛かりを作った裁判長の静かな声色が裁判場に広がり、
がやがやとした声が静まっていく。

シンとした中、俺と豚領主が配置に付き、そして弁護士であるおん
おんさんもまた配置に着いた。

対面するセナがおんおんさんの様子に若干気後れしている事も
あって、今のところ此方の優勢だ。

まあ、そもそも冤罪裁判なのでよっぽどのウルトラCをかまさない
限り、豚領主の勝ちは無いだろう。

なので、少し安心した心地で俺は被告人台へと足を進められたの
だった。

「これより嘘見抜き魔道具を起動させます。検察官及び弁護士、被
告人及び告発人の嘘を認めません。では、検察官セナ、前へ」

「はい。起訴状を読み上げます。被告人サトウ・カズマは、デストロイヤーのいざごぎの際に領主アルダープの屋敷に潜入し、オイルライターと言う魔道具の設計図を窃盗。これを持って商人ギルドへと特許申請を行なうも、事前にこれを見抜いた領主アルダープによってこれを阻止。屋敷への不法侵入及び秘密文書と設計図の窃盗の罪に問われております」

「被告人、この訴えに嘘はありませんね」

え、えつと、この場合どうすれば良いんだ？

本来なら大体合ってるから頷くべきなんだが、今回は丸つと嘘の証言で固められた内容だ。

素直に違いますと言って良いのだろうか。弁護席に居るおんおんさんを見れば、木板にチョークで『否定して良し』と日本語で書いてくれていた。

……よし、息を吸って吐いて、口にする。

「断固否定します。先ず、デストロイヤー戦の日にその領主の屋敷に行つていませんし、場所も知りません。このオイルライターの設計に領主の手は入っておりません。全てはその領主のでっちあげに過ぎません」

ベルの音は——ならなかった。

その事により裁判長を含め検察官のセナ、野次馬がざわつく。

アルダープを見れば非常に苦い顔をしていた。そりやまあ、略式裁判で一方的に断罪するつもりだったのに裁判場に引つ張り出されるとは思ってなかったんだろうな。

「発言を宜しいでしょうか」

「む、弁護人の発言を許可します」

「ありがとうございます。告発人である領主アルダープへ幾つか嫌疑のため質問をさせていただきたい」

「ふむ、嫌疑とは？」

「そもそもの話、領主アルダープはオイルライターの権利と設計図を掠め取ろうとしている嫌疑があります。第一に、商人ギルドにて確認してありますが、特許申請の際に名義がお抱えの加工技術者ではなく

アルダープ本人である事。商人ギルドへの特許申請は製作者本人または店単位の申告である事が義務付けられているため、これに則ると領主アルダープ本人がこのオイルライターの制作に参与していなければなりません」

「……商人ギルドからの証拠は、ふむ、これですな」

「はい、既に提出済みです。ですので、質問をさせていただきたいのです。真に制作に関わるのであれば、頭の中に設計図はあるものです。この神聖な裁判の場において、それを発言できない事は無いでしょう」

「二理ありますな。告発人アルダープ、前へ。弁護人からの質問を受ける事を命じます」

「なっ、何でワシがこんな小娘の指図を受けねばならんのだ！　その小僧がワシの設計図を奪い、金策を試みたのだ！　小僧を貴族侮辱罪で死刑にすべきだろう！」

ベルの音は——《ヒュー、ヒュー》——鳴らなかった。

その結果におんおんさんが眉を顰め、何事かを考え始めた。今の発言は嘘だ。それは俺にだって分かる。

何せ、オイルライターの設計図だなんてものを俺は書いていないからだ。

この世に存在しない筈のそれが存在している、そんな気味の悪い結果に背筋が冷えて来た。

「……成程な、そう言う絡繰りか。至極面倒なものに憑かれよってからに」

そんなおんおんさんの静かな声が裁判場に響いた。

誰もがおんおんさんへと視線を向け、それはアルダープも含まれていた。

先程までは怒声と勝ち誇ったような表情を浮かべていたアルダープだったが、背中に氷柱をぶち込まれたかのように冷や汗を流しておんおんさんを睨み付けていた。

先程まで炯々と輝いていた瞳はなりを潜め、その代わりに右眼が仄暗い炎のような色合いを浮かべていたのが印象的だった。

まるで、この世のものではない何かを見通しているかのような、そんな虚ろさがその瞳に込められていた。

「アクシズ教聖母の名のもとに宣告する。アレクセイ・バーネス・アルダープ、汝に悪魔が憑りついている。具体的には後頭部の無い金髪美少年の悪魔、ええと、まくす？ とやらがお前の魂を握っている」

ズビシツと人差し指をアルダープに指したおんおんさんの言葉にベルは鳴らなかつた。

観客席が阿鼻叫喚に陥り、静粛にと叫ぶ裁判長の声を押し退け、裁判場に入って来た数人の人物がアルダープを囲うと、あのおつさんを筆頭に『セイクリッド・バインド』と言う詠唱と共に光の輪っかのような拘束を全身に掛けていた。

クリスの横に居た青年が非常に恐ろしい表情でアルダープに駆け寄り、『セイクリッド・エクソシズム』と詠唱しながら右手を向け青白い炎を浴びせた。

瞬間、何事も無かつたかのようにしていたアルダープが苦しみ始め、黒い靄のようなオーラを吐き出していた。

「……随分とお粗末な事だ。悪魔相手に対価の踏み倒しなんてできやしないのにな」

『ヒュー、ヒューツ、そんな事言わないであげてよ。アルダープはとっても可愛いんだ。とつくに対価を支払ってるのに払ってないつもりで居るんだから。僕が辻褃合わせのマクスウエルだなんて呼ばれているのに、ちつとも気付かないんだ！ 可愛いでしょう！ こんな無様で、傲慢で、何にもできないアルダープが僕は大好きなんだ！』

おんおんさんの冷たい眼差しと呆れの声に、何処からか無邪気な少年の声が返された。

その声を聞いた俺たちは酷い悪寒と悍ましきを感じ、身体が震えて仕方がなかつた。

地面に転がったアルダープの黒い靄からその声は聞こえていた事から、先程の言葉を信じるのであればマクスと言う悪魔の声なのだろう。

「な、何を言うマクスウエル！ お前はワシの下僕だろうが！ 対価

はちゃんと払っているだろうが、お前が間抜けで忘れていただけ！
今、この場に居る奴らの記憶を消せ！　そして、あの小僧が設計図
を持って居る事にするんだ！　さあ、早く！　ワシの命令が聞けん
か！」

狂気染みた様子で暴れ回りながら怒声を吐くアルダープの様子に
全員の視線が集まる。

もしや、先程の嘘見抜き魔道具を何とかしたのはその悪魔の仕業
だったのか。

『あはははは！　アルダープ！　間抜けでおつちよこちよいなアル
ダープ！　可愛いね！　僕が出来るのは辻褃合わせだけ！　この世
に無い物を有る事にはできないよ！　ヒューツ！　それに、もうあそ
このお姉さんにバレちゃってるみたいだから言っちゃうけど、もう君
が支払える対価は無いし、寿命じゃ足りないくらいに積み重なって
いるよ？　ヒューツ！』

「ヒュツ、は、は？　ど、どう言う事だマクスウエル。ワシはお前に対
価なんて……」

「……お前のソウル、いや、魂はもう風前の灯だ。辻褃合わせか、成程、
悪趣味な事だ。無い物は増やせないが、有る物を誤魔化す事はでき
らしい。何度命令をしたんだろうな、お前。その回数分の魂を千切ら
れて喰われているのに気づかずに、よくもまああのほんと暮らせたも
のだ。そこの悪魔のお前への執心っぷりは凄いで。ソウルにまくす
と名前を書いておくぐらいにはな……」

おんおんさんの何とも言えない声色で告げられた言葉にアルダー
プは啞然としていた。

恐らく、あいつは自身で言っていたように対価とやらを払っていな
いつもりだったのだろう。

あの無邪気な悪魔はそれを見越して欺瞞させていたらしい。

……それってなんてリボ払いだ。前世の問題になりそうな支払い
方法がちらっと脳裏に浮かんだ。

「その様子だどとつくの昔にソウルで払える分は支払い終わってたん
だろうな。私が憶測するに、子供のような悪戯心でお前は薄氷の上で

踊るアルダープを見て楽しんでいたんだろう。悪魔は悪感情を好むと聞くからな。傲慢で強欲で、色欲も執着心も支配欲も強いアルダープの事だ。豚を肥やして食べるかのように、その自尊心を高めに高めて有頂天にさせて、然るべきタイミングで崖から足を転ばせたかのように転落させるつもりだったんだろう。……本当に悪趣味な悪魔だ」『ふふふっ！ あははっ！ ヒューツ！ ヒューツ！ もうちよつと美味しくしたかったけど、妥協してあげる。お姉さんに手を出されたら手に入らなくなっちゃうしね。あはははっ！ さあ、アルダープ！ 僕と地獄で過ごそう！ 壊れたらすぐに捨てちゃう君と違って、僕はそのを大切にするんだ！ だから、壊れる限界まで遊んでも、ちやーんと元に直してあげる！ 何度も、何度も！ 楽しいねアルダープ！ 可愛いなあアルダープ！ あはは、あははははははははは、ヒューツ！ ヒューツ!! ヒューツ!!』

「た、助け——」
ずるりとアルダープの影から貴公子然とした金髪の美少年の顔が現れたかと思うと、首と腰を掴んでそのままとぶんと影へと連れ去って行った。

そこに居た筈のアルダープの姿は無く、そこには何も無くなった空席の告発人席があった。

唯一あるとすれば首元を爪で引っ搔かれたのか数滴の血の跡が残っていたぐらいだ。

目の前で起きたショッキングな惨劇に誰もが口を閉じた。

そして、エリス教やアクシズ教が悪魔撲滅を掲げる理由を心で理解した。

あんなやべえのこの世界に生かしておけない存在だわ、そりゃ血眼にサーチ&デストロイするわ。

この場に居た誰もがあのマクスウエルと言う悪魔の威圧感に気圧され、真正面から立ち向かったおんおんさん以外は発言する事もできやしなかった。

「……まあ、思ってた展開と違うが、ヨシツ。さて、もうこんな茶番どうでも良いだろ、裁判長、判決を下してください」

「あ、ああ……、告発人アレクセイ・バーネス・アルダープが悪魔憑きであった事もあり、証拠不十分かつ冤罪の可能性が高いとし、被告人サトウ・カズマへの罪状を取り下げることとする」

面倒な事が終わったとばかりにあっさりとした様子のおんおんさんの言葉に、裁判長がこの冤罪裁判の終わりを告げた。

観客席から躍り出たおっさんたちはおんおんさんに一礼し、颯爽と出て行き、アクアに深々と一礼してからこの場を去って行った。

ああ、やっぱりアレ、アクシズ教徒なのか。道理でおんおんさんの彼らに対する扱いが雑だと思った。

そして、この前ギルドに来ていた白い法衣を着た青年がおんおんさんの方へと歩み寄る。

「あの術は憑りついているタイプには効かないんだな」

「ええ、残念ながら。実際に憑りついている場合であれば剥がせたのですが……。恐らく、契約と言うパスを用いて一部だけ憑りつかせていたのでしょう。あの男性が連れていかれた先は恐らく地獄。諦めるしかありません。前に先輩から聞いた事があります。地獄の公爵が一人、辻褃合わせのマクスウエル。運命を捻じ曲げる力を持つと言うとんでもない悪魔だそうです。地獄の公爵が一人、見通す悪魔のバニルが煽った時に口にしたとされていて、その実態は今まで分かりませんでしたが……」

「実に恐ろしい悪魔だなアレは。アレは酷く無垢だ。子供が蟻を潰して笑うように、餌である人間を殺しても楽しそうに笑う事だろうよ。豚領主も厄介なものに魅入られたものだな」

「全くです……。ですが、最悪な状況にならなかつたと安堵しておくべきでしょう。我らが女神、エリスの名の下にあの悪魔を滅せれなかつた事だけが心残りですが……」

「あの様子なら数百年は出て来ないだろ、多分。どれくらいまで寿命を延ばせるかが焦点だな」

「あはは……、うちの隊長みたいに肝が据わってますよねおんおんさん。アルカンレティアで一心不乱に団体行動するアクシズ教徒に物理的に巻き込まれて、そのままアクセルまでレポートされた時は何

て日だと思いましたが少しでもお役に立てて良かったです」

「……声掛けてなかったけどそう言う経緯で来てたのか。すまないな、代わりに謝罪しておこう」

「ああいえいえ、お気になさらず。それもまた女神エリスの導きでしよう。それでは、元の任務に戻りますので失礼します」

「ああ、息災で」

色気のいの字も無いビジネスライクな会話をしてエリス教徒らしい青年が去って行った。

……多分あのおっさんを筆頭としたアクシズ教徒なんだろうなあ、巻き込まれたってどう言う事だよ。

おんおんさんへの視線を強めてしまっていたからか、視線に気づいた事で苦笑して説明してくれた。

何でも今日のためにアクシズ教から精鋭を一個中隊呼び寄せていたらしく、先程確保に向かった人員とは別に封鎖の人員も居たらしく、私兵か何かを用いて逃げ出そうとするであろうアルダープを抑え込むために配置していたらしい。

先程の青年はオルナルドと言って、エリス教の悪魔祓いの一人なのだとか。

それ以上の事は知らないの知り合い程度の相手らしい。

「まあ、仮にあの悪魔が暴れ出しても悪魔特攻なアクアさんも居たし、何とかはなっただろうな。オルナルドさんの先制が入った事で、アルダープから切り離される可能性が出て来たから撤収したんだろうよ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ。何かしらやらかすだろうなとは思ってたが、まさか悪魔だとはな……。発言に嘘があったのに魔道具が鳴らなかったから訝しんでソウルを見れば、あの悪魔がソウルに頬擦りしてたのが見えただ。これは茶番してる場合じゃないかと速攻を決めた訳だが……。まあ、犠牲がアレだけで済んだから御の字だろう」

地面に唾を吐き捨てるかのような声色でアルダープの存在を切り捨てたおんおんさん。

よっぽどダクネスへの悪質な粘着に怒り心頭だったのだろう。

……まさかとは思うけども、もう残り少ない魂を見て、この場を切り抜けさせるために力を使わせれば、あの悪魔の手で処理させられるからあの宣告をしたんじゃないかなろうか。

ダクネス曰く、幼い頃から下卑た視線を受けていて実際手出しをされかけた事もある、との事だったので、それこそ自身の手で始末したいくらいにキレていたようだし……。

あ、有り得る、とんでもない事に気付いてしまった。この事は墓まで持っていく事にしよう。

俺もまた隣の墓穴に埋められかねん……。

「い、いやあ、アルダープは強敵でしたね……」

「ふん、犬の餌にもならん結果だがな。まあ、これで私の恋人に対するドブ川みてえな汚らしい粘着質な嫌がらせも無くなるだろうし、万々歳だ。カズマくんも晴れて無罪だしな」

「あ、あはは……」

怒り狂ってるおんおんさんこっわ。近づきたくねえけどお礼言っておかないとな……。

「俺のために、まあ、殆どダクネスのためでしょうけども、色々と手配してくれてありがとうございます」

「あつはつは。流石にダクネスさんの件は後付けの理由に過ぎないよ。そこら辺に転がしておくかと思つてたのが、八つ裂きの挽肉にして犬の餌にしてやるぐらいに変わったただけだしな」

「喧嘩沙汰が立派な未解決事件に成ってるんですがそれは……」

「まあ、それはそれ、これはこれだ。諸々の手続きを終えたら帰れるんだ。それで良いのさ」

「は、はあ……」

まあ、温かい食事に温もりのある屋敷に帰れるんだし、素直に喜んでおくか。

あの悪魔も豚領主が死ぬまでは出て来ないだろうし、縁は切れたと考えておこう。

オイルライターの制作は少し置いといて、暫くはクエストで外に出て気晴らしするか。

ぶつちやけ、ベルディアの時のが残ってるし、デストロイヤーの分も報酬が入って来るだろうけども、折角身体を鍛えたりしているから使う場面が欲しいんだよな。

おんおんさんのような上級冒険者みたいなクエストは受けずに、ジヤイアント・トードみたいな簡単なのを受けておきたいもんだ。

……決して、めぐみんの日課の爆裂魔法に付き添った時にカエル共を冬眠から起こしたから減らしに行かなくちゃならないと焦っている訳じゃ無い。

爆裂魔法はネタ魔法ではあるが、見てくれは格好良いからつい見たくなるんだよ。

そんな男の子心と爆裂魂が組み合わさった結果、あの早期冬眠卒業を果たしたカエルの群れが爆誕してしまった訳で。

「……見なかった事にしちゃあ駄目だよなあ」

「ん？ 何かやらかしたのかカズマくん」

「いえ、俺って言うかその、めぐみんが……。カエルたちを爆音で目覚めさせちやつたんで、付き添ってた俺も同罪かなーって」

「……ふむ。そう言う事か。まあ、カズマくんなら大丈夫だろう。めぐみんにも責任を取らせるとして……。アクアさんとゆんゆんも連れて行ってくれ」

「あはは、そうします……。おんおんさんはどうするんですか？」

いやまあ、居てくれたら楽になるけども、俺のためにならないもんなあと後ろ髪を引かれる思いで断腸の心境で諦めざるを得なかった。

おんおんさんは何処か遠い目をして、疲れたように言った。

「この前ソウルを砕きまくったからその補充をしておかないといけないんだ。デスマーチする予定だからダクネスさんはこっちに連れて行く。デコイで釣って連続狩猟だ。取り急ぎ、ソウルを集めておかないと安心できないからな。……また魔王軍幹部が襲来するかもしれないし」

「……原因、アクア、っすかねえ」

「いやあ、どうだろうな……。きつかけはそうかもしれないが、ベルディアを倒した事が呼び水になった可能性もある。だからまあ、カズマク

んが考えているように自身のレベルアップを図るのは正しいよ。いざと言う時に、数歩進める体力があれば誰かを救えた、だなんて場面になって後悔するとか嫌だしな」

先日のおんおんさんの背中が爆炎に埋もれる場面が脳裏に蘇る。

あの時助けに入る事なんて出来なかったが、あそこまで絶望的ではない場面で果たして俺の足は動くのだろうか。

その相手が、不死であるおんおんさんではなく、もしも、ああ、もしもだ、アクアだったりしたら……。

無意識に右手を拳にして力強く握り締めていた。その時、俺はアクアを助けられるだろうか。

そんな俺の心境を見越してか、真正面から左肩に右手を置いたおんおんさんが笑みを浮かべた。

「頑張って努力して得たそれは必ず君の力になる筈だ。ただのカエルだと思わないで、何処の部位を潰せば有効か、高速で迫る舌の対処、考えられる弱点の考察、効率良くカエルを狩り続けられる身体捌き、剣の振り方一つでも考えれば考えるだけ選択肢が増える。カズマくんの長所は応用力だ。初級魔法を組み合わせて扱う発想の良さや、冒険者と言うラーニング能力を持つ可能性の職業である事、そして何よりも君は悪運の強さがある。最後まで諦めずに考え続ける。それがきつと君の強みになる」

「……はいっ!! ありがとうございます師匠!」

にこりと微笑みを浮かべるおんおんさんの言葉に胸の奥で炎が燃えた気がした。

ごうごうと俺のやる気をくべて燃え上がる熱さが込み上げる心地だった。

……師匠だしな、だなんて超絶につこり笑顔を見てハートを射抜かれる心地だったが、この人にはダクネスとめぐみんが居るからそれ以上の事を考えちゃいけない。

百合の間に挟まる男はシベリア送りか射殺刑だ、触れちゃいけない世界があるんだ。

「それじゃあ帰ろうか。久しぶりの屋敷だし、少し豪華な夕飯にしよ

うか」

「マジっすか!? いやあ、めっちゃ嬉しいっす。大人しく牢屋に入ってた甲斐があつたつてもんですよ」

「ふふふ、まあ得難い経験ではあつたな。今日はカズマくんのリクエストに応えようじゃないか」

「いやっおほおおううっ！ 最高だぜえええ！ ハンバーグでお願いします！ おっきな奴！」

「ふむ、私の小さな手だと大変だが……、まあ、今日くらいは良いか。絶品ハンバーグを御馳走しようじゃないか」

思わずガッツポーズをしてみました。念願叶ってハンバーグを食べられる！

おんおんさんが！ その小さな手で！ こねこねして！ ペたペたした手作りハンバーグを!!

これ以上の至福があるだろうか、いや、無い。可愛い女の子の手料理とか最高過ぎる。

はあああ、少しでもアルダープに感謝してやってもいいかもしれない。

まあ、あいつは今頃地獄で悪魔とランデブーだけどな！ デブなだけに!!

るるるん気分で若干スキップが出た俺を見て、おんおんさんが微笑ましそうに苦笑する。

……この際中身が男だろうが問題無い、見た目が可愛い女の子なんだから楽しまなきや損だろ！

牢獄に入れられ、アクアに懺悔室めいたテンションで色々語った結果、そんな悟りを俺は得たのだった。

「……今度、そこそこの酒でも用意してやるか」
無実の罪で投獄された俺を優しく癒してくれたアクアに少しくらいはお礼を言うべきだろう。

そんな事を考えていたからか、俺はすっかりと忘れていた問題と向き合う事を余儀なくされた。

屋敷へと帰る大通りでふんだんに金を注ぎ込んだのだろう立派な

鎧に身を付けたそいつと出くわしたのだ。

俺と同じくアクアに転生して貰った若干ナルシストっぽいリア充
糞野郎の……誰だっけ。

「サトウカズマ！ 約束通り色々と話して貰おうか！」

「選りによつてこのタイミンで来るのかよオツルギ」

「ミツルギキョウヤだ!! よもや裁判沙汰で投獄されていたとはな。
そんなお前にアクア様を任せられるか！」

「やっぱりそこに焦点が行くのな……。はあ、悪いが色々と疲れてる
んだ。明日にしてくれ」

「ふんっ、そんな事を言つて怖いんだろう。僕にアクア様を取られる
のが」

「……はあ？ アクアを？ お前が？ ナイスジョーク。お前にあ
いつの手綱を握るのは無理だろ。キャバ嬢に貢ぐおっさんの如く苦勞
するだけだぞ」

売り言葉に買い言葉、こいつは駄目だな、何にも分かってない。

あのポンコツ駄女神がどれだけ面倒なのかを全く理解してない。

と言うよりも、アクアがお気に入りのおんおんさんの庇護下に居
るって事を全く気付いてないだろ。

確かにアクアは俺の転生特典だが、ある程度意思を尊重して縛り付
けるような事はしていない。

そもそも、アクアに対する命令権がある訳でもない。

拘束力は皆無であり、俺たちは雰囲気でバディを組んでいるような
ものだ。

仮にアクアがこいつの下へ行つたとしよう。

毎日ゆっくりと暮らせる屋敷も無く、朝昼晩の食事を用意するも外
食のそれ、あの腰巾着っぽい女二人との争いは必至。

……いやあ、無理だろ。考えれば考える程、こいつにアクアを渡す
訳にはいかない。

「ま、そう言う事で、お前にアクアを取られる理由も無いし、さっさと
あの二人の所に帰れば？」

「どういう事だ!? 君の脳内で完結しただけだろう！ こうなれば、

実行行使も——」

ぞくり、と後ろからの威圧感に背筋が凍った。振り向いてみれば、良い笑顔のおんおんさんが居た。

恐らく俺が受けたのは余波だ。何せ、目の前のミツルギは冷や汗を流して、脚を震わせて奥歯を打ち鳴らして恐怖の表情を浮かべていた。

「ほお、良い度胸だな。アクアさんを物扱いし、あまつさえ力尽くで奪おうとするとは。……男の風上におけないなあ、少年。よっぽど実力に自信があるようだが、君のパーティメンバーの雑魚さ具合から推測するに、君のワンマンパーティだろう？」

威圧感を伴って小さな歩幅で近付いて来るおんおんさん。

それに恐怖して少しづつ後退るミツルギ。

まるで狩人と獲物みたいな立ち位置に、良いぞもつとやれと俺は内心ほくそ笑んだ。

「ここにアクアさんを入れたところで機能するとは思えないし、何よりも危険性が高いな。装備を見るに君が切り込んであの二人が後ろでうちよろするだけだろうし、アクアさんが居る必要性がそもそも無い。ぶっちゃけた話、君よりもアクアさんの方が重要度が高いんだ。前線に出て真つ先に切り結んで、囷と前衛をやる事しか能が無さそうな君じゃあアクアさんが危機に陥った時に助けに入れれない。それどころか、あの二人を庇って死ぬ未来しか見えない。そんな三流パーティにアクアさんを入れさせる訳にはいかないな」

「な、なんでそんな事を言えるんだ君は。僕ならアクア様を守りながらちやんと戦える！」

「……根本的な所から間違っている。前衛の君の隣に後衛のアクアさんを置く意味が分からない。なんだ、アクアさんは君専用のポーション係か？ 歩くPOTか？ 随分と傲慢なんだな君は。それだから大切な事を見落とすんだ」

「……何を、言ってる」

「お前とあの子たちのレベル差幾つだ？ 明らかに十以上は離れているだろう。パーティの安全マージンを自分一人で担おうだなんて馬

鹿がリーダーとか最悪が過ぎる。お荷物になった二人を助けるためにお前が無茶して無駄死にしてそれで終わりだよ。あの二人は君の情婦か何かか？ 見せびらかしたいから連れているだけか？ 随分と下半身がだらしないんだな、魔剣の勇者候補殿？」

うつわあ……、めっちゃくちやミツルギが苦い顔をしてたぞ。

多分、レベル差酷いんだろうな。まあ、こいつが騎士ロールして率先して倒してたらそりやそうだろうな。

ある程度戦闘に加わらないと経験値は入らないし、そもそも後ろからチクチクするだなんて誰でもできる。

爆裂魔法一辺倒のめぐみにだって後ろから槍でチクチクするくらいはできるんだぞ？

「ぼ、僕と彼女たちの間にそんな如何わしい関係は無い！ 僕の仲間を侮辱するだなんて！」

「……え？ お前童貞なの？ もしかして、あの二人に寄生されてるってパターンか？」

「ど、童貞じゃ、んんんんっ!! 貴様、サトウカズマ、貴様あ！ 小さな女の子の後ろに隠れてそんな悪態を吐くだなんて恥ずかしくないのか!？」

「いや、別に。俺はお前と違っておんおんさんの事を信頼しているし、何より実力差をちゃんと理解してる。追いつくために努力もしてるし、あんな男に媚びるだけの恰好をしている奴らよりもしっかりしてるつもりだ。何と言うか、お前はアクアを求めるよりも自分のパーティーの事考えた方が良くぞ？」

「余計なお世話だっ!!」

恐らく精神的に限界が来たんだろうな、激昂してミツルギが俺に長剣の切っ先を向けた。

……そして、おんおんさんの穏便に済ませようと考えていたラインを越えたのだろう。

ミツルギの懐にするりと入り、見事なアッパーカットで顎を打ち抜き、地面に昏倒させた。

ワザマエツ！ と言いたくなるような見事な動きだった。

膝のバネと腰の入った昇竜拳でKOされたミツルギの手から長剣が零れて地面に転がった。

そして、近くに居た衛兵にミツルギを託し、一つ溜息を吐いたおんおんさんは歩き出した。

まあ、なんだ。お前は俺に向けたつもりなんだろうけども、その間にはおんおんさんが居た訳で。

留置所に連れていかれるのだろうミツルギに合掌。二度と顔見せなくて良いぞ、面倒だし。

恐喝の証拠として衛兵に拾われた長剣と共に残念なイケメンが運ばれていく様を一瞥して、ちよつとすつきりした気分でおんおんさんについて行く。

アホな事をしたミツルギの事は頭から追い出して、夕飯に出るであらうおんおんさん特製のハンバーグに思いを馳せる事にした。

30話

カズマくんが冤罪勝訴をキメて屋敷に戻って来た翌日の事。

私は森林の中で、獅子の身体から生えた短い蝙蝠の羽根に蠍の尾をゆらゆらと揺らしながらのっそりと歩くマンティコアを迎え撃っていた。

マンティコアの特徴は以上のキメラっぽい姿なのだが、特筆すべき箇所は顔である。

「ぐおおおおおおお!!」

老人の顔、つまりは人面犬、いや、獅子の身体だから猫科で人面猫、いや、人面獅子……?!

獅子にしておこう、猫を殺すのは私の中では御法度だ。

既に正気を失い知性を失ったからと言って老人、つまりは人であった知恵は残っている。

前足を振り下ろしながら、刹那の隙を狙って蠍の尾を突き刺しに掛かる姿は非常に狡猾だ。

「キュオオオオンツ!!」

そして、頭上では獅子の身体に鷲の翼と顔を持つグリフォンが宙を飛び此方を威嚇している。

いや、生態からしてマンティコアを狙っているのだろうか。

それとも、不倶戴天の仇として名高いマンティコアと対峙している私を嫉めて漁夫の利を得ようとしているのかもしれない。

ユウキさんにベルディアの鎧から作って貰ったラージシールドを眼前に構え、襲い掛かったマンティコアの一撃をバックステップで避けながら、更なる追撃のために前に進んで狙いの甘いそれを横へ弾くようにパリイを決める。

軸を崩され足を滑らせたかのようにつんのめるマンティコア。

その瞳へパイルハンマーの切っ先を突き刺し、トリガーを引いた事で爆発的な加速度で杭が機構により押し出され、脳漿を撒き散らす勢いで頭を吹き飛ばした。

うむ、対生物の得物としてこのパイルハンマーは素晴らしい出来

だ。

冷却を必要としたパイルハンマーを再び変形させて杭を戻しておく。

あつさりとくたばったマンティコアを嘲笑うかのように甲高い雄たけびを上げるグリフォンを警戒せざるを得ないからだ。

「……まあ、生態が本当にその通りなら杞憂なんだけだな」

キュルキュルと喉から音を出してマンティコアの前に降り立ったグリフォン。

ねえ、どんな気持ち？　ねえ、どんな気持ち？　と嘲笑うようにマンティコアに文字通りの死体蹴りを放つ光景を見てめっちゃやくちや仲悪いんだなと何とも言えない気分になる。

煽りに煽って満足したのか、此方に向けてペこりと一礼したグリフォンがマンティコアを捨て置いて再び羽ばたき、何処ぞへと去って行った。

……ふう、連戦にはならなかったな。

ベルディアの盾とパイルハンマーをソウルに仕舞い、剥ぎ取り用のナイフを取り出してマンティコアの解体を始める。

農村地帯から少し離れた山奥で縄張り争いをしているグリフォンとマンティコアを何とかして欲しいと言う依頼を達成した私は、脳内にリスト化した依頼の一つに横線を引く。

アクセルのギルドにあった高難度の依頼を片っ端から受けて、ソウルの足しにすべくこうして狩猟している訳だ。

「お疲れ様。そのパイルハンマーと言ったか、凄い威力だな。マンティコアの頭を一発とは……」

「それだけの威力を出すために結構掛かっているからな。実に良い出来だ。物理的な火力の低い私にはぴったりの武器だ。パーフェクトだユウキ、とでも言うべきかね」

木々の間から歩いて来たダクネスさんに労われながら、マンティコアを解体していく。

マンティコアは肉は食えないので魔法の媒体になる心臓、蝙蝠羽根と獅子の爪に蠍尾を剥ぎ取る。

残った残骸は『混沌の火の玉』で焼却し、後始末を終える。

『クリエイトウオーター』で手を洗いながらそれらを仕舞い込み、ダクネスさんへと向き直る。

久々にピカピカの金属鎧に身を包んだダクネスさんへと近寄り、トレントを召喚して二人で乗り込む。

「ええと、次は……森を徘徊する一撃熊の排除だな」

「戻らないのか？ 確かに戦いは一瞬だったが……」

「数を熟したいんだ。疲れてもいないしな」

次の場所、一撃熊が目撃されたのはこの近辺であり、恐らく縄張り争いで場が荒れて逃げ出した個体だろう。

ソウルを感知する瞳で大体の位置を割り出し、トレントで足早に駆けて現場へ向かう。

少し遠目の藪をがさがさと漁る一撃熊を見つけ、依頼書にある傷の特徴などを照らし合わせて個体を識別する。

まあ、別に違っても狩るんだけどな。食料になるし。

だが、依頼がある以上、その個体を狩っておかねばならないのは当然の事だ。

頬に矢が突き刺さった傷跡があり、首元が白い個体……、うん、こいつだな。

トレントから降りて、盾だけを取り出して右手に呪術の炎を灯す。

マンティコアのように大振りの腕を振るってくるモンスターであれば簡単にパリイできるが、鋭い一閃めいた素早い振りをしてくる一撃熊は不安が残る。

なら、最初から呪術主体で戦った方が効率的だ。

此方を匂いで察知したのだろう、唸り声を上げて威嚇する一撃熊が二足歩行に移行して両手を構える。

一撃熊は突進のように近付き、首を狩る戦法を取る事が一般的だ。

「グウオオオオオオンッ!!」

前に傾くように前傾姿勢を取り、四足走法で突進するように駆ける姿は正直怖い。

ある程度近付いて来たら再び二足歩行に戻って利き腕を振ってく

るのが一撃熊のパターンだ。

迎撃する瞬間は二足歩行になる瞬間、利き腕をブローバックするその時を狙い、呪術を解き放つ。

『大発火』！』

「グオンッ!?!」

一瞬にして前方に解き放たれた爆炎に身体を吹っ飛ばされた一撃熊。

後ろに尻餅を搗くように倒れた所を出の早い『苗床の残滓』を放つて追撃する。

咄嗟に身を捻ったものの右半身に火球を受けた一撃熊が焦げながら痛みを吠える。

「喧しいッ!!」

ソウルから取り出したグレートソードを上段に構えてそのまま振り下ろし、脳天を叩き割る。

頭の上半分を真っ二つにされて絶命した一撃熊を見下ろして、一息吐く。

ダクネスさんと協力してロープで木の枝に吊り上げて、血抜きをしていく。

この一撃熊の特徴である首から上を切り取り、血管に指を入れて『クリエイトウオーター』を詠唱して中を雑に洗い、部位を提出する用の皮袋に仕舞い込む。

一部の討伐依頼には依頼書の特徴のある部分を提出する事が義務付けられている。

まあ、別の個体を倒して提出する輩が前に居たらしく、不正防止のためと安全策のためにそう規定されているらしい。

そりやまあ、暴れ回る元凶を倒さなきゃ安全にならないからな。

もう安全だと現場に向かった依頼者に危険が及ぶのであれば依頼の意味が無いしな。

ギルドに場所を指定して回収して貰う事も選べるのだが、その場合は時間が掛かるので鮮度は落ちる。

食用にできる部位が非常に不味くなるので、私はその場で血抜きを

してソウルに仕舞い込む事になっている。

まあ、流石に大きな個体だったりすると血抜きが大変なので、ダクネスさんが居てくれて良かった。

さて、と。血抜きまで暫く掛かるので別の事をするか。

「と、言う事で『デコイ』を使つて欲しいんだが」

「どう言う事で『デコイ』を……？ まあ、良いが……」

首を傾げながらダクネスさんが一撃熊の隣で『デコイ』を発動する。

因みに、このクルセイダーのスキルである『デコイ』は敵の注目を集め、ヘイトを集中させると言うものだ。

そして、敵に囲まれてフルボッコにされたいと言う野望のあったダクネスさんはこれをせっせと強化し、その範囲、そのヘイトの強さを非常に高めている。

これをこんな場所で行つた場合はどうなるか。

「ギィギギツ!!」

「グギャアギャー!」

「ブウオオオオオオ」

「ギャアウツ!」

「グウルルルツ!」

意図的なモンスターハウス（屋外）の発生が起きる。

たゆんたゆんなおっぱいを持つダクネスさんに下卑た笑みを浮かべて走り寄つて来るモンスターたち。

それを横合いからヘイトを奪いながら不意打ちしていく。

ゴブリン共をブロードソードで叩き切り、はぐれのオーガの両足を落してから首を落とす、威嚇しながら木の枝から躍り出た初心者殺しの頭をグレートメイスで叩き潰し、素早く近寄つて来たハウンドドッグ共をそのままホームランする。

まるでボスラッシュが如く集まりつぷりに引き攣るダクネスさんだが、その視線が此方に来ているように思えるのは何故だろうか。

「あの、お、おんおん？ これはいったい……」

「ん？ 釣り狩りだよ、釣り狩り。ダクネスさんがヘイトを取つて、こちらのモンスターを集める。私がそれを片っ端から狩る。実に効率

的な狩りだな」

「いやいやいやいや……、流石にそれは……」

「だって、態々歩き回ってモンスターを釣るのも面倒だろう。ここ等に居る程度のモンスターならこうしてぶち殺せる訳だし」

「その割には初心者殺しも混ざってるんだが……?」

「ん? 何か問題があったか?」

「いや……、私の考えとおんおんの考えが全く以って違う事を理解しただけだ……」

この後めちやくちや狩猟した。

だなんて、一行で済ませられるような展開が続き、最終的にゴブリン二十二匹、オーガ四体、初心者殺し二匹、ハウンドドッグ十六匹、一撃熊四体、コボルド十四匹を仕留めた。

ううむ、久しぶりに存分に狩りができて楽しかった。

さつきまで生命だったものが辺り一面に転がっており、青々としていた光景が赤々としたものになっていた。

盾と武器を仕舞い、手を組んで伸びをする。んー、流石に三時間くらい戦い続けると疲れるな。

昨晚の疲れとはまた違った疲れに身体がやや怠い。

「……気は済んだか?」

「ん、まあまあだな。依頼書のゴブリンの巣とコボルドの巣はこいつらだろうし、手間が省けたな」

「ああ、だから近辺の依頼を片っ端から受けてたのか……。成程、勇者候補と呼ばれるに相応しい成果だな」

「そうか? まあ、レベルもソウルも増えたし、後始末しなきゃなあ……」

「これは流石にギルドの人を呼んでも良いのではないか?」

「……それもそうだな。食べられる一撃熊だけ解体して、後は任せるか」

流石にこの死体の山を二人で片付けるのは大変だしな……。

ダクネスさんをトレントに乗せてアクセルまで行って貰い、私は現場保持と血抜きのためにその場に残った。

数刻後に現場に戻って来たダクネスさんやギルドの回収員が青褪めて……、ああ、臭いか。

モンスターの腸から汚物の臭いや少し時間が経って温まった血などから香ったものが鼻にきたのだろう。

私はもう鼻が死んで、もとい慣れてしまっているから平然としていたが。

「ええと……、全部換金で宜しかったでしょうか？」

「ああ、必要なものは既に抜いているから問題無い」

「一日でこんなに成果を上げるだなんて……、紅き狩猟姫の二つ名は伊達じゃありませんね」

「……なんかまた二つ名増えてないか？」

「おおっと、これから解体しなきゃならないので急がなくては、ではっ！」

流石に量が多いので、ある程度解体して運搬するらしい。

警護が必要かと尋ねたが、私の狩り方からして周囲のモンスターを根こそぎ狩猟しているだろうから問題無いと氣遣われてしまった。

まあ、見た目は、いや、年齢的にも子供だしな私。目の前の惨状は年相応のそれではないが。

今の時間は大体三時頃だろうか、このまま残っていても仕方が無いのでダクネスさんと共にトレントに乗って下山する。

夕方に差し掛かる前にギルドに戻り、外に作られた専用の受付の方へと向かい、依頼書と一緒に討伐部位を提出する。

流石に酒場がある中の受付で一撃熊の生首とかは出せないからな。

一部の依頼は此処で討伐部位を提出する事で依頼達成の判定を貰う事になっている訳だ。

桶の上に討伐部位となる一撃熊の生首、マンティコアの蠍尾針、ゴブリンとコボルドの右耳を提出し、依頼達成の判子を貰う。

これを中の受付に提出する事で一連の報告が完了し、無事依頼達成となる訳だ。

「……えっ、これを一日で……？ うわあ、ベテラン冒険者でも此処まで速い人は居ませんよ……。どうやったんですか？」

「うちのクルセイダーが『デコイ』を色々強化しててな。それで近辺のモンスターを集めて纏めて狩猟しただけだ」

「……ええと、おんおんさんのパーティーって猟団規模でしたっけ……？」

「ん？ いや、私とダクネスさんの二人だけだ。実際に狩ったのは私だけだな」

「そ、そうですか……。流石は紅き狩猟姫ですね……。狩猟鬼の間違いじゃないかしら……」

「……私としては二つ名は認めてないんだけどな。誰も彼も面白可笑しくしているだけだろう」

「いやあ、こうして実績もある訳ですし……。アクセル最優と名高いのも無理はありませんよ」

「そうかあ……。まあ、私はそもそもが狩人だったからな。統制された魔王軍の軍勢ならまだしも、はぐれのモンスター共を狩る程度、朝飯前に過ぎんよ」

「……おんおんさんがアクセルに居てくれて本当に良かったです。今日はお疲れ様でした」

「うむ？ ああ、まあ、いいか」

報酬金を受け取り、ソウルに仕舞い込む。

私とダクネスさんの財布は私が握っているので分配はしない。

必要な時には相談の下、必要経費として捻出する形になる。

まあ、それにダクネスさんは実家から送られてくるお小遣いが貯まりに貯まっているらしいしな。

そう言う事もあって即金を必要としないので箆笥貯金もといソウル貯金しておく訳だ。

普段なら酒場で一杯引つ掛けていくのだが、流石に衣類に染み付いた臭いもあつてさつさと屋敷に帰りたい。

消臭剤を錬金術で作ってあるのだが、自分の体臭を気付けないように何処まで効果があるのか分からないからな。

一応使用しているものの、万が一があれば酒場では興冷めになつてしまい迷惑になるから長居はすまい。

「今、おんおんさん依頼書を束で渡さなかつたか……?」

「いやあ、そんな訳……マジじゃん、受付嬢のアンナさんめっちゃ持つてるじゃん」

「さすがは、紅魔の里でも指折りのツワモノ……。狩猟はお手の物と言う訳ですね……!」

「強靱! 無敵! 最強! どんなモンスターも、粉碎! 玉砕! 大喝采! ですわ〜」

「流石はおんおんさんだ! そこに痺れるっ、憧れるうっ!」

「普通なら嘘くせえって悪態吐くけどおんおんさんだもんな……」

「おんおんさんだしなあ、ってなるよな」

……なんかまた私の評価が上がっている気がする。
いやまあ、デストロイヤーの一件で大分好感度を稼いだっぽいけれども。

此処まで持ち上げられてしまうと……天狗になってしまふなあ、ふん。

ニコニコとしていたらダクネスさんが何故か口元を押さえていたが、まあ、許そう。

……だが、私の羞恥心は許すかな!?

上品に口元押さえて微笑を浮かべる姿がお姉さん振ってて可愛いから許そう!

……自分の心に聞いたら許す判定が出てしまったので許すか。
まあ、この場では、だが。

「——ツ!? な、何か嫌な予感と期待が織り交ざったかのような悪寒が……」

「気のせいだろう。ああ、多分、きつと、メイビー」

「ううむ、誤魔化された気がするが……、おんおんが可愛いからいいか……」

お互いが弱点のせいでも何とも甘々な判断である。

惚れた弱みと言うもんなのかね。肩を竦めて屋敷へと戻って行く
と、途中でジャイアント・トード狩りに向かったカズマくんたちと鉢
合わせた。

「どうやら帰りが重なったらしい。……ところで、何でめぐみんとゆんゆんがぬちやぬちやなんだ？」

「聞いてよおんおん。めぐみんったら私を肉盾にしたの！ だけど咄嗟に手を掴んじやって、な、仲良く飲まれちゃって……」

「何処に仲良し要素あつたんですか。……はあ、ぬるぬるで気持ち悪いです。お仕置きとしてゆんゆんはお風呂場の前で正座ですね。私が出るまで反省してください」

「何か私が悪い事になってる?! 元を言えばめぐみんが私を前に突き出したからだよね!」

「あのカエルは口の中でモグモグしてる間は大人しくなるんですよ。それを教えてあげようとしただけです」

「いや、普通に『ライト・オブ・セイバー』で私が倒せば良い話だよね……?」

「いやまあ、そうですけども……」

「……もしや、めぐみんが不機嫌なのって私とダクネスさんで狩りに行つたからか？」

「流石にデコイ狩りにめぐみんを付き合わせるの危ないから呼ばなかったのだが……」

「ううむ、ちゃんと説明しておいた方が良いな。機嫌を取っておくか。」

「と、思っていたらダクネスさんがめぐみんの耳元に何かを囁いた。段々とめぐみんの顔がうわあと言うドン引きの表情になり、此方を見てうわあと言った。」

「……今日ばかりは仕方ありませんね。私が折れてあげる事になります。さ、流石にモンスターのレストランに巻き込まれたくはありません……」

「分かってくれて何よりだ。……あの津波のように押し寄せるモンスターを見て、流石に肝が冷えたぞ。昔の自分がした事ながら業の深い事をしてしまった……」

「どんよりとした二人が揃って屋敷に入って行き、私が一人ぽつんと残される。」

いやまあ、カズマくんたちが残っては居るんだけどな、情情的に取り残された感があつてだな……。

「ええと、何したんです？ あのダクネスがあそこまでブルーになるなんてよっぽどじゃ無いっすかね」

「いやほら、オングで安全マジジン帯のモンスターを釣って集めて纏め狩りするだろう？ アレを『デコイ』で再現して手間を省いたんだ。ゴブリンやらオーガ、初心者殺しにハウンドドッグ、後は一撃熊とコボルドと連戦して狩ったんだ。後始末はギルドの回収員にお任せしてな」

「うっわあ……。アマプラのアマゾン何かですか……。？ 定点狩りをすると言ってもらアルでするのは流石に危険では……。って、そうだったこの人死なねえわ。んでもってダクネスは耐久極振りだからこれまた死なないわ。あー……。うん、めぐみんがこつちに居た理由それかー。そりゃあんな反応するわ、誰だつてそーする、俺もそーする」
「ええ……。モンスターが百匹群れたところで一対一を百回すれば殺し切れるだろう？」

「……。あの、おんおんさん。まさかとは思うんですけど、一度死んで死生観壊れてませんか？」

「そんな事ある訳無い……。だろ。多分、あれ、そう言えばあの程度なら別にそこまで痛くないから良いやとか思つてたような……。実際、体力削り切られなければエスト瓶で致命傷から健康体に全回復できるし……」

「……。暫く休んだ方が良いかもしれませぬね。この街にカウンセラーとか居たっけかな……」

もしかして、もしかするのだろうか。

私、デストロイヤーに焼却式デストロイイされて死生観が狂つてる？
と言うよりも死への許容度が下がったのだろうか。ある程度であれば死にはしないし、仮に死んでも生き返られるからと籠が外れていいのだろうか。

考えれば考える程カズマくんの言葉が的を射ていて否定できない。
ああ、うん。ゲームの中で火の無い灰があんな化け物ボスに立ち向

かえる訳だ。

繰り返し返し戦う事が出来るからこそ、次を考えてしまって、今の恐怖を麻痺させているのか。

死にはしない、生き返れる、だから、死ぬ程痛いそれを受けても次には目を覚ましてしている事が分かっているから前に進める。

いや、違う。これは怯えだ。死を認識しないという形で恐怖を紛らわせているに過ぎない。

ゾンビ映画でヒーローを気取って呐喊する主人公のように、目の前のそれをフィルターして誤魔化しているに過ぎない。

けれど、それを異常であると認識できない異常を抱えているのであれば、指摘されなければ分かる筈も無い。

その事に絶句している正気の私と、デコイ狩りが効率的で大変良かったからまたやろうと考えている壊れた私が同居している。

狩猟の時に、これぐらいなら倒せる、アレも倒せるならこれも、こいつもきつと殺せる、殺してみたら考えよう、だなんて自分の中の定規が段々と伸びているように感じていたのを思い出す。

「……やばい、想像以上に私の死生観が壊れてる。それこそ細部を知るゲームの中に転生したオリ主君並みにぶっ壊れてる。うつわぁ……、耐久極振りのダクネスさんで良かった。間違えたらモンスターに殴り殺しにされてた可能性があったな……。仮に私が死んだらそこに取り残される訳だし、あぁ……、ミツルギくんに説教かました私が棚上げしてどうするんだ」

これは要反省案件だな。予想以上に私の安全マージンの尺度が壊れているのを理解してしまった。

うんうんと唸るカズマくんに礼を言い、とぼとぼと屋敷に入り風呂場へと向かう。

汗と乾いた返り血に塗れたカルラ服を樽へ投げ入れ、下着と靴下を脱ぎ去る。

魔導シャワーを頭から浴びながら、ぼーっと身体を伝って流れていくお湯を見つめていた。

湯舟に浸かり、壁に背を置いて天井を見やる。冷血な思想を温める

ように、お湯の温かさに心地良さを感じていると眠気が来た。
うつつらうつらと意識が揺れて――。

其処は祭壇だった。

純白の清い聖域を彷彿とさせる古代的な意匠が施された其処は、荘
厳なる祭壇であった。

深き穴を囲うように作られたその祭壇を見つめる瞳は私だけ。

頭上から穴へと落ちていく無数の死体。

それは人であったり、モンスターであったりと千差万別だった。

各々が死因と見られる傷跡や病死か寿命を終えた様々な身体で落
ちていく。

見下ろしても底が見えない穴を覗けば下の方に神々しく燃え盛る
炎の柱が見えた。

死体はその炎の柱に飲み込まれるようにして一瞬で燃えて、柱の周
りからふわりと残りかすである灰が上昇気流に乗って空へと登って
いく。

灰は複数で集まって固まり、まるで胎児のような小枝となって、鮮
やかさを取り戻した物から頭上の逆巻く渦へと還って行く。

それが、ずっと、ずっと続いていた。それを、ずっと、ずっと見つ
めていた。

ふと、自分の掌を見やれば灰色に染まっていて、気付けば身体全身
が灰色で、触れてみればサラサラと零れては元に戻る、灰の身体だっ
た。

あの枝が私には無いのだと、火の無い灰の真実を理解してしまっ
た。

灰で出来たままだから灰色のまま、あの青々とした鮮やかな枝が
薪のように成長するのだと知覚しながら、それが私には出来ないのだ
と何故か理解できてしまった。

足元を見やれば灰が溜まっていて、後ろを見れば祭壇を埋めるかのような灰の山がそこかしらに積もっていた。

まるで、そこで人の姿程の灰が倒れたかのような、そんな塊が其処にはあった。

それらは全て目の前の祭壇の穴を指しているように見えた。

穴の淵に座り込んで神々しい炎の柱を見続ける。

見惚れていたのだろうか。それとも……。

ぞわぞわと身体が蠢いて、胸元に罅が入ったような気がした。見やれば罅の奥には闇があった。

この世のものとは思えぬ程に悍ましく、それでいて仄暗く燃える炎のようにそれは見えた。

もしも、この炎を持ったまま此処を飛び降りたのなら、あの輝かしい炎は黒く染まるのだろうか。

それとも、あの火をこの暗い炎が飲み込んで、この祭壇に暗がり齎すのだろうか。

……分からなかった。

一つだけ言える事があるならば、今の私にはそれができないと言う根拠の無い確信だけがあった。

まだ、足りない、もつと、増やさなければ、あの炎を手にする事はできない。

不意に左肩を叩かれた。隣を見れば、裸の私が居て座っていた。すとなぺたんつるんな身体に違和感を感じ、胸元を見れば木々の根のように皺くちやで、枯れているかのような印象を感じさせた。

そして、隣の私は左目を指さして、ニタリと悍ましい笑みを浮かべた。

嗚呼、そこに映る瞳に暗い輪っかが浮かんでいて、八つも揃えば瞳を黒に染めるのだと感じた。

もしも、虚ろな黒に染まれば、それはきつと暗い穴のように見える事だろう。

……暗い穴、それはダクソ3における亡者化を齎すアイテムだ。

これを所持して死に至る事で呪いが蓄積し、亡者の如き姿とマイナ

スステータスを受ける代物だ。

ああ、成程。私が人として死ぬる回数は八回までか。それ以降は亡者と化して、本格的に火の無い灰の末路を辿るのだろうか。

そう理解したのを察したのか、目の前の私は頷いてから私の左目を指さしてから指先を一回ぐるりと円状に回した。

そして、ぼろぼろと崩れ去って何処かへと灰のまま流れて行った。

溜息を吐き、再び神々しい炎の柱を見やる。

段々と自分の意思と意識が戻って来たようで、考えが回るようになってきた。

デストロイヤー戦で死んだ事で私はこの場所と縁を作ってしまったのだらう。

深淵を覗く時、深淵もまた覗いている。怪物を見ていた筈の自分が、怪物ではないと誰が証明する？

死を通じてこの場所を一度通過した事で、此処に来たと言う縁が結ばれたのだらう。

そして、死生観の崩壊と言う自覚を持った事でこれを理解し、転寝を通じてこの場所に繋がってしまったのだらう。

つまり、あそこに見えるのがこの世界の始まりの火であり、頭上のアレは輪廻転生のための渦で、この祭壇を取り仕切る者こそがアクアさんたち女神の役割なのだらう。

私がこの世界に転生する前に居たあの場所が、頭上の渦の出口か途中であれば辻褄が合う事だらう。

生と死の境界、それこそがこの場所の役割なのだらう。

こうして祭壇の形を取っているのも、もしかしたらこれを観測する私の脳が勝手に作り上げた偶像なのかもしれないし、本当に存在しているのかもしれない。

または世界中の思考する者たちの無意識的な生死感を投影した場所なのかもしれない。

まるでシユレディンガーの猫のようにこの場所は曖昧だ。

故に、曖昧な夢を通じて繋がったのだらう。

灰に埋もれるように上半身を地面に降ろし、頭上の渦に登っていく

枝木を見つめてから目を閉じる。

……目を開けばそこは風呂場の湯舟の中で、どれだけ眠っていたのだろうか身体が怠い。

茹だるような温度でなかったのが幸いか、背を預けていた事で溺れる事も無かった。

湯舟から這い出て、魔導シャワーのある壁に取り付けられた鏡を覗く。

左目の瞳の淵をなぞるように仄暗い中空の円が重なっており、暗い穴を取得しているのが理解できてしまった。

残り七回。それが人として私が死ぬる回数だ。

死ぬ度にこの円が増していくのだと予想できてしまった。

この残機を越えた先に私は果たして人を保っているのだろうか。人の形をしたナニカになってしまっただけではないだろうか。

死生観が壊れて生きる大切さを忘れかけていた私には良い薬だった。

もつとも、その対価は非常に厄介な代物であったが。

もう少し堅実に生きよう、そう思い直す良いきっかけになった。

31話

先日のデコイ定点狩りでの失敗を踏まえて安息日にした朝方の事だった。

朝からパンケーキを焼いて珈琲と一緒に優雅な朝ごはんにした事で少し気分が良かった私は、何やら冷や汗を流して一枚の手紙を手元に置いて目線を泳がすダクネスさんの様子がおかしい事に疑問に思っていた。

それはまるでカード金融会社の支払日を一日間違えて覚えていて、ギリギリに振り込みに行った挙句に未決済となり使用を止められた翌日の日のような焦りっぷりであった。

その一枚の手紙は高級そうな様子であり、そして何よりもダステイネス家の紋章の封蝋がされている事から実家から送られてきていたのだろう。

……で、何でそれを見て今更思い出したかのように青褪めているのだろうか。

「こ、これはその……。……見合い話だ」

「……は？ すまない、もう一度言ってくれないか。わたしは、いま、しよきをうしなおうとしている」

「ま、待ておんおん！ 私だってこんな事を言いたくは無かったが、巧妙に嵌められてこんなタイミングになってしまったんだ！ それもあれもこれも全部私の親が悪いんだ！」

まあ恋人の言う事だし、一旦落ち着いて聞きに徹して見れば何と言う事だろう、手遅れであった。

何でもこれは数日前に送られてきていた手紙であり、色々と忙しかつた事もあり読むのを後回しにしていたようだった。

そして、こうして安息の時間が取れたので思い出して読んでみれば、冒険者稼業を続けるのであれば条件を付ける、と言う題目で見合いをするように命じられたらしい。

ダステイネス家においてダクネスさんは一人娘であり、高齢出産かつ難産であった事から跡取りが絞られている状態である。

要するに、死んだらダステイネス家の血筋が途絶えるから産む準備はしておいてね、そのためにも縁談を持つて来たから会うくらいはしてね、縁談を結ぶ事を強制はしないがお見合い自体を蹴るのであれば冒険者稼業はそこで終わりにさせるから覚悟しておいてね、と言う内容だったらしい。

そして、そのお見合いの日が……今日の午後であるらしい。

相手はアルダープの養子の息子であるらしいバルターと言う青年だった。

「……ああ、成程な。先日的一件でアルダープが地獄に出荷されて、繰り下げでこのバルター青年が領主になったから力添えが欲しい訳だ。んで、あの親とは違って品行方正で紳士的な外面と中身をしているからダクネスさんのご両親がこれ幸いとお見合いを受けた訳か」

「……すまないおんおん。まだ両親におんおんの事を伝えていなかった私のミスだ。そう言う事もあって力を貸して欲しいのだが……つて、何で皆黙っているんだ？」

朝の団欒と言った具合にリビングでこの話をしたもんだから、ダクネスさんが大貴族ダステイネス家の令嬢である事を知らない面々は度肝を抜かれていた。

時折私とダクネスさんを見比べるあたり、えっ、この変態が貴族の娘？ でもってこの状況おんおんの琴線に触れててやばくない？ という心境なのが見て取れる。

……最近のダクネスさんは変態じゃないぞ？ 被虐性癖も表に出す事はしなくなり、耐久極振りの女騎士めいた冒険者として認識されているのだから。

え？ 裏ではどうなのかって？ それはまあ、裏話となるので此処では話はすまい。

「嘘でしょう、ダクネスがああ王都でも一大貴族のダステイネス家の令嬢だったなんて……」

「でも言われてみればあの金属鎧とか良い値段するでしょうし、所作も上品で容姿も整ってるし、あの奇行さえ無ければ立派な貴族令嬢だと思っわよ？」

「ううむ……、皆の見る目が変わってしまうのではないかと思つて黙つていたのだが、案外軽いな……」

「そりゃまあ、おんおんの恋人な訳ですし、今更だと思えますよダクネス。何せ、私も含め二人も女の子を娶る予定なのでですから、それ以上のインパクトつてそうそう無いと思えますよ？」

「私としては女の子同士で恋愛つて言う部分が良く分らないんだけどね……、めぐみんが、めぐみんが遠くに行っちゃった……」

「いや、ゆんゆん、地球には、俺のかつての故郷にはこういう名言がある。女の子は女の子同士、男の子は男の子同士恋愛をすれば良いと思うの、とな。……あ、俺はノーマルだから男はノーセンキュー。そういう趣味はまああったくないからな！」

そんな和気藹々とした雰囲気だ。ダクネスさんの表情が軽くなる。

「いやまあ、このパーティ転生者二人に元女神一人に紅魔族二人だぞ？」

十二分に濃い面子なのだからそこに貴族令嬢が混ざつても薄まる訳が無いのだが。

「では、改めまして、私の名はダスティネス・フォード・ララティーナ。ダクネスと言うのは身分を偽るための冒険者としての仮の名前だった。……そうだな、これからはララとでも呼んでくれ。それが私の愛称なんだ、仲の良い皆にはそう呼ばれたい」

「そう言えば時折おんおんがダクネスの事をララつて呼んでたのつて……」

「ああ、その事ならめぐみん、とつくの前におんおんは知っていたからな」

「ふーん、そうですかそうですかー。……随分と前からこつそり付き合つてたんですね」

「うぐつ、そ、それはだな……、いや、否定はすまい。ただ、あれを彼氏彼女のそれと言って良いのかは別としてだが……」

「どーせ、私たちの知らない場所でくんずほぐれつしてたんでしよう。被虐願望マシマシの変態クルセイダーが、今じゃ立派なメイン盾じゃないですか。どんだけえげつない事してたんだか……」

おおつと、めぐみんが拗ねてダクネスさんもといララとの修羅場が始まってしまった。

いやまあ、うん、最初から健全なお付き合いをしていた訳じゃないし、お互いの性欲と性癖を満たすための関係から発展した訳だし、後ろめたさがありありなのでそつと視線を反らさずには居られなかった。

まあ、それがきっかけで白状したようなものなのだが。

めぐみんがぷくうーと頬を膨らませて本格的に拗ねてしまったので、ご機嫌取りにソファに座るめぐみんの後ろからあすなる抱きする。

「すまないな、私とて元男で色々と持て余してたんだ。流石にそれをめぐみんにぶつけるのは年齢的にアレだったから、つい、な。いやまあ、否定はしない。私はそう言う目でめぐみんを見ていた事もあったからな。だから、そう気を落としてくれるな。今はめぐみんだって私の大切な恋人なんだから」

「う、むむむむむ……、し、仕方ありませんねえ。夫の移ろい易い心を射止めるのも妻の役目ですからね、ここは絆されてあげます。……だからちゃんと言った魚には餌をやるんですよおんおん」

「……はい、ご希望通りにしましょうとも」

「えへへ、ゴネ得ですね、ゴネ得。えへへ……」

私の後ろから肩に回した腕に頬擦りして喜ぶめぐみん。機嫌を持ち直したと判断して良いだろう。

あつぶねー、めぐみんが懐のでかい恋人で良かった。

いやまあ、世間一般的に二股野郎な訳だし、愛を分配する量を間違えてはならない訳だ。

この世界普通に一夫多妻制なんだけどな、貴族社会だし。それが市民に適応されるかどうかは個人の判断であるが。

何処ぞのミツルギくんのように複数の女性を侍らす男性も冒険者には多くない。

むしろ、そう言う所が緩いパーティでは男女間の恋愛を抜きに、体の関係を持つパーティもあるらしい。

最初から不和の種になるのならそうならないようにしようと考えるのは分かるが、乱交は如何なものかと思うけどな……。

そう言うのは所謂ヤリパーと言われていているらしく、羨ましがられる一面もあるものの相手を許容する懐も無いといけないので難しいところである。

美男美女で固まっていれば良いが、現実的におっさん、青年、おばさん手前、少女、みたいな何処となく後ろめたさのあるパーティーやおっさん、おっさん、おっさん、少女みたいなパターンもあるとか無いとか。

因みに最後の組み合わせはおっさん×おっさん、おっさん×少女であるらしいので、実質健全だな、うん。

……おっさんと少女の間に血縁関係があるってのが一番の闇だけどな。親戚の関係らしいが。

明らかに逃避行……、よそう、他所のベッドを探ったところで闇しか見えん。

まあ、それは比較的人口の多い王都周辺で、このアクセルのように独身が多い所もあるんだけどな。

……思春期時代からサキュバス店に通ってたらそりやリアルの女性に目を向けないよなあ。

「……ふう、それで、ダクネス……じゃなかった、ララはこれからどうするんです？ お見合いであるなら断ってしまったえば良いじゃないですか」

「いやまあ、そうなんだけどな……。本当ならおんおんの事を紹介してから断りたかったんだが、このタイミングで言うとか？ 臭く感じないか？ お見合い当日に、女性の恋人が居るって、そう言う素振りが一切無かった娘が言うんだぞ？」

ララのやや誇張した説明にああ……、と言う納得の声が重なる。そりやまあ、そうだよなあ。

だからと言って代打にカズマくんを起用するにしたって、ただの冒険者だから箔も無いしそれこそ嘘臭さで鼻で笑われてしまう事だろう。

でもまあ、する事は変わらないんだけどな。

「まあ、取り敢えず、普通に断って、事が終わったら私を紹介すれば良いだろう」

「……そうだな。と、言う事でおんおん準備してくれるか？ 既に屋敷の前に馬車が来ているからな」

「そう言う事はもつと早く言え……。はあ……」

手紙には近況を知りたいと言う事でパーティの皆も呼ばれているらしいので、慌てて私たちは自室に戻ってそれらしい服装に着替えたのだった。

華美な装飾の無いダークドレスに身を包んだ私、その色違いの紅色のドレスを来たためぐみん、普段着にしているらしい里の制服のゆんゆん、後は普段通りのクエストに出掛ける恰好のカズマくとアクアさんを連れて、大きな馬車に揺られてダステイネス家へと向かう事になった。

一応、今回は私を仮のパーティリーダーとする事で、パーティに箔を付けておく事にした。

流石に娘のパーティのリーダーがただの冒険者の少年ってのは親御さんのにも心配になるしな。

これでも一応アクセルの英雄と呼ばれる私だ。

ネームバリューと言うのはこう言う時に使うものだと言われ、決まっている。

まあ、ダステイネス家の質実剛健な目立たない程度に華美な屋敷を見て、改めて自分が市民側である事を痛感したのだけでも。

中央に面する場所に存在するララの実家、……意外と近い所にあつたんだな、と思うべきか、ララがそこまでお転婆では無かったのだと褒めるべきだろうか。

親の目の届く位置に居る辺りララの心根の良さが分かるというものだ。

……その業の深い性癖は見なかった事にして、だが。

「おかえりなさいませ、お嬢様。この爺、お嬢様のお帰りを首を長くしてお待ちしております」

「やめてくれセバス。普段なら兎も角、今はお嬢様扱いはやめてほしい。ほら、見てみる、弄り甲斐のあるネタを掴んだとほくそ笑んでるだろう……」

「ほっほっほ、それはそれは、申し訳ない事を致しました。気兼ねない良きパーティーなのですなあ」

そうセバスと呼ばれた初老執事に微笑ましい顔をされているララはお子様のように見えた。

ふむ、やはり実家と言う感覚が強いのだろうか、知らない一面を見て何よりだ。

此方に視線をやったセバスさんだが、私を見て目を見開いていた。「おお、これはこれは……、噂はかねがね、聞き及んでおります。アクセルへの数々の被害を食い止め、あの糞豚屑野郎からお嬢様を守ってくださいったおんおん様でございますね？」

「あ、ああ……、その通りだ、です」

いやあ、うん、アルダープ嫌われ過ぎ案件が垣間見えて少し引いてしまった。

そりやまあ、そうだよなあ。この人とは良い酒が飲めそうだな、うん。

がっちり握手をして友好を深めたと思った時だった、彼がそつと私だけに囁いたのは。

「ララお嬢様を今後とも末永く宜しくお願い致します」

バレテラ。私とララが恋人関係にあるの把握してるわダスティネス家。

それともこのセバスさんの情報網が強いパターンだろうか。

……ああ、うん、後者だな。そうじゃないと見合い話は来ないわな。

「では、お客様方、此方に。お嬢様は御着替えをされた方が宜しいですな」

「ああ、分かっている。……ふう、それではすまない、少し待っていてくれ」

セバスさんに一礼され、お付きの侍女っぽい人たちに囲まれながら先に行ったララを見送る。

はてさて、如何様になるのだか……。

そう思いながらセバスさんに連れられ、応接室っぽい場所へと通される。

中で高級そうなソファに座っていたのは少し歳のいった男性であり、何処となくララの面影がある事からお父さんだろうか。

待って、せめてワンクツション置いて???

応接室開いたら目の前に当主ドーンとか洒落にならんわ。

心の準備くらいさせてくれよ、こちとら一般市民だぞ……っ！

キリキリと胃がきしむような心地で、無理矢理笑みを作り、カーテシーをする。

「お初にお目にかかります。市井でしがない冒険者の一人をしております、紅魔族のおんおんと申します。この度はダステイネス卿のご厚意で、屋敷への許可を頂きありがとうございます」

「お、おお……、いや、その、そこまで遜る必要は無いぞ。ララの大事なパーテイメンバーだと聞き及んでいる。そして、おんおんさんはアクセルの恩人でもある。此処を実家のように思つてゆつくりしてくれたまえ」

良かった、許された。と言うよりも随分とフレンドリーだな。

ダステイネス家と言えば知らない人の居ない超有名大貴族だ。

それ故に威厳たつぷりな感じで接してくると思つたのだが、親戚のおじさんと言つた様子である。

私が懇切丁寧に貴族への外行き口調をしていた事に、後ろの面々がぼかんと口開いているのは後で始末を付けるとして、返礼の言葉を口にするべきだろう。

「寛大なお言葉ありがとうございます。……ええと、この後はどうしましょうか。ララの付き添いとして来ているようなもので……」

「ああ、そう言えばそうだったな。では、あのやんちゃ娘の事でもお聞かせいただけるかな。見合いまではまだまだ時間があるからな。冒険者として、仲間として見たあの娘の事を知りたいのだ」

「畏まりました、存分に語りましょう。それでは失礼致しますね」

対面するソファへと座り込むとめっちゃやくちや柔らかい感触に包

まれた。

高級なソファだとは思っていたがこれだけ性能が良いとは……、流石は大貴族ダスティネス家だな。

私の隣にめぐみんが座り、その隣にゆんゆん。ソファが埋まったのでカズマくとアクアさんは後ろに立つ事になった。

流石に貴族とお喋りを楽しもうとは思っていないようで、安堵の息が二つ後ろから聞こえてくる。

「では、先ずは自己紹介から。改めまして、私はおんおん。紅魔族のアークソーサラーをしています。隣が幼馴染のめぐみん。友人のゆんゆんです。彼女たちは里の風習に則り、アークウィザードの職業に就いております」

「おお、上級職が三人……、いや、四人も。質の良いパーティなのだな」
「ありがとうございます。御慧眼の通り、後ろに立つ女性がアークプリーストのアクアです。もう一人はサトウカズマ、冒険者をしています。まだまだひよっこですが、一応私の弟子です。こう見えて剣術等も修めておりますので」

「その歳で弟子を取る程とは……、成程、噂通りと言うべきか。流石はアクセルの英雄、未来が明るいな」
「お褒めに預かり光栄です」

と、拙いながらも無礼にならない及第点くらいのチキンレース染みた会話を続け、カチコチの置物と化した面々の代わりに私がダスティネス卿とお喋りを続ける事となった。

蝶よ花よと育てた一人娘がある日突然冒険者になるべく家出した時の話や、ララが好きだった物語や衣類の話、郊外の花畑で花冠を作ってプレゼントしてくれた時の話、などなど、出るわ出るわ昔話が。

それを懇切丁寧に受けに回り、相槌や質問を織り交ぜて接待を続ける事一時間程度。

お前ララの事を聞きたくて話し始めたんじゃないかと突っ込みたくなるくらいに、親馬鹿トークを続けられて私も段々とメツキが剥がれ始めた頃合いに、漸く着替えの終わったらしいララが部屋に入ってきてくれた。

しっかりと侍女に揉み込まれたのか艶のある肌と髪、そして純白な清楚なドレスに身を包んだその姿は見違えるように美しい容姿をしていた。

プロの侍女によって一時間で磨き上げられた美貌に見惚れてしまい、それを察したララに苦笑されてしまった。

ううむ、私の恋人が可愛くて綺麗だ……。是非とも此処まで磨き上げる技術を知りたいものだ。

「……お父様？ 随分と盛り上がっていたようですが、何を御題にされていたんです？」

「そ、それはだな……。か、彼女らの冒険譚を聞かせて貰っていたのだよ。……嘘です、小さい頃のララの話をしてました」

「正直で宜しい。……まったく、程々にしておいてくださいね。お父様は目を離すといつもそんな話ばかりするのだから……」

「……すまん、つい、な。それで、こうして此処に戻って来てくれたと言う事はお見合いを前向きに検討してくれていると言う事で良いのか？」

「お話を受けるつもりは全くありません。ですが、冒険者をまだ続けていたいので、お見合いを千歩譲ってお受け致します。先に宣言しておきますが、彼のバルターとは恋仲になる事はありません」

「そ、そうか……。ま、まさか既に恋仲にある男が居るのか?!」
そう言っつてギロリと威圧感のある睨みをカズマくんにつけたダステイネス卿。

この前冤罪を吹っ掛けられたばかりと言うのに、再び冤罪を受けようとするカズマくんは必死に横に首を振っていた。

その必死過ぎる様子にアクアさんが腹を抱えてソファの後ろに撃沈した事もあり、ダステイネス卿は少し雰囲気をやわらげた。

どうする、と言う視線が此方に向かってくるので、見合いの後に、と算段を付けた返しをする。

視線で頷いたララはダステイネス卿に近寄り、隣に座って面面向かうように身体を動かした。

「……その件でお父様、お見合いの後にお伝えしたい事があります。

御察しの通り、私には既に恋仲の関係にある人が居ります」

「そ、そうか。もう少し早く言ってくればこんな見合いを用意しなかったものを……」

「それについては申し訳ないと思っています。ただ、先日から色々と忙しかった事もあり、返信が遅れてしまったのです」

「まあ、そうだな。アレがあんな事になるとは露とも思っていないかったしな……。うむ、この件に関しては私も悪かった。見合いは適当にやって、残念でしたと見送ってしまうと良い」

「お父様……」

「なに、私も人の子だ。貴族の出とは言えども、自由恋愛をして愛を成した前例でもある。……そこそこの知名度はある者なんだろうな？

てこ入れするにしてもただの村人は厳しいからな」

「……ふふふ、それに関しては大丈夫です。ご安心ください」

「なら、良いのだが……」

うむ、割と良い方向に収まりつつあるな。

私が精神的に鑢に掛けられるような心地でお喋りに付き合った甲斐はあったと言うものだ。

……んな訳あるかい、今も胃がキリキリと痛んでるわ。

それこそ、この後の暴露話を受け入れて貰えるのか分からんくらいにテンパってるわ。

リアルで娘さんを私にくださいとやる事になるとは思ってたなかったわ、マジで。

内心冷や汗だらっだらな私の心境を察してカララがくすりと笑みを浮かべる。

やめ、やめろお、バレたらどうするんだ、そんな蠱惑的な笑みを浮かべやがってえ……。

ああもうそれに嫉妬したためぐみんながこっそりと手を握って来てるじゃんか、勘弁してくれ……。

内心ボロボロな私を差し置いて会話を続けた親娘は、そろそろ時間だ、と言う事で退室した。

お見合いが終わるまで此処で休憩しておいてくれとの事だった。

「……ああー、とっても疲れた。慣れない事はするもんじやないな……」

「とっても凄かったですよおんおん。何処であんな喋り方を覚えたんですか?」

「前世」

「あー……、そう言えばそうでした。にしても大変ですね、この後の事の方が大変じゃないですか?」

「そりやなあ……、取り敢えずめぐみんと恋仲と言う事は出来る限り伏せとく。そもそも女性同士でつて時点で雷が落ちる可能性が高いしな。その時は……、駆け落ちでもするか?」

「あはは。その時は御一緒するので仲良く逃避行しましょう」

何とも頼り甲斐のあるめぐみんの肩に頬を寄せた。

私よりも高い体温に癒されつつ、ソファの背から出て来たちよむすけを膝に乗せて撫でる。

……何時の間にか影を潜るようになったからなこの不思議猫。

四六時中私の頭の上で魔力を霞のように食べてた事もあって、何かしらのレベルアップでもしたのだろうか。

増々猫じやない感を強めたちよむすけだが、こうして心情察して癒してくれる愛らしい猫である。

毛並みも良いし、ああ、癒される。猫吸いをしようとする嫌がるのでその点だけは度し難い。

めぐみんの重ねてきた右手をひっくり返して指を絡ませて恋人繋ぎにし、柔らかな手の感触をにぎにぎと堪能しつつ温もりに癒される。

……そうか、ちよむ吸いが出来ないのであればめぐ吸いをすれば良いのか。

と言っても体勢的に辛いな……、首筋を吸うのは流石にえっち判定されて逃げられてしまいそうだしなあ。

仕方が無い、ドレスが故に露出している肩に頬擦りして肌を求めるか。

「いやあのおんおん……? 流石に気を緩め過ぎでは? と言うか

ちよむすけ今何処から出て来たんですか……？」

「んー……、良いではないかー良いではないかー……。それくらい疲れたんだ、甘やかしてくれえ。……ちよむすけは多分私の影からだ。最近レベルアップしたのか影潜みができるようになったみたいだからな」

「もお仕方ありませんねえ。良い子良い子してあげます。……ちよむすけ、お前はいつたい何になるつもりなんですか？ 見た目からしてかっちょよい感じですけど、それ以上進化すると猫の範疇を越えますよ？」

「いや、そもそも猫から外れてるよねちよむすけって……。普通の猫は羽は生えてないと思うよ……？」

「うん、今回はゆんゆんの言う通りだと思うぞ。ファンタジー産の猫とは言えども、流星に魚をブレスで炙る猫は居ないと思うんだが……」

はて、ちよむすけがそんな事をしていただろうか。

カズマくんの証言によると、私が寝ている時にこつそりとキツチンに忍び込み、生魚を取り出したかと思えば口から火を噴いて香ばしくしてからグルメに食べていたらしい。

ううむ、増々ちよむすけの謎が増えるな……。久々にソウルを見通す瞳で見やれば、猫っぽい形のソウルになっていた。

……ちよむすけ、普通の猫はソウルを猫っぽく偽装しないんだぞ。

まあ、賢い不思議な猫と言う事にしておこう。私の精神安寧的にも、SAN値ピンチにならぬように。

「んにゃあおう」

「今更猫っぽい鳴き声しても、可愛いだけだぞー、うりうり。首元が良いのか、うりうり。えへへ、可愛い奴め」

「お前が一番可愛いよ」

「同感ですカズマ。私の恋人可愛過ぎです」

何やら外野が騒がしいが聞こえないぞー、最近の私は男としての尊厳を取り戻したから無敵なんだ。

可愛いと言われてもあんま嬉しくないのは精神的なそのせいだ

ろうし、今後も慣れる事は無いだろう。

にしてもちよむすけの触り心地と言うか毛並みがいつもより良い気がする。

影渡りをした先で誰かにブラッシングでもして貰ったのだろうか。謎が謎を呼ぶちよむすけの生態に少し疑問を持ちつつ、可愛いし良いかと頬を緩ませる。

例えお前が対象を取り込んで身体の体積を増やすような変身をしましたとしても、状況次第ではあるが味方してやるからな。

それだけの情はあるのだ。何よりも私になついて気を許してくれているのが尊い。

「……おんおん、ちよむすけにばかり構いすぎじゃないですか？

こつちにも寂しいのが居ますよ、にゃあー」

「——ツ、こふつ、わ、私の恋人が可愛過ぎる……。ああもう、可愛がってやるからなー、もおー」

「にゃー、えへへ、言ってみるもんですねえ」

「……尊い光景だけど、場所考えた方が良いんじゃないか？」

「まあまあ、カズマ。ダクネス、じゃなかった、ララのお父さん優しそうな人だったし大丈夫でしょ」

「だからと言ってもだな……。この光景を見られた時の方が面倒だと思うんだが、この後の話的にも……」

だなんて呟いたのがフラグになったのか、扉が勢い良く開け放たれ、遣り遂げた顔のララが現れた。

ちよむすけとめぐみんを構っている姿を見られたものの、深い溜息を吐かれただけで済んだ。

「全く……。私が頑張ったと言うのにおんおんは……。……最近なんかそう言う面でも籠が外れてやしないか？ 女たらしと言うか、女好きに磨きが掛かったと言うか、色に溺れていると言うか……」

「あつ、分かります。なんか手付きが若干いやらしいですよね。隙あらば触れようとしていますし……」

「あ、あはは、あはははは……」

脳裏にクリスさんがちらついて誤魔化し方が雑になってしまった。

確かに、浮気性と言うか、そういう感情の制御が雑になっている気がしてはいるんだ、うん。

どうも肌寂しいと言うか、誰かとの触れ合いを求めている傾向にある。

アガペー寄りであった筈の触れ合いがエロス寄りになっているのは、恐らくあの曖昧な夢を見てしまったからだだろう。

死に瀕した時にこそ生物の足掻きとして子を残そうとする本能が昂ぶるのと同じで、今の私はきつとそれに近い無意識的なバイアスが掛かっている可能性が高い。

人としての尊厳や意識が残っている内に……、と言う焦りを覚えていたのかもしれない。

だが、それを伝えるのは今の私には恐怖があつてできない。

口にしてしまった事でそれが本当に起きてしまうのではないかと杞憂を感じてしまうのだ。

……随分と罪深き業に塗れた存在になってしまったものだと、内心で自嘲した。

——そうなつてしまつても構わないだろう、だなんて口元に弧を描くもう一人の私の存在をひしひしと感じているからこそ、そんな疑心暗鬼を生じさせてしまつているのだろうか。

人としての尊厳を置き去りにし、獣のような本能に生きる正しく畜生めいた感覚のそれ。

血に溺れ、死に溺れ、生を冒瀆し、命を穢す、悍ましき闇に墮ちた深淵が笑っている。

観測してしまつたが故に、底に居るのだと確信できてしまつたが故に、自身が化け物では無いのだと抗う度に深淵が笑うのだ。

後七回、と言う具体的な数字を知っているが故に、それを気にし過ぎてしまうのだろう。

ぶんすか顔のララのダイブを抱き留めながら、私はこのような時間が続く事を願うしかできなかった。

「……おんおん？」

この大切な人たちを手につかれないように、私の中の怪物を抑え込ま

なくてはならない。

そう心に刻みながら二人を強く抱擁した。

二人は顔を見合わせて首を傾げてから、仕方が無いなど破顔して抱き締め返してくれた。

たったそれだけの事なのに、今の自分が人間なのだ胸の奥に灯った炎のような温かさを感じられた。

とても、とても細かいこの温もりを絶やさぬように生きなければ。

……けど、この後ララのお父さんと話さないといけないんだよなあ、やだなあ。

だなんて思いながら、現実逃避気味に二人を抱き締めるのだった。

32話

結論を言えば、ララのお父さんとの会話は割とあっさりと終わった。

と、言うのも昔話で語っていたようにララの性癖は既に知っているらしく、非常に頭を悩ませていたそうさだ。

箱入りのお嬢様であるし、チンピラでも雇って脅して見れば……なんて事も考えたそうだが、そのまま勢いで傷物になる光景が目に見えてしまい頭を抱える事しばしば。

それがどうだろう。とあるパーティに加入してからと言うもの、ドM奇行の鳴りは潜み、あんなに肩肘張って会話していた堅苦しさも抜けて、今や一人の大人の女性として振舞っているではないか。

隣の応接室にララに連れられながら、え、マジで、と言う顔でララのお父さんと対面したのだった。

「……流石に相手が女性、それも年下の少女と言うのが非常に引つ掛かる思いではあるが、このお転婆娘を更生してくれた上に嫁として貰ってくれる人が居てくれた事を父親として嬉しく思うのだよ。それに聞けば後継ぎも魔法で何とかできるとなれば、例え相手が女性であつても百歩譲つて頷けると言うものだ」

「きよ、恐縮です……」

「まあ、それに加えて相手がアクセルの英雄と言うのが一番だな。魔王軍幹部を一人で討伐し、デストロイヤーの危機から街を救つてもくれた。肩書としては十分過ぎる偉業だ。……それに、あのアルダープの企みを打ち砕き、肩の荷を下ろさせてくれた事も感謝している。あの豚は幼いララに欲情する塵屑であつた事もあつて、いつか必ず始末する予定だったがそれも穏便に終わった」

「あれは半ば自滅でしたけどね……」

「それでも、だ。バルター青年に領主が変わつた事で色々キナ臭かつた所も改善される事だろう。良い事尽くしで私の胃も救われた。おんおんさんが結婚できる年齢になれば、ララとの結婚を認めよう。それまでは婚約と言う扱いをしても良いかな？」

「は、はい！ 〴〵配慮ありがとうございます！」

そう言つてにこりと笑うララのお父さんの手元に、すつとセバスさんが羊皮紙と羽ペンを置いた。

反対側から見やれば婚約の誓約書だった。

……仕事速過ぎだろセバスさん。絶対これこんな事もあるうかと、と言う感じで用意したな。

完璧に仕上げられた正式な書類にララのお父さんが一瞬固まって、セバスさんを見て、アルカイックスマイルを返された事で天を仰ぎ、全てを悟つたらしい溜息を吐いた。

「……セバス、確かにお前にはララの動向を探るように言っていたが、明らかに抜けがあつたんじやないか？」

「いえいえ、とんでもありません。流石にお嬢様のプライベートまでは覗く事では無いと自重した結果ですとも」

「だからと言つてだな……」

「それに、旦那様はこう言う事は面と向かつて知りたい性分ではありませんか。素行も良く、愛想も良く、品行方正で礼儀正しいおんおん様であれば当家に相応しい人物だと認識しておりましたので、このような形を取りました」

「全く……、昔からセバスには敵わんな。まあ、良い。聞いての通りだ、おんおんさん、うちの娘との婚約を結んでくれるか？」

「はい。魂が尽きるまでララと添い遂げる事を誓えます」

「なら、良い。……ふう、ララも良い相手を見つけられた事だし、完全に肩の荷が下りたな……」

ララのお父さんから手渡されたそれを一読し、問題無さそうなのでその場で自分の名をサインした。

その様子を見て隣に座っていたララが感極まって私を抱き締めて涙を零した。

ちよつと性急だったかなと思つたが、こうして喜んでくれるのであれば男冥利に尽くすというものだ。

抱っこちゃん人形よろしく私の左腕を抱き抱えるようにして、ひしつとくつつくララの体温が温かい。

「ふふふ、ララのその顔が見ただけで婚約を許して良かったと思うよ。いやあ……、本当に……、……はあ、良かった。本当に良かった。あのまま何処ぞの馬の骨かも分からない屑みたいな男にララがのめり込んで良い様に使われて捨てられるのではないかと、本っ当に心配していたんだ」

「……心情お察しします」

「ありがとう。本当に、ララを貰ってくれてありがとう……っ」

ララのお父さんが漢泣きし始めてしまい、どうしたもんかと内心で溜息を吐く。

合間合間の溜めが非常に長く、本当に心を痛めて悩みに悩んでいたんだろうなあと言う同情を感じてしまう。

いやまあ、愛娘の相手がこんなちくりんの少女だと言うのにこの喜び様からして、もしやすると出家も想定に入れていたんじやなからうかと思われる。

溺愛する娘だからこそ幸せを掴んで欲しいが、その娘の性癖と言うか相手に求める内容が内容なので本当に困っていたんだろうなあ。

……すみませんね、中身元男でマジカル息子持ちのやべー少女が相手です。

あんまり心労が祟らないように気を付けないとなあ、と勝って兜の緒を締めるような気持ちであった。

先程の婚約書類がセバスさんによって回収され、退室した事で今頃迅速に役所に叩き込まれているんだろうなと思いつつ、婚約指輪作るべきかなとララの左手をすりすり触れていた。

「……ふう、すまないね。歳を経て涙もろくなっちゃってしまつてね」

「いえ、お気になさらず」

「ありがとう。おんおんさんは屋敷を個人で持っているのだったか」

「はい。先日の報酬で土地ごと買い上げたものになります」

「ふむ、ならば衣食住に困る事はなさそうだな……。ダステイネス家からも支援をしたいところであるが、余計なお世話に成り兼ねん」

「そう……ですね。出来る事なら私の稼いだお金でララと暮らしたい思いはあります。疑ってはいませんが、お金の遣り取りと言うのは遺

恨を残しやすい問題でもありませんから」

「うむ。聡明で何よりだ。……ララへの小遣い程度は見逃してくれるかな？」

「あはは……、まあ、それはララと話し合ってください。子供であるが故に、親から旅立ちたいと思う時があるでしょうから」

「……そうだな。では、そうだな……、ララが二十歳になるまでは支援を続けよう。それくらいが良い区切りだろう。あの頃と違って今は立派に冒険者として生計を立てている訳であるしな。それで良いかなララ」

「ええ、……正直に言えば貰ったお小遣いが貯まりに貯まっているので今打ち切っても良いのですが、これからの事を考えるとあればあるだけ良いでしょうから。お言葉に甘えたく存じます」

「そうか、そうしてくれるか」

ぶつちやけ、ベルディアの時のとデストロイヤーの時ので、向こう十数年は穏やかに暮らせるだけの貯蓄はあるしな。

家も土地ごと一括で買ったからローンも無いし、賃貸等のお金は掛からない。

所得税とか住居税的なものには引っ掛かるものの些細なものだ。

……うん、正直魔王討伐がサブクエストみたいな扱いだしなあ。

魔王に対して直接的及び間接的な恨み辛みも無いし、精々が天上に居るであろうあの天使さんの進退が少しだけ掛かっているくらいだけだしな。

まあ、それに……何となくであるが、この世界が物語の産物だとすれば、その中心に居るのは恐らくカズマくんだろうしなあ。

メタ的な思考と言うべきか、主人公に対して降って湧くイベントの数々と言うべきか、明らかに一般冒険者である筈のカズマくんに降り掛かる内容が濃いなあ。

女神であるアクアさん連れ添っていると言うのも主人公らしい部分であるし、こうして個性豊かな仲間を伴っている事も理由にも成り得る。

まあ、何が言いたいかと言うとカズマくんの近くに居れば魔王討伐

までのルートが舗装され、なんやかんやで関わって走らされるんじゃないかなと言う予感があるのだ。

普通に生活しているだけでメインクエストに沿っている、そんなメタな考えが過ぎってしまうのは無理も無いと思うんだ。

「さて、それでは仕事が残っているのですね、ここ等でお開きでしょうか。おんおんさん、ララの事を何卒宜しくお願いします」

「は、はいっ、この身に代えてもララを幸せにします」

「……ああ、安心した。ララ、分かっていると思うが、甘えたままでは駄目だぞ。夫婦とは支え、支えられるものだ。それだけのものを与え、返して貰いなさい。一生を掛けて、末永くな」

「……はい。ありがとうございます、お父様」

「ふう、また顔を見せてくれると嬉しい。老骨に近付いているんでな、孫は早めに見せてくれ」

「お父様っ!？」

「はっはっは、ではな」

呵々大笑しながらララのお父さんが退室し、何とも言えない甘酸っぱい空間が残された。

顔を真っ赤にした私たちは何とも言えない気分で、恋人繋ぎした手をにぎにぎとするだけだった。

ううむ、孫、孫なあ。やろうと思えばいつでもできるのだが、タイミングがなあ……。

流石にカズマくんの近くから離れるのは戦力的に拙いだろうし、魔王討伐後になるだろうか。

結構短いスパンでドタバタイベントが舞い込んでくる気がするんだよなあ……。

赤面顔で口を結んでやきもきしているララが可愛過ぎて、つい愛おしさから頬に手を当てて此方に振り向かせて唇を奪ってしまった。

「おんおん……」

「色々と落ち着いたら子供、作ろうか」

「……うん」

そのままの雰囲気二度、三度と甘い接吻を交わして、別室に居る

であろう面々を回収すべく動き始める。

……いやあの、ララ？

親公認になったからと言って恋人繋ぎで過ごす必要は……、あつ、はい。

むすり顔で余計な事を言う口を塞ぐべく再びキスをされた事で黙らざるを得なかった。

恋する乙女は最強と言うが、惚れた弱みも相まってララには勝てそうにないな……。

婚約ほやほやの初々しい雰囲気のあるままで、応接室へと戻るとい
の一番にめぐみんによるタックルが私の腹部めがけてキメられてや
や後退する事となった。

「長過ぎるんですよっ!? セバスさんからもうすぐ戻るでしょうと
言つて二時間も待たされた身にもなつてくださいますっ!!」

……おおっと、精々三十分くらい唇を交わしていたと思つていたら
それなりの時間が経つていたらしい。

光陰矢の如し、相対性理論つて奴だな、あつはつは。

いや、すまんて。腹をぐりぐりと頭で押し上げるな、そこ子宮があ
る所だから、んっ。

ぐいっつと持ち上げられるようにして頭を押し当てられた事で変な
声がちよつと出てしまった。

何とも申し訳無さそうなめぐみんがいそいそと前に立つが、顔が
真っ赤な事で先程の声は確り聞こえてしまつていたらしい。

……うん、まあ、めぐみんにも聞こえてたらカズマくんたちにも聞
こえているよなあ。

何とも言えない頭茹だった雰囲気を展開されてしまい、私は誤魔化
すためにめぐみんの顔を胸元に押し付けるようにして抱え込み――。

「んっ！っ！んっ！んっ！っ!!」

タツプを貰うくらいまで押し付けて酸欠になるくらい抱き締めて
やった。

寄せてやれば案外あるんだぞ私だつて、AAがAになるくらいの差
だが。

まあ、そんな僅かな谷間と呼吸によって部分的に湿ったドレスの生地によってめぐみんはダウンしたのだった。

きゆうくと倒れてしまったためぐみんを横抱きに回収し、そのままの勢いに任せて帰るぞと踵を返す。

最近勢い任せな事が多いなと思いつつ、正門前に用意されていた送迎用の馬車へと入り込み、我が家である屋敷へと送り届けて貰う。

「うう……、私だって寄せれば、うう……、うう×つ」

「よしよし、大丈夫だぞめぐみん。まだ成長の余地はあるからな。後二年くらいは猶予があるから、確り栄養を取って運動をして健康に過ごそうな」

比較的大きさが同じ私に宥められているからか、めぐみんの機嫌が少し良くなる。

が、隣に居たララを見て死んだ目をしてそのままふらふらとリビングに向かって歩いて行って、その後をついてみればソファに倒れてばたんきゆうーしていた。

そんなめぐみんをララと二人で見つめて苦笑する。大きな子供を持ったみたいだな、だなんて内心で独り言ちておく。

女性の成長期は大体十三歳ぐらいが最盛期なので緩やかにめぐみんは育っているだけなのだ、と思いたい。

豊胸のために色々とすべきだろうか、余計なお世話と言われてしまえばそれまでだ。

ううむ、乙女心が私には分からない。すまない、めぐみん、許してくれ。

取り敢えず今後の食事に乳製品とタンパク質を増やしておくからな、頑張つて育ってくれ。

こればかりは私にはどうにもならないから……、手段を問わねばある事はあるが。

「それにしても……、ダクネスてか、ララがマジモンの大貴族だったとは……。大変ですね、おんおんさん」

「いやあ、そうでもないよ。ダステイネス卿は比較的市民寄りの優秀な人だし、何よりも地位も名声もコネもあるから権力争いであの人を

倒せる可能性は殆ど無い。故に、余裕があるんだよ。アホみたいな政策を行なってた豚と違って」

「ああ、だから婚約を許せたんですね。後継ぎ問題とか色々あるでしょうし……。まあ、英断ですけども」

「あつはつは、嬉しい事を言ってくれるじゃないかカズマくん。煽っても夕飯のおかずが少し増えるくらいだぞ」

「あはは……。今後の活動はどうするんですか？ ララと婚約したつてなると自粛気味になる感じですか？」

「いや、むしろ箔をつけるためにも精神的に動くよ。アクセルの英雄此処にあり、って知らしめないといけないからな」

「おお……。良かった。てつきり向こう十数年遊んで暮らせるからパーティ抜けるよだなんて展開があるかと思つて冷や冷やしてました」

思わずカズマくんを見やるが、心底安堵したと言つた様子であり、本心から言つた言葉の様だった。

そしてそれは、アクアさんも似たような感じであり、打つて変わつて当然よね、と何故か豊満な胸を張つていた。

……そして、何とも言えない表情で此方を見つめるゆんゆん。

いやまあ、そうだよなあ。幼馴染のめぐみんよりも先にララと親公認の婚約だもんなあ。

女性同士の恋愛にも若干理解が追いつかないようだし、仕方が無いところではある。

「ねえ、おんおん。里のご両親に許可を取らなくて良かったの？」

「……………神妙な顔をしてた理由それだったのか。ああー、まあ、大丈夫だろう。あの色ボケ夫婦の事だから特段何も言わないよ。むしろ、そう言う道もあるのねーだなんてのんびりした事を抜かすだろうよ」

「……………おんおんつてご両親の事を話す時、割と毒舌なんだけどもしかして仲悪い？」

「仲が悪い、と言うよりも……。最低限の親子の遣り取りしかしてないからな。殆ど親戚の人くらいの距離感だよ。と言うかめぐみんから聞いてたんじやないのか？ 私はあの小屋で殆ど一人で過ごして来

たんだ。正直、育児放棄と変わらない扱いだった。手の掛からない子供だったから、それに甘えて自分のしたい事をしていたんだよあの人たちは」

そんな唾を吐き捨てるような声色で言った言葉に、ゆんゆんが凍り付くように固まり、それが伝播するように部屋の雰囲気が悪くなった。

一応十歳からあそこで寝泊まりしていた訳だが、それ以前にもあ的小屋で暮らしてはいたんだ。

朝晩の食事だけ与えて、他には何もしてくれなかった両親。

食事と排泄とお風呂、時々見回る時以外はベッドで睦言を囁いて盛り合ってた男と女。

どれだけ美形であろうとも仮にも親である人たちの営みを見たいとは思わず、こつそりと抜け出してあ的小屋で一日の大半を過ごして来た。

正直に言えば、両親が暮らす家よりもあ的小屋で過ごして来た時間の方が長いだろう。

よく言うだろう？ 親の顔よりも見た○○って。私の場合は、あ的小屋が当て嵌まる訳だ。

他人と言うにはそこそこ近くて、家族と呼ぶには不適切で、隣人と言った方がまだ当て嵌まる。

勘当をされる程不義理でも無く、喧嘩をする程喋った事も無い。

前世のネグレクト、それに近い環境で今生の私は育った訳だ。

だからまあ、めぐみんと出会うまでは本当に孤独だったのだ。

あの眩くてぼわぼわして甘っちょろい、それでいて何処か鋭くて思い遣りのある甘えん坊。

そんなめぐみんが傍に居たから私は独りでは無くなった。

……だからまあ、めぐみんは恋人と言うよりも本当に家族と言う扱いが妥当な訳だ。

それ故に性的な思いを封印して、一人の家族として、歳の近い姉として接してきた訳だ。

言うなればめぐみんはギャルゲーで言う従妹枠であり、地味に攻略

の難しい立ち位置に居たんだ。

だからまあ、よく私を攻略できたなめぐみんは、と褒めてやりたい気分なのだ。

めぐみんの頭を少し上げて太腿に置き、その艶やかな髪を梳きながら頭を撫でてやる。

「ご、ごめんなさい。わ、私、知らなくて……」

「大丈夫だよ。あんまり気にしてないから。まあ、そんな事があったから、私はめぐみんと出会って心を取り戻した訳だな」

「えっ、いったい幼少時のおんおんに何があつたの……?」

「意味深なワードに惹かれるあたり、ゆんゆんも立派な紅魔族だよ。

……自分語りはあんまり好きじゃないんだけどなあ。まあ、いいか。あの頃の私はあの人たちを見限って、一人で生きるために動いてたんだ。せつせと罫を作って、ウサギや鳥を仕留めて捌いて、塩漬けにしたり羽筆って枕とかにしたりしてた。多分、あの時めぐみんと出会って無ければ今の性格はしてなかったと思うよ。正真正銘、ただ独りの狩人として冒険者になつてたと思う」

実際、呪術師であろうとも技量に振って弓メインで生きる事はできただろうしな。

それをしなかったのはめぐみんが爆裂魔法に憧れて、毎日のようにニコニコ顔で凄かったのだとその時の事を自慢してきたからだろうなあ。

弓一本で生きるよりも呪術を扱った方が生存力も上がるし、そして何よりも呪術を放った時のめぐみんのキラキラとした瞳に籠る期待感に押されたのだと思う。

そうぽつりぽつりと当時の事を口にしながらめぐみんの頭を撫でていると、その手を握られて胸元に抱え込まれた。

「……あの頃のおんおんは無口で、動物を狩っても嬉しさとかさう言うのを放り投げて、食料確保しただけって言う静かで冷たい雰囲気でした。何をやってもそつなくこなして、私の出来ないような事を沢山して、それでも私の持つていないものを誇りにも思わずに、ただ、ただ静かに一日を生きているだけの女の子でした」

ああ、うん、確かにそんな感じにスレてた気がする。

自分だけで生きて行けば良い、そんな風に覚悟が決まり始めてた頃だったかな。

めぐみんの口から語られる当時の私の様子に皆は困惑気味の様子だったけれども。

いやあ、私とて人の子だぞ。年単位で粗悪な環境に放り込まれればそんな風にもなるさ。

「……けど、それでもおんおんが優しい子なんだって思っていました。あの日、空腹で倒れてた私に優しく声をかけて、美味しいご飯もくれて、一つしかないベッドに眠らせてくれて……嬉しかったなあ。おんおんは奉仕気質と言うか、お節介を煮詰めたようなお母さんみたいな感じでした。……まあ、正直うちのお母さんよりもお母さんしてて、あの頃の私はこの子の子供になる、だなんて思っていました」

「そんな事思ってたのか……」

「いや、だって……、お母さんの作るようなひもじい思いをするくらいしよばいご飯じゃなくて、確りとした栄養のあるご飯を作ってくれて、何度もお代わりする私をにこにこ微笑んで見守ってくれて、風邪なんて引いた日には付きつきりで看病もしてくれて甘やかしてくれて……、ふふふ、食事を作ってくれている時のおんおんずっと微笑んでるんですよ。小声でめぐみんの好きな味はこれぐらいだったっけとか、これ反応良かったし好きなんだろうな、とか、ずーっと私の事を考えて試行錯誤してくれたりするんですよ？ おんおんが住んでいる小屋が本当の家で、あの粗末で質素な家が仮の家、そんな風に思ってた時期もあるんです」

「……え、聞かれてたのか、くっそ恥ずかしいんだけど。」

だって仕方ないだろ。ひよろひよろな女の子が私を頼りにしてくれて、美味しい美味しいって満面の笑みで私の作ったご飯を褒めて喜んでくれて、何をする時も一緒に居て楽しそうにしてくれる女の子を放っておく事なんてできやしないだろ。

……あんまりにもひよろがりだったので年下の幼女だと思ってたのはここだけの秘密だな。

まさか同い年とは思わなかったよ、割と本気のマジで……。

「だから、私にとっておんおんは第二のお母さん、いや、正直第一に据えたいくらいなんですけども、それをするとおんおんが申し訳無さそうにするのでしませんか」

「そりやそうだろう、お腹を痛めて産んだ訳じゃないんだ、ゆいゆいさんに申し訳無いわ」

「……ふふふ、産み直してくれても良いんですよおんおん」

「産めねえわ、むしろめぐみんが産む側だわ」

「だなんて事を返す言葉で言ってしまったが故に、めぐみんが顔を真っ赤にして私の手を強く抱き締めた。」

そして、私の方を向いてこくりと小さく頷いてくれた。

「……んん、つ、めぐみん可愛過ぎか。十三歳じゃなければ押し倒してたよ此処で。」

めぐみんへの愛おしさメーターが振り切りそうになったのを、理性によって針を直接握り締める事で阻止した。

ただでさえめぐみんの発育はあんまり良くないんだから、下手に手を出して体調を損ねる事になったら罪悪感でいっぱいになるわ。

「と、まあ、そう言う事もあって私とおんおんの関係は疑似家族みたいな感じだったんです。同い年の親娘だなんてへんな内容でしたが、とても、とても楽しかったんです。……まあ、おんおんが目の前で爆発四散どころかミンチよりも酷い有様になった事で、私はこの感情が家族愛じゃなくて恋心だと気付けてしまった訳です。……もうちょっと穏便な気付き方をしたかったです、はい」

「すまんで……。あの場面じゃアレ以外に思いつかなかったんだよ」
「だからと言って自己犠牲を選ぶ必要あったんですか？ 私に魔力譲渡して爆裂魔法でドツカーンで良かったじゃないですか」

「過充填かつチャージ完璧ならな。あの時そんな余裕無かっただろう。正直私も皆に言葉を残してから爆発すると思ってたのに途中で吹き飛ばされたし……。過去の話はたればになるんだからお終いだ。これ以上は泥沼でしか無いしな」

「むううう……。分かりましたよ、良いですよ、やってやろうじゃない

ですか。普段私が好む長々とした詠唱からの爆裂魔法ブツパとは別に、おんおんが好みそうな詠唱破棄してキメ顔で皮肉交じりにぶつばなす遣り方も練習しておきます」

むふーっと無い胸を張ったためぐみんのその最後の一言に私は硬直した。

えっ、なんでめぐみんが一時期格ゲーにハマってゲーセンで揉まれてた時期の私の言動を知ってるんだ。

この世界に来てそんな素振り見せた事無い筈なんだが???

「……待て、なんでそれを知ってるんだめぐみん」

「え？ 昔やってたじゃないですか。私が前に一撃熊に襲われそうになった時に『混沌の残滓』でしたっけ、あれを両手で時差付けながら二発投げ付けて、基本四足の畜生如きが二足で立つから避けられねえんだよ、つて中指立ててましたよね。すつごく恰好良かったのを覚えてむぐぐぐ」

「やめ、やめろおつ、割と黒歴史だからっ、あの後一撃熊に喋り掛けたところで意味が無いって気付いて虚しくなっただからなっ」

「えへへ、分かりますよおんおん。凄い技を何の変哲も無い技術の様にやってみせて、格の違いを見せつける皮肉でニヒルな台詞を背中越しに倒れた相手に浴びせるのが好きなんですよね。分かりますよ、強者らしさがあつて凄く良いと思います」

「うぐぐぐぐぐ、そ、それ以上はいけない。駄目だぞめぐみん。それ以上は私が恥ずか死ぬぞ」

「へえ……、おんおんって紅魔族っぽく無かったけどそう言う所あったんだね」

「だから知られなくなっただよ……。お前ら同族意識マシマシでノリノリで来るだろ、絶対に嫌だからな私は。今生でも中二病になつてたまるかっ」

あー……、と生暖かい視線をカズマくとアクアさんから向けられて、羞恥で死にそう。

ララに至っては私の知らない一面を知ってキュンキュンしてる顔だし、後でお仕置きだぞっ。

畜生、私がする事なら何でもウエルカムみたいな感じで受け止められてしまった、無敵かこいつう。

こつ恥ずかしい事を暴露された私はめぐみんを起き上がらせ、不貞腐れたようにその太腿に頭を乗せてお腹側に顔を向けて蹲った。

そして、腰をホールドしてお腹に顔を押し付けてめぐ吸いをしてやるとあわわわと言う声が上がから聞こえたが知らん、知らんぞー、私は。不貞腐れた私程面倒なものはないんだからなとめぐ吸いを敢行しながら私は呻いたのだった。

「あの、機嫌直りましたかおんおん……」

「まあ、多少は。不貞腐れててもやる事多いからマイナスの方がでかいしな……」

夕飯の支度をすべくキッチンへと赴いた私は、後ろに申し訳無さそうについてくるめぐみんを他所に魔導冷蔵庫の中を見ていた。

うーむ、鶏肉がそろそろ危ないか？ 結構量があるし、唐揚げにでもしてしまうか。

しまったな、食材に日付でも書いておけば良かったか。今度から食肉はそうしておくか……。

数日前に狩った覚えのあるホロリ鳥の腿肉を取り出し、臭い等を確認して問題無さそうなので夕飯を決定する。

このホロリ鳥の名前は由来が色々あり、ほつぺたが落ちるくらいに美味しい事からと言う説と、生態である涙を流しながら求愛活動をする事からの二説ある。

基本的にメスが力強く、オスがか弱いのが特徴だ。

言うなればあべこべ世界物と言うか、貞操概念が反転した世界のオスメス事情が反映されているらしく、基本的に一夫多妻。

か弱いオスに屈強なメスが搾り取りプレスを強要する感じの世界観らしい。

……もしや泣いてるのって(性的に)食べないでくださーいと懇願してる感じだったりするのだろうか。

因みに、メスの肉はぷりぷりとした食感でありながら筋肉質で歯ごたえがあり、オスの肉は柔らかくほろほろと口の中で溶ける味わいで

あるらしい。

貞操概念反転世界感の一夫多妻とあるように、オスは希少なので出回りは少ない高級食材だ。

たまにメスから逃げ出そうと人に助けを求める時があり、私がオスを仕留めたのは正にそれだった。

まあ、オスを仕留めると付近に居たメスがナニシテクレテンダメースツゾコラーと甲高い声で襲い掛かって来るので、力量の無い人はスルー安定である。

オスをそのまま引き渡すと満足して帰ってくれるそうさ。……何で助けてくれないの、とオスのつぶらな瞳に見つめられるため、引き渡した後はすぐに背を向ける事が肝要らしい。

何処ぞの安楽少女に魅入られた人のように、オスを助けようとメスに返り討ちにされる優しい人が犠牲になるらしい。

いつだって優しい人から死んでいく……、だなんて皮肉を内心独り言ちながら、オスのホロリ鳥を捌いていく。

シンプルに醤油とシヨウガとニンニクで下味を付けて、小麦粉をまぶして油で揚げていく。

唐揚げはこの揚げの部分が一番重要な所だ。失敗をしない方法となると二度揚げがおすすめだ。

低温の油で火が入るくらいに揚げてから一度出し、二度目に高温の油でからっと仕上げる方法だ。

手慣れた人なら高温の油で揚げて余熱で完成と言う塩梅もできるのだが、衛生観念が前世程ではないこの世界では食中毒は本気で死に直結する危険に相当するので万が一があつてはならない。

土鍋でふつくらと炊けたつやつやの白米に、千切りキャベツと唐揚げと言う予定だ。

余計な油を落すために網に乗せていた唐揚げをじつと見つめる食いしん坊に苦笑し、焼き加減を見ると言う建前で、まな板で一個を半分に切った。

「あーん」

「あーんっ、んー……っ、口の中でほろほろカリカリでおいひいです」

その片割れを親鳥を待つ雛のように待ち侘びるめぐみんに食べさせてやると、満面の笑みが返って来た。

……その顔が見たいから料理をしてきたと言って過言では無いんだぞめぐみん。

自分一人だけなら適当に済ませてしまおうからな私は。

誰でも無い、めぐみんの美味しい美味しいと喜ぶ顔がみたいから、作ってるんだからな。

まな板に残った片割れを口に放り込み、生焼けじゃない事を確認して頷く。

……美味しいのはきつと、隣にめぐみんが、一緒に食べてくれる人が居るからだろうな。

だなんてこっ恥ずかしい事を口にする事は無く、自然と口角が上がってしまうくらいに幸せを感じていたのだった。

33話

こっ恥ずかしい暴露をした翌日、昨夜の残りを朝ごはんに出して一段落付いた頃の事だった。

玄関の方から何やらぎやーぎやーと騒いでおり、階下を覗いてみれば正座させられているアクアさんと仁王立ちのカズマくんが見えた。

いや、どういう状況だ……？

それリビングとかでやれば良かったんじゃない、と思いつつも話を聞いてみれば、いつもの事だった。

「なあ、アクア。再三言っているようにツケで飲み食いするの止めろって言ったよな？ 言ったよなあ!? なぁーんでこんなに膨れ上がってるんだよっ！ この前支払った額よりも増えてるじゃねえか!?! まさかと思うがその場のノリで奢りだとか抜かしてないだろうなあ!?!」

「してないわよっ！ ただ、その……、おんおんちゃんと一緒に飲みに行つて割り勘にした時の事だと思ふの。あの子と一緒にだと楽しく飲めるからおつまみとかもその、つい」

「だあああっ！ 微妙に口出し辛い理由を出しやがってからに！ ベルディアの時とデストロイヤーの時の報酬がまだ残ってるだろうがっ!?! その場その場でしっかり払えって言ってんだよ俺はっ!」

「だって、だって、あんな重たいの日常的に持ちたくないのよ。分かるでしょ？ ポツケに入るくらい薄いお財布って訳じゃないんだからこの世界」

「……………」理ある、が、うーん……、それが理由かよ。はあ、仕方が無い。飲みに行く時は俺を誘って行け。仕方が無いから荷物持ち、いや、財布持ちしてやるよ」

「あ、ほんと？ ならお願いしようかしら。小分けにしたとしても結局金属の塊だから重くって」

「それには同感。けどまあ、ちったあ反省しろよなあ……、はあ。まったく、世話が焼ける……」

どうにも売り言葉買い言葉と言った様子でヒートアップしていた

ものの、疲れて来た所に私が気付いたようですんなりと話が終わってしまつた。

おかしいなあ、あの時の代金私が全部払つた覚えがあるんだが。酔いに酔つて記憶混濁してるじゃないか危なっかしい……。

そう言う意味でもカズマくんがお守りに行つてくれれば安心だな。

二人がそう言う仲になつたとしても特段問題は無いどころか喜ばしい事だろうし。

「かかか、カズマ、なんか足が動かないんだけど」

「はあ？ ……ああ、脚が痺れてるだけだろ。ほれほれ」

「ぎゃんっ?! 何するのよ! 変な感じのがぞわつと来たんですけど!?!」

「あつはつは、律儀に正座するからだ馬鹿め。だからリビングでつて言つただろうが」

「だって……カズマがめっちゃくちや怒つてたから……」

「……はいはい、俺がわるうーございました。つたく、ほら、手を貸してやるから、立てるか?」

「ありがと。よっ、ほっ、あつ」

「あつぶねえっ?! 転ぶならせめて床に倒れろっ」

「あはは、ごめんね?」

「……はあー」

あれで付き合つてないんだよなあ……。

明らかに長年寄り添つた幼馴染みたいな遣り取りなんだが。

いや、いつそ通り過ぎて熟年夫婦のそれじゃないかアレ……。

若いつて良いなあとそんな甘酸っぱい雰囲気を眺めて微笑んでいたのだが、それをぶち壊すように玄関を力強く開け放つたためぐみんの姿があつた。

羊皮紙を一枚握り締めており、ずかずかときよんとしているカズマくんの所に向かうとそれを見せつけるように掲げた。

「……カズマ。悪い事は言いません、自首しましょう。いったい何をやらかしたんですか」

「待て待て待て、何が、どう言う……、ツスー……何で呼び出されてん

の???

「前にキールのダンジョンに行きましたよね。私たちが最後らしいです。そして、私は特にやらかした覚えが今回は本当に無いんです。となれば……、後は分かりますね?」

「いやー……、俺も心当たりが無いんだが……」

「本当ですか? 嘘発見器に誓えますか?」

「ああ。となると……」

二人の視線がアクアさんに向けられるものの、思い当たる節が無かったのか小首を傾げていた。

えっ、でもアクアですよ? と言う表情のめぐみんに、いやでも、うーむ日頃の行いがなあ、と言う感じのカズマくん。

心外よ、私女神よ女神、と言う感じで不貞腐れるアクアさん。

ふむ、なんか雲行きが怪しいな。仕方あるまい、少々派手な登場で雰囲気を緩めるか。

手摺りから颯爽と飛び出し、スーパーヒーロー着地を決めて三人の前に降り立つ。

「話は聞かせて貰った、いつ出発する? 私も同行しよう」

「かきよ……、じゃなかった、聞いてたんですか師匠」

「うむ。誰にも心当たりが無いと言うのなら他所のやらかしだろう。ダンジョンと言う話であるし、逃げて来たモンスターが縄張りにした可能性だってあるだろう」

「あ、それは無いわよ。あのリッチーを浄化するための魔法陣がまだ残ってる筈だもの。これでもかかってぐらいに気合入れて作ったから今もダンジョンの奥は通行止め、新たなボスが生まれる事も無いし、コンビ二前のヤンキーよろしく屯する事も無いわっ!」

さらっと豊満な胸を張って自信満々に言ったアクアさんの言葉に全員の視線が集まる。

成程、無自覚にやらかしたパターンかあ……。

カズマくんが手慣れた様子で静かに天を仰いでいるのが痛々しい。

いやまあ、ダンジョンのボスが沸かなければ難易度は下がるし、奥深くに入り過ぎた場合の避難所としても使える事だろう。

「この駄女神やらかしやがった……、いや、この場合はノットギルティ……?」

「いや、カズマ、アクセル随一のアークプリーストの作った結界だなんて見られたら一発でバレますよ。芋づる式に私たちが関与していると思われてもおかしくありませんよ……っ」

「そうだったっ!? よーし、原因究明と言う建前で結界を潰しに行くぞさあ行くぞ今直ぐ行くぞっ!」

「んー……、多分違うと思うのだけど……。あの結界は浄化しかできないし、ダンジョンだから悪霊みたいに溜め込む事も無いでしょうし……」

言われてみればそうだな。

ギルドに貼られていたらしい羊皮紙には謎のモンスターの大量発生の原因を知らないかと言うものであるし。

むしろ浄化の結界に当てられて減る可能性が高いだろう。

アクアさんはこう見えても元女神である。

下界に降りて弱体化しているとは言えども、デストロイヤー戦の時に披露した『セイクリッド・スペルブレイク』の一例もあるくらいにその実力は上澄みの頂点と言っても良いレベルの筈だ。

そんなアクアさんが張った結界のせいでモンスターが増えるかと言われれば首を傾げざるを得ない。

「もしや、その結界を張ったアクアさんを釣り出そうとする魔王軍の策略じゃないか?」

「あつ、確かに、そのの方が有り得そうではありますね」

「現にベルディアもアクアさんが降り立った光の調査に来ていたと言っていた筈だ。アークプリーストとしての質の高さをその魔法陣から感じ取ったのかもしれないな。それに質の良い回復役が居るならさっさと潰しておきたいだろう魔王軍的にも」

「それもそうですね……。となるとモンスターを呼び出せるダークサモナーでしょうか」

「もしくは階級の高い悪魔だろうか」

私許されたと言わんばかりに胸を撫で下ろすアクアさん。

ううむ、万が一を考えたらフルパーティーで向かうべきだろうな。

バルコニーで声を発さぬ友人たちに水をやっていたゆんゆんと、中庭でたゆんたゆんとさせながら鍛錬だと譲らない意味の無い下手くそな素振りをしていたララを回収し、玄関口に集まった。

ララを先頭に、次に私とカズマくん、その後ろにめぐみん、ゆんゆん、アクアさん。

これがうちのフルパーティーな訳なのだが隙が無い陣形だなこれと改めて思う。

斥候役が居ないがダンジョンに潜る訳でもないので居なくても問題は無い。

今後の事を考えると私かカズマくんが技術を習得すべきだが、カズマくん次第だろうな。

どこそのサイト君宜しく剣となり盾となる護衛戦士タイプの戦い方を軸にしている。

斥候系のスキルを覚えられる冒険者のカズマくんであるが、ポイントは有限のためビルドの完成が遅くなる可能性がある。

キールのダンジョンへ向かうまでの暇潰しにそんな話題を振ってみただが。

「……え？ あっ、す、すみません師匠。既にもう『敵感知』『潜伏』取ってます……」

だなんて返しをされてしまった。

カズマくんの冒険者意識が予想以上に高くて師匠的に鼻高々だぞ。

と、言うのもカズマくんの方針的に「いのちだいじに」らしいので、先手を取られないように『敵感知』を、いざと言う時に汎用性の高い『潜伏』を取得していたのだそう。

「剣士系、いや、戦士系のスキルは良かったのか？」

「んー、確かに自分の手ではっさばっさと切り捨てるのも魅力的なんですけど、前衛職ってヘイト取るから危ないじゃないですか。だから、ヒット&アウェイができる軽装戦士を目指したいんですね」

「ふむ……、細剣でも握るか？」

「いやあ、似合わないでしょう。それにこれぐらいのサイズだと盾に

もしやすいので」

「それもそうか。いっそ、バックラーに片手剣と言う王道スタイルでも良いんだぞ?」

「……それ師匠の好みじゃないですか。あんな器用にパリイするの現実的に無理ですって」

「そうか……。使いやすいんだがなあ」

脳裏に浮かぶのはダクソ3……。ではなくスカイリムのドヴァアキンなのだが、古今東西ガン盾しながらチク剣するのは勝率が高い上に安全である。

聞けばアーチャーの『千里眼』と『狙撃』も取得しているらしく、本格的に斥候を担うポジションを狙っているようであった。

カズマくんらしいと言えはらしいのだが、器用貧乏が過ぎると火力が頭打ちになるのでそこらへんどうするつもりなのだろうか。

「え? いや、うちのパーティって火力に事欠かないじゃないですか。

前張れる師匠に、中距離のゆんゆん、一発火力のめぐみんも居るし、俺はここぞと言う時に隙を作れる可能性を高めた方が良いかかって」

「ふむ、考えて出した答えなんだな」

「はい。俺には主人公は無理ですが、主人公を支える名脇役くらいにはなれると思うんですよ。ほら、手先も器用ですし悪知恵も働きますし」

「そうだな、応用が得意なカズマくんはそういうポジションの方が良いか。いざとなればアクアさんの魔法で何とかなるし、最初から深追いでできないポジションの方が安全か」

「です。だから、最近ロードワークに力入れて体力の方伸ばすように心がけてます」

「……ふむ。偉いなカズマくん。ちゃんと自分で行動に移せるのは良い心掛けだ。期待してるよ」

「……はいっ!」

そう言えばカズマくんって幸運高いんだよな。

そしたらトレハン系のスキルも覚えて、いっそのことシーフ職した方が良いんじゃないだろうか。

シーフ系のジョブツリーの先にはアサシンとは別にマークスマンと言う遠距離寄りの斥候職も存在しているし、器用さを伸ばす方針ならそちらを目指すのも良いかもしれないな。

スキルをラーニングでできる冒険者と言っても取得ポイントの増加と言う重たい要素もあるので、ある程度基礎的なスキルを取ったらそういう方向に導いた方が良いかもしれないな。

「トレハン要員……、成程。一番稼ぎにもなるし、貢献もできる……、何より俺の唯一抜きん出てるステータスを活かせる職業ではあるか……」

「別にシーフだからと言ってダガー系以外を使っちゃいけない訳じゃないしな」

「それもそうですね。本格的に軽装斥候戦士目指してみようかな……。『レアドロカズマさん』だなんて前は呼ばれてたし、天職かもしれないません」

「ん？」

「あー、その、前にオンラインゲームに沼ってた頃がありました」

「ああ、そう言う事か。レバ剣拾った的な」

「そうですそうです。新しいレア装備が実装されたらそれを追っかけるのが趣味だったんすよ」

「意外と良いかもしれないな。幸運も高いし、クリティカル狙いで急所狙うのも良いんじゃないか？」

「あつ、確かに。今度クリスにその手のスキル覚えさせて貰おうかな」と言うか、今のカズマくんなら転職できるんじゃないか？ 此方に

来た当初よりも成長しているだろうし、選択肢が増えてる可能性は高いんじゃないか？」

「へ？ ……そ、それもそうですね、確かめてみようかな……」

この様子だとすっかり忘れてたな。

この世界では転職に必要なのは資質だけなので、ギルドでちよちよいとできる。

神殿か何かに行って転職して貰う必要は無いのである。

……ダーマ神殿的な何かがあるのかと思ってた時期、私にもあった

なあ。

この遠征から帰ったらギルドに寄ってみると前向きな返答をしたカズマくんに微笑んでおく。

うむ、後方師匠面しているけれども特段育てた憶えはないからな……。

精々が三日に一回くらい模擬戦と稽古を付けているくらいだし、これを師匠と言って良いのか私には分かんないが、カズマくんはそう呼んでくれるのでそう言う事にしておくのが良いだろう。

そんな風に雑談しながら郊外にあるキールのダンジョンの方へと足を進めていく。

山門を越えてそれっぽい道を歩いて行くと何か小さなものがわらわらと動いているのが目に止まる。

身を隠しながら近づいて観察してみれば、二頭身程のデフォルメした仮面を付けたよくわからない男性を模したゴーレムっぽい何かが生居た。

「……確かに謎のモンスターだな」

『クリエイトゴーレム』にしたってあんな量作れませんよ」

「確かにキールのダンジョンから溢れてるみたいですね……。成程、ギルドに注意書きがされる訳だ」

「……むしよーにあの仮面を見てると苛々してくるんですけど。石投げ付けてやりましょ、虐めて良い生物よアレ」

「何か物騒な事を言いだしたぞこの駄女神……」

元女神であるアクアさんが嫌な予感と言うか不快感を表すモンスター、だと？

脳裏に浮かんだのは悪魔に対して罵詈雑言を吐き出すクリスさんみたいな女神エリス。

この世界における女神の不？戴天の仇が悪魔である事はアクシズ教の教典からも知れる既知の事実だ。

つまり、そんな女神であるアクアさんが無意識に警戒する相手と言う事は……。

「アクアさん、その不快感でもしかして悪魔と相対した時に感じる

サムシングでは？」

「さむしんぐ？……良く分からないけど、ああ、確かに言われてみればそうね。アレ、悪魔の気配がするわ。具体的には悪魔の両手でこねこねして作ったお手製の一品って感じ」

「見た感じ量産型な感じですけどね……。そうなるとダンジョンの原因はアクアさんの結界ではなく、悪魔の仕業だと言う事が濃厚ですね。一度戻ってげぼ……。じゃなかった、ゼスタとか呼んで困ってぼこしますか？」

「待っておんおん、今ゼスタさんの事下僕って呼ぼうとした!？」

「そりゃ、まあ……。使い勝手の良い方向性を間違えなければそこそこ使える人材だし、けど性癖と人格がアレだから雑に使う時にも便利なんだよなあの人」

あはは、ゆんゆんは良い子ちゃんだなあ。

人の事を慮れる精神は良いと思うが相手を選ばなきや駄目だぞ。

次期アクシズ教最大司教と呼ばれる程には有能ではあるのだが、旧来のアクシズ教でその立ち位置を維持できるあたりゼスタは変態なのである。

それに私みたいな美少女で幼い子にこき使われるのも喜べるとつても変態さんなので運用としては間違っていないのだ。

むしろご褒美です、とにちやあとした笑みを浮かべるだろうよあの変態なら。

「で、だ。ゆんゆんそろそろその癖治した方が良いぞ？」

「へ？」

「叫ぶ癖。今ので気付かれたみたいだぞ」

「あつ、ごめんなさいっ!？」

此方の方角に顔を向けた仮面人形共がトテトテと歩き始め——たかと思えば猛ダツシユし始めた。

それを見たアクアさんが生理的に無理だったのか、そこらへんにあった石を大リーグボール一号染みた投球フォームで力を込めて投げ付けた。

こつんと先頭を歩いていた仮面人形の頭に当たった瞬間、チュド

ンツと言う擬音が聞こえてきそうな小気味良い爆発音と共に爆散した。

その爆発に巻き込まれた後続の仮面人形たちが連鎖爆発を起こし、ばよえ〜んと言う感じで入口付近まで居たものが吹っ飛んでいく。

その様子に呆れと困惑の表情を隠せない私たちが唾然とその光景を見つめるしかできなかった。

「あの感じからして自爆特攻型の使い捨て人形か……。これまた厄介な……。地面の抉れ具合からしてそこまで威力は無さそうなのが幸いか」

「そうみたいね。と言うか私を見てあいつら走り始めたんですけど、すっごく怖かったんですけど……」

「女神が悪魔を嫌うように、悪魔も女神を嫌ってるって訳ですね。アクアさんの言う通り、アレは悪魔が作ったものだと考えて良さそうですね」

やや小刻みに震えるアクアさんをカズマくんが肩を叩いて慰めていた。

威力がイマイチなのと爆発の仕方が雑なのでこの程度で済んだが、誘爆せずに一斉に飛び付いてから爆発されたら面倒極まりない地雷モンスターだ。

「と、言う事でララ、前に出て良いぞ。あの爆発なら耐久力抜けないだろうし」

「良いのかっ!? ふふふつ、たまにはこう言う痛みも欲しいからな。蔑みや嘲笑が無いのが少し物足りないが、まあ、問題無かろう」

先頭にララを配置し、少し離れた所に私とカズマくんを先頭に残り三人を引き連れるフォーメーションを取る。

必要無いのに『デコイ』を使いながら散歩気分で歩いて行くララの爆発模様を見ながら、比較的安全に私たちはダンジョンを進む事ができた。

灯りの無い中を歩くのは面倒なので松明をソウルから取り出して左手に装備する。

右手に呪術の火を灯して準備だけは終えておくのが良いだろうな。

前でドカンドカンと爆発を受けているのにピンピンしているララなのだが、後ろ姿からして不満な感じが見て取れた。

ああ、うん、もしもしくなくても耐久スキルガン振りだからチクチク程度の痛みしか受けていないのだろう。

その証拠に衣服がやや煤けるだけで破損は無いし、……もしかして衣服を守る系のスキル取ったのかララ。

前にキャベツの大群に体当たりされていた時は割と破損して露出過多な状態だったのだが、それ以上に威力が高いであろう爆発を受けても煤ける程度に収まっているあたりそういうスキルを取得したのだろう。

……自惚れでなければ首の金属製のチョーカーを守るためにだろうか、可愛い所あるなララ。

最初は手にしたロングソードで闇雲に振って遊んでいたようだが、飽きたのか蹴っ飛ばすようになったララの背を追い掛けながら進んで行く事十数分。

「俺の感覚が確かならそろそろボス部屋に近いところですね」

「ふむ。奥へ行くに連れて密度が上がっているからそこが原因の場所で間違い無さそうだな」

「もしかして、奥に入れないから結界が消えるまで嫌がらせでこの爆発する奴を作ってるのかもしれないわね。並大抵の悪魔ですら私の結界なら弾くでしょうし」

「あれ、それじゃあ結局原因ってアクアさんの結界？」

「……………」

ゆんゆんの歯に衣着せぬ言葉に全員が黙ってしまう。そう言うところだぞゆんゆん。

けどまあ、アクアさんが結界を張らなかつたらこの騒ぎの張本人が奥に陣取る事になっていただろうから、ある意味フラインプレーだったのだろう。

この手のダンジョンはダンジョンコアに近い最奥に行くに連れて魔力溜まりになる傾向にあるので、せっせとこの人形を作っている悪魔もそれを利用して量産しているに違いない。

最奥のボス部屋手前かつアクアさんの結界を通している事で魔力溜まりも薄まっているに違いない。

仮面人形の威力がそこそこ止まりなのはそれが原因なのかもしれないな。

……まあ、ララの耐久が高いから憶測でしか言えないんだけども。

態々自爆されてダメージを確かめる必要性も無いしな。

こういう時に性能特化の仲間が居るのは助かるな、色々と癖は強いけれども。

いやまあ、自分の事を棚上げしている感は否めないが、器用貧乏枠だと思えば私は。

仮面人形が歩みを進めているのは私たちの方角、もとい入口に向かっていている事もあり、逆説的に背を向けている方向に黒幕が居るとも言える。

明らかに知性を感じられる様子は無いので作り出してからは自動で動く仕様なのだろう。

ララが雑に蹴つ飛ばしながら進んで行くと、奥の方に神々しい結界の明かりが見えて来た。

「……居るなあ」

「……居ますねえ」

「むむむ、女神センサーが反応しているわ。アレが悪魔だって事は確定的に明らかよー」

「土をこねこねして……、わあ、あの仮面を付けた人形が動き出してる。どうやってるんだろ」

「……ゆんゆん、友達を作り出そうとするのは止めた方が良いと思いますよ」

「えっ、な、なんで分かったのめぐみん……」

「貴女ならやりそうだなと思ったからですよ、はあ……、ぼっち気質のゆんゆんがアレを覚えたら屋敷を埋め尽くす勢いで作るでしょうね、ええ、間違いなく」

「そ、そんな事……、ないよ?」

嘘つけ、と言う一同の視線に晒されたゆんゆんが視線を反らした。推定悪魔を目の前にして何してるんだか私たちは。

けれどもまあ、タキシードにあのへんてこな仮面を付けた悪魔は人形作りに専念しているのか気付いていない様子。

……先手、取るべきだろうか。

そう思いながら観察しているとできたてはやはやの仮面人形が此方の方へ向かって歩き始め、先程まで蹴散らしていた事で癖になっていたのかララが容赦無く蹴っ飛ばし――。

「「「「あつ「「「」」」」」

「む？ 何で飛んでぐああつ?!」

時間差で空中で爆発した仮面人形の作り出した爆発に半ば巻き込まれた悪魔の男が悲鳴を上げた。

予期せぬ先制を取ってしまったが仕方があるまい、戦闘開始だ。

ララの尻に蹴りを入れて前に押し出し、私とカズマくんが中衛に立ち、アクアさんたちを後衛に置いて戦闘準備を終える。

ソウルから取り出したベルディアの鎧から作り出されたタワーシールドをララに投げ渡す。

漆黒の大盾を構えた事で意識を切り替えたララが呐喊し、その後ろを盾とグラディウスを取り出した私が追従し、その後にカズマくんが慌てて背を追う。

爆発に吹っ飛ばされた悪魔が立ち上がる前に先手を決めようと走り寄る私たちを見て――。

「ま、待つのだ未来のお得意様よ！ 吾輩は貴様らと戦う気概は無いのだ！」

「……はい？」

頓珍漢な事を言いだした事で戦闘の雰囲気霧散し、困惑だけが静寂に取り残された。

そして、私の間違いでなければあの悪魔、この私を未来のお得意様と呼ばなかったか？

動きを止めた私たちの様子を見てはあーつと安堵の息を吐いた悪魔は煤を落しながら立ち上がった。

「ごほん、繰り返すが吾輩に貴様らと、特に、と、く、に、吾輩たち悪魔の天敵であるそのアークソーサラーの少女と戦うつもりは一切無い。武器を収めるのだ。話せば分かる、落ち着くのだ。そうだ、それでよい。いや、本当に一回休みどころではない被害を被るのは勘弁して欲しいのだ此方としても、な」

「あー……、と、言う感じなんですが」

「……まあ、敵意は本当に無いみたいだし、言い分くらいは聞いてあげても良いんじゃない？　なんでか知らないけどおんおんちゃんにビビってるみたいだし」

「ビビってなんぞおらんわ！　だが、その少女が会得している魂砕きは我ら悪魔の残機の概念を文字通り握り潰す所業なのでな。吾輩としても話し合いで済むのであれば、そちらを選ぶくらいには遠慮しておきたいのだ」

ああ、成程。確か悪魔って地獄だけに本体があつて分身がこつちに来ているんだっけか。

残機制らしく、今まで悪魔が絶滅できていない理由の大半がそれであるらしいとゼスタから聞いた事がある。

……もしや、私が倒すとソウルになって此方側に意識ごと固定されてしまうのだろうか。

戻る筈であつた意識が本体に戻らないが故に、空っぽの本体だけが地獄に残るのであれば、それは死んでいると言っても良いのかもしれない。

成程、確かに私は悪魔の天敵であるらしい。

「ふう、お互いに落ち着いた所で名乗っておこうか。吾輩は諸悪の根源にして悪魔たちを率いる地獄の公爵、魔王軍幹部の一人にして結界を担う一角たる見通す悪魔こと大悪魔バニルである！　我がダンジョン予定地によろこそ！　盛大に歓迎、つとお、この言い方だと反応するようなので、ささやかに歓迎させて貰おうか！」

「なんか愉快な人だね、悪魔だけど」

「紅魔族的に有り寄りの有りですね。良い名乗りです。日和つたのはマイナスですけど」

「ふむ、愉快痛快とは言ってくれるではないか、最近お腹周りが気になる紅魔族の族長の娘よ！」

「なんでピンポイントで私の気にしている事を!？」

「ククク、良い感情をありがとう。年頃の娘の羞恥心、大変ご馳走様である」

「……うーむ、悪魔と言うとあのマクスウェルと言うやばい奴が印象的のだが、目の前のバニルは狂氣的と言うよりかは道化的な感じで、本当に敵意が無さそうに感じられる。」

「不思議そうな顔をしているな、銀髪の娘とこつそりと逢瀬するアクセルの英雄殿。おおっと、その見るからにやばい火の玉を此方に向けるのは止めるのだ」

「後で話があるぞおんおん」

「後で話をしましょうおんおん」

「うぐう……、本当に敵意無いか貴様あ。喋らせずにこのまま滅してやった方が世のためじゃないか……?」

「滅相も無い。吾輩はこの地には魔王から託された調査と、商売センスの欠片も無い貧乏店主に用があつて来ているに過ぎないのだからな。絶妙に羞恥の混じった悪感情、実に美味である。お礼として、貴殿が気になっている事柄の一つである、天然酵母の作り方のメモを呈しよう」

「……見通す悪魔の名は伊達ではないという事か」

めぐみんに美味しいふかふかなパンを作つてやりたいなあと思つていたのを見抜かれたのか、作つた事の無い天然酵母のレシピを求めている事を言い当てられては仕方が無い。

正直知りたいのでこの『混沌の火の玉』をぶつける事はしないでやろうじゃないか。

成程、未来のお得意様と言うのはそう言う事か。

まったく、保身の仕方が上手い悪魔だな。色々知りたい事を聞き出すまでは生かしておいてやろうじゃないか。

ジトーつとした視線がアクアさんから送られているが仕方が無い、仕方が無いのだ。

碌な娯樂の無いこの世界において、食の彩りと言うものは必須級なのだ日本人からしてみれば。

それにその恩恵をアクアさんも受けられるのだから決して損ではない、本当だぞ？

34話

あー、なんだ……、つまり、この大悪魔バニルが此処に居るのは成り行きで。

魔王城から追い出されて丁度良いからとアクセルに居るらしい知人に会うついでに、丁度良さそうなダンジョンがあったから手中に収めようとしていた、と。

「……もう一度言ってくれるか？」

「うむ、心底困惑している微妙な感情だな。おやつくらいにはなろうというもの……。まあ、良いだろう。もう一度言つてやろうではないか。この大悪魔バニルには夢があるっ！ 壮絶な冒険の果てに、強敵であるこの吾輩を打ち倒した勇敢なる者が、やつとの思いで開いた宝箱がスカ箱であつた時の顔を見ながら滅びたいのだ！」

「……はあ」

で、この始末である。

「いやまあ、気持ちは分かるが……。供給が無いから自分で作れば良いだろうって言う精神なんだろうけどもさ……」

「うむ、流石は未来のお得意様だな。この吾輩の破滅願望よりもエグい尊厳破壊願望性癖を持ち合わせているだけはあるな。もつとも、お得意様の場合、相手が、と言う点がミソだが」

「やつかましいわ。人の性癖見通してるんじゃねえ。で、あの変な人形で何してた訳よ」

「む？ 知つての通り、ダンジョン改築計画の第一段階だが」

「……ボスが居ないのを良い事にモンスターを排除して下準備つて事か」

「話が早くて助かる。これぐらいの頭の回転をあの貧乏店主が欠片でも持ち合わせていれば……。はあ、まあ、良かろう。……その不倶戴天の女神がこの結界を張つたのだろう。さつさと壊してくれれば貴様らに手を出す事はしないと約束しよう。このバニル『人間』は殺さぬ主義なのでな」

そう言えば悪魔と女神ってバチバチだったな。

その割にはアクアさんは退屈そうにカズマくんちよっかい出して話半分の様子。

目の前の悪魔もアクアさんへの悪感情を殺し切れてはいないが手を出しに来ようとしていない。

……どう言う理屈だ？

「ふむ、どう言う理屈だ、と首を傾げているお得意様よ。老婆心で教えておくが、お得意様が持ち得ているその力は悪魔にも神にも通用する悍ましき力である事を自覚するべきだ。人の身でそのような業を背負うとは、どれだけ生き急いで来たのやら……。吾輩が見通す悪魔としての権能を以ってしてもきつちりかつちり読み取る事のできないお得意様であるが、現時点では有り得ないIFと言う視点であれば幾らか見れたものがある……。……流石にこのバニルの本体を殺すために地獄へ赴き、全ての悪魔のソウルを砕いて糧とし、この吾輩相手に消耗戦を仕掛けて確殺しに来るのはマジでノーサンキューである。流石にそこまでして滅ぼしに来られても重過ぎて困ると言うか……。」「する訳無いだろ、面倒な」

「……因みにそのパターンを引いた吾輩の行動だが、その金髪の少女に乗り移ったものの、幸せな生活を享受し被虐願望が改善傾向にあり精神が抵抗できず、支配したまま吾輩を貴殿が殺した事でそのまま一緒に死んで廃人と化したのが事の顛末だ」

「納得した。誰だってそーする、私だってそーする」

「一瞬で覚悟キメて瞳孔を開きながら睨むのは止めるのだお得意様よ。そう言う事もあって、吾輩は絶対にお得意様とガチなバトルをしたくないのだ。……誰が嬉しくて工業廃水を煮詰めたかの如く淀んだ双眸で睨み付けて歩く狂気と化したお得意様との勝てぬ戦いに赴くと言うのだ。避けれるなら絶対に避けるわ、そんなもの」

……あー、白い霧の結界でバニルを閉じ込められれば、ゾンビ戦法で確殺できるのか。

その場合、私はもはや人の形をしているかどうかとも怪しいだろうけども……。

む、だが、それはあくまでバニルの理由であってアクアさんの理由

にはならないのでは？

「……まあ、そこのお花畑の化身めいた頭をしている女神は下界に落とされ弱体化しておるし、何より、残機によって吾輩を確実に滅ぼせないと分かっているが故に、そこまで脅威度が無さそうだし、お得意様が何とかしてくれるだろうと投げ出した訳だ」

「確かに女神として悪魔は罰して滅ぼすべき相手ではあるわ。けどね、……今の私じゃ勝てないし、あの見敵必殺チェスト悪魔なエリスも手を焼く存在なのよね悪魔って。そもそも地獄に本体があるから此処で潰してもほとんどノーダメージなのよね。何度も出て来て恥ずかしくないのかしらね？」

「言ってくれるではないか頭のおかしいアクシズ教に崇め奉られている水と宴会芸の女神よ。む、そこのお得意様によって方向転換して頭のおかしいの部分が外れ掛かっているのか、ふうむ、妄想を煮詰めて文字に書き連ねた官能小説を必死に書いている信者や死ぬ程試行錯誤して木から紙を作ろうとしている信者に愛されているようだな。……自分で言っていて分からなくなってきたのだが、お得意様の影響力はとんでもないな……。良ければうちのマイナスしか生まぬ貧乏店主にコンサルティングを手掛けて貰えぬだろうか」

「……割かし冗談で言ってみた企画を全身全霊で行っているのかよ……、やっぱやべえなあいつら」

嘘だろお前、みたいな表情で皆の視線が私に集まっている。

そこで梯子外すのかよ、みたいな雰囲気である。

いや、確かにアクシズマーケットの草案を書いたのは私だが、正直良かれと思つて程度の温度で接していたのだ。

和紙の作り方を教えてやり、羽ペンとインクに代わる鉛筆の作り方も教えて、その他諸々の進捗はゼスタにぶん投げたのが真相であるからして。

恐らくあいつの事だから私がアクアさんを保護している事も加味して色々と内容を盛っているに違いない。

……まさかとは思うが、アクア様公認のイベントだとか思つて無いだろうなあの変態。

あー……、流石に無いだろうと思う事ではあるが、ゼスタだしなあと言う嫌な信頼もある訳で。

近々様子見に行った方が良いかもなあ……、だなんて一人溜息を吐いていたら場の雰囲気は何ともアレな感じになっていた。

「えーと、何と言うか色々アレなんで纏めると、謎の人形を作ったバニルはやる事やったから作るの止めてダンジョンの改装するんだよな？」

「うむ、お得意様の前世の性別に翻弄されていた思春期の少年よ、それで合っているぞ」

「へ？」

「んんんっ！ えーっと、俺たちはその魔法陣を潰しておきたい。その後はひっそりとやってくれば良いんだが、おっけー？」

「そうだな。先程も言ったが人間は我ら悪魔にとって御馳走を作ってくれる料理人のようなものだ。勿体無い精神が働いて死なせる事は疎か、一人増えるだけで小さくガッツポーズを浮かべるくらいには好意的なのだぞ。……個人差はあるが」

「そこが一番肝要では……？」

「揚げ足を取るではない、その金髪少女とお得意様の営みを知ってから日夜悶々としている紅魔の少女よ」

「お前もいちいちおやつを強請るな。まったく、純情なめぐみんが恥ずかしさから、もじもじとして悶々としながらも生来のピュアさを捨てられないで葛藤するのが良いんじゃないか」

乙女の秘密を暴露され顔真っ赤のめぐみんがバニルに向かって爆裂魔法を撃とうとするのを後ろから止めておく。

身長差があんまりないのでシンプルに後ろから腕を含めて胴へと抱き着く形で抑えた。

気持ち強めに抱き締めて右肩に顎を置く形で抑え込みを強めておく。

「……お得意様は悪魔より悪魔らしいと言うか、サキュバス染みてるな……」

「古今東西、悪魔より人間の方が恐ろしい事だなんて分かり切った事

だろうに。人間は短慮で自己種族中心的な社会を形成するやべー奴らだつてのにまだ気付いて無かったのか？ 人が栄えている水面下には子孫繁栄の営みがあるんだぞ。実際、前世の総人口はあくまで推計だが約七十九億ぐらゐは居たらしいしな」

「それはまた……、悪魔にとつての楽園ではないか」

「まあ、天使、悪魔、神様の存在は全て実証不可能と言う観点で居ない扱いされてるから、この世界の法則に則ると多分消滅するぞ？」

「と、言うとう？」

「この世界における精霊が良い例だな。極め付けは冬將軍だろうな。冬の代名詞と言うだけで現実化する世界だ、逆説的に否定的な集合無意識によつて存在が消される事だろうよ。故に、地球における悪魔は既に形骸化どころか幻想化していて、かつて本当に居たとしても現代には存在しないと言う否定的な無意識的バイアスによつて存在が否定される訳だ。彼方に着いた途端に居なかつた事にされかねないぞ」

「……恐ろしいな、お得意様の故郷の人間社会と言うのは」

「まあ、あくまで此方の世界の法則に則れば、と言うだけだ。案外普通に居られるかもしれないぞ。おすすめはしないが」

大悪魔バニルの好物である感情は羞恥心における悪感情であるからして、大概の人間がドライな地球では珍味扱いだろうよ。

此方の世界の人間は大体がノリで生きているところがあるからな。多分世界自体がそう言う空気をしているんだろうよ、ギャグ空間的なサムシングがスパイスになっているに違いない。

「さて、長話もこれまでだ。貴様らは吾輩の後ろのアレを処理する、吾輩はそれを見届けて手を出す事なく見送る。この場での締めはそれで良からう？」

「まあ、そうだな。どうするカズマくん、それで良いか？」

「え、あ、はい。良いんじゃないですかね。んじや、アクアよろしく」「仕方が無いわねえ……。……勿体無いし、この残った結界の浄化力ぶつけてやろうかしら」

何やら不穏な事をぶつくさ言っていたアクアさんだったが、ちよちよいと言う感じで今も光輝く結界の魔法陣に数秒触れただけで解

体を完了した。

そして、振り向き様に宣言通りと言うべきか、手に握った光り輝くそれをバニルに投げ付けた。

「ふっ、このようなセンスの欠片も無いへなちよこボールに吾輩が当たる訳が——」

「えいっ」

「ぐああああああーっ?!」

軽快なサイドステップで避けた矢先、私の方に近付いて来たので生理的な嫌悪感から蹴飛ばしてしまった。

腰を横から蹴りつけた形になるので勢いが強く、野球ボールよろしく飛来していた浄化ボールに顔から突っ込む羽目になったバニルが悲鳴を上げた。

まあ、腐つても元女神であるし、大悪魔でさえ通れぬ結界の余剰浄化力、それも握り拳サイズに圧縮された劇物なので当然の結果と言えよう。

恐らく本体なのだろう仮面から淡い湯気を放ってバニルが苦しみの声を上げて倒れ伏す。

顔半分を覆い隠していた仮面が砕けたかと思えば、俯せにバニルは倒れて息の根が止まった。

そんな殺悪魔事件を目撃してしまった私とアクアさん以外がS A N値チエックを受ける羽目になった。

「うわああああ!?! おいアクア!?! 何してんの? マジで何してんだよ!?! 穩便に終わる流れだったろ今のは!?!」

「仕方が無いじゃない。嫌なものは嫌なんだもん。それになんかむかつくし」

「子供の短気かつ!?! おいおいどうするんだよ、残機があるって話だろ。恨んで闇討ちとかされねえだろうな!?!」

「そ、そそそそうですっ、私はこれからずっとおんおんの近くに居る事にしますっ。お得意様と呼ぶくらいにおんおんには好意的であると考えられますからっ」

「む、では私も妻として隣に居ようではないか。頼り甲斐のある夫が

きつと守ってくれるだろうからな」

「えっ、わ、私はどうしたらっ!? 守ってくれる頼れる人も、恋人も、友達も居ないんだけどっ!? あっ、そうだ、アクアさん、アクアさんならっ」

確かにバニルを屠ったアクアさんであるが、狙われるであろう人物に守って貰おうとする魂胆はどうかと思うぞゆんゆん。

と言うか、お前もこっちに来い。幼馴染と言う名目で一緒に守ってやるから……。

……いつになったらゆんゆんのぼっち思考は治るのだから。自分から友達は居ないとか言っちゃったらもうどうしようも無いんだが。

いつそ、荒療治で恋人作らせるか? けどなあ、ゆんゆんを託せそうな男居ないんだよなあ。

「と、言う事なんだがバニル。お得意の見通す奴でゆんゆんの彼氏見つけられないか?」

「うーむ、我が見通す力を持ってしても無理なものは無理だぞお得意様よ」

「「「うわあっ!?!」」」

壁側の身を隠せそうな場所でこっそりと復活してひっそりしていたバニルに声を掛ければ、仕方あるまいと言う感じのテンションで颯爽と躍り出た。

全く気付いてなかった五人は私の後ろに隠れるように飛びしきり、先程倒れたバニルの死体らしき何かと現れたバニルを交互に見て困惑の極みを見せていた。

「要するにあの仮面がバニルの分身体の本体で、身体の方はさっきの自爆人形のように土から作ったんだろ」

「うむ、流石の慧眼だなお得意様よ。それともその魂を見通す瞳の力か?」

「ああ、私の右目は万物の魂を見る力がある。お前のソウルが仮面に宿ってて、そっちに移動したのも全部見えてた」

「ふうむ……、間接的であれば魂の篡奪は行われないようだなお得意様よ」

「いや、どちらかと言うとバニルとの相性が悪いだけだな。ソウルの動かし方を熟知しているからか、霧散させずにそのまま次の媒体に移動してるから厳密にはお前死んで無いだろ。俗に言う残機とやらを身代わりにして、核となる部分を逃がしてる訳だ」

「……その才能は本当に恐ろしいものだ。お得意様には小手先の技術は通用せんようだ。吾輩のスタイルはこの仮面。つまりは付け替えができ、スペアがあるとと言う事。故に、何重にも重ねて被る事で事故を防いでいる。……まあ、魔王と約束した結界の維持を扱うための術式は先程のガワについていたので、これで吾輩も自由の身と言う訳だ。下手な芝居を打った甲斐があったと言うものだ」

「……見通す力を使って未来予知めいた事をしてるのか。面倒な千日手になりそうだから、バニルとは戦いたくないな」

「それは此方も同じだお得意様よ。いや、割と本気でお得意様と戦うのは勘弁して欲しい。あの貧乏店主の店を栄えさせる可能性が一番高い人物とは争いの火種も踏み潰しておきたいくらいなのだ」

やっぱりお前そっちが本音だろう。こいつの性格からして仮に本当に私が地獄へバニルを殺しに向かったとしても、最後の本体を地上の方に移して糞みたいなの鬼ごっこが始まるに違いない。

バニルの勝利条件は私に本体を捕まえさせない事であり、意思を完全に飛ばした後の私にあるバニルへの殺意が擦り切れるまで逃げ切れれば勝ちなのだから。

殺意も失い、歩む理由も無くなって完全な亡者と化した私はその場で蹲り、やがて誰かに篡奪されるまでその身を横たえさせる事だろう。

「……にしても、その貧乏店主ってのは誰なんだ？ 心当たりが無いんだが」

「……捻くれた性格、旧知の仲、魔王軍幹部、結界の維持……、マジかよ、お前がウイズの知り合いかよ」

「知っているのかカズマくんっ」

「知っている事しか知りませんが、まあ、知ってる方です。と言うか何でダンジョンの構築にウイズの店の手伝いが必要になるんだ？」

「ふつ、簡単な事だ、先程から当たっている女神のおっぱいに発情しかけている少年よ。理想のダンジョンを作るための資金が全く以って足りんのだ！ 流石に素手で一からダンジョンを作り直す訳にもいかぬからな。魔族の建築家を雇うための資金を集める必要がある。そこで、旧知にして何かと恩を売っているあの貧乏店主を利用し、アルバイトと言う形で店を繁盛させ、浮いた金をプールして我がダンジョンの礎とするのだ！」

「随分と長い目の計画なんだな……。魔力さえあれば生き延びる長命たる悪魔らしい計画だな……」

強奪や強盗などのマッポーめいた手段ではなく、堅実でコツコツとした貯金によるダンジョン計画に流石に私も困惑を隠せない。

本当にこいつ悪魔か？ だなんて疑問が湧いてくるが、もしやこいつのダンジョンの計画って老後のお楽しみみたいな軽いノリでやっているのであって……。ま、まさか終活的な……？

そうなるとうれい入る熱が趣味のノリであるのも頷ける。長期的な計画なので目下の敵となるアクアさんと敵対関係になるのは拙い理解しての先程の妥協な訳か。

先程の一件でアクアさんはバニルに先手を取って害してしまった事もあり、今後はそれを楔にネチネチと盾にして本格的な対立を防ぐつもりなのだろう。

実際、リッチーであるウイズさんのところにバニルが転がり込むのであれば、種族的に厄介な人物が一カ所に集まってくれる事もあって今後がやりやすくなるもある。

……まあ、先程から連呼されているように私自身、バニルのお得意様になる可能性は非常に高い。

と言うよりも見通す力が便利過ぎる。グーグル先生よりも正確に答えをくれる万能な辞書みたいなものであるし、その利便性を加味すると敵対関係になりたくない人物でもある。

「まあ、依頼もこれで完了だろう。帰るか……。何かどつと疲れたな」
バニルの自爆人形によって駆逐されたこのキールのダンジョンは核となるボスが不在である事もあって、活性化を止めて不活性化ダン

ジョンとして落ち着く事となった。

バニルが奥の部屋へと向かい、ちよちよいと何かをやったらしい。憶測であるがボスの情報を自分に書き換えたのだらうな。故に、ただの洞窟と化した訳だ。

自爆人形も私たちがほぼほぼ駆逐したのでバニルの遠隔操作で爆発させて証拠隠滅完了。

「入口は封鎖しなくて良いのか？ 盗賊とかが住まないか？」

「ふむ、その可能性もあるが、まあ、今のところは問題あるまい」

カズマくんの投げかけに肩を竦めて返答し、ちらりと私を見たバニル。いやまあ、バレてるよなあ。

私の冒険者としてのキルスコアは大概がモンスターであるが、その二割くらいは人間である。

主にアクセル周辺の盗賊や山賊と言った輩であり、冒険者崩れからチンピラよりも迷惑なゴロツキが野に下った者たちの総称だ。

ただでさえ新人冒険者の街と呼ばれるアクセルだ。それをカモネギに見立てて舌なめずりをするゲスな輩が多い事が気に掛かっていった。

けれども、ギルドに山賊や盗賊の討伐依頼は見た事が無く、最初の頃は不思議に思っていた。

所謂上級冒険者に対して秘密裏に送られる秘匿性緊急依頼の存在により、その謎が解けた訳だ。

上級冒険者だなんて呼ばれる輩は大概がクソツヨメンタルの持ち主であり、荒事にも長けて人間性も良い者が多い。

そのため、個人単位で受けられる緊急クエストが上級冒険者のみに手紙で送られてくる訳だ。

そして、私はソウルの在庫を増やすために最近はそれに手を付けていた。

今や両手の指では足りなくらいに今生の私は人を殺した経験があり、そしてそれに忌避感も躊躇いも罪悪感も抱かないやばい精神性を持っていて事を自覚してしまった訳だ。

……明らかに人間性の欠如と言うか、最近取得してしまった『暗い

穴』の影響である事は間違いない。

最初は威勢の良かった盗賊連中が下卑た瞳で私を見ていた筈なのに、一人、二人と無残に殺されていく過程を以って、泡喰った表情で必死になって私を殺しに来る彼らの何とも無様な事か。

足を切り捨てた事で地べたを這いずって逃げようとする奴の頭を踏んで潰して押し花にしてやり、両腕を失ってふらふらと逃げる背中へ矢を放ち的当てをしてやり、泣き叫んで土下座して命乞いをする奴を斬首に処し、女性を性的に暴行して裸だった奴の男性器を切り落としてから玉を潰してやった。

ああ、実に楽しかった。

弱い者虐めはいけないと分かっているのだが、殺しても虐めても良い塵屑共であれば問題は無い。

殺して良い奴らを残虐に殺して、帰ってくればさながら救世主を見るが如く視線で被害者から崇められ、ギルドからも手厚い報酬と信頼を得られる。

そして、何よりも人のソウルはモンスターソウルよりも遥かに上質だ。

そこらの奴を殺して奪うよりも非常に手っ取り早く、何よりも問題にならない。

と、言う事もあって残念な事にアクセル周辺の盗賊山賊共は今やもう居ないのである。

「死んで欲しかったけれども、居なくなつては欲しくなかったんだがなあ」

そう誰にも聞こえない小声で呟いた。

それを拾ったのか、はたまた見通したのか、バニルだけが天を仰いだ。

次はアルカンレティア辺りの奴らを狩りに行こうかな、だなんて軽く考えているあたり、私はもう地球の、現代社会に戻る事はできないだろう。

明らかに犯罪者であるし、倫理感も破綻してしまっていると自覚している。

やっぱり、報復を恐れて皆殺しにしたのが堪えたのだろうか。

最初の内は仕方が無い、守るためだと思ってやっていたが、今じや勿体ない精神で追い詰めて殺しに回っていたいなあ。

『暗い穴』一つでこれだ。二つ、三つと増えていったらどうなってしまうのだろうか、私の人間性。

獣として墮ちるのか、それとも破綻者として壊れるのか、はたまた快樂に溺れるのか、私の明日はどっちだ。

死ぬに死ねないなあと地力を鍛えていかねば、ふとした瞬間に死んだ後の事が怖い。

ソウルの貯蓄はあるが無意識に進む人間性の破綻が一番怖くなってきた。

「……本当、悪魔より悪魔であるな、お得意様は。それだからこそ見ていて面白いのだが……」

まあ、バニルの視線を此方に引き付けられていると思えば良いのだろう。

ぶつちやけ、こいつめっちゃやくちや強いし。ソウルの輝きがベルディアの倍以上はあるのだから。

こいつが真に人類の敵に回ったらマジでやばい。大半の奴が詰むぞ、こいつに。

ある意味私がバニルの天敵であって良かったのだろう。こいつを押さえられているだけでも十二分の価値がある。

ウイズさんの所で程々に餌を与えて飼い殺しのように日々を謳歌させておく事がバニルの対処法である事は間違いない。

無論、ダンジョンの構築もひっそりと妨害しなくちゃならないので、ウイズさんの貧乏スキルに期待しておく事にする。

ウイズさん、ウイズさんはなあ……、何と言うか、目利きは良いのだが致命的に商売層の事を考えない残念さを持ち合わせている。

上級冒険者であれば喜んで買うであろう品々を、駆け出しから中級が精々のアクセルで売りに出すのがそもそも間違いだ。

王都に店を構えていればそれなりに需要があつて店が回るだろうに、何かしらの理由があつてアクセルに居るのだろうか……。

これから待ち受けているであろう胃が痛くなるような苦難に苛まれるであろうバニルに黙祷しておく。

「と、言う事で依頼を達成したので報酬金を頂きたいのですが」
事の顛末を幾つかふわつとしておきながら、大悪魔バニルがキールのダンジョンのボス不在を理由に住み付こうとしていたと言うストーリーでギルドに報告を済ませる。

蹴りを一発入れていた事もありラストアタックを何故か貰っていたので冒険者カードを見せて証明を果たす。

多分、バニルの事だからアクアさんのキルスコアを増やすのが気に食わず、浄化ボールが当たる前に既に仮面を自分で砕いて逃げ出していたのだろう。

そのため、自爆扱いとなり次点である私に討伐の経験値が流れ込んだ訳だ。

実際には残機と言う身代わりを破壊しただけであるが、冒険者カードは経験値等を材料に判断しているのかこうして記載されている事から討伐したという事で良いのだ。

「ま、魔王軍幹部を二人も……。これが新進気鋭のアクセルの英雄……、流石ですね……。ああ、貴女が産まれて来て本当に良かった……」

受付嬢が涙ぐんで私を拝むように感謝の言葉を伝えて来た。

まあ、お仕事柄モンスターや魔王軍に殺されたりする冒険者の管理をしているようなものだし、こうして実際に対面している事もあってギルドマスターのように書類の数字だけで感情を終わらせられないのだろう。

受付嬢が冒険者と恋仲にならないと言うジンクスもそう言った点から存在している。

冒険者を見送り、帰ってこなかった人たちを何人も彼女らは知っているのだ。

けれども、仕事を円滑に進めるためにその感情を押し殺して業務を熟せねばならない。

故に、こうして魔王軍の脅威を挫く存在は彼女たちからすれば喉か

ら手が出る程に欲しかった存在なのだ。

まあ、それはそれとして、出す物は出して貰おうじゃないか。

「ええ、勿論ですつ。ですが申し訳ありません、先日のデストロイヤーの報酬を渡した事もあって、すぐに用意する事ができないのが現状です。かつての英雄を超える偉業を果たしたおんおん様に不義理であるとは我らギルド一同理解しております、ですが、無い物を手渡す事ができません。本部の方に問い合わせさせて早急に送り届けて貰う形となります。どうか、今暫くお待ち頂く事をお許しく下さい」

「ああー、うん、そ、そこまで追いつめられると此方としても困る。ただでさえ、私は若輩の冒険者だ。あんまり無理を言つてギルドからの心象を悪くしたくないんだ。払う物を払ってくれる用意をしてくれるのであれば、ある程度は待ちますよ」

「ありがとうございます。我らアクセルのギルドの名を賭けて、しっかりと報酬をお渡し致しますので、どうぞ、今後もアクセルをよろしくお願い致します」

「無論だ。このアクセルに屋敷を持っているんだぞ？　ちゃんと市民の一人として責務を果たすさ」

「その言葉を聞けただけでも救われる思いです。どうか、貴女が人類の希望になる事を祈っております」

そう言つてエリス教のペンダントに祈つた受付嬢。

……此処でアクシズ教の勧誘したらどうなるんだろ。そんな悪戯心が芽生えたものの、しっかりと足を着けて歩ける人に松葉杖のような教えは必要無いだろう。

まあ、最悪ゼスタにアクアさんに履かせたパンツあたりをブルセラすれば資金はできるしな。

……アクアさんはノーパンノーブラ主義者であり、洗濯物に下着が混ざった事が無いのである。

なので、新しい物とこつそり入れ替える事ができないので履かせる必要があったんですね、ってか。

そこまで貧窮していないので実行する事は無いだろうけども。

にしても魔王軍幹部二人目、か。うーむ、大丈夫かなこれヘイト私

に掛かり過ぎないか？

魔王軍からしたら私の存在は正しく魔王に挑む勇者のそれだろこれ。

やはり、作るべきか……、そう考えつつ、新旧交わる熱視線に晒されながら帰路に就いたのだった。

35話

キールのダンジョンでのバニルとの騒動がつい先日のこととなるくらいに、俺たちの日常は実に平穏だった。

土木工事のアルバイトでお世話になった親方に頼み込んで、DIYスキルもとい工作スキルを取得した俺は冬に入ってからずっと欲しかったものを作るべく奮闘し、師匠の手も借りて完成させたこたつで丸くなっていた。

木製の四つ脚と言うシンプルスタイルを採用。

掛け布団を挟み込むための平たい板には丁寧にやすり掛けして角と表面を滑らかに。

師匠が手慰みに錬金術で作ったと言う魔力を込めると温まる火の魔石を魔導回路に組み込み。

全長が全員が入れるくらいの大きさとなったので専用のモフモフとした絨毯を敷いて完成。

いやあ、自分の天才さに惚れ惚れするぜ。

こたつをリビングに出してからと言うものの、懐かしさと心地良さから師匠が垂れ師匠となり、その隣で甲斐甲斐しくお世話する何処か人妻っぽい色気の出た来たダクネスもといララ、そんなララを見習いながら幼馴染視点でサポートをするめぐみん、それを羨ましそうに対面する位置に座ったゆんゆんが最近ハマっているらしい苔をお世話し、やけに高そうな一升瓶を抱えながら俺の隣でアクアが爆睡する、そんな光景が続いていた。

ゆんゆんの隣にたまにアンナがこっそりとメイド姿で温まっているが、幽霊に温度は感知できるのだろうか。

「はふう……、それにしてもカズマは良い物を作りましたね。彼方の世界のこたつ、でしたか。最高です。我が家にも一つ欲しいですね」「へへっ、そうだろうさうだろう。やっぱり冬にはこたつが無いとな。後は、みかんと……アイスか？」

「適温に暖かいからこそ冷えるアイスを冬場に、クーラーで冷えた部屋でラーメンを食べる夏場みたいなものだ。残念ながらみかんは

無いが、アイスなら牛乳、卵、生クリーム、砂糖で作ったシンプルなものなら冷凍庫の方にあるぞ。パンケーキに合わせようと思っただけで置きしてある」

「流石ですね師匠。バニルからレシピ本貰ってから増々磨きが掛かってますよ」

「ふっ、自他ともに認めるお得意様になってしまった訳だな。……見通す力便利過ぎんだよなあ」

「ですよー」

あれからバニルは宣言通りウイズのところでアルバイトしているようだった。

そして、師匠はちよくちよくバニルに質問しに出掛ける事が増えた。

バニルが見通したように師匠はお得意様となり、ウイズ魔法雑貨店の運営をコンサルティングする事を代価に色々で見通して貰っているらしかった。

その中でも一番驚いたのは庭に作った訓練スペースで、前に師匠に倒された筈のベルディアと実戦染みた模擬戦をしていた事だろうか。

師匠曰く、バニルの助言によりベルディアのソウルを遺灰に混ぜる事で触媒として完成し、魔力の続く限り召喚び出せるようになったとの事だった。

漆黒の鎧であった第一印象から離れるべく正統な意匠が施された白い騎士鎧になったベルディアは、屋敷の正門を守る警備員として働いている。

師匠都合で召喚び出している事もありお小遣いを渡す予定だったらしいが、ベルディアの性格が割と生真面目らしく生前の騎士団長としての誇りからか労働による金銭の供給を求めた事でそうならなかったらしい。

業務内容としては完全時給制でしたい時に働いて休む時は勝手に休めと言う斬新な形式で、ベルディアも御恩と奉公が確りしている師匠が上司であるため週休二日ぐらいの頻度で真面目に働いている。

最初は魔王軍幹部だったし逃げ出して魔王軍に与するんじゃない

かと疑われていたものの、分かりやすく言えばFateで言うマスタールとサーヴァントの関係にあるらしく、令呪は無いが命令権を持っているので従わせる事ができるようだった。

ダメ元でベルディアに訓練を申し出てみれば快諾され、理由を聞いてみれば魔王軍に与する理由が今は無いかららしい。

ベルディア曰く、魔王様に拾って貰った恩義、義理があつたから今まで幹部として働いていたのであつて人類が憎くて魔王軍に居た訳じゃないとの事だった。

自分を謀殺した奴らは国ごと腐つてたので復活後に直ぐに滅ぼした事もあつて人類に恨みは無いらしい。

まあ、目下の悩みはアンデッドであるデュラハンたるベルディアとして召喚されている訳では無く、霊体として生前の姿形そのままで生身があるため娼館に通いたいがちよつと時給的に厳しい、だなんて生々しい愚痴を零すくらいだから大丈夫だろう。

こつそりとサキュバス店を教えてあげたらピシガシグツグツと男の友情が芽生えた。

「(持つて来たよー)」

「お、アンナありがと。こたつから出れないから助かる」

ふわふわとキツチンの方から飛んできたアンナが深皿に入ったアイスを持つて来てくれた。

相変わらず言葉は分からないが、口パクと何となくのフィーリングで言いたい事が最近分かるようになってきた。

ポルターガイストでふわふわと浮かんできた人数分の小鉢とスプーンを受け取り、労いも兼ねてアンナの分を先に取って手渡してやった。

につこにこの笑顔でゆんゆんの隣に座ったアンナが美味しそうに食べ始めるのを見て雰囲気明るくなる。

アイスの波動でも感じ取ったのかアクアが寝ぼけ眼で上半身を起こし、口を開いていた。

食べさせろってかこの駄女神。人数分にアイスを取り分けてからスプーン山盛りにしたそれを口に入れてやれば、おいひーとニコニコ

していた表情が直ぐに急転直下して頭痛に苛まれていた。

うぼあーとこめかみを押さえるアクアの姿を見てくつくつと悪戯が成功した俺は笑いを堪えた。

「……これで付き合っていないんですもんねえ」

「ふふつ、良いじゃないか。所謂秒読みと言う奴だろう」

だなんて茶化しが飛んできたので華麗にスルーしておく。

アクアを恋人に？ ははっ、ナイスジョーク。……と、鼻で笑えたら良かったんだがなあ。

最近こいつ俺への物理的な距離が近いんだよなあ。

何をしても後ろについてくるし、逆に出掛けようとする付いて来ないのと言いたげにするし。

自由気ままでありながら、俺と言う飼い主になつている家猫みたいな奴なので俺もついつい構ってしまう。

……まあ、こいつなら良いかもな。俺を裏切ろうとはしないだろうし、他の奴に靡く感じもしないし、それだけの信頼関係を築き上げて来た自信がこいつに限ってはちゃんとある。

それに……、あのミツルギとやらにこいつを取られるのは我慢ならぬないし。

そんな事を考えていたのがバレたのだろうか、対面する女性陣からの視線がニヨニヨとしている。

バツが悪くなり視線を反らすと能天気でも何も分かって無さそうなアクアが可愛く小首を傾げていた。

過去一の深い溜息を吐き出した俺は自分のアイスを食べ始めた。

「なんかどつと疲れたな……。そう言えば、この世界って温泉あるんだっけ？」

「あるぞ。此処から近いのはアルカンレティアだな」

「アルカンレティア……。確か、これを崇めてるアクシズ教の本部があるところでしたっけ」

「ああ。今はアクシズマーケット開催のために色々と賑やかだぞ。ふむ、冬景色の温泉と言うものも乙なものか。そろそろ雪解けの季節であるし、観光の計画を立ててみるか？」

アクシズマーケット。略してアケット。師匠が提案したらしいそれってまさかと思うがコミケの……。

聞く話によれば、師匠が草案を纏めた同人小説の即売会であるらしく、変態揃いのアクシズ教徒のガス抜きに丁度良いだろうと計画したそうだ。

師匠はそう言っていたが、何処か違う事を考えている節が見受けられた。

何故ならこのアケットの開催を告知するチラシに日本語で一文追加されているからだ。

——勇者候補オフ会のお知らせ。

この勇者候補ってのは俺たち地球からの転生者の事を指す。

今のところ俺が知っているのは師匠、ミツルギ、裏通りに店を構えるユウキさんの三人だけだ。

俺を含めて四人。駆け出しの冒険者の街を拠点としているから少ないと言うべきか、聞く話によれば転生特典の強さから対魔王軍の前線である王都に居る事が多いらしい。

……まあ、ミツルギみたいなテンプレみたいな勇者野郎が居る訳であるし、その逆にモブみたいな人たちも多いようで気の合う奴らでグループを組んでいるのはマイノリティで、ソロが多いらしい。

まあ、陰キヤな俺らだもん……。と納得してしまった。そう考えると俺ってほんと恵まれてるよなあ。

男一人に対して女五人だぞこの空間。それも一つ屋根の下で、朝昼晩は手料理が食べられる。

……俺ってギャルゲーの主人公だったのか、だなんてうぬぼれても良い環境である事は間違いない。

まあ、師匠によってめぐみんとララは攻略されているので、多分主人公は師匠だろうなそのギャルゲー。

「アクセルに来るまでの旅でアルカンレティアに寄りしましたが、温泉とつても良かったですよ。……色々と変態に絡まりましたが、今ならおんおんが居るので大丈夫でしょう」

「あはは……、ゼスタさんにセシリーさんは濃い人たちだったもんね

……」

「なんかめぐみんとゆんゆんが遠い目し始めたが大丈夫なのか？」

「ん？ ああ、今のアクシズ教はぶっちゃけ私が最高権力を握っていると言って過言では無いからな。暇してる穀潰しの変態共に勧誘よりも役に立つ慈善事業や印刷業の出店計画を投げて、アクシズ教内部の団結のために月一で教団内合コンとか計画して人口増加を図ったり、アクシズ教の印象を良くするために色々としているからな。私に物言える奴が居たら大したものだよ」

「聞く話によればおんおん、最高司祭に祭り上げられるとこだったらいいですからね。……今も似たような事してませんか？」

「してないな。それに今はもうゼスタが最高司祭になったから、その一件も終わりを迎えたよ」

「……あの、それってより強い権力を動かせるようになったという事では？」

「さてな、私は外部顧問でありながらアクシズ教聖母の称号を貰っているだけの余所者だからなあ。あくまで運営はゼスタの行動だから、私はアドバイスをしているだけだ。あいつは鵜呑みにして原案そのまま通してるみたいだが」

「いったいどうなってるんだアクシズ教。」

聞く話によれば、しつこい勧誘とどいつもこいつも変態を地で行く奴らで、アクア成分を薄めて広めたような考え方をしている狂信者の頭のおかしいやべー奴ら、であったらしい。

けれども、師匠の口出しにより戒律が作られ、エリス教への嫌がらせ行為や性的な軽犯罪（セクハラ）が鳴りを潜めて普通のそれになり、先程の発言のように発展のためにノリノリであるらしい。

正しく聖母のように母として叱り、褒めてくれる存在が現れた事でフイーバー状態らしい。

……わかりみが深いな。師匠に、めっ、とかされてみてえわ俺も。

未だに垂れ師匠のままに机に突っ伏しながらララにアイスを口元にあーんして貰っている姿を見て思わず頬が緩む。

「まあ、そう言う事で近々アルカンレティアに向かうか。それなり

の歓待をさせるように手を回しておくから期待していてくれ」

「発言がもう明らかにお偉いさんのそれじゃないっすか……」

「なあに、お願いするだけだ、命令はしていないさ」

「アルカンレティアまでは馬車ですか？」

「ああ、うちにはトレントが居るからな。ドラクエみたいな天幕の付いた牽引荷台を買ってあるから御披露目といこうか。この人数だし、寄り合い馬車は気疲れするだろうしな」

「わあ、凄く楽しそうだね！ わ、私も行って大丈夫だよね……？」

「なんでそこで不安になるんですかゆんゆんは……。貴女も頭数に入ってるに決まってるでしょう」

「えへへ、そうだよな。ありがとめぐみん」

「本当にこの頭ゆんゆんは……。いつになったらぼっち気質を卒業出来るんだか」

「いつそアクシズ教に放り投げてみるか？ 一敬虔な信徒になればそれなりに成長するだろう」

「前までのアクシズ教なら即却下でしたけど、今なら……うーん」

「ぶっちゃけセシリーに投げとけば一カ月くらいで改善されそうだなって」

「あ、それもそうですね。でもその場合、ゆんゆんが大変な事になってるんじゃない？」

そのセシリーと言う人が誰だか分からないが、内容からして相当な変態な人なんだろうなあ。

師匠が何やら考え事を始めて、ふむ、と内容を纏めた後にゆんゆんへ横顔を向けた。

「ゆんゆん、孤児院を建設する予定があるからそこで働いてみないか？ 子供相手ならそのぼっち気質も多少は改善されるだろう」

「まさかのパーティ脱退宣告!? えっ、確かに私影薄いけどそこまで悪い事したっけ!？」

「いや、そう言う訳じゃなくて、アルバイト感覚でそこで働いてみないかというお誘いだ。今のままで色んな意味で子供好きなセシリーを責任者に投げようと思ってたんだが、生贄コホン常識人が居れば暴

走も抑えられるだろうと思つてな」

「生贄っ!? 今生贄つて言つた!? た、確かにセシリーさんはスキンシップが激しい人だけど……」

「嘘でしょうおんおん。あのセシリーを孤児院の主にするつもりなんですか?」

「本人強つての希望でもある。まあ、そういうシチュも良いんじゃないかなって」

「子供たちの性癖が曲がりますよ!」

「それはそれで美味しいだろ。むしろそうなた方があの変態を御しやすいだろう。防音の地下室でも作つてそこをセシリーの部屋にでもしてやればお膳立ては十分だ。後は坂を転がるようにそういう目に遭う事だろうよ」

「……何と申すか、ほんとインモラルな考え方をするようになりましてたよねおんおん」

「そう申すのは嫌いか?」

「うう、それこの場で言わなくちゃ駄目ですか?」

「言わなくても良いが、言うまでもない反応だけだな」

その言葉で顔を真っ赤にしてこたつに潜り込むめぐみん。

物理的に顔を隠したところできつきの肯定めいた発言が俺らの記憶から失われる訳じゃないんだがなあ。

「まあ、そう申す事でゆんゆん。テレポート代は此方で持つからアルバイト受けてみないか?」

「今の聞かされたら止めるために行くしかないじゃない! そ、そう申す事は好きな人同士ですべき事なんだからね!!」

「……ほう、大分濁したが内容分かつてるんだなゆんゆん」

「はうううっ!」

こたつむりが二人に増えた。

めぐみんと言ひ、ゆんゆんと言ひ、紅魔族は意外と純情なのな。

と言ふか……師匠、ナニとは言われないが隠さなくなってきたなあ。

ララと婚約をしてからというものの師匠は日常的なイチャラブを解禁したのか、ふとした時に見てみるといちゃついている事が多く

なつた。

正妻梓であるララとの逢瀬は、何処かしつとりとした心が繋がっているという感じの夫婦のいちやつきで。

愛妾梓であるめぐみんと逢瀬は、からかい上手の、という枕詞が付きそうな感じで初心な反応を見せるのを楽しそうに弄る。

この世界における成人年齢は十五歳であるため、少なくとも後二年は今の様な日常が続くんだろうなあ。

こどもも百合百合しい尊い光景を見ていると失恋の痛みが癒されていく心地だった。

「ゆんゆんがむつつりなのは取り敢えず置いて、いつ頃出発します?」

「明日の朝で良いだろう。普通の馬なら一日くらいは掛かるがトレントなら半日くらいで行けるだろうからな。前は商隊の後ろについていく形だったから一泊したが、個人で速度も早ければ夕方、遅くても夜には着くだろうよ」

「三泊四日くらいにしておきます?」

「んー、春を迎えるまでで良いんじゃないか? この感じなら一週間も掛からないうちに春になるだろうしな」

「了解です。個人的に受けてる依頼は無いだろうし、大丈夫だと思います」

「うむ。彼方では浴衣があるから衣服は三日分くらいあれば問題無いだろう。他に誘っておきたい者は居るか?」

「えーっと、居ませんね。あ、知り合いつて事ならクリスくらいですかね?」

「ふむ、クリスカ。良いかもしれないな。……頻度的にも結構疲れてるだろうしな」

クリスの身体の調子を案じている筈なのに師匠は何処か仄暗い笑みを浮かべていた。

あれ、師匠ってクリスとそんなに接点無いよな。

と言っても俺もあんまり無いんだが、たまに酒場で出会ったりしてジョッキを空にするくらいの仲だ。

そう言えば最近のクリス、何でか色っぽいんだよなあ。

彼氏でもできたのかと聞いてみればもによもによとした感じで小首を傾げながら、そんなところかなと誤魔化されてしまったので詳細は聞いてないんだよな。

……この前、バニルと初対面した時にクリスの話題が師匠から出たよなあ……。

……クリスの事を呼び捨てにしている事もあえて聞かないでおこう。

……うん、そつとしておこう。地雷原でタップダンスだなんて踊りたくねえや。

「さて、と。そろそろ夕飯を作るか。今日の夕飯は鶏出汁の具沢山のお鍋だぞ。無論、締めは白米でおじやだ」

短い溜息を吐いてから師匠が渋々と言う感じでこたつから這い出た。

では私も、という感じで最近料理を教わりながら手伝っているらしいアラと同じく立ち上がる。

めぐみんは……、うん、未だにこたつむりだ。寝息が聞こえているし、温かさに負けて寝てしまっているらしい。

そんなめぐみんの胸元にちよむすけが置かれ、温もりを求めるように抱き抱えた姿を見てほっこりする。

「……可愛いなあ」

「うむ、子供が出来たらこんな風なんだろうな」

「まだ気が早いぞ、魔王を討伐するまでは作らないって決めただろう？」

「ふふっ、そうだったな。でもまあ、時間の問題じゃないか？　こうも魔王軍幹部の討伐ペースが速いと」

「またまたー、そう毎回幹部級に行くわす事なんてないだろうよ。アルカンレティアで魔王軍幹部と出会ったらこの前のアレ叶えてあげるよ。まあ、そんな事は無いだろうけどな」

「ほおー、それは楽しみだ」

だなんて熟年夫婦染みた距離感でイチヤイチャする師匠たちを

キッチンへ見送った俺は、静かにアイスを食べる事にした。

いやあ、ダストの言う事を聞いてみるもんだな。

今のアレ見て淫夢で本番なんかしてたら虚しいったらありやしねえや。

今度一杯だけ奢ってやる事にしよう。

ふうー、アイスで口の中が甘いな。お茶取って来るかー。

そう思っただち上がるうとしたらコトリと俺の前に湯飲みが横から置かれた。

こんのお駄女神め、丁度良いからって便乗しやがってからに。

まあ、いいけどさ。

アクアの湯飲みも一緒に持って行き、キッチンスペースへと入ろうとした時だった。

俺の耳に水つぽい音が聞こえて何処か甘い嬌声が聞こえたのは。

「んっ、はあっ、ちゅっ、じゅるるっ、んんっ、あっ、ちゅっ」

壁に背を向けて顔だけ半分出して見やれば、台所の所で膝立ちになったララに濃厚なキスを落とす師匠の姿があつた。

うっわあ、傍目から見ても舌が動いているのが分かるんだなあアッレって。

数十秒程濃厚な蹂躪爆撃染みたキスに晒されたララは色つぽい顔で蕩けた顔で師匠を見上げていた。

「まったく、料理の手伝いをしてくれるんじゃないかな?」

「や、やる気を出して貰おうかな、と」

「ふうーん、ほんと可愛い奴だなララは。違うやる気が込み上げてくるんじゃないか、お預けだぞ」

「うっ、そ、それは……、そうだが……」

「なんだあ? もしかして期待してたのかララ。流星に此処じゃやらないぞ、誰かが来たらどうするんだ」

「……………」

「それも有りだなとか思ってなかるうなこの変態淫乱娘め。だーめっ、お預けです。そのまま悶々としながら夕飯待ってるように」

「……………はい」

なんかしつかり者の新妻と駄目亭主みたいな遣り取りしてんだけど。

あの頃のまま、淡い想いを抱いたままだったら頭沸騰して変な性癖芽生えそうな光景だったわ、尊み深い。

近くの椅子にくったりと座ったララを一瞥した師匠が魔導冷蔵庫に向かった辺りで、こっそりとヤカンに入った麦茶を入れてそそくさと戻る。

クリスから教えて貰った『潜伏』が役に立ったな。

流石に、やあやあどうもと入って行くには度胸が足らんわ。

湯飲み二つ持ってリビングに戻り、こたつに入って夕飯を待つ。

……今思えば、ほんと贅沢な暮らしをしているよなあ、俺。

かつての自分の生活はどうだっただろうか。ゴミ袋が散見する所謂汚部屋で一人寂しくオンラインゲームとネットサーフィン、SNSにソシャゲする毎日だった。

そんな俺が朝はランニングと素振りをして、クエストか庭でベルディアに教練を受けて身体を動かして、朝昼晩を黒髪の可愛い年下の女の子の手料理を食べて、一對五の男女比率の屋根の下で暮らして、ふかふかベッドでアクアを隣に寝る日々を送っている訳で。

うーん、順風満帆な異世界ライフだな。ラノベの主人公になってレベルで恵まれている。

……魔王討伐してまで叶えたい願い無くね？

もうこのままずっとこの暮らしをしたいんだが。

師匠のお零れで高額賞金首や魔王軍幹部討伐の報酬で懐も温かいからクエストを受けなくても向こう十数年は自由気ままに生きられるお金もあるし。

でもまあ、師匠に良い所見せたいから、身体を鍛えるのは止めないしクエストに行つて実戦経験積みたいし。

何よりもレベルとスキルで自分が強くなっていると自覚できるからもう少し頑張ってみたい。

随分と前向き頑張りボーイになったもんだな、と内心で自嘲する。あんなダーウィン賞ばりの死に方をした俺だけど、異世界で何とか

やれている。

……そろそろ、良いんじゃないか？ 俺も、青春って奴を謳歌しても良いんじゃないか？

「ふへえー、おいひいー」

ちらりと湯飲みを静かに啜るアクアを見やる。ぽけーつとした寝ぼけ顔でへんにやりしている。

いや、うん、分かってるんだよ俺も。鈍感系って訳ではないし、視線とかにも敏感だったから尚更に。

最近、アクアの距離の詰め方が近過ぎるのも、スキンシップが手慣れて来て回数も多くなってるのも、髪の手入れとか衣服とかに力を入れてお洒落してるのも、……その傾向が俺の好みに合わせてる事にも気づいている。

お、俺の勘違いじゃ、無い、よな……？ 自意識過剰、そんな言葉が浮かぶ。

身近に居る男が俺しか居ないからそれに合わせているだけかもしれない。

……けど、何の感情も抱いてない男と隣で寝れるものなのか？

流星にそれは危機感が足りないと言うか、もしも違ってたら俺がヘタレだと決めつけて嘲笑っている訳であるし少しむかつくんだが。

だけど、隣で寝る事を許してくれるくらいに心を許してくれているのであれば。

……それだけの好意を持っていると判断しても良いんじゃないだろうか。

水と温泉の街アルカンレティア。温泉と言えば、と思いき浮かぶ一つの流れ。

少し、賭けであるが試してみる価値はあるかもしれない。

流星に此処では誘わないが、あちらでそれとなく、誘ってみてみるか。

その時の反応で色々分かるものがあるのかもしれない。

流星に好意を持たない相手に裸同然の姿を見せる事なんてしないだろうしな。

そう悶々と胸の奥から込み上げてはナイアガラのように落ちていく妙な感情を整理していると、何時の間にか時間が経っていたようで土鍋を抱えた師匠とコンロを持って来たララが夕飯を準備してくれていた。

「お待たせしたな。具沢山の野菜たっぷりお鍋だ。おかわりは沢山あるからしつかり食べるんだぞー」

「わあい！ 私おんおんのお鍋大好きですっ！」

「冬の頃はいつも一緒に食べてたものな。しつかり食べて大きくなるんだぞ。……私はもう諦めた」

「お、おんおん……。分かりました。貴女の骸を越えて成長しますっ！」

するりすくと胸元を撫で下ろす師匠。それと似たようななかた体型のめぐみんが拳を突き上げた。

……その隣で豊満な胸を机に置いて取り皿に具を取っているゆんゆん。

何処でそんな差がついてしまったのやら……。聞くに食事情がアレだったらしいのでそのせいなんだろうなあ。

男性よりも女性の方が成長が早いと言うし、十三歳ならまだリカバリーは利くだろう、多分、きつと、メイビー。

いただきますの合掌に別の思いも乗せておく。女性陣が具を取っていくのを見届けてから残りを取る。

基本的に肉も野菜も大量に師匠が買い揃えたり狩ったりしているので焦る必要が無いんだよな。

肉の争奪戦になると見越すと師匠は良い笑顔でキロサイズの肉塊を叩き込んでくるのでその心配も無い。

「そう言えばこの土鍋って何処で買ったんですか？ 日本の物っぽい形ですし、東国の輸入物です？」

「ああ、これは錬金術で作った物だぞ。最近になってアトリエ式錬金釜システムっぽい何かができるようになったからな」

「なんて??？」

「ほら、アトリエシリーズの大釜に材料を入れてぐるぐるすると作れ

るアレだ。錬金釜の内部に分解、再構成、燃焼、冷却、分離、とか色々
と魔法術式を刻み込んで本来なら薬品を作る過程の手作業を省略、い
や、圧縮？　してみたんだ。簡単なものならこれで作れるようになって
な。この土鍋は粘土質の土塊、金属鍋、染料を合成して錬金したもの
のだ。ベースである金属鍋に粘土質の土と染料を加えて再構成させ
た訳だな」

「もはや趣味の領域越えてませんか？」

「まあな、自覚はある。多分と言うか憶測なのだが、人の集合的無意識
でギャグみたいな精霊が爆誕するような世界だろう？　転生者の集
合的無意識で錬金術とはこういう物だ、という形で法則が生まれる訳
だ。この場合、ハガレンかアトリエシリーズかに大別されると思うん
だよな錬金術って。ハガレン式だと複雑な錬金術式と真理の扉みた
いな要素が必要だから普通は試せない。けれど、アトリエ式だと大釜
に材料入れてぐるぐるすると何故か作れるみたいな曖昧な感じだか
ら再現しやすいんだよな。あー、ドラクエの錬金釜も似たような感じ
だな。まあ、そんな曖昧だからこそ、それを理由に作れてしまう法則
も生まれてしまう訳で」

「鶏が先か、卵が先か、みたいな感じですか」

「まあ、そう言う事だな。だからなんちゃって錬金釜で指向性を与え
てやれば出来てしまう訳だ。まあ、試行錯誤はしたけどな。研究室は
アトリエシリーズの錬金部屋めいた感じになってるよ。流石に取り
扱っている物が物だから私以外は入れないようにしているが」

それとなく言っているが凄い事言っただけか師匠。世界の法則を
乱しましたって言っているようなもんだろう。

けどまあ、確かに、という納得もあった。

何せ、この世界は冒険者カードを経由してスキルや魔法やらを習
得、発動できる世界観が土台にある。

レベルの概念も王道なRPGなそれであるし、元々がそう言う世界
観で成り立っている世界である、とも言える訳で。

そこに俺ら転生者と言う異物と言うか、言い方を変えればアップ
デート、DLCみたいな概念が追加されているのだろう。

でなきや、金属鎧よりも頑丈なララの肌とか意味不明な現象に説明が付かないからな。

多分、この世界の住人がそういう物だと認知しているからそう成り立っているんだろうな。

「まあ、そう言う事で簡単なものなら作れるようになったから気軽に言ってくれ。買った方が安いものもあるだろうけどな」

あつはつは、と師匠は至極楽しそうに言った。確実にDIYのノリで言ってるなこれ。

まあ、師匠が楽しそうで何よりです。

そう内心で独り言ちて出汁の染みた白菜を食べる、うん、美味しい。

36話

ふむ、やはりこんな事もあるうかと天幕付きの荷台馬車を買って置いて良かったな。

トレントが住まう馬小屋の裏に置いておいたそれにサンドイッチが詰まったバケツトと空の瓶を人数分用意し、毛布やランタンなどのキャンプ用品を幾つか乗せておく。

『クリエイトウオーター』を瓶の中に入れてコルクで閉めてつと。

……ふう、後は何かあったかな。そう思って点検していると後ろからクリスがこそつと歩み寄っていた。

水瓶の表面に映ったクリスはそろりそろりだなんて擬音が付きそうな動きをしており、此方を驚かそうとしているらしい。

「わっ!!」

「ていつ」

「うわああああ!?!」

後ろから首に抱き着こうとしていたようなので、そのまま背中を軽くクリスを乗せるようにして荷台の毛布へと背負い投げるように放ってやった。

ジト目の此方に気付いたクリスが可愛くテヘペロしたので、まあ、許してやるか。

可愛いは正義だ。これがゼスタとかだったら毛布ではなく石畳の方へ叩き付けていた事だろう。

毛布の上でひっくり返っていたクリスが向き直り、バツが悪そうに後頭部に手を回して誤魔化していた。

「あはは……、まさかバレてるとはね」

「水瓶に間抜けな姿が移ってたぞ」

「あちやー、『潜伏』してたから気配無い筈なのにして思ってたけど原因それかあ」

「よくある古典的なミスだな。完全なステルスじゃないんだから気を付けた方が良いぞ?」

「あはは、それもそうだね。とまあ、改めて、温泉旅行のお誘いありが

とうね」

「私たちの仲だしな。放置プレイは可哀想かな、と」

「ふうーん、釣った魚に餌くれて有難い限りだよ」

ニヨニヨ顔になったクリスがよっこらせつと荷台から降りて石畳に立つ。

……ふむ、この前プレゼントした衣服を着てくれているようだな。

ユウキさんの所で買ったヴァイオレット色のパンク風ジャケットに、黒のビキニトップと現代的な黒いホットパンツを合わせ、ゴテつとしたブーツを組み合わせた如何にも遊んでますと言う路地裏不良少女コーデだ。

艶めかしく露出した胸元やお腹、太腿が非常に色っぽい。

クリスと言う少女の設定である悪戯好きなシーフ少女と言う雰囲気も相まって非常にセンチティブである。

……自分の色で染めた感があつて非常に宜しいな、今度ララとめぐみんも染め上げよう。

「……ねえ、おんおんにコーデして貰ったこれなんだけど」

「うむ、とっても似合っているぞ。実にむっつりでクリスらしい恰好に仕上がったな」

「その……、今まであんまり見向きもされなかったのにすごい視線感じるようになったんだけど」

「そりやそうだろう。今のクリスは色気が滲み出ているからな。この恰好で上目遣いで前傾姿勢にでもなってみろ、落ちない男は居ないだろうよ」

「ふ、ふうーん……。そっか。気に入ってくれてるんだ。なら、いつか。ちよつと恥ずかしいけど、我慢してあげる」

短い自分の髪先をくるくると手遊びし始めたクリスが照れ臭そうに頬を染めていた。

……可愛いが過ぎるな。やはり女の子は可愛くて綺麗で美しく、そして少しだけ煽情的であるべきだな。

少し攻めた格好をさせてみたのは実験的な部分が大きいが、ララと

めぐみんの時にも活かせる事だろう。

ララの場合、身体がもうえっちいし顔も良くて髪も肌も良いので、センチティブな方向に舵取ると大事故起こしそうなんだよなあ。

普段の私服のようにタイトな感じであると露出が少ないのに関わらず、見事なボディバランスが強調されていい感じに魅せれる。

女教師と言うか、キチっとした大学生みたいなスタイルが良いだろうか……。

うむうむ、素材が良いから悩みどころだな。

めぐみんは普段がスカートだからズボン系でコーデしてみたいな。

普通に黒いワンピースとかでも似合うのだが、どうせなら少し冒険させた格好が良いだろう。

ぶつちやけ紅魔族って日本人の見た目のそれなのであんまり派手なのは似合わないと言うか解釈違いなんだよなあ。

それこそ、ぶかぶかパーカーに芋ジャーズボンでも通用するくらいの可憐な地味さであるし。

多分、そこらへんが紅魔族が中二病に走って派手な事をしたがる気性の根底なんだろうなあ。

もういっそ、完全に中二病コーデしてしまうのも良いかもしれないな。

腕に包帯巻いて、ベルトの多いズボンに黒いトレンチコート辺りだろうか？

それは流星に安直過ぎか。紅魔族ってパンクと言うよりかはロツクな感性であるからして、ロツクなコーデとか？

革のジャケットにダメージジーンズ、黒いTシャツに髑髏とかプリントしてあったりすれば良いのだろうか。

刺青……は流星にやり過ぎなのでシールとかだな。

ふむ、背丈が伸びてボーイッシュな感じに育てば大人っぽさも出てくるだろう。

「おんおん？」

「ん？ ああ、すまん。クリスマスだけに送るとなると色々あるから少

「考えてたんだ」

「へ？ まさかダクネスにはまだプレゼントしてないの？」

「いや、ララには既に装備面でプレゼントしてる。衣服はまだだけだな。ベルディアの鎧から作った特注のタワーシールドに取っ突き機構を組み込んだお高い奴をな」

「いやまあ、確かに冒険者だから装備とかが資本だけでもさ……。止めてよね、ダクネスと喧嘩したくないからね？」

「ああ、そこらへんは大丈夫だろう。ぶっちゃけ、ララとの馴れ初めはクリスと殆ど変わらないし」

「……そ、そおなんだ」

「と言うかクリスの事だから天界から見てたろ初めから」

下手くそな口笛を吹いて誤魔化そうとするクリスに肩を竦めておく。

さて、天幕荷台も準備終わったし、そろそろ皆を呼びに行くとするか。

「他の面々に準備が終わった事を伝えないと。ついて来るか？」

「んー、二度手間になりそうだからここで待ってるよ」

「あいよ」

荷台の中に入って行ったクリスを一瞥して、庭先の方へと足を運ぶ。

そこから鈍い音ながら硬い物がぶつかり合う音がしているので、多分ズマくんがベルディアと鍛錬でもしているのだろう。

今回ベルディアは断固拒否の構えで拒否したのでお留守番だしな。

何でも、アンデッド時代にアクシズ教徒から受けた仕打ちが今も若干トラウマらしく、その総本山であるアルカンレティアに誰が好き好んで行くか、との事だった。

具体例を聞いてみれば、実力で敵わないと察してか嫌がらせの方向に舵切ったようで、腐った生卵や湿気た小麦粉などをぶつけられたり、バケツリレーで運んできた聖水を次から次へと投げ込んできたり、山の中なのに火炎瓶を投げつけて燃やそうとしたりと酷い目に遭ったらしい。

鎧が陽射しで熱くなる頃に腐った卵と湿気た小麦粉をぶつけられ、撤退した後には他の魔王軍幹部とでくわした時のえんがちよ顔が今も脳裏に浮かぶとの事だった。

いやまあ、間違つてはない、相手の士気を、それもアンデッド軍団の統率を嫌がらせて撤退させたのなら大金星だろう。

「そらっ、踏み込みが甘いつ！ だからこうも簡単に打ち返されるんだ。ちゃんとしっかり踏み込んで腰を回して振るえと言っているだろうがっ！」

「お、押忍っ！」

「そうだ！ それで良い！ お前の振るう剣はロングソードよりも短い、バスタードソードくらい長さだ。小回りが利くように腰を使ってコンパクトに薙ぎ払いを放て。振り下ろしは確かに威力は高いが、その分スタミナや筋力任せな部分が多い振り方だ。確実に仕留める時か相手が動かない時、奇襲で一撃で仕留めると言う状況で使え」

「はいっ!!」

うむ、実に青春してるな。

庭先の芝生エリアで木剣を構えたベルディアとカズマくんが激しい打ち合い稽古をしていた。

ベルディアは門番の仕事の途中だったからか銀の全身鎧で非常に動き辛そうだが、まだまだ実力が足りていないからかカズマくんをしばくには丁度良いハンデと言った様子だった。

……まあ、本当の所はベルディアが身バレを恐れて兜を外したからないだけなだけだな。

黒の騎士鎧と言うくっそ目立つ格好をしていたデュラハン時代でも時々兜は外していたようで、王都に居る上級冒険者の何人かは戦場でその姿を見ている……かもしれない、と疑心暗鬼になっているらしい。

と、言うのも事の発端はうちの里にある魔王の娘の部屋が見えるバニル作の望遠鏡が原因らしく、もしかして遠目で見られていた可能性があるかもしれない、とガクブルしているようだった。

ギルドの方でベルディアの人相書きが作られていないのは確認し

ているので実に杞憂なのだが、そういう特典を貰った転生者も居るかもしれないので顔を隠す方向で居るらしい。

バレたところでお前私の召喚霊じゃん？ と慰めてみたが、モンスタ―よか人間の方がよっぽど恐ろしいと大分濃度のある溜息を漏らしていたので重症のようだった。

まあ、生前に裏切り麻痺毒バックスタブによって絞首台に送られる羽目になったのが相当なトラウマになっているのだろう。

「む、そろそろ時間のようだな。カズマ、全員が集まるまで幾らか時間はあるだろうから汗を流してこい」

「へ？ もうそんな時間か……。師範、ご指導ありがとうございます！」

「おう、お前も磨けば伸びる所が出始めて来たからな。慢心せず、大樹を育てるように毎日水をやって成長し続けろ。基礎を土台として踏み固めるまでが重要だからな」

「はいー」

此方に気付いたベルディアが鍛錬を止め、カズマくんを風呂へと送り出す。

デユラハン時代と違ってフルフェイスなので表情は分からないが、雰囲気アホっぽいから後方師匠面ムーブできて喜んでいるのだろう。

その証拠に木剣を肩に乗せてトントンと動かして気持ちを隠せていない様子。

「随分とうちに慣れて来たな」

「ああ、こうも心穏やかで居られる時間は本当に久しぶりだったからな。生前の身体を半ば取り戻した時には本当に驚いたものだ。こうして騎士団長だった頃のように、新兵に稽古を付けてやれる日が来るだなんて思いもしなかった」

「順風満帆で何よりだ」

「ジューンプーマンパン……？」

「ああ……、船の帆が風を受けて航路が順調って意味だ」

「ふむ、勇者候補が住まう地と言うニホンと言うところのことわざか。

そうだな、今の俺は地に足付けて生きてるって感じがして大分満足している。門番と言う仕事も貰えてヒモから脱却もできたしな」

「何か不便は無いか？ ある程度の事なら融通するが」

「……ふははっ、何事も無し、だ。小屋も立ててくれて住む場所もあるし、給金もその日暮らしするには十分な額だ。感謝はすれど不満は全くだ」

「そうか、それなら良いが。留守番を頼んだぞ」

「ああ、任せてくれ。あの幽霊のちっこいお嬢さんも居るし、屋敷の事は安心してくれて良いぞ」

「(呼んだー?)」

自分の話題が出たからか何処からともなくベルディアの肩に勝手に座ったアンナ。

ベルディアの鍛えられた身体にとって少女一人の重さは軽いようで、肩を竦めてアンナのお茶目な奇行を受け流していた。

「関係も良好そうだな。一週間くらい、いや、冬明けを目途に戻って来るつもりだ。これはある程度の生活資金として受け取っておいてくれ」

ソウルから取り出した金の入った小袋をベルディアに放り投げると、戸惑う様子無く難無くキャッチした。

中身は三十万エリス程入っているので過不足無く優雅な休日を送れる事だろう。

やけに重い中身を訝しんだのか紐を緩めて中を確かめたベルディアが背筋を伸ばして硬直した。

うむ、こー言う真面目な面してる奴には札束で殴ってやるのが一番だな。

「こ、こんなに……、良いのか？ 数カ月は暮らせる額だが……」

「ちよつとしたボーナスも兼ねてるからな。カズマくんに手解きしてくれているだろう？ その追加報酬とでも思ってくれ。素晴らしい仕事にはそれ相応の額を。当然の事だろう？」

「……雇い主が優秀で話の分かる者だとこれほどまでに安寧を齎してくれるのだな。人の上に立つ才能があると見える。既に死に伏した

俺を呼び戻してくれたのが君で本当に良かった……」

「ふつ、なに、前世では生前の君の様な勤勉な者だったんだよ、顎で使われる苦勞人でもあったがね」

「そうか……。世の中やはり世知辛いな……。水と温泉の街と呼ばれる場所だ。ゆつくりと身体を休めると良いな」

「そうだな、ありがとう。では、後は任せたぞベルデイ、アンナもな」
「まっかせてー！ お姉ちゃんが居なくて寂しいけど、しっかりお留守番するからね！」

ぶつちやけ、既に地縛霊から解放されているのでお前も行けるんだけどな。

と、視線に込めると察したのかそそくさと霊体化して屋敷の方へ消えていった。

全く……。アンナの出不精と言うか、外への恐怖心はまだ健在か。

以前、地縛霊だった頃に屋敷の外へと好奇心のままに飛び出したのは良いが、自身の存在が紐付けされている屋敷から離れた事でその線がか細くなり、あわや空中分解の如く存在が消え去り掛けた時のトラウマが残っているらしかった。

死に至る訳ではなく、存在が水飛沫や泡のように虚空に溶けていくような、虚無に近寄る滅び。

その時の恐怖は幼い精神だったアンナには劇物だったらしく、屋敷の敷地外へ一歩も踏み出せないくらいに怖がっているのが現状だ。

まあ、こればかりは無理強いする事では無いし、一歩ずつ進めれば良い。

……近所にできたケーキ屋に一緒に行く、ぐらいから始めるべきだろうな。

「さて……。残りはララとめぐみんたちか。ララは自室だろうし、めぐみんは……。二度寝した可能性があるか。ゆんゆんは水やりをしているだろうからちゃんと来るだろうし、後で声をかけてやれば良いか」
取り敢えずめぐみんからだな。

朝食はもう皆で取ったので最終準備をするために各々別れたのだが、めぐみんは楽しみのあまり夜更かしをしていた可能性が高い。

朝食でもうつらうつらして私に食べさせられていたからな。確実に寝ているだろう。

エントランスから二階、三階と上がり、めぐみんの自室へ向かう途中で見えたゆんゆんに声をかけておく。

「ゆんゆん、そろそろ出るから門の方へ向かってくれ」

「あ、はい！ この子に水を上げたら行くね！」

「ああ、めぐみんは部屋か？」

「多分そうだと思う。準備は終わってるから問題ありませんって言ってたからベッドに倒れてるんじゃないかな？ 学院での遠足の朝もそんな感じだったし」

「そうか……、ありがとう。先に行っててくれ」

「うん！」

誰よりもこの旅行を楽しみにしていたのだろう。

満面の笑みで頷いて返事したゆんゆんはとっても輝いていた。

このナイススマイルを普段から出せればな……、無理か、ゆんゆんだし。

でもまあ、身内であれば幾らかでもらずに話せるようになってきた事であるし、アルカンレティアの孤児院にぶちこめば身内判定が増えてそれなりに成長しそうだな……。

いずれ里に族長となるべく帰るだろうが、その時には一皮剥けた姿をお届け出来る事だろう、多分。

ゆんゆんは割としっかり者だからこれで良いとして、問題であるめぐみんの部屋へと辿り着く。

一応のマナーでノックしてもしもしするが、何の反応も無い。ドアノブを回せばあっさり開いたので中へと入り――、その赤さに目をやられた。

そう、広い自室を得ためぐみんはハジけた。それはもうはっちゃけたのである。

赤い絨毯に、クリムゾンレッド色の壁紙。シックな黒の家具を揃え、奥の方の広い部分には何やら複雑な魔法陣っぽい幾何学模様を描かれている。

ちなみに寡聞にして知らないが、ぱつと見が魔法陣っぽいだけで何の意味の無い様に見える。

もしかしたらめぐみんがオリジナルで魔法を……？　と思っただが、それっぽい格好良い単語が散らばっているだけで何の作用も工夫もシナジーも無い様子なので、本当に思い描いた格好良い魔法陣を書いただけのようだ。

よく見れば灯りの魔道具が床に埋め込まれているのが見えた。

部屋を暗くしてこの魔法陣が光を放っている中で詠唱する、そんなごっこ遊びのための自信作っぽいな……。

流石は紅魔族の申し子と言うべきか、そう言う感性は人一倍強いからなめぐみんは。

質素な暮らしを強いられた里の自室ではやりたくても出来なかった事をこうして発散するように築いたのだろう。

ベッドの床に荷物らしき背囊が置かれており、その隣で掛け布団に上半身を倒れ込むようにしてすやすや寝ているめぐみんを発見した。

恰好はいつもの制服らしく、ふにふら？　だっけか、そんな名前の友人たちから貰ったらしい杖を右手に掴んで寝落ちしていた。

旅行がよっぽど楽しみだったのだろう。

……でも、行き先は里からアクセルへ向かう時に一度寄っている筈なのだが。

まあ、家族同然の面々で遊びに向かうって言うシチュエーションが琴線に触れたんだろうな。

床の荷物を拾い上げてソウルに仕舞い込み、めぐみんをお姫様抱っこして部屋から出る。

「んう……、まだまだ食べれます……、むにやむにや」

「なんつーベタな寝言を……、まあ、夢を見ているって事はぐっすり寝てる訳だしこのまま連れてくか」

私の胸にすりすり頬を擦らせるめぐみんに呆れを込めた微笑を浮かべ、やれやれ仕方が無いな、とそのまま馬車まで輸送する事にした。

馬車の方まで歩いて行くと、既に一浴びしてさっぱりしたのだろう

カズマくんとクリスとゆんゆんが準備を終えて談笑しているようだった。

と、言っても談笑しているのはカズマくんとクリスで、ゆんゆんは三人組で歩いていたら一人だけ後ろを歩いて二列になってたみたいな感じでぼつんとしていた。

「へー、やっぱりダンジョンはピンキリなんだな」

「そうそう。普通のクエストと違って報酬は自分たち次第だから、当たり前外れ大きいんだよね。でも、だからこそお宝を見つけた時の達成感病み付きになるくらい良いんだよ」

「んー、もう少しレベル上げたら行ってみるかダンジョン。こういうファンタジーな世界に居る訳だし、一度は潜ってみたいよな。キールのダンジョンは正直アレだったし、ちゃんとしたパーティ組んでガチガチにダンジョン攻略してみてえわ」

「あはは、良いかもね。っと、あらら、眠り姫と一緒にみたいだ」

「ん？ ああ、やっぱり寝落ちしてたのかめぐみん。お疲れ様です師匠」

「ベッドですやすやしてたから拾ってきたよ。クリス、そっちの毛布の所に寝かしておいてくれ」

「はいよー、っと」

荷台に居たクリスにめぐみんを手渡し、毛布が置かれている場所に横たえさせる。

その後、ニヤつと笑ったクリスによって毛布まみれにされためぐみん。

もしかしたら半日くらいそのままやすやしてそうだな……。

だなんて、笑っていたら後ろから足音が聞こえたので振り返る。

そこにはララが——、じゃねえ、何故か肩にウイズさんを乗せたバニルが居た。

「すまないがこのポンコツも一緒に持って行ってくれないだろうか契約者殿よ。近々大きな商談があるのだが、こやつが居るとそのための資金に手を付けそうだな。謝礼金として、二つ程見通した結果を伝えよう」

「お、おお……、何と言うか、大変だなあんたも……」

「ふつ、最近あの頭お花畑な元女神と宜しくやっっているらしい少年よ、分かってくれるか」

「お前のそう言う所は嫌いだわ」

「くくくつ、朝からこやつを捕縛するのに疲れたから少し欲しかったのだ、許せ。よっこいせつと」

割と雑な感じで荷台の方へウイズさんを放り投げて、額の汗を拭いたバニルは良い顔をしていた。

厄介者が消えて清々すると言った様子であり、あの手この手でポッコツを晒したウイズさんのお守りに苦労したのだろう。

私の方に振り返り、耳元に囁く。

——アルカンレティアにて魔王軍幹部の妨害工作の予兆有り、噂が立ったら気を付けるべし。

——混浴風呂に近付く事無かれ、頭に乘せた片割れを探す邪神と出会うだろう。

「マジ？」

「大マジだ。一つは確定、二つ目は契約者殿次第だな。どちらも似たような時期であるので気を付けると良い。毒に関する備えをしておくと尚更に良し、だ」

「分かった。ウイズさんはこっちで預かっておくよ」

「うむ、宜しく頼む。漸く軌道に乗り始めたのだ、こんな事で座礁したくないからな……」

大分疲れた顔で、ではなつ、と足早に帰って行ったバニルを見送つて、私は盛大に溜息を吐いた。

まさかララとの賭け事に負ける日が来ようとは……、はあ、魔王軍幹部とのエンカウント率高過ぎだろう。

死んだ目をしつつ、ソウルに仕舞い込んだ毒関連のアイテムを思い返す。

精々が毒紫の苔玉しか錬金できていないので、相手が毒に特化した相手だときついな。

……まさかと思うが、ウイズ魔道具店に寄って毒関連のポーション

を買わせようとしていたのだろうか。

はあ、契約者相手にも商魂逞しいこって。

まあ、アルカンレティアにはリーストが腐る程居るから問題無いだろう。

最悪アクアさんに解毒魔法を唱えて貰えば良いだろうし。

「む、そう言えばアクアさんは何処に居るんだ？」

「へ？ うっわ、まだあいつ来てなかったのか。二度寝だけはするなよってアレだけ言ったのに……。すみません師匠、ちよつと連れてきます」

「ああ、頼むよ」

荷台の中を見て盛大に溜息を吐いたカズマくんが屋敷へと戻って行く。

てつきりアクアさんを連れてこっちに來ると思っていたので予想が外れた形だ。

屋敷へと向かったカズマくとすれ違う形でお出かけの用意を終えたララが此方へ來る。

一応アルカンレティアまでの道のりは旅行気分とは言えないので、全員戦闘用の衣服を着用している。

なので、ピカピカに磨いたらしい懐かしい金属鎧を着込んでいたララは新鮮だった。

最近までは動きやすい革鎧であったと言うのにどういう心境なのだろうか。

「お待たせしたな。む、ああ、カズマが屋敷に戻ったのはそう言う……。ん？ ああ、この鎧か。いやなに、被虐性癖も薄れてきたのである。普通に冒険者らしい恰好をしようと思ったただけだ。それに、肌に傷が付くと嫌だろう？」

「んふふ、そう言う感性が戻って来てくれたようで何よりだ。まあ、道中でそこまで強い相手と出くわす事は無いだろうけどな。終わりに近いがまだ冬だしな。冬眠しているのが殆どだろうよ」

「だろうな。まあ、念には念を入れて、と言う所だ。そろそろあの二人も來るだろうし、トレントを繋いでおいた方が良いんじゃないか？」

「それもそうだな」

ララの助言に従って馬小屋へと向かい、トレントを連れてくる。中身は人間なので呼ばれた理由を察して荷台の前で大人しくしてくれるので有難い限りである。

荷台を引くためのパーツを取り付けている頃にカズマくんがぐすか顔のアクアさんを抱えて来て、めぐみんの横に添えた。

その隣に居たウイズさんがアクアさんの元女神っぽい神々しさに当てられたのか魘され始めたが、まあいいか触れている訳では無いし。

こうしてアルカンレティアへと向かうための面子が揃ったので、御者として荷台の前側に座った私はトレントの手綱を握った。

「よし、それではアルカンレティアへと出発しようか」

「ぶうるるう、ヒイインツ!!」

やる気満々な様子のトレントが荷台をあっさり引き、門から広場へと歩いて行く。

後ろで門の前で見送りをしてくれたベルディアとアンナに手を振って、屋敷を後にした。

屋敷から広場へ、大通りの馬車が通る道を通っていくに連れて薄々ながら喧噪が後ろから聞こえてくるのに気づいてしまった。

後ろを見やれば、商魂逞しい者たちが私たちを先頭にずらつと馬車を並べているのが見えてしまった。

どうやら私のネームバリューと言うか、戦闘力を当てにして相乗りめいた行商をしようとしているらしい。

……事前にそのような相談は受けていないし、最悪見捨てても問題無いな。

と言うか、此方は旅行気分なので護衛役をする気は全く無い。

冬である事、大行列である事、それらを加味してモンスターが近寄らない事を祈るんだな。

アクセル内では緩めていたトレントの脚を、アルカンレティアへと向かう道に入った途端に早めていく。

重々しい荷物を引く行商馬車、十人以上は乗る乗り合い馬車が、此

方の軽い荷台馬車と同じような速度で走れるかと言うと否である。

それに加えて霊馬たるトレントが引いているのだ、そもその地が違い過ぎる訳で。

彼らは道中一泊する事を考えているのだろうが、此方としては夕方辺りに着けば良いと言う考えの違いも相まって、爆速で走る此方の馬車との距離が離れていくのは当然の事だった。

先頭を走る馬車の見知らぬ商人がぼかんとしていたのが印象的だった。

せめて一言、と言うか商談を此方にしていれば道のりを共にする気もあつたのだがね。

「アクセルの最高戦力をタダで使おうだなんて舐めた事するからだ、馬鹿共め」

「ごうごうと風を切り、私は風になるつ、と意気込んでいるトレントの速度は衰える事を知らなかった。

……ユウキさんの所でサスペンションを作つて荷台に取り付けておいて本当に良かった。

付けて無かつたら今頃酷い事になっていたに違いない。

後ろを見やれば、眠つていたためぐみんたちも起きたようで、凄まじい速度で走る馬車から見る外の風景を見てきゃーきゃーと楽しそうだった。

アルカンレティアへの道は一本道なので、正直手綱を握っている必要は無いのだが、手放すとトレントが寂しがるので仕方が無く握っておく。

たまにピンピンと引つ張つてやると嬉しそうにするので、まあいいかと諦めておく。

この様子なら昼頃に一度休憩して、ゆつくりと走らせても今日中に着きそうな感じだな。

……はあ、彼方でいつ来るか分からない魔王軍幹部の影を気にしないといけないのか、面倒な。

これはもうアクシズ教へ喧嘩を売っているのと同じだろうし、あいつらも馬車馬の如く働かせよう。

アウェイの場所で潜入工作だなんて馬鹿な真似を考えた事を心底後悔させてやるからな……ッ！

37話

商隊からもそこそこ離れたのでトレントに遅く歩くように指示を出しておく。

この世界における冬と言うのは弱肉強食の季節でもある。

冬眠を是とする動物が多い中、それでも活動するのがモンスターの力強さだ。

一面銀世界とまでは言わないが、ある程度雪の積もった草原だったその光景に後ろから感嘆の声が聞こえてくる。

実に微笑ましく、そして和やかな一面だろう。

……右目でソウルを見通してみれば、雪に潜んだハンターが如くモンスターの存在が見えている。

彼方此方に隠れ潜み、雪にはしゃぐ旅人や足を取られて転ぶ冒険者などを標的にしようとしているモンスターの狡猾さが丸わかりだ。

例えば、そう、あそこに見えている可愛らしい白い体毛の兎の顔。ひよこつと出ている姿が非常に可愛らしいうさぎの姿をしたそれ、とか。

「あつ、うさぎさん！　ねえめぐみん、あそこあそこー！」

「おお、パイにしても美味しいうさぎじゃないですか。今日のお昼ご飯にするつもりですかゆんゆん」

「違うけど!?　ほら！　真ん丸くりつとしたつぶらな瞳にふわもこの白い体毛！」

「美味しそうですね」

「違うでしょ!?　可愛いって言いたいのは私は！」

ああ、うん、すまないゆんゆん。

私狩人だから時々兎を狩った日もあるんだ。結構美味しいんだぞ、捌く時めっちゃくちや罪悪感あるけど。

けどな、うさぎは寒さに強くて冬眠はしない動物だが、雪の積もった場所の頂点から顔を出すような事はしない。

単純な話だ。踏み固まった積もった雪なら分かる。

だが、あそこに、そこらじゅうに見えているそれは触れれば柔らかか

く溶けるであろう降り積もった雪の塊だ。

そう身長が足りないのだ。

あの小柄な顔であれば二十センチいかないくらいの全長である筈であるし、ましてやそんな低身長とうさぎが爪先立ちになってもあの藪に積もったであろう六十センチを超える塊の上から顔を出せる訳が無い。

「……ふむ、残念ながらゆんゆん。あれは動物の兎では無いぞ」

「え？ そうなのおんおん」

「ああ、あれは雪の積もったこの季節か、冬山に居るようなモンスターだ」

私がじいつと見ていたからか、その正体を看破されたと感じたのだろうか。

——むくつと筋骨隆々な胴体を晒すように二足歩行で立ち上がった。

えっ、と言う声が後ろから重なる。まあ、無理も無い。私も機会が無ければ知らなかったであろう色物モンスターだ。

まるでボディビルダーの顔を兎に取り換えたような化け物めいた容姿をしているこのモンスターの名は兎詐欺と言う。

読み方は勿論うさぎであり、別名ラビットヘッドと呼ばれている害悪モンスターだ。

可愛らしい顔を晒して注意と警戒を解き、触ろうと近付いた者をその剛腕によって首を押し折りにくる肉食系。

クラウチングスタートしてアスリート染みた速度で対象を追いかけ、強靱な足から繰り出される殺人キックをお見舞いするそうだ。

ノックアウトされた獲物は、爪先立ちの四つん這いで近づいた兎詐欺によってバリムシャと生で食われるらしい。

その光景は非常に悍ましく、兎詐欺の前で倒れば最期、そう呼ばれるくらいに冬の間に見られるモンスターの一角として認知されている。

トレントの手綱を握り、助走を付けるように走らせて速度を上げていく。

「うえつ、なんつー恐ろしい姿を……、因みにアレ、なんて名前なんです?。」

「兎詐欺だ」

「うさぎ?。」

「兎の詐欺と書いてうさぎだ」

「また日本人案件かよっ!？」

「別名はラビットヘッドだ。顔だけは兎のままだからな」

「明らかに体積比可笑しいですよね……。頭が一に対して、身体が九くらいありますよ」

「モフモフな身体らしいぞ、アレでも」

「ええ……。いやまあ、人間の身体してるのが付いてるよりかはマシですね……」

「兎から派生したモンスターなんだな、と一応は分かる外見だからな。」

その割には身体がゴリマッチョで二足歩行と言うでたらめな感じではあるが。

さて、ある程度の説明を終えたので現実逃避は無しにしよう。

やっべえ、十匹くらい居る上に此方を獲物としてロックオンしたらしく全力疾走で追いかけて来ている。

このままトレントに振り切りさせても良いのだが、それをすると後ろの商隊が全滅するな……。

あの筋肉は見せ筋では無く、ガチの筋肉であるためそこらの冒険者には荷が重い。

こうして辛うじて追いつける程度に速度を緩めた状態で釣つてみたが、正解だったみたいだな。

「よし、少し先に広い場所がある。そこで迎え撃つぞ。各員、戦闘の準備をしておけ」

「はいっ！ めぐみんは詠唱準備、ララは俺と前に出て足止め。クリスはバインド系で妨害して、ゆんゆんは足が止まった奴から魔法で仕掛けてくれ」

「私は?。」

「アクア、お前はヒーラーとして活躍して貰う。流石にあの腕に殴られたら死ぬるからな。些細な傷でも回復魔法を飛ばしてくれ」

「分かったわー！」

……ふむ、見ないうちにカズマくんも成長したな。

ベルディアに色々教えて貰っていたようだが、まさか小隊指揮の遣り方も教わっていたとは。

この世界におけるパーティの役割分担は非常に重要だ。

幾つか兼任すると痛い目に遭うジnkクスがあるくらいに個人技能は尖らせる傾向にある。

ソウルからベルディアの大盾を取り出してララに渡し、自分は新武器であるとおきを取り出す。

形状は鞭の分類で、鞭に当たる部分が編み込まれた鋼鉄のワイヤーと言う近代的な鋼鉄鞭だ。

素早い相手に対し有効であり、音速手前の先端部位での殴打は遠心力によって裏付けされた鋼鉄の暴力を發揮する事だろう。

ウィップ部分には粗いやすり掛けがされているので、撫でられただけでも肉片をごっそり削る拷問武器でもある。

重武装に対する切り札がパイルハンマーであるなら、軽武装に対する切り札がこのハガネオロシだ。

元の発想はイバラムチであったのだが、実際に棘付きの鞭を作って貰ったところ引掛かりが酷く、何処そのチェーンマインが如く相手に巻き付くまでは良いが、引いて切り裂くにはよっぽどの筋力が必要と言う事が分かって頓挫した。

それに棘が付いていると腰元に巻き付け辛く、自傷に繋がる可能性が高い事もあって形状的にゲームだから許される形なのだとユウキさんと肩を落としたのだった。

そのため、泣く泣く実用的な鞭を開発したところ、完成がこれになった、と言う訳だ。

感覚的には蛇腹剣に近いが、摩擦で切り裂き、鋼鉄で打つ、斬撃と打撃、両方を兼ね備えた良武器が爆誕したのだった。

呪術一辺倒だと普通に死ぬる世界なので近接にも力を入れなくて

は生き残れない。

「広場が見えたっ！ 急停止まで五、四、三、二、一、ストップだ！」
半ばドリフトのように荷台を滑らせ、遠心力で無理矢理止まったトレントにサムズアップしてから馬車から飛び出す。

前衛にララ、その隣にカズマくん、その後ろをアクアさん、クリス、ゆんゆん、次に私、その後ろにめぐみん、と言う普段通りのフォーメーションに陣形を取る。

ウイズさんはバニルに念入りに気絶させられたのか、はたまた死ぬ程疲れているからか、まだ意識が戻って来ていないので荷台に残しておく。

此方が臨戦態勢になった事も相まって兎詐欺たちの瞳が真っ赤に輝き、殺意の波動を背負って地面を蹴る。

そして、計五匹のシャイニングウイザードが『デコイ』でヘイトを請け負ったララの大盾に叩き付けられ、続く第二波の五匹によるローリングソバットにより後退るものしつかりと耐えてメイン盾の貫禄を見せつけた。

これで助走による最大の一撃は無くなったので、後は討伐をするだけだ。

再び前に出て四匹のヘイトを請け負ったララ。

その隣で、竜巻旋風脚染みた回し蹴りをしゃがんで避けたカズマくんが軸足を切り裂いて転倒させ、ひっくり返ったところをクリスが『バインド』によって捕縛し、ゆんゆんが『ライトニング』によって仕留める。

その後隙を狙った奴を私がハガネオロシを振るってその足をズタズタに切り裂いて叩き落とし、複数近付いた奴らには『猛毒の霧』を吹き付けてやり目潰しをしてやる。

前に居て猛毒をしつかりと浴びた三匹がぐったりし始めたのでカズマくんたちに任せ、ララがヘイトを取っている四匹に向かって横から『混沌の火の玉』を投げ付けてやり、逃げ遅れた一匹を直火でウエルダンにしてやった。

「各個撃破を心掛ける！ 決して自慢の腕や足を振り回させるな！」

ララと言う頑強かつ鉄壁な壁に身を隠しつつ、側面に回ろうとする兎詐欺を狙い撃って損傷を与えていく。

当たれば当たるだけ擦過傷が増えて出血も多くなり、近接戦闘しか行えぬが故に特攻染みたカミカゼを『大発火』で撥ね返してやればふらふらと出血多量と火傷によるダブルパンチで倒れていく。

此方が残り二匹、カズマくんの方も二匹残り、数的有利も得た事で此方の形勢が増す。

傷だらけの個体が威嚇の声を漏らしながら、ふと私の後ろを見やつてから歯茎を丸出しにするような怒声を発した。

大盾の上部の淵にその強靱な脚力によって飛び乗ったかと思えば、私たちの頭上を越えてアクアさんの方へと飛び掛かった。

野生の習性か、後ろで守られているアクアさんが弱い個体なのだと考えたのだろう。

「……へっ?」

「アクアっ!!」

天高くライダーキックの構えで落ちてくる兎詐欺をぽかんと見やるアクアさん。

それを見たカズマくんが目の前の兎詐欺を振り払うように薙ぎ払いを放ち、その遠心力を利用してデルフを投げ付けた。

横合いから脇腹へと勢い良く突き刺さった事により、アクアさんを狙っていた兎詐欺は墜落する。

運悪くと言うべきか、カズマくん的には幸運な事に、デルフの柄を地面に向けて落ちた事で体内へと深く突き刺さり、短い悲鳴を上げて死に絶えた。

「よしっ」

「よしっ、じゃなーいっ!! 『バインド』ッ! てやあっ!!」

『『ライトニング』! 『パラライズ』! もう一回『ライトニング』!』
「てえいやああ!!」

得物をぶん投げた挙句に背中を晒したカズマくんを狙った兎詐欺をクリスとゆんゆんが必死こいて討伐し、最後の一匹はララの渾身のフルスイングによつて頭を粉碎されて酷い有様になった。

そう、フラは剣士の才能は無いが自慢の肉体があるので力任せのぶ
ん殴りは得意なのだ。

何せ見事に薄っすらと腹筋が割れている程だ。

あの頬擦りしたくなるような素晴らしい肉体によって、くっそ重い
大盾も扱えているのだから振るえない訳が無い。

「あのあのっ!? 私何もしてないんですが! ぼけーっと立ってただ
けなんですが! 私の出番! 何処!? 此処!」

「ああ、大丈夫だめぐみん。ちゃんと詠唱はしているな?」

「え、あ、はい。してますけど……」

「あそこに鉄砲玉を送ってふんぞり返ってるボスが居るから撃つ
ちゃってくれ。それで終いだ」

「え? うわあ、何か丸々と太ってふんぞり返ってるのが居ますね
……」

銀世界の雑木林に切り株へ座ったボスっぽいデブった代償に二回
りは大きい兎詐欺が居た。

恐らくお相撲さんタイプの筋肉の付け方なのだろうな。

子分共がやられたか。しかたあるまい、俺が出るか。

みたいな雰囲気醸し出しながら立ち上がったところを、めぐみん
の渾身の『エクスプロージョン』によって一瞬にしてミンチよりひ
でえめに遭いながら跡形も無く消し去られたのだった。

ふう、と良い汗かいたと言わんばかりに額を拭ってから、めぐみん
は満足そうに雪に倒れた。

やれやれと思いつつ武器をソウルに仕舞って、くったりとしため
ぐみんを横抱きにして持ち上げる。

「えへへ、おんおんにこうして貰うの久しぶりな気がしますね」

「そうだな。ほら、魔力の供給してやるから首に手を回しておけ」

「はあい」

首に手を回してより密着した事で接着面が増えて魔力譲渡の効率
が上がる。

最近は何課の爆裂魔法を放った後はマナタイトで歩く気力分を充
填してたようなので、こうして抱き抱えるのは……いつぶりだ?

まあ、それなりの日数が経っているのは間違いないか。それだけめぐみんも成長していると言う事だな、うむ。

だからまあ、こうして楽するために甘えてくるのもよしとしようじゃないか。

可愛い恋人のする事だしな、こうしてしっかりと受け止めてやらねば彼氏として廃ると言うものだ。

すりすりとした私の薄い胸に頬擦りしてくるめぐみんを甘やかしながら、馬車へと戻って荷台に寝かせる。

兎詐欺の後始末をしないとイケないからな。

「兎詐欺は筋肉質で食べるところは少ないから穴を掘って燃やして終わりだ」

「あ、やっぱりそうなんですね。めっちゃやくちや硬そうですもんねこいつ……」

「それにしても……見違えたなカズマくん。しっかりと戦士の役割を熟していたじゃないか」

「へへっ、いやあ、ベルディアに教わってから実力が付いてきたって言うか、しっかりと身に付いたと言うか」

「嘘おっしやいな。剣士系と戦士系のスキルの相の子して、両方の良いとこ取りしたんじゃない。この前の夜にベッドでカードを弄ってたじゃないの」

「ぼっ、アクアお前っ。こう言う時は言わずに気持ち良くさせといてくれよ！ あんなやべえのに奮戦できたのは事実なんだからよー！」

鼻の下を右手の人差し指の側面で掻きながらへへっとならうと笑っていたカズマくんだったが、肩から顔を出すように背中から抱き着いたアクアさんに噛み付くように抗議をし始めた。

……近くない？ 距離。そんなに気軽にスキンシップ取るような間柄だったっけ？

若干頭がバグるような思いをしつつ、アクアさんを見やれば頬を少し赤らめてカズマくんに熱っぽい視線を向けていた。

ははあ、さっき助けてくれたから吊り橋効果のように好感度が上がっている訳か、成程成程。

って事はこれは、私との仲を嫉妬して女神っぽいをカズマくんの背中に押し付けてマーキングしている訳か。

……アルカンレティアに着いたらゼスタに命じて二人を個室に少し離れた良い感じの場所に隔離してやろーっと。

あくまで、宿泊が多いから、離れ離れにしてしまうのは申し訳無いのですが、みたいな感じで申し訳無さ全開でそれっぽい免罪符を与えてやろーっと。

何日で物理的にもくつつくのか見物である。頑張れ少年、今生では良い夢を見るんだぞ。

と、百合ハーレムを築いている自分をこっそりと棚に上げて応援しておくでしょう。

旅館の食事もそれとなく滋養強壮系のを混ぜて貰って水面下のお膳立てもしておいてやろーうな。

実際、カズマくとアクアさんの関係が良好であればある程、下界にアクアさんが居てくれる日数も伸びる訳なのでアクシズ教的にも良いだろう。

それにカズマくとアクアさんの間に子供が産まれればそれはそれで需要がありそうだしな。

……元女神と人間の組み合わせで子ができるかどうかは分からんけども。

「さて、一応皮は剥いでおくか。寒さに強いから鞣せば暖かい毛皮になるしな」

兎詐欺の死体の中から綺麗なのを人数分集めてせつせと皮を剥いでいく。

一番手慣れているのは狩人たる私で、次点でめぐみんだ。森に居た頃に何回も手伝わせたからな、経験が活きたな。

鞣すのは、まあ、帰ってからも良いか。またはアルカンレティアで鞣しの依頼をすれば良いだろう。

手早く残った死体を掘った穴に放り込み、『混沌の火の玉』を投げて溶かすように焼いてから埋めていく。

最後にアクアさんが『セイクリッド・クリエイトウォーター』をちよ

ろっとかけて完了だ。

ボス兎詐欺は雑木林の一部と共に消滅しているので合掌だけしておく、南無南無。

毛皮をソウルに仕舞い込んだのでこの場所にはもう用は無いな。

再び馬車へと戻り、トレントに一声掛けてから旅路に戻る。

「にしても……さっきみたいな奴って結構居るんですかね。似たようなとこだと冬將軍とかもそうですよね」

「ふうむ、カモネギとかもだな。後は……走り鷹鳶とかか」

「何と言うか……言葉遊びみたいな奴が多いっすね」

「多分、この世界の根幹がギャグ寄りだからだろう。じゃなければキャベツが空を飛ぶ訳無いだろ」

「あつ、それもそうっすね……」

私とカズマくんの会話に露骨に顔を逸らしたアクアさんとクリスの様子からして、この世界を作ったコンセプト辺りも聞いているんだろうな。

実際、任せられている二大女神の訳だし。

でもまあ、魔王の出現により我々転生者が必要になる世界だ。

ギャグ目・剣と魔法の世界科・ナーロッパ属・冒険者社会みたいなもんだしな、この世界の根幹。

面白半分で作ったファンタジーシミュレーターMOD入り、みたいな感じだろ多分。

じゃないと私の様な場違いなMODみたいな奴が居る理由にならない。

ダクソ3の世界観をこの世界に落とし込むために幾つかダウングレードしている訳であるし、ジョブの冒険者のスキルラーニングでは呪術は扱えない事が判明している訳で。

言うなればDLCめいた、追加要素なのが我々勇者候補と言う存在なのだろう。

「……まあ、結局のところ、私たち勇者候補ってのはこの世界の異物なんだ。だから、どう取り繕っても世界に及ぼす影響ってのはでかいんだろう。分かりやすい例を挙げれば、デストロイヤーだ」

あんな機動要塞めいた機械テクノロジーマシマシの産物が暴れ回っていたのだ。

アレの制作者が日本人である事はソウルに仕舞い込んだ日記で分かっているし、世界感をぶち壊すには十分なものだろう。

しかも科学を魔法理論で梱包してたからなああのデカブツ。

機械による超重量の移動を可能とし、それを魔法式の防衛機能を付けるとか人類戦争待ったなしのやべーもんを作りやがってからに。

一歩間違えて暴走してなかったら鋼殻のレギオスめいた機動要塞都市を軸とした世界観が展開されてたに違いない。

核戦争よりかはクリーンな魔法での戦闘方法だから荒廃はしないだろうが、あんな機動要塞がデフォの世界なら地上で栄えると言う事はしないだろう。

そう言う点ではノイズだったか、それがデストロイヤーにデストロイされたのは正解だったかもしれないな。

「……いやでも、ソードワールドみたいな世界になる可能性もあったのか。一応デストロイヤーの燃料は伝説級のコロナタイトを使用した訳で量産されていた訳では無いし……。鉄道、か。石炭を使わずに魔石で……。いや、それやると一気に時代が進むから駄目だな。やっぱり現代知識つてのは劇物だな。なんでそんなもん輸入しちゃったんだこの世界……」

言うなれば闇鍋めいたごっちゃ煮と言うか。そんな事をしなくちやならない程魔王がやべーのだろうか。

……あれ？ でも、最初の説明では……。

気になる事が出来たので振り返り、質問を投げてみる事にする。

「カズマくん、この世界に送られる時に何て言われたか覚えているか？」

「へ？ えーつと、確か、魔王軍に殺された奴らがこの世界に輪廻転生したくないって駄々こねてるから俺らが呼ばれてるんですけどっけ」

「そうだ。それなのに魔王を倒せと言うのは何か可笑しくないか？」

「そう、ですか？」

「じゃあ聞くが、この世界の魔王はデスタムーアみたいな世界に暗黒

を齎す系の奴か？」

「……あつ、そうか。魔王自身が積極的に殺しに回っている訳じゃないんですね。でも、魔王軍って言われているからには戦争しているんじゃないんですか？　なら、相手のボスを倒すつてのは間違つて無さそうな」

「……成程な。してやられた訳だ」

この場でアクアさんとクリスを糾弾しても良いのだが、多分意味が無いだろうな。

私も今の今まで勘違いしていたが、この世界における勇者の役割は魔王を倒す事に集約されている、言わばドラクエの勇者だ。

けれど、それをリアル目線でマクロ的に見れば可笑しさしか無いのだ。

例えば、相手の国の王様を殺せば戦争が終わるのか、と言う話だ。終わる訳が無いのだ。次の奴を立てれば戦争は続く。

王様が死んだところで軍部の長が生きていれば戦争は続けられるのだから。

ドラクエの勇者が世界を救うのは、魔王自身が世界を滅ぼそうと画策する存在であるからだ。

そして、この世界と言うのが人類社会に当たる訳で、惑星規模で救っている訳では無いのがミソだ。

それにこの世界ではモンスターが普通に跋扈する世界だ。

なのに、魔王軍に殺されたから輪廻転生したくない、などと言い出すものか？

「……つまりは、尻拭い。魔王は恐らく……」

私たちと同じ勇者候補、いや、ただの転生者だった誰かなのだろう。

それが人類の敵として立った。そののカウンターとして私たちが勇者候補と言う名目で転生し、鉄砲玉にされている訳だ。

一口で言つて勇者と言う存在は破邪、魔を断つ光の者と言う印象が強い存在だ。

では、私たち勇者候補がそれを持っているか、と言うと否と言える。実際問題、フロム系魔法たるダクソ3式呪術が光の者が扱う代物な

訳ねーだろって話である。

確かにモンスターを倒すのに苦労はしないが、特攻があるかと言われれば否だ。

故に、勇者候補、と思考の誘導とそれっぽい肩書を乗せているのだろう。

つまり、私たちは勇者候補と言う肩書きは相応しくなく、異世界転生者として記すのがお似合いだろう。

チートにはチートをぶつけるんだよ、みたいな発想で始まったんだろ。うなこの戦争。

どう考えても魔王軍と対立する組織を作り上げて、徹底的にモンスターを殺すための機構を作った方が早い。

けれど、それを覆すような魔王の転生特典がきつとあるのだろう。

考えられるのは……、モンスターのティム系となると指揮系バフ系か？ またはモンスター製造系か？

人類の脅威となるような極悪仕様の特典であるし……、モンスター創造系、か？

動物の亜種みたいな存在だったモンスターに知性を持たせた、とか？

そもそも……この世界における魔王とは、なんだ？

ううむ、考えれば考えるだけ泥沼にはまっていくタイヤの後輪みたいな気分になるな。

「それとも、元々この世界に魔王がちゃんと存在していて、それを倒す存在として勇者が本当に転生していた時期があつて……、それが何かの原因で崩れたからそれのでこ入れとして私たちが転生させている、とか？」

その場合、我々の肩書がちゃんと勇者候補に戻る訳だ。

言うなれば勇者側の増援として転生させられている訳だからな。

……なんか、そっちの方がしっくりくるな。倒せない敵が居るから戦力として逐次投入している方が、らしいっちゃある。

と言うか、冬將軍みたいに人々の無意識で精霊が変化するような世界だ。

魔王関連で似たようなバグが発生したから勇者候補を転生させて
トラブルシューティングしてたりするか？

勇者候補、幸福は義務ですよ、ってか。

魔王関連で起きそうなバグと言うか、最悪なパターンって言うと
……まさかとは思いますがミイラ取り方式で魔王になる怨念パターンか
？

魔王を倒した勇者が魔王になる、それが転生特典持ちの勇者だった
ら……、あー……。

一番有り得るパターンだなあ。歴代魔王の怨念が倒した相手に憑
りついてー、みたいなパターン。

世界が魔王を選ぶタイプだとモンスターから選ばれるだろうから、
その場合はモンスターとのハーフみたいな感じで現地人だろうし、転
生特典は絡まないだろう。

いや、血筋があればある程度は受け継がれるんだっけ転生特典つ
て。

となるとまおゆうみたいな魔王と勇者が結ばれたパターンも有り
得そうだな。

基本的に魔王になるほどの才覚と言うか資質は持っているだろう
し、そう言うのは大概美男美女がお約束だ。

私的にはそっちの方が浪漫があるからそっちの説を推したいが、そ
れで勇者候補に魔王討伐を女神が組むかって言うといマイチなんだ
よな。

後は……洗脳パターンか？魔王が勇者を洗脳して表の魔王とし
て操っている、みたいなパターン。

それならまあ、勇者候補をぶつける理由にはなるか。

ちらりとアクアさんではなく、クリスを見やれば、ごめんね、と言
う感じの表情をしているから聞き出せないな。

まあ、アクアさんと違って一人の勇者候補に融通するのはNGなの
だろうな、女神ルールのに。

「……まあ、どれにせよやる事は変わらない、か」

やはり作るしか無いな。勇者候補のための勇者候補による勇者候

補の相互補助組織を。

現地人が介入する冒険者ギルドでは脅威に対する対処が取れないからな。

アクシズマーケットを画策したのはガス抜きが八割くらいだが、二割くらいは此方が理由だ。

言うなれば勇者候補によるオフ会を、集まる機会を作って今後の方針を立てたいのだ。

恐らく魔王軍にしてやられているのはソロ気質な勇者候補の陰キヤ性質が原因だろうしな。

アケットによる運営収入で水面下で組織の雛形を作る、それが最高司祭となったゼスタとの密約の一つだった。

女神アクアと言う交渉の切り札でありワイルドなジョーカーを私が握っているのです、基本的に一方的な関係であるが友好関係にあるのだ。

それにまあ、それだけの利益をアクシズ教に報いている実感はあるからな。

アルカンレティアに着いたら色々と事を進めないといけないから、休んでいる暇……無いかもしれないなあ。

流石に二度目の過労死は勘弁して欲しいものだ。まあ、死なないけども。

そんなくだらない理由で人間性を削るのはこっちとしても嫌だしな……。

そういや、バニルからの助言で魔王軍幹部との遭遇が示唆されてたなあ……、はあ。

やる事が、やる事が多過ぎる、いつから私はやれやれ系苦労人になったのやら。

少し気晴らしをするために、トレントの手綱を打つ。もつとだ、もつと早く走れ。風になるんだ！

頬を撫でる疾風の心地良さに少しだけ胸のもやが薄れる。いつになつたら安寧を得られるんだか、はあ。

38話

兎詐欺に出くわした後は特段特筆すべき事も無く、無事にアルカンレティアに辿り着く事ができた。

真つ白に燃え尽きたぜ、と言う感じで歩くトレントを除けば概ね問題無いだろう。

「あつ、聖母様！」

「聖母様だ！」

「おお、聖母様がお見えになられたぞ！」

「聖母様——！ 俺だ——！ 結婚してくれ——！」

「きゃ——！ 聖母様——！」

待つて、本当に待つてくれ。何で本格的に崇められる立場になつてるんだ私。

困惑の表情と視線が後頭部にビシバシと当たる感じがする。

確実にゼスタが何かをやらかしたに違いない。

そう決め付けた私は額に青筋を浮かべながら、何となく手を振つて見たが黄色い声援が返つて来るだけだった。

「……マジでどうなつてるんだ。前来た時はここまでの人気は無かつたぞ……？」

「その疑問にお答えしましょう！」

「でたな諸悪の根源め。拾う骨すら溶かす温度に死に絶えるが良い！」

「おおつと！ 待つた、待つてください！ これには広く浅い理由が！」

「この盤面でおちよくれるとは良い度胸だなあゼスタあつ!!」

にゅつと何処からともなく現れたゼスタが隣に座っており、咄嗟に『混沌の火の玉』を灯した私は悪く無い筈だ。

こいつ最高司祭になったから止める者が私以外に居ないようで、衛兵などの国家権力には負けるがそこらの信者では太刀打ちできない変態に成長しているらしい。

定期報告にゼスタのハジケっぷりを何とかして欲しいと言う陳情

まで混ざる始末だ。

打てばあひんと響く嬌声を上げるのがこの変態のやべー所であり、若干私でさえも扱い辛くなる時が多々あるくらいだ。

「ふふふつ、その手のそれをどうぞしまってください。死人が出ますよ、ゼスタと言う名のね！」

「……一瞬、それでも良いかと思っただが？ ……はあ。で？ どういう状況だ？」

ペコちゃんが如く舌をぺろつと出したゼスタにイラっとしつつ、続きを促すと嬉しそうに話し出した。

「ああ、簡単な事です。よ。下界に降臨した女神アクアを手厚く保護している事を流布したら一晩でこんな感じになってました。いやー、にしても生のアクア様はやばいですね。遠目から見ても分かるのに、こんなに近くで見たら目が潰れそうなくらい眩いお方だとは」

「嘘つけ、絶対お前言ってない部分があるだろ」

「あ、分かります？ ぐほあっ!? つ、痛烈なレバーブロー……つ、私でなければ受け止めきれませんな……つ」

「お代わりが御所望か？ 安心しろ、反対側から打ち込んでやるぞ」

「わ、分かりました。流石に内臓までは鍛えられないので勘弁してください……。こほん、女神アクアをこの街に連れて来てくれるのが聖母である貴女だと流布したんですよ。そしたら、ぷぷつ、皆つ、一週間くらいずーつとそわそわしててつ、くくくつ」

いつぞやのアクアさんみたたくぷーくすくすと人を小馬鹿にするような笑いを堪える素振りを見せるゼスタ。

ああ、うん、そうだよな、長年のノリが数カ月で収まる訳が無いよな。

「悪戯小僧かお前え……。……それだけか？」

「ええ、それだけです。よ。十分でしょう、この街の、と言うかアクションに貢献してください。十分でいる貴女の事を誰も知っています。ですから、そこに女神の守護者だなんて肩書きが付いたらそりゃー誰だつて尊敬するし崇めるし感謝するでしょう。戒律を作り、女神アクアの代弁者として言葉を残し、時に聖母然とした説教を行ない、数多くの

信者の心を射止めているのです。特にアクシズマーケットの開催者としての功績が強いですね。一部の行き過ぎた性癖を拗らせた者が一心不乱の大戦争と言わんばかりに机に齧り付く様に紙に文章を書き起こしているのだから貴女のおかげなのですよ」

「最後のそれ付け足す必要あったか？」

「無論ですとも。今や聖母様で危険なオナニーに日夜励む者たちです、面構えが違いますよ」

「……その言い方だと私が対象にされてないか？」

「ええ、間違った事は言っておりませんとも」

成程、これが二次創作でエッチな事される側の気分かあ……。

アクアさんを対象にすると罰当たりだからって次点の私を狙いに定めたる確実に。

はあ、しようがないにやあ、と許可を出しておいてやるか。

実際、アケットでの収入によって得られる利益を期待しているので冷や水を掛ける訳にもいかない。

勇者候補扶助組織の設立と謳ったは良いが、実際のところはルイーダの酒場みたいな小さな物で良いのだ。

有事に対してある程度集まれる場所があつて、ある程度の意思伝達ができる、ある程度の支援ができれば良いのだから。

確かに私たちは強くてニューゲームみたいな感じではあるが、一から百までお世話されたいチート野郎では無いのだ。

言わばローグライク気質と言うか、強い武器を持っていたいのがそれを理由に利用されたくない、ハクスラ系なソロの傭兵みたいな扱いを受けていたいのだ。

「ああ、そうそう、実際にアケットに出品する創作物は私が一度読んで規約に反してないか検めるから、その通達もしておいてくれ。そう言う方が上がる奴らも居るだろ多分」

「ほほお、我らが聖母様は寛大であらせられますなあ。けど、本当に宜しいので？ 大分きつっついのを書いている者もちらほら居ますが」

「そうか？ 私が野生の紅魔と言うペンネームで書いてるバルバロシリーズよりかは温いだろ」

「……えっ、アレ書いてるの聖母様で？ うっそ、マジで？ アレ、過激過ぎて発禁扱いされている街もあるそうですよ？ 私の家に全巻揃ってますけども」

「そこまで過激な事書いてたっけか……？」

「うわあ……。自覚無かったんですか。あの小説が出回った事で性犯罪が格段に減ったくらいに社会的な影響を及ぼしてる作品と巷の噂ですぞ？ そこの女性を襲うよりもあの小説を読んだ方がスツキりするとかなんとか、盗賊や山賊の間で一大ブームになってるとか」「ふうーん……。まだ印税入って来ないからあんまり実感無いんだよなあ。半年の売り上げで決算してるみたいだし」

メイドスキー伯爵シリーズは全三巻、バルバロシリーズは四巻目の発売がされている訳だが、売り上げに対する話が何も来てないんだよな。

あつ、もしかして実家の方に手紙が送られてたりするのか？ 前に担当と会ったの里の小屋だし。

……まさかと思うが、印税もそっちに流れてたりしねえだろうな。

あの色ボケ夫婦に遊ぶ金なんて渡したらナニに使うか分からん。後で王都の出版社に手紙投げておこう。

「取り敢えず、詳しい話は後にしようか。一日二日くらいは旅館でのんびりさせろ」

「承知しました聖母様。そのように取り計らっておきますぞ。それは、水と温泉の街アルカンレティアにようこそおいでくださいました！ パーティメンバーの皆様方にも喜んで貰えると良いのですが、ではっ！」

御人台で立ち上がり、一礼したゼスタはしゅぼつと飛び降りて何処かへ消えていった。

……位置関係からして下の用水路だな。あいつ普段から沈められていたから泳ぎが得意らしいし。

と言うか一応此処入口の橋の上だぞ、あいつこの街に親しみ過ぎだろ。

まあ、ゼスタだしなあ、と溜息を吐いた私は後ろからの視線に漸く

気付いた。

「……えっ、今の、あのゼスタさんですか？ あの変態お気楽脳内お花畑セクハラ親父のゼスタさんです、よね？」

「ゆんゆん、その疑問は私もしました。と言うか、おんおんのこの街における立場強過ぎませんか。確かアレ、アクシズ教の最高司祭になったんですよ。なんで秘書みたいな扱いしてるんですか」

「その問いに答えるためにはしようもないくらい浅くて呆れるくらいの内容になるが、本当に良いか？」

私の何とも言えない疲れた声に二人は押し黙った。

まあ、この面子であのゼスタにあった事があるのはめぐみんとゆんゆんだけだろうしな。

実際のところ、傍目から見れば私がゼスタを操っている様に見えるだろうが、あの変態狸爺は態とそうしている節が見える。

私と言う美少女に折檻されつつも推しとして支援する私的な実益と、それと並行して自身が所属するアクシズ教の立場の向上と利権や派閥争いなどのその他諸々の職務的利益を上げている訳だ。

ああして私に媚びているようにしているのも、女神アクアに代わる扱いやすい広告塔として管理するための演技も含まれている事だろう。

実際、アクシズ教の予算は右肩上がりの状況であり、改心する信者たちの様子に感銘を受けた者たちが新たな信者として加入している事から新規入信者数の問題も解決している。

さて、アクシズ教の最高司祭としてどれだけの鳥を落としているのだろうかね。

一石二鳥以上の利益は出ているだろうよ、本当に食えない野郎である。

勇者候補扶助組織の密約も、この街の安全性がより高まる事を理解しての承諾だろうしな。

まあ、何が言いたいかと言うと最高司祭にまで成り上がった手腕は伊達では無いという事だ。

「あんまり褒めたくはないが、あのアホは変態だが馬鹿では無いんだ

よ。頭の良い馬鹿を演じているに過ぎない。覚えておくんだな、頭の良い奴の馬鹿の振り程恐ろしい擬態は無いぞ」

「そこまで念押しするだなんて……、ある程度信頼はしてるんですね」
「それは、まあ、色々と立場的にもな。それくらい的事はお互いに分かってるのさ。私がアクシズ教の信者たちに同情してこうして聖母を演じているだなんて欠片も思っちゃいないだろうよ」

「……と言うか、おんおんの場合、素で聖母みたいな事をしちゃうお人好しなので、聖母つて言う肩書きは後付けでしかないですもんね」

めぐみんの私は知ってるんですと言う感じの声色で放たれた言葉に困惑した。

え、私つてそう言うイメージ持たれているのか？

めぐみんに対して過保護な親みたいなの事をしていた自覚はあるが、それ以外は、はて、どうだろうか。

ララとの関係はずぶずぶのレス系のそれであるし、クリスとの関係は言わずもがな。

……聖母っぽい事した覚えがマジで無いんだが。

先程のめぐみんの言葉に同調しているらしいのはカズマくんとかアアさんであり、他の面々は微妙な反応を示していた。

まさかと思うがアアさんのお世話をカウントしてないだろうな……？

「いやまあ、普通の人だったらこんな余り物パーティーメンバーを集めたりしませんよ」

「いや、私は途中参加なんだが……？ リーダーはカズマくんだろう？」

「……そう言えば、そうでしたね」

「悪かったな！ 師匠みたいなりセマラ即終了キャラみたいなのと比べられたら負けるに決まってるんだろー！」

「でもまあ、カズマも最近頑張ってるじゃない。無様な姿も見せなくなったし、あんまり落ち込まない方が良いわよ？ 単純に比較対象が悪過ぎるわ」

「褒めてるようで褒めてねえんだよなあそれは！ うぐぐ、いやまあ、

特典のアクアが嫌かと言えばちげえけどさあ。何と云うか、折角異世界なんだし、主人公みたいな活躍をしてみたい訳よ」

「ふ、ふうーん……。致命傷くらいなら私が確り治してあげられるから無双ゲーみたいに前に出たら良いんじゃない？」

「磨り潰されるように死ぬだろ物量で。うーむ、このデルフに魔法吸収機能とか付けられないもんかね。なんか、ワンオフ的な凄いの欲しいよなあ」

「分かりますよカズマ。戦場で一際目立つ格好良い姿を魅せたいんですよね。私が爆裂道に走ったのもそう言う経緯があつたようなものですし」

史上最強の弟子カズマくん計画みたいな感じのを考えてあげた方が良いのだろうか。

正直、デルフを上げたのは本気でネタだったので、ここまで入れ込まれると此方としても気恥ずかしいのだけれども。

冷静にカズマくんのステータスを見てみれば、幸運以外は平凡の数字である。

そして、この世界は悪魔や天使を憑依させて強くなったりする世界観ではないし、魔物と合体したり契約して強くなったりするシステムも無い。

言うなればTRPGにでも出てきそうな王道的な剣と魔法の世界なのだ。

やはり、筋肉、筋肉が全てを解決する……。みたいな展開はカズマくんも求めてないだろうしな。

クールラントのルドレスみたいにソウル錬成ができれば良いんだが。

強大なソウル、此処で言う魔王軍幹部級のソウルを加工する事ができればそれっぽい武器が作り出せそうではあるんだがな。

手持ちにあるソウルで使えそうなのはベルディアくらいだが、それをやると召喚出来なくなるから別のが欲しい。

それにソウル錬成をするための錬成炉をどうやって作るかが問題だ。

テキスト的には結晶トカゲの抜け殻で出来ているんだっただけか。
……無理じゃね？ 流石に代替品が思い付かないんだが。
それをするくらいなら既に持ち主から手放された神器を探した方が早そうだな。

「そしたらダンジョンに潜ってみたらどうかかな？ カズマ君の幸運があるならレアな武器を拾えそうな気がするんだけど」

「ふむ、成程な。確かにクリスとダンジョンを回っていた頃に、偶に良い物を拾っていたりしていたものな。私が一切使えなかったからクリスに換金して貰っていたな」

「良いんじゃないですか？ 確かカズマのステの幸運って一番高かったですよ。期待できるんじゃないですか？」

「そうね……。最初の頃の貧弱なヒキニートなカズマだったら無理だったでしょうけども、今のカズマならダンジョンに潜っても大丈夫じゃないかしら」

「貶めてるんだか褒めてるんだか微妙な言い方やめろ……。でもまあ、成程、ダンジョンか。ハクスラするのも良いかもしれないな」
「その場合、四人パーティとかの方が良いんだろうか。クリス、ダンジョンアタックは実際どんな感じなんだ？」

「んー、そうだね。普通、ダンジョンに潜るパーティってのは三つくらいに分けられるかな。ダンジョン専門のギルドと言うか集まりと言うか、ある程度の集団から選抜して潜るところ。仲良しこよしの気の合うメンバーで潜るところ。役割分担で一期一会に寄せ集める場合もあるよ。大体四人くらいが主流だね。あんまり多いと分け前が減るから、前準備やリスクを考えるとメリットが薄れる場合もあるからパーティの方針次第ってところかな」

ふむ、そうなると前衛にカズマくんを置いて、ヒーラーにアクアさん、シーフにクリス、ウィザードにゆんゆん辺りが丁度良いか？
私が入るとカズマくんのスキルアップにならないからな。

最初の一度二度くらいは付いて行っても良いが、最後までおんぶに抱っこはカズマくんにも勘弁して欲しいだろうしな。

「HEYバニル、アルカンレティア周辺のダンジョンを教えてください」

『契約者殿の記憶にある薄い万能機器に備わった人工知能のような扱
いをしよってからに……。北側の山脈の浅い所に一つ、東側にある用
水路の集合地点の一つ、少し南東に離れた森の中に隠された所に一つ
だ』

「サンキューバニル。助かるよ」

「いや、私の前で普通に悪魔と交信しないでよ……」

虚空に呟くようにバニルに契約のパスを通じて問い掛ければ確か
な情報が返って来た。

それをクリスが何とも言えない表情で非難する瞳を此方に向けて
いた。

仕方が無いだろう、便利なんだものバニル。対価もきっちり契約
書で結んだから騙して悪いがをさせない仕様だし。

後で此方の冒険者ギルドでダンジョンの情報を集めてみようか。

ダンジョン専用の施設もあつたりする街はあるが、何処そのハーレ
ムを目指すダンジョン産業が盛んな都市でもない限りは設立されて
いない事が多い。

一応危険性から冒険者ギルドが入口を預かっている事が多いので、
それっぽい施設が無い街はギルドに尋ねるのがセオリーだ。

「旅館でゆつくりして、飽きてきたらダンジョンに向かうのも良いか
も知れないな。最初は全員で行ってみて、二手に分かれてダンジョン
アタックするのも面白そうだ。安心しろめぐみん、私のパーティに入
れておくからな」

「流石ですおんおん！ 爆裂しかできない私ですがそれを理由に置いて
けぼりにされるのはちよつと心にクるので……」

カズマくん、アクアさん、クリス、ゆんゆんのチームに分けるとな
ると、此方は私、めぐみん、ララ、ウィズさんか。

なんか割とバランス良く分かれたな。此方は魔法ユーザーが多い
が私が前衛を張れば良い話だしな。

最悪ベルディアを召喚すれば良いし。

何処かでベルディアが大きなくしゃみをした気がするが、まあ、良
いか。

「そう言えば、ウイズさんはまだ寝てるのか？」

「ん？　そういやすつかり忘れてたけど居ましたね。ええと、何と云うか、棺桶に安置されている死体って感じで寝てますね……、ぐっすり」と

「……一服盛られている可能性が出てきたな。まあ、いいか。そろそろ予約させてた旅館に着くから各々準備しておいてくれ」

後ろからはーいと言う暢気な返事が返って来る。

修学旅行の引率か、だなんて思ってしまったくらいにゆるい雰囲気である。

ええと、確かゼスタが言うにはアクシズ教会から見て斜め右にある所の……、ああこれか。

老舗旅館『出炉利庵』と木製の看板に達筆な文字で書かれたそれを見て困惑した私とカズマくん。

漢字の上に此方の文字でルビが振られており、漢字が分からなくてもデロリアンと読めてしまう。

見た感じ熱海とか箱根とかにありそうな木造建築の老舗っぽい旅館なのにタイムマシン染みた名前を何故付けたんだ。

今私は違和感無く受け入れてしまったが、そもそも木造建築の和風の時点で珍しい。

そこらにある温泉宿は洋風な面構えをしているのに此処だけが木造だなんて確実に日本人の手が入ってるだろ。

庭に飾られている立派な松の木や桜っぽい木々が私の憶測を裏付ける証拠だ。

「おいでやすー、遠路遙々とお疲れ様でございました。ご予約のアクシズ教聖母様の団体様でございますね」

と、着物美人にお出迎えを受けたのだった。

何で和風旅館におかしな名前を付けたんだ、うちの里みみたいな詐欺染みたセンスしやがってからに……。

女将に連れられて四人部屋と二人部屋二つに案内される。

私、ララ、めぐみん、クリス。一階、四人部屋。

ゆんゆん、ウイズさん。一階、四人部屋の隣の二人部屋。

カズマくん、アクアさん。二階、二人部屋。

と言う感じで分けて貰った。

元々四人部屋と二人部屋の両隣の所を予約してくれていたようだが、急遽取った結果少し離れてしまったらしい。

いやー、何て言う不運だー（棒読み）。

まあ、本当の所は予備として一応取っておいた所が離れていたと言っただけでそう言う意図は無かったらしい。

そもそも、六人で来る予定だったしな、増えたのは確実にこっちの理由であるし同じ旅館であるだけ有難いと言う話だ。

「あの、……あの、なんで、俺とアクア離れてるんですかね……？」

「それはだな……」

カズマくんがしどろもどろと言った様子で小さな声で尋ねてきたので、普通に人数の関係で離れただけだと伝えた。

そ、そうすか、とカズマくんが頬を赤らめて黙り込んでしまったのでニヤニヤとしておいた。

「ああ、そうだった。カズマくん。これをやろう」

「へ？ この意味深な箱はいつたい……」

「使い切っても良いからな。避妊はしっかりしておくんだぞ」

「ブホアッ!? ま、まさかこれって……、うわあ、うわあ……」

バニルに取り寄せて貰った何処ぞの勇者候補が作っていたらしい物を入れた木箱を押し付けておいた。

完全に顔を真っ赤にしたカズマくんが気まずそうに私を見たので、サムズアップと良い笑顔で返してやったら撃沈していた。

お膳立てはこれぐらいで良いだろう。あんまりやると初心な感じで空回りしそうだから悪ノリはこれぐらいにしておく。

「んで、真面目な助言だが聞いておくか？」

「……………はい」

「相手の事を気遣うのも良いが、相手の覚悟を蔑ろにする選択肢は取っちゃ駄目だ。軽々しく約束とかしちやだめだし、見通しの無い言葉は使うな。君たちの歩幅に合った歩み寄りをするべきだ。相手が元女神だとか、人間じゃないとか理由にしちや駄目だからな。分かつ

ていると思うが、気の利いた言葉よりも君自身の言葉の方がよっぽど良い口説き文句になる。惚れちまったんだ、後はもう流れに任せて抱き締めておけ。爪も切っておけよ、深爪気味でやすり掛けも忘れるな」

「う、うつつ」

受け取った木箱をこっそりと仕舞い込んだカズマくんの背中を軽く叩いて気合を入れておく。

いやあ、どう転がるかは分からないが数日くらいで面白そうな光景が見れそうだな。

……風の噂で聞いたがカズマくん私に惚れかかってたらしいからな。

これくらいのお節介とフォローはしてやつても罰は当たらないだろう。

願わくばより良い関係を築いてくれると嬉しいんだけどな。

こればかりは当人の想いだからな、外野がどんちゃん騒ぐもんじゃないしな。

ウイズさんを複数人で部屋に運び入れ……、これ傍目から見たら拉致監禁現場に見えるな、と思いつつ布団に寝かしておく。

流石に可哀想だから夕飯の時には起こしてあげよう。

「にしても……、割かし良い旅館だな。名前はアレだが」

「そうなんですか？ デロリアンだなんてお洒落な名前だと思ったんですけども」

「……こつちの世界で大人気だった映画に出てくるタイムマシンみたいな乗り物の名前なんだが」

「……勇者候補の誰かが作ったんじゃないですか？」

「そうだろうな……」

「ふむ、窓から見える景色も凄いで。何処か静けさを感じられる庭園だな。石と砂でこうも見事な模様を描けるとは……」

「だねー。すっごいよね。金銀宝石を使ってるような贅沢な物じゃないのに凄く綺麗に感じるよ」

対面する椅子の置かれた奥手の場所から見える窓の景色は綺麗な

枯山水を見てララとクリスが感嘆の声を漏らしていた。

後ろから見やれば成程、確かに見事なものだった。

旅館の経営者の息子や娘だったりした人が勇者候補として呼ばれたのだろうか。

それとも単純にホームシックならぬワールドシックに陥り、日本の風情ある雅恋しきでこの旅館を作ったのだろうか。

……まあ、日本に戻りたいかと言えば、悩む人も多いだろうな。

そういう人にとってこういう日本的和風な生活を彷彿させる場所は正しく心のオアシスになり得たのだろう。

水が綺麗で多量にある上に温泉もあるアルカンレティアだからこそ実現できた場所なんだろうな。

そう考えると微妙な旅館の名前もくすりと一笑い取るための小粋なネタだったのかもしれない。

「……おんおん？」

そうぼんやりと枯山水を眺めていた私をめぐみんなが心配そうに声掛けた。

……私は日本に戻りたいとは思わないな。

確かに科学製品や娯楽に困らない近代的な生活は今思えば贅沢な物だったし、ゲームやネットの無い世界は寂しさを感じる。

しかし、その寂しさを埋めるようにめぐみんやララ、クリスと言った繋がりを強く感じるのだ。

隣に来ためぐみんをぬいぐるみの様に懐に抱き留め、肩に顎を乗せて枯山水を眺める。

戸惑った様子を感じたが、やがてされるがままに諦めためぐみんを抱き締めておく。

……ぶっちゃけ、可愛い女の子をハーレムしているようなもんだし、帰る理由も義理も無いんだよなあ。

割と本気でこの世界に骨を埋めて良いと思っっている今日この頃。

魔王を倒して報酬を貰ったとして、その報酬を地球への帰還にはしないだろうなあ。

仮にめぐみんやララを彼方に一緒に渡航できたとして、その暮らし

は容易なものではない。

今ある生活って宝くじを当てたようなもんだしな。

魔王軍幹部を倒した戦績だつてこの世界では一握りな名誉である訳だし。

めぐみんの首元に鼻を当ててめぐ吸いをしつつ、枯山水の景色を楽しむ。

「いやあの、流石に恥ずかしいんですけど、おんおん？　おーい、おんおん……？」

何やら顔を真っ赤にしてめぐみんが無駄な抵抗をしているが、手放そうとはしてやらない。

……ふう、最近はこう言う事してなかったからな、少し落ち着いた。

「折角温泉旅館に来たんだし、夕飯の前に一度温泉に行つておこうか」

「あの、無視ですか、あのあの……。はあ。嫌では無いですけども、むうう……」

「まあまあ、おんおんも思うところがあるんだろう。一番馴染みのめぐみんを選んでいるのが理由だろうしな」

「使い慣れた毛布みたいなの？　嗅ぎ慣れた匂いって安心するしね」

「うううう……」

ララたちのフォローに顔真っ赤にしつつ、めぐみんはついに抵抗を諦めたのだつた。

さーて、温泉に行く準備でもしておこうか。

めぐ吸いをして気力も回復した事だし、今度は温泉で体力を回復せねば。

めぐみんを手放し、押し入れを開くと木箱に仕舞われた浴衣やタオルなどを発見する。

うーむ、見事に日本の旅館だなあ。そう言えば此方の方の温泉道あたりは浴衣を着た人が多かったな。

もしかすると此処を軸に温泉文化がアルカンレティアに広がったのかもしれないな。

温泉を使って旅館を作るだなんて考えが浮かぶのは正しく日本人だろうし。

他の考えだとローマのテルマエのように公共風呂場として使うだろうしな。

実際、アクセルにも公共風呂場があるように衛生に気を遣った街造りはこの世界では一般的だ。

風呂場付きの宿屋も多い事から衛生に対する考えを広めた誰かが居たはずだ。

その勇者候補及び先駆者には感謝しておきたいものだ。

そう内心独り言ちて自己完結して心の安寧を取り戻しておく。

折角の温泉旅行だ、楽しまなくては損だしな。

……後日襲来するであろう魔王軍幹部との邂逅を現実逃避で忘れつつ、温泉に思いを馳せるのだった。

39話

「それではお部屋の方へ案内致しますねえ」

「……………」

どうしてこうなったかは分からない、分からないのだが、ただ一つ言えるのであれば師匠に謀られたのだと思う。

師匠曰く、クリスとウイズの分が増えた事により予備に取っていた部屋を俺たちに当てがったとの事だが、本当だろうか。

懐に仕舞い込んだ精神的に重く感じる木箱の存在が俺の純情な心を押し潰すかのような圧迫感を感じる。

俺とアクアは師匠たちとは違い二階の部屋に案内されていた。

それも豪華な事に角部屋で、聞く話によれば隣の二つは客が入っていないらしい。

何と言うか、仕込まれた痕跡がありありの感じに作為を強く感じる。

「では、ぐゅっくりとお寛ぎくださいませ」

綺麗な着物美人女将に連れられた部屋はよくある日本の旅館のそれにはしか見えない。

玄関口に取り残された俺たちの間には、何か、こう、気まずさと恥ずかしさ、そして何とも言えない雰囲気か漂っていた。

「……………」と、取り敢えず中入るか」

「そ、そうね。そうしましょ」

蘇る小学校の時の林間学校の想い出。

ペアになった子が見知らぬ女の子で、お互いにどう接して良いか分からないが取り敢えずレクリエーションに向かう時のシチュに似ていた。

…………隣に居るのはアクアだぞ？ ああ、気心知れて酒乱のお気楽元女神のあっぱらばーだぞ？

……………何でこんな緊張してるんだ俺は。そして、こいつも。

……………でもまあ、期待してしまうのも仕方が無いだろう、シチュ的に、雰囲気的に。

畳の部屋に郷愁を感じながら俺たちは荷物を押し入れ近くを下ろし、馬車の疲れを取るべく向かい合って座布団に座り込む。

数秒、いや、数分に感じられてしまった沈黙。

どうも気恥ずかしく、そしてやけに相手の事を意識してしまう悪循環に陥っていた。

そ、そうだ。こういう時はお茶を飲もう。

そう思い魔導ポットの中に『クリエイトウォーター』で水を入れ、スITCHを入れる。

逆さまに置かれた湯飲みを二つ机に置いて、備え付けのお茶っぼい粉末を一匙二匙と適量を入れていく。

数分後沸いたお湯を注ぎ入れて二人してずずと飲んで、ぷはあと一息吐いた。

「ぷっ、くふふ、あはははははっ」

そして、同じタイミングで顔を見合して笑いが込み上げてしまった。

「ふふっ、なんでこんなに意識してたのかしらね」

「いや、本当にな」

「こういうのがアレなんでしょ。和の寂び詫びって言う奴」

「まあ、そうだな。と言うか俺も旅館なんて行った事無いからイメージでしかないな」

「元ヒキニートだもんね、カズマ」

「その言い方は止めろって言ったらろうが」

「ごめんごめん、もう言わないわ」

まったりとした雰囲気が続く。お茶の御かげだろうか、程良い渋みと深みのある味が落ち着かせてくれたのかもしれない。

はふう、と一息吐いたアクアの仕草が何処か色っぽく感じて、つい意識してしまう。

懐の木箱のせいかな、それとも、薄々感じていた距離感の近さのせいだろうか。

……まあ、多分、これが正解なんだろうな。

俺はアクアを女として意識している、のだと思っ。

恋人なんて居なかったし、唯一付き合いのあった女友達も幼馴染のあいつしか居なかった。

子供の頃に結婚の約束をする、そんなベタな関係だったが段々と趣味嗜好の違いから、男女の思春期の差異から、つるむ事も少なくなつて……。

で、挙句の果てがアレだ。

不良の先輩と楽しそうにバイクに二ケツするあいつの姿を見て、裏切られた気持ちになって……。

シヨツクのあまり引き籠つた俺は女性をそう言う対象に見るのを止めていた。

出逢つた初めの頃にアクアに対して強気に出られていたのもそのせいだ。

マクロ的に見た人間、男女の二種類の内の女性側、そんな割り振られた記号を見るかのように俺は区別をしていたんだと思う。

だから、日々を隣で過ごすにつれてアクアの事を知って……。

どんな時に笑つて、どんな時に泣いて、何をしたら喜んで、何をしたら悲しむのか、そんなアクアの一面を一つ一つ知つて行つた事で俺は、漸く一人の女性として認識できたんだと思う。

星の教程は居るであろう人間の女性としてではなく、元女神でポンコツな可愛いアクアとして見れたんだと思う。

本当の意味で気心を知れる仲と言うやつになったのだろう。

俺もまだ十六歳であるし、青春は後半気味だが謳歌していてもおかしくはない筈だ。

「にしても、時間が経つのは早いわね」

「と、言うとは？」

「ほら、私がカズマに貰われてから半年が経つ頃じゃない？」

「……もうそんなに経つてたのか。なんか、あつと言う間だったな」

「でしょ？ 私も、そう思ってたのよ」

湯飲みを机に置いてはふうと垂れ元女神になったアクアは楽しそうにころころと笑う笑顔を魅せた。

俺はそんな、らしい笑顔に見惚れてしまって、気恥ずかしさを誤魔

化すために湯飲みを傾けた。

アクアはそんな俺を見てチエシヤ猫のようににんまりと笑うと心底嬉しそうにしていた。

「正直な話、下界に拉致られた時はカズマに怒り心頭だったのよ。折角あり付けた楽な仕事を取り上げられて、なーんでこんな冴えない男を支えなきゃならないのかーって」

「そりゃあ……、悪かったな」

「ふふつ、今はそんな事思っただけ。天界はね、何も無いの。あるのは天国のような作られた安寧だけ。楽しい事って言うのが知れた同僚と駄弁ったりするぐらい。まあ、そう言う風に作られた経緯はあるんだけど、結局は我らが主となる創造神様の手駒の一つに過ぎないわけ」

やってらんないわ、と湯飲みにお茶をおかわりしたアクアは自棄酒を飲むかのように中身を啜った。

「あの場所に居た時はそんな事も思いもしなかった。ただ、ただただ、言われた事をして褒められもしない仕事を続けるだけの毎日。ビッグになるう、と思っただけと違って情性で生きてた気がするわね。……だから、カズマには感謝してるのよ。退屈な毎日を吹き飛ばすような楽しさが下界にはあった。そして、慣れずに色々やらかす私を貴方は笑って許してくれて、一人の隣人として見てくれた。……こんなんでも元は付くけど女神なのよ、私。エリートだった訳よ。それがまあ、ふふつ、こんな人間染みた生活に慣れ親しむだなんて思いもしなかった」

アクアの顔は心底嬉しそうで楽し気な雰囲気を感じていた。

今の生活が楽しくて仕方が無い、もつと遊びたいと言う子供染みた笑顔を魅せていた。

俺はそんなアクアの無邪気な笑顔に見惚れていて、ああ、惚れた弱みってのはこう言う事を言うんだらうな、と納得してしまった。

「だからね、カズマ。ありがとう。貴方が天界から連れ出してくれた事で私は今、すっごく楽しいの。本当に、ありがとう」

「お、おう……」

始まりは売り言葉に買い言葉、単なる嫌がらせでしか無かったけれども、こうして気の合う仲間になった今がある。

気恥ずかしさから絞り出した言葉は照れが多量に含まれてどもつてしまった。

そんな様子をアクアはからからと笑い、嬉しそうにしていた。

「俺も正直、最初の頃は何て女だ、だなんて思ってたけど。師匠が助言してくれたように、アクアもこの下界に馴染むために頑張ってたもんな。俺は慣れない環境で頑張るお前を見て、俺も頑張らなくちゃ、だなんて思ってたんだ。だから、そんな風に思ってたくれた事が嬉しいよ。ほんと、此方こそありがとうって感じだ」

「なあにそれ、……ふふふ。何か、心の奥に置いてたのを吐き出したら楽になっちゃった」

「そっか」

「なによ、つれないわね」

拗ねた顔で机に頬を付けて半睨みするアクアに慌てて弁解をする。ぶつちやけ、異世界に来てテンションが上がってたから正直そんなに嫌ってはいなかったしな。

と言うよりもあの頃はアクアをゲームのチュートリアル妖精みたいな感じで見てたからな……、ポンコツだったけども。

「いや、その、……正直、俺は転生の特典にアクアを選んで良かったって思ってるからさ。俺にしてもこの世界はアウェイな場所だし、気が知れた……って言うのもアレだが、初めからついて来てくれる奴が居てくれて本当に心が楽だったんだ。だから、ぶつちやけると馬小屋で寝たあの日からもうアクアの事を友人ってか、仲間だと思ってた」

「ふ、ふうーん……、そっか。ならまあ、いつか。こんな美少女を隣にくーすか寝てたもんね」

「それはお前も同じだろうが。お互いにお互いを意識してなかった訳だしな。……ぶつちやけ、外に出て仕事する生活に慣れなかったから疲れてくれたばってただけな気がするけどな」

「……そうね。私もある意味事務作業だから身体を動かして仕事するのは新鮮だったわ」

「だろうな。薄着で跳ねまわるお前を見て色々と企む奴らを押さえるの大変だったんだからな」

「え、なにそれ知らない、初耳なんだけど」
「あつ」

そう、アクアはおっぱいもお尻も大きい美人であり、酒癖が悪いがそれ以外は活発な女友達系の美少女だった。

そんなアクアがTシャツ一枚で汗水垂らしてバインバインと大きな胸を動かしながら仕事していたら、そりゃあそういう事を考える奴が出てくる訳で。

やけに絡んでは酒を飲ませようとする輩が何人か居たので、裏で俺の彼女だから手を出すなと嘘を付いて釘を刺していたのだ。

全く持つて下心の無いお節介だったのだが、馬小屋で一緒に寝ていると言う事実もあった事からそいつらは割とあつさりと諦めてくれた。

……どちらかと言うとアクアに絡んだ結果、逆に酔い潰される側だったから諦めたように感じたが。

段々とアクアのポンコツさ、残念美人さを知ってむしろ同情される感じになった訳だ。

それがアクアの良さなのにな、見る目の無い奴らだと徐々に酒に耐性が付いていく中で思ったもんだ。

こいつの良さは人並み外れた慈愛の精神だ。

相手を暗くさせないようにと明るく振舞って精神面を引き上げて。無自覚な煽情的な恰好と活発さで程良い色気と気力を盛り上げて。それとなく隣に居ても不愉快にさせない雰囲気で寄り添って。

そして、誰もが見惚れるような笑顔で心地良い関係を築き上げる。成程、一つの宗教として讃えられる訳だ。

ポジティブシンキングの権化とも称せるアクアを担ぎ上げたアクシズ教はそう言う内面を感じ取っていたんだろうな。

「……ま、まあ、確かに私の豊満なおっぱいに視線が向かってるのは気が付いてたけど、そう言えばいつしかそう言う視線減ったわね。おんおんちゃんが加入した頃だったかしらね」

「師匠が割と規格外な存在だったからな。強者でありながら接し方が気心知れた親しい先輩みたいな感じで付き合っても良かったし、何より共同で依頼をするスタイルだったのが良かったんだろうな。……前衛も中衛も後衛も出来て、唯一できないのは回復ぐらいだろうし、オールラウンダーの頼れる助っ人として認知されてたみたいだし」

「凄いわよねえ。あんなにちっちゃいのに凄く頼られてるもの」

「実年齢が十三歳だしな師匠……。中身は分からんけどもそこまで歳喰ってる感じじゃないしな」

ちらりとアクアを見るもふるふると首を振られる。

成程、流石にコンプライアンスと言うかプライバシーに関わる所はしっかりとっているらしい。

湯飲みのお茶を口に流し込んで一息吐く。

アクアも飲み終えたようでおかわりを淹れようかと動いたらその手を掴まれて抑えられた。

「……ね、ねえ、カズマ。さっきこっそり女将さんに言われたんだけど」

「お、おう、何言われたんだ？」

「その、家族風呂って場所を貸し切りにしてるんだって。他のお客さんが入らない様にしてる所みたいで……」

「へ？」

「ほら、この街ってアクシズ教の総本山じゃない？ だから、聖母扱いされてるおんおんちゃんや元女神の私に色々配慮してくれてるみたいなの。所謂サービスと言うやつね。その一環として、私たちが滞在している間は家族風呂を優先的に貸してくれるんだって」

俺の手をにぎにぎと忙しなく握り締めながら、胸元に手を当てながらそわそわとアクアが此方を見つめる。

赤らめた頬、掌から伝わる体温の高さ、そして、何処か期待を込めた強い瞳。

……もしかして、アクアも同じことを考えていた、のか？

「でね。背中流してあげるから、家族風呂、行かない？」

「行く」

思わず即答していた。

そんな前のめりな俺の様子にアクアはホツとした様子で安堵して
いて、その心情が手に取るように分かる。

そっかあ、アクアも同じ気持ちだったのか。

俺と同じで自分の好意を自覚していて、一歩踏み出すようなきつ
かけを作りたかったのだろう。

まあ、確かに混浴だなんて男から言うにはハードルが高いからな。

……もしかして、師匠の入れ知恵か？

何かボソリと、おんおんちゃんと言っていた展開通りね、だなんて
呟いてるし。

押し入れから二人分のサイズの合った浴衣を取り出して、お風呂
セツトを持った。

ドキドキと鼓動が静寂が広がる廊下に響き渡ってしまうかのよう
な感覚に陥りながら、そつと俺は勇気を出してアクアの左手を取っ
た。

思わず、と言った様子で此方を見たアクア。

そして、真つ赤になつた顔を隠すように若干顔を俯かせながら、受
け入れるようにきゅつと握り返された。

こ、こいつ俺を萌え殺す気か？ 小動物めいた可愛い仕草をしよつ
てからに……！

お風呂場のある一階に下りていき、一応気恥ずかしさから辺りを見
回すも運良く他のお客さんは居ないようだった。

女将さんから手渡されていたらしい鍵を使って家族風呂の暖簾の
掛かった扉を開き、防犯的な意味合いで施錠する。

遠くから若干香る温泉の匂いに少しテンションを上げながら、男女
別に分かれていない脱衣所を見て思わず顔を見合わせる。

「背中合わせになるように両端を使おう」

「そうね。そうしましょうか」

脳裏の師匠が肩を竦めて、ヘタレ、と呟いたが、流石に勘弁して欲
しい。

衣服を脱ぎながら、後ろから聞こえてくる衣擦れに両耳が集中して

しまう。

さつさと腰にタオルを巻いて、手拭いを持って風呂場に向かうために横を向いた。

そして、ちらりと無意識に視界の端に映ったアクアを見てしまった。

……ボン、キュツ、ボン、そんな擬音が聞こえてくるような絶世のプロポーションがそこにはあった。

ちようどタオルを巻く作業だったようで、すぐに見えなくなってしまうが脳内フォルダにしっかりと仕舞い込んだ。

そして、『潜伏』を一瞬だけ使ってその隙に顔を前に戻し、先に行ってるぞー、と声を掛けた。

多分、バレていない筈。そんな心地で風呂場へと向かい、扉を開けた。

むわっと温泉の匂いが蒸気に乗って香り、木製の浴槽や壁の無い洗い場に何処か懐かしさを感じる。

「おお……、マジで温泉だ……。すげえ、此処異世界だよな……？」

「ほえー……、凄いわね。完全に日本の温泉じゃない」

「凄い完成度だよな。やっぱりこれ日本人の手が入ってるだろ」

「多分、そうじゃないかしら。転生者自体は結構昔から送ってるけど、日本人を送り始めたのは百年くらいで最近だし」

「へ？」

掛け湯をして、ゆつくりと湯舟に浸かった俺たちは世間話のように喋ってたのだが気になる事をアクアが言った。

「やっべ、と言う顔をしたアクアだったが、温泉のリラックス効果に負けたのか、まあいいか、と口を開いた。

「ん、あー……、その、オフレコにしてね？ この世界に元々魔王と呼ばれる存在は居たのよ。モンスターが進化して、と言う形でね。でも、とある転生者がひよんな事に魔王になっちゃって、この世界における魔王の在り方が変わっちゃったのよ。魔王ってモンスターの親玉みたいなものだから、野に散らばってた奴らを纏めて、今の魔王軍の形に統制しちゃったわけ。知性も付けちゃったもんだから魔王軍

はとつても強くなっちゃって、現地人が敗走する場面が増えたの。それからだつたかしら、後輩のエリスって子が居るんだけどその子は冥府に送る仕事をしてるんだけど、この世界に転生したくないって泣き出す人が増えちゃったみたいで問題になっちゃったのよ」

「なんでだ？ 所謂輪廻転生だろ？ 記憶とか真つ白にして送り出すんじゃないのか？」

「まあ、そうなんだけど……、この世界に戻りたくないって言う思いが極まっちゃったのか、その漂白の作業で壊れちゃう魂が増えちゃったのよ。負荷が高まり過ぎてパライーンって。ほら、洗つてる時に強く擦り過ぎちゃって繊維がほつれちゃう時があるでしょう？ あれと同じでほつれた部分から負荷が高まって魂が壊れちゃうの。そうすると元の形に戻せないから部分欠けた魂ができちゃうのよ。だから、それを直すために日本で死んだ人の魂をがっちゃんこして、余った部分を切り離して転生の特典として付与してるとって訳。だから、転生特典は天界製の逸品なんだけど無双する程の強さを持たないのよ」

「へ？ そうなのか」

その割にはあのミツルギ、だっけ？ あのハーレムナルシスト野郎は活躍してるみたいだけでも。

……あ、でも師匠みたいに魔王軍幹部を倒してる訳じゃないな。それだけすげえ武器だつたらもうとつくとくに魔王倒してるもんな。

「うん。だって、普通に生きてただけの現代人の魂が強い訳無いじゃない。それもしょーもない死に方や面白い死に方をするような人たちを転生させてるのよ？ 切れ味が凄いと、魂に付与するだけの作業だとか、結局簡単なものになっちゃうのよね」

「へえ、そうなのか。って事は、もしかしてアクアを連れてきた俺が一番の転生特典を持つてる事になるのか」

「まあ、そう言う事ね。私は致命傷も治せるし、何なら死んでも肉体があれば蘇生もできるわよ。回復に特化した転生特典って考えたら破格中の破格よ。だからまあ、一番良い物を選んだ、と言う意味ではカズマは正しかったわね」

「きつかけがちよつとアレだつたけどな……。でもまあ、今は選んで

正解だったって思ってるけどな。運が良かったぜ」

「だなんて言ったらアクアの顔が真っ赤に染まって視線を反らされた。」

「……いやまあ、一番良い女を選んだ俺ラッキーって言ったようなもんだしな。」

間違っちゃないんだけども、まあ、気恥ずかしいなあ……っ。

揃って顔を赤らめた俺たちは肩まで温泉に浸かって夕焼け空を見上げた。

「……待て。さつきしよーもない死に方や面白い死に方をした奴だけを転生させたって言った？」

「え？　まあ、そういう人たちって死んだ事を後悔しやすから送り易かったのよね。やり直せるチャンスがあれば飛び付くのも早かったし。他には見てて可哀想だなあって思った子や、二度目の生は幸せになって欲しいなって言う人とかを転生させてたわね」

そう慈愛の籠った笑顔を魅せたアクアだったが、俺はとんでもない事に気付いてしまった。

つまり、勇者候補を転生させても魔王が倒せなかった理由って、性能が微妙なRレアくらいな奴らを転生させてたからじゃねーの？

俺みたいに変な死に方をする奴ってのは大概社会不適合者だろうし、剣と魔法の争い事のある世界で大成する奴なんてほぼ居ないだろう。

可哀想な死に方をした奴はこの世界で幸せに生きようとするから魔王討伐に前向きな訳が無い。

前者の奴らが頑張ったとしても精々がSRぐらいが関の山だろうし、魔王軍幹部と戦って相打ちまでいければ良い方なのではなかろうか。

現に俺が仮にベルディアと戦ってたとして、師匠みたくにガチンコ勝負で勝てたかと言えば確実に無理だろう。

それこそ一握りの幸運を掴んで漸く勝った、ぐらいの勝運が必要な筈だ。

んで、師匠はアクアではなくアクアの部下によって転生されてい

る。

つまり、Rレア縛りから解放され、ちゃんとした相手を選んだ結果がUR師匠と言う結果な訳で。

アクアを転生特典として持っていく事を許された理由って、左遷的な意味合いも含んでいるんじゃないかね……。

これを言ってしまうとアクアが傷付きそうなので墓まで持つていく事にする。

「へ、へえ、良い事をしたなあ」

「えへへ、そうでしょ？ でも、皆アクシズ教には入ってくれなかったのよねえ。一応アレ、此方に送られて心細い勇者候補の人たちの支えになるだろうって気持ちで作ったんだけど。ちよつと変な方向に育っちゃったからかしらね」

「大分変な方向に向かってたんじゃねえかなあ……？」

師匠がテコ入れする前の噂は酷いものばかりだった。

悪徳宗教で洗脳教育とかみたいなのが社会の汚泥みたいな感じではなく、エリス教徒への軽犯罪（主にセクハラ）や執拗な勧誘行為、変態行為の正当化などのあっぱらばーなハジケっぷりだったらしい。

ある意味自由に生きてる集団だったそうだ。

今は、隣人を愛せ団結せよ尊き想いを胸に、だなんてスローガンがあるくらいの善良な団体になっているらしい。

よく笑い、よく泣き、よく遊び、よく働く。そんな健康的な宗教に変わっているとか。

そう考えるとこの世界における師匠の貢献度高いなあ……。

「まあ、だからおんおんちゃんには感謝してる訳よ。……あの娘の強さは大分無理をしている結果だしね」

「は？ ー としては師匠ピンピンしてるだろ」

「あのねー……、さつき言ったでしょ。あくまでも転生特典は魂の加工から余った物だって。だから強さをプラスに伸ばすには魂の強さがそれなりに必要なのよ。でも、おんおんちゃんの前世は普通にブラック企業で過労死した一般人に過ぎないの。ああ、だから……」

何かに気付いて納得するようにアクアは深い溜息を吐いた。

「多分、転生特典を改造してるのね。どっかの漫画でもあるでしょ、マインスの制約をする事でプラスの効果が強めてるのよ。だから呪いっぽく見えたのね。もしかしたら体の成長が微妙なものもそれが理由かもね。肉体値を削って魂に割り振ってるんだと思う。具体的な内容は分からないけど、その現象が露見していないと言う点を踏まえると……」

「……まさか、精神とか感情やら犠牲にしてる？」

ピンと来た俺の勘をそのまま口にするアキラは、多分ね、と頷いた。

目に見えない身体に宿るものとして典型的な代償候補だもんな。

もう背も胸も育たないだろう、だなんて事を前に酒場の席で言っていた気がする。

——私は死んでも灰になり、この篝火で蘇られる。

その言葉の裏にはそんな代償の背景があったのだろうか。

……そう言えば、あの頃か。師匠の女好きが加速したのって。

それまではめぐみんと、そしてララと肉体的にナニしてたんだろうけども、デストロイされてからそこに多分クリスも増えた。

そう言えば師匠の戦い方が大分物騒になってる気がするな。

てつきりベルディアの一件から近接戦闘の必要性を強く感じていたのかと思っただけでも、それにしても、それにしてもは依頼で外に出る機会が増えていたような……。

時折、出迎えた際に此方を見る視線が何処か鋭かったような……、気がする。

だが、それが何かしらの代償による弊害からくる精神的な変調であつたのならば。

「生への執着、死を感じ辛くなった……とかか？」

生きている事を実感したいから他人と肌を重ねて、死んでも生き返るからと死を恐れず好戦的になった。

そう、考えられやしないだろうか。

あくまで憶測であるが、人の性格ががらっと変わる事だなんて相当な何かが有つての事だ。

そんな劇的な事と言えばデストロイヤーの一件、一度目の死に他ならない、と俺の直感が囁いていた。

「……頑張らなくちゃな、俺も」

「……そうね。カズマも察してると思うけど、おんおんちゃんのあの特典は私の蘇生魔法が効くか分からない。死んだ瞬間に差し込めれば違うかもしれないけど、蘇りのプロセスが始まった後だと多分無理な気がするわ。蘇生魔法の条件が、ある程度損壊していない肉体がある、魂が天界の浄化作業に送られていない、蘇生する者に生き返る意思がある、とかなんだけど、おんおんちゃんの場合、死んだ瞬間にある篝火で蘇る術式が始まっちゃうのよね……。それも身体を灰にしてと言うプロセスが第一条件に引っ掛かっちゃう。身体が腐った状態で蘇生ができないように、灰になった身体を蘇生できるとは思えないわ」

「となると、致命傷に至る前に回復すれば良いんじゃないか？ あくまでも死がトリガーな訳だし」

「あ、それもそうね。んー。もうちよつと神格が取り戻せれば、俗に言う食い縛りみたいな加護をあげれたりするんだけど……」

「……そのためにアクシズ教を、信徒を増やせて？」

「まあ、そうなるわね。でも、良いんじゃない？」

アクアはいつものように朗らかな笑顔で俺に向き直って言った。

「おんおんちゃんが聖母としてアクシズ教を率いて、アクセルの一角にアクシズ教の教会を立ててカズマを神父に運営するつても。所謂魔王を倒した後の話って奴よ。私はカズマの転生特典だから、貴方が完全に死なない限りは下界に居られると思うの」

「……アクアは、その、……なんだ。俺と一緒に居てくれるのか？」

魔王を倒した後の話、そう前置きしたアクアの言葉に俺は不安の種を口にしていった。

それを聞いたアクアはぼかんとした後、くすくすと上品に笑ってからあはははと笑い声を上げた。

「もー、馬鹿なんだからカズマは。もう私の気持ち気付いてるんですよ？ ……それとも私の口から言わせるつもり？」

そう何処か色気のある表情で俺を揶揄うように肩を竦めた。

「すまん、ちよつとへたれた」

「分かっているわよ、カズマだもん」

「……ふう。なあ、アクア」

「うん、なあに？」

「結婚してくれ」

「うん、いいわよ」

瞬間、俺とアクアは瞬間湯沸かし器の如く顔を真っ赤にして驚愕の表情を浮かべていた。

今、完全に俺は口が滑って大分ぶっ飛んだ告白をして、そしてそれをアクアは即座に頷いてくれた。

付き合ってくれとか、恋人になつてくれだとか言おうとしていた筈なのに。

お互いに自然過ぎてどうにもならないくらいに過程をすっ飛ばしていた。

けど、まあ、結婚を前提にお付き合いをする、と言う意味でなら……。

お互いに訂正するつもりは無かったようで、そつと湯舟の中で俺たちは掌を重ねた。

温泉の温かさとは違った血の通う温かさと言うべきか、慣れ親しんだ心地良さと言うか、安心感があつた。

はふう、と二人して息を吐いて夜空を見上げた。

夕焼けを過ぎて夜に差ししかかった空に一番星が見え始める時間帯だった。

そして、丁度雲隠れしていたらしい綺麗な月が見えて……。

「月が綺麗だな」

「きつと一緒に見ているからよ」

だなんて文学的な雰囲気醸して見たりして、お互いに浮かんだ顔の熱さを誤魔化した。

俺たちの歩みはマイペースと言うよりも二人三脚で、ずっこけそうになる度にお互いに引っ張り上げたりしていくんだらう。

重ねた掌を少しだけ強く握れば、そつと握り返してくれた。

ああ、俺、こいつの事が好きなんだなあつて素直に感じられた。

これが恋を、愛を知るつて奴なのかね。

そんな事を思いながら、雰囲気のままに顔を近付かせてきたアキラに合わせて唇を重ねた。

胸の奥がじんわりと温まるような心地がして、今幸せだな、と灰色の青春を吹き飛ばすような春一番を感じていた。

40話

……ふむ、少し露骨過ぎるお節介だっただろうか。

そう思いながら女将に頼んでルームサービスとしてお酒をカズマくんの部屋に送っておく。

アクアさんに幾つか吹き込んでおいたし、最悪お酒の力を使って告白まで辿り着けると良いのだが。

「此方活きの良いスズキとサトウが入りましたのでお刺身に。此方は季節の野菜とヤマダの天ぷらになります」

この旅館の夕飯は部屋に配膳されてくるタイプらしく、川魚がメインの懐石風の品々が机に並んでいく。

ちよいちよい人名の苗字みたいな名前が入るが、川魚の名前であるらしい。

確実に新発見の生き物に名前を付けるノリで付けたろそれ……。

アルカンレティアの近くに綺麗な湖があり、水路の源泉であるそこで漁をしているとの事だった。

詫び寂びを感じる趣のある日本旅館のTHEE夕飯と言った感じで盛り付けられた机に私たちのテンションが爆上がりである。

特に食いしん坊なめぐみんは瞳をこれでもかと輝かせて食事の挨拶を待っている始末だ。

「……なあ、おんおん。魚を生で食べても問題無いのか?」

けれども日本食に馴染みの無いララは刺身を見て何とも微妙な表情を浮かべていた。

まあ、基本的にこの世界の食事情はヨーロッパ寄りだし、アジア系の食事を見て不安になるのも仕方が無いか。

スズキの刺身を一枚箸で持ち上げて裏表を見やるが、寄生虫の類は居ないように見える。

魚の寄生虫の代表格は糸の様な半透明の姿をしたアニサキスだろう。

生きたまま胃袋に入ると胃酸から逃げるために食らいつくため高確率で食中毒などを引き起こす。

見た所存在が確認できないので問題無いだろう、と判断するのは実は危険だ。

動物や魚の生態における見えない危険性、生物濃縮の可能性は捨てきれない。

蚯蚓を小動物が、小動物を鳥が、鳥を大型生物が、大型生物を人間が、と言う形で食物連鎖が起きる。

生物濃縮と言うのは最初の部分に汚染物質などの危険性のある物質を蚯蚓などが食す事により、身体が大きくなるにつれて食べる量が増えるため比例して危険物質の量も増えていく。

そのため、人間が食す大型生物にたつぷりと危険物質が集まっているとそれが原因で病気などを引き起こす。

生牡蠣のノロウイルス被害なんかが一般的なものだろうな。

こればかりは肉眼で視認する事ができないので精密機器の無いこの世界においては完全なグレーゾーンだ。

ただまあ、アルカンレティアにおける川魚の普及傾向を見るに問題は無いと言つて良いだろう。

「うむ、問題無いと思うぞ。実際、前世の故郷では普通に魚を生で食っていたし。寄生虫の類も見えないから安心して食べて良いぞ」

「ふ、ふむ、そうか……」

「なんだ、不安か？ 仕方が無いな……どれどれ、一枚、二枚、三枚……、うむ、問題無いな。刺身はこの醤油に身を付けてから食べるんだ。あーん」

「あ、あーん……。んつ、もぐ、もぐ、もぐ……。焼いたり蒸したりした魚と違って弾力が凄いな。ふむ、付け合わせのこの白い……米だったか、ふむ……。合うな……」

「ふふふ、日本食は実は割と家で出していたりするぞ。肉じゃがとか揚げ物とかな」

「んー……。美味しいですつ！ けどまあおんおんの手料理には負けますけどね」

「嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

ちらちらと視界の端で私に向ける視線で圧を掛けるクリスに曖昧

に領いておく。

確かにクリスマスには手料理を振舞った事無いからな、適当な理由を付けて家に来るが良いさ。

それにしてもこの旅館の和食は良いな。味付けが完全に日本人が好むそれであり、明確な理由があつて継承されているように思える。

……ふむ、良いな此処。

先程食事を持って来てくれた女将さんがこの旅館の成り立ちを話してくれたのだが、何でもこの旅館を建てた初代はさすらいのガレキ職人を称する青年と意気投合し、彼が話す故郷を模して此処を作つたらしい。

なあ、まさかと思うが、そのガレキ職人うちの里のご神体だなんてアホみたいな感じに収まっている猫耳セーラースク水少女フィギュアを作つた奴じゃなからうな。

何をとち狂つたのかうちの里には美少女フィギュアを奉納する神社がある。

紅魔族のご先祖が旅人を救つた時にお礼として貰つた御神体だそうだが、明らかに布教の意味で渡したろそれ。

この旅館の入り口に着物美人な美少女フィギュアがショーケースに入れられ飾られている事から同一人物である可能性が非常に高い。

まあ、この旅館を作つてくれたきつかけにはなつたらしいから少しくらいは敬意を払っておく事にしよう。

「ふう、堪能しました……。個人的にヤマダの天ぷらが美味しかったですね」

「うむ、身がみっちりとしていた濃厚な味だったな」

「私は暴れ猪の小鍋が好きだな。やはり牡丹鍋は良いな」

「王都に牡丹鍋のお店あつた気がするなあ、今度行つてみる？」

紅魔の里の近くにも出没する暴れ猪は割と生息範囲が広い。

名前の通り、暴れん坊を称する暴れ猪はその突進力に全てを賭けていると言っても良いアホモンスターだ。

一直線に突進し、樹木などの障害物を気にせずにつつかりまくり、額を鍛えて成長する猪型のモンスターである。

そのため、時には同族でぶつかり合い、果てには交尾しながらぶつかつていく習性がある。

一にぶつかり、二にぶつかり、三四もぶつかり、五もぶつかり、と言う頭ぶつかりな害獣でもある。

成長した個体は大木を押し折る程の威力を持つてぶつかりに来るため非常に危険であり、討伐もタンク役が居ないと敵わないと専らの噂だ。

そのため、地中にしつかり埋めた金属製の罠を仕掛け、それにぶつかってモズの早贄の如く串刺しになっている奴を仕留めるのがセオリーだ。

里に居た頃は仕掛けるだけで勝手に掛かってくれるから手間が掛からず非常に重宝した。

基本的に肉質は猪のそれなので、煮込み料理に抜群の相性を魅せてくれる。

煮込めば煮込む程柔らかく、そして濃厚な脂を楽しめる素晴らしい食材だった。

「前にアルカンレティアに来た時にも入りましたが、温泉楽しみですね！」

「ああ、そうだな。源泉は同じとは言え見栄えが違々と心地も変わってくるものだからな」

夕飯を終えて料理の片付けを手配してから私たちは浴衣姿でお風呂場へと歩いて行く。

温泉旅館の醍醐味である温泉に期待を膨らませながら、お姉さんに先導されるロリーズみたいな雰囲気私達は歩いていった。

いやあ、浴衣姿のララが非常に煽情的でドキドキしてしまうな。

髪を下ろした姿はベッドで何度も見ているが、こうして公の場で見るとなるとまた趣が変わってくる。

身体のリインが鮮明に分かってしまう浴衣であるため、そのたゆんたゆんで豊満な胸の大きさや安産型のお尻などが浮き彫りになる。

他の客が居れば誰もが二度見する浴衣美人として注目を受けていた事だろう。

だが、ゼスタがこの旅館のオーナーと旧友であるらしく一週間貸し切りにしてくれた事で他の客はシャットアウトされている。

……カズマくんに嘘の説明をしたな、だって？ ふふふ、騙される方が悪いのだよ。

と言うのは冗談で、カズマくとアクアさんを一室に、それも別の階に追いやるのが貸し切りの条件だったので仕方が無い、仕方が無いんだ……！

とまあ、出来レースを思い返しながら風呂場の暖簾の掛かった場所へと差し掛かると見覚えのある二人組が居た。

どたぶんと浴衣が故に分かるドスケベボディを晒すウイズさんとたゆんたゆんなゆんゆんであった。

「あ、めぐみんたちもお風呂に来たんだね」

「すみません、急な参加をしてしまって。なるべくご迷惑にならぬように日陰に居ますので、宜しくお願いします」

「あー、うん。そんなに畏まらなくて良いぞウイズさん。元々バニルから打診は受けていたんだ。日頃の疲れを癒してくればそれで良いさ」

「ありがとうございます。実は私、温泉が大好きなので一見さんお断りのこの旅館は少し楽しみにしていたんです」

「と、言うところ？」

「あれ、知らなかったんですか？ この旅館はアルカンレティアにおいても格式とお値段の高い最高級旅館ですよ」

「わあお、凄い所に居たんですね私たち……」

道理で食事のレベルが高い訳だ。女将さんの上品な所作もそこらへんが関係するのだろう。

にしても……、この面子で入るとなると景色が凄い事になるな。

ララとウイズさんとゆんゆんで山脈ができてしまっているぞ。

こっちは断崖絶壁な崖だけだな！ ミステリードラマの最後の場所めいた！

止めよう、言っていて少し虚しくなった。

私の雰囲気感化されたのか、めぐみんとクリスも少し遠い表情を

していた。

女性用の赤い暖簾を越えて脱衣所へと向かうと檜の良い香りが漂っていた。

思い思いに竹籠に浴衣を脱いで肢体を晒していく最中、私は少し遅めに脱いでいた。

……うむ、眼福である。肌色パラダイスだ。絶景かな絶景かな……。

ウイズさん、ララ、ゆんゆん、私、めぐみん、クリスと言った具合だろうか、何の順番かは言うまでもないだろう。

「あの、おんおんの視線が凄いえっちなんですけど……」

「仕方あるまい、えっちなものはえっちなんだから。全く持ってドスケベボディだな、けしからん」

「そこで羨ましいにならないあたりおんおんはほんとブレないね……。いやまあ、中身考えたらそうなんだけどさ」

必然的にプロポーシヨンによる同族意識と言うべきか、私の隣にめぐみんとクリスが集まる。

堂々と身体を晒す勇ましきにつられてカララの隣にウイズさんとゆんゆんが寄り添う形になった。

殆ど身内であるためか手拭い程度でお風呂場へ向かう私たちに対し、唯一部外者感覚のウイズさんだけが身にタオルを巻いていた。

……うむ、素晴らしいドスケベボディだ。確かにリッチって腐ってない死体なんだっけか。

言うなればフレッシュミート、死にたての状態で身体が保存されているためか死体特有の臭いがしないらしい。

リッチはあくまで変質した魂がメインであるため、外付けの肉である身体はおまけに過ぎない。

肉体を持ったゴーストタイプ、とでも言えば分かりやすいだろうか。

血が通っていないためか色白であり、その肌は冷たいものだ。

けれども生前の肉体美をそのまま残している事から非常にえっちな姿である。

これで子持ちでないのだからきつと高嶺の華の存在だったのだらうな、生前のウイズさんは。

「ふう……、ああ……、良いなこれは。身体が溶けていく心地だ」「そうですねえ……、肩こりとか酷いですから気持ち良いですう……」「わあ、これが檜風呂なんですね。以前読んだ事がありますが、こうして入る事ができるだなんて……感無量です」

大きい組と小さい組とで対面して座るように温泉に入ったが故に、私たちは目の前でお湯に浮かぶ六つの物体に釘付けだった。

ちらり、ちらりと左右を見る。浮かぶものの無い私たちの視線は遮るものが無くすつと通り過ぎた。

……おっぱいがお湯に浮かぶのって本当だったんだなあ、と感慨深くその光景を目に焼き付ける。

むう、とそんな私の様子を見てめぐみんが唸り、私の右手を取ってぎゅつと恋人繋ぎにした。

白く濁るお湯のおかげでそれは私たち二人だけの秘密であり、可愛いらしい行動に私は胸をやられた。

私が胸の大ききでめぐみんを蔑ろにする訳ないだろうに、まったくもう、可愛い奴め。

ぎゅつと握るとぎゅつと返ってくる可愛い掌で遊びながら、私は背を縁に任せて息を吐いた。

ああ……、温泉最高、ずっと此処に居たいくらいだ。
「そう言えばおんおん」

「んー……？」
「明日からの予定は何か決まってるんです？」

「んや、なーんも」
「そしたらダンジョンに行ってみませんか？ 私の華麗な槍捌きを魅せてあげます。えいっえいって」

その動きだと単純につついてるだけなんだが。

紅魔族はスペックは高いが魔法寄りだからな、筋力とかは据え置きレベルだ。

そのため、ある程度走り込みや鍛錬をしないと普通の使い手には追

いつかない。

けれどまあ、比較的簡単なダンジョンで物見遊山に冒険に繰り出すのも良いかもしれないな。

「宝箱や罫の解除は私に任せてよ。その道のベテランだからね私は」

「そう言えばララとダンジョン巡りをしていただったっけ」

「うん。ダンジョンの内部でゴブリンに囲まれている時の事を今でも思い出すよ。威勢だけ良くて振り回した一撃が全く当たらない、その様子を見て駄目だこりやって思ったよ……」

「ク、クリス！ それは言わない約束だろう！ 私だつて駆け出したったんだ！」

「その割には気持ち悪い笑みを浮かべてはあはあしてたけど？」

「それはっ、……それは、その……、ね？」

「ね、じゃねえんだが。ゴブリンは犯すよりも先に四肢を押し折つて動けないようにしてから巢に持ち帰る習性があるから、もしも捕まっていたら助かる見込みはほぼゼロだぞ」

「……えっ、そ、そんなに恐ろしかったのか？」

この世界におけるゴブリンは緑色のアレで間違いないが、性欲や繁殖力が強い反面野生的とも言える。

そのため、自分よりも大きな体躯をしている生物を相手にする場合、まず四肢を潰す事から始めるあたりゴブリンは馬鹿だが愚かでは無いと言われるのだ。

毎年新人冒険者の百人に一人はゴブリンによって四肢の欠損を余儀無くされる事が散見されるくらい危険なモンスターである。

それも土地勘の無いダンジョンの中でそう言う事になったら逃げだす事は不可能だった事だろう。

……これ、バルバロシリーズの一シーンに使えそうだな、覚えておこう。

「そうそう、だから私が必死になって『バインド』で邪魔しながら仕留めたんだからね。上層だったから良かったもの、もう少し深かったら確実に殺されてたよダクネスは」

「へ？ お持ち帰りされて死ぬまで苗床にされるんじゃないのか？」

ララの困惑した顔と質問に私とクリス、そしてウイズさんは頭を抱えて溜息を吐いた。

完全に勘違いしているララの知識を何とかするために此処はしっかりと教えてやるべきだろうな。

「はあ。ララ、ダンジョンにおけるモンスターの発生は魔力溜まりからだ。即ち、ダンジョン産のモンスターは繁殖に性行為を必要としないんだよ。野生の、地上のゴブリンならララの考えていた通りだけど、ダンジョンの中ではそうはならないんだ」

「うん。ダンジョンのゴブリンは冒険者を餌としてしか見てないよ。たまに先祖返りみたいに性欲旺盛になるのも居るみたいだけど、概ね食欲に変換されてるんだよ」

「つまり、もしもダクネスさんがゴブリンたちに捕まっていた場合、身包みを剥がされた後に死ぬまで殴打されてミンチにされるか、四肢を挽ぎ取られて踊り喰いされていた可能性が非常に高いんですよ」

さあーつと顔を青褪めたララ、ウイズさんのまるで見てきたかのような詳細な内容に口を押えるゆんゆん。

とてもじゃないが楽しい温泉と言える雰囲気ではなかった。

そして、ギギギと油の切れた歯車のように此方に向けたためぐみんは涙目を浮かべていた。

その潤んだ瞳から読み取れる内容は一つ、ダンジョン怖い、である。

いや、こんなん序の口と言うか弱肉強食はこの世界の常だと思っただがな……。

はあ、仕方が無いな。私はソウルから桶を取り出し、そこにお酒の入った小瓶と小さな杯を置いた。

全員の視線が集まる中、私は器用に片手で小瓶から杯にお手製の蒸留酒を注ぎ込み、きゅつと一口で飲み干した。

「ぶはあつ、美味しいー」

「いやいやいや、今そんな雰囲気じゃなかったでしょう!」

両隣からツツコミを入れられつつ、温泉のおかげで血の巡りが良いからか若干へべれけ気分になった私は頷いた。

いや、頷かれても、と言う感じの表情を浮かべた二人を無視して二

杯目を煽る。

「かあーっ、度数が高いからか直ぐに身体が火照ってくる。ついでに岩塩の欠片も出してペろりと舐めて着にする。」

「ふうー、辛気臭い事言っても仕方が無いだろう。そう言う死に方をしないように色々と考えて潜るのがダンジョンなんだからな。と云うかこの面子でそうそう死人なんて出やしないだろうよ」

「いやまあ、それはそうですけど……」

「ああ、せんぱンツ、アクアさんが居れば即死じゃなければ回復してくれるでしょうし、何よりベテランなウイズさんも居ますしね。多分問題無いと思うよ」

「私は主に魔王軍との戦いが主でしたけど、たまに息抜きでダンジョンにソロで行っていた事もあるのでお任せください！」

それと一緒に一緒に行ってくれる人が居なかったんじゃ、だなんて自分の事を棚上げした視線を向けるゆんゆん。

「相当なベテラン冒険者だった、くらいしか知らない私たちからすればどうしようも無い事だな。」

まあ、その実力を見せてもらうためにもダンジョンに潜ってみるのも良いかもしれないな。

「そう言えばアクア来ないですね。隣が男湯なのでカズマが来たら扉の音で分かると思うんですけど」

「ふむ、私がお酒を投げておいたから晩酌しているんじゃないか？」

「そうなんですかね？ 因みに聞いておきたいんですけど、どこまで仕込んでたんです今回」

「んー、三割程度かな。基本的にゼスタの脚本に助言入れているだけだしね」

「ゼスタさんが？」

「ああ。いやほら、アクアさんってカズマくんの転生特典として下界に居るから、未永く良好な関係を維持したまま居てくれる方が都合が良いんだよアクシズ教的に」

ああ、成程、と言う感じで全員の頷きが返って来た。

くいつと三杯目を飲み干し、喉がかあつと熱くなる感覚に悶えなが

ら岩塩を舐めて味を楽しむ。

「ぶつちやけ私たち勇者候補は魔王討伐を最終目標にしている訳だから取り分けこの世界の宗教とは噛み合うんだよ」

「その割にはバニルと契約してませんか？」

「あ、うちのバニルさんが毎日につこにこしてるのはそう言う事だったんですね。バニルさん、最近はカラススレイヤーだなんて呼び名でご近所さんの好感度を稼いでたりしてますけど、結局は悪魔ですからね……」

「私の名声とバニルの危険度の低さが相まって受け入れられているからな。敬虔な教徒からの悪感情は食べ放題だしな。でもあいつの好きな味って羞恥の感情だった筈だが、どうやって摘まんでいるんだ……？」

『ふむ、契約者殿なら知っているかもしれないがこのアクセルにはサキュバスが経営する店がある。故に、その路地に入るための場所でニヤニヤと腕を組んでいるだけで初心な奴は勝手に羞恥心を抱いてくれるので大変効率が良いのだ。二度三度すると慣れてしまうが、次の春には新しいのが増えるから問題無い訳だな』

タイムニングよく念話してくるなバニル。まるでこの場に居るようじゃないか。

……待てよ、お前まさか見通しの力でこの光景を覗いているとかしてないだろうな？

『おおっと、見当違いな暴力は止めるのだ契約者殿よ。吾輩は確かに男性の恰好はしているが、悪魔なのである。性欲などは持て余していないので土塊の人形とでも思ってくれば良からう』

そういやお前の本体仮面だったな。スる事しようにもできないか、ならまあ、許してやる。

ただし、ウイズさんが許すかどうかは知らんけどなっ！

『……ぐっ、では見逃しの対価として一つ情報を渡そう。その街に訪れる魔王軍幹部は約四日後にアルカンレティアに潜入する予定のようだ』

良いだろう、このまま黙っておこうじゃないか。

契約のパスから心底安堵した感情が返ってくるあたり、流石にバニルも本気でウイズさんとバトるのは勘弁らしい。

うぐつ、隣のクリスが横腹にぐりぐりと指を押し込んで来ていた。見やれば私がバニルと念話していたのがバレているのかムスツと拗ねた顔をしていた。

仕方あるまい、こつそりと杯を一つ増やしてクリスに手渡し、酌を
してやる。

こくこくと蒸留酒を飲んだクリスはその辛さにひゃーつと口を開いて絶句していたが、岩塩をペろりと舐めて頷いていた。

……こいつしれつと私の舐めた岩塩ペろつたな。

視線でそれを咎めて見れば可愛いてへペろを返され、随分と強かになつたなと諦める。

「……あの、なんか最近クリスとおんおん近くないですか？ 何と
うか仲良しの度を越えていると言うか……」

「あはは、そうかな？ ダンジョンに潜る友達が増えてちよつと舞い
上がつちやつてるのかもしれないなあ。ごめんね？」

「ううむ、何か含みを感じるんですよねえ……。何かこう、乙女心がピ
ンチと言うか焦りを感じると言うか……」

流石はめぐみん、鋭いなあ……。でもまあ、クリスとの関係はまだ
話せないなあ。

ある程度めぐみんがこつち側に堕ちてからじゃないと感情的に拒
絶しかねないし。

いや、むしろワンチャンあるのでは？ 実際、今の私正妻ララと愛
人めぐみんと言う感じで公認の二股している訳だし。

愛人枠の隣に妾枠が増えるだけだし……。いや、不誠実な事には間
違い無いしもう少し黙っておこう。

それに、クリスの場合女神エリスのメッセンジャー的な役割を持っ
ているから切るに切れないんだよなあ。

……決して天界らしき場所でレイプ目で号泣するエリス様に同情
したと言うか、シンパシーを得たと言うか、うん、そう言うのでは無
いのだ、多分、きつと、メイビー。

このからつとした笑みの裏にあのドロつとした瞳があるのかと思
うと保護欲を掻き立てられると言うか何とと言うか。

多分、捨て猫を拾う心境なんだよなこの感情って。

そして、そのまま私に懐いて依存してドロドロに溺れて欲しいと言
う歪な性癖が鎌首をもたげているせいだろうなあ。

実際、めぐみんに構いつ放しなのもそれが理由ではあるし、ある意
味似たようなもんなんだよな。

……ララと違って何をしてもセーフってのは正直惹かれる心地で
はあるんだがねゲフンゲフン。

「確かに、何か隠していないかおんおん。どうもクリスの情緒が可笑
しいと言うか、変わり過ぎてるように思えるんだが」

「……まあ、隠している事はあるよ。ただ、それが誰にでも教えて良い
ものでは無いってだけでね」

訝し気なララの視線を受けつつ、左手でこっそりと人差し指と中指
の間に親指を抜き差しするジェスチャーをしてからクリスの首にあ
るチョーカー、そのエリス教徒のシンボルを弄んだ。

少し小首を傾げたララだったが、先日の一件の事を思い出したらし
くクリスの正体の事も察しがついた表情を浮かべた。

「……うむ、まあ、何かしらの理由があるのだろう。深く問いただす事
は今はすまい」

「都合の良い時に伝えるから少し待っててくれ」

「うむ、分かった。私はおんおんを信じているからな。きっと止む無
き理由があるのだろううしな」

……正直そこまで信頼されているとすっげえ胸が痛いんですけど。
けどなー、流石に女神エリスが精神的に病みかけてて現実逃避先を
探しているだなんてやべー事暴露できんなあ。

そこらへんは上手く濁して何とか取り繕う事にしよう、未来の私が
んば。

一段落付いた事で四杯目の杯を傾けた。お代わりはソウルに仕舞
い込んでるので何度でも飲める。

おっと、クリスが小瓶を傾けてお酌をしてくれたので有難く受けて

おく。

あれ、実際これって不敬極まり無い事してないだろうか、だなんてふと思いついてしまったそれを酒と共に喉奥に流しておく。

今の生活は非常に満ち足りている状況だからな、ナニとまでは言わないが。

さて、明日はダンジョンに向かうとしてもギルドに一度寄る必要があるな。

冒険者ギルドの受付で付近のダンジョンの事を尋ねて対策を練ってから潜るのが吉だろう。

事前情報があるか無いかで生き死にが決まると言っても過言では無い。

崩落の危険性や横穴の存在の有無など少しでも得ておくべき情報は多い。

ダンジョンに慣れているクリスと言う存在があつたとしてもそこを疎かにするべきでは無いだろう。

「クリス、因みにだがアルカンレティアに存在するダンジョンの情報を知っていたりするか？」

「勿論あるよ。アルカンレティアには二つのダンジョンがあつて、一つは水路の合流地点にあるスライムダンジョン。もう一つは北部にある鉱山系のダンジョンだね。難易度は言うまでも無く北部の方が簡単だよ。アルカンレティアで冒険者を目指そうとする子たちの修練場にもなるくらいだしね」

「ふむ。では北部の方を仮目標として色々と準備していくか」

「へ？ スライムの方が弱そうじゃないですか？ 鉱山だと硬いロツクゴーレム系のモンスターばっかりな気がするんですが」

「めぐみん。スライムを甘く見てはいけない。もしも顔にへばりついたらそのまま窒息したり鼻や口から内部に侵入される可能性だつてあるんだ。不定形の身体に槍を突いても穴が開くどころかそのまま絡めとられて奪われる可能性が高い。人間よりも大きなサイズのスライムに出くわしたら即座に逃げるくらいの心持で居るべきだよ」

ドラ○エとかで雑魚の代名詞であるスライムであるが、この世界に

おいて、と言うよりもファンタジー世界においてその存在は脅威であると言わざるを得ない。

動きが鈍いとしても津波の様に覆い被さるように面的捕縛を行なわれたら近接戦闘は不可能であるし、魔法でしか倒せない相手がわらわらと出てくるダンジョンだなんて悪夢の沙汰だ。

魔力が切れかけた状態でダンジョンを脱出するだなんて甘い事を考えてはいけないのだ。

そうめぐみんにスライムの恐ろしさを淡々と語るところこくと頷きを返された。

爆裂魔法しか撃てず、そして槍でチクチクする事しかできないめぐみんは正直言つてスライムにとってカモである。

奴らは魔法生物系なので魔力に反応するため私たち紅魔族を積極的に狙ってくる事間違いない。

もしかしたらカズマくんも似たような勘違いをしているかもしれないし、明日にでも教えておくのでしょうか。

そんな事を考えながら少し脅し過ぎたためめぐみんに右腕を抱き着かれつつ温泉を再び楽しむのであった。

41話

アルカンレティア北部に位置する溪流が流れる山の麓。

かつては鉱山として栄えていたが坑道がダンジョン化し、安定的な収入が得られなくなった事で廃鉱が決定された。

元が坑道である事からモンスターの種類は鉱山系と呼ばれる硬質で金属質なモンスターが見受けられる。

良質な水源による食物連鎖の影響でモンスターのレベルは高く、並みの冒険者でも手こずるとされている。

そんな中級者向けダンジョンに向かう事になり俺の心境はわくわくとガクブルで埋め尽くされていた。

「ふむ、カズマくんそこまで緊張するものではないよ。相手を知れば自ずとすべき事は見つけられる。ここ鉱山系のモンスターの性質は何だったかな？」

「はい、ええと、基本的に頑強で身体の素材がそもそも金属とか硬い物質で作られている事が多くて、けどその分足が遅かったり行動が鈍かったりする、でしたっけ」

「うむ、その通りだ。ブリーフィングをちゃんと覚えてて偉いぞ。そういう基本的な所を聞き逃したり、疎かにしているとあっさり死ぬからなこの世界」

ド○クエのキャラバンよろしく再び馬車に乗った俺たちはその最中にブリーフィングを行なった。

と、言つても殆ど師匠とダンジョン経験のあるクリスとウイズの現実に沿ったアドバイスを聞いていただけだが。

リッチになる前は凄腕の冒険者だったらしいウイズの意外な蘊蓄や、ダンジョン慣れしているクリスの注意は非常にためになった。

にしても……、それについていける師匠の知識量は何処から来ているのだろうか。

幼馴染であるめぐみんやゆんゆんを比較してもその知識量の差異は月とすつぽん。

こうして歩きながらダンジョンの入り口に向かうまでに、パーティ

リーダーとしての心得を教えて貰っているのだが感銘を受ける事が多い。

「あの師匠、その豊富な知識は何処で手に入れたんですか？ その、めぐみんたちを見ていると雲泥の差だなんて……」

「ああ、その事か。うちの紅魔の里で学生をやった二人だが、中二病を煮詰めたような場所の学校だぞ？ 格好良いモンスターやカモにしやすいが見栄えはそこそこなモンスターだとか、偏った内容の授業を受けてたらしいぞ」

「ええ……」

「私の場合はとても簡単だ。酒場で飲みながら武勇伝として色々教えて貰ったのさ。エール一杯で授業代が済むしな」

ああ……、成程なあ。

サークルの、もとい、酒場の姫みたいな感じで師匠は人気者になっている。

あの日アクアのすすめでお酒を解禁してからと言うものの師匠はたまに酒場に入り浸る事が増えた。

一人で黙々と食べている時もあれば、宴会にしれっと混ざっていたり、共同依頼の打ち上げで乾杯している時もある。

アクセルにはサキュバス娼館があるので王都から移住した輩も居り、その活動範囲は意外と広く、今も生き残っている事から内容も濃い。

そんな浮いた話も無い冒険者野郎たちにとって、エールを一杯奢るから教えてくれと言って近づいて来てくれる師匠は紅一点のアイドルであり、男の趣味も嗜好も共感してくれて見た目も美少女であるから万々歳。

とっておきの話をするから、と逆に酒の場に誘われる事が増えていく始末。

あの手この手で師匠との歓談の時間を伸ばそうとするため、正攻法である冒険者らしい話を必死に仕入れてくる奴が増えているらしい。

無理矢理抑え込もうとした馬鹿な輩も居たらしいが、それを目撃していたらしいダストに聞けば青褪めた表情で手の甲に何かを突き刺

すジエスチャーをしてみせて色々と察した。

「さて、見えてきたぞ。アルカンレティア北部の鉱山ダンジョン『鉄の穴』だ」

「……ネーミング安直過ぎませんか？」

「……この世界の間人だしなあ」

「ああ……」

師匠の呆れ口調で漏れた言葉には嫌な説得力があった。

見た目は鉄鉱山の坑道の入り口であるが、壁に打ち付けられた『ようこそ鉄の穴ダンジョンへ』と言う明らかにアクシズ教徒が作ったであろうお手製のファンシーな看板のせいでダンジョンである事が分かる。

まあ確かにこの看板が無ければただの坑道にしか見えないけども、何でお誕生日会の飾りつけみたいなのふっさふさな見た目してんだよ……。

ちらりと隣を見れば師匠の目は既に死んでいた。

ああ、うん、そう言えばアクシズ教徒に一番振り回されてるのこの人だったわ。

非常に深い溜息を吐いてから死んだ目で師匠は振り返り、もう一度溜息を吐いた。

……結構なストレスを感じているらしい、おいたわしや師匠……。
「と、言う事で到着だ。初日は班分けはせずに全員で潜る予定だ。カズマくん」

「はい。斥候にクリス、前衛に俺と師匠とララ、その後ろにめぐみんとゆんゆんとアクア、殿にウイズの順番で進もうと思ってる。主に俺らが前衛を押さえて、後方の奴を魔法で倒して貰う感じだな。無論、めぐみんは槍働きを期待しているからな」

「そりゃまあ、私の完璧で最強な爆裂魔法を使ったらダンジョンが無くなってしまうからね！」

「まあ、ゆんゆんたちに向かってくる奴をチクチクしておいてくれ。余裕があれば少し前に出て私が抑えている奴をチクつても良いからな」

「ねえ、おんおん」

「なんだゆんゆん」

「……戦力過多じゃない？」

「……言うな。だから初日は慣らしのために集団行動をするだけだ。ダンジョン経験はクリスとウイズさんしか無いんだから」

「私も何度かクリスと同行しているのだが？」

「ならダンジョンにおける基本的な行動を言ってみろララ」

「ええと……、その……、……足元に注意する、とか？」

自らダンジョン初心者ですと言っているようなララの返答に師匠は温かい目で見守り、そつと肩に手を置いた。

師匠の優しい肩ぽんはがっくりと膝を着いたララへの知識的戦力外通告であった。

いやまあダンジョン経験豊富なクリスの後ろに付いて行っただけなんだろうしな、当然とも言えた。

以前のこいつってDMくつ殺騎士だったし、普通に同行してた訳じゃ無いだろうしなあ……。

「と、言う事でダンジョンを生業にしているクリス先生の有難いお話を聞きながらダンジョンアタックするぞ」

「もおー、そんなに期待されてても罠の位置やダンジョンの鉄則、初心者にありがちな注意ポイントしか出て来ないよ」

教師役として完璧な返答をしたクリスに待望の視線が集まる。

そうか……、異世界半年ちよいで漸くちゃんとしたダンジョンに挑めるんだな。

キールのダンジョンはその……、結局『暗視』とアクアをデコイにした感じだったから盗掘みたいな感じだったし、何よりもあのキールとの別れが印象強過ぎて冒険譚って感じじゃねえんだよなあ。

木材と鉄網でしっかりと補強されたダンジョンの入り口を越えて、松明に照らされる坑道を歩いて行く俺たち。

「こういうダンジョンでのお約束なんだけど、やっぱり足元だね。元が鉱山って事でギミックに使われる資材も多いから結構危ないのが多いんだ。ほら、その『罠感知』に引っ掛かった石に擬態したスイツ

チ。試しにこの棒で突いて作動させてみるとー」

一見ただの石ころにしか見えないそれにクリスが持つていた安全棒で叩くと、横合いから何かが飛翔し、反対側の壁に当たって床に落ちた。

出所を見やれば、あからさまに今ぽっかり開きましたと言わんばかりに不自然な小さな穴が壁に開いており、反対を見やれば金属製の針を長くしたような飛翔物が落ちていた。

「森林とかのダンジョンだと木の矢だったりするんだけど、ダンジョン側に余裕があるところという物騒な物が使われている事が多いよ。だから、初見だったりする場所だと斥候役が居なければこういう長めの棒で足元を確認してから進むと良いよ。こういう狡猾な罫は築十数年以上のダンジョンから見受けられるから、潜るダンジョンの歴史はしっかりと押さえておくと吉だね」

「ふむ、見た目からして全く分からないのだが……。『罫感知』を持たないパーティーは危険そうだな」

「あつ、一応無くても判別する事はできますよ。大体この手の罫は魔力を使っているので、魔法使い系の職業であればその繋がりを追って見分ける事が可能です」

ララの唸るような懸念の声に後ろからニコニコ顔のウイズがそう助言したが、首を傾げたためぐみんとゆんゆんを見て困惑を深めた。

師匠は成程など言う顔をしているので素の技量の差異らしい。

それに気付いたためぐみんとゆんゆんが師匠へと視線を向けて無言でどう言う事が促していた。

たははと笑いながら師匠は壁の穴に指を向けて、そのまま下へ下ろして先程のスイッチへと指を滑らせた。

「魔力の動線がこういう風に繋がっているんだよ。多分スイッチになる石ころが踏まれてその動線に接着する事で魔力が通って先程の罫が作動する仕組みなんだろうな。めぐみんとゆんゆんは魔法のカスタマイズはしてないだろう？ そのまんまで日々使ってるから魔力操作の技術が未熟なんだよ」

「魔法のカスタマイズ!?!」

「へえ、おんおんさんはできるんですね。けど、前にめぐみんさんはしましたよ？ デストロイヤーに向けて爆裂魔法を撃つ際に指向性にカスタマイズしてたじゃないですか」

「……あれが。けど、アレはおんおんに後ろから操作されての事ですから全く分かりません！」

「胸張って言う事じゃねえぞ……」

そう俺はつい口に出して咎めてしまったが、めぐみんは憤慨する様子も無く、むしろ何かを気にする素振りを見せていた。

……あつ。

理由を察した俺はさりげなく師匠を見た。

何処となく左腕を摩る曇った表情を浮かべていた師匠だが、俺たちの視線を見て首を傾げた。

……成程なあ。デストロイヤーでの死因は焼死で、しかも燃え尽きるまでの数秒のラグを覚えているとの事だった。

なのでその反応は生理的な無意識なもので、師匠は自覚をしていないようだった。

『大発火』と言う呪術を使う事に忌避は見せていないので精神的なトラウマにはなっていないようだが、デストロイヤーと言う単語からあの時の痛みや苦しみを身体が勝手に思い出しているのだろう。

そう言えば、最近キツチンに立つ時にめぐみんやゆんゆんが手伝っている時が多いが、今思えばフライパンなどを握っている事が多かったな。

後方母親面と言う感じで腕組みして嬉しそうにしている師匠だったが、あの二人はそこらへんを考慮して気遣ってたんだなあ。

「まあ、そこらへんは慣れが多いからな。爆裂魔法しか撃てないめぐみんはともかく、種類豊富な魔法で取捨選択して戦うゆんゆんは覚えていて損は無い技術だぞ。具体的には枝分かれする『ライトニング』や速度の速い『ファイヤーボール』とか、色々魔法を弄れるとその場面で使える手数が増えるからな」

「へえ……、そういうのは学校で習わなかったけど本当にできるの？」
「いやまあ、実際の授業を見てないから知らないが魔法をそのまんま

で使う人は多いぞ。魔法のカスタマイズは必要に駆られてする事が多いから、熟練者向けなんだよ」

「……あの、それって……」

紅魔の里には行った事が無いが、紅魔族はほぼアークウイザードに就いている事から魔法はお手の物の筈なんだがな。

師匠は若干遠い目をして一言だけ呟いた。

「……紅魔族って中二病の集まりで馬鹿ばかりだし」

中二病の単語に理解が及ばなかった面々は首を傾げたが、俺とアークウイザードは合点がいったと納得していた。

「そーいや、めぐみんと邂逅した時ってバリバリ中二病患者だったな。」

「ばさあつとマントを翻してアークウイザード何某って感じで自己紹介してたし。」

つまりは魔法に長けているが故にそのまんまでも普通に強いからカスタマイズの必要性が無かったのだろう。

「または魔法とはこういうものだ、と固定観念に囚われている可能性も高いな中二病だし。」

中二病には王道的なクラシックなものや天邪鬼的なイレギュラーなものがあるが、紅魔族は前者だったのだろうな。

「とまあ、魔法談義はそれくらいにしてダンジョンの続きだ。ダンジョンは屋内だから時間の概念が壊れやすいからゆっくりしている」と体感時間が崩れて長居しちゃうぞ」

「うん、だからこういう砂時計を入った時に引っ繰り返して時間を計っておくと良いよ。此れは十二時間タイプのもんだけど、始めの内は四時間くらいから始めると良いかもね」

「そうクリスが腰元から砂時計を取り外して皆に見せた。」

成程なあ。確かに腕時計だなんて便利なものはないもんこの世界。

「……もしかして、腕時計を作って売れば大金になるのでは？」

「と、皮算用したが俺が作れる時計なんて日時計が精々だな、早々に忘れる事にした。」

斥候と教師役のクリスの後をついていく形で数分程歩いた俺たちは一戸建てが入るくらいの広場に辿り着いた。

そこにはサイコロみたいな物体が散見でき、『敵感知』があればモンスターだぞと俺に囁いていた。

「クリス、あれは？」

「ええと……なんだろう？」

「少し待て。……あれはロックメンだな」

クリスに尋ねてみれば首を傾げられてしまったが、代わりに師匠が手帳をペラペラと捲って名前を伝えた。

……六面体だからロックメン、なのか？

そう首を傾げていた俺だったが、徐に拾った小石をロックメンに師匠が投げ付けた事でその意味を理解した。

こつんと石を当てられたロックメンは、分割するように四肢を伸ばして角ばった手足を持つ人型になった。

六面体に擬態する岩人モンスター、それがロックメンらしかった。

「ロックメンは先程の様に鉱物に擬態するんだが、身体の構造上六面体になるので判別が容易だ。言うなれば六面体に擬態する岩ゴレムな訳だな。動きは遅いが鉱物で出来ているから身体は非常に硬いのが特徴だ。厄介なのは集団行動を取り、出入り口を塞ぎに来るらしい。普段は鉱山地帯や石切り場などに生息するモンスターらしいぞ」

「随分と博識だねおんおん」

「うむ、酒場で元鉱山夫だったクレフトが教えてくれたんだ。外だと纏まった鉱物になるから稼ぎになるモンスターだそうだ」

「となるとダンジョンだとドロップアイテムは鉱物系になるのかな？」

「多分な。一体倒して見れば良いだろう」

そう言つて手帳を何処かに仕舞い込んだ師匠はウォーメイスを掴み取り、近くに居た立ち上がったロックメンの膝に一撃入れた。

関節を砕かれたロックメンが思わずその場で膝を着き、下りて来た頭に渾身のフルスイングをぶち当てた師匠。

べしやつと地面に倒れ伏せたロックメンの肘に重たい振り下ろし

を叩き込み、完全に沈黙させた師匠は黙々と頭部にウオーメイスを振り下ろして完封した。

さあつと霧散したロックメンが居た所に同じ体表の色をしているインゴットがごとりと落ちた。

「これは……銅インゴットだな。成形要らずとは鍛冶屋泣かせなドロツプ品だな」

しれっとロックメン撲殺を敢行した師匠の行動の容赦の無さに誰もがビビっていた。

その見た目と声で忘れていたが、師匠はウイズに匹敵するベテラン冒険者だったわ。

冒険者になって同じく半年くらいらしいが、俺たちと違って幾つもの依頼とモンスターを倒して来た師匠は密度が違う。

レベルも既に三十台と聞き、掛け離れた技量と経験値の差に高嶺の花を幻視してしまう程だ。

めぐみんと同じ年とは思えぬ雄姿に尊敬の念が溢れる。

……この人の弟子になって良かったなあ、だなんて思っていたら、はい、とウオーメイスを手渡された。

「カズマくんは確かこういう武器は持っていないなかっただろう。貸してあげるからそれで頑張ってくれ」

「……はい？」

「ほら、残りの二体。ちゃっっちゃと始末してきて」

「アツ、ハイ」

あの、このウオーメイス片手で持てない重さなんですけど……。

どうやって振り回してたんですかその小柄な身体で……、あ、腰を使うんですね、了解です……。

バトンタッチして前に出た俺はベルディアにしごかれた日々を思い出し、腰を落として両手にウオーメイスを握る。

後ろからこっそりとアクアが俺の腰に佩いていたデルフレプリカを持って行ってくれたので少し身軽になる。

「ふうーん、……お熱いですねえ」

「な、何の事かしらねっ、ほら、カズマが頑張るから、ねっ」

いや、恋人関係の事は別に隠している訳じゃないんだから言ってもいいんだぞアキラ……。

まあ、いいか。

取り敢えず、サイコロ状のままのロックメンの一体に狙いを付けてウォーメイスを振り下ろしてみるか。

相手が動かず、強い一撃を与えたい時に振り下ろす、その教えを思い出して遠心力をしっかりと使って振り下ろし——。

非常に鈍い音が聞こえ、瞬間、両手に返って来た衝撃に思わず呻きを上げてしまう。

くつつつつつそ硬いんですけど!?

ウォーメイスの握り手にゴム帯なんて巻いて無いから滑り止めの布でしか衝撃が吸収されない。

けれど、先程師匠は普通にゴンゴン叩いてたぞ!?

そんな事を考えながら両手の痺れに呻いているとのつそりとロックメンが立ち上がり、此方を見た。

——ツ!!

そうか、こいつ身体を丸めてるから外殻に当たる部分以外は柔らかいのか。

明らかに線の細い肉体、手足と頭だけに四角い外殻を纏っているだけで、その姿はまるでボクサーのそれだ。

そう言えば師匠は先に足を狙っていたし、その次は地面に倒してから肘を狙っていた筈だ。

それを思い出した俺は、気合で再び握り締めて振り返ったロックメンの右足の膝に狙って振り抜いた。

ごしやり、と言う脆い何かを砕く感触が返って来てロックメンがよろめいていた。

「うおおおおおつ!!」

気合を入れて渾身を込める。首元めがけてウォーメイスを叩き込み、仰向けに倒れて晒された胸元に振り下ろした。

一度、二度、三度と叩き込むと腕が疲れてきたが、HPをしっかりと削れたのかロックメンの身体がさらさらと砂状に虚空へと消えた。

よおおっし！ 勝った!!

「おめでとう、じゃあ追加だ」

喜びの余韻に浸っていた俺だったが師匠の一言に我に返り、石ころを投げ付けられて起き上がったロックメンと対峙する。

戦い方は分かった、こいつも関節を狙って――。

そう考えて再び膝を狙って振るったが、ちよいつと左手を動かされて硬い外殻で受け止められてしまった。

先程までの振り下ろしで疲れていた腕が悲鳴を上げる。

少し後退って両手を回復していると、ロックメンがボクサーのように両手を前に構えてトントンとステップを踏み始めた。

動きが遅いつて戦闘態勢に入るまでが遅いつて意味かよっ!?

ひゅんつと風切った極悪なグローブを纏ったジャブが此方に叩き込まれ、ウォーメイスの柄で何とか受け止める。

な、なんつー一撃だ。めっちゃくちや重いんだけど。

「……んー、流石に使い慣れないウォーメイスを手渡したのは間違いだっただけかな」

だなんて暢気な師匠の声が聞こえる。

デルフレプリカよりも1.5倍は重いウォーメイスは確かに振り辛いし、硬さも相まって両手にくる疲労も多い。

けれど、先程の振り下ろしの感じからして斬撃は多分効き目が薄いのが明白だった。

……そして、先程の師匠の戦い方からして未熟なのは俺の方だ。

ベルディアに教えて貰ってはいたものの、結局それは基礎的な事で、こうして実戦で扱えるとなるとやっぱり別物だったと言う事なのだろう。

息を吐いて、吸って、吐く。

よし、此処からが頑張り所だ、やるべきことをしつかりと、だ。

メイスの一撃を受け止められる事を前提に、ハンマーの如く叩き付けてやれば案の定硬い外殻の拳を盾に持って来た。

受け止められた際に生じた重く鈍い金属音を合図に俺はウォーメイスから片手を外し、眼前に突き付けてやる。

『クリエイイトウォーター』かーらーのっ、『フリーズ』!!」

受けに回ってがら空きの胴へと片手を向けて、腰から下へ範囲を調整。

ボクサーの売りである素早いステップを踏むための膝を狙って水をぶっかけ、即座に冷却して凍らせる。

すると突然動きを止められたロックメンはつんのめったようにビターンツと地面に倒れ伏した。

すかさず肘を砕き、渾身の一撃で魔石があるであろう胸をウォーメイスでぶち抜いた。

後ろから師匠がしてくれているのであろう拍手を浴びつつ、煙のように霧散したロックメンの死体を見て俺はガッツポーズを取った。

「上手いやり方だな。勝利に徹するのであれば、相手の長所を潰して此方の長所を押し通すのが正攻法だ。今の様に魔法を組み合わせて戦うスタイルは生き延びる冒険者のやれる事だ。また強くなったなカズマくん」

「押忍っ！」

ふうー、これだから師匠の弟子は止められないんだ。

考えてみるよ、黒髪長髪貧乳美少女が後方師匠面で嬉しそうに褒めてくれるんだぞ、最高だろうがよ。

次々に褒められつつ、決して俺TUEEでは無いけれども、それでも成長していると実感できるこの瞬間がとっても楽しい。

いやー……、まあ、男女比一対五だしな、ハーレム物の主人公になった気分だウエへへ。

「格好良かったわよ、カズマ！」

それでもまあ、惚れたアクアに満面の笑みで労われるのが一番嬉しいもんだな。

ぴよんぴよんと跳ねて嬉しさを爆発させやがってからに、照れるだろ。

広場に居たロックメンを殲滅してから奥へと進んで行く俺たち。

……次の広場で行くわしたロックメン共の姿を見て、思わず頭痛がした。

そうだったわ、この世界のモンスターどいつもこいつも変なのばかりだったわ。

ロックメン・バスター、右腕が何か筒状になっていて伸びていた上に何か青かった。

ロックメン・ブレード、右腕が両刃のソード状になっていた上に何か赤かった。

ロックメン、Rock Men、ロックマー——。

そこまで考えて師匠の手が眼前に伸びていて、思わず見れば首を振っていた。

そんな師匠の顔も何処か頭が痛そうな表情をしていた。

ですよねー……。

と言つても変な恰好をしていたとしてもモンスターはモンスター。

岩石を右手から飛ばしてくるバスターとタンク役をしてくるブレードは非常に厄介であり、俺とララがブレードを押さええている間に師匠とクリスがゆんゆんを誘導しながらバスターを迎え撃つ。

押ししても引いても切れぬ盾に動きを止めたブレードを横合いから叩き潰し、『バインド』と『ストーンバインド』でぐるぐる巻きにされて拘束されたバスターは師匠の取り出したパイルバンカーで胸を穿たれた。

それからと言うものの、無言でドラミングするイワザルの群れや岩で作られた巨大な豚であるロックピッグ、キラキラと煌びやかに輝く宝石の砂塵を纏う精霊のダイヤダストなど、駄洒落みたいなモンスターがわらわらと。

名前の由来と意味の分かる俺と師匠は終始虚無な真顔でモンスターを討伐し続け、初めて見る相手にわーきゃーするアクアたちとの温度差が非常にやばかったが何とかボス部屋らしき場所に辿り着いた。

「……あの、師匠」

「……言わんでも良い」

最後に出てきたのはロックメン・フライ。

空中浮遊する丸っこいカプセル状の何かに乗ったロックメンの頭

頂部はハゲていて、誰得のツインテールがくっついていて。

どう見てもアレってドクターワイ——、再び師匠に遮られ、それ以上の事は考えなかった。

何処からともなく飛んできたロツクメン・バスターとブレードの右腕を模した空中浮遊する巨大な腕がフライの左右に浮かび、戦闘態勢に入ったフライは地味に強敵だった。

フライが空中に居るため、魔法以外の攻撃が届かない事もあって時折壁際に誘導し、師匠が壁を蹴って一撃を与えるシーンは拍手喝采の名シーンだった。

……もつとも、その時の師匠の目は死んでいたけれども。

カプセルの上部を破壊し、フライ自体に攻撃を与える事十数回、漸く倒す事ができた時の充足感の中々だったが師匠が疲労困憊でララに担がれる事となった。

無駄に魔法耐性が強かった事もあり、ウイズとゆんゆんの援護が全く持って効いて無かったのが理由だろう。

「……もつとマシンなモンスター配置しろよ」

ぐつたりとした師匠の漏らした言葉に俺は強く同意した。

鉾山系のモンスターなら蝙蝠とかトカゲとかだろ普通は、と師匠の恨み辛みの籠った愚痴をBGMに俺たちは無事ダンジョンを制覇して帰還したのだった。

「初めてのダンジョン、どうだった？」

「……暫くダンジョンはもう良いかな」

クリスの悪意の無い先輩風を吹かした問いに師匠は非常に疲れた様子で答えたのだった。

時折ララの後ろから槍でチクチクしたただけのめぐみんは欲求不満状態でぶんすかし、北部ダンジョンのある方角へ『エクスプローション』を放ったのが今回のオチだろうか。

その後、魔力欠乏状態でくったりしたためぐみんを師匠が回収し、衣服からお風呂までお世話して漸く機嫌が戻ったらしい、とララから愚痴られた時は強かな事するなあと思わず感心してしまった。

旅館に戻ってからアクアといちゃこらするに当たり、普段の師匠た

ちの様子を真似てみたいのか膝枕をしてくれたので疲労困憊であった俺もとつても癒された事は言うまでもないだろう。

耳かきも用意してくれて夢現な時間だったとは言っておこう。

……まあ、普段の自堕落が此処で発動して俺も膝枕してアクアの耳かきをする事になったんだが、まあ、いいか。

42話

アルカンレティア温泉旅行三日目。色々とアレな北部鉾山ダンジョンのせいで精神的に疲れていた事もあり、各々に別行動する休養日とした。

カズマくんとアクアさんは裏口からこっそりと手を繋いで微笑ましく出て行き、ララとクリスは食べ歩きに、ウイズさんは貸切な温泉を楽しむらしく既にお風呂場へスキップ気味に歩いて行った。

残る紅魔幼馴染組である私とめぐみんとゆんゆんは、部屋で一通り揃えられたパーティーゲームを広げていた。

持ち主はやはりと言うべきかゆんゆんだ。

文庫サイズでありながらホライゾン級に分厚い紅魔友人帳こと、友人とやりたい(数百の)事リストに書かれていた室内遊戯をするためだ。

「やっぱり最初は定番の魔王抜きからかな！ それとも人生パーティーverアクセル？ わ、私がキーパーをやってソード&マジックをやるのも良いわね！」

……明らかに地球産のパーティーゲームが混ざっている辺り過去の勇者候補たちはやりたい放題のようだ。

うつきうきの様子でゆんゆんが何処からか出したパーティーゲームの数々にめぐみんと一緒に困惑しつつ、無難なトランプを選んだ。

やるのはトランプの定番であるババ抜き、もとい魔王抜きだ。

トランプの絵柄は地方十色と言った具合なのだが大別すると二種に分かれる。四種の記号と1から13の数字はそのままに、地球なら定番のキングクイーンジャック、そして勇者僧侶魔法使いの勇者verのどちらかだ。

主に勇者verが一般的で、王国などの王権のある地域だと王様verがローカルに追加される。

無類のトランプコレクターは王様が代替わりする噂を聞き付けては次代の絵柄を買いに遠出するとかなんとか。

ゆんゆんが持ってきたのは紅魔の里限定盤であるステンドグラス

風の勇者 ver.

シンプルでありながら勇者物語の神聖さを表現する雅な格好良さが売りの絵柄だ。

世界は違えどトランプ概念を持ち込んだ者たちが同じだからか世間一般的なルールと同じだ。

大貧民もといビッグスラムだとローカルルールが沢山あるらしいが、魔王抜きは実にシンプルで根強い人気がある。

一緒にやる相手が居ない筈のゆんゆんが何故か手慣れた様子でトランプをシャッフルし、私とめぐみにカードを配っていく。

「ふうむ、まあ、そこそこだな」

持ち札を見やり揃ったカードを捨て札にし、私、ゆんゆん、めぐみんと言う順番で魔王抜きが始まった。

終盤までは特段無い過程だったのだが、枚数が減り始めてジョーカーもとい魔王を引いてしまう確率が上がっていく。

残り二枚になり、魔王を引いてしまうか否か、そんな駆け引きがスリリングに面白いのが魔王抜きの面白さ。

……の、筈のだが、如何せんこの幼馴染ズ顔に出る。これでもかと顔に出る。

それなのにそんな事はありませんよと澄まし顔をドヤ晒すので何と言うか微笑まじさを感じるレベルだ。

手薄になったゆんゆんの手札の上を右往左往してみれば、表情の反復横跳びは……無い。

つまり、ゆんゆんは魔王を持っていないようでも適当に引き抜けば上がり札を引けてしまった。

一組捨てて残り一枚。ゆんゆんがめぐみんの手札から一枚引き抜き、目を丸くして驚愕の表情。どうやら引いたらしい。

めぐみんが私の一枚を引き抜き、手札が零になった事で私の勝利が確定する。

「ふっ、おんおんが先に抜けましたか……。流石ですね、では、勝負と行きましようゆんゆん……！」

「ただでは負けてあげないわよ、さあ、めぐみん！ 引かせて……」

ちよつ、何で掴む力こんなに強いのか?!

本来魔王を持つているゆんゆんがやるべきテクニクを何故かめぐみんがやった事で場が混乱する。

数秒後に何とかして引き抜いたそれを見て笑みを浮かべゆんゆんは手札を減らし、無言で手札をシャッフルし始めた。

既に二人しか残っていないので魔王の在処は丸わかりであり、上がり賭けたドローがこの先の命運を握るだろう。

ふつと笑みを浮かべためぐみんはヒュパツと俊敏に片方のカードを引き抜き、そのまま捨て札に手札を投げた。

がくりと項垂れるゆんゆんに勝ち誇ったように両腕を上げてコロンビアポーズのめぐみん。

……まあ、確りとゆんゆんが焦りの表情を浮かべた事で魔王では無い事を察してそのまま引き抜いたと言うオチだ。

「うううう、どうしてかいつつもめぐみんに勝てないのよね……」

まあ分かりやすいですからねゆんゆんは、とボソリとめぐみんが呟いていたが、私からすればめぐみんも大概である。

そんな光景が二度三度と続いてゆんゆんが傷心し、死んだ目でそつと人生ゲームを取り出して来た頃の事だった。

扉にノックがされたかと思えば、聖母様ー！ とゼスタの叫び声が続いて聞こえたのは。

ゆんゆんとバトンタッチするように私の目が死に、困惑するゆんゆんと面白そうな表情を浮かべるめぐみん。

深い溜息を吐いて扉を開けば、土下座スタイルのゼスタが其処に居て平伏していた。

「で?」

「皆様方のきやつきやうふふな時間を邪魔してしまい申し訳ありませんが、少しご相談があります。例の孤児院の計画のお話なのです……」

「ああ、そう言えばゆんゆんを生贄にゲフンゲフン、バイトさせる話だったか」

「聞き捨てならない単語が聞こえたんだけど!」

「ええ、どう言う事かセシリーの耳に届いてしまったようで、随分と駄々をこねられましたな。見てください、この衣服についた捻じれ跡を」

胸元の二つの箇所が捻じれており、摘まんで捻じられた跡だと何となく察してしまい気分が少し悪くなった。

なんでこいつ乳首捻じられた箇所をどうだと見せ付けて来てるんだ。

「目が腐る」

「ありがとうございますっ!!」

取り敢えず頭に踵落としをして床に伏せさせ、物理的に見えなくしておいた。

ぐりぐりと踏み付けつつ、どうしたもんかなと考えていたが、肝心な事を忘れていた。

ゆんゆんの方へ振り返り、きよんとする表情に言葉を投げた。

「と、言う事なんだがゆんゆん。前に言ったセシリアン孤児院へのバイトの話、少し早めても良いか?」

「全く良くないんだけど!? 今の遣り取りを見て何で領くと思つたの!?」

「ふうむ、だがな、それだと未来ある幼い少年少女の情操教育に問題が出てしまう。そういうのは早い方が良い。聞いての通り、あのセシリーが大分ハッスルしているようなので、一応視察に行かなくてはいけなくなってしまう訳だな」

「そこで罪の無い子供を人質に取るのは卑怯じゃないかしら!? ここまで領かなかつたら私が後ろ指指される展開じゃない!」

「いいや、そんな事は無いさ。ただまあ、モンスターや魔王軍によって両親を失った戦場孤児や口減らしに親から捨てられた子供たちへのメンタルケアの方向が少しアレな方向になるだけで……。ん? まあ、生きれるように衣食住整えてやったから別にいいか。春を売りに行かせる程貧窮してないし。別に問題なんて無かつたな。気にしなくて良いぞゆんゆん、勝手にやらせておくから」

更生する前のアルカンレティアに居た面子だ、きつと面構えが違う

筈だ。

セシリーはYESロリシヨタNOタ……さ、先つぽ、先つぽだけだから！ と途中で性癖を露わにするろくでなしではあるが、児童虐待などに走る奴ではない。

となれば、悪戯我儘ヤンチャボーイ&ガールズのある程度なら何をしてもよい玩具兼お世話係として遊ばれているだろう。

……事務関係が滞るだけか。何も問題は無いな。

「……あの、どっちかと言うと今のおんおんの人間性の方が心配になつてくるんだけど……？」 と言うかそんな話をされたら断れないに決まつてるでしょ!？」

「おお、そうかそうか。子供達には有難い話だな。ほら、泣いて喜べよゼスタ。一般的常識人で子供に優しく、そして仕事熱心な助っ人を派遣してやるんだからな」

絶賛床と熱いベーゼを交わしているゼスタの口元から何やら声にならない何かを発していたが、強めに踏む事で私は聞こえなくしていた。

後ろでドン引きしている二人の視線が背中にぶつかっていたが、まあ、多少の誤差と言うものだ。

私のやっている慈善事業は全てアクシズ教のイメージ回復のためにやっているだけだしな。

仮に失敗しても、アクシズ教だしな、で話が終わるので私にダメーシは無い訳だし。

「子供の内から変態教育を施しておけば未来のアクシズ教団員として扱いやすくなるしな」

「心の声が駄々洩れなんですけど!？」

「……おっと、つい本音が。やだなー、今のアクシズ教は健全な団体なんだから、変な教育は施さないぞ」

こっちからは施さないさそんなもん。そう言うのは勝手に学んで伸ばすもんだからな。ナニとは言わんが。

アケットの設営の手伝いでそう言う類に触れてしまつて勝手に覚醒したりしても自己責任だ。

むしろ健全だろう、世界はもつとエロくて良いと思うぞ私は。

マイノリティに指を指して弾圧するようなくそつまらない連中になるよりも、一緒に肩を組んで語り合うような親しみのある奴らになった方が良からうて。

YESロリシヨタNOタッチを教育し、文学作品を作れるように熱意と性癖を込めて、文学寄りに傾倒させてしまえば物理的な性衝動に任せて人を襲うだなんて事もしなくなるだろうしな。

満たされないからシたがるのであって、常時満たされてればそんな事思わないだよ誰しもな。

むしろ抑圧するから性欲を拗らせて暴挙に及ぶんだだろうが、ほんと分かってないよな頭の良い馬鹿共は。

自分の好きなおかずでシコつて満足してる奴が性犯罪起こす訳ねえだろうが。

と、言う感じで私はアクシズ教をそう言う方向に舵取らせているので実にフリーダムである。

その筆頭が頭アクシズなゼスタだからこそ程良い経営ができていると言っても過言では無い。

「さて、お前の事だろうから既に孤児院までの馬車などもちやーんと用意しているだろうから、少し外で待ってる」

「承知致しました、ごゆつくりとどうぞ」

あ、やべ、と言う感じの顔をしているゼスタを廊下にポイツと放り出して部屋へと戻る。

あの表情からして徒歩で来させるつもりだったなあのアホは。

セシリアン孤児院は郊外の土地を買い上げて建てたので、徒歩で行くとなると四十分は掛かるだろう。

どったんばったんと走り去っていく音が聞こえ、私は肩を竦めた。「と、言う事だから私服に着替えるぞ。流石に浴衣で行く訳にも行かんしな」

何とも言えない表情で渋々と頷いた二人と一緒に掛け用の恰好をする。

インベントリから以前ベルディア戦で使った修道服コスに着替え、

めぐみんたちはいつもの制服姿だ。

五分程時間をあけてから廊下に出るとぜえひゅうと全力で息を切らしたゼスタが片隅で死んでいた。

扉の開く音で気付いたのだろうか、此方に視線を向けるとグツとサムズアップして力尽きた。

「馬車の用意は済んでいるらしいからな、とつとと行こうか」

何か言いたげな二人だったが、まあゼスタだし……、と納得してくれたようだった。

廊下を歩き、女将さんの一礼を背に受けて庭園へと抜けて玄関口へと向かうと、馬車を用意されているのが見えた。

アクシズ教の旗を立てた立派な馬車であり、御者台に先程死んでいた筈のゼスタがキリっとした様子で座っているのを見て後ろの二人は絶句していた。

二人して後ろを振り返り、ゼスタを見て、と二度見三度見してから首を振った。

「どうやらゼスタがギャグ世界の住人である事を漸く認識したらしい。」

深く考えるだけ無駄だからな。大方先程くたばってる姿が擬態で、余裕綽々に別ルートで私たちを追い抜いて馬車に乗っただけだと思うぞ。

何せこのゼスタ、レベル三十台らしく地味にベテランだ。若かりし頃に何があったのかは知らんが、相当な経験をしている様子ではある。

独りでに馬車の扉が開き、小さな踏み台が中から降りてきたのを見て二人と一緒に感嘆の声を漏らす。

見やれば御者台の方で紐を握っているのが見えたのでタクシーの手动開閉みたいなギミックを組んでいるのだろうか。

「セシリアン孤児院まで頼む」

「はっ、畏まりました聖母様。どうぞごゆるりと」

馬車に入り込むと気品溢れるふかふかな座席や、アクシズ教らしく水を模した装飾が散りばめられていた。

……もしかしくなくてもこれ最高司祭用の豪華馬車では？

ふむ、まあ、確かにゼスタ個人で扱える馬車ではあるが、外部顧問の私が使つていいものか？

まあ、徒歩で行きたくないので甘んじて使わせて貰うけれども。

少し前の私であれば外堀を埋められてるなあだなんて感想が出ただろうな。

ざわざわと私へ集まる視線を感じつつも馬車に揺られる事十数分。郊外の一角をアクシズ教団が買い取つて建てた建造物が見えてくる。

アクシズカラーの水色を素調とし、清廉潔白な白を加えた清潔な印象のある孤児院だ。

よくある教会を孤児院にする案は通さず、孤児院がメインの建物として建てたのが此処セシリアン孤児院だ。

名前で自己主張高めな事から分かるように教団幹部的な立ち位置に昇進したセシリアが院長を務めている。

円滑な運営をするために人材も派遣しているし、餓えず汚さずの精神で資本金もたんまりある事から経営は順調。

今はアルカンレティア周辺に散見した小規模なスラムや孤児院を営んでいた教会を潰して保護した少年少女が移り住んでいる。

その際に拾った一定の年齢以上の者は冒険者としてアクセルに出荷し、アクシズ教団員の新米として教会に移り住ませている。

そのため、人材不足で嘆く事無く、資金源も出来て、しかも衣食住が約束され人並みの生活を受けられる事で一石数鳥の結果を得られた訳だな。

今のアクシズ教は兼任も可なので、孤児院を兼ねていた教会に住まうエリス教の人たちもっこりしているだろう。

現にこの孤児院で精力的に働いてくれているらしいので、孤児院のノウハウもカバーできている訳だ。

「此処がセシリアン院長が営む孤児院、セシリアン孤児院だ。子供がはしゃいで走り回れるグラウンドに、一階部分でささやかながら勉学のできる勉強スペースも作つてある。まあ、寮住まい制の小学校みたい

なもんだな、ああー、衣食住を約束された未成年のための学院のようなものだ」

小学校だなんて括りの無い紅魔の里出身の二人に分かりやすいよう説明を足しておく。

目の前のアクシズ教らしくないクリーンな施設を見て宇宙猫して二人だったが、此方を見て頷いた。

「成程、おんおんが聖母と呼ばれる理由が分かった気がします。外で遊んでいる子供たちも伸び伸びと生きていて……」

「……ん？ めぐみん、どうしたの？」

「いやあ、その……。あの一角に居るあれって……」

賞賛の言葉を途中で止めたためぐみんの視線を追うと、子供たちの人だかりができており、その隙間から見覚えのある姿が見えてしまった。

アクシズ教の教団員服を着飾り、その豊満なバストを重力に従わせてゆらゆらとさせながら四つん這いで三人の少年少女を背に乗せた女性。

長い金髪を三つ編みにし、あろうことか手綱のように確りと握られており、無邪気な暴力により右往左往と弄られている。

馬用の轡をされた本格的なお馬さんごっこに興じるあの変態こそ、この孤児院の院長を務めるセシリーであった。

「……………」

思わず無言になる私たち。いやあ、無理も無いだろう。

恍惚な表情で背に大好きな子供を乗せて、お尻側に乗った子が持つ硬い短鞭によりひっぱたかれ、ひいひいんっ♡と時折喘ぐように嘶く変態的な女性を見れば誰でもそーする事だろう。

一部の子供は横から後ろからセシリーの尻に蹴りを入れているし、何なら小さな子が豊満な乳房を掴んで乳絞りに宜しく握っていたりはたいしていたりする。

明らかに歩く卑猥物であるセシリーで子供たちは無邪気なサドツギで持つて遊んでいるようだった。

「……あの、私もあんな事をさせられるの……？」

とんでもない痴態な光景にゆんゆんが顔を真っ赤にしながら、恐怖でふるふると震えた声で呟く。

「んー……、流石にアレはセシリーだけだろ。でもなあ、ゆんゆんちよろいからあれよこれよでああなってるさう」

「ですね。流石に止めといった方が良いのでは？」

「……それもそうだな。流石に次期族長の娘にアレは駄目だ。族長に知られたら怒られそうだしな。ゆんゆんには教師役として手伝って貰おうか。あくまで臨時のな。それまでにあのアホをなんとかしておくから頑張ってくれ」

「あ、はい。此処で働くのは決定事項なんだ……。ま、まあ、働くのつてアルカンレティアに居る間だけだもんね」

「まあ、そうなる。変な事されそうになったら私の名前を使って良いぞ」

「う、うん。頑張ってみる」

ふんすふんすと気合を入れ始めたゆんゆん。そんな彼女に聞こえない様にめぐみんが耳元で囁いた。

「で、実際のところどうなんですか？」

「ぶっちゃけると族長から手紙を貰っててな。次期族長としてコミュニケーションを直さないとどうにもならないから鍛えて欲しいさうだ」

「ああ、だから比較的邪気の無い子供を相手にさせるんですね」

「そう言う事だ。ぶっちゃけ、ゆんゆんがあんなに自分に自信が無いのは里の環境のせいだからな。此方の社会では一般的どころか優等生なゆんゆんだが、里の環境では異端のようなものだ。悪い事をする事がベターな悪魔の学校で、不良行為と呼べる善良な行動を取ってしまっただけで孤立している様なもんだしな」

「微妙に分かり辛いんですが、まあ、確かにそう言う事でしょうね。おんおんもそう言うタイプでしたし」

まあ、そう言う事だ。

中二病である事がスタンダードな紅魔の里において、勤勉な真面目ちゃんが馴染める訳が無いのだ。

感覚のすれ違いにより、擦れてしまった結果があの特徴なコミュ障

なのだろう。

実際、カズマくんのパーティに加入してからと言うものの、パーティメンバーに対しては普通に喋れるようになったゆんゆんだ。

もう少し別方向からの経験を得られれば勝手に克服してくれるに違いなかった。

そのため、疑心暗鬼なぼっち生活を強いられた子供時代において得られなかった子供との会話を此処で摂取する訳だ。

なので、元々孤児院計画、もとい、アルカンレティア周辺のスラム撲滅活動の一環で建てた孤児院に手伝いに行かせる予定ではあったのだ。

……その院長にセシリーが抜擢された事が一番の難点であった事は言うまでも無いだろう。

いやまあ、性癖的にも子供が好きならセシリーが頂点に居れば、虐待や不正などの子供に不利益を与える事へのカウンターに成り得る訳で。

ある意味適材適所なのではある。……セシリーの性癖の業の深さは一先ず置いて、と言う話ではあるが。

まあ、割と良い感じにふわっとした様子で良い方向に転がるんじゃないかなろうか。

セシリーの変態性は御覧の通りであるが、地下室で気に入った子供をあれやこれやで連れ込んでイタして権限を振りかざして黙らせるみたいなタイプではない。

どこぞの貧困国家に行つて早春を買い占めるような輩とは方向性が違う。

ああして自らカーストの最下層気味に降りている事で親しみを持たせ、有事の時には身近である事からすぐさま察知して問題を解決。

……うむ、見た目を考慮しなければ良いやり方である、とも言えよう、か、うん。

「ああー！ 貴方様は聖母、聖母おんおん様ですね！ お待ちしております！ 此度はセシリアン孤児院にどうぞお越しになりました」「うむ、すまないね。本当ならもう少し早く来る予定だったが、色々と

立て込んでてな。二週間程、まあ、とある騒動が収まるまでは居る予定だ。その間、この娘を臨時の教師として扱って欲しい。主に魔法関連だな」

「は、はあ……。あの、もしかしなくても紅魔族の方なのでは……？」
「ああ……。大丈夫だ。このゆんゆんは族長の娘で、次期族長として経験を積むべく外の世界を、常識を理解しているちゃんとした娘だ。むしろ、紅魔族に生まれきれなくて苦労してたぐらいだ。私がその人間性を保証しよう」

「そ、そうでしたか。疑って申し訳ありませんでした。自分、昔は冒険者をしていました者ですからその時に、はい」

別の出口から豪華な馬車を見て出てきたであろう職員の男性に説明と推薦を兼ねた挨拶をしておく。

後ろから誰だこいつみたいなの視線で見られているのはまあ御愛嬌だろう。

私たちは上に立つ人間と言う肩書きを持たない生活をしてきたからな。

次期族長であるゆんゆんはこっち側の人間なのだが、そのコミュ障もとい妖怪友達欲しいの奇行のせいでなんやかんやあったし、なんちやって偉い人ぐらいのムーブは取れるようになってほしい物だ。

ぽかんとしていたゆんゆんを引っ張り出し、前に置く。

当然、見知らぬ人の前に出されたゆんゆんは硬直してはわはわ言い出すが、後ろから両肩に手を置いて拘束しておく。

「ほら、ゆんゆん。今日から此処が君の仕事場だ。内容は子供たちに魔法とは何たるかを教え、可能であればその習得を手助けする事だ。学園で優等生をしていたゆんゆんなら色々と知識を持っている事だろう。それを子供たちに分け与えて欲しい。決して、子供たちを立派に育て上げなきや、だなんて見上げるような目標を持たなくていいからな。あくまでゆんゆんは臨時の魔法講師だ。それから先の事は孤児院の職員がすべき仕事だ、管轄外だから気にする必要はないからな」

そして、悪魔の囁きの如くゆんゆんの耳元で優しい声色を使って落

ち着きを取り戻させていく。

ゆんゆんのような素直で真っ直ぐな娘を扱うに当たり、しなくてはならないのは動線引きだ。

魔法を教える「だけ」、人生を気にする事は「無い」、管轄外の事はしなくて「良い」。

そうやってやるべき事を明確にしてお膳立てしてあげれば、後は培った経験と知識で乗り越えてくれる筈だ。

「ほんと、おんおんって母親向きですよ。結婚して子供が出来れば良いお母さんになりそうです」

「ママになるのはめぐみだけだな」

「……はうっ」

後ろから脇腹をちよんちよんと突いてニヤニヤ顔してきためぐみにカウンターしておく。

「そうだぞ、お前自身がママになるのだ、と言う奴だ。」

事情を知らなくてはめぐみんが誰かと結婚間近または懐妊中に聞こえる会話をしつつ、胸の前で両手で拳作って気合十分なゆんゆんを職員に託す。

最初の内はこうして送り迎えをやって安心させてやるべきだろうな。

……方が一、子供たちに虐められて泣いたりしたら色々口出しをしなくてはならないだろう。

自分たちを優しく育ててくれる職員に対し、子供たちのやった事に対する追求を目の前できつめにしてやる。

子供と言うのは情に敏感なもので、自分が怒られるのと親が怒られるのでは感じ方が違うのだ。

それこそが責任の重さと言うものなのだが、案外そう言うのは品行方正に生きていると出くわさないものだ。

故に、自分たちのせいで大切な人が責められている場面と言うのは心にクるものがある。

無邪気に反発したら火に油を注ぐが如く職員を責め立ててやらねばな。

まあ、これを見ると私と言う人間に対してヘイトが向かってくるのだが、ゆんゆんを守るためには致し方ない。

コラテラルダメージと言うものだ、ぶっちゃけ孤児院の子供に嫌われようが問題は無いしな。

聖母、もとい、私の権限でこのセシリアン孤児院を赤子の手を捻るように潰せてしまうのだから、大人になるにつれてそこらへんも勉強するだろうし問題はあるまい。

「多分、おんおんが思ってる事は意味が無いと思いますよ。ゆんゆんって年下の子たちには意外と人気があるんです。困ってる姿を見るとついつい手を貸すので、彼女自身友達と思っていないだけで下の子たちからはそういう判定されていると思いますよ」

「ふむ、そうだったのか。ああ、ゆんゆんが欲しいのは対等なお友達、つまりは同年代のお友達だったって事か。道理で友人判定が地味に厳しい訳だ。酒場に居る連中と話す事もあるだろうに、友達が居ないって嘆いてたのはそういう事か」

「ああー……、まあ、そういう事になるんですかね。友達欲しさに友達のハードルを上げすぎなんですよゆんゆん。もはや友達を神様と信仰するようなもんです。自身の自己評価が低いから尚更に」

「ま、今回の経験で少しは良い方向になってくれると良いんだがな」
「そうですね。ゆんゆんですし、案外上手くやる事でしょう」

なんだかんだと言ってめぐみんはゆんゆんの友達であると自認しているからな。

意地っ張りな、と言うよりかは悪戯ツ気でそうじゃない振りをしたりするが、立派にゆんゆんの友達なのだ。

職員の男性に連れられるゆんゆんへ別の職員の男性や女性が集まり始め、良い感じな雰囲気になっているのを見て私は少し安心する。

さて、これで午前にするべきタスクも終わったし、次はアケツト絡みの仕事をするべきか。

豪華な馬車に戻れば、ゼスタが胸に手を置いて紳士的に扉を開いた。

そのやけに恰好の付く様子に、もしやこいつ上級貴族の出だったの

では、と勘繰ってしまうが捨て置く事にした。

「ゼスタ、次はアケット関連だ。何が残ってる」

「はっ、アケット設営に関しては既に準備等は完了しております。残さされていて、聖母様が扱うべき案件は検閲でしょうか。既に何件か検閲用の試作品が送られていまして、此方でも確認はしておりますが最終確認をして頂きたいかな、と」

「ふむ。まあ、小冊子と言えど小説だしな。その場で確認するには時間が掛かるか。良いだろう、案内してくれ」

「はっ、畏まりました」

一瞬、ゼスタの顔がニチャアと下卑た物になった気がしたが、まあこいつの魂胆は何となく分かっている。

多分、送られて来た小説が官能系で、しかも私が題材とかそう言うセクハラ案件だろうな。

今回アケットを開くにあたって私の事はフリー素材として使って良いと宣伝に使ったので当然だろう。

まあ、お手並み拝見と行こうか、小説の中で私と言う存在がどう扱われているのかも興味あるし。

43話

——路地裏に誘い込んだエリス教徒のシスターにちよめちよめする話。

——地下室に監禁したエリス教徒の少女に逆転きやはほうふふされる話。

——未亡人のエリス教徒の女性と恋仲になっていく話。

——エリス教徒の（ry

「……エリス教徒がらみ多過ぎるだろう。試作品の六割がエリス教徒がらみの官能小説じゃないか」

ゼスタに連れられたのはアクシズ教の総本山たる大教会の一室。

プレートには最高司祭室と書かれていたのでゼスタの仕事部屋に当たる場所なのだが、本来座るべき席に私が座って積み上げられた小冊子を手にとって修正箇所を指摘している。

どれもこれもアクシズ教徒では無く無辜なエリス教徒ばかりがエロの餌食になっており、十冊を越える頃には食傷気味に読み進める羽目になっていた。

因みに四割は私を題材にした物で、聖母様に死ぬ程甘やかされていちやこらする系と私にお仕置きされるM系の官能小説だった。

「教えは、教えはどうなってるんだこれは。エリス教徒に迷惑を掛けない様にとあれ程口酸っぱく言っただろうが。エリス教の名指しは全て修正案件、周知徹底させておけ」

「はっ、因みに具体的にはどう言う風にな？」

「青を素調とした衣服を纏った修道女あたりにぼやかしておけ。直接実在する団体の名前を使うなど言う事だ。まさかと思うが私以外の実在するモデルの名前を流用してたりしないだろうな、やけに特定の人物っぽい描写が散見されるんだが。流石に風評被害で訴えられたら此方から声明を出して謝りに行く案件だぞこれは」

「ううむ……、実のところどれもこれも素人の作った作品ですからな。もう少しモラルとデリカシー、そして配慮のある表現にすべきと注意事項に書き足すべきでしょう」

「……お前の口からまともな言葉が出たのは吃驚したが、間違っではないいな。禍根を残さない様に、オマージュだ、オマージュしろ。パクリと盗用だけは厳禁だ。素人作品と言えど最低限の秩序はあるべきだ」

指先を机に突きながら同人小説の束を見遣る。

ううむ、流石に先進的過ぎたか。

せめて模範になるような大ヒットベストセラー作品が生まれるまでは止めておくべきだっただろうか。

いや、逆に考えるのだ。

ハリポタや指輪物語の様な作品が何かしらの土台無くして生まれた存在かと言われれば、んな訳あるかで一択。

何かしらの土台となる作品を書き連ねた結果生まれた傑作であると言えよう。

「……はあ。あくまで文化的教養への先行投資だしな。作品を積み重ねれば後半には良い品が作られ始める事だろう」

「そうですねあ。……にしても、聖母様。御自身を題材にした作品に対して何か反応は無いのですか？ 例えばこの「聖母様と一緒に慈愛トレーニング」とか」

そう言つてニチャアと笑みを作ったゼスタが一冊の官能小説を持ち上げる。

表紙には割と上手いアニメ寄りな絵で、アクシズ教徒らしい少年の逸物を後ろから慈愛の表情でシゴく聖母っぽい格好をした私が書かれていた。

内容は聖母な私が自慰の仕方を優しく教えてあげると言う感じのバブみ系だ。

「……描写が下手くそ過ぎて台本形式の方がまだ読めるぞ。一人称視点だからといって地の文でも延々と自身の喘ぎを入れるのはなあ……。喘ぎ声って口から漏れてこそだろ。台詞で良いだろ。内心でやるなら……。いや、M系男性目線で書くなら正解なのか？ 自己投入しやすいように……。？ んー、私的にはイマイチだな」

「……そ、そうでしたか」

心の逸物が勃起しないんだよなあ。
食指が向かないと言うか何というか。

ひぎいらめえは身動きと口元を押さえ込まれた女性がすべきで野郎がしても勃つもんも勃たんわ。

むしろ、表紙の姉シヨタっぽいイメージが強いせいで中身がバブみM男だと感覚がバグる気分だ。

多分、内容の擦り合わせをしなかったんだろうな。

表紙がシヨタなのに中身は歳食ったおっさんが主人公だし。

「いや、いやいやいや。何を平然と評論してるんですかおんおん!?

あ、貴女が題材に! しかも、こ、こんな内容で!」

「どしたのめぐみん、そんなに慌てて。こんな童貞の書いた恥ずかしい小説じゃん。あんま否定するのは可哀想だぞ」

「童貞に優しい近所のお姉さんなんかですかおんおんは!」

沸騰したヤカンの如く真っ赤な顔で、聖母な私が教徒に懺悔室プレイをする【嗚呼、聖母様】を机にバンバンとチンパンジー宜しく叩き付けていた。

それは割と良い線行っていた作品なので丁重に扱ってあげて欲しいが、めぐみん的にはアウトらしい。

「それにもしもこれを鵜呑みにしておんおんに手を出す輩が出て来たらどうするんですか! この薄い本みたいに!」

「殺すけど?」

「ひえっ」

見せしめに惨たらしく拷問してから広場で公開処刑コースに決まってるだろうに。

性犯罪者だし、尻穴から鉄杭を貫通させてからポーションを掛けて延命し、鳥葬が如く磔にして自然死させてやろうじゃないか。

まあ、その前に敬虔な聖母信仰者たちが良い笑顔でその不埒者を取り囲んで私刑に処すかもしれないが。

そもその話、呪術は魔法とは体系が違うので口や腕を封じられようが意識がある限り徹底抗戦が可能だ。

近寄って来たところを【大発火】してやれば相手は瀕死の重傷を負

う事だろう。

因みに直撃した場合、先ず爆発の衝撃で圧迫され重傷の打撲が加わり、その後炎が身体に纏わりついて皮膚などの呼吸器官を焼き、辛うじて生きてても窒息か内出血多量で死に至る。

死体の検査なんて素人なので見た目判断だが、盗賊たちの様子を確認していた限りは以上のそれが当て嵌まる。

大体が苦しいとか息がとかか細く呟いていたし、痛みで身体が動かせないのかのたうち回る事も無く息絶えていたしな。

「にしても……どれもこれもぬるいな」

「と、言いますと?」

「何で凌辱物なのにキスして前戯して了解取ってからシてんだよ。変な所で常識出してくるんじゃないやねえよ。だったらもう和姦じゃねえーか、純愛だろジャンル違いだわ」

「う、ううむ……。大分攻めてる内容だと思うのですが……」

そうやってゼスタが「危険が危ないお年頃」と言う強姦物の皮を被ったノーマルな内容の小説を手にとって首を傾げていた。

王都と比べてアルカンレティアの官能小説は程度が低い、と言うよりは内容はノーマル気味なのだ。

一例を出せば、貴族の男性が屋敷のメイドに手を出すと云う内容で、欲望任せに少女を押し倒し手籠めにするもののは実はメイドは貴族男性に一目惚れしていて両想いだった、みたいな温いビールの様な物が乱立しているのだ。

悪徳貴族が欲望のまま嫌がるメイドに手を出せよ、陰謀の果てに落ちぶれた少女を陥落させるとか、どれもこれもラブコメのスピノフみたいなノリが多過ぎる。

なんだろう、変なところで常識人ぶるの止めてくれますか?

アクシズ教に自ら入ってる時点でお前も今日から教徒だとファミパンされた側なんだからはっちゃけろっての。

アルカンレティアは綺麗な心を持つ者が多過ぎるのだろうか。

……アクシズ教の総本山だろ、って?

どいつもこいつも実際に暗がりて女性を拉致って複数人で鬪るよ

うな暗い性癖を持つておらず、にじり寄りながら手をわきわきと動かして相手の反応を見るぐらいが関の山。

間違つて胸に当ててしまえばお互いに気まずそうな雰囲気を醸し、自然と無言で解散するようなヘタレしかない。

良くも悪くも根が真面目と言うか、性根が子供のまんまなのだ。

だから悪戯のカースト上位がスカート捲りなのだ、昭和の悪ガキか何かかお前らは。

そんな奴らが書いた官能小説は所詮、度の少し過ぎたラブコメに過ぎず、抜ける作品かと問われれば息子が萎える事間違いなしな訳だ。

「……淫習が存在する村を題材に私もアケツトで限定販売するか。鉾山町にでもして閉鎖的空間かつ隠蔽がしやすい暗がりのある設定で。題名は……カナリアが鳴く頃に、とでもするか。主人公を男性の旅人あたりにして、気になった少女を見かけて仲良くなるものの、実は裏で村人たちに共有されていたみたいな感じで……。タイムリープ、いや、伝記物っぽくなんかそれっぽい設定を付与して巻数を増やそう。最終的には主人公も外道に堕ちて村人に加わるみたいなおチにして救いも無い感じに仕上げるか……。いや、最後はハッピーエンドの方が受けが良いか？ 後味が悪いとすつきり抜けた気分になれないもんな……」

さらさらと羊皮紙の空いた箇所を箇条書きでメモして、暗黒微笑を垂れ流しながらプロットを書き綴る。

ゼスタは私の口から漏れ出た単語から想像してしまったのか、前屈みにビクンビクンと跳ね始めて俎板の上でのた打ち回る魚めいた奇行を開始。

めぐみんは心底呆れた様子で溜息を吐き、近くにあった小説を手を取って読み始めた。

私が官能小説を執筆している事は既にめぐみんにバレているし、何なら添削と誤字脱字のチェックを兼ねて試し読みもさせていたりもする。

なので、時折うわあと口にしながらもむつつりに育つたためめぐみんは読み進めてしまう訳だ。

そして、何処か物足りなさを感じながらそつと置くまでがセットであつた。

「取り合えず、創作規定の更新だな。先程も言ったが実在する団体及び地名、そして実在する登場人物は却下だ。風評被害に発展したら事が事だからな。一線越えてエリス教と殴り合いなんて嫌だろ」

「そうですね。不倶戴天のエリス教ではありませんが、今では隣人として接する事もできましよう」

「不倶戴天てお前……。んなこと思ってるのアクシズ教の一部ぐらいだろう」

「……ふふふ、今は、ですがね」

そうゼスタは珍しく神妙な顔で遠い目をして呟いた。

……え、昔何かあつたのか、エリス教と。

一昔前の学生運動が盛んだった頃の思い出を語る前世の爺ちゃんを彷彿させる雰囲気困惑する。

「ああ、若い人は知らないと思うのですが、アクシズ教が作られた当時は色々と凄かつたんですよ。実際、私も本当に幼い頃に片鱗を見たくらいでしたが、今の光景が微笑ましくなるようなくらいに過激だつたのですよ」

「と、言うところ？」

「女神エリスを信仰するエリス教徒と、後身、いや、内部分裂して作り上げられた女神アクア様を讃え敬愛し崇めるアクシズ教はその成り立ちが異なるのですよ。初代最高司祭となつた方のお言葉が残っていますね。——汝、迷える子羊を囲い、癒し、育てなさい。肌の色を、言葉の違いを、文化の差異を、性別の垣根を越えて、隣人と手を取りなさい。それこそが慈愛の精神である。と、女神アクア様のお言葉を聞いた元エリス教徒であつた女性は孤児院を基に、この言葉を掲げて新たな信教を作り上げたのです。慈愛あれ。当時、魔王の脅威によって荒れ狂つた世論と社会にその言葉だけで光を射し込んだのです。……ふふ、本当に懐かしいものです。悪魔討伐を頑なに強硬するエリス教とは物資の取り合いや教徒同士の睨み合いなどで殺伐としていた時代があつたのですよ。ああ、本当に……懐かしい」

「……ふーん」

あのあの、クリスもといエリス様（本体）があんな風になってるのそれが理由じゃねえ？

悪魔討伐を強硬してた理由って死人が増えに増えてストレスマツハだったから原因を潰すためだろ。

バニルに聞いたが上級未満の悪魔は残虐な方法でストレスを与えて無理矢理食事をしている者も多いって話だし。

んで、アクシズ教の誕生のせいで世論が天秤し始めて社会が悪化、内ゲバみたいな形で進行が滞った、と。

良かれと思った計画が上手くいかずにずるずると長年悪魔問題を抱える事になったエリス様は……。

……有り得る、有り得る話だなあ。

当時の学生運動って相当過激だったって話だし、その雰囲気似ているこの話からして……なあ。

「その時に物騒な事件もあったんじゃないか？ それアケツトで書いてみたら良いんじゃないか。別にエロい話じゃないと出店しちゃうけないってルールでもないしな」

「ふむ……、今再び筆を執るのも良いかもしれませんね。歴史物になるのでしょうか」

「そうなるな。年表形式で書いても良いし、順を追って推移を書いてもいいかもしれんな。今のアクシズ教はフリー信仰だし、エリス教徒の手にも渡るかも知れんぞ」

「それはそれは……、くっそ堅苦しい文章が途中で官能小説になっていたら面白くないですか？」

「良いなそれ、見てみたい」

「承知しました、少し頭を捻って文章を絞り出してみます」

とんでもない事を聞いてしまった、と言う感じのめぐみんがそつと視線を反らしていた。

まあ、うん、うちのパーティに居るもんな女神が。しかもこいつらの信仰対象が。

今じゃ特典としてお持ち帰りした男の子と良い感じの仲になって

日々を謳歌してるぞ。

にしても、どれくらい関係が進んだのだろうか。

そこそこ良いお酒を差し入れておいたし、あの雰囲気やってないとは思わないが……。

ううむ、純愛物は苦手だからな、想像が付かない。

あんなピュアピュアな初々しいカップルのあれこれだし、キスぐらいが精々なのかもしれん。

「取り敢えず、一般教徒からの投稿物はこんなもんか。残るは……」

「ええ、そちらの木箱に入れています。アケツト用の試作品として送られていながらも、計三種の文字形態に加え、別言語っぽい記号みたいな文字も加わって構成される複雑過ぎる怪文小説ですな。けれどまあ、表紙からして大分男受けする格好良さなどはありますが、もしかして読めたりします?」

「無論、こいつは日本語。私たち勇者候補の故郷と言える場所の言語で書かれたやつだな」

——装甲悪○村正。

——機神咆哮デモン○イン。

——○iesira e。

——マ○ラヴ。

——F○te／staynight。

——うたわ○るもの。

——CLONNAD。

——リトルバ○ターズ!

等々、特級呪物級のやベーラインナップで構成されているエロゲー作品ばかりであった。

貴様、やり込んでるな! と突き付けられるであろう作品の再現度にガチめに戦慄が走る。

あのあの、明らかにこれ原文ママなんですが。

よくもまあ人力で書いたものだなと冷や汗を浮かべざるを得ない血と汗と汚い汗の結晶に大困惑だ。

どれもこれも、著者名が○○(メーカー)の回し者と言う感じで、統

一されているあたりサークルか何かかな？

一章に当たる部分くらいは執筆量であるものの、どれも続巻を書きます、書かせてくださいと言う感じの後書きばかりで相当にこの手の娯楽に飢えていたんだろうなあと合掌ものであった。

んー……、この世界の共通言語で書かなかったあたり、流石に万人受けしないだろうから身内（勇者候補）で消化したいって感じなのだろうか。

日本島みたいな感じでジャンル分けしといた方が良いでしょうか？

いや、アケツト四日目を作ってその日をオフ会もとい同人誌即売会みたいなノリで勇者候補デーにすればいいか。

「流石にこの世界の人間だと理解が追いつかないだろうからと日本語で書いたっばいな。アケツト四日目を勇者候補オフ会にして、そっちで売買するから受け取って合格サイン書いといてくれ」

「承知致しました。……ううむ、実に内容が気になりますなあ、特にこれとか」

そう言っただけスタは恋姫↑○双を手にとって名残惜しそうな表情を浮かべていた。

絶対お前パケ買い、もとい表紙で選んだら女の子多たって理由で。

此処に送られている事もあって官能小説であろうと目星を付けての事だろうが、異世界の過去の歴史改変物とか絶対理解できないだろう。

……にしても、明らかにこれコピー用紙レベルのくっそれレベルの高い紙に印刷されている感じなんだが？

なんだ、印刷系のニッチな特典でも貰った奴が居るのか？

……いや、合作か？

紙用紙作れる特典と印字に関する特典を組み合わせて、いや、もしや記憶を出力するタイプの特典とか、完全記憶能力みたいなのも組み合わせさせた作品かこれ。

昔やった事のあるエロゲーの開幕の文章書いてみろって言われたら普通書けないだろうしな。

………異世界ファンタジーの世界に持っていく特典それで良かったのか???

絶対に無人島に何を持っていきますかのノリで特典貰っただろこいつら。

いやまあ、どうせ誰かがやるでしょ理論で最初からリタイア組だったのかもしれないなあ……。

死因が電波な台詞吐きながらしてたブリッジオナニーを家族に見られて憤死とかだったら最高に面白いけども。

絶対アクアさんが拾ってきそうな死因だよなあ。

なんだかんだアクアさんメスガキ要素と云うか資質あるし、プークスクスと笑って煽りそうだしなあ。

カズマくんの愚痴を言う時大概あのヒキニートがあつて悪態吐いてるしなあ。

過去に送った勇者候補たちの面白死因で打線組んでた時もあったし、ダーウィン賞ばりの内容で酒の肴にはなった。

「とまあ、こんなもんだらう。送り返すなり取りに来させるなりして修正させておいてくれ」

「承知致しました。修正内容については応募規約に盛り込み、周知徹底の上で女性教徒に修正場所を指摘させます」

「しれつとセクハラしてんじやねえよ、変な性癖付いちやうだらうが」

「それもまた一興かなあと。……普段物怖じしない強気な姉御系にこういうのさせたら良くないですか?」

「それに関しては同意してやるが、現実でやるな現実で。それも小説にして書かせとけ」

「それもそうですな。そう言えば服装等はどうしましょう? フリー信仰とは言えどもアクシズ教の信徒服を指定しておきますかな?」

「えつちな恰好で売り子したい奴も出てくるだろうから自由にしてあげ。売買品のカタログを通行手形みたいにしておいて出入り可能にしておけば良いだらう」

「ほほう、アクシズ教徒であれば割引も考えものですか?」

「1500エリスのところを1000エリスに割引しておけ。無論、

原価は100エリス以下に抑えて儲けを出すように」

「かしこまりました」

非常にわつるい笑みを浮かべながらお主も悪よのおとゼスタと共謀する。

アクシズ教徒になってもならなくてもカタログ代だけで儲けになるのだから笑顔になるのも無理も無いだろう。

ついでに割引目的であつても教徒が増えるのであれば尚更に良しと言う感じで。

うわあと言う表情でめぐみんがドン引きしているが、儲けが出なければ飯は食えないのだ、是非も無し。

まあ、教会本部の大聖堂を解放して設営場所にする予定なので運営側の費用はほぼ無いのだが。

人件費？ そこの暇してる教徒を動員すれば問題無しだな、あつはっは。

「なんか質の悪いカルトを見ている気分になってきました……」

「失敬な、何処がカルトだ。年々溜め込んだ悶々とした思いを性癖全開で開放してすつきりできる場所を提供してやってるんだ。それなりのお代を貰わねばやってられんだろう。もつとも、こんな粗末な物を見せられては鼻で笑つてしまふけどな」

「ふうーん……、野生の紅魔先生ですもんね。ところで最新刊の内容が何処となく見知った人物に酷似している件について弁明を聞きましようか」

「オーケイ、私のやっている事は質の悪いカルトの様なものだ。肉欲に溺れる様を邪神に奉納するような邪悪なカルトだったな、何も間違つてはいなかった。……ところで、我が教団の秘密を知つてしまつたな？」

すすすとソファに座るめぐみんの隣へと移り、むにむにほつぺに手を置いて視線を合わせる。

ぎよつとした様子で困惑したためぐみんに近付いて、ガチ恋距離の吐息を感じる近さでルビーの様な瞳を覗き込む。

途端に初心さを見せ始めたのを可愛らしいと思ひながら、全力で話

題の誤魔化しを図る。

……いやあ、うん、結局実体験を書いた方が筆が進むんだよ、仕方ないね。

だからと言ってねっちよりとした墮落模様を詳細に描写してエロティシズムを演出したのはまずかつたなあ。

そのモデル完全にクリスだったし、何ならあの時指摘したように清楚な修道女っぽい言い回しにさせた内容だった。

淫らで迷える私に神の導きをお与えください、みたいな内容だったしね。

メイドスキー伯爵の外伝シリーズ、通称お出かけシリーズの教会編である。

表向きは善意と言う名の札束ビンタで経営が傾きかけていた貧困した教会を支え、慈善の見返りとして色々とそのシスターに要求していくセクハラ調教系だ。

そのシスターが慎ましい生活を送っていたが故に低身長幼児体型かつ痩せ気味と言う一部の性癖特攻を持たせた作品として送り出したんだつたな。

最終的にその教会はおふせつせ（意味深）できる場所になると言うオチである、実にすこ。

……はい、モデルはクリス、と言うよりも真なる姿（NOパッド）のエリス様である。

いやー、アケットの規約にうんぬんかんぬん言ってたけれども問題しかないな！

「……いや、待てよ？　女神なら人権は適用されないから実質合法なのでは……？」

その台詞にゼスタが「エンツ!!」と奇声めいた断末魔を上げて床に沈んだが、まあいいかゼスタだし。

小首を傾げたためぐみんを誤魔化すべくほっぺすりすりを敢行した。「そ、そんなにや事でえ、わ、わたしが屈するにやんて事はあ……」

だなんてとろつとろな声色で目を回すようにして陥落したためぐみんを抱き潰してソファに寝かせる。

官能小説は読めるようになったのにこうして物理的な接触だこの様子なんだよなあ。

少しは耐久性が付いたと思ったのだがまだまだ初々しいと言うか初心なままなめぐみん。

……もういつそ百合路線で行くか？

所構わず物陰でちゅっちゅして、妖しい雰囲気のまま優しい愛撫だけで終わらせて。

悶々と滾る情欲を孕ませて身も心も委ねたくなるぐらいに陶醉させて、爆竹を入れたガラス瓶を鑑賞するかの如く愛で続ければ嫌でも耐久性付く事だろう。

辛抱堪らずに襲い掛かって来てくれれば万々歳と言ったところか。

……いやしかし、貞操帯を付けて射精管理ならぬ絶頂管理をして悶え喘ぐ可愛い姿を見続けるのもあり、だな。

またはララやクリスとの情事を目撃させてかつてのクリス宜しく肉欲に悶える展開にするか？

……いや、それは止めよう。

ただでさえこうしてクリスに対する疑念を突っついて来ている訳だし、ヤンデレめぐみんと化す可能性も有り得る。

いやまあ、二十八カ所の刺し傷を作って死に追いやられようが生き返るんだけどね私。

それでも心に残りそうな事は極力して欲しくないしさせたくないんだよなあ。

「うーむ、こういうのを読み続けてたから少し頭が茹だったかもしれんな。今日はもうお開きにするか」

手に持っていた沙耶○唄の小説を木箱に入れ戻し、封印するかのよう蓋を閉じた。

取り敢えずやるべき事は終えたし、旅館に戻るか。

くったりしためぐみんの膝と背に手を回し、ひよいつと持ち上げて姫抱きして部屋から退室する。

なーんか忘れていたような気がするが、すっと思ひ出せないと言う事はそれほど大事な事では無いのだろう。

後ろ脚で部屋の扉を蹴り閉じて、旅館へ戻る最中に喉元に引っ掛かった小骨の様に脳裏でもやつくそれに首を捻る。

旅館に戻る間に姫抱きめぐみの姿を四方八方からじっと見つめられていたが、まあ、魅せ付けておくとしよう。

ふふん、うちのめぐみんはこんなにも可愛いのだ、無意識に首裏に腕を回してぎゅつとする姿は実に愛い。

部屋へ戻り、くったりめぐみんを布団に転がして額の汗を拭う。

「……あつ、ゆんゆん回収するの忘れてたな。まあ、夕食までには帰ってくるだろう、多分」

喉に刺さった小骨が抜けた瞬間であったが、喉元過ぎれば何とやらと言う感じですつと消えていった。

窓から覗いた夕暮れの空にゆんゆんの驚愕した顔が浮かんだような気がしたが、まあ気のせいだろう。

次期族長になるための試練の一つだと思って頑張つて欲しい物だ。

二日後には魔王軍幹部が破壊工作に来るだろうからそれもゆんゆんに……、あー、これかあ……。

そーいやゼスタに伝えたつけ、これ。

うーん、まあ、明日でいいか。

ぶつちやけ、今のアルカンレティアに破壊工作を仕掛けるだなんて墓穴を掘るようなものだしな。

毒、だっけか。うーむ、しまったな、アクセルにベルディアを置いていったのは間違いだっただか。

流石にこうも離れていてはパスを通じての念話は圏外だ。

バニルは契約と言う形で、何処にでも居るし何処にも居ない、みたいな感じで繋がっているからできるだけだ。

ぶつちやけあいつの本体は地獄に居るので何処に居ようが念波が通じれば会話は可能である。

蟲の報せめいた感じでミュンミュンと念波を発信する事は出来るだろうが間に合わないだろうしなあ。

毒を使うモンスターなんて腐る程居るしなあ、流石に特定は難しいだろう。

取り敢えずアクアさんに毒を治療するための薬品でも作って貰うか。

作り方は簡単で、聖水を作ってから『デトフィケーション』を付与して貰えば特効薬の完成だ。

元と付くが水の女神であるアクアさんは水に対する親和性は非常に高く、素手で触れてしまうだけでワインを水に変えてしまうくらいの変換効率を持っている。

そのため、水に付与する魔法や水を対象にした魔法は非常に効果が高い傾向にある事はベルディア戦で証明されている。

おかげでバヨネットを溶かして作って貰った、この首元に掛けている十字架ネックレスを水に浸すだけで浄化できる魔道具と化している程だ。

可愛い信者を守るためだ、アクアさんもしつかり働いてくれるに違いないかった。

44話

さて、昨日は正直ムラムラが限界だった事もあり色々としてすつきりした後寝てしまったので考えねばならない。

私が契約した悪魔、見通す悪魔ことバニルのおまけで知ってしまった魔王軍幹部の来襲について、だ。

……いや、本当にどうしようか。

まさかこんなに短いスパンで魔王軍幹部に出くわすだなんて思いもしなかった。

一番最初に出会った魔王軍幹部——首無し騎士ベルディア。

彼はアンデッドと言う性質から生前の記憶を継承していた元人間であるが、劣悪な環境に居た事で味方であった人間に愛想が付き魔王軍へと降った。

その実力は一つの団を率いるだけの確かなものがあり、デユラハンの性質と魔王の加護とやらで手強い相手だった。

アンデッドの軍勢を率いた遊撃を担っていたと考えられるのだが、その情報で思う事があった。

もしかや、魔王軍幹部ってそれぞれ特色のある軍勢を引き連れているのではないかと。

だが、それに反論するようにバニルと言うワンマン迷惑アーミーな奴も居たので首を捻らざるを得ない。

「……そう言えば、バニルの奴、魔王軍の城の結界維持のためのなんちやって幹部だったって言ってたな」

なんちやって魔王軍幹部。

……魔王軍幹部になんちやっても糞も無いのでは???

そのところが良く分からないんだよな。

ベルディアの様に魔王に忠誠を誓って統率されていた幹部が居て、バニルの様に好き勝手しても許される自由奔放な幹部も居る。

そうなると魔王軍幹部の付加価値とは一定以上の強さを持つ個体である、と言う事になる。

または、ギャグ寄りの王道RPGの脚本扱いと言うべきか、個性が

強いのを選んでいると言う可能性もある。

しかも解せない点が魔王軍には多々存在する。

紅魔族の里に度々襲撃しにくる事もあってそれなりの強さを持つ個体は補充が効くと言うのに、それを利用してアクセル……は少しアレだが、小さな村や町から狙いを付けて根絶やしにするような作戦をとって来ていない。

言うなれば、ターン制の戦略ゲーム染みた戦争ゲームに近いのだ、人類と魔王軍との戦いは。

積極的に魔王軍は攻め込んで来ているものの王都前線による抗いによって拮抗している、拮抗できてしまっている時点で普通の戦争ではないのだ。

まるで、国同士の争い、ある一定の基準を設けた上での戦争行為の様に見える。

そうなることやほりと言うべきか、魔王は転生者に違いないと言う決め打ちをせねばならない。

基本的にモンスターとは人類を餌か縄張りに入ってくる邪魔者くらいにしか思っておらず、野生のゴブリンならともかく他のモンスターが積極的に人類へ牙をむけて来ている訳では無い。

結局のところ自衛能力を高めた野生動物の延長線上にしか無い、と言える。

そのため、しっかりと統率を成して横と縦の繋がりを持っている魔王軍と言うのは異質と言わざるを得ない。

つまりは命令を聞く事のできる最低限の知性を会得していると言う事であり、魔王と呼ばれる存在の在り方と言うのが見えてくる。

恐らくながら、魔王の意向は人類の滅亡では無い。

「……生存競争でもなく、侵攻侵略でもなく、生存権の拡充でもなく、で、あれば……」

一種の種族としての独立、国を立ち上げようとしているのだろう。

露骨な海戦術による人類への破壊工作をせずに王都の前に築いた前線を維持し続けているのも結局は時間稼ぎ。

知性を会得したモンスターの教育を優先して、どうしようも無い奴

らをそこそこ知性のある幹部で先導して磨り潰しながら増やしているように見えてくる。

魔王、魔の王として国を統べる王様になろうとしている、そんな風に思えてくる。

……まあ、これは現状から察する憶測でしか無いのだが。

仮に私が魔王側に立って人類の滅亡を目標としているのであれば、食料インフラを徹底的に潰し、貧困と飢えに喘いでいる所に病原をばら撒き、何も出来ずに死んでいくような環境を一方的に押し付けて、ワンサイドゲームを仕掛ける。

または、モンスターの繁殖のしやすさと言う特性を用いて、一部のダンジョンを抱え込んで生産ユニットとして質より量で人類圏の押し流しを図るだろう。

素人でも幾つか人類の滅ぼし方を思い付くのだ、頂点に立つ魔王がそれを考えていない訳が無い。

と、なればそれを用いない理由を考えるに二つ程思い付いた。

一つは穩健思想の魔王である、と言う事。

そもそも前線の争いは自衛目的で人類を足止めしているに過ぎず、日々どうすつかなあーと頭を悩ませているパターン。

二つ目はそもそも戦争の土台が作れておらず、戦いが成り立っていないパターン。

モンスターの教育に制限が掛かっていると、個体数に制限があるとか、何かしらの障害によって人類殲滅の糸口が掴めていない。

あるいは天界側にてこ入れである勇者候補たちの活躍が目まぐるしく、消極的遅延行為に費やざるを得ない、とか。

「まあ打って変わって積極性を持ち出されても困るからどれもこれも憶測でしか無いんだけどな……」

故に、現地民でもなく、魔王軍でもない勇者候補と言うPMCめいた私たちは備えなければならない。

過去にどう言った活動があったのかは未だに掴めていないが、相互補助組織が樹立していない時点で全員がスタンドアロン化しているとは思えない。

我々の、日本人の在り方として一つの目標に団結して協力をするスタンスは誰も彼も心に根付いている筈だ。

そのためのアクシズマーケットであり、小さなリーダーの酒場なのであり、未来への先行投資でもある。

何故かアクシズ教を半ば乗っ取る形で掌握できてしまったのは、……割とマジで分からないし理解できないが、幸運であったと今は思っていたい。

既に二体の魔王軍幹部を討伐している私を旗印に勇者補助組織の樹立を進めているのも日本人の気質を考えての事だ。

結局のところ、日本人は羽休めする枝が欲しいのであって、羽ばたく事自体には不満は無いのだ。

そういう国民性であり、そういう教育を施されている事もあり、一旦腰を落ち着かせる椅子は皆欲しい筈だ。

何処ぞのヒーロー協会宜しく方向性を決め付けて勇者候補たちを縛り付ける場所ではなく、手を取り合うための憩いの場を用意しようとしているのはそういう理由があつての事だ。

アケットに集まる勇者候補の人数次第ではあるが、……割と好感触なんだよなあ、送られて来た物を見る限りは。

原作ママの日本語で書かれた小説の他に、明らかに勇者候補っぽい奴の名前で送られてきていた作品も確かにあつた。

今の所確認できる人数は十数人程度であるが、分母を考えるとそこそこの人数と言えるだろう。

「……それに、クラス単位で転移召喚されるような事態が起きていないし、天界側のでこ入れはあくまで最低限と言う感じが透けて見えるしなあ」

ダンゴムシの群れに蟻が群がっていたとして、それを助けてあげようだなんて思う奴がどれくらいいるだろうか。

天から見下ろした神様の視点だなんて結局そんなところなのだろうし、輪廻転生業務に差し支えたから勇者候補を送ってトラブルシューティングをしているに過ぎない。

でなければ、複数人の勇者候補が持ち得る特典を束ねた様な出力の

物を渡して魔王を瞬殺しない理由にならない。

結局のところ、天界からすればこの世界の人類がどうなるかが割と興味無いのだろうし。

出荷するための実が傷物だったから困っていて、出荷量が減るから困っていると言う訳では無いのだろう。

「椅子に座りながら唸っててどうしたんですかおんおん」

「ん、少し考え事をな……」

旅館によくある部屋の奥側にある机と椅子と窓の空間たる広縁で、一人考え事をしていたらめぐみんが後ろから抱き着いて来た。

少し肌がしっとりとしている事から朝風呂に入って来たらしい。

温泉とめぐみんの匂いで少し癒されながら、あすなる抱きされてしまった私は仄かに感じる膨らみを感じながら思考を少し止めた。

いやまあ、勇者候補だから魔王を倒す、と言う前提ではあるのだが、この可愛い系幼馴染染幼妾なめぐみんを守るために立ち上がったと言っても過言ではないんだよな。

ちよいと順番がアレだったが、肉体的相性の良いララが間に加わって尚更に守らねばと言う心持ちであった。

結局のところ、私はこの幸せな時間を守りたいが故に色々と奔走しているに過ぎない訳で。

首に回された細い腕を手に取り、小さな白魚の様な掌を頬に当てがって触れ合いを楽しむ。

ちよつとした事で初々しい姿を魅せるめぐみんであるが、前はこうして私から甘えに行く事もあったのだ。

主に、戦闘で心がささくれ立って精神的にピリピリとしていた時は、こうしてお互いの体温を感じ取って癒しを得ていた。

一度、デストロイヤーにファイヤーデストロイされ死んでから、こういう触れ合いよりも肉体的重なりを求めてしまった事もあって久しぶりに感じる。

身体はララに、心はめぐみんに寄り添っているのが今の私と言う公然二股野郎な訳で。

……もう一度死ねば案外ストイックな方向に修正できるんじゃない

かろうか、主に戦闘狂としてだが。

でもまあ、こうして触れ合う事を許されている事もあって、めぐみんも私を好いてくれていると心で感じる。

「アルカンレティアに来た時にだが、バニルから言われた事があってな。どうも明日、此処に魔王軍幹部の奴が毒を使つて破壊工作に来るらしいんだ」

「……へ？ 初耳なんですけど？」

「うむ、めぐみんにだけ言ったぞ」

「ララ？ 大分前に耐毒スキルを会得してたっぽいから割と本気で心配していない。」

「何でも淑女教育と称して毒の耐性を実家の方で得ていたようで、冒険者になつてからスキルを取つて地道に伸ばしていたらしい。」

「ララは彼の大貴族ダクテイネス家の令嬢なので然もあらん、長女だし政治関連で何かしらあつたら事なので備えているのもおかしくない。」

「まあ、そう言う事で考えられる毒の使用方法は源泉への混入か直接的な毒殺あたりだろうから、明日は温泉に入らないで欲しいんだ。ララは耐毒スキル持ちだし、アクアさんは浄化するだろうし、カズマくんやクリスには口頭で伝えておけば良いだろうしね。ウイズさんは……案外耐毒スキル持つてんじゃないかなあつて思うんだよね」

「ふうむ……、まあ、確かに私は爆裂魔法関連のみに割り振っていますし、少し残念ですが仕方ありませんね」

「すまないな、一応ゼスタに色々やらせて速攻で工作員を捕まえて囲んでボコす予定だからそれで勘弁してくれ」

「……なんか最近のおんおん殺伐としてませんか？ 思考が逆鱗ドラゴン染みてませんか？」

「ん、んんー……、まあ、否定はしないな。私の大事な人を守るために色々としていたからな、少し神経質になつてたかもしれない」

「そう言つてめぐみんのむにむにほっぺに手を当てる。」

「少し体温が高くなつたためめぐみんの赤面顔に気力ゲージを回復させつつ、私の掌に手を重ねてくれた事に喜びを感じる。」

……あー、こういうので良いんだよこういうので。

ララやクリスだとすーぐに肉体直結に繋げるからなあ、ちゃんと愛情で癒しに来てくれるめぐみんマジ天使。

実際、私の心情は前世三割：めぐみん四割：ララ二割：クリス一割くらいの比率で構成されているからな。

ララの事は確かに愛してはいるが、肉体的な共依存な一面もあるからなあ……。

めぐみんとの関係は精神的な共依存であつたし、結局のところ世間一般的な恋愛なんて元々できやしなかつたのだろう。

こうして色々と落ち着かせた状態で考えるとララとの関係を早めたのは少し早計だったようにも思えてきってしまう。

……いや、私が浮気性な性格をしているのだろうか。

愛してくれるから愛を返しているのを繰り返して塵が積もつた関係であるとも言えてしまう。

まあ、何にせよ私がクズ人間である事は変わりはないのだ、開き直るしかあるまいて。

こうして婚約者が居ると言うのに幼馴染の少女の身に触れている時点で本当にどうしようもない浮気野郎なのだから。

……勇者つてハーレムを築くのが王道的なもんだと思つてたけれども、案外こういうドロドロとした実情があつての形成だったのかもしれないなあ。

自分を犠牲に世界を救うくらいのお人好しだからこそ、ヒロインたちが傷心するのを良しとできない。

だからこそ、誰も彼も受け止めて愛を囁いて済し崩しのハーレムを築いてしまうのではなからうか。

正直、凌辱エロゲー的な攻略をしたララと純愛ギャルゲー的な攻略をしためぐみんな訳だし、ある意味方向性が真逆だから修羅場に陥つていない可能性が非常に高いんだよなあ。

なので、肉体的な関係が続ける事で純愛ギャルゲーからラブコメエロゲーへと変貌した時に、めぐみんの心象が非常に恐ろしいのだけだども。

今の所、正妻枠であるララがめぐみんを愛妾として良しとしているから成り立っている訳で。

この子猫みたいなお可愛いめぐみんが成長を果たして、あの時の様なヤンデレめぐみんと化した時が本当に怖い……。

「流石に魔王軍幹部の情報なんてあんまり持ってないからな。ぶっつけ本番になってしまうのが怖い所ではあるけどな」

「そうなんですか？　なら、ウイズに聞いてみれば良いじゃないですか」

「ああ、昔、手練れの冒険者だったんだっけか」

「いえ、魔王軍幹部の一人らしいので」

「……………はい？」

寝耳に水なめぐみんの情報に若干裏返った声を返してしまう。

……後ろに振り返り、首筋に鼻を押し当てめぐみんをして心を落ち着かせてから詳細を尋ねる。

どうもあの貧乏店主なウイズさんは魔王城の結界の維持を理由にアクセルへの進軍を禁止させているらしい。

理由は分からないらしいが、あの魔法雑貨店に固執している事から何かしらのエピソードがあるんじゃないかとの事だった。

ふーむ？

そう言えばウイズさんのリッチー化にベルディアが関係していると言うのは聞いた事があったな。

つまり、なんだ？

首無し騎士ベルディアに冒険者時代のウイズさんが殺され、その後リッチー化して魔王城辺りに殴り込んで魔王となんかやかんやで話し合いが成立して、結界維持の条件でアクセル滞在を許されている、的な感じか？

その割にはウイズさんに致命傷つぽいのは無かったような気がするんだが。

となると……、アレか？　めぐみんにやろうとした死の宣告か？

アレを克服するためにリッチー化したのかウイズさん。

「あー……、成程？」

「幹部が減ればアクアの結界破壊の魔法で何とかなるらしいので見逃されてる感じですね」

「ふむ、ならちよいと聞いてみるか。毒を使う魔王軍幹部について分かれば封殺も視野に入れられるかもしれない」

「んふふー、役に立てましたね。尽くす女なので私はい」

「ああ、本当に助かったよめぐみん。これで被害者を減らせる」

「……ほんと、そういうところ変わらないですよねおんおんは」

非常にこっ恥ずかしい台詞を吐かれてしまったので思わず黙ってしまう。

いやほら、一応アクシズ教の聖母として働いている訳だし？

こうして未曾有の危機が迫っているなら阻止するのは冒険者としてもするべき事だし？

……だなんて言い訳を口にしていたらめぐみんに微笑ましい顔で良い子良い子と撫でられてしまった。

「……さてと、ウイズさんに会いに行くか」

「ふふ、そうですね。流石にもう起きてるでしょうし、出て行った様子も無いですしね」

めぐみんのあすなる抱きを解くのが少し勿体無いが、事が事なので一応其方を優先すべきだろう。

ララとクリスは死ぬ程疲れているのでそのまま寝かせておくとする。

……ちよつとハツスルし過ぎたしなあ、昼までは起きないだろう。

ウイズさんは隣の部屋でゆんゆんと一緒に居る筈なので、めぐみんと二人で訪ねるとふわつとした返事が聞こえた。

「ふぁーい……、どちらさまですかー……？」

「おはようございませす、ウイズさん。起こしちゃいましたか？」

「いはいえー……、温泉とお布団で気持ち良く寝れたので余韻が残ってるだけですなえ……」

たわわなおっぱいが緩んだ浴衣から零れそうになっている光景は非常に眼福であったが、後ろからの仄かに感じる怒気によって胸がドキドキな私はスルー一択であった。

溜息交じりに淡々とウイズさんのお色直しをしてやり、広緑に座った私たちは温かい昆布茶を飲みながら向かい合った。

「ええと、一つ確認なのですが、ウイズさんって魔王軍幹部の人、なんですか?」

「うえええ!!? え、ええつとお! その、め、めぐみんさんから……?」
「まあ、そうなります。事情が事情なので聞き出した事には目を瞑ってくれると」

「あつ、いえいえ、そう言う訳では……、おんおんさんにでしたら伝えても良いかなとは思っていたのですが、機会がなくて……。と言うかバニルさんから聞いてるものかと」

「……そういやそうだったわ、後日ペナ入れとこ」

『おおつとおつ! 何だか嫌な予感がしたので説明しておくが、魔王軍幹部事情は守秘義務に当たる上に、口約束ながら契約で縛られているから吾輩からは言えないのだ! 悪しからず!!』

「……ちつ、タイミング良く弁明が来たな、まあ、いいか。そもそも一つ聞きたい事がありまして、魔王軍幹部で毒の扱いに長けている人物って居たりします?」

相当泡を食った感じのバニルの弁明念話を聞いて少し胸がすかつとしたのでペナルティは免除してやろう。

今回の被害次第では、少し考えなくちゃならないが。

正面で顎に手をやったウイズさんは、昔の事を思い出すかのように少しだけ唸ってから人名を口にした。

「あつ、ハンスさん。デッドリーポイズンスライムの変異種であるハンスさんくらいでしょうか。毒の扱いと言うと少し語弊があるかなと思います。種族的に毒を取り扱う幹部の方ですね。それがどうしたんですか?」

「いやなに、バニルからのタレコミで毒を取り扱う魔王軍幹部が此処に破壊工作を明日から仕掛けるらしいので先手を打とうかな、と。デッドリーポイズンスライムですか、種族が判明しているのは大きい」

スライムが魔王軍幹部になっているとなると、クリスに居る媚薬ス

ライムが成長するのが少し楽しみになってきたな。

つと、それは置いといて魔王軍幹部のハンスとやらの話だ。

「へえ……、そうですね。ハンスさんが……、そうになると私も協力する機会があるかもしれません。私は魔王軍に関して中立の立場として結界維持を頼まれています。戦いに携わらない人への非道な行いは阻止しても構わない約束となっています。デッドリーポイズンスライムの毒は猛毒、耐毒スキルを持っていても即死する可能性がある程に危険です。それが変異種のハンスさんとなれば……、言うまでもありません。本来であれば敵の前線を破壊するための作業員として働くハンスさんですが、なりふり構わない理由ができたのかもしれないね……」

……ベルディアが私に倒されたからでは？

首無し騎士デユラハンとしてアンデッドの軍勢を率いるベルディアを倒すためには軍団を派遣しなくてはならないだろうし、そうして出張った奴らを仕留めるのがそのハンスとやらの仕事であるならば、こうして生産拠点である街などへの破壊仕事を仕掛けてくるのも可笑しい話ではない。

実際、私ならそう動かすだろうしな。

となると……、猛毒を自在に生み出せるであろうスライム野郎が来るとすれば、温泉の源泉や飲み水に用いられる水路などの水源に対し自慢の毒を散布してアルカンレティア周辺を一網打尽にする破壊工作が一番可能性が高い。

敵国に属する村や町で飲み水を得るための井戸へ毒物を投げ入れたなんて事例は戦争ではよくある事だ。

毒を霧状に散布できたりするのであれば都市を滅ぼす事だって出来る事だろう。

「まあ、相手がスライムだって分かればやりようはあります」

「本当ですか？」

「ええ。幾ら殺しても不死身な奴よりかは遥かに潰しやすい。アクシズ教の聖母として、私の名を使って聖都防衛のお触れを発布します。なあに、暇してる奴らがごろごろと居るのがこの街の特徴なので、

正々堂々不意打ってやりましょう」

幹部として同僚である人物をぶち殺す算段をウイズさんの前でする訳にもいかないの、アクシズ大教会へと向かうべきだろう。

ウイズさんに早朝に訪れた事を謝罪し、そのまま部屋から出てインベントリに入れていた修道服へ即着替え。

めぐみんにはカズマくんたちへ今の事を伝えるように伝令に行かせた。

耐毒スキル持ちでも即死する、だとお？

なら、もう手段は選ばない、確実に、しっかりと、何も出来ずにいるまま殺し尽くしてやらねばなるまい。

ごおごうと左目の暗い穴が燃えるように疼き、胸に灯るソウルが火の気を放つ。

そんな威圧感全開の状態で大教会へ正面から向かってしまった事で、色々と細かな問題はあったが、捨て置く。

最高司祭のための部屋へと歩んで行き、窓際に垂れ下がる一本の紐を引っ張り下ろす。

大教会の中央、その頭上に付けられた鐘が鳴り、アルカンレティア全域に響き渡る。

私の剣呑な表情を見た瞬間に、非常に真面目な顔になったゼスタが後ろ斜めについてくる。

大教会に備えられた大きな講堂へと歩んで行き、扉を開けばこのアルカンレティアに住まうアクシズ教徒たちがずらりと並び、我も続かんと次々に集まってくる。

見事な女神アクアを讃えたステンドグラスの真下にある主祭壇の前、内陣と呼ばれる場所に立った私はアクシズ教徒たちの視線を浴びながら彼らを見下ろした。

「敬虔たるアクシズ教徒の諸君、我らが聖母おんおん様からお言葉を授かる場へとよくぞ参りました。静かに、そばたて、内容を理解するように。では、臨時集会を開始します、聖母おんおん様、お言葉を」

内陣の下に陣取ったゼスタが私に最敬礼の礼をし、私に背を見せない恰好、つまりは半身になって教徒たちへ語り掛ける。

こういう時のゼスタは使いやすいし、何よりも女神ファーストである事が最大の理由だ。

女神アクアの居るこの街に魔王軍幹部がちよっかい出してくるつてよ、と伝えたら殺意マシマシの「は？」が聞けたからな、少し笑った。

続々と集った信者たちで講堂がぱんぱんになり始め、廊下に並び始めたのを機に私は演説を始めた。

「諸君、こんにちは」

『こんにちは!!』

「うむ、良い挨拶だ。挨拶は基本だ、隣人にすべき最初の言葉として女神アクアも頷いてくれる事だろう」

集会の度に時間に合わせた挨拶を繰り返しさせているからか、もはや応援劇場並みに声が揃っている。

「では、本題に入ろう。明日、女神アクアの神託により、不屈き者がこの街に現れる事が判明した。魔王軍幹部、デッドリーポイズンスライムの変異種であるハンスと言う神罰者だ。ああ、皆まで言わなくて良い。汚い言葉は自身に還るものだ、良い言葉を使いなさい。咄嗟に出できてしまう言葉に浮かんでしまえば、ふとした時に言ってしまうものですよ。それにより人間関係が壊れてしまえば、哀しみに暮れる日と成ってしまう事でしょう。貴方達は元より良い子なのです。少しだけ違って、少しだけ変わっているだけの、良い子なのですから」

めぐみんを甘やかす時以外には使わないであろう甘ったるい慈愛を込めた言葉で説法めいた内容を紡いでいく。

大分盛っているのだが、信徒たちには割とウケが良いようで誰もが恍惚な顔で笑顔を浮かべている。

「ですが、神罰者は違います。悪魔は、モンスターは、魔王は、女神アクアや女神エリスによって否定されたこの世に居てはならない存在です。殺して良いのは神罰者だけです、隣人は愛し愛され支え合うべき存在なのですから。そんな神罰者が、明日、この街に破壊仕事を仕掛けようとのこのこと来てしまうのです。——そう、女神アクアが人の姿となって羽休めをしているこの街に、です」

某イスカリオテの第十三課な神父さんの言葉を借りつつ、信徒たちへと熱狂を伝播させていく。

じわじわと、潰すべき相手を、ふつつつと、殺すべき相手を、ぐつぐつと、狂信を伝えていく。

慈愛の顔から段々と狂信者の貌を魅せて行き、妖しい雰囲気に講堂を包み込んでいく。

恍惚から一転し、不倶戴天の仇を見るかのような憤怒に腸を煮えくり返らせていく信徒たちの変貌に笑みが浮かぶ。

自分たちを導き助けてくれた女神アクアを信仰する者たちであるからこそ、このシンパシーの波に乗れるのだ。

「許してはなりません、この街、アルカンレティアは我らアクシズ教の聖地。汚物のような毒を用いて愛しきこの地を汚そうとする魔王軍幹部を決して許してはなりません。で、あれば、我らが何をすべきかお分かりですよ？ 私たち、良い子がすべき事は、何でしょうか？」
両掌を広げて見せて、信徒たちへと問い掛けるように差し向ければボソボソとした騒めきが、段々と殺意を込められた言葉となつて返ってくる。

「殴殺を！」

「絞殺を！」

「撲殺を！」

「刺殺を！」

「焼殺を！」

「轢殺を！」

一心不乱の狂気を身に纏い、とびっきりの笑顔を魅せて肯定してあげる。

それだけで彼らは、彼女らは、一致団結して物事に速やかに、そして積極的に行動をしてくれるだろう。

「ええ、ええ、勿論ですとも。可能な限り、惨たらしく、陰惨に、残酷に、二度とそんな事ができないようにしてやりましょう。我らが隣人を守るために、我らが女神を守護するために、此処にジハード、聖戦を宣言します。良い子の皆様、出来る限りの準備を。スライムは水気を

が多く含まれており、燃やしたり、砂をかけたたりすると良いとされているそうです。それ以外にも核を砕いたり、閉じ込めてしまうのも良いかもしれません。何か、良い案はありますか？」

そして、具体的な内容を周知し、それを踏まえて何をすべきかを考えさせる。

「熱した油を引っかけて火に掛ける！」

「乾いた期限切れの小麦粉をぶつけろ！」

「腐った卵をぶつけて混ぜてやれ！」

「毒を浄化する魔法で存在ごと消してやれ！」

「逃げたところを落とし穴に沈めて固めてしまえ！」

「動きを止めるために凍らせてしまえ！」

そうして、各々が思い付いた事を発言させて全員に行き渡るように煮詰めていく。

どんどんと出てくる悪戯から派生した殺意の籠った手段の数々に私としては花丸をあげたい気分であった。

「素晴らしい考えばかりですね。では、それを明日、行ないましょう。我らが女神アクアを狙う神罰者へと。ああ、言い忘れていました。もしかしたらもう侵入しているかもしれません。ですので、確かめましょう。けれど、直接的にはいけません。仮にも魔王軍幹部、貴方達に被害があつてはなりません。観察しなさい。そして、監視するので。確実に神罰者は観光客を装っている事でしょう。普段見かけない人物を、傷が無いのに顔を隠す人物を、不審な事をしている人物を、怪しい事をしようとしている人物を、疑いなさい。隣人であればよし、神罰者であれば容赦は要りません。見つけ次第大教会へと報告し、それを秘密裏に伝えて見張りなさい」

悍ましい程の雰囲気醸しながら不気味な静寂に潜む信徒たちへと命令を与えていく。

「そして、直接的な行為をし始めたら囲いなさい。あらゆる準備をして、安全に気を付けて、こつそりと囲いなさい。それからは私の合図で動きましよう。宜しいですね？」

『はい！！』

「良いお返事ですね。では、これにて緊急集会を終わります。女神ア
クアに加護が有らん事を」

『女神アクアに加護が有らん事を』

一同が声を揃え、指を組んでステンドグラスの女神へと信仰を捧げ
て祈りを送る。

今頃アクアさんの女神パワーが凄い事になっていそうだが、まあ、
保険は多い方が良からうて。

ぞろぞろと妖しい雰囲気を消し去って、普段通りの表情に戻って擬
態した狂信者たちが街へと帰って行く。

最後の一人が背を向けて講堂から出たのを機に、作り笑顔を止め
る。

「ふうー、ま、ざつとこんなもんだらう。ゼスタ、総括を頼んだぞ」

「御意に、聖母様」

深々と頭を下げたゼスタを尻目に別の出口から出て行くことひっ
じょうに苦い顔をしためぐみんたちの姿があった。

カズマくんパーティは此方に居るように誘導したからな。

おずおずとアクアさんがびくつかせながら強張った表情で近付い
て来た。

「……あの、いつのまに私の教団ってカルトになったの？」

「いえ？ いつも通りですよ、あれ。そういうノリでやっただけなの
で、今回が初めてです」

「嘘でしょ……、何それ、こわ……」

いやあ、アクアさんが標的だぞーって内容をすり替えた結果がアレ
である。

明日が楽しみだなーと暢気に言うと、おんおんだけは絶対に怒らせ
ないようにしよう、だなんて事を異口同音で言われてしまった、解せ
ぬ。

使い勝手の良い人員が腐る程居るなら有効活用するのが上のお仕
事なのでね。

さて、既に居るのか明日来るのかは知らないが、顔も知らぬハンス
とやらには塵一つ残さずに死んで貰おうじゃないか。